
仮面の英雄と聖杯の英雄

yasu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面の英雄と聖杯の英雄

【コード】

N03960

【作者名】

y a s u

【あらすじ】

本郷猛の依頼で冬木市に謎の昏睡事件や殺人事件を調べに来た男風見志郎ここで彼と英雄と呼ばれる存在との戦いが始まる。

1話 始まり（前書き）

初めてなのでどこまでできるかわかりませんが頑張ります。

1話 始まり

「ふうここが冬木市か」

一人の男がバイクにまたがり夜の街を走りながらそう呟いた。

「本郷先輩の情報だとここで謎の昏睡事件や殺人事件が起きているらしい。」

男の名前は風見志郎。かれは本郷猛の依頼でこの冬木市の調査に来たのである。

「とりあえず夜も遅い今からでも泊まれるホテルをさがすか。」

その時遠くからガシャキンという耳障りな金属音がきこえ

「何だ今の音は？」

と風見志郎は慌ててその場所に向かった。

所変わって風見志郎がその音にきづく数分前、赤い服を着た白髪の男と青い服を着た男と学生服を着た女子高生が赤い服を着た男の後ろにいる。

「いいわ。アーチャーあなたの力ここで見せて。」

白髪の男に言う。白髪の男はそれに答える様に前に出た。そしていつの間にか短剣を握っている。

「く。ばかが弓兵風情が剣士のマネごとか。」

青い男が槍を持って目の前の男に襲いかかる。白髪の男も短剣で向かい討った。しかし青い男の槍捌きは早く次第に捌けなくなり追い詰められてくる。

「これで終わりだー」

キーン

「何。双剣使いか。」

いつの間にか白髪の男の手には黒と白の中華風の剣がにじられていた。そして少しずつだが白髪の男が押し始める。

「テメエ、本当に弓兵か？」

青い男が白髪の男に聞く。

「何、私は全力でやって今の君と互角。君は全力ではないだろう。」

青い男にそう返し、

「ぬかせ弓を使わない弓兵が良く言う。いいぜテメエはこの英雄だ双剣使いの弓兵など聞いた事が無い。」

と青い男は白髪の男に向かいそう言った。

「あいにくと名乗れるほど上等な英雄では無いのでね。そういう君はわかりやすいな。それほどの槍使いは世界に3人はいまい。それに獣の様な動きを見ていれば自ずと正体も見えてくる。」

白髪の男は言い返す。

「よく言った。なら我が必殺の槍うけてみるか。アーチャー？」

殺気も含めてアーチャーを睨みつける。

「いいだろう。いずれ越えねばならぬ敵だからな。」

真剣な顔でアーチャーは言った。その言葉と共に青い男の周囲からありえないほどの殺気と魔力が吹きあがる。

「まずい宝具だわ。」

女の子は焦った表情で様子をみている。

「喰らえ。我が必殺のゲイ」

ガサッとそこにいた人間が逃げた。

「誰だ。ツチ」

といい槍を持った男が追いかける。

「まずい、アーチャー追って。」

女の子がアーチャーに向けていう。

「わかったリン」

アーチャーが追いかける。

所変わって

「ここは学校か？金属音は向こうか。」

風見志郎が見て金属音の方へ向かう。

そこでは双剣を持った男と槍を持った男が闘っていた。その様子を女の子が見ている。

「何だこの戦いは人間の動きじゃない。」

風見はその様子を見ていた。

「ん？奴ら戦いをやめたぞ。あれは？」

ここにもう一人赤い髪の少年がいたことに気がついた。しかも青い男は逃げ出した赤毛の少年を追った。

「まずい？」

急ぎ志郎は二人を追いかける。

「ふう、何だったんだ。あれは」

赤毛の少年は思った。あの二人の戦いは人智を超えてた。人間じゃない。と考えるとたまたまと槍を持った男が目の前にいる。

「随分と逃げたな。まあ運が悪かったと思って諦めてくれ。」

言って少年の心臓に槍を一突き少年は「うっ」といい力尽きる。
その場面で志郎が辿り着き

「くっ。遅かったか。」

無念そうに呟くそれを見て槍を持った男が

「もう一人目撃者がいやつがたか。」

苛立ちながら喋る。

「なぜその少年を殺した。」

怒りを含み風見志郎が目の前の男に聞いた。

「目撃したからな。それに目撃したオマエにも死んでもらう。」

「そうか、ならお前を倒す。」

言い向かうが男の槍がいきなり襲い掛かる。速いと志郎は心でおもった。

「どうした、威勢だけか。」

槍を振るう。なんとか志郎はギリギリでかわす。しかし、除々にだ
が体に少しづつ掠り始める。それでもなんとか致命傷は避けている。
それを見て槍を振るう男は

「ただの人間がおれの槍をかわすなんてオマエ何者だ。」

「俺の名は風見志郎、そしてもう一つの名は今からみせてやる。」

意を決つした。表情をしていきなりポーズをとり始める

「いくぞ、変身ブイスリヤアア」

掛け声と共にベルトが現れ姿が変わる。

槍を持った男は

「貴様はいつたい？」

驚いた表情で聞いた。

「俺は正義の使者仮面ライダーV3だ。」

ここで現代の英雄と過去の英雄の戦いが始まった。

1話裏 サイドストーリー 本郷の依頼（前書き）

風見志郎が冬木市に行くまでの経緯です。

1話裏 サイドストーリー 本郷の依頼

ある日の事、風見志郎は本郷猛から連絡があり待ち合わせのカフェに向かっていた。

「本郷先輩いつたい何の用事なんだ。」

バイクにのり呟く。

「ここか」

待ち合わせのカフェに入る。そこにはすでに本郷猛の姿がある。

「お久しぶりです。本郷先輩」

風見志郎は笑顔で話しかけ本郷の向かいの席に座る。それを見て本郷も笑顔で

「ああ、風見元気だったか。」

「早速本題に入るんだが。風見、最近冬木市という所で謎の殺人事件や昏睡事件が多発しているらしい。」

しかも殺人事件の凶器と思われるのが剣や槍といった物らしい」

渋い顔をしながら呟いた。

「本郷先輩はそれで何かあると睨んでんですか？」

本郷に風見が問う。

「ああ考え過ぎなら良いんだが、もしこれがシヨツカーとかの残党の仕業だとしたと考えてな。」

「わかりました。それで俺は何をすればいいんですか。」

「うむ。すまないが冬木市に調査に行ってもらいたい。俺も他の連中も今違う一件を調査しているからな。頼む。」

風見に本郷が頼んだ。

「わかりました。俺が冬木市を調べに行きます。」

席を立つ。

それを見て本郷が

「何かわかったら連絡してくれ応援にすぐ駆けつける。」風見に向けて言う。

「ありがとうございます。では失礼します。」カフェを後にした。

（風見大丈夫だと思いが気をつけるよ）

本郷は心で志郎にメールを送った。

キャラ紹介

本郷猛

かつてシヨツカーに拉致られ改造手術を受け。脳改造前に恩師緑川

弘博士に救出される。しかし緑川博士もショットカーのアジトを脱出してすぐに殺害される。自分が人間では無くなった。孤独に耐えながらもショットカーとゲルショットカーに戦い勝利した。ダブルライダーの一人仮面ライダー一号である。また技の一号とも呼ばれる。

風見志郎

デストロンという組織に父、母、妹を殺害されデストロンに復讐するためにダブルライダーに改造手術を頼んだ。しかしダブルライダーはその申し出を断り二人でデストロンアジトに乗り込んだが敵の罠にはまりやられそうになっている所を風見志郎が助けた。しかしそれで死にそうになってしまい。風見を助ける為にダブルライダーは改造手術をした。そして仮面ライダーV3となりデストロンに戦い勝利したのである。V3のベルトダブルタイフーンには技の一号と力の二号の力が備わっている。

2話 激突(前書き)

V3とランサーの激突です。

2話 激突

SIDE 風見志郎

「いくぞ」

気合を込めて目に前の敵に向かい

「V3パンチ」

パンチをくりだした。
槍を持った男も

「ちい」

赤い槍を持ち応戦する。そのスピードはもはや普通の人間が視認できるスピードではなかった。パンチと槍の応酬いつまでも続くと思われたやり取りも次第に均衡が崩れ始める。

「何てスピード何だ。変身しても向こうの方がスピードは上か。いや先程の校庭の戦いよりスピードが数段速い。内心毒づく、」

「へ、動揺が見えるぜ。先程見せたスピードがおれの最大のスピードだったと思うのか。でも運が良かったぜ。テメエが何者何て関係無い。下らない偵察ばかりさせられていたがおれの全力をぶつけられる存在が目の前にいる。それだけで十分だ。」

槍を持った男は笑う。そしてパンチと槍が激突し互いに距離を取る。

「そういえばさっきあんた名乗ったよな。たしかV3だったか。おれはランサーのサーヴァントだ。礼を言う現界して初めて英雄らしい戦いができた。さて、もっと楽しもうぜ。」

ランサーは狂気的な笑みを浮かべる。

V3は意を決して拳に力を入れなおし向い討とうとした。そのとき「何、撤退しろだとういうことだ。ちつくそがテメエはおれが必ずぶち殺す。絶対にな。」

ランサーはその場から消える。

「む！奴はどこにいったんだ？」

辺りを見渡すが文字どおりランサーの姿はなかった。

「とういうことだ。いきなり消えるとはランサーのサーヴァントとってだが奴はいつたい？そういえばあの少年は？」

V3は赤毛の少年のもとへと向かったが息はしていないし。元より心臓を刺されていたので助かる見込みはなかった。

「くそ」

V3は自分の不甲斐無さにグツと拳を握りしめた。そのとき、V3は殺気を感じその場からはなれる。

「貴様一体何者だ。」

先程ランサーと闘っていた白髪の男が現れ、そのまま戦いになりそ

うになった時

「待ちなさい。アーチャー」

先程いた女性も現れる。その言葉に攻撃を仕掛けようとしたアーチャーが止まりV3に話し掛けた。

「あなた、何者？それにその生徒を手に掛けたのはあなた？」

V3に問う。

「彼女なら話が通じそうだと思う話し掛けた。」

「私の名は仮面ライダーV3。それとその少年に手をかけたのは先程の槍を持ったランサーのサーヴァントと名乗った男だ。助けようと思ったが間に合わなかった。」

悔しそうに呟く。

それを聞いて少女は驚いく

「嘘。あなた仮面ライダーなの。本当に存在していたなんて。」

彼女が驚いた訳は理由がある。

S I D E O U T

まず、この彼女の名は遠坂凜である。彼女の正体は魔術師である。冬木の魔術師のセカンドオーナーそれが彼女の立場であった。それで、なぜ彼女が驚いたというと魔術師の中で仮面ライダーという存

在はお伽話もしくは与太話であつたからだ。なぜなら世界が危機に瀕した時現れる正義の味方であらからだ。なぜ世界が破滅の危機に瀕しているのに世界の抑止力が現れないのか。抑止力というのは世界が危機に瀕した時、守護者と呼ばれる存在を呼び世界を破滅の危機からその力持つてその原因を皆殺しという形で救う。まあ掃除屋みたいな存在である。その存在がいるのになぜ世界が危機に瀕しているのに彼らが現れないのか。元々そのような出来事など起きて居ないのではないか。つと魔術師の考えではそういった考えなので遠坂凜には目の前の存在が信じられなかった。

話は戻つて

凜は冷静さを取り戻しV3に向けて、

「私達は、あなた戦う意思は無いわ。」

それを聞いてV3は

「わかつた。こちらも戦わない。」

交戦の意志が無いのを聞き変身を解いた。凜は驚いたがすぐ冷静になる。

「アーチャーまだランサーが周りに居るかもしれないから周りを見張つて。」

アーチャーは

「わかつたが。大丈夫かね。リン」

風見を見ながら聞いた。

「ええ大丈夫よ。向こうに戦う意思は無いみたいだから。」

それを聞きアーチャー背を向けて姿を消し、凜は風見の横を通り殺された少年のところへ向かった。

「最後位、ちゃんと身取ってあげなきゃ。」

怒りが悲しみかわからぬ表情で死体に近ずき驚いた顔を浮かべた。

「嘘、何であんたなのよ。」

悲しみの声を上げる。しかし次の瞬間表情を変えて

「いやまだ助かるかもしれない。」

首から首飾りを取り出し死んだ少年の胸の部分に当て何か唱え始め、それを見て風見は

「何をやってんだ。」

聞くが彼女は集中していて振り返らない。

そして作業が終わったのか彼女が立ち上がり風見に

「今日見たことは全部忘れて。今回起こった出来事はあなたには関係のないことだから。後、彼が起きても何が起きたのかとか。私が何をしたのかも言わないで。」

言いその場から立ち去ろうとしている。

風見は呼び止めようとしたが死んだ筈の少年から「うう〜」という
声を聞き彼のそばに近ずき驚きながらも

「大丈夫か。しっかりしろ」

声をかけた。

2話 激突（後書き）

次回はセイバー召喚です。

3話 召喚(前書き)

セイバー登場

3話 召喚

SIDE 衛宮士郎

「十年前大きな火事があった。とても大きな火事だった。俺は小さな時火事によつてすべてを失い、そしてその火事で死にそうになる時に一人の人間の手によつて助けられ、助けられた人の養子になった。そして俺はその命の恩人の後継者になり正義の味方になることに決めた。」

「だが現実には厳しい。一介の学生に過ぎない俺に何が出来るのだろう。そうして問いかけ繰り返すうちに一つ決めたことがある。」

「今はせめて出来ることからやっつけていこう。それが俺の目標であり未来の指針である。」

「どうだ衛宮終わったか。」

「ドアを開け話かけてきたのはこの学校の生徒会長柳堂一成である。衛宮はストーブを見ながら」

「このケーブルがいかれていたらしい。」

「悪いな衛宮、朝早くから済まなかった。」

「一成は謝る。」

「いいよこの時期に暖房なしじゃきついだろう。それでこの後どうするんだ。」

「そうだな時間が無い残りは放課後にするか。」

教室に向かう。

そこで遠坂凜と鉢合わせになり

「お早う生徒会長さん」

「貴様、こんな朝早くから学校に何の用だ。また何かよからぬことでも考えているのではなからうな？」

怒りながら話す。

「随分な言い草ね私は普通に登校しているだけなのに。」

呆れながら言い、

「だまれお前の存在そのものが悪なのだからな。俺にはその悪の手から全校生徒を守る事務がある。」

「はいはい。わかったわかった。「お早う遠坂って早いな。」
衛宮くんもね生徒会の手伝い御苦労様」

その場を後にする。

ちよとんとしている。衛宮に向かって

「なに突っ立っているんだ？」

「意外だな。遠坂が俺の名前知っているなんて。」

「まさか衛宮あの女狐に気があるわけじゃあるまいな。悪い事はいわん。遠坂だけはやめとけ。あの女は確かに優等生だ。一部の男子

からはアイドル氏もされているしな。だが油断しているといつか痛い目にあうぞ。」

一成が力説する。

「なあ一成遠坂のこと嫌いか？」と聞き「ああ、嫌いだね。なんせあいつは猫の皮を被った悪魔だからな。」

話していると教室に着く、
教室につき席に着くと先生が入ってくる。

「おはよう〜うわ〜」

勢い良く入ってきたのはいいが勢いがありすぎてころんでしまう。
周りの生徒が死んだんじゃないか。とか大丈夫かなとか。様子を伺う。それで一人の生徒がいつものあれ行ってみるかと言にいう。せ
くの

「起きろタイガ〜」

「タイガっていうな〜」

叫び起き上がるそして何事も無かった様に朝のHR

〜彼女がこのクラスの担任藤村大河である。そのめちゃくちゃな行動により良く校長や教頭の説教を受けているのだが面倒見のいい性格で生徒から人気なのである。

ちなみにうちの養父と藤村先生の親は昔ながらの付き合いなので俺にとっては姉の様な存在で藤ねえと呼んでいる。〜

時間が経ち一成の手伝いも終わり帰る途中女の子を数人連れて歩く男に話しかけられ振り向くと。

「よう、衛宮じゃないか。こんな時間に帰るなんて、また生徒会の手伝い飽きもせずよくやるねえ」

彼の名は間桐慎二である。衛宮の数少ない友人である。

「シンジこそ何やってるんだ？」

「ふつ僕は君と違って忙しいんだよ。そうだ手伝いついでに弓道部の部室の掃除もしてよ。」

にやけながら提案を出し衛宮は

「わかった」

了承して掃除をすることになった。

そして、弓道部の掃除を初めて夜

「こんなもんか。」

ひとり呟いていると外からガシャン、キーンという耳障りな金属音が聞こえてきた。

「何だこの音は？」

外にでてみるとそこにはありえない光景が繰り広げられおり赤い服を着た男と青い服を着た男が剣と槍で戦っていた。

「何だあれはウソだろこんなの非常識にも程がある」

見ていると二人の動きが止まり何かを話している。その時一人の少女が目が止まる。

「あれは！遠坂なんでこんな所に」

前に出たら下にある枝を踏みクキイという音が響いた。それにきずき槍を持った男がこちらに向く。

「しまった。殺される。」

走り力の限り逃げ校舎の中に入る。

「何だったんだ。あれは人間じゃない」

一人呟いていると、

「よう、随分逃げたな。まあ、運が悪かったと諦めてくれ。」グサ

「うっ」

倒れると昔の記憶が甦った。

回想

「・・・やあ君が士朗君かい？僕の名前は衛宮キリッグという率直に聞くけど知らないおじさんに引き取られるのと孤児院にひきとら

れるのどつちがいい。」
士朗はキリツグとிட்டたおじさんに付いて行く事を選んだ。
そしてキリツグは思い出したように「そうだ大事なことを忘れていた。最初にこれだけは言つとかなちゃいけない。うん実をいうとね、僕は魔法使いなんだ。」

場面は変わり

「ジイさん。俺も正義の味方に味方になれるかな。」と士朗が聞くとキリツグは難しそうに

「それはとても難しい問題だよ。士朗が言っているのは誰も彼も助けるということだからね。いいかい正義の味方に助けられるのは彼が助けると決めたものだけなんだよ。」と優しく笑い士朗に言った。

くそれでも俺はジイさんの様な正義の味方になりたい。く

回想OUT

「うつここは？」

起き上がると目の前に俺の事を心配そうに見ている男の人がいた。

「大丈夫か？キツイなら、まだ起き上がらない方がいい。」

心配そうに様子をみている。

「大丈夫です。それより俺はうう」

ズキ胸を押さえながら

「確か俺はあいつに心臓を刺されて、うん、このペンダントはすいません。この、近くに槍を持った男がいませんでしたか。」

目の前の男に聞いた。

それを聞き風見志郎は

「本当の事は話さない方がいいだろう。」

「いや、俺は来たときには君が血だらけで倒れていた。それで心配だったんだが思ったより元気そうで安心した。」

優しげに話す。

「そうですか。じゃあこのペンダントはあなたのですか。」

「いやここに来た時には君の傍に落ちていた。」それを聞き衛宮士朗はペンダントをポケットの中に入れる。

「ここで彼を一人にすればまたあいつが襲ってくるかもしれない」
「そういえば自己紹介がまだだったね。俺の名前は風見志郎だ。よろしく。もう夜も遅いから君の家まで送ろう。」

提案し士朗に申し出た。

「奇遇ですね。俺の名前も士朗なんです。衛宮志郎です。それと迷惑が掛かるんで自分で歩いて帰ります。」

「遠慮することはないさ。気にする必要はない」それを聞き「じゃあお願いします。」

学校を後にしてふたりは風見志郎のバイクで衛宮志郎の家に向かった。

衛宮邸の前で

「風見さん。ここが俺の家です。良かつたら上がって行って下さい。お礼にお茶位御馳走さして下さい。」と士朗はいい。風見志郎は「ならお言葉に甘えさして貰いますか。」

二人家の中に入って行く。そのとき、

「これはこの家の結界が警告している。まさかさっきの奴がこのままだと風見さんも危ない」

と思ひ士朗は

「風見さんすぐに家を出てこの場から離れてください」

士朗が風見に向けて言う。

「衛宮君、それは！危ない」

士朗を抱えてその場から離れ、そこに

「へ！日に同じ奴を二度も殺しに来ないといけないとはな。それにまさか貴様もいるとはな。案外運がついてるのかもな。」

ランサーは狂気的な笑顔をうかべている。

「衛宮君、この家には奥に倉があったな。そこに避難してくれ。俺はこいつを倒す。」

意を決してランサーを見る。

「俺を倒すだと！ハハハハハハハやっぱあんた最高の獲者だぜ。さつきは中途半端な所で終わったからな今度は最後まで楽しもうぜ！」
楽しそうにこちらを見ている。

「でも風見さん一人じゃあ奴には。」

風見志郎に向けて強く訴えた。

「いいから早く」

言い争ってる間にランサーが襲いかかってくる。
それを風見志郎は士朗を抱えて窓へ向けてジャンプして外へと避難した。

「俺を前にして話し合いとは余裕じゃねえか。」

怒りを含みつつ言い放つ。

風見志郎は士朗の前に出て

「くっ仕方がない。いくぞ変身ブイスリャァー」

ポーズをとり変身の掛け声とともに風見志郎は姿を変えた。赤い仮面に白いマフラーをなびかせて仮面ライダーV3の姿にと、

「風見さん、その姿は！」

士朗は驚きV3を見ている。

「私のこの姿の名は仮面ライダーV3だ。」

と言った。そのとき士朗の顔は子供の様な純粋な顔になって夢がなくなった子供の表情をしていた。

「風見さんが仮面ライダーだったなんて！」

士朗が驚くのも無理はなかった。一般人にとっても仮面ライダーの存在はほとんど都市伝説だったからだ。

「さあ士朗君、早く」

いわれるままに士朗は奥の倉へと逃げて行った。ランサーは

「さあ始めようか。V3しかし、その前に聞きたいんだが、お前本当に人間なのか。オマエからは人間の気配をほとんど感じねえ？」

ランサーが聞くが

「ふ、戦いにその様な事は関係無い。いくぞ」

V3はランサーに言い放つ。

「そうだな確かに関係なかったな。野暮な事して悪かったな。行くぜ。」

ランサーが迫るそしてV3もそれを迎え撃った。一合、二合、学園の時と同様の攻防が繰り広げられる。そして、業を煮らしたランサーが

「このままじゃあ、さっきと同じだな。いいぜ貴様に我が必殺の槍をくらわしてやる。」

そしてランサーの周りからありえないほどの殺気と空気が悲鳴をあげていた。それを見てV3は

「これは、、まずい！」

身の危険を感じベルトのダブルタイフーンをフル回転して力を溜める。

「へ、楽しかったぜ。だがこれで終わりだ。貴様の心臓貫いつける。喰らえ、ゲイボルク」

槍がV3にめがけて迫ってきた。それをV3はジャンプして

「V3キーク」

ジャンプ蹴りで迎え撃った。蹴りと槍が衝突したらギョーンと耳障りな音が周りに響く。音が鳴り止んでいるとV3とランサーが二人とも膝を着いていた。

V3の蹴りが因果の逆転というランサーの槍の呪いから致命傷は逃れたのだがそれでもランサーから受けたダメージは大きかったよう

だ。ランサーもV3の蹴りとゲイボルクの衝突の余波を受けてダメージを受けていた。

「く、まさか俺のゲイボルクをあんな力技でやぶるとはな。へへへ、まだまだ楽しめそうだけ。」

ランサーは自分の必殺技の一つが破られたのも気にせず逆に嬉しそうな表情を浮かべる。

V3も痛む体を振り絞り立ち上がる。

所変わって土蔵の中で土朗は一人自分の無力さを呪っていた。

「何が正義の味方になるだ俺は無力じゃないか。」

V3に一人で戦わせている自分と彼と一緒に戦えな自分に苛立ちを覚えた。そう考えている時、地面が光り魔法陣の様な物が出来上がりそこから鎧を着た少女が現れ

「問おう。あなたが私のマスターか。」「ますた〜?」

この時から少年の運命は大きく変わり始める。

3話 召喚（後書き）

今回はここで終わりです。次は言峰教会です。

4話 セイバー対ランサー（前書き）

セイバー参戦

4話 セイバー対ランサー

SIDE 衛宮士朗

「問おう、あなたが私のマスターですか？」

いきなり鎧を着た少女が地面から現れてそんな事を聞いてきた。

「ますた〜」

士朗は訳が分からないまま彼女に言い返すが、彼女は士朗の手の甲を見て

「サーヴァントセイバー召喚に応じ参上した。私の剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私とともにある。ここに契約は完了した」

言われるが士朗は状況をうまく飲み込めない。

「マスターだってサーヴァントだって？」

「はいその令呪が私のマスターである。何よりの証拠、マスター表にサーヴァントの気配とサーヴァントとは違う変な気配を感じます。マスターはここに」

セイバーはそう言い外に向かう。

「待て……何をやる気なんだ。」

士朗が聞くと

「敵を討つのです。マスターこの聖杯戦争必ず私が勝利に導きます・
・・・」

今度こそセイバーは外へと向かう。

「何だよ聖杯戦争って、それにマスターっていったい」

しばらく土蔵で考えたが結局何も分からず士朗もセイバーを追うように土蔵を後にした。

S I D E O U T

「さて第二ラウンドを始めるか。V3」

ランサーはこちらに向けていうが、

「先程受けたダメージが大きい。このままではまずい。どうするか？」

V3はさつきランサーの槍とV3の蹴りの衝突のときのダメージが大きく。内心かなり焦っていたそれでもこの状況をどう打開すればいいか考えている時、土蔵の方がいきなり光る。

「何だあの光は？」

V3は土蔵の方を見る、ランサーも土蔵の方を見て驚きの表情を浮かべる。

「まさかあの小僧が七人目のマスターだ！」

「マスターいつたいたいどういうことだ」

ランサーの言葉を聞きV3は考えていると、その時土蔵の方から鎧を着た少女が出てきて、いきなりランサーに襲い掛かる。攻撃を仕掛けている彼女の手には何も握られていない。しかしランサーに向かい彼女が何かを振るう。それをランサーが受けると見えない何か
がランサーの槍に当たりランサーが吹き飛ばす。

「グ、不可視の武器か。1つ聞かせる。貴様の武器それは剣だな。」
ランサーが聞くが

「これがどのような武器であろうと関係ありません。あなたはここで斃れるのですから。」

彼女はランサーに言い放つ。

「へ、言ってくれぬぜ。今回の聖杯戦争いけすかねえマスターにしてみつけたれた偵察任務ハズレを引いたと諦めかけていたがV3に続いて最優と名高い剣使いのサーヴァントセイバーがいるとなると俺も案外運がいいかもな。」

「聖杯戦争だつていつたいたい何の事だ」

V3の中でまた一つ謎が増える。そのことについて考えながらもV3は二人の様子を伺っている。

ランサーの言葉を聞きセイバーは

「口が達者のようですがあなたもサーヴァントならその槍で語ったらどうですか・・・」

ランサーに挑発する。

「ハハハ、いいぜこの槍に掛けて貴様を討つ。」

「む、宝具」

ランサーは槍を構える。ランサーの殺気と魔力が槍に集約されていく。セイバーも迎え討とうと構える。

「貴様の心臓貫いうける。喰らえゲイボルク」

ランサーの槍がセイバーに迫る。

「疾い。しかし低いこれならばたやすく交わせる」

セイバーが思いランサーを迎撃しようとするがいきなり槍が軌道を変えてセイバーの胸に直撃した。

「終わったな。先程はあんな力技で破られたがゲイボルクは因果の理を捻じ曲げる槍、それはすなわち槍を穿つという槍を放つというという原因より先に生じさせてしまう事にセイバーとはいえずとたまりも「なに！かわしたというのか我が必殺のゲイボルクを」胸に傷を負いつつも致命傷は避けていた。その様子にランサーが驚く。

「ゲイボルクならばあなたの真名は」

「まずったぜ。こんな早々正体がばれるとわな」

言い立ち去ろうとしているランサーに

「逃げるのですか」

「あいにくマスターの指示でな。死ぬ気があるなら追って来るがいい。」

塀の上にあがりランサーは今まで様子を見ていたV3にむかって

「V3テメエを斃すのはこの俺だ。それだけは覚えておけ」

言い残し今度こそランサーはこの場を立ち去った。

それを見てセイバーは今度はV3に攻撃を仕掛けるが横に跳び回避、

「お前たちはいったい何者なんだ」

「それはこちらのセリフです。あなたからは人間の気配をほとんど感じない。いやその姿人間ではありませんか。どちらにしてもマスターに危害が及ぶ前にあなたをここで討ちます。」

V3とセイバー二人から嵐の前の静けさそんな空気が漂う。

先にセイバーが仕掛けようとした時

「やめろセイバー」

士朗の声でセイバーの動きが止まる。

「しかし」

士朗に向けて言うが士朗も一向に譲らない。その様子を見て

「わかりました」

言いセイバーが先に折れ構えを解く。その様子を見てV3も変身を解いた。いきなり人間の姿になりセイバーは驚いていたが風見は気にせず士朗にむけ

「衛宮君、彼女はいつたい何者なんだ。あそこで何があつたんだ。」

「すみません風見さん俺もよく分からないんだセイバーおまえらいつたい何者なんだ。」

士朗の疑問にセイバーは

「なるほど貴方は正規のマスターではないのですね。それでは何もわからなくても仕方ありません。あなたは選ばれたのです聖杯戦争に参加するマスターとして……すみませんマスター話はまた後で外に敵がいます。」

家の外へと走り出した。その様子を見て風見は

「さつき受けた傷がもう治っている。やはり彼女は人間ではないのか」

考えていると士朗はセイバーの後を追いかけている。その様子を見て風見も外へと向かう。

士朗がセイバー追って来てみればアーチャーを斬りつけ奥の人間も襲っている。

「やめる・・・セイバー」

叫ぶとセイバーが動きを止める。

「何のつもりです。マスター彼女は敵です。ここで仕留めておかないと、それを令呪を使い止めるとは・・・」

セイバーは士朗を睨みつける。

「だめだ。俺はまだ納得していない。本当にそいつは敵なのか。そうだとしたらなぜ殺さなければならぬんだ。」

「くう、甘い事を」

二人が言い争っている

「随分と余裕なのね敵を目の前にして」「まさか遠坂」「今晚は衛宮君」
そのとき風見もその場に辿り着く。

「彼女はなぜここに？」

風見は凛に視線を向ける。しかし彼女により冬木市で起きている。殺人事件や昏睡事件そして聖杯戦争の事を風見と士朗は知ることになる。

5話 聖杯戦争(前書き)

説明会

5話 聖杯戦争

「こんばんわ、衛宮君、それと仮面ライダーさん」

「遠坂、何でここにいるんだ？」

士朗が遠坂凜に聞くと、

「まあ、サーヴァントの気配を感じてきてみたら衛宮君の家なんだもん。びっくりしたわ。まさかあなたが魔術師だったなんて騙されたわ。」

「まさか遠坂も魔術師なのか？」

士朗と凜が話していると、

「悪いが少し君に聞きたいことがある。」

風見が話に割り込んだ。

「なに、聞きたいことって。仮面ライダーさん。」

「ランサーのサーヴァントと言った。男が聖杯戦争とかマスターとか言っていたがいったいどういう事なんだ。この町で今何が起きている。」

「そうだ、遠坂サーヴァントとかマスターとか何なんだ。教えてくれ遠坂。」

風見と士朗が凜に疑問をぶつけると、

「まさか、衛宮君あなた何も知らないの！いいわあなたたちに教えてあげる。今この町で起きている聖杯戦争の事をね。」

そこにいきなり先程セイバーに斬られたアーチャーが現れ、

「本気か。凜」

凜に向けて言う。

「ええ何も知らない相手を倒しても意味ないもの。」

「まったく、君は。」

「うるさいわね。アーチャーどうせこれは心の贅肉よ。」

凜がそう言うとアーチャーは消えた。

セイバーはその様子を見て士朗に

「マスター彼女の提案に乗った方がいい。あなたは何も知らなすぎる。それではこれからの戦いに勝利する事が出来ない。」

セイバーは士朗に助言する。

その後三人は軽く自己紹介をして家の中に入った。

「いいかしら二人とも」

「ああ」

「説明してくれ。」

凜の言葉に二人は頷く。

「まず私は聖杯戦争の正式なマスターよ。そして衛宮君あなたと同じ魔術師でもある。」

「そういえばどうしてさっき俺が魔術師だって気づいたんだ。」

士朗が凜に聞くと

「だって魔術師じゃないとマスターになれないもの。」

凜が言い風見が

「凜ちゃん聞きたいんだが魔術師とはいったいどういう存在なんだ？」

風見が先程から抱いている疑問をきくと

「魔術師というのは簡単に言えば根源を目指す存在よ。」

「根源？」

「例えば人を生き返らしたり並行世界へ移動したり、そこに至るまでに何代も世代越えて神秘を研究する研究者って所かしら。まあそこに至ったら魔法使いなんだけどね。」

「魔術師と魔法使いは違うのか？」

「ええ、魔術師は世界から等価交換で発動するけれど、そんな物を必要としないで神秘を起こせるのが魔法使い。今は世界に5人しかいないわ」

「その言い方だと魔術師は沢山いるように聞こえるがなぜ世界に公にならない？」

「それは魔術は秘匿される存在だからよ。現に一般人の前で魔術を使った魔術師は教会に粛清されているもの。」

それを聞き風見は納得し話を戻す。

「それじゃ、本題ね。聖杯戦争は聖杯の所有権を巡つての戦い。マスターに選ばれし者には令呪とサーヴァントがあたえられる。」

手の甲を二人に見せながら説明する。

「そういえばさつきセイバーも令呪がどうか言っていたよな。」

士朗がセイバーに聞くと

「はい、マスター令呪とはサーヴァントに三度限りの絶対命令権それがある限りマスターはサーヴァントを使役出来る事が可能なのです。それに令呪を使用すると例え不本意な命令にも従わせる事が可能です。」

「じゃ、さつきセイバーが動きを止めたのは」

「はい、その令呪の力です。さらにその強制力は無限ともいえる力を持つ聖杯に起因するもの。ですから貴方に危機が迫った時瞬時に

空間を移転させサーヴァントを呼び出すような……」

「なるほど切り札ということか。」

士朗は納得する。

「付け加えて言えば令呪なしでサーヴァントを使役する事はできないわ。なぜならサーヴァントは過去に存在した英雄たちの魂なのよ。」

凜が言つと風見が

「そういえばランサーが槍をゲイボルクと言っていたがまさか彼はケルト神話にでてくる。クーフリーンだということのか！」

風見が驚く

「え、ランサーの正体ってクーフリーンなの！貴重な情報ありがとう。」

凜が風見に礼を言う。

「と言う事は。そんな神話に出て来るような英雄を使って。なぜ戦い合っている。」

「聖杯を手に入れるためよ。聖杯は呼び出されるサーヴァントを七つのクラスに当てはめる事でこの世に召喚する事を可能にしたの。セイバー、ランサー、ライダー、アーチャー、アサシン、キャスター、バーサーカー聖杯は召喚された英霊たちにふさわしいクラスを割り当ててマスターに与えるわ。そしてマスター同士に戦わせ最後

「まで生き残ったものを主に認めるわ。それが聖杯戦争のあらましよ。」

凜から聖杯戦争の事について聞いた二人は

「そんな人の命をゲームみたいに」

士朗が怒る。

「聖杯戦争の事については理解したがなぜ何も関係無い。一般人が襲われる？」

風見が凜に聞くと

「英霊は人間の魂を食べれば食べるほど生前に近い力が発揮できるのよ。だから自分のサーヴァントを強くするために人を襲わせる訳。」

「なるほど一般人は聖杯戦争というゲームに巻き込まれた被害者と言う訳か」

言葉は冷静だが風見の顔には激しい怒りが見えた。
その時凜が立ち上がり

「さて衛宮君いきましょ。」

「行くつてどこへ？」

「この聖杯戦争の監督役のところによ」

凜の言葉を聞いて

「監督役なんているのか。」

「ええ、凄く嫌な奴だけど。」

「わかった。風見さんはどうします?」

士朗が風見に聞くと

「俺も付いて行こう」

士朗が返し。四人はこの家を後にした。

5話 聖杯戦争（後書き）

次こそは言峰教会です。

6話 衛宮士朗の決意（前書き）

士朗が戦う意思を固める話

6話 衛宮士朗の決意

四人は監督役のいる言峰協会に向かう途中救急車がサイレンを鳴らしながら横を通り過ぎた。

「遠坂今の」

「ええ またガス漏れ事件みたいね。ほんとに物騒だわ。それよりこれどうにかならなかったの。」

「確かにこれはひどいな。」

凜と風見はそう言いながらセイバーを見た。

「え、ああだっしょうがないじゃないか。鎧姿で街を歩く訳にはいかないだろ」

「マスターいくら霊体化できないとはいえこのような扱いは。」

セイバーは士朗に不満をぶつける。

それも仕方ない事だった。今のセイバーの姿は鎧の上にカップを着るといふかなりマヌケな格好だったからだ。

「不憫ね。未熟な魔術師に契約しちゃったばかりに」

凜は憐みも込めてセイバーに言う。

「そっいえば遠坂その霊体化ってやつで、姿を隠すんだよな。おまえのサーヴァントは」

「ええ、今も近くにいるわ。でもセイバーにやられた傷が大きいから戦闘は厳しいわね。」

「そうか」

「そういえば凜ちゃん君はどうして衛宮君の面倒を見るんだ。さっきの話だと君と衛宮君は敵同士のはずだが？」

風見が凜にむけていやらしい質問をする。

「勘違いしないでよね。わたしは変な借りをつくったままにしたいだけ戦うか戦わないか衛宮君の自由だけでもし次に会った時、衛宮君がマスターとして私の前に立つならまよわず殺すわ。それは、あなたにもいえることよ。風見さん。」

二人に向けて凜は言う。

「だから衛宮君、私を味方だとは思わないことね。用事がすんだら私の事は人間だと思わない方が楽よ。」

今まで様子を見ていたセイバーが風見の方を向き

「風見、先程から気になっていたのですがあなたは人間ですか？やはりあなたからは人間の気配をほとんど感じません。」

アーチャーも霊体化を解き

「ああ、私も気になっていた。貴様からは人間の気配がほとんどない。かといって死徒とは違うしな。」

アーチャーとセイバーが風見に疑問をぶつける。士朗も凜も風見に視線を向ける。

「俺は改造人間だ。」

風見が答える。

「え、風見さんが改造人間ということなんですか。」

「すまないが衛宮君これ以上はきかないでくれるか。」

「わかりました。」

士朗は風見の顔を見て聞いてはいけない事を聞いてしまったんだと思っただ。

他の人間もそれ以上追及は止め、辺りに重苦しい空気が流れる。そうしている内に目的地の言峰教会に着いた。

「ここが言峰教会よ。」

「ここに監督役がいるんだな。遠坂。」

「ええ、嫌な奴だけど。そいつは聖杯戦争を取り仕切るのが役目だからどうするにせよ会っておいて損はないはずよ。」

風見は協会を見て

「何だここは血の臭いがする」

警戒心を高める。

「さあいきましよう。」

「ああ、セイバーはどうする？」

「私はここで外敵に備えます。良くない空気です。マスターも油断しないように」

セイバーも目の前の教会の異質さに気が付いているようだ。

「大丈夫よセイバー。この神父とは古い付き合いだから大丈夫のはずよ。貴方はどうするの？」

「俺も行く。」

三人は教会の中に入る。

「遠坂その神父ってのが監督役なのか。」

「ええ、そうよ神父には似つかないけど。」

凜は嫌悪をかくさずストレートに言う。

「キレイいるんでしょ。？七人目のマスターを連れて来たわ。」

「おお、そうか。ようこそ少年、私は言峰キレイという。」

士朗を迎い入れる。

「あんたが聖杯戦争の監督役ってやつか？」

「そつだが君の名は？」

「衛宮士朗だ」

「そつか、それでは君が最後のマスターという訳か。」

「待てよ。言っとくけど俺はマスターになるつもりなんてないからな！」

士朗は自分の意思を告げた。

「ほう？凜」

「ええ、そいつ何も分かってなくてさ。危なっかしいから連れて来たのよ。」

一息入れて言峰が士朗に向けて語り始めた。

「ならば聞こう衛宮士朗、どんな手違いがあつたにせよ。君は聖杯が選んだマスターだ。聖杯を手に入ればどんな望みも思いのまま、それを知りつつ・・・なぜ戦いを拒む・・・。」

「だっておかしいじゃないか。聖杯がどんな物にせよ。殺し合いをさせるなんて。」

士朗は言峰に訴える。

「ふ、殺し合いを恐れるか。魔術師の言葉と思えんな。どうやら君

はただの腰抜けだったようだ。」
その言葉に士朗は強く反論した。

「違う。俺は逃げ出したい訳じゃない。ただ俺は聖杯なんて欲しくない。戦う理由なんてないんだ。」

士朗は自分の気持ちを言峰にいう。それを聞き言峰は

「それは、どうかな・・・？聖杯はどんな願いも叶えるのだぞ。マスターの中には私利私欲に目が眩むものもいるだろう。そんな連中が聖杯を使ったらどうする？」

「うっそれは」

士朗は言葉に詰まる。

「魔術師と言うのは目的の為に手段を選ばない連中だ。例えば知っているかね。ここ最近ガス事件や殺人事件が多発しているだろう。事實は違う。あれはマスターの仕業だ。自分のサーヴァントを強くするためにな。」

それを聞き今まで黙っていた風見が

「その話は本当か？」

「ああ、本当だ。魂を喰らえばサーヴァントは強くなるからな。そういつた人の命を何とも思わない輩が聖杯を狙っているんだ。」

風見に答え、再び士朗に視線をむける。

「ちなみに今回の聖杯戦争は五回目になる。前回の聖杯戦争はちょうど十年前にとり行われた。あのとき愚かなマスターの手によって――無関係な市民に大量の死者をだす大惨事が引き起こされたのだ。」

「えっ」　　「まさかそれは！」

「まだ人々の記憶にも新しいだろ……そう死者数百人も出したあの大火災がそれだ。覚えてないかね？」

「うう……」

士朗の脳裏に昔の記憶が甦りその場にへたり込む。そんな士朗に言峰は

「もちろんこれだけ知っても戦いを拒むというならそれも良からう。誰だって我が身一番だからな。」

「ふ……ふざけるな！俺はオヤジの後を継いで正義の味方になるって決めたんだ。こんな訳の分からない戦いに巻き込まれて平和に暮らしている人が犠牲になるなんて許せない。俺は戦う！！十年前の悲劇をまた繰り返させるわけにはいかない。そのためならマスターにだってなんだってなっってやる！！」

士朗は戦う決意を固める。

「それでは衛宮士朗を最後のマスターと認めよう。ここに聖杯戦争の開幕を宣言する。各自、己の信念に従い思う存分競い合え。」

言峰の声が高らかに教会内に響いた。

「それじゃここにはもう用はないわね。いくわよ衛宮くん」

「ああ」

凜が士郎を連れて出て行くことになると

「喜べ、少年君の願いはようやく叶う。」

「皮肉なものだ誰かを救いたいと思う願いは同時にそれを行う悪の存在が必要だからな。」

言峰の言葉を聞き士郎は何を思ったのか。フラフラしながら出て行った。

「君はいかないのかね。」

言峰は出て行くこととしない。風見に問う。

「お前に聞きたいことがある。」

「ふむ何かね。」

「貴様が言ったことには、何か裏があるように思える。それにここを教会と呼んでいいか悩む。ここからは血の匂いしかない?」

「随分な言われようだね。それにさっき言った事がすべてだよ。」

笑いながら風見に言う。

「まあいい。」

風見もしぶしぶながら追及を止めた。

「それより君もこの聖杯戦争に参加するのかね。」

「どついう事だ。」

風見が聞くと

「うむ、これでも聖職者なのでね。色々悩んでいるものに手お差し
伸べようと思ったのだがね。それに先程君はここが血の匂いし
かないといったが。君からは人間としての気配を余り感じないのだ
がね。」

風見は言峰を睨みつける。

「まあいい、今回は失礼する。」

風見も教会を後にした。風見が出た後、いつの間にか言峰の後ろに
誰かいる。

「言峰あれが我等の仇敵の一人仮面ライダーV3風見志郎だ。」

言峰に風見が出たドアを見ながら語りかける。

「ふむ、今回の聖杯戦争面白い事になりそうだな」

言峰は笑った。

「風見さん遅かったですね。」

「すまない衛宮君」

風見が出て来たのを確認して士朗はセイバーに向き

「セイバー俺はこの戦いを見過ごせない。だから俺はマスターになる事を受け入れた。」

「それでは!!」

「ああ、色々と頼りないマスターだけどよろしく頼む。」

士朗はセイバーに手を差し伸べる。セイバーもそれを手に取り

「はい、マスター」

「そのマスターってのはやめてくれないか。士朗って呼んでくれ。」

「はいシロウ、この呼び方は実に好ましい。」

士朗が闘う意思をセイバーに伝える。そして凜に向き

「遠坂にも世話になった。ありがとう。」

凜に礼を言つと、

「勘違いしないでよね。これで貸し借りはなし、次に会う時はお互い敵同士よ」

「無論です。こちらも手加減などしません。」

凜の宣戦布告にセイバーも受けて立つ。そんな凜の言葉に士朗は疑問を抱く。

「遠坂の言い分は矛盾している。何度も俺が敵だと釘を刺すのは戦いに私情を挟まないための線引きだろう。だったら最初から俺の手助けなんかしなければよかつはずだ。だから今日の手助けは結局善意によるもので」

士朗が凜の行動について考えていると凜と視線が合い

「なによ？衛宮君」

士朗に聞く。

「いやお前のおかげで助かったよ。ありがとう・・・遠坂っていい奴だな。俺はお前みたいな奴は好きだ。」

「なによ、煽てたって手加減しないわよ。」

凜はあわてながら士朗に言う。

そんな中、風見は士朗に聞く。

「士朗君、本当にいいのかね。君はこれから殺し合いに参加するという事だぞ。」

「はい！！俺は何も関係無い人が理不尽な理由で殺されるなんて見

過ごせない。だから俺は戦います。」

それでも風見は士朗に戦いを止めるよう説得しようとする

「ふうんーやっと出て来たね。お兄ちゃん。待ちくたびれちゃった。

」

皆が声の方に視線を向けるとそこには白い髪の少女が立っていた。

6話 衛宮士朗の決意（後書き）

イリヤ登場

7話 狂戦士

「こんな子供がこんな時間帯になぜこのような所にいる」

風見が白い髪の少女に視線を向けると風見から視線をはずして

「こんばんわ。お兄ちゃん。」

士朗に向けて話す。

「こんな時間帯にどうしたんだ！キミ」

士朗が少女に聞くと。くす、少女は微笑み

「はじめまして、私はイリヤ・・・イリヤ・スフィール・フォン・アインツベルンと言えばわかるかしら？」

「何ですって!?!」

白い髪の少女イリヤが名前を名乗ると、凜が驚く。それを見て風見が

「凜ちゃん彼女をしっているのか？」

「ええ、アインツベルン、聖杯の入手を宿願とする。魔術師の家計。毎回この戦いにマスターを送り込んできているやつらよ。」

風見はイリヤに聞く。

「なぜ、君のような子供がこんな殺し合いに参加している？」

「アインツベルンの宿願の為よ。そして」

イリヤが士郎を見て

「お兄ちゃんを殺すこと。」

「!!」　　「彼女は俺の事を知っているのか? だけどどうして?」

「私ねこの日をずっと待ち焦がれていたの。だからお兄ちゃんは念入りに殺してあげる。おいでバーサーカー!!」

イリヤの後ろにでかい剣を持った巨人が現れる。

「!!これがバーサーカーなんてでかさだ!!」

風見たちは、バーサーカーの威圧感に圧倒される。それはまさに死を具現化したような存在だった。

「アーチャー戦える?」

「厳しいな凜、出来てせいぜい援護射撃くらいだ。」

「お願いアーチャー」

凜はアーチャーに命令する。それに応えアーチャーはその場を離れ移動する。

「いけ!!バーサーカーみんな叩き潰しちゃえ」

二人は驚く。バーサーカーは耐えるのではなく二人の攻撃を弾いたのだ。

バーサーカーは二人が驚いてる隙を付き風見をパンチで吹き飛ばしセイバーに剣で攻撃する。

セイバーはなんとか剣で防ぐがあまりの威力に10Mぐらい吹き飛ばす。

その時アーチャーの援護である矢がバーサーカーに命中するがまったく効いていなかった。

「なんてデタラメ。バーサーカーは理性と引き換えに強大な力を与えられたサーヴァントそれゆえに」

本来能力的に劣る英霊がなるモノだけどあんな化け物がいたなんて」

凜はバーサーカーのデタラメさに驚く。そこで凜はマスターであるイリヤに向けガントと呼ばれる魔術を指先から放つ。

「イリヤスフィール覚悟」

それをイリヤは片手で受け止める。

「甘いわ凜。その程度の魔術で、でも狙いは悪くないわ。だってバーサーカーには絶対勝てないもの。だってあいつはヘラクレス古代ギリシャ最大の英雄なんだから・・・。」

「ヘラクレス、まさかそんな」

「サーヴァントとは英雄の魂を現世に呼び出したもの。それくらいはリンも知ってるわよね？霊体である彼らの存在はそこに住む人々の認知度に強く影響されるわ。ゆえに広くこの世に知れわたった英

雄ほど強力になる。だからヘラクレスに勝てるものなんているわけではない。セイバーやあなたのアーチャーなんてただのザコよ。」

イリヤは余裕の表情で凜に言う。

「そんなのやって見なくちゃわからないでしょ？」

「良いわ。どうせすぐにわかることだから。」　　それにしてもあいついったい何者？ 魔力も感じないただの人間がバーサーカーの攻撃に反応するなんて？？」

イリヤは風見の人間離れした。動きに驚く。

バーサーカー攻撃により痛めつけられたセイバーと風見の姿がある。アーチャーの援護はまだ続いているがやはりダメージは無い。

「つくまずいな。」

風見がバーサーカーに視線を向け

　　く変身するか

変身しようとした時バーサーカーの攻撃によりセイバーが膝を着く。

「くう」

そんなセイバーにバーサーカーがとどめの一撃を入れようとしているのを士朗は見て

「危ない！...！」

セイバーに近寄り庇う。それをセイバーは

「シロウ何を」

士朗に困惑な表情をむける。そして今にもバーサーカーの攻撃が士朗に直撃しようとした時、

風見は「ハリケーン」と自分のマシンを呼ぶ。

バイクが来てバーサーカーに突撃し動きが鈍る。その隙を付いてセイバーは士朗の手を取りその場から離れる。

「シロウ貴方死ぬ気ですか。」

セイバーの言葉に

「セイバーが危ないと思って。」

士朗は反論する。風見はそんな二人に

「話は後にしろ」

激を入れる。セイバーは士朗を抱えて凧の所まで走った。

「衛宮君なんであんな馬鹿な事を？」

士朗の行動の意味を凧は聞いたが

「あのままほつといたらセイバーがやられていたんだぞ。」

強く凧に訴える。

「だからってあなたが」

二人が言い合っている間に戦いは新たな局面を迎えるのだった。

「このままではやられるな」

風見は動きを止めポーズをとる。それを見てイリヤは

「なんのつもり？」

疑問をむける。

「変身ブイスリヤアアー」

風見は仮面ライダーV3にと姿を変える。その姿に驚きながら

「あなたいったい何者なの？」

「私の名は仮面ライダーV3」

イリヤの疑問に答える。

「まさか貴方、噂のマスクドライバーなの？」

驚いていたが次第に冷静になり、

「まあいいわ、貴方が何者だなんて関係無い。この聖杯戦争に貴方が割り込むなら貴方を殺すわ」

イリヤはV3に殺意の目を向ける。

「待て、もう一度聞く？なぜ君みたいな子供がこんな殺し合いに参加しているんだ？今からでも遅くない。こんな戦いすぐにやめるんだ。」

V3はイリヤに戦いを止めるよう説得する。

「うるさい、もういい覚悟しなさい。マスクドライダー、バーサーカー遊びは終わりよ。そいつを殺しなさい。」

バーサーカーがV3に迫る。

「やはりやるしかないのか。」

V3は悲しみか。悔しさかわからない声を出しバーサーカーを迎え撃つのであった。

7話 狂戦士(後書き)

次回はV3対バーサーカー

8話 一日の終わり(前書き)

V3 対バーサーカー

「やったか？」

しかしすぐに立ち上がりものすごい形相でV3を睨みつけた。

「今でも倒せないのか！！！！しかしダメージはあるようだ！」

バーサーカーのタフさにV3は心で舌打ちをする。

「やるじゃない。マスクライダーまさかバーサーカーを吹き飛ばすなんて。世界を救うヒーローなんて

与太話だと思っただけど噂は本当だったようね？」

イリヤはバーサーカーを吹き飛ばしたV3に賞賛の声を上げる。

その時、土朗達三人が墓場に着いた。

セイバーがバーサーカーに斬りかかるがやはり攻撃は弾かれて通らない。

「大丈夫でしたか？風見」

「ああ、だが奴の体は厄介だな。どういう仕組みか。わからないが攻撃のほとんどが弾かれる。」

風見の指摘を聞きセイバーは

「おそらく宝具の力によるものでしょう。」

「宝具??？」

宝具という言葉にV3は疑問の声を上げる。

「ランサーが持っているゲイボルクのような物です。宝具にはそれぞ
れ特殊な力がありますから。」
V3の疑問にセイバーは答えた。

「なるほど、でも倒せない相手じゃない。」

「なにか勝算があるんですか。」

V3にセイバーは聞くと、

「ああ先程、私のジャンプキックで倒すには至らなかったがダメー
ジを与える事には成功した。あれより強力な蹴りを与えれば倒せる
かもしれない。」

自分の考えをセイバーに伝えたと

「わかりました。しかしそれを行うにはバーサーカーの突撃を止め
る必要がある。」

「そちらにも手はある。私がバーサーカーを止めるその隙について
君は思い切りバーサーカーに斬りかかってくれ。そして奴が怯んだ
時に俺が止めを刺す。」

セイバーは頷きV3の後ろに回る。そんな二人の様子を見てイリヤは
「相談しても無駄なんだから。やっちゃんえバーサーカー」

URUUUUUUUU　バーサーカーは雄たけびを上げると前に出
ている。V3に剣で攻撃を仕掛けた。

それをV3は驚く行動でバーサーカーを止める。

なんと！剣をかわしバーサーカーの突撃を肩部で体ごと受け止める。

「ウソ！！！」

思わずイリヤは呟いた。

V3二十六の秘密の一つ特殊スプリング筋肉

肩部のあらゆる衝撃を吸収する特殊筋肉で強度は特殊強化筋肉の十倍なのである。

それを利用してバーサーカーを止める事に成功。予定道理セイバーが魔力を込めてバーサーカーに思い切り斬りかかる。思わずバーサーカーも怯んだ。

それを好機とみたV3は高く飛び上がり

「V3反転」

さっきと同じようにジャンプ蹴りを入れる。

「また同じ攻撃それじゃあバーサーカーは倒せないよ。」

イリヤは笑うがV3はいきなり回転し、

「きりもみキーク」

蹴りを入れる。蹴りが顔面に辺りバーサーカーの首が吹き飛んだ。

「ばーサーカーー」

イリヤは叫ぶ。

V3反転きりもみキック
V3反転キックにきりもみキックを混ぜ込んだV3の必殺技の一つである。

「さあ君のサーヴァントは倒した。もうこんな馬鹿な戦いは止めるんだ。」

V3は戦いを止めるようイリヤに申し出る。しかしイリヤは首の無いバーサーカーを見て

「まさか一回殺されるなんて。」

「いつかい???」

イリヤに聞こうとすると、、、。なんと首の無い筈のバーサーカーが立ち上がる。その次の瞬間首が再生した。

「これは！・・・・・・どういうことだ?」

V3もセイバーもこの状況に驚く。そんな二人を見てイリヤは

「見直したわ。マスクライダー、一つとはいえバーサーカーの命を奪うなんて!」

V3は状況をうまく飲み込めない。今起きたことが未だに信じられないようだ。

「そいつは十二回殺さないと死ねない体なのよ。」

「十二回どついうことだ?」

訳も分からずイリヤに聞く、

「ギリシヤの英雄ヘラクレスは十二もの試練を制し、そのご褒美として不死の権利を得た。つまりかつての乗り越えた死の数だけ命のストックをもつ。「十二の試練」それが英雄の標たるバーサーカーの宝具よ……!」

「まさか体が宝具事態だったなんて」

イリヤの言葉にセイバーはバーサーカーにさらなる驚異を感じた。

「ならば後十一回倒すまでだ。くらえV3反転きりもみキック」

V3はバーサーカーを倒した攻撃をまた仕掛けるが今度は簡単に弾かれる。

「なに!!」

V3は今の結果に驚いている。そんなV3にイリヤは

「無駄よ。一度倒された攻撃は。バーサーカーには二度と通じないわ?」

「何だと。あれを使うか。しかし三時間変身が出来なくなる。使用しても倒しきれなければこちらがやられる。」

V3はある必殺技を使おうとしているが使用するのが使用するのをためらう。なぜならそれを使えば三時間も変身できなくなるからだ。

戦いが激化している中で士朗と凜は

「このままだとまずいわ。」

「なにか手は無いのか。遠坂」

「それがわかれば苦労しないわよ。マスターであるイリヤスフィールを狙おうにも隙がまったくないし」

士朗と凜もこの状況を打開しようといういろいろ考える。その時、アーチャーから凜へ念話が届く

「えっ離れるってどういう事アーチャー??？」

凜がアーチャーの念話を聞いている中で、士朗には見えてしまった。アーチャーがなにやら剣を居抜こうとする姿が。

士朗はV3・セイバー・バーサーカーのいる戦場に走る。

「風見さん、セイバー危ない。」

「シロウ!?!?!」

「衛宮君。ん、この音は。」

V3は音がする方に顔を向けるとこちらにひと振りの剣が飛んできている。それをみてすぐさま

「え、風見何をするんです?」

セイバーを掴み。こちらに来ている士朗も掴み大きくジャンプしてその場から離れる。

次の瞬間音が消えた。

墓地を見てみると地面にクレーターが出来て、その中心には剣が刺さっていたがすぐに碎け散った。墓地だった場所が炎に包まれていた。それでもバーサーカーはまだ立っている。

「やるじゃないリン。あなたのアーチャー。いいわ今夜は帰る事にするわ。よかつたね、お兄ちゃんお家に帰れるよ。」

イリヤが士朗に言う。

「じゃあねお兄ちゃん。それとマスクドライダー」

次の瞬間イリヤとバーサーカーは消えた。

「うう」

「シロウ」

「衛宮君」

爆発の時に出た木の破片が何と士朗の背中に刺さっている。それを見てV3とセイバーは慌てる。

「シロウ、このままにしとくと危険です。痛いでしょうが引き抜くので我慢して下さい。」

グシュ セイバーは思い切り破片を引き抜いた。その時血しびきが

宙を舞う。

「ああ〜〜」

士朗は痛み之余り声を上げる。

かなりの重症なのだがなんともう治り始めてるでないか？

「よかった。治療の魔術の心得はあるみたいですね」

傷が塞ぐのを見てセイバーは安心するが士朗は

「なんだよ！それ？〜どさ

訳が分からないまま気を失った。

「シロウ」

セイバーが士朗に話しかけるが反応は無い。V3は変身を解いて

「とりあえずここはまずい。衛宮君の家に行ったん帰るぞ。凜ちゃんもそれでいいか？」

いつの間にかこちらに来ていた凜に提案する。

「ええ、急ぎましょ………！」

三人は急いで衛宮邸へと帰った。

「これでいいわね？」

三人は士朗を布団に寝かして

「とりあえず話は明日にしましょ？」

セイバーと風見は凜の提案に頷く。

その後風見は衛宮邸の庭に一人で出てポケットから携帯を取り出す。

「もしもし本郷先輩ですか。」

「どうした風見！こんな時間になにかそつちであったのか？」

風見は今日の出来事を本郷に電話で話した。聖杯戦争のことを。

「そのような事が！わかった。今は無理だが。なるべく早く応援に駆けつける。他の連中にも連絡しておく。」

「わかりました。俺もなるべく被害の出ないようにこの町を調べます。」

「わかった。無理だけはするなよ。風見」

「はい」

本郷に報告し風見は携帯を切る。こうして波乱の一日は終わりを告げた。

他の十人のライダーが揃うのも遠くないのかもしれない。

紹介

ハリケーン

全長2300mm

全高1210mm

重量320kg

最高出力1000馬力

最高時速600?

V3の専用バイク。風見志郎の変身にもなつて高性能バイクに変化する。原子力エンジンを搭載している。伸縮式の翼の下にはロケットブースターが搭載され最高10時間の飛行が可能である。オフロードの機動性も高く地上戦でも威力を発揮しカウルの前部には仮面ライダーのタイフーンを装備し、風力エネルギーを吸収しながら走行が可能。1号、2号の愛機サイクロンの後継機である。

V3二十六の秘密

特殊スプリング筋肉

肩部のあらゆる衝撃を吸収する特殊筋肉で強度は特殊強化筋肉の十倍である。

V3反転キック

敵に蹴りを放ち反転、もう一度蹴りを放つ技。

8話 一日の終わり（後書き）

自分はこの作品が初めてなので悪いところがあればどんどん感想で指摘して下さい。

9 話 正義の味方とは（前書き）

またまた説明会

9話 正義の味方とは

回想 衛宮士朗

衛宮キリツグと子供の衛宮士朗が衛宮邸の庭先で二人座っている。キリツグの姿はかなりやせて衰えがみられる。

死期が近いのだろう。

しかしキリツグは安らいだ表情をして士朗に話しかける。

「僕は子供の時、正義の味方に憧れ目指していた。」

それを聞き士朗は

「なんだよ！目指していたって諦めたのか？」

不満そうにキリツグに問う。

「うん、正義の味方は期間限定でね。大人になると名乗るのが難しくなるんだよ。」

士朗に優しく言う。

「そっかそれじゃ、しょうがないな。」

「うん本当にしょうがない。」

二人は上を向き月を見る。綺麗な満月だ。

「うん、しょうがないから俺が代わりになってやる。」

「えー!!」

キリツグにとって士郎の言葉は意外だったらしく驚きの声を上げる。

「爺さんは大人だから無理だけど俺なら大丈夫だろ。爺さんの夢は俺が必ず現実にしてやる。だから安心してくれ。」

士郎の言葉にキリツグは目を閉じ

「そうか・・・安心した。」

士郎の言葉を聞くと、キリツグはそのまま目を閉じたまま動かない。士郎の目から一筋の涙が流れた。

場面が変わり

「士郎、泣いちゃ駄目だぞ。士郎は男の子なんだから。」

「泣いてなんかいない藤ねえこそ。」

中学生くらいの藤村大河と子供の衛宮士郎が座っている。

大河は士郎に泣いたらダメだと言っが悲しみのあまり自分が泣き始める。

どうやら衛宮キリツグの葬式をしているようだ。

士郎はキリツグの棺桶を見て

「爺さん正義の味方は俺が継ぐ。だから安心して休んでくれよ」

回想終了

「うっ……ここは？俺の家どうしてここに？」

士朗が周りを見ていると背中から激痛が走った。

「うっっ」

士朗が背中に手を伸ばしてみると傷口らしきものはどこもない。

「傷口が塞がっている……！？確か俺は背中に傷を負ったはずだが？」

考えているとセイバーが来る。

「良かった！目が覚めたんですね？シロウ」

「セイバー俺はどうしてこの家にいるんだ？」

「はい それは……ああ……もう……！」

セイバーに今までの経緯を聞こうとすると居間の方から凧の言葉が響く。

士朗は立ち上がりセイバーと居間に向かう。そこには、

「凧ちゃん。もう止めた方が……？」

「ちょっと黙ってて凧見さん！」

凧がキッチンをあさっているのを止める凧見の姿がある。

「どうなっているの。この家は紅茶のティーバック位、常備しときなさいよ?」

そこでようやく凜は士朗とセイバーの存在に気付き、

「あら起きたのね。衛宮君?」

そこで四人は居間にあるテーブルの所で昨日のことに付いて話を始めた。

「それで遠坂・・・昨日はあれからどうなったんだ・・・?」

士朗は昨日の経緯を凜に聞く。

「そりゃあ、衛宮君が倒れた後、大変だったわよ・・・風見さんもセイバーもボロボロでアーチャーも魔力切れ、でもイリヤスフィールはアーチャーの攻撃を受けて・・・すぐに逃げた?というより見逃してもらったのかしら・・・その後騒ぎが大きくなる前に衛宮君を家まで連れ帰った訳・・・」

経緯を士朗に伝えると

「そつえば背中に受けた傷はどうなったんだ・・・?」

背中 of 傷についての疑問を問うと、

「ひとりでに治り始めたわ!」

「なんだって傷がひとりでに治った!!!?」

「ええ、そうよ何もしていないのに勝手にね!」

士朗は驚く。セイバーは凜に

「どういうことでしょうか?リン・・・あれはシロウかリンの治癒魔術だとおもったのですが」

「そんなの私にもわからないわよ・・・。」

士朗の傷についてセイバーと凜は話し合う

「だいたい衛宮君にそんなだいそれた事出来るわけないし・・・それに私にもあれだけの傷を治す魔力はもうなかった。」

「うん・・・そういえばセイバーと風見さんはもう大丈夫ですか?」

士朗は昨日バーサーカーから受けたダメージの事について二人に聞く。

「俺の体は特別製だからな・・・すぐに傷は治る。」

風見はそう言いながら自嘲ぎみに下を向く。それを見て士朗は何か悪いことを聞いたんだと思い、セイバーに視線をうつす。

「私達サーヴァントには自動修復機能が備わっていますから、昨日ランサーに受けた傷は少々厄介ですがその他の傷についてはもう完治しています。」

セイバーの言葉を聞き凜はポンと手を叩いてなるほど何か納得したように士朗に言う。

「そうか・・・！恐らくそれね。衛宮君にもセイバーの治癒能力が影響したんじゃないかしら！セイバーの召喚は不完全だし何かの手違いで経路が繋がったんでしょうね。」

士朗はそれを聞いて、

「そうか・・・結局俺はセイバーに助けられたんだな。すまない。」
セイバーに謝る士朗を見て風見は

「衛宮君・・・君は昨日の戦いで傷を負い死にそうになった。それでも戦いに参加するのかね？」

風見は士朗にまだ戦う意思があるのか聞くと、

「はい、俺にはやっぱり何も関係無い人が殺されるのは間違っていると思うから・・・その人たちを守るために戦います。風見さんみたいな仮面ライダーのように」

士朗の意思を聞き風見は

「わかった。もう止めない・・・だが一つ言いたいことがある・・・先に謝っておく。」

士朗に頭を下げて服を掴み、顔に拳を叩きこむ。ドガ

「うっ」

「風見！何を？」

セイバーは士朗の前に立ち風見を睨みつけた。風見はそれを気にせず、セイバーをどかして士朗の前に立ち士朗に怒鳴る。

「君は昨日何であんな馬鹿な真似をした。」

「馬鹿な真似・・・？」

風見の言葉に疑問をむけると、

「君は本当なら昨日二度死んでいる。セイバーを助けるためにバースーパーの前に向かって行った時と、アーチャーの攻撃の時だ。どうしてあんな真似をした？自分の命が大切じゃないのか？」

風見は怒鳴りながら士朗に問うた。セイバーと凜も・・・そんな風見の形相を見て様子を見る。

「風見さんとセイバーが危なかったから・・・俺はあなたのように誰かを守る正義の味方になりたいんです。だからあの時助けようと思っ...！」

士朗から正義の味方と言う言葉を聞き、風見は今度は静かに話しかける。

「衛宮君・・・正義の味方なんて本当は存在しない方がいいんだよ・・・」

「そんな事はない!？」

今度は士朗が大きく怒鳴る。本物の正義の味方である仮面ライダーから正義の味方を否定され思わず士朗は叫んでいた。それでも風見は静かに話す。

「衛宮君・・・正義の味方が必要なときは何時だと思う?」

「え・・・?」

いきなりそのような事を言われ士朗は戸惑う。

「悪が存在する時に正義の味方は必要とされる。それに多くの人がその悪により殺される。」

「うっ」

風見の言葉に士朗は言葉が詰まる。

「それに俺は正義の味方といわれるほど綺麗な存在じゃない。」

「えっどっいっことです?」

風見の言葉の意味を士朗が問うと、

「俺が仮面ライダーに最初なろうとした目的は復讐だからだ。」

士朗は風見の話に戸惑いながら真剣に聞く。凜もセイバーも真剣に聞いていた。

「俺はデストロンという。組織に父、母、妹を殺された。それに復讐するために仮面ライダーになる為に改造手術を受けるために仮面ライダー一号、二号に頼んだ。」

「改造手術、そういえば風見さん・・・昨日自分の事を改造人間って。」

士郎の言葉に風見は頷く。

「ああ、俺はデストロンを倒すためにダブルライダーに改造手術を頼んだが断られてしまったよ。」

風見は自嘲気味に笑う。

「それでも俺は諦めきれずにダブルライダーの後を追って罠に嵌っている二人を助けたのはいいが、自身がその罠で死にそうになってしまい、それでダブルライダーから改造手術を受け仮面ライダーV3になった。」

風見は自分の事を士郎たちに話した。そして士郎に

「衛宮君、君の心がけは立派だが。まずは自分の命を大事にしろ。それに自分の事を大切にできない奴が本当の意味で誰かを救う事なんてできない。」

告げ。立ち上がりその場を離れる。その時風見の前にアーチャーが現れた。

「何の用だ。アーチャー」

アーチャーに聞くとアーチャーは軽く笑いながら

「なに貴様の事を少々感心してな。貴様はただ理想に溺れた存在とは違うようだ。」

「どういふ事だ。」

風見は聞くが、アーチャーは霊体化し消えもういなかった。

衛宮邸の屋根

「ふっ、だが貴様が私の邪魔をするというなら殺すだけだ。」

下にいる風見を見てアーチャーは呟くのだった。

9話 正義の味方とは（後書き）

次はアーチャーと凜の話

10話 赤と赤(1)

風見が居なくなつた後、辺りに静寂な空気が流れる。そんな中、凜は士朗に向けて口を開いた。

「風見さんの言う事にも一理あるわ。生身であるバーサーカーに立ち向かったり、セイバー達のいる戦場に何の考えもなく突っ込んだりして、しかもそれがサーヴァントの身代りになるなんて論外よ！」

「だってしょうがないだろう？セイバーや風見さんを助けるためなんだから！それとも二人を見殺しにしろって言うのか。」

凜の言葉に士朗は強く反発する。

セイバーはそんな士朗を睨みながら話す。

「いいえ！シロウ、仮にあの時、貴方が来たとしても失礼ですが・
・あの場では何の役にも立たなかつた。」

セイバーのセリフに士朗は口を紡ぐ。

「そもそも私を助けるという考えが間違いです。サーヴァントはマスターを勝利させるための存在だ。なのにそのサーヴァントを庇つてマスターが傷を負うなんて本末転倒です。」

「当然よね。マスターの死はサーヴァントの消滅を意味する。セイバーが助かつてあんなに死んじゃつたら意味ないでしょ。」

セイバーの言葉に凜も同意する。

「なんだよ。よってたかつて、それじゃセイバーや風見さんを見殺しにした方がよかつたてのか」

士郎が考えてるとセイバーが

「シロウ・・・あなたはあの時、なんとしても逃げ延びるべきでした。そうすれば仮に私が倒れてもまだ取れる道があったのですから・・・」

「まあ、今回は結果的には助かったから良かったけど・・・。」

士郎は二人に言われて反発しながらも次第に冷静になる。

「落ち着け。冷静に考えれば遠坂たちの言う通りだ。戦いはもう始まつてる。十年前の悲劇を繰り返さないためにも俺は生き残らなきゃダメなんだ・・・だけど・・・!??」

士郎は二人の言葉を噛み締め考えているとある事に気がつく。

「あれ・・・?俺着替えてる?」

自分が学生服から服を着替えてるのに気がつく。

「ああ血塗れだったから適当に替えといたわよ」

「え・・・遠坂が?」

士郎は気が動転する。それを見て凜はにやけながら笑い

「ははぁん、安心しなさい。別に何も見てないから・・・それに着

替えをしたのは風見さんよ」

「ば・・・馬鹿！そんな意味で言ったわけじゃ」

反論するが凜はまだ笑っている。

「くっ」

士朗は立ち上がり部屋を出て行くこととする。

「シロウ・・・どちらへ？」

「外の空気を吸ってくるから、おまえらじつとしてるよ！」

セイバーはポカンとし、凜はくすくすと笑う。

「と・・・遠坂の奴、人をからかいやがって」

士朗は文句を言いながら廊下を歩く。

くだいたい分かってきた。遠坂ってなんだか学校と印象が違うけどこっちの方が地だったんだ！まったく朝から、あんな風に女の子二人に取り囲まれて・・・ただでさえ調子が狂うつてのに「いかにいかに心頭滅却だ。」

士朗は家の道場に入る。

そこには風見の姿があった。

「あ・・・」

士朗は何を話しかければいいか悩んだ。そんな士朗に風見は

「衛宮君、さっきは殴ったりして悪かった。」

風見は士朗に謝る。

「いえ、俺の方こそなんだかスイマセン」

士朗も風見に謝った。

風見は士朗に促すよう

「衛宮君・・・俺は君が戦う事に関してはもう反対しない。ただこれだけは覚えていてくれ。正義の味方にも助けられない存在がいる。それだけはわかってくれ。現に俺も本当に助けなければならぬ存在を守る事が出来なかったからな。」

風見の脳裏に今は亡き父、母、妹の姿が甦る。

士朗は何も答えを返せないまま時間が過ぎていく。
しばらくしてセイバー来て、

「シロウここにいたのですか？風見もいるみたいですね。」

「どうしたんだ。セイバー？」

「ええ、凜がもう帰るといっているので」

「そっか見送りぐらいしないとな」

三人は玄関に向かう。その途中セイバーが士朗に聞いてきた。

「ところで凜のまえでは聞くのを控えたのですが、これからどうするつもりでしょうか？」

「どうするって何がだ？」

「今後の作戦のことです。バーサーカーには苦戦を強いられました。が作戦次第で結果も変わってくるでしょう。それにその前に戦ったランサーであれば手の内も知れている。マスターの傷が癒えた以上、行動が早い方がいい。リンが帰ったらすぐにでも探索にでるべきです」

セイバーは士朗に提案するが士朗は

「ちょっと待てセイバー。俺はこちらから仕掛けるつもりはない」

「は……？」

「だってあいつらの狙いは聖杯だろう？ だけど俺は聖杯なんて興味がないんだ。そんなもののためにわざわざ無益な戦いをしたくない。」

士朗の言葉にセイバーは強く反発する。

「何を馬鹿な！！？ それでは他のマスターが現れるのをただ待つつもりですか？ そのような消極的では……」

「いいやセイバーそうじゃない。そりゃ昨日みたいに襲われて戦いになるのは拒まないけど……今この町には無関係な人たちを巻き込む……心無いマスターが潜んでいるらしい。俺はそいつらをな

んとかするのが先決だと思う。」

セイバーと士朗が今後の事について話していると

「あーあやっぱりね。そんなことだろうと思ったわ。」

「リン！」

「ごめんね。声が聞こえたから」

凜が出てきて士朗に話しかける。

「それで？衛宮君・・・自分から仕掛けない。だけど襲ってきた敵は倒す。そして悪行を働くマスターは許さないって？」

「ああ、そのつもりだ。」

凜は士朗を睨みつけ

「あなた、自分が矛盾しているってわかってる？それじゃ・・・その心無いマスターをどうやって止めるわけ」

「それは説得するとか」

「・・・馬鹿、有無も言わずぶつ殺されるわよ!!!・・・最後だからもう一つだけ忠告してあげる。聖杯を手に入れるためには他のマスターを倒さなくちゃいけない。だからどうしても貴方は狙われる。それは私だつて例外じゃない。・・・今のあなたでは絶対にわたしには勝てないわ。それこそ寝首を掻きにくるつもりじゃないとね。昨日も言ったけど私の事は人間と見ない方が楽よ。」

士朗は凜の言葉を聞き冷や汗を流す。

「風見さんはどうするの？この聖杯戦争関与するつもり？」

今度は風見に問う。

「ああ、俺は君たちだけが聖杯を手に入れる為に戦うなら関与しないが。その為に無関係の人間を殺すというなら俺はそいつを許さない！！」

風見は聖杯戦争に関与する事を凜に告げる。

「わかったわ。風見さん・・・あなたが私の邪魔をするなら私は遠慮しないわ」

そう言い残し凜は家を出ていく。

「ふう・・・」

「気が済んだかね？凜？」

凜が家を出ると門でアーチャーが待っていた。

「アーチャー・・・」

「まったくどうしたというのだ。君らしくもない。敵にここまで手助けするとは？」

凜はアーチャー見ながら

「言ったでしょアーチャーあいつには借りがある。そもそもあいつが巻き込まれる原因を作ったのは私だもの……その借りを返しただけよ。」

それを聞いてアーチャーは片目をつむり

「ふむーだが凜……君はその借りとやらをもう十分に返していたのではないか？言うまでも無い事だが敢えて言おう。君も聖杯を指すマスターならばその自覚を持って行動したまえ」

凜はアーチャーに背中を向けて

「分かってる。」

一言つぶやいた。

SIDE 遠坂凜

数日前

「聖杯の探究……それはこの遠坂家において魔術師の血と共に代々受け継がれてきた宿願である。私の父も前回の聖杯戦争で帰らぬ人になった。……それ以来、聖杯戦争の準備を重ねて来たのだ。」

凜は自分の家で服を着替えながら

「さて・・・準備万端。調子もよし！うん我ながら絶好調！これならサーヴァントの召喚もばっちりね。」

自分の体調を確かめ凜はサーヴァント召喚の為、遠坂家の地下室に降りていく。

凜は魔法陣の上で呪文を唱え始めた。

「閉じよ、閉じよ」

「その日、私の気分は高揚していた。十年來の聖杯戦争が今まさに始まるうとしている。今日はその参加条件である。サーヴァントの召喚を行う事になっていたのだ。」

「凜、聖杯はいずれ現れる。あれを手に入れるのが遠坂の義務であり避けて通れないみちだ。」

「それが父の最期の言葉・・・最後の最後である人は父親ではなく魔術師の師として言葉を残したのだ。ならば私も魔術師として生きよう。そして必ず聖杯を手に入れる。」

「守り手よ。」

呪文を唱え終える。

「よおおっし手ごたえは最高！！？これはこれ以上ないっていう最高のカードを引き当てた。」

しかし何も起こらない。

「ちよっと・・・なんでなにも起こらないのよ？」

凜は叫ぶ。しかし何も起こらない。凜は冷や汗を流し

「まさか・・・！失敗？儀式はかんぺきだったはず」ドガ

いきなり上の方から何かが落ちて来た音がする。

「！！なに！？居間の方から・・・？」

凜は急ぎ地下室の階段を上がっていく。

「ちよつと・・・ちよつと・・・？ええいもう！いったいぜんたい何だつてのよ！！」

凜がドアを蹴破るとそこには

天井が破れぐちゃぐちゃになった部屋に赤い服を着た白髪の男が座っている。

「・・・やれやれ。こんな乱暴な召喚は初めてだ。これはまたとんでもないマスターに引き当てられたものだな」

凜はそれを見て

「・・・はっ」と言うしか出来なかった。

10話 赤と赤(1) (後書き)

次回も凜とアーチャーの話の続きです。

11話 赤と赤(2)

SIDE 遠坂凜

「落ち着け、私・・・あれは間違いなく。人間を超えた存在・・・サーヴァントよ？」

凜は目の前の男から感じる圧倒的な魔力に、そう判断する。

「やっぱりサーヴァントにするならセイバーよね？その魅力はなんといつても接近戦での攻撃力の高さ、そして私は遠距離からの魔術で援護するってワケ・・・これって最強の組み合わせでしょ？」

凜はそんな事を考えながら目の前の男を見て

「・・・で？あんたが私のサーヴァントってことで間違いない。」

凜は目の前の男に確認する。

「・・・それはこちらが聞きたいな？みたところ魔術師のようだが本当に私のマスターなのかね？」

それを聞き凜は服の腕の部分をめくりマスターの証である令呪を見せる。

「令呪よ・・・文句ある？」

それを見ても男は

「ふむ、令呪だな・・・しかし私が言いたつたのはそういうことではない・・・君が本当に忠誠を誓うだけの価値のある人物なのかということだ？まあ、あんな召喚をする辺り魔術師としては二流だとわかるが・・・」

「な・・・？」何よ何よ？なんなのよコイツ！？苦労して召喚したと思ったら〜

目の前の男の言いように、だんだん凜の怒りがこみ上げてくる。

「まあそのように令呪を見せびらかされたのでは仕方がない。君がマスターだというのは認めよう」

しびしびといった感じで目の前の男は凜に言う。凜の怒りはどんどん上がる。

目の前の男はさらに追い打ちをかけるように凜に言う。

「だが言っておくが戦いは全て私に任せてもらうからな・・・どうせ戦いの経験などないのだろう？素人に余計な口出しをされてはたまらないからな。」

男のセリフはどんどんヒートアップしていく。

「なに君は私に任して、家でおとなしくしていればいいさ。」

その言葉に凜の怒りはついに限界を超えた。

「あ・・・あつた来た。ちょっとあんた何様のつもりよ！！黙って聞いてりゃズケズケズケズケとっ！！そこまで言うならやってやるうじゃない！あんたは誰に従うべきかってこと教えてやるは」

その言葉を最後に凜は令呪を出す。それを見て男は慌てた様子で

「!!まっ待て!まさか令呪を使う気か!?馬鹿がやめる!!わかっているのか令呪がどれだけ重要なものか・・・!」

「うるさい・・・うるさい・・・うるさい!!」

しかし凜は止まらない。そして、

「大人しく私の言うことを聞け!!!」

凜の叫びが家じゅうに響く。

「ふむ・・・まったく予想外だったな」

「うるさいわね。私だってこんな無駄なことに令呪を使うなんて思っただけよ。」

男の指摘に凜は先程の行動について反省する。

「いや案外無駄でも無かったかも知れん。そもそも令呪とはサーヴァントの行動を強制するものであり、その命令は聖杯からのバックアップを受けて実行される。」

「何?いきなりそれくらい知ってるわよ。」

「だからこそ令呪を使えばサーヴァントは実力以上の能力を発揮できる。」

「なによ！いきなり・・・それだけ重要なものだから使う時は慎重
にって言っんでしょ。」

いきなり話題を変えて来たことに戸惑いながら凜は答える。

「その通り、だがそれにはいくつかの条件がある。それは命令の内
容と実行する期間が明確であることというものだ。この条件を満た
さない命令はほとんど効果が無くなってしまふ。先程の私に逆らう
なという命令など最たるものだな。だが私は今君の言葉に強い強制
力を感じている。それはもし逆らえばその後の行動にペナルティが
科されてしまふほどのものだ。」

「だから何だつてのよ?」

凜は男の言いたいことが分からずイライラしながら言いかえす。

「これはつまり君の魔術師としての力がそれほど強いということだ。
」

男の以外的な言葉に凜は惚けながら

「それじゃ認めるのね?私があんたのマスターだつてこと」

「ああ前言を撤回しよう。君はマスターとして十分な資質と実力を
持っているようだ。故に君を私のマスターとして認め、その指示に
従おう。」

男は微笑みながら凜をマスターとして認めた。

「オーケー、それじゃあ最初にあなたのクラスを教えてください。」

「うむ、どうやら私はアーチャーに割り振られたようだ。」

それを聞き凜は

「うそーあなたアーチャーなの。あれだけ触媒を使ってセイバーを呼び出せないなんて？」

あるうことか。アーチャーの前でそのようなことを言い始める。

「ま・・・まで・・・君はセイバーを狙ってたのか？」

「そうよ。でも気にしないで、あなたの所為じゃないから。これはセイバーを呼び出せなかった私の失敗だから。」

それを聞いてアーチャーは拗ねながら

「・・・悪かったな。セイバーでなくて・・・今の発言必ず後悔させてやる。セイバーなどより私の方が役に立つ事を思い知らせてやるうではないか。」

「なにこいつひよつとして拗ねてんの？へえ〜かわいいところあるじゃない。」

「ええ、期待してるはアーチャー。」

そして、凜は次の質問をアーチャーにする。

「それで、あなたの真名は何？」

それを聞いてアーチャーはきまずそうに答える。

「それは思い出せない。」

「ふざけんじやないわよ・・・また私をからかうつもり。それならまた・・・」

凜が令呪を出す姿を見てアーチャーは慌てて理由を話す。

「ま・・・待て。召喚時の衝撃が強すぎて記憶に混乱が見られる。

1つ言っがこれは君の召喚のツケでもあるのだぞ。」

「うっ」

凜は理由を言われ、自分の召喚の失敗が原因で記憶がないといわれ言葉に詰まる。

「何、気にする事はない。最強のマスターである君が呼び出したんだ。その私が最強でないはずがないだろう。」

「えっありがとう。アーチャー」

アーチャーの言葉に凜は顔を赤くしながら礼を言う。

「さてとアーチャーあなたに最初の仕事を命令するわ。」

「ああ、敵を探しに外に出るのかね？まかせろマスター私は何をすればいい？」

凜は箒とハタキを持って来てアーチャーに渡し

「部屋の掃除をお願い。あんたが汚したんだから責任を持って綺麗にしてよね。」

「待て。君はサーヴァントを何だと思っている？もとわと言えば君の責任だぞ！」

「使い魔でしょ？ちよつと生意気で扱いに困るけど・・・私はあんたを召喚して疲れたからもう寝るわ。・・・ちゃんと綺麗にしといてね」

それを聞いてアーチャーは目を瞑り

「了解した。地獄に墮ちろマスター。」

それを聞いても振り向かず凜は自分の寝室に向かった。

仕方なく、アーチャーはどこから始めようかと考えながらこれからの事を考えていた。

「どうやら、私は召喚されたようだな。これで目的が果たせる。」

アーチャーはそのような事を考えながら夜は更けていくのであった。

11話 赤と赤(2) (後書き)

すみません。まだ続きそうです。

12話 赤と赤(3) (前書き)

アーチャーと凜の話は今回で終わりの予定？

12話 赤と赤(3)

SIDE 遠坂凜

「ふあゝ・・・そういえば昨日サーヴァントを召喚したんだった。」
「ちょっとあてはハズレたけど仕方がない。」

凜はそう思いながら下に降りる。しかし、フラフラして足取りがおぼつかない。

実をいうと凜は非常に朝が弱いのである。
しかし、凜は居間を見て眠気が一気に吹き飛んだ。

「ウソ！あいつ一晩で掃除したっていうの？」

「やれやれ、ようやく起きたか。マスター」

キッチンからアーチャーの声が聞こえた。

「やるじゃない。アーチャー見直したわ！」

ふっとアーチャーは笑う。

「マスター、食事の用意も出来ている。」
凜に食事を取るように促す。

「あつ、私、朝は食事を取らないのに！」

凜の言葉にアーチャーは猛反発する。

「朝食は朝のもっとも重要な一部だぞ？」

「わかったわよ。食べればいいんでしょ。まったく！」

凜はアーチャーの食事を取りながらアーチャーの入れた紅茶を飲む。

「おいしい。本当にこいつ何者なの？」

それを見てアーチャーはニヤニヤしながら凜を見る。

「何よ。アーチャー？」

「何、感想を聞こうと思ったが・・・その必要は無さそうだ。」

それを聞いて凜はアーチャーを見ながら

「あのね。アーチャー・・・私は別に茶坊主を呼んだわけじゃないわ。」

「ああ、わかっている。私は戦うために君に呼び出された。」

アーチャーは答える。そして思い出したように凜に話しかける。

「マスターそういえば・・・まだ君の名前を聞いていないのだが？」

それを聞いて凜は

「やば・・・こいついい奴だ。」

本来マスターとサーヴァントは聖杯を手に入れるために利用し合う関係だ。その為、名前など余り意味は無いのだが。それでもアーチ

ヤーは凜に名前を聞いた。それはつまり共に聖杯戦争を戦おうという意思表示である。

「私の名前は遠坂凜、好きに呼んでかまわないわ。」

「なら・・・リンと呼ばせと貰う。」

「うっ」

アーチャーは微笑みながら凜を見る。そんな不意打ちに凜は顔を赤くした。

「何・・・学校に行くだと!!」

アーチャーは凜に問うと、

「あのねアーチャー・・・私はマスターになったからといって普段の生活を変える積りはないわ。」

凜の言葉を聞いて

「ふむ・・・学校は大丈夫なのかね？」

「大丈夫よ!!アーチャー。学校は私がちゃんとチェックしてるから。」

「何事も例外がある。君の生活習慣をもう止める気はないが気を付けたまえ。」

「わかったわ。アーチャー」

家を出て学校に向かう。

「ウソ!!」

（これは結界）

「どうやら学校にマスターがいるようだな？」

「ええ！放課後調べましょう」

夜 学校

凜は屋上にある結界の一部を発見する。

「リン、これで結界を破壊する事は可能なのか？」

「無理ね。これは私の手に負える代物ではないわ。せいぜい結界の発動を遅らせる程度ね」

今、学校に張られてる結界は発動すれば人を溶かし、自分の力に変える危険な代物である。

凜が結界の一部を破壊しようとする

「なんだよ？消しまうのか。もったいない」

青い男が屋上の塀から凜を見ている。

「サーヴァント？」

「ククク・・・ここらで怪しい気配がしたんで見に来てみたらサーヴァントがいるんでびっくりしたぜ。」

青い男は槍を出す。

「槍使いランサーのサーヴァントね？」

「ああ・・・サーヴァント同士が出会ったんだ。ただじゃかえれないな」

ランサーは笑いながら凜に襲い掛かる。

凜はフェンスまで走り屋上から飛び降りる。

「アーチャー！着地任せた・・・ッ！！」

地面に激突する瞬間アーチャーが受け止める。

「逃すか」

ランサーが槍で襲い掛かるがアーチャーは短剣で受け止める。

「テメエ・・・ナニもんだ。セイバーって感じじゃないよな？」

「それはクラスのことを聞いているのか？ならばこの身はアーチャーだと答えよう。」

「ふざけるな！剣を手にしたアーチャーなど聞いた事はない」

「なに・・・これでなかなか捨てたものでもないぞ？ランサーよ」

ランサーに言い凜に背中を向ける。

アーチャーは律義に凜の命令を待つ。凜はアーチャーに

「いいわ。アーチャーあなたの力ここで見せて」

アーチャーはその言葉をききランサーに仕掛けた。

アーチャーとランサーの戦いを見て凜は思う。

「その時、私はただ立ち尽くすのみだった。弓兵であるにもかかわらず双剣でランサーと対等に渡り合うアーチャー・・・そんな彼の予想外の強さに驚かされたのもあるが・・・なににより私は英雄たちによる人知を超えた死闘に思わず目を奪われた。そうたとえば、誰かがそこに居合わせる可能性すら忘れてしまったのだ。魔術師同士の戦いを第三者に見られた場合、口封じのために抹殺するのが魔術師の鉄則。だからこそ私は十分に注意しなくてはならなかった。しかし・・・そんな彼もせいばーのマスターになった。そして仮面ライダーという、イレギュラーの存在・・・」

S I D E O U T

場面は衛宮邸の前に戻り

「アーチャー、セイバーにやられた傷はどう？」

「問題無い。今しばらく休めば動けるようになるだろう」

「しっかりとしてよ。私を後悔させるんでしょ？」

「無論だ。」

凜の言葉をアーチャーはあたりめえという表情で返す。

凜は胸元からペンダントを出し

「これ、拾って来てくれてありがとう」

「気にするな。その首飾りは君にしか似合わない。」

歯の浮くようなことを凜にむけて言う。凜は顔がたちまち赤くなる。どうやら、こつという不意打ちには弱いようだ。しかし、凜は次第に落ち着いて

「よし……私達二人で勝ちにいくわよ。アーチャー」

「了解だ。マスター」

二人はこれからの事を考えながら家に帰るのだった。

S I D E ? ? ? ?

一人の男が高速でバイクを運転しながら

「ここが、冬木市か？」

表札を見る。

「まさか・・・本郷から連絡があった時には驚いたぜ！俺が追っている一件の場所もここだからな。とりあえず風見に合流するか。」

彼はバイクを走らせ呟くのだった。

12話 赤と赤(3) (後書き)

一人目は彼!?

13話 日常

凜が去った後、三人は居間に集まっていた。
士朗は風見に質問する。

「風見さんはこれからどうするんですか？」

「とりあえずこの町に滞在する予定だ。」

「なら・・・その間家に居ませんか。この通り広い家なんで部屋は
沢山あるんで」

士朗は風見に提案する。

「しかしそれでは衛宮君に迷惑が？」

「俺なら構いませんから。」

「それなら世話になる。」

士朗の提案を受け入れる。

士朗はセイバーを見てある事に気が付く。

「セイバーそういうえばその服どうしたんだ？」

「凜に戴きました。このような服を着るのは初めてですが似合いま
すか？シロウ」

セイバーが微笑みながら士朗を見ると顔を赤くしながら視線を逸ら

す。

「今のは不意打ちだった。急にあんな顔をするなんて……ただでさえセイバーは綺麗な娘なんだ。あんな可愛らし服を着られちゃあ……どうしたって女の子だって意識してしまう。」

そんな士朗の考えを知ってか知らずか訳が分からず顔を傾けるセイバー……風見はそんな士朗を見て

「ふっ……若いな衛宮君」

士朗は風見の言葉を聞いて慌てながら

「そ……そういえば昨日窓ガラスは割れたはずなんですけどどうしたんですか？」

風見に窓ガラスの件を聞き話題を変える。

「ああ……それなら昨晚凜ちゃんが寒いからと言い魔術で直した。凜ちゃんはガラスの扱いは魔術の基本と言っていたが魔術というのはあんなことが出来るのか？」

風見は士朗に聞くと、士朗は初めてしつたという趣で話し始める。

「すみません。俺は魔術の基本とか余り分らないんです。子供の頃……魔術師だった親父に頼み込んで弟子入りして、なんとか強化の魔術だけ教えてもらったんです。それだつてまだまだ失敗続きで遠坂の言う通り俺は半人前なんです。」

士朗は自分の事を風見に話……セイバーに視線を向け

「悪いなセイバーこんなのがマスターで」

セイバーに言うと、セイバーは士郎を見据え士郎の言葉を否定する。

「シロウ・・・例えあなたがどんな魔術師であろうと私が剣に誓ったマスターです。それに不満を抱くなどありません。それにただひとつの魔術といえ突き詰めれば大きな助けになるでしょう。」

「そうか・・・そうだよな。すまないセイバー弱気な事言って。」

士郎はセイバーに謝る。

そしてセイバーは話題を変える。

「マスターすみませんが貴方には真名を話さずにおきたい。シロウは魔術師としてまだ未熟・・・魔術に対する精神防御もままならないでしょう。もし敵の術に掛かり秘密をあらいざらい吐かれると私の能力と弱点が知られる恐れがあるので」

「わかった。俺もセイバーの意見に賛成だ。」

士郎はセイバーの提案を受け入れる。

「それともう一つ・・・実を言うとシロウから本来ある筈の魔力の供給ラインが繋がっていないようです。サーヴァントはマスターからの魔力供給によりこの世での存在を保ちます。しかし私達の間にはそれがありません。」

「えっ……ちょっと待ってセイバーそれじゃあお前このままじゃ」

士郎が驚き慌てながらセイバーに問うと。

「はい。自らの体を維持できずしようめつしてしまつてしょう。」

「ば……馬鹿何でそんな大事な事を？」

士郎はセイバーに怒りをぶつける。そんな二人を見かねて風見は士郎を止めながらセイバーに話した。

「落ち着け！衛宮君……セイバーがそう言うからには何か考えがあるんだろ？」

「はい。風見……今の私には十分な魔力があるので、聖杯戦争中は現界出来るでしょう。それに魔力の消費を抑えるため普段は魔力の温存に努めるつもりです。」

セイバーが自分の考えを士郎に伝えると士郎は分かったと言いセイバーの寝る離れの客間に案内しようとするが場所を聞きセイバーが猛反発した。

「ちょ！ちょっと待って下さいシロウ！マスターの警護もサーヴァントの務め、シロウと同室でないと困ります。」

「だめだ……セイバーは女の子なんだから。同室なんて絶対に駄目だ。」

普通男なら喜びそうなセイバーのセリフを聞いても士郎は反対した。それでもセイバーは諦めない。そんなセイバーを見て士郎は風見に

視線で助けを求めた。風見も土朗の視線に応えセイバーを説得する。

「セイバー別に同室じゃなくても隣の部屋ならすぐに対処できるだろ?」

「しかし、寝ている時が一番狙われるんです。現に完全に気配を断つサーヴァントもいるのですから。」

風見は説得するがそれでもセイバーは譲らない。

その時、ぴんぽんと家に鳴り響く。どうやら来客のようだ。土朗はそれを聞いて

「まずい、もう・・・こんな時間か?」

どうやら誰が来ているかわかっているようだ。

「土朗、夕ご飯食べに来たよ」

藤村大河が言うが土朗は来ない。

「土朗の奴どうしたんだろう? まあいいわ。桜ちゃんあがりましょう。」

「藤村先生・・・勝手に上がっていいんでしょうか?」

「へいき・・・へいき」

遠慮なく家にかかる大河に桜と呼ばれた女の子も続いて上がって行った。

そこには風見さんとセイバーの事をどう説明しようか悩んでいる士朗と、そんな士朗を見て不思議そうな顔を浮かべる風見とセイバーの姿がある。

「あら士朗、お客さん？」

大河は一言士朗に聞く。

「ちょっとどついう事よ。風見さんはともかく。こんな綺麗な女の子と一緒に暮らすなんて？」

「落ち着け。藤ねえ。これには深い訳が」

士朗は大河に説明しようとするが

「何よ。深い訳って」

取りつく暇がないとはこの事だ。そんな状況に呆れて風見は士朗に助け船を出す。

士朗の代わりに大河にウソの理由を説明するのだった。

「そうなの。キリツグさんの知り合いでここに訪ねて来たのね。」

「はい。俺と彼女は昔キリツグさんに世話になったので挨拶に思っただですが！」

「あっ」

「すみません。余計な事を言って」

風見は死んでいるキリツグの事を言い。彼女が昔の事を思い出し悲しそうな顔をしたので謝ったのである。

「気にしないで、風見さん……あとその貴女確か名前は」

「セイバーです。」

「そうそう。セイバーちゃんね。いいわこの藤村大河が、セイバーちゃんと風見さんが士郎の家に住むことを認めるわ。いいわね？桜ちゃん。」

大河は二人が衛宮邸に住むことを了承し隣の女の子に確認を取る。

「藤村先生がそう言うなら。」

彼女も認めた。

彼女の名前は間桐桜。去年まで士郎が滞在していた部の後輩である。ある出来事をきっかけに士郎の家に手伝いに来るようになった。

士郎にとって桜と大河はかけがえない家族である。

士郎と桜は夕食を作り五人は食事をとり始める。

「うまいな！これは」

「はい。私もこのようなおいしい食事をとったのは初めてです。」

風見とセイバーは士朗と桜の作った料理をウマいと評価する。

「ありがとうございます。まだまだおかわりは沢山あるのでどんどん食べて下さい。」

桜は照れながら二人に言う。

「じゃあ、おかわり！」

「藤ねえは食べすぎだ。」

桜の言葉を聞いて大河が即座におかわりをするが士朗が止める。大河はすでに何杯もおかわりをしているからだ。

そんな楽しい食事も終わり

大河と桜は家に帰る為、玄関にむかう。

そんな二人を見送る為三人も玄関に向かった。

「じゃあ・・・士朗。桜ちゃんは私が責任を持って送るから。」

「ああ、藤ねえも車に気をつけるよ。」

「じゃあ、先輩失礼します。」

大河と桜は帰る挨拶をしてると大河は風見に視線を向け

「風見さん・・・士朗のことお願いします・・・特にセイバーちゃんの間違いが起こらないように」

「ふ・・・藤ねえ。何を言うんだ。」

大河のセリフを士朗は必死に止めようとする。

「わかりました。しっかり見張っておきます。」

「ちよつと！風見さんまで」

「お願いね。風見さん」

どうやら大河の中で士朗への色恋沙汰の信頼性はないようだ！
言いたいことを言うと大河は桜を連れて帰っていく。

「ふつ。優しいお姉さんじゃないか・」

士朗はてれながら

「はい。俺の大切な家族です。」

答える。セイバーは士朗に質問する。

「シロウ、彼女たちは聖杯戦争には無関係なのですね」

「そうさ、みんな平和に暮らしてる。だからそれを脅かす奴は許し
ちやいけないんだ。」

士朗は改めて自分の気持ちをセイバーに伝える。

「それが・・・シロウの聖杯戦争に赴く理由でしたね。」

「ああ」

そんな士朗にセイバーは続けて話す。

「士朗・・・あなた昼に言いましたよね。聖杯に興味がない。だから自分から仕掛けないとそのことは是非は今も問いませんが。それではシロウあなたはこの戦いで何を求めるのでしょうか？」

「えっ」

士朗は予想だにしないセイバーの質問に言葉が詰まる。

「これだけ過酷な戦いに身を投じるのです。勝者はそれなりの見返りを得るべきだ。それが世の理です。私達サーヴァントも聖杯を手に入れるため戦いに身を投じるのです。・・・うまくいえませんが・・・それではいつか貴方はきっと後悔する。」

それだけ告げるとセイバーは自分に与えられた部屋に向かった。

風見も士朗も部屋に向かう。

部屋に戻り士朗はセイバーに言われた事を考えながらランサーに貰われた自分の制服を見る。

そのポケットの中からペンダントが落ちて来る。

「これは捨てるとして・・・いったいこれは誰の何だ？」

ペンダントの事を考えながらセイバーに言われた事を思い出した。

「俺は間違ってたんじゃない。これから何があっても後悔なんてするものか！」

こうして夜は更けていくのだった。

S I D E ？？？

「やれやれ・・・ついに夜になったか。風見に連絡しようにも携帯に電源は無いし道には迷うわ・・・はあくまったく運がついてないな。」

男の受難が続く。

13話 日常（後書き）

次こそ男の登場

14話 やってきた男その名は？(前書き)

ついに・・・登場！

14話 やってきた男その名は？

「先輩起きてください。」

「うん」

女の子の声が聞こえ土朗は目を覚ました。

「おはようございます先輩」

「あ・・・ああおはよう桜」

どうやら女の子は桜のようだ。

「またここで寝てたんですか？藤村先生に怒られますよ？」

「魔術の鍛錬をされていてそのまま寝むちゃったみたいだな？」

「ああ・・・またガラクタをいじっていて寝たらしい？すぐに着替える。桜は朝練だろ？すぐに朝ごはんの準備をするよ」

「あ・・・！じゃあ私も手伝いますね」

土朗はあの後・・・土倉に移動して魔術の鍛錬をしてそのまま寝むつたらしい。

土朗はキリツグから魔術を習ってから魔術の鍛錬を一日も怠った事はない。

それは土朗がいつか誰かを救う時・・・必ず役に立つと思ったからだ。

衛宮邸の居間にて

五人は士朗と桜が作った朝ご飯を食べている。どうやら大河も朝ごはんを食べに士朗の家に来たようだ。TVから思わぬニュースが流れる。

「昨晚未明冬木市住宅街で……〇〇さんの一家が全員遺体で発見されました。当局の調べによると犯行に用いられたのは巨大な刃物のようなものであり……現在捜査本部により犯人の特定を急いでいるとの……」

ニュースを聞き風見と士朗が眉をしかめる。

「これは……聖杯戦争と何か関係があるのか？……今日からも調べた方が良さそうだし」

風見は犯人が聖杯戦争に関係あると思い、すぐに調査する事にした。

「最近物騒よね……。そうそう士朗、桜ちゃん。今日から放課後あんまり居残りしちゃう駄目よ。」

「え？どうしてです」

どういう意味なのか。桜は大河に尋ねる。

「ほら……今のニュースの通り。最近こういう事件が多いでしょ？だから学校側から部活動短縮とグループの登下校などしようって訳？だから士朗……生徒会の手伝いとかもいいけどちゃんと早く帰るのよ。」

「わかったよ。藤ねえ」

士朗は大河の言葉に了解する。

そして朝御飯も食べ終わり大河と桜は先に学校へと行った。

士朗も遅れて学校へと行こうがするとセイバーに呼び止められる。

「何だよ？セイバー」

士朗が聞くとセイバーは

「シロウ貴方が学校に行くという件ですがやはり私も付いて行った方が・・・」

心配そうに士朗に言う。

「大丈夫だよ。セイバー魔術師つてのは人前では目立ったことができないもんだろう。なんせ魔術協会がそれを禁じてるからな。曰く「人前で魔術を使用してはならない。」この禁を破ったら肅清されちまうって言うじゃないかマスターはみんな魔術師なんだろ？だから日中は大丈夫さ。」

「しかし、士朗・・・やはり心配です。」

士朗は魔術師の在り方をセイバーに説明するがそれでもセイバーは納得しない。

「大丈夫だってセイバー」

「はあくわかりました。シロウ」

セイバーはしぶしぶといった感じで納得する。そして土朗の手の甲の令呪を見て

「何かあれば迷わず令呪を使ってください。」

頷き土朗は玄関に出ると風見が出かけようとしているのか？バイクにエンジンをかけていた。

「風見さん、どこか出かけるんですか？」

「ああ、朝のニュースが気になって少し調べようと思ってな。」

「そうですね。なら俺も手伝います。」

土朗は風見の手伝いを申し出る。

「衛宮君・・・君は学生だろ。学業を疎かにしちゃ？いけない」

しかし風見は申し出を断り

「じゃあな衛宮君、道中気をつけてな。」

すぐさま、バイクに乗り家を出る。

そんな風見を見て土朗はしぶしぶ学校に向かった。

土朗が学校に着き昼休み、慎二が後ろから女の子を数人連れて土朗

に笑顔で話しかけて来た。

「やあ。衛宮・・・土曜日は弓道場の掃除ご苦労だったね。おかげで気持ちよく練習が出来るってみんな感謝してたよ。」

「ああ慎二。役に立てたなら良かったよ。」

そんな二人の会話を聞いて慎二が連れている女の子が慎二に向かって

「あゝいけないんだ！あの用事って間桐先輩が言われてたじゃないですか。」

笑顔で慎二に言う。実を言うと慎二と桜は兄弟なのである。

「いいんだよ。衛宮は元弓道部員だからこれくらい当然だよ。」

「ああ、俺も途中で部を抜けたのは悪かったと思ってるし、こんなことで良ければいつでも協力する。」

「ハハハ！そうだよ・・・そうだろう！」

それを聞いて慎二は高らかに笑い、後ろに連れている女の子に困った事があれば衛宮に頼めばいいと言っていると土朗が思い出したように慎二に言う。

「弓の手入れはちゃんとしているか？」

「なんだって？」

「慎二の射にはクセがあるから、あんまりひどくならない内に矯正

したほうがいいぞ?」

士郎が言うと慎二が連れている女の子がクスクス笑う。それに慎二は腹を立ち

「うるさいな!お前はもう部とは部外者だろ。今さら部の事に口出しすんじゃないよ。」

怒りながら慎二は去っていく。その様子を見ていたのか一成が士郎の前に歩いて来て説教を始める。

「衛宮・・・あの手の輩は放っておくと際限なくつけ上がるぞ?」

「はは考えすぎだよ一成。ああ見えてあいつはあんまり悪い奴じゃないんだ。確かにキツイ所はあるけど・・・あれはあれで慎二の味なんだよ!」

一成は呆れながら

「そう思っているのはお前だけだと思っがな」

士郎に言った。

そのころ衛宮邸

セイバーは士郎の作った昼食を見ながら考え事をしている様子だ。

「シロウは危うい。経験も技術も足りない。何よりマスターとして

の自覚が足りない。やはり心配だ。陰から様子を窺うくらいなら構うまい。く

立ち上がり士朗の居る学校へ向かうのだった。

放課後

士朗は席を立ちあがり家に帰ろうとすると偶然凜に会う。

凜は士朗を見て最初は驚いたがすぐに無表情になり士朗を睨みつける。

士朗はそんな凜の様子に気づかず昨日の礼を言う。

「呆れたわ。サーヴァントも連れずに一人でのこのこあるいてるなんて!」

「遠坂も知ってるだろ。セイバーは霊体化出来ないのを、それに魔術師は人目のある所じゃ仕掛けてこないんだろ? だから大丈夫さ。」

士朗は笑顔で凜に言うが

「じゃあ、聞くけどここに人目があるのかしら?」

士朗は周りを見渡し冷や汗を流しながら再度凜を見る。

「遠坂、お前まさか!?!」

「衛宮君、私昨日言ったわよね。今度あったら敵同士だって・・・あれだけ忠告したのに・・・。衛宮君あなたはここで消えなさい!」

凜の左腕が何やら光り始める。士朗はまずいと思い凜からおもいきり逃げる。そんな士朗を全力で凜は追いかけた。

「遠坂は本気だ！しかし俺は遠坂とは戦いたくない・・・俺はいたいどうすれば!??」

そんな事を考えながら逃げていると凜の左腕から黒い何かが襲ってくる。どうやらガントと呼ばれる魔術を使用したようだ。士朗はとっさに鞆に強化の魔術を使い盾にして防ぎ。教室の中に逃げる。

「鞆を盾に・・・これは強化!あいつ・・・随分とマイナーな魔術を使うのね」

鞆を見ている凜にアーチャーがいきなり霊体化を解き話しかける。

「何を手間取っている凜。やはり一度情がかかった相手は倒し難いか。それなら私が」

アーチャーが士朗のいる教室に行こうとするが凜が止める。

「下がってなさい。アーチャーこれは私がつけるべきケジメよ。」

それを聞いてアーチャーは霊体化し消える。

凜は士朗のいる教室に近づいて士朗に言う。

「衛宮君・・・今から貴方のいる。教室を私の魔術で爆発させるわ。だけど十秒の内に出てきたらあなたの令呪を無効にして記憶を書き換えるから・・・あなたの好きな方を選びなさい。」

凜は士朗に選択肢を与えた。

そのころ教室では

くどうすればいい。遠坂は本気のようにだし。それに遠坂の左腕・・・あれは魔術師の家に伝わるという魔術刻印に違いない。だから詠唱も無しに魔術を連発出来るんだろう。それに比べて俺は強化だけ。く考えている内に凜が士朗に教室に出るか。出ないか。十秒以内に考えろと言ってきた。しかも教室から出ない場合は教室を爆発させる

くええくい。考えている暇はない。く

士朗は身近にある机に強化の魔術を使用してそれを盾にするように隠れる。

「どうやら出て来る気は無さそうね。仕方ないわ」

凜の左腕にある魔術刻印が光始め。そして次の瞬間教室が爆発した。しかし、しばらくして煙の中から机を持った士朗が現れる。そして凜を見て机をもったまま身構える。凜は冷静に

「衛宮君・・・そんな物で私と戦う気？」

しかし・・・いきなり遠くから女の子の悲鳴が聞こえた。

それを聞いて士朗は悲鳴が聞こえた方向に走って行く。

「ちよつと!?!?・・・衛宮君」

凜も追う。

そして辿り着くと倒れている女の子を見ている士朗の姿がある。

「大丈夫だ。遠坂どうやら気を失っているらしい。」

士朗は大丈夫だというのが。凜は慌てて

「大丈夫じゃないわ!軽く精神力を吸われてる!」

「じゃあ、これはサーヴァントの仕業なのか?」

士朗は慌てて辺りを見渡す。しかし誰もいない。

「これ位なら私でも治せそうね。」

凜が女の子を治療しようとしている時。

「危ない!遠坂」

グサ・・・鎖の先に剣が付いている物が遠坂に飛んで来て士朗は腕を出し庇う。

「う・・・」

「ちよつと衛宮君?大丈夫?」

鎖の剣が刺さった土郎を見て凜は驚き慌てながら近づくが

「俺の事はいい。遠坂はその娘を見ていてくれ。」

土郎は断り。鎖がある方に向かい走る。

鎖の方を目指し走っていたが学校にある林の方に入るといつの間にか鎖は消えていた。

「どこにいるんだ？」

辺りを見渡すが誰もいない。

その時、土郎の体が浮き上がり途中で止まる。

「うわ〜」

悲痛の声を出す土郎。

「フッフ、まさか一人でのこのこ来るとは思いませんでした！」

両目に眼帯をした紫の髪をした美人が現れる。

「誰だっ!?!」

土郎が聞くと

「私の名前はライダーと言えば分りますか。」

その時消えていた筈の鎖が急に現れる。

「サーヴァント……！」

士朗は鎖を抜こうと思い切り引つ張るが抜けない。その様子を見てライダーは

「貴方は私のマスターと違って勇敢なんですね。ご褒美としてやさしく殺してあげます。」

杭にも似た鎖付きの剣を投げ付ける。

士朗はもう駄目だ……と思ったがその時……士朗に向かって
いる剣に石が当たり狙いが外れる。

それと同時に士朗は自分に付いていた剣を外した。そのまま落ちる
と思われた瞬間帽子を被った男が士朗を受け止める。

「大丈夫か？少年」

男は笑いながら士朗に聞く。

「あなた？誰ですか？」

そんな士朗の質問に男は答える。

「俺か……？俺はフリーカメラマン一文字隼人だよ。」

士朗を安心させるために一文字隼人と名乗った男はへへつと笑いながら自己紹介する。

その時、剣付きの鎖が一文字に襲い掛かる。

士朗が危ないと声を掛けようとした瞬間、一文字は振り向かず剣付

きの鎖を腕一本で受け止めた。にも関わらず

「やれやれ・・・これじゃあ・・・おちおち自己紹介も出来ないな。」

一文字は呑気に言う。そんな一文字にライダーは

「貴方・・・何者ですか？」

「俺か・・・さっき言ったとおり、ただのカメラマンさ。」

ふざけた感じでライダーに答える。

「ふざけないで下さい。ただのカメラマンがサーヴァントである。

この私の攻撃を振り向かず受け止めるのは不可能です。」

一文字のふざけた態度にライダーは怒り狂う。

「それに、貴方からはヒトの気配を余り感じませんか？ただの人間じゃありませんね。」

ライダーは一文字から無機質な物を感じ一文字に聞いた。

「そう言う。お前こそ噂のサーヴァント？まさかこんなに早く会えるとは思わなかったぜ！」

一文字の言葉を聞きライダーは眉を潜め

「私の事を知っているとは！やはり一般人じゃないみたいですね。まあいいでしょう。貴方が何者何て関係ありません。ここで彼共々消えて貰います。」

一文字と士朗にライダーの攻撃が襲う。

一文字は士朗に近づき手を取って木の陰に隠れる。

「少年、ここに隠れている」

「待って下さい。貴方はいったい？」

士朗は一文字に聞くが。一文字は背を向けたままライダーの前まで歩いて行きお腹からベルトの様な物を出す。それを見ていた士朗は驚く。

「まさか！！！あの人は風見さんと同じ……………！！！！！！？」

ライダーはそんな一文字を見て聞く。

「何のつもりです？」

それを一文字は不敵な笑みを浮かべながら

「確か…あなたの名前ライダーだったよな？俺にも似たような…
・もう一つの名前があるんだ。」

「どういう意味ですか??？」

一文字はやはり笑いながら答える。

「今から俺のもう一つの姿を見せてやる。」

その時一文字の顔に傷が浮かんできた。
一文字はその後ポーズを取り始める。

「へ〜ん〜し〜ントオ」

ジャンプし下りて来ると一文字の姿はバツタみたいな姿になっている。

「あなた・・・！本当に何者ですか？」

再度ライダーが聞く。

「正義仮面ライダー2号」

答えライダーに向かっていくのだった。

その様子を土朗は木の陰から見ている。

「やはり・・・あの人は風見さんと同じ仮面ライダーなのか！」

土朗が見守っている中

同じライダーの称号を持つ

仮面ライダー2号とライダーの戦いの火蓋は切っておとされるのであった。

14話 やってきた男その名は？(後書き)

2号対ライダー

次回 カの2号にご期待下さい

15話 力の2号

2号が力の2号の異名通り力強くライダーに向かいパンチを繰り出す。

「ライダーパンチ」

「くっ」

ライダーは機敏な動きで2号の攻撃を避ける。しかしライダーは内心2号の力に驚く。

「彼は本当に何者ですか？なぜ何の魔力も感じないのに・・・これほどの力を」

二人の動きは常軌を逸していた。

そんな2号とライダーの戦いを見ている士朗は

「何なんだ。あれは今何が起きているんだ？」

士朗の目には二人の動きを追う事が出来ない。それほどに二人のスピードは凄まじいのだ。

そんな中、2号はライダーを掴むことに成功する。そしてそのまま宙に飛びあがり

「ライダー返し」

そのまま背面から地面に叩きつけようとするが

「ぐっ」

落ちる瞬間ライダーが蹴りを放ち2号の攻撃を逃れる。そして二人は再び距離を取る。

「へへ・・・やるじゃねえか。」

そして2号はライダーに言う。

「なあ・・・止めにしないか？」

「!？」

2号の言葉にライダーは不審そうに2号を見て聞く。

「どづついつことですか？」

「へ・・・美人の譲さんを余り殴る趣味はないんでね！そっちが人を襲わないって言うんなら余り戦いたくないんでね」

2号はライダーに戦いを止めて人を襲わないでくれとライダーに頼む。しかしライダーは

「それは了承できません。マスターの指示には逆らえませんか」

2号の頼みを断り続けて剣付きの鎖を構えて

「それにマスターから邪魔をする存在は殺せと命令されてますので・・・」

四方八方2号に投げ付ける。

「へっこの世には救えねえ事が多すぎる。」

2号は苦い言葉を吐いて、大きくジャンプしてかわす。そのまま

「すまない。ライダーキック」

ライダーに懺悔しライダーキックを放つ。

一文字隼人という男は本来戦いを好まない優しい男である。その為にサーヴァントとはいえ女性に攻撃する事に対して非常に抵抗があるのである。だからこそライダーに戦いを止めるよう提案したのだ。

キックがライダーに直撃する瞬間・・・後ろに下がり衝撃を逃がすが

「グっ」衝撃を逃がしたはずなのに何て威力・・・この敵やはり手強い」

2号とライダーの戦いはまだ続く。

様子を見ていた土郎の後ろに凜が来た。

どうやら女子生徒の治療は終わったようだ。

凜は2号を見て驚き土郎に聞く。

「衛宮君、あれ・・・何？」

凜が2号を指差しながら聞くと士朗は答える。

「風見さんと同じ仮面ライダーらしい？」

「ちょっと仮面ライダーって何人いるのよ。それにあの戦闘力・・・
・仮面ライダーって尋常じゃないわ！！！」

凜は2号が仮面ライダーと知って驚いている。しかしそれも無理はなかった。何の魔力を持たない仮面ライダー達がサーヴァントと互角に戦っていること事態が正当な魔術師である凜には彼等の存在は軽くカルチャーショックな存在なのである。

その間にも2号とライダーの戦いはついに終わりを迎えようとしている。

「このままではまずいですね！」

ライダーは2号からの攻撃をかわしているのだが先程のジャンプ蹴りのダメージが大きいのか動きがだんだん鈍ってきている。

そしてついにライダーの動きが止まる。どうやら後ろの木に背中が当たったようだ。

そんなライダーに2号はまた懇願する。

「もう一度言う。2度と人を襲わないと約束してくれ」

しかしライダーはこれが答えだと言わんばかりにその場をジャンプして再び2号に剣付きの鎖を投げ付けた。

それを2号は横に跳んでその方向にある木を蹴り反転してライダー

に蹴りを入れようとする

「ライダー反転キック」

2号の蹴りが今にもライダーに直撃しようとしている。ライダーはよけようとするが空中なので動けない。

その時、ライダーの肩に矢が当たり、蹴りが逸れた。

「ム・・・間が悪かったか。」

どうやらアーチャーがライダーに向かい矢を射抜いたようだ。

「く・・・」

ライダーは苦悶の表情を浮かべる。そしてライダーは逃げるのか木から木へと飛び移る。そしてある程度離れた所で止まる。

「ここは引かせて貰います。さすがに2対1は分が悪いので」

離れて行くこうとするライダーに凜は質問する。

「一つ聞きたいんだけど。この学校に結界をはったのはあなたね？」

「鮮血神殿のことですね！」

ライダーの言葉を聞いて凜はライダーを睨みながら言う。

「貴方のマスターに伝えておいて結界を発動したら許さないって」

「伝えておきましょう」

凜の言葉を聞き今度こそライダーはその場から立ち去った。
その後士朗は凜を見て再び身構えるが

「別に今さら襲いかかったりはしないわよ。それより今はライダーが仕掛けている。結界が重要ね！」

凜は交戦の意思が無いとみると士朗は結界の事について聞く。

「遠坂、結界がどうか言ってたけどどついう事なんだ。」

士朗が聞くと凜は今学校に張られている結界の危険性を士朗に伝え同盟を申し出る。

「衛宮君・・・同盟を結びましょう？」

「えっ良いのか遠坂」

「ええ、まあライダー打倒までだけ」

「わかった。よろしく頼む。遠坂」

凜の同盟の話をして士朗は了承する。その時アーチャーが

「本気か！！凜考え直せ。こんな未熟者と同盟などしたら・・・プラスどころかマイナスだ。」

しかし凜は同盟の話が無かった事にする気は無いようだ。それでもアーチャーは反対するがしまいには凜がアーチャーに令呪をチラつかせそれを見てアーチャーはしぶしぶ同盟を認めた。

そして同盟の話が終わり凜は一文字の方を見る。どうやらいつの間にか変身を解いてたようだ。

「さてと・・・貴方仮面ライダーでいいわよね」

それを聞いて一文字は自分の正体がばれたにも関わらず

「さあどうでしょう」

両手を返しふざけながら言う。そんな一文字の様子に切れたのか凜は吠える。

「証拠は上がってるのよ。現にそこにいる衛宮君が貴方の変身するところを見てたんだから」

それを聞いて一文字はふざけるのを止めて両手上げてまいったのポーズをしながら認めた。

「ああ・・・俺は一文字隼人・・・またの名を仮面ライダー2号」

それを聞いて土朗は

「やっぱり、貴方も風見さんと同じ仮面ライダーだったんですね。」

言うが・・・一文字はそれを聞いて驚き慌てながら土朗に聞いた。

「・・・少年。風見の事知ってるのか!？」

「ええ・・・今家に住んでいます。」

「それなら君の家に案内してくれ。とりあえず風見と合流したい。」

「わ・・・わかりました。」

一文字が士朗に迫り士朗の家に案内してくれと頼む。士朗は一文字の慌て様に驚きながら了承した。その時セイバーが来る。

「シロウ大丈夫でしたか？」

「セイバー！どうしてここに？」

「シロウの異常を察知したので・・・ところでその人は誰ですか？」

「ええ」とこの人は

言葉に詰まる士朗の代わりに一文字が答える。

「俺はフリーカメラマン一文字隼人だよ。」

その後士朗は学校での出来事やライダーの結界や凜との同盟・・・そして一文字隼人が風見と同じ仮面ライダーであることをセイバーに伝え、一文字と軽く自己紹介をしてから家に帰ることにした。

「じゃあ、衛宮君、話は後で」

「わかった遠坂」

凜は士朗たちに別れを言い家に帰る。

「じゃあ一文字さん俺の家にあんないします。」

「よろしく頼むよ衛宮君。それとそんな堅苦しいのは抜きにしても
つとフレンドリーにいこうぜ。」

そう一文字は士朗に言うが・・・さすがに士朗は自分が目指す正義
の味方である彼にそんな態度で接する事も出来る筈がなく。
一文字はブータレながら士朗の家に向かうのだった。

15話 力の2号（後書き）

次回は調査に行った風見の話

「次回・・・謎の敵」にご期待下さい。

16話 謎の敵（前書き）

風見夕々

16話 謎の敵

SIDE 風見志郎

風見はニュースに流れていた・・・殺された被害者の家の前まで来ていた。

「ここが、被害者の家か。」しかし警察の数が多いな

さすがに事件現場なので警察が周りに配置されている。

風見はそれを見てどうしようか考えていると。後ろから何かの気配を感じる。

「誰かに見られてるな！もしかや聖杯戦争の関係者か？」

改造人間である風見は普通の人間なら気付かない・・・人の視線を感じているようだ。

すぐさま風見はその場を離れ視線を感じる方角へバイクを走らせ向かう。

そして辿り着いた場所はどうやら廃工場らしい。

「ここから視線を感じた。視線の本人はどこにいる？」

風見は辺りを見渡すが誰もいない。

・・・その時！？手榴弾の様な物が風見に目掛けて飛んできた。

「あっ」

すぐさま風見は横に転がり回避する。

「っち……。失敗したか。ここに誘き出し始末しようとしたんだが」

声のする方に風見は振り向き

「誰だ！」

聞くと何とそこからシザースの叫びと共に昔倒したはずのハサミジャガーが現れる。

「久しぶりだな。風見志郎」

「きいさ〜ま〜どうしてここに！以前俺が倒したはずじゃ？」

風見はハサミジャガーを見て怒りながら殺意の視線を向ける。
なぜなら風見はハサミジャガーに自分の家族を皆殺されたからだ。
つまりハサミジャガーは風見が仮面ライダーになる原因を作ったと
言ってもいい。

そんな風見の気持ちを知ってか知らずか笑いながら風見の疑問に答える。

「あるお方の力に寄り……。俺は甦った。以前よりパワーアップしてな。もはや貴様の様な旧型など俺の相手ではない」

その言葉を聞いて風見は

「その減らず口黙らしてやる。変身ブイスリヤー」

変身してV3にと姿を変える。

そんなV3にハサミジャガーは余裕の態度を変えぬままV3に向かい言う。

「今回戦うのは俺では無い。」

やる気まんまんV3に向かい言うが

「どついう事だ。逃げるつもりか？」

ハサミジャガーが逃げるつもりだと思い逃がさないようにといつでも攻撃できるよう構える。

「違う。貴様にはあのお方により完成した。怪人のプロトタイプと戦って貰う。」

そしてハサミジャガーがある方向を指さすと戦闘員がいる。

V3はただの戦闘員が俺の相手をするのかと不審に思いながら戦闘員を見てみると・・・いきなり戦闘員が苦しみだし筋肉が膨れ上がる。それに伴い威圧感が一気に膨れ上がった。

「じ・・・これは？」

V3が戦闘員の変わりように驚いているとハサミジャガーが説明する。

「これこそが・・・新たに開発したナノマシンの力だ」

「ナノマシン？」

V3がハサミジャガーから出て来る単語に疑問を抱く。
ハサミジャガーの話は続く。

「そう・・・あのお方により作り出されたナノマシン・・・その効力はナノマシンを投入されれば普通の人間ですら動体視力、力、スピード・・・色々な面において五倍の力を引き出されることが出来る。つまり・・・これが完成すればただの人間を我々の兵にすることが可能なのだ。その名もベルセルクそれがこのナノマシンの名前、いずれ人間すべてを我等の手下にしてくれる。」

ハサミジャガーから語られる恐るべき計画にV3は

「そんな計画など我々仮面ライダーが打ち砕く」

あのお方と戦う意思を固める。

「そんな強気な態度を取れるのも今だけだ。行けベルセルク。V3を弄り殺しにしろ。」

があと言う叫びと共にV3に迫る。どうやら・・・その名の通り理性は無いようだ。

ベルセルクがパンチを出す。V3は普通にガードするが何とベルセルクはガードごとV3を吹き飛ばした。

「ぐう」なんて威力だ！一昨日戦ったバーサーカーに勝るともおとらない。」

V3はベルセルクの予想外の攻撃力に悲痛の声を上げる。それを見

てハサミジャガーは笑いながら

「ハハハ、V3貴様の最後だ」

勝利を確信する。

・・・しかし再びベルセルクは攻撃を仕掛けるが、V3は今度は攻撃を受けようとせずにかわして攻撃を仕掛ける。そんなV3の攻撃を気にせず攻撃するが当たらない。どんどんベルセルクにダメージが蓄積されている。それを見てハサミジャガーは慌てながら

「どういう事だ。なぜ攻撃が当たらない。」

そんなハサミジャガーの叫びにV3はベルセルクに攻撃を仕掛けながら答える。

「動きが直線的だ。いくら力やスピードが速かるうが・・・この程度なら私の敵ではない。」

そう告げるとV3は再び戦いに集中する。

ベルセルクはV3の攻撃を受け続けついに膝を突く。それをV3はV3二十六の秘密の一つスクリュー・キックを使い止めを刺そうとジャンプする。そのままV3はスクリュー状に回転してキックを放つ。

「V3スクリュー・キーク!!」

それを受け・・・ベルセルクは爆発した。

それを見届けてV3はハサミジャガーの方を向き言う。

「次は貴様の番だ。」

「所詮はまだプロトタイプか？調子に乗るなよV3・・・今度は俺が相手だ。」

シザースの叫びと共に飛び上りV3に攻撃を仕掛けるが

「確かに以前よりパワーアップしているが攻撃のパターンが以前と同じだ。」

ハサミジャガーの攻撃をかわして、そのまま腹に蹴りを入れる。

ハサミジャガーは数メートル吹き飛んでシザースと叫び立ち上がるうとする。

V3はハサミジャガーが立ち上がる前に

「V3反転キーク」

それを受けるとさすがに致命的なのかハサミジャガーの体から火花が出ている。

今にも爆発しそうなハサミジャガーが最後の力を使いV3に言う。

「俺を斃した所であるお方の計画に支障はない。V3・・・貴様ら仮面ライダーに勝ち目はこれぼっちも残されていないのだ。」

ハハハと笑うハサミジャガー・・・だが次の瞬間倒れ爆発した。それを見届け変身を解き風見は一人呟く。

「あのお方とはいったい・・・？聖杯戦争と何か関係があるのか？」

新たなる敵の登場に謎がまた一つ増えるのだった。

V3二十六の秘密

スクリュー・キック

空中で体をスクリュー状に回転し敵にキックする技

16話 謎の敵（後書き）

すいません。新たなる敵の組織の名前が浮かび上がりません。何かいいアイデアがあれば教えてください。

17話 その名はデスシヨッカー（前書き）

スイマセン。使わせて貰いました。

17話 その名はデスシヨッカー

夜8時 衛宮邸前

風見はあの後、聖杯戦争に関する情報や・・・ハサミジャガー達が居た周りに怪しい奴が居ないか探ったが何の情報も得られない。風見は今日はもう情報を得られないと断念し衛宮邸に帰る事にしたのである。

風見が衛宮邸に入りバイクを止めようとすると思覚えのあるバイクがある。

「あれは？サイクロン！」とどうしてサイクロンがここに・・・まさか本郷先輩か一文字先輩が来ているのか？」

風見は疑問を抱く。まだ本郷に連絡して二日も経たないうちに応援に来るのは早いと感じたからである。

風見は疑問を抱いたまま衛宮の家に入り居間に行くと・・・！！そこには

「もう一文字さんって最高。」

「いやいや俺も藤村さんの様な美しい女性に出会ったのは初めてですよ。」

大河と一文字は二人酒を飲んでいて凄くテンションが高い。そんな二人の様子を呆然としながらセイバーと桜は見ている。

「しろっつ・・・もう一杯」

「藤ねえ・・・もう止めとけ。飲みすぎだぞ」

もうかなり飲んでいるのであろう。大河は呂律が回っていない。そんな大河を止めようと土朗も必至だ。それを見て一文字は

「まあまあ衛宮君。こんなに盛り上がっているんだからさ。硬い事言いつこなして。良かったら君も飲んでみるかい？」

何と一文字は未成年である土朗に酒を勧める。さすがに大河は

「だめよ。一文字さん・・・土朗はまだ未成年なんだから。」

一様、教師としての自覚と土朗の保護者の自覚はあるようだ。それを一文字はゴメンと謝る。そんな中一文字はいきなり話題を変える。

「いや、それにしても衛宮君は羨ましいな。こんな美人のお姉さんがいてそれに可愛い彼女さんまで居る。」

一文字はセイバーと桜を見る。土朗と桜はいきなりの一文字の言葉に顔を赤くしてたじたじだがセイバーは全然動じてない。どうやらセイバーは全然そう言う事に興味がない様子。

どうやらみんな一文字のペースに振り回されているようだ。

風見はいつ話しかければいいかタイミングが分からないようだ。そこでようやく一文字は風見の存在に気が付く。

「おう、風見帰りが遅かったな。」

「一文字先輩どうしてここに？」

風見の疑問はもつともだ。なぜ士朗の家で酒を飲んでこんなに馴染んでいるのか？それとここに来るまでの経緯も気になっている。どうしてこんなに早く冬木市に来たのか・・・まさかあのお方とやらの事が関係しているのかと風見は一文字を見ていろいろ考える。そんな風見の様子に一文字は気づき

「まあまあ、話は後にしようぜ。衛宮君と桜ちゃんがお前の食事を作っているんだ。それを食べてからでも遅くないだろ？」

一文字に後で話をするように言われ風見は席に座り食事を取ることにした。

「そうそう、早く食べないとセイバーちゃんに食べられるからな。」

それを聞いてセイバーはさすがに怒る。

「一文字その言葉、聞き捨てなりません。」

セイバーは立ち上がり一文字を睨む。そんなセイバーを一文字は軽く流す。

風見はそんな一文字をみて

「この人はやはり大物だな。」

一文字の前に会った時と変わらぬ様子に軽く笑みを浮かべるのだった。

そして食事が終わり士朗と桜は酒に酔っている大河を家まで送りに行った。セイバーは魔力の消費を抑えるため・・・すでに睡眠をと

っている。

風見と一文字は衛宮邸の庭に出て話をすることにした。

「一文字先輩どうしてこんなに早く？俺が連絡を入れてまだ二日しか経ってないですよ？」

風見の疑問に一文字は答える。

「ああ、本郷から連絡がある前に俺は冬木市に向かっていたからな。」

「どうということなんです？」

どうやら一文字は本郷から連絡がある前にすでに冬木市に向かっていたらしい。それを聞いて風見は昼間ハサミジャガーと戦ったことを思い出し、まさかその関係なのかと思い聞く。

「一文字先輩・・・もしかして新たな敵を追ってここにきたんですか？」

「！どうしてそれを？」

どうやら一文字が冬木市にこんなに早く来た理由はハサミジャガーの一件に関係しているらしい。

先程風見の考えていた事は的中したらしい。

驚いている一文字に風見は昼間の一件を話す。

それを聞いて一文字は一度目を閉じて、開けると真剣に話を始めた。

「ああ、俺はここに来る前はヨーロッパに居た。そこで何やら大量の行方不明者が出ていると聞いて調べに行ったんだが・・・その行

方不明者が出ている町で変なアジトを見つけて入って見ると何か実験をしていた。何やらナノマシンとかの？」

それを聞いて風見は驚き一文字に聞く。

「もしかして？そのナノマシンの名前ベルセルクですか？」

「！！ああどうして知っているんだ。」

風見は一文字に言う。ベルセルクのナノマシンを用いた戦闘員と戦ったことを。

「プロトタイプ？奴らそこまで研究が進んでいるのか？」

「一文字先輩。ハサミジャガーはあのお方により完成したと言っていました。奴等の正体は掴んでいるんですか？」

「ああ、実を言うと俺が入ったアジトに死神博士が居た。」

「！！死神がならシヨツカーと関係あるんですか？」

どうやら死神博士が復活しているらしい。それを聞いて風見はシヨツカー絡みの組織が復活したと思いきや、

「シヨツカーと関係あるか分からないが死神の奴は組織の名前をデスシヨツカーと名乗りアジトを爆発しやがった。そこでアジトの爆発後調べたら・・・奴等の資料と思わしき物から冬木氏の名前があったから来たわけだ。お前がここで怪人と戦ったというならどうやら無関係じゃ無いみたいだな。」

「デスシヨツカー？」

風見は組織の名前を聞いて新たな戦いが始まるのを感じた。そこで風見は一つの疑問を抱き

「なぜ冬木市に奴等もしかして今行われている。聖杯戦争と何か関係があるのか。」

「ああ、俺も本郷からの連絡を聞いてそう感じた。もしかしたらこの一件根が深いのかも知れない。」

風見の考えに一文字も同意する。
そして一文字は風見に

「俺はデスシヨツカーの動向を探る。風見お前は衛宮君たちと行動して聖杯戦争の事について調べてくれ。」

「わかりました」

一文字と風見は別々に行動する事にした。

「他の連中も近いうち来ると思うが余り無理をするなよ」

「ええ、そちらこそ」

そう告げると一文字はバイクに乗り衛宮邸を後にする。その時士郎が大河を送り届けたのか帰ってきた。

「一文字さん。もう行ったんですか。」

「ああ」

士朗に答えながら風見は新たなる敵デスシヨッカーのことについて考えるのだった。

17話 その名はデスシヨッカー（後書き）

本当にスイマセン。組織の名前のアイデアをそのまま使わせてもらいました。

サイドストーリー 一文字隼人(前書き)

一文字が冬木に来る経緯

サイドストーリー 一文字隼人

Side 一文字隼人

ヨーロッパのある市街地

辺りは静まり返っていた。その原因は今この町では大量の行方不明者が出ているのだ。

その町に一人の男がバイクに跨り訪れた。

男の名前は一文字隼人、彼は今この町で起きている事件を調べに来たのだ。

「ここが例の町か。それにしても・・・まだ真昼間だったのに妙に静かだな。」

一文字は町に着いて早々、辺りの様子に疑問を抱く。いくら事件が起きているとはいえ、昼間から誰もいないのは明らかにおかしい。

そんな事を一文字が考えていると一人の女の子の泣き声が聞こえるでかい。

一文字はそれを聞いてすぐさま泣き声をする方に向かうと・・・まだ五歳位の女の子が一人で泣いていた。

女の子に一文字が近付くと女の子が脅え始める。それを見て一文字は微笑みながら

「大丈夫、聞いてくれ。俺は味方だ。」

最初は警戒していた女の子も人を安心させる顔をしている一文字を見て泣きながら抱きつく。

そして一文字は女の子が落ち着くのを待ち・・・女の子が落ち着いたのを確認して理由を聞く。

「どうして、君はここで一人泣いていたんだ。」

優しく話しかけた。それを聞いて女の子は目から涙を流しつつ事情を話す。

「変な黒ずくめの人たちにパパもママも他の人たちも連れていかれたの」

一文字は内心驚きながらも女の子に聞く。

「その黒ずくめの人たちはどっちにいったか分かるかい？」

一文字の質問に女の子は指差した。

「あっちにいったわ」

それを聞いて一文字はとりあえず女の子の家まで案内してもらい、家に着き女の子に言う。

「ここで待っているんだ。君のパパとママは俺が必ず連れて帰るか
ら」

そう言い行こうとすると女の子がおもちの指輪を渡してくる。

「これ、ちょっと前にパパとママに買って貰ったの。私の宝物。お兄ちゃんに上げるからパパとママを絶対に連れて帰って来て」

女の子のお願いに一文字は頭を撫でてわかったと言い。黒ずくめ達が行った方向にバイクを走らせる。

二時間くらいバイクを走らせると何やら異様な建物がある。

一文字はバイクから下り、建物の中に入る。

入って見ると何やら沢山の人間が黒ずくめの男たちに並べられている。一文字はそれを見て

「あれは、シヨツカー戦闘員！なぜここに」

「どうやら黒ずくめの男はシヨツカの戦闘員であるようだ。そうして辺りを見ていると一人の老人に目が止まる。

「！！あれは死神博士・・・死んだ筈じゃ。」

本郷が倒したはずの死神博士が居る。そして死神が何やら大勢の人間に向かい何か話している。

「喜べ。諸君らは偉大なるデスシヨツカーの実験体選ばれた。」

死神博士の言葉に辺りがざわめく。そして死神博士は何やら液体の入った瓶を出し話を続ける。

「これはデスシヨツカーの技術が詰め込まれた。ナノマシン、名をベオウルフ。これを諸君らの体内に投与されれば自我を無くし人間を超えた力を手に入れる事が可能だ。実験が成功すれば諸君らは晴れて我等デスシヨツカの一員になれるわけだ。」

そう言うと死神が戦闘員に命令を出す。実験を始めよと死神の言葉に戦闘員は動き始めた。

それを隠れて見ていた一文字はまずい！と思い姿を現せる。

「待て、死神」

「！！貴様一文字隼人・・・どうしてここに？」

一文字の登場により、戦闘員と死神は慌てるが、すぐに死神は冷静になり

「まあいい。お前にはここで消えて貰う。行けゴースター」

死神の言葉と共にマグマ怪人ゴースターが現れる。

「ふふふ、ゴースターは新たなる組織デスショットカーの力により以前より遥かにパワーアップしている。以前貴様と本郷猛が二人がかりで倒した時よりずっとな。一文字隼人貴様に勝ち目はなし。」

「デスショットカー？」

考える間もなく死神の言葉を聞きゴースターは一文字に攻撃を仕掛ける。ゴースターの体当たりで一文字は吹き飛んだ。すぐさま立ち上がり一文字は変身ポーズを構える。

「確かに以前よりパワーアップしている見たいだが仮面ライダーにとっちゃ屁でもねえ。」

啖呵を切り一文字は「変身トオ」ジャンプし仮面ライダー2号になる。

そしてジャンプしたままゴースターに

「ライダーキック」

蹴りを入れるが弾かれる。

「無駄だ無駄だ。貴様の攻撃など聞かん」

ゴースターは笑いながら2号に再び体当たりを仕掛ける。

「ぐっ」

再び吹き飛ぶ2号、また立ち上がりライダーキックを放つ。やはり弾かれる。

そのやり取りを3回ほど続けているとゴースターの動きが止まる。

「どういう事だ。貴様の攻撃は俺には効かん筈。」

その疑問に対して2号は答える。

「確かにお前には俺の蹴りは効かなかった。だから俺は同じ場所に何度も攻撃を仕掛けた。つまりお前は自分の防御力に過信して俺の狙いを読めなかったんだ。」

「何!?!」

ゴースターが驚いている中で2号は止めを刺すためジャンプする。

「ライダーにキーク」

自身を縦回転させ威力を増し打ち出す2号の必殺キック。それを受けてゴースターは爆発した。2号の勝ちだ。勝利の余韻に浸る間もなく死神を探すがいない。その時建物全体にスピーカが鳴り響く。

「まさかゴースターを斃すとわな。まあいい・・・もうすぐこの基地は爆発する。そのまま下敷きになり死ぬがいい。仮面ライダー2号。」

その時建物の一部が爆発する。2号はすぐさま建物の中に居る人間を避難させる。

そして避難させている途中、死神博士が持っていた紙が落ちている。それを拾い内容を読むとナノマシン・ベルセルクのこと・・・日本の冬木氏がどうか書かれている

読んでいる途中。再び爆破が起き。2号はすぐに避難した。

その後、女の子の両親を家まで一文字は送り届けた。

「ありがとうお兄ちゃん。」

そんな女の子に頭を撫でる一文字、女の子の後ろでは両親がありがとうございましたと言っている。一文字は助けられて良かったと思ひ。すぐに飛行機に乗り冬木市に向かう事にした。

日本に帰り冬木市に向かっていると携帯が鳴り始める。どうやら本郷

のようだ。本郷から今、風見がかかっていると言う聖杯戦争・・・
そしてそれが行われている地を聞き驚く。

「それは、本当か!!」

そして一文字はヨーロッパでの出来事を本郷に話す。

「デスシヨッカー!!」

電話越しから本郷の声が轟く。それほど驚いているのだろう。

「ああ、死神の奴はそう言ってた。俺はこのまま冬木市に向かう。」

「わかった。風見の事よろしく頼む。」

それを聞いて一文字は冬木市に向かうのだった。

紹介

一文字隼人

フリーのカメラマンであり、同時に柔道六段・空手五段の腕前を持つ、格闘技の達人である。それをシヨッカーに見込まれ・第2の仮面ライダーとして改造されるが脳改造前に本郷に救出され、シヨッカーとの戦いを決意する。

2号 必殺技

ライダー卍キック

滝との特訓により編み出された、自身を縦回転させ威力を増し打ち出すキック。ひねった体が出のように見えるのが由来。

オリジナル怪人

ベルセルク

デスシヨツカーの技術で作り上げたナノマシン・ベルセルク、体内に投与されれば理性を無くし。普通の人間でもすべてにおいて5倍の力を引き出せる。

18話 遠坂凜来訪

風見と士朗は一字が去った後家に入ろうとしたのだが

「こんばんわ。衛宮君」

一字とすれ違うように凜がでかい荷物を持って家の前に来ている。

「どうしたんだ！！遠坂そんな荷物を持って？」

士朗が疑問に思うのも仕方ない。今凜の荷物には明らかに生活用品と思わしき物があるからだ。

そんな士朗の疑問を余所に凜は何言ってるのと言ってそのまま話を続ける。

「さつき私は衛宮君にまた後でって言ったでしょ。それに同盟を組む訳だし一緒に住んだ方が色々都合が良いでしょ」

「なっ！！！」

凜の言葉に士朗は固まる。

「風見さん荷物を運ぶの手伝って」

同じく固まっている風見に凜は荷物を渡す。

「あ・・・ああ」

風見は凜の勢いに押され荷物を持つ。

「じゃあ衛宮君空いてる部屋、適当に使わせて貰うから」

告げると凜は風見と共に家の中に入って行った。
それからしばらくして士朗は再起動し

「な・・・なんでお前が家で暮らすんだ!!」

叫ぶが意味はない。この短い間であるが風見と士朗は凜の性格を把握している。だからこそ、この状態の凜は止めようがないとわかっているからこそ、何も言わず風見は凜の荷物を持ち手伝いをする。

それを士朗も十分に理解している。だからこそ叫ぶことしか出来なかった。

士朗は心労を痛め、どっと疲れた様子で家に入って行く。

居間に着くと魔力の浪費を防ぐため睡眠をとっていたセイバーが座っている。どうやら士朗の先程の騒ぎで凜が来た事に気づいたのだろう。

「シロウ、凜が来ているようですが？」

「ああ、何でも同盟を組んでるんだから一緒に住んだ方がいいんだと」

セイバーは納得し、そして士朗に警告する。

「リンは信用できませんが・・・アーチャーには気を付けてください。」

「

「あはは・・・まさか」

セイバーはそんな士郎に対して、さらに警告する。

「笑い事ではありません。私達が聖杯を奪い合う敵同士である事は変わらない。それにアーチャーの視線からは、貴方に殺気を送っている様ですし、くれぐれも警戒して下さい。」

士郎は遠坂たちが仕掛けてきたら戦うという方針をセイバーに伝える。

セイバーも士郎の方針に同意してくれるのを見て話題を変える。

「ある意味遠坂の方が油断ならないけどな」

セイバーは？を浮かべ士郎に聞く。

「むしろリンは信用できるという話だったはず？」

士郎は苦笑いを浮かべつつ答える。

「そういうことじゃなくてさ、つくづく遠坂には裏切られたというか。あれは絶対に猫の皮を被った悪魔だ。俺の憧れだった清楚な遠坂とはえらい違いだよ」

士郎は学校の凛のイメージと今との違いのギャップに何か裏切られたようなそんな気持ちになっていた。

「あら、衛宮君。「んっ」そんな風に見てくれたとは光荣だわ」

「と・・・遠坂!！」

いつの間にか後ろに笑みを浮かべた凜が立っている。心臓に悪いとはこの事だ。

「衛宮君。内緒話をする時は静かに話した方がいいわよ」

士朗はある事に気が付く。

「遠坂、そう言えば風見さんは??」

「ああ、アーチャーと一緒に部屋の整理をして貰ってるわ。」

当然だと言わんばかりに言う遠坂を見て士朗は頭を押さえた。

その頃凜の新たな部屋では

「まったくリンはサーヴァントを何だと思ってる」

愚痴をこぼしつつ整理をするアーチャーと黙々と整理片づけをする対照的な二人が居る。

そんな様子のアーチャーに風見が話しかける。

「そう言いつつ。ちゃんとやるんだな？」

愚痴をこぼしつつもアーチャーの無駄のない整理片づけをみて聞いてみると

「当然だ。やるからには徹底的にやる。それが私の信条だ。」

当たり前だという。

風見は「こいつはどんな英雄何だ？」下手な主婦よりも掃除の仕方がうまい。アーチャーを見て疑問を抱く。

そんな事を考えている風見にアーチャーは質問する。

「貴様には一つ聞きたいことがある。」

「何だ？」

「もし、誰かを殺さなければ大勢の人間を助けられないとしたら・・・貴様はどうする？」

アーチャーの言葉に質問に風見はアーチャーを見据え答える。

「俺は今まで元々は人間である。怪人を沢山の人を守るため殺し続けて来た。もし・・・これが罪だしたら俺はすでに大罪人だ。」

それを聞いてアーチャーは笑みを浮かべ

「ふっ、やはり貴様はただの理想に溺れた存在とは違うようだ。理想だけを語る馬鹿よりもマシだな」

風見は？を浮かべ

「以前も似たようなことを言っていたがどういうことだ？」

聞くが、もう話すことはないと言わんばかりにアーチャーは黙り込み作業に集中する。それを見て風見も聞いても無駄だと悟り作業に

集中した。

その頃居間では凧とセイバーが士朗の作ったご飯を食べている。

あの後士朗に食事当番の交代など選択は別々にすることや自分は朝はパンと紅茶をとるからよろしくと自分の要求を告げると、最後に凧はまだ晩御飯をとってないから作ってくれと士朗に要求した。

それなのに、なぜ士朗はセイバーの分まで作ったかという食べ物のお話をすると・・・あからさまにセイバーは自分も欲しいと態度に出たので二人分作ったわけである。

凧は士朗のご飯を食べると

「よし、これなら勝った！」

その場でガッツポーズを取る。

「おい、そりゃどついう意味だ」

「敵の戦力分析は兵法の基本でしょ？明日を楽しみにしときなさい。」

「またよからぬことを」

凧が楽しそうに話すのを見て士朗は嫌な予感を拭えなかった。

そうこうしている内に風見は凧の部屋の整理と掃除が終わったのか居間に来る。

「風見さん御苦労様」

凜は嬉しそうに風見に労いの言葉をかける。

「あ・・・ああ」

どうやら風見はかなり疲れているようだ。

「そう言えばアーチャーはどうしたのです？」

「ああ、見張りをすると行って外に出た」

どうやらアーチャーは自分の持つ鷹の目のスキルを用い周りを見張っているようだ。

風見も戻ってきたので4人は本題に入る。

学校に仕掛けられている。結界の事をそしてライダーにはそれとは違う真打ちの宝具がある事を

それを話して士朗と凜は明日から結界の基点探しをすることに決めた。

そして凜が風見に前からの疑問を聞く。

「風見さん、一つ聞きたいんだけど仮面ライダーって何人いるの？」

「俺を含めて11人だ。」

「えっそんなに!?!」

凜の心中は風見や一文字の様な存在が11人も居るのかと驚いてい

る。

「風見さん、俺も聞きたいことが・・・昨日風見さん自分のこと改造手術を受けた改造人間っていつてたけどどういう事ですか？」

「そのまんまの意味だ。俺は脳以外すべて機械でできている。」

「!!!」

士朗の質問にもはや隠す気はないのか。普通に答える。士朗は驚く。・・・そして少し落ち着いて風見にきく。

「風見さんはそんな体で辛くないんですか？」

風見は自嘲したような笑みを浮かべ答える。

「確かに、最初は辛いこともたくさんあったが・・・今はこの体が俺の誇りだ。」

それは風見の決意の表れであるのだろう。それを聞き士朗は質問を止めた。

それから方針も決まり今日は休むことにした。

士朗は魔術の鍛錬の為に土蔵に行き風見の事を思い出す。

「風見さんは自分が人間じゃなくなっても正義のために戦っている。俺もあの人のように誰かを救う事ができるんだろうか？」

士朗はそんな事を考えているが誰も士朗の疑問に答える者はいない。

凜はその後一人で夜の街を散策しに家を出ていた。

「まさか！風見さんの体が機械で出来ていたなんて」

一人で呟いていると一緒に付いて来ていたアーチャーが霊体化を解き凜に言う。

「ああ・・・だがこれで奴から人間の気配が薄い事に納得した。」

アーチャーは今までの疑問が解けすつきりした様子である。

「それにしても魔術を使用しないで科学の力だけであんな力をそれに風見さんや一文字さんも含めて
11人」

「一文字が来た以上・・・他の9人も来るかもしれない凜はこれから起こる激戦の予感を思い。身震いしながら夜の街を散策するのだった。」

19話 ライダーのマスターは？

士朗は夢を見ている。

昔、自分が体験した火事の夢を

くまた、この夢か・・・この頃はあまり見なくなってたのに

士朗がそう思うと場面が変わる。

どうやら学校のようにだ。そこには沢山の生徒が倒れている。

くまさか、ライダーの結界!??

そして一成が倒れているのを見る。

く一成!しっかりしろ!〜

士朗は叫ぶが一成から反応はない。

くくそつ!!藤ねえ!桜・・・っ!!〜

辺りを見渡す士朗・・・その時声が聞こえた。

「士朗・・・これ何なの・・・?助けて・・・し・・・ろ・・・」

大河が助けを求めている。士朗は愕然とし大河を見るしか出来ない。

「うわぁぁっ」

士朗は目覚め周りを見てホッとする。

「夢……か……くっ」

そのまま起き上がり洗面所まで行き、顔を洗い外を見る。まだ夜のようだ。

「俺は絶対結界を止める。俺はみんなを守る……」

その時、後ろから風見が現れる。どうやら士朗の叫びと物音で目が覚めたようだ。

「どうしたんだ。衛宮君？」

「ああ、風見さん起こした様ですね？すみません」

士朗は自分のせいで目お醒ました風見に謝る。

「いや、気にしなくていい。」

そう言い、風見は思い出したように告げる。

「そういえばさつき凜ちゃんが……また町で事件が起きたようでおかけて行ったが」

「そうですか！俺達は行かなくて良かったんですね？」

そういつて今からでも出かけていきそうな士朗に風見は言う。

「衛宮君、通報があったという事は、すでにことが終わった後、恐らく魔術関連、俺達が今行っても約に立たないだろう。」

それを聞いても士郎は悔しそうに

「歯痒いな。目の前で苦しんでいる人達がいるのに何もできないなんて」

拳を握り外を見ている。

「衛宮君、人には出来ること・・・出来ない事がある。まず、自分に何が出来るか考え・・・わかった時にその気持ちを行動に移せばいい」

「分かりました。」

風見の言葉に一応士郎は納得するが・・・やはり士郎の気持は晴れなかった。

その頃、事件があったビルでは凜とアーチャーが二人立っている。

「どう思っアーチャー？」

凜の疑問にアーチャーは答える。

「これは、ライダーではないな。結界の様式がまったく違う。」

「私もそう思う。一連の事件は別のマスターの仕業とみて間違いな

いわね。そろそろ潮時ね。いきましようアーチャー」

アーチャーに同意しその場を離れようとする凜をアーチャーは止め、いつの間にか短剣を握り何も無い所に剣を振るう。

「！使い魔」

凜の叫びが響く。どうやらアーチャーは虫の様な使い魔に気づき剣を振るったのだ。それを見て凜はこの場から早く離れようと思いだ。アーチャーは斬り捨てた虫を見て

「気にくわんな」

一人呟くのだった。

朝

士朗は早い段階から朝御飯の支度をしている。どうやらあの後眠る事が出来なかったようだ。

しばらくして大河が台所に入ってきて士朗に挨拶する。そして

「そつえば士朗。桜ちゃん来てるの？」

「いや、まだ来てないけど」

「おかしいわね。玄関に靴があったと思うんだけどそれじゃあきのせいだったのかな？」

大河の言葉を聞いて、士朗はまずいと思い玄関までダッシュする。ちょうどタイミング良く玄関からチャイムが響く。桜が来たようだ。それを見て凜の靴の所に体から滑り込み隠す。

「おはようござい・・・先輩なにやっているんですか？」

冷や汗を流しながら聞く桜に

「ちょっと下駄箱の下の掃除をしよう」と

苦しい言い訳しか出来ない士朗であった。

「ごちそうさま」

そう言つて大河は急ぎ学校に向かう。ちなみに凜は昨日夜遅くまで外に出ていたのでギリギリまで寝たいらしい。それを聞いて士朗は安心したんだが。

「それじゃ片付けるか」

「俺も手伝おう衛宮君」

士朗と風見が食器の片付けをしようとするすると桜が手伝いを申し出る。

「私も手伝います」

「いいよ。桜は朝練があるだろ」

「いいえ先輩、今日私は朝の支度の手伝いができませんでしたから。これくらいはやらせてください。」

士朗は断るが笑みを浮かべ譲らない桜に士朗は折れ手伝って貰う事にして、一緒に学校に行く事にした。それと、風見は昨日と同じようバイクで街の散策をするために出ていき、セイバーは家で待機する事にした。

学校

士朗と桜が一緒に学校の校門を歩いていると物凄い形相で慎二がこちらに来て桜にビンタする。

「なんでおまえ朝練に出てないんだよ！おかげでせつかく顔を出したのに恥をかいただろ！！兄貴の僕に無断にサボりなんて何様のつもりだ！」

再び桜にビンタをしようとしている慎二を士朗が止める。

「責任なら俺にある。桜には家の手伝いをして貰っていたんだ。それに妹に手を上げるなんて最低だぞ。慎二」

士朗は桜に手を出したことを慎二に咎めると

「うるさい。それにこれはうちの問題だ。それに桜お前が衛宮の家に行く必要なんてまったくない。こいつは一人でいるのが好きなんだ。こいつは一人で何でも出来ると思っっているからな。大方家にだって人がいなくなって清々しているんだろ。結局こいつは一人でい

るのが好きなのさ」

指差しながら言う慎二に桜は軽く泣きながら反発する。

「ひどい兄さん。それはいい過ぎよ」

それが気に食わなかったのか顔を歪め慎二が桜を咎める。

「なに！兄である僕に反発するつもり？・・・まあいいお前は僕の言う事を聞いていればいいんだ。もう衛宮の家に行くのは止める」

それを聞き桜は

「い・・・嫌です。たとえ兄さんの言うことでもそれだけは聞けません」

今度は強く反発する。それに慎二は切れて今度はグーで桜に殴りかかる。桜は目を閉じ体を丸くする。しかしいつまで待っても痛みは来ない。目を開けてみると凜が慎二を止めていた。

「往来のど真ん中で迷惑よ。貴方達。」

「なんだい遠坂。僕等は部のことで話あっていたんだが」

慎二は凜に反発するが舌戦で凜に勝てるわけがなく捨て台詞を言いこの場を離れる。

「ありがとうございます。遠坂先輩」

礼を言う桜に凜は気にしないでと言い・・・土朗に昼休憩屋上で待っている」と小声で伝えると校舎の中に入っていた。桜も続いて土朗に礼を言い校舎に向かう。

「やれやれ」

土朗がため息をついていると後ろから女性に話しかけられる。

「や、お勤めご苦労様」

「美綴！見てたなら助けられれば良かったのに」

彼女の名は美綴綾子、土朗が昔所属していた弓道部の部長である。綾子は笑顔で

「遠坂が見てたから大丈夫だろうと思ったのさ」

二人は他愛のない話をしつつ一緒に校舎に入っていく。そして慎二の事について話す。

「最近、間桐の奴荒れててね。今朝も一年をいびって・・・收拾つけるのに苦労したんだよ」

そんな綾子に土朗は労いの言葉をかけ手伝えることがあればいつでもいってくれと言おう。

「私としちゃあなたが部に戻ってきてくれるのが一番いいんだけど？」

綾子は割と本気で士朗に言う。

「そりゃ、買被りだよ。俺が戻っても何もできないさ」

そんな士朗に綾子は笑みを浮かべながら

「まあ気が向いたらいつでも声をかけてよ。そんじゃあね」

士朗と別れる。

昼休み

少し遅れて士朗は凧と待ち合わせをしている屋上に向かう。

「ふう思ったより遅くなっちゃったな。」

そして屋上に着いてみると若干怒りながら凧が一人立っている。
士朗が来たのを確認すると

「遅い！ちよつと衛宮君！この寒い中・・・女の子を待たせるなんてどういづつもり!？」

凧の形相に士朗は冷や汗を流しつつポケットの中から買っていた。
コーヒーを凧に渡す。それで怒りが少しは下がったのか。凧は落ち
着き本題に入る為、屋上の隅に士朗と座る。

「遠坂・・・身体が当たってるって」

凜が士朗にかなり近づきくっついていて、
士朗の言いように凜は呆れながら

「何よ。大騒ぎするようなことじゃないじゃない。寒いんだから詰めた方が寒くないでしょ？」

凜の言い分は正しい。今の時期は2月で非常に寒いのだ。

気を取り直して凜は本題に入る。

「昨日の事件のことだけど、あれはライダーの仕業じゃないわね。使われていた魔術はまったくの別物だった。」

手掛かりがゼロになり士朗と凜が考えていると・・・士朗は思い出したように話題を変える。

「そういえば今朝は驚いたよ。遠坂って桜と知り合いだったんだな」

「まあちょっとね。そういう衛宮君こそ随分と親しいじゃない」

「同じ部の後輩だったからな。いろいろあって今も世話になってる。」

そして士朗は凜に本題を切り出す。大河と桜が家にご飯を食べに来ていることを告げると凜は

「聞いてないわよ！そんなの・・・まあいいわ。そのへんは私がどうにかするわ。」

桜と大河の件は凜に秘策があるようだ。そうしている内に休憩も終わり話を切り上げ教室に戻った。

放課後

士朗は辺りを見渡しながら歩いていると弓道部の前を通りかかる。そして見知った顔桜に声をかけられた。

「あの先輩今朝はすみませんせした。」

朝の事を謝る桜に士朗は

「気にしなくていいよ。それより立ち話なんかしてていいのか？ 慎二がうるさいだろ？」

また慎二に桜が注意されないよう言っが桜は慎二は用事があり今日は部活に出てない事を士朗に告げる。そして桜は改まって士朗に慎二の事を言う。

「あの、先輩・・・どうか兄さんのこと嫌いにならないでください。兄さん友達と呼べるの先輩しかいませんから」

「まあ、あいつとも腐れ縁だからな。これからもうまくやっていくさ」

桜の頼みに士朗は笑みを浮かべ承諾する。

「はい。お願いします。」

桜は嬉しそうに士朗に言う。

その後、士朗は桜と別れ歩いていると・・・背中から何やら嫌な気配がし振り向いてみると誰もいない。気のせいかと前を向いた瞬間後ろから衝撃が走った。再び振り向いてみると

「ら・・・ライダー!？」

ライダーが居るのを確認して気を失う。

「ううゝ・・・ここは?」

士朗が目を覚ましてみると何やら洋風の家の中にいる。不審に思い辺りを見ると

「ら・らいだー」

ライダーが目の前にたっていた。

「やあ目覚めたかい?」

士朗が驚いていると知っている声に話しかけられる。そして部屋のドアが開く。

「手荒な真似をしてすまなかったね」

「し・・・慎二!!!?」

ドアから来たのはなんと慎二だった。士郎の中では驚きの連続だ。驚きつつも士郎は慎二に問う。

「どづいつことだ？慎二」

士郎の問いに慎二は不敵な笑みを浮かべつつ答える。

「見ての通り僕もお前と同じマスターさ。」

「!?!」

士郎の中に衝撃が走る。

「驚くのも無理はない。僕も困惑しているんだからね。そこで友人である君に頼みがある。僕と手を組まないかい？」

椅子に座り士郎に共闘を申し出る慎二だが士郎はまだ立ち直れていない。

士郎はどうすればいいか。考えるのだった。

20話 現状報告

SIDE 風見志郎

士朗と慎二が家で話しをする。ちよつと前、風見はバイクを走らせ散策している途中寺が見えたのでバイクを止める。

「この町の寺か。」

そして風見はお参りでもしようと思つて階段を上がつている途中・・・嫌な気配を感じ動きを止める。

しばらくして・・・いきなり長剣を携えた紫髪の侍が現れる。

「フフフ・・・なにやら普通の人間とは違う妙な気配を感じ・・・気配を断っていたのだが気が付くとは」

愉快そうに笑う男に風見は言う。どうやら風見から普通の人間とは違う無機質な感じに気づいているようだ。

「よく言う。かすかだが気配を感じた。貴様はわざと気配を出していたな。」

それを聞いて侍は先程より大きく笑い風見に質問する。

「いや、失敬失敬。まさかそこまで見抜くとはお主口者ではないな。」

「そついうお前こそサーヴァントだろ」

確信も込めて風見は聞くと

「いかにも、私はアサシンのサーヴァント・・・佐々木小次郎」

「!！」

風見は目の前のアサシンが自分の真名を喋った事に驚く。凜とセイバーに真名の重要性を聞いてたからだ。

「それにしても佐々木小次郎といえば架空とされた存在・・・？実在していたのか!！」

風見は架空とされていた人物が実在してたことに驚きながら不審そうにアサシンを見ていると

「惑わされるな。別に私がだれであろうと関係がないであろう」

アサシンは風見の考えていることを見抜き風見に告げると続けて話す。

「して、そなた何ようでまいった？」

アサシンの質問に風見はただ偶然に來ただけの事だがサーヴァントを前にして身構える。

「このような昼間から戦っては騒ぎになる。もし私と戦いたいなら夜出直して来るが好かるう。」

そんな風見の様子にアサシンは今は戦う気がないと告げると風見に背を向け霊体化した。

それを見て風見はアサシンの言い分は確かに正しいと感じその場から離れることにした。

S I D E O U T

慎二は士朗に同盟を提案するが・・・士朗は慎二に違う事を聞く。

「慎二なぜ、学校に結界を張っている。それにライダーは無関係な生徒を襲ったんだぞ!!」

士朗が慎二に向けて言うと言つと慎二は立ち上がりライダーに拳を叩きつける。そして士朗に振り返り訳を話す。

「すまない。衛宮今までの事はこいつの独断専行なんだよ。それに学校の結界は保険さ。」

「保険だつて?」

士朗は慎二の言っていることの意味が分からず慎二を見る。

「そうさ、他のマスターに襲われないためのね。それに僕は別に聖杯が欲しい訳じゃない。実の所マスターになつたのだから僕の意味じゃない・・・僕は巻き込まれたんだよ。間桐の家の宿命とやらのせいだね。おまえだってそうなんだろ衛宮?」

慎二の言葉に驚きという名の衝撃が走る。

「なんで!!それを?」

「わかるさ。長い付き合いだから。僕たちは同じ立場なんだよ。だから手を組まないか衛宮」

笑みを浮かべ士朗の肩に手を置く慎二、士朗はそんな慎二の申し出を断る。それを聞いて慎二は無表情になり分かったと言い……。ライダーに士朗を玄関まで送らせた。

家を出て士朗が帰り際ライダーに向かい言う。

「慎二はあんな奴だが。あれでいい所もあるんだ。お前が慎二を支えてやってくれ。」

士朗の言葉を聞きライダーはしばらく呆然とするが

「優しいですね。貴方」

告げると霊体化し消える。それを見届け士朗は家に帰る事にした。

家に帰る途中士朗は風見と鉢合わせになった。

「衛宮君、今帰りか」

「はい、風見さんの方こそ」

「ああ、良かったら後ろに乗ってくれ。一緒に家まで帰ろう。」

士朗は風見の申し出を受けバイクの後ろに乗り帰る。

家に付き二人は玄関に入るとドタドタと音が聞こえしばらくするとエプロン姿の凜が怒りの形相を浮かべ二人に言う。

「ちよつと、風見さんと衛宮君・・今までどこに行ってたのよ!？
まあ話は後でいいわ。早く上がって」

凜に促され家に上がる二人・・そこで士朗はある事に気が付く。

「遠坂・・え」とその格好は？」

「台所にあつたから借りたのよ。言ったでしょ食事当番は持ち回りでつて」

士朗の疑問に答える凜。そしていつの間にか居間に付いていたようだ。

そこには、

「お帰り、士朗、風見さん」

笑顔の大河とお茶を入れる桜・・そして箸を持つセイバーの姿がある。

士朗はどういう事だと。不審そうに大河を見ると

「見て見て遠坂さんの料理つてすごいんだよ。士朗も早く食べてみなよ」

大河の様子に驚き士朗はどう説得したんだと凜に視線を送る。しかし士朗の疑問を余所に大河は話を続ける。

「士朗、風見さんがいるから大丈夫だとおもっけど・・遠坂さんから話は聞いたけどくれぐれも間違いはおかしちゃだめよ」

どうやら凜は家の改装中土朗の相談して家に来るように言われたという。作り話を大河に説明したようだ。

「学友を思いやる。衛宮君の心遣いには本当に感謝しています。」
綺麗な笑顔を振り向かせる凜。しかし風見と土朗はもう十分に凜の性格を把握している。二人は呆然と凜を見る。
そして大河に凜の面倒をちゃんと見るように言われ、返事をして凜の作った料理を食べると

「これは・・・」

「どうかしら衛宮君？お口に合えばいいんだけど」

土朗は呆れたように凜を見て

「よくいうよ。わかって聞いているくせに昨日勝ったて言ったのはこのことか。」

そんな二人の様子を桜はおもしろくなさそうに見ていた。

食事も終わり大河と桜が帰り本題に入ろうとしたのだが土朗が先程の桜の様子を思い出し呟く。

「そつえば桜の奴、余り喋らなかつたけど体調が悪いのかな？」

桜に悪いことしたなと言う土朗の鈍感ぶりに風見は

「衛宮君、君はもう少し女心を勉強した方がいいな。」

「??？」

風見に突っ込まれても理解できない士郎、凜もそんな士郎に呆れながら本題に入ることにした。

まず風見が昼間寺でアサシンに会ったことを報告する。

「一成の実家にサーヴァントがいるんですか？」

士郎は驚くが凜は対照的に考え事をしている。

「ああ、確かに俺はアサシンにあった。」

そんな風見の言葉に考え事をしていた凜が皆に言う。

「おそらく。あそこを根城にしているマスターがいるのね。確かに柳同寺は霊格の高い場所だから。根城にするなら持って来いの場所よ。」

風見の報告と凜の話聞き一成は無事なのか？呆然と考える士郎・
・しばらくして落ち着き士郎も慎二がライダーのマスターであること
とを先程の出来事を話しつつ伝える。

「ウソ、慎二がマスターなんて！？学校にマスターが居る訳ないの
に」

そんな凜に風見が話しかける。

「凜ちゃんは衛宮君が魔術師だと気付かなかつたんだろ。うまく隠

していたんじゃないか？」

風見の話聞いても凜は頑なにあり得ないと言う。そして間桐の家は元々海外の魔術の家系であるが血は薄れ今では魔術師に必要な魔術回路が失われていることを告げる。

そこで今まで黙っていたセイバーが士郎に向かい

「シロウ、我々はすでに二人のマスターの所在を掴んでる。今こそ攻め込むべきです。」

抗戦の意思を告げ、討って出るように言うが士郎は反対する。

「セイバー、慎二の話聞く限りあいつも被害者だ。それに風見さんの話を聞く限りアサシンはあまり好戦的な奴じゃないだろう。」

一成も無事みただし・・・まずは今起きている新都のガス事件を解決するのが先決だと思う。」

士郎はセイバーに告げ今からでも新都の調査に行くと風見と凜に告げる。意外な事に凜も柳同寺の件は今放置することにしようだ。なんでもリスクが高すぎて何も分からず攻めるのは危険だと判断し、士郎と共に新都に調査に行く事に決めた。

風見もそんな二人が心配で一緒に付いて行くことに決める。

セイバーも渋々ながらマスターの方針に従うようだ。四人は新都に調査に出掛ける。

その様子をガラス玉を見ながら笑うフードを着た女の姿がある。彼女は一体何者であるのだろうか。

20話 現状報告（後書き）

次回は新たなライダー登場

次回 大变身にご期待下さい

21話 大变身!! (前書き)

X登場

21話 大变身！！

新都ビル街

「凜ちゃん、先程の話なんだがライダーのマスターは信用出来るのか？」

新都のガス事件について調べていると唐突に風見が凜に慎二について聞く。

「私は衛宮君には悪いけど信用できないわ。だけど向こうが行動に出ない限り無害なのは確かだし、しばらくは泳がせてるつもり」

凜は今は慎二に手を出さないと言う。士朗はホッとするが。

「そうですね。私としては早めに禍根を断っていた方が良いと思うんですが・・・」

セイバーは凜とは違い好戦的だ。

「まあ、そういうなって・・・それより遠坂、間桐の家が魔術師の家系だって言ったよな・・・だったら」

士朗は凜に何か聞きたいようだ。凜も士朗の言いたいこと気付き

「大丈夫よ。桜は聖杯戦争には無関係だから。」

ホットする士朗・・・しかし凜はいじわるそうな笑みを浮かべつつ士朗に聞く。

「はは〜ん。桜のこと。心配なんだ。」

「あ……ああ」

顔を近づける凜に向かい頷く。

「それにしても、驚いたんだけど……衛宮君って奥手そうに見える
てそうでもなかったのね」

「え……何のことだ？」

「桜に身の回りの世話を焼かしているでしょうが……なに貴方達
デキてんの？」

「違う。桜は部の後輩だったからさ。俺が独り身なのを心配して来
てくれてるだけだっ」

凜の言葉に士朗は慌てながら猛反発する。そんな士朗にこいつは本
気か？凜は思い風見に視線を向けるが風見は目を閉じ首を横に振る。
風見も士朗の鈍感ぶりにはこの短い期間に十分熟知している。
凜ははあく〜と疲れたようなため息をついた。

しばらく新都を歩いていると何か空間の揺らぎを感じ、士朗をのぞ
いてみんな臨戦態勢になる。

「士朗、敵です。」

立ち止まっている。士朗にセイバーが注意する。アーチャーも霊体化を解き、

「凜！気づいたか？」

「ええ この感じ昨日と同じね。行きましょう。風見さん。衛宮君！」

凜は魔力を感じた場所に向かおうと二人に付いて来るように言うが・・・その時士朗は違う場所に何か違和感を感じた。

「違う。待ってくれ遠坂。そっちじゃないだろ。俺は向こうの方が何か感じるんだ！」

士朗は凜たちが向かっている逆方向を指差し違うと言う。凜も士朗の言葉を聞き三人に確認を取るが士朗が指差す方には何も感じてないようだ。

しかし、士朗は譲らない。そこで凜は二手に分かれる事にした。

「凜ちゃん、俺はどっちに向かえばいい？」

風見は魔術師である凜に指示を聞くことにし、

「風見さんは衛宮君の方をお願い。私達なら何かあればすぐに逃げ出せるから。」

「わかった。こっちは任してくれ。」

凜は士朗が心配なので風見に士朗の事を任せた。

風見も凜の気持が分かり土朗を見て頷く。
そして別れる前やはり心配なのか

「いい？無理しないで。手に負えない相手ならすぐに逃げるのよ」

凜は土朗にひと言いうと今度こそ走って行った。

冬木橋

土朗が違和感を感じた場所を走って辿り着いたのは冬木橋の下であった。

「シロウ・・・ここから何か感じたんですか。」

やはりセイバーは何も感じてないようだ。

「分からない。ただ、カビ臭いというか何か変な違和感を今でも感じているんだ！」

土朗の言葉を信じ辺りを見渡す風見・・・その時

「!!!危ない」

何やら紫の光線見たいなのが土朗に向かい飛んでいるのに気付き・・・
風見は土朗をその場から突き飛ばし、自分がその光線を受ける。

「ぐう」

とつさに両手でガードをしたのだが威力は高く風見は吹き飛ばす。

「風見さん!!」

「風見!!」

士朗とセイバーはすぐさま風見に近づき無事なのかを確認する。

「あ・・・ああ、何とか大丈夫だ。」

風見は大丈夫だと言うが血を体中から流しており見るからに大丈夫では無かった。

「すみません風見さん。俺のせいで・・・」

「気にする必要はない。・・・それよりも」

士朗は自分のせいで大けがをした風見を見て自責の念に捉われるが風見は気にするなと言い・・・前方を睨みつける。

セイバーも風見の意図が分かり前方を見て臨戦態勢をとる。その時、前方の空間が歪み始める。

そして、また紫の光線が今度はセイバーに向かい飛んでくる。

「セイバー!!」

士朗は叫ぶがセイバーは避けようとしなない。

そのまま直撃した。その時歪んでいた空間からフードを着た女が現れる。

「ふふふ、ひょっとしてこれで片がついてしまったのかしら？ほんの挨拶代りでしたのに・・・最強のサーヴァントと謳われたセイバーがこれではこの聖杯戦争たいしたことなさそうね」

士朗は驚きつつ目の前のサーヴァントを見て叫ぶ。

「新手のサーヴァントか？」

「あら、貴方がセイバーのマスターなの？」

士朗は目の前のサーヴァントを見つつ、傷ついた風見の事を気にしている。

そんな士朗を見てフードを着たサーヴァントは

「これが現代の魔術師、なんて貧弱な魔術反応だこと・・・その程度でマスターとは嘆かわしい」

士朗がマスターである事が信じられないようだ。

「図に乗るなよキャスター。この程度の魔術で私を倒せるとでも思ったか！」

煙が晴れると無傷なセイバーが出て来る。

「大丈夫なのかセイバー」

「ええ、シロウは風見の様子を見ていて下さい。」

士朗は頷き。重傷を負っている風見に近づく。

「大丈夫ですか？風見さん」

「ああ」

改造人間である風見の人並み外れた耐久力と回復力のおかげで彼は先程より顔色が良くなっていた。

キャスターは無傷なセイバーを感心した様子で見て口を開く。

「私の魔術を受けても無事だなんて・・・素晴らしい対魔力をお持ちのようですね」

「対魔力？」

キャスターが言う対魔力が分からず士朗は？になるが、セイバーが士朗の疑問に答える。

「対魔力。魔術に抵抗する力のことですシロウ。私は今まで魔術による傷を負ったことは皆無ですから。貴様に勝ち目はないぞキャスター」

その言葉を最後にセイバーは目の前のキャスターに斬りかかる。

そして一閃・・・しかし切った筈のキャスターは幻のように消えて、離れた所からまた姿を現す。

「確かに貴女には通じないかもしれないわね。だけでそこで寝転がっている人と貴女のマスターはどうかしら!？」

キャスターは士朗と風見に向け魔力弾を放つ。

「くっ」

セイバーは自分の体を盾にして風見と士朗を守る。
次の瞬間キャスターの仕業であろう。周りに剣を持った骸骨の集団が現れる。

セイバーは風見と士朗を守りつつ骸骨の集団を粉砕。

その中でもキャスターの魔力弾は尚も襲い掛かってくる。

士朗はこの状況を打開しようと落ちてた棒に自身の強化の魔術を使用して

「セイバーはキャスターを狙ってくれ。俺は風見さんを守る。」

「しかし、シロウ」

セイバーには分かっていた士朗の腕前で風見を守りながら戦うのは不可能だという事をしかし士朗は

「今大事なのは俺の命じゃない。俺はみんなを守る為に戦うって決めたんだ。だからセイバー俺に任してくれ。」

セイバーに自分の信念を伝える。その時倒れていた筈の風見が立ち上がる。

「セイバー大丈夫だ。これ位なら俺が対処する。」

「風見さん!!!まだ動いちゃ!!!」

「大丈夫だ衛宮君。セイバー早く行ってくれ」

「分かりました。30秒持たして下さい!!!」

士朗の決意と深手を負っているが風見が立ち上がり戦おうとしているのを確認してセイバーはキャスターを討つため突進する。

骸骨の集団はセイバーを止めようと前に出て来るがセイバーは止められない。

そして、ついにキャスターの前に立ち

「キャスター覚悟!!」

セイバーはキャスター斬りかかる。キャスターは魔力弾で応戦するがやはり効果がない。

そしてセイバーの不可視の剣が炸裂。

「ぐっっ・・・ふっ」

セイバーに斬り裂かれるキャスター・・・しかしキャスターは切られた瞬間軽く笑った。不審に思いながらセイバーはキャスターを見ていると・・・先程と同じようにキャスターが消える。キャスターの魔力で作り返した幻影のようだ!!

「しまった!!?」

セイバーは急ぎ二人の元へ戻ろうとするが骸骨が邪魔をしてなかなか思うように進めない。

骸骨の集団と戦っている風見と士朗

「大丈夫か？衛宮君」

「はい。風見さんこそ余り無理をしないで下さい。」

士朗と風見は励まし合いながら少しずつ骸骨を粉碎していく

「ふふふ、なかなか頑張りますね。」

しかし目の前にキャスターが現れる。

「お前はキャスター!?!」

「なぜここにいるんだ?」

風見と士朗が別々に聞くと

「あれは、私の魔術で作りに出した幻影です。セイバーも気付いたようですが・・・貴方達を仕留めるには十分時間があります。」

キャスターの腕が紫色に輝きだす。どうやら二人に魔力弾を放つようだ。

「クッ」

ドゴ、風見は再び士朗を後ろに突き飛ばし前に出る。

「風見さん、何を!?!」

士朗は驚きながら風見に聞くと

「俺なら多少のことなら耐えられる。」

風見は改造人間である自身の体でキャスターの攻撃を受け止めるようだ。

「無茶だ風見さん！今の状態で受けたらいくらなんでも耐えられない。早く逃げて」

士朗の言うように風見の体はボロボロである。いかに改造人間といえど、今キャスターの攻撃を受ければ命がない。それでも風見は動かない。

今にでもキャスターが魔力弾を放とうとしている時……！！
！海の方から何かバイクの音らしき物が聞こえて来る。

「何なのこの音は？」

不審に思いキャスターは手をかざしたまま辺りを見渡す。その時海からバイクに乗った一人の男が現れる。

「あれは、クーラーザー……来てくれたか敬介」

風見は男が誰なのか分かっているようだ。

「風見さん！誰なんですか？」

士朗が風見に聞くと風見は笑いつつ

「俺の大切な仲間だ。」

「??？」

風見は誇らしげに言うが、士朗にはよく分からない。

いつの間にかバイクに乗った男は風見と土朗の前に立っている。

「大丈夫ですか？風見先輩？」

男は風見の様子を見て心配そうに声をかけるが

「大丈夫だ。敬介・・・それより目の前の相手を頼む。」

「分かりました。」

キヤスターは目の前の展開に付いていけず、目の前の男に向け魔力弾を放つがかわされる。

「！！私の魔力弾を簡単にかわすなんて・・・貴方何者？」

キヤスターは不審そうに目の前の男を見る。

「俺は神敬介・・・そして！！」

敬介は両手を上に挙げると

「大変身！！」

ポーズを取り姿を変える。銀のマスクに黒いマフラーを靡かせて・・・そしてそのままベルトの部分に手を翳して

「ライドルスティック！！」

目の前を×の字に切り裂き

「Xライダー」

啖呵を切る。

「貴方！！人間じゃないの？」

キヤスターは目の前の人間とは違う姿をした存在に驚きながら聞く。

「俺は・・・大切な人たちを守る為に生きている。だからお前には殺させない。」

「クツ」

キヤスターは魔力弾を放つが簡単にライダーで切り裂かれる。

キヤスターの命令なのか骸骨たちはXライダーに攻撃を集中するが流れるような動きでライダーを操り骸骨たちを粉碎する。

いつの間にか離れている風見と士朗・・・そしてセイバーも骸骨共を蹴散らし二人の元へ辿り着く。

「士朗、あれは風見が変身した時と似たような姿に見えますが!？」

セイバーは華麗な動きで敵を粉碎しているXライダーを見ながら聞く

「いや俺も分からない。風見さん・・・あの人も仮面ライダーなんですか？」

士朗が風見に聞くと

「ああ、彼は神敬介・・・またの名を仮面ライダーX」

風見は誇らしげにXライダーを紹介する。

Xライダー登場により優勢に立つ土朗たちキャスターはどう打って出るのか？

22話 敵は柳河寺にあり(前書き)

すみません。今回はちょっと短いです。

22話 敵は柳洞寺にあり

キャスターとXライダーの戦いは続く。

キャスターの骸骨たちがXライダーを襲うが・・・やはり役不足なのか華麗なライドル捌きで次々と粉碎していく。

「ええ〜い。忌々しい。私の邪魔をするなんて」

女のヒステリーが怖いとはよく言ったものだ。キャスターは眉間にしわを寄せつつ魔力弾を放つがXライダーはかわすかライドルで切り裂き対処する。

しかし、どうすれば私の攻撃を簡単に防ぐなんて、何かいい手は？

キャスターは目の前の敵の打倒が難しいと分かると次の手を考え・・・そして土朗を見て不敵な笑みを浮かべる。
それを不審に思い

「何を企んでいる？」

Xライダーがキャスターに聞くが・・・キャスターは笑みを崩さぬまま

「ここは、引きましょう。」

一言告げるとキャスターは自信が作り出したであろう黒い渦の中に入り、そのまま消えて行った。

それを確認してXライダーは変身を解き、風見の元へと走る。

「大丈夫ですか？風見先輩」

「どうやら敬介は傷だらけの風見の事が心配だったようだ。」

「ああ、大丈夫だ。」

立とうとする風見だがやはりダメージが大きすぎるのか倒れそうになる。それを士朗とセイバーが支える。

「風見さん。傷が酷いんですから余り無理をしないで下さい。」

士朗に言われ、風見はその場に座ることにした。

敬介は風見を支える二人に

「風見先輩を知っているようだが君たちは？」

「俺達はえ」と

士朗たちが自己紹介をしようとしている時、凜がこちらに走ってくる。

「衛宮君、大丈夫。こっちで魔力を感じたけど……！！風見さん酷い怪我。衛宮君早く家に戻って風見さんの治療をするわよ」

凜は士朗たちが向かった方向から魔力を感じ急ぎ来たようだ。そして深手を負っている風見を確認すると、すぐに家に運ぶよう提案する。

「わかった。急ごう。」

士朗と敬介は風見を抱え、敬介の提案によりクルーザーで運ぶことにした。

「！！あなた誰？」

ようやく凜は敬介の存在に気付き聞く。

「俺は神敬介、まゝあ風見さんの後輩みたいなもんだよ」

敬介の自己紹介に不審そうに凜は敬介を見るが士朗が風見さんと同じ、仮面ライダーである事を説明すると

「はい！また仮面ライダーが来たの？」

一文字に続いて新たな仮面ライダーが来た事に凜は驚いてその場で叫んだ。

その後軽く自己紹介をして衛宮邸に風見を治療するために急いで戻った。

衛宮邸

体中に包帯を巻いた風見を布団に寝かして全員居間に集まる。

「ふつ、風見さんはこれで大丈夫でしょ。それにしても驚いたわ。あれだけ深手を負っていたのにもう治り始めているんだもの」

改造人間である風見の回復能力に凜は驚いている。
それで士朗は凜にそっちはどうだったかの報告を聞いた。

「昨日と同じよ。深夜営業のカラオケ店がやられたわ」

「これからどうするんだ。」

凜の報告を聞き、士朗はこれからの方針を凜に聞くと、

「大丈夫よ。今現場に居た使い魔をアーチャーが追ってるから」

「・・・しばらくしてアーチャーから凜に念話が届く。」

「そう、アーチャーわかったわ。すぐに撤退して」

アーチャーの念話を聞き終えた凜に士朗が聞く。

「何か、分かったのか。遠坂？」

「ええ、敵は深山のはずれの柳洞寺に居るわ。」

真剣に言う。凜の報告を聞き士朗は驚きながら凜に言う。

「じゃあ、もしかしてキャスターはアサシンと協力関係にあるのか？」

「ええ、そう考えるのが妥当ね。」

二人の話を聞いていたセイバーが

「では、これ以上キャスターを野放しにする必要はありません。こちらもサーヴァントが二人、アサシンとキャスター程度に遅れは取りません」

セイバーは今からでも打って出ようとしているが意外な事に今まで黙っていた敬介が止める。

「まあ、詳しい事は分からないけど落ち着けて。何の情報も掴んでないのに敵の本拠地に攻め込むなんて自殺行為だぜ」

「風見の知り合いのようですが、あなたには関係ありません。シロウ今こそ討って出ましょう」

そんなセイバーを凜も止める。

「待って、セイバー敬介さんの言うとおり今攻め込むのは得策ではないわ。ここはじっくり様子を見て、宝具とまでは言わないけど、ある程度、相手の手の内が判明しないことには危険すぎる。」

士朗も遠坂の意見に賛同する。

セイバーはしぶしぶといった感じでマスターである士朗の意向に賛同するのだった。

話も終わり士朗は敬介を見て

「敬介さん、夜も遅いんで良かったらここに泊って行って下さい。」

「ああ、いいの。じゃあ風見先輩の様子も気になるし泊めさせてもらおうよ。」

敬介は士朗の申し出を受ける。
話が終わり皆、今日は寝る事にした。

夜 士朗の部屋

く何か声が聞こえる。く

何やら女性の声が士朗の耳元に響いている。
来なさい。来なさい。そも声を聞き士朗は立ち上がり部屋を出て行
く。

士朗の運命は如何に？

23話 キャスターの罫(1)

SIDE 衛宮士朗

夜の街を士朗は一人歩いて行く。

まるで誰かに操られているようにただ歩いて行く。どうやら意識が無いようだ。

しばらく歩き士朗は意識を取り戻す。

「じっ・っじっは？」

士朗は家で寝ていた筈なのに、まったく違う場所にいる事に戸惑いながら辺りを見渡す。

「じっは！！柳洞寺・・・何で俺はここにいるんだ？」

士朗は訳が分からず、その場から動こうとするが

「ぐっ」

金縛りにあっているのか身体が動かない。

その時、目の前を見ていると空間が揺れている。

「この現象・・・！！もしかして！」

士朗は先程見た現象とまったく同じ事に気付く。そして知っている笑い声が聞こえて来た。

「そこでとまりなさい坊や。」

「キャストター！？」

目の前に不敵な笑みを浮かべるキャストターが黒い空間から出て来る。

「まさか、お前が？」

「ええ、ようこそ私の神殿へ、あなたは他のマスターに比べて魔力の精神防御が貧弱だったから。先程あの場から離れる前に誰にも気付かれないようにあなたに催眠魔術をかけて置いたわ。」

どうやら士朗はキャストターが根城にしている柳洞寺にキャストターの魔術により連れてこられたようだ。

士朗は全力で手足に意識を集中させる。

「体の自由を奪っているのはキャストターの魔術だ。なら」

士朗は自分の体の魔術回路を総動員してキャストターの魔術の毒を読み取り体を動かそうとする。

「毎晩やっている事だ。」「-え？」

それは、どういう事なのか。士朗の体にはキャストターの魔力なんて混ざっていない。毒素らしき物はただ一点、胸についた小さな点だけだ。だというのに、体のすべてが異常だった。

士朗の体はキャストターのたった一点の呪いで体の命令権を剥奪されている。

「そんな、馬鹿な？」

士朗の驚きには理由がある。魔術師には抗魔力がある。催眠、呪縛、強制といった、魔術を弾き返す力だ。いくら士朗が半人前と言っても魔術師である以上、おいそれと他の術者に操られる、なんて起り得ない。

そんな士朗の様子を見てキャスターは説明する。

「理解できて？ 貴方を縛っているのは私の魔力ではなく魔術そのもの。一度成立したものを魔力と言う水では洗い流せない。形を得たものに水をかけても、その形は崩れないでしょ？」

キャスターが近付いてくる。冷笑を浮かべながら。

「そうかよ。それでわざわざ、こんなところまで呼びつけた理由は何だ？」

士朗はキャスターを見据え吠える。

しかしキャスターは冷笑を浮かべる。そこには獲物をまえにした優越感しかない。

士朗は殺されると思ったがキャスターはそんな士朗の考えを見抜いて

「安心しなさい。殺さない程度に生かし続けて、魔力の最後の一滴まで差し出して貰うから」

キャスターの冷笑が耳朶に響く。

「そうやって町の人みんなから魔力を奪っているのか？」

士朗はキャスターを睨みつつ言うと、

「ええ、この町の間人は・・・もう私の物ですから・・・それにこ

こはサーヴァントにとって鬼門ですからね。陣地としても優れているし、なにより魔力を集めやすいわ」

キャスターの人を物として扱う態度に士朗は我慢できず、

「キャスター……!!!」

叫ぶしか出来なかった。そしてキャスターは士朗を嘲笑いながら本題に入る。

「セイバーのマスター。貴方からはその令呪を貰ってあげるわ。セイバーには、あの目障りなバーサーカーを倒してもらおうとしましよ
う」

「令呪を奪うだと」

キャスターは士朗の令呪に手を伸ばす。サーヴァントがサーヴァントを使役するのは可能なのか。

……キャスター程の魔術師なら可能なだろう。士朗は手を伸ばすキャスターの手をじっと見ていることしか出来ない。

S I D E O U T

衛宮邸

セイバーは士朗の異変に気付いていた。最初は士朗の魔術鍛錬だと思っ
ていて見逃していたが、屋敷の外から、士朗の部屋へと放たれている。一本の小さな糸が見える。屋敷に張られた結界でさえ見逃すほどの細い糸。

セイバーは急ぎ、屋敷の外へ出ようとすると傷を負っている風見

が外に出て来る。そして今にも外へと出ていきそうなセイバーに理由を聞く。

「どうした。せいばー？」

「士郎が敵の罠に嵌ったようです！」

「何、俺も行くぞ。……ぐっ」「

風見もセイバーと共に士郎を救いに行こうとするがキャスターに受けた傷がまだ治っていないらしく……その場で膝を着く。

「その体では無理です。風見……ここは私一人で」

セイバーが風見を気遣い一人士郎を救出しように行こうとすると、

「風見先輩俺がセイバーと共に行きますよ。だからじっくり休んでいて下さい。」

敬介が家の中から現れる。どうやら話を聞いていたようだ。

「頼む。敬介。」

風見は敬介にお願いし……二人は敬介の愛車でクルーザーでセイバーが士郎を感じる場所に向けて出発する。その二人を見て風見は「頼むぞ二人とも」自分がいけない歯痒さに拳を握りつつ、凜に現状の報告するために家の中に入っていた。

二人はクルーザーで無人の街を駆ける。

そして辿り着いた場所は柳洞寺だ。

「ここは？キャスターの仕業か」

セイバーは先程のキャスターの魔力を感じたようだ。

「ここに衛宮君がいるのか？」

二人はバイクから降り階段を上がっていく。だが異様な気配を感じ動きを止める。

山門に至る階段。そこにサーヴァントが立っている。

「貴方が、アサシンですね？」

セイバーは事前に風見から聞いていた情報からアサシンに聞いてみると

「如何にも、アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎」

「!?!」

セイバーは事前に風見から聞いていたのだが自ら真名を明かすアサシンに驚きを隠せない。

セイバーは名乗られた以上騎士として名乗り返そうとしたのだが

「よい。。そなたまで名乗り返す必要はない。これは私の流儀に過ぎぬ。我等は剣によってのみ互いを知る。真名のやり取りなど必要ないであるつよ」

アサシンの発言に軽く驚きながらセイバーは返す。

「アサシン！貴様この私がセイバーであるか？」

「ああ、何やら手にしたものは見えぬが・・・この美しい殺気は劍士のモノに相違ない。さあ果たし合おうぞセイバー」

アサシンはセイバーに向け殺気を送る。セイバーは困惑している。目の前の敵からは魔力をほとんど感じない。だから自分の敵ではないと思う反面、直観が舐めてかかると簡単に倒されると告げている。セイバーは不可視の剣、風王結界を力を込めて握り、今にもアサシンに飛びかかろうとしているのを敬介が止める。

「ちょっと待てセイバー！！」

「何ですか？敬介」

セイバーは攻撃しようとしている時に止められ苛立ちながら敬介に止めた理由を聞くと、

「俺達の目的は衛宮君の救出だ。俺が奴をつまき引くから、奴に隙が出来た瞬間に境内に向かってくれ」

「分かりました。お願いします」

敬介に促されセイバーは冷静になり、敬介の作戦に従う事にした。敬介はアサシンの前に立ち言う。

「俺が彼女の代わりに相手になるぜ」

「ほう。これは面妖な。そなた昼間来た男と同じ人間とは違う異様

な気配を感じるぞ」

アサシンは敬介を見て風見と同じただの人間じゃない事に気付いたようだ。

「まあ良い、そなたもセイバーと同じ位楽しめそうだからな」

アサシンがゆらりと近づくのを見て敬介は先手必勝とばかりに飛び込み蹴りを入れようとすが途中嫌な感じがして踏み止まる。それを見てアサシンは感心し敬介に言う。

「よく踏み止まった。今一步踏み込んでいたら、そなたの首を頂戴するところだったわ」

「成程、その何も構えてないように見せているのはブラフか。」

敬介の言葉を聞きアサシンは笑いながら自分の剣の事を語りだす。

「私の剣は外道でな。まず並のものなら最初の一撃で首を落とす。しかしそなたは私の初撃を仕掛ける前に見抜いた。私をもっと楽しませろ。それとも逃げるだけが貴様の取り柄か？」

アサシンの挑発に敬介は自らアサシンの間合いに入って行く。

入った瞬間アサシンの剣が襲う。敬介は瞬時にアサシンの剣の下に潜り込んで拳を放つ。しかしアサシンは敬介のパンチを見切ってかわし再び敬介の首目掛けて剣を振るうが今度は後ろに倒れこんでかわした。

敬介が立ち上がると服の一部が破けて血が流れている。

アサシンはそれを見て不敵な笑みを浮かべるが頬の部分に痛みを感じ触ってみると血が流れている。

それを確認するとアサシンは狂気的な笑みを浮かべる。

「面白い。もっと私を楽しませてくれ。」

「このままだと隙を作るのも難しいな。」

敬介はアサシンを倒すことは愚か隙を作るのも難しいとみると変身をすることに決めた。

アサシンは敬介の様子が変わるのを感じ

「そなたの名前を教えてくださいぬか」

名を聞いた。どうやらアサシンは先程セイバーの名前を聞かなかった時とは違い敬介と正々堂々真剣勝負をしたいらしい。

「神敬介。」

敬介もアサシンの気持ちに答え名前を名乗り。ポーズを取り始める。どうやら変身するようだ。

「大変身!!」

敬介の姿が変わる。そしてベルトの部分に手を伸ばし

「ライドルスティック」

ライドルを取りだし握りしめる。そのまま虚空をXの字に斬り裂いて

「Xライダー」

啖呵を切りながら名乗る。

アサシンは姿を変え威圧感の増したXライダーを見て狂ったように笑いだす。

「くつく、ははははは。面白い。もつと果たし合おうぞ。神敬介・
・いやXライダー」

そしてXライダーのライドルとアサシンの剣が激突する。

Xの剣が剛とするとアサシンの剣は柔。

Xはアサシンに向け剣を振り・・アサシンはそれを受け流す。

まさに一心一对の攻防である。

セイバーは二人の戦いを見て二人の力量に驚きを隠せない。Xもアサシンも剣の腕前はセイバーである自分に勝るとも劣らない。その事実にセイバーは驚いていた。

その時、セイバーはアサシンの隙を見た。Xのライドルをうまく受け流せなかったのか。少しバランスを崩すのをセイバーはその隙を
ついでアサシンを横切り、そのまま寺の門の中に入って行く。
そんなアサシンにXは不審そうに聞く。

「アサシン、わざと隙を作ったな。」

「なーに、そなたが違う事に捉われて戦いに集中できなくては面白くないからな。それに、中にはもう一人鼠が入っている。女狐の驚く顔が目につかぶわ。」

アサシンはセイバーを通したにも関わらず笑っている。どうやら協

力関係といっても仲は余り良好ではないらしい。

「さて邪魔者いなくなった事だし、我が秘剣お見せしよう。」

アサシンはXと同じ段まで下りて来る。そして初めて構えらしい構えを取り

「構えよ。さもなければ死ぬぞ。Xライダー」

アサシンに言われ、嫌な予感がしてすぐに構えるX・・・そしてアサシンが剣を振るうため動く。

「秘剣・・・燕返し!!」

Xは剣を見てかわせると判断し攻撃を仕掛けようとするが剣は一つではなく二つ存在していた。それを見てかわせないと判断すると、攻撃を止めて後ろに転がるようにして落ちて行く。

「何だ!!今の?剣が二つ存在していた!!!」

Xライダーがアサシンの今の剣を不思議そうに考えていると、アサシンが説明し始める。

「燕を斬ろうと思ったのだ。しかし奴等は素早い。ことをなそうには同時に行く必要があったのでな。こうなれば半ば意地よ。そして何度も繰り返すうちに燕を斬ることに成功し・・・我が秘剣は完成した。」

とんでもない事をいうアサシンに、Xライダーはどう技を破ろうか必死に考えていた。そんな中アサシンはさらに階段を降り平地の部

分で止まる。

「先ほどは足場が悪くてな。燕返しは本来三つ。ここならば完璧な燕返しを披露出来るだろう。」

「な!!!」

何と!!!さっきの燕返しはまだ不完全だった。Xライダーはアサシンに脅威を覚える。だが自らアサシンの間合いまで歩いて行く。

「貴様の秘剣・・・俺が破る。」

何と!Xライダーは秘剣を破ると啖呵を切った。

「ふふふ・・・ははははは。面白い。なら破って見せる。」

Xライダーに秘策はあるのか?

キャラ紹介

神敬介

船員志望で沖縄の水産大学に通っていた。帰郷した際、父と共にGOD機関に襲われ死亡するが、父の手によって海底一万メートルの深さにも耐えられる強さを持つカイゾークとして復活した。その後、仮面ライダーXと名乗りGOD機関と戦った。

23話 キャスターの罫(1) (後書き)

次回は士朗SIDEからの始まりです。

24話 キャスターの罫(2) (前書き)

アーチャー対キャスター

24話 キャスターの罫(2)

柳洞寺境内

キャスターの指が伸びる。

「くーそー……！」

士朗は抵抗しようにも体が動かない。手足の自由は無く、感覚も奪われてきている。

「さようなら坊や。悔やむなら、その程度の力量でマスターになった事を悔やみなさい」

体は一向に動かないまま、キャスターの死の指先を受け入れようとしている。

士朗は瞑りたくなってしまふ目蓋を堪えて、全力でキャスターを睨みつける。

「あら。いい子ね。そういう頑張りは嫌いではありませんよ」

士朗の精一杯の抵抗を嘲笑いながら、キャスターは士朗の令呪を奪うため令呪に指をあてた。

「あーー」

……自由だった意識さえ麻痺していく。……遠くなっていく思考の中。

きいーん、と。士朗は背後の山門から、剣と剣が打ち合うような音

だけが聞こえていた。

「!!!」

何十という空を切る音と、目の前の地面を串刺しにしていく無数の矢が空から降ってくる。

キャスターはとっさに後退する。

「な!!!」

キャスターの足元には矢が突き刺さっている。あと一本多ければ、間違いないキャスターの胸を貫いていた。

矢を放った本人は山門の上に立っている。赤い服を着た騎士は、徒手拳のまま地面に降りる。

「ふん。とうに命はないと思ったが、存外にしぶといのだな」

矢を放ったのはアーチャーだった。そのまま士郎の前に立ち、キャスターを阻む。

「おまえ!!!なんで?」

士郎はアーチャーに聞くと、

「なに、ただの通りがかりだ。あまり気にするな。・・・で、体はどうだ。キャスターの系なら、今で絶った筈だが」

士郎はアーチャーに言われ、自分の手足を確認する。

「動く!キャスターの呪縛は解けた、けど」

あれだけ動かせなかった土朗の手足はアーチャーの矢により自由を取り戻していた。

「それは結構。あとは好きにしる、と言いたいところだが。アレに殺されたくなければ、しばらくそこから動かぬ事だ。あまり考えなしに動くと」

アーチャーがキャスターに視線を向けると、キャスターは眉間に皺を寄せ、

「く、アーチャーですって・・・!? ええい、アサシンめ何をしていたの…!」

ヒステリックに叫ぶ。

「見ての通り八つ当たりを食らう事になる。女の激情というのは中々に御しがたい。」

どこまで本気なのか、アーチャーは口元を緩め笑っている。

「さて。キャスター。アサシンならセイバーと・・・先程貴様が対峙していた男を押し留めている。あの侍、大した剣豪だ。むしろ褒めてやるべきではないか？」

「あの男が忌々しい。また私の邪魔をする気。」

キャスターは先程対峙していた敬介も来ている事を知り、さらに顔を歪ませる。

しかしキャスターは敵と対峙しているのに緊張感のないアーチャー

を見て冷静さを取り戻す。

「あなたを止められないようでは英雄とは呼べない。あの男、剣豪を名乗らせるには実力不足です。」

「ほう。その言いぶり・・・やはり協力し合っているのか、君たちのマスターは？」

アーチャーがキャスターに聞くと・・・キャスターは笑い始める。

「私があのだと協力し合う？私の手駒にすぎないあの男と？」

心底可笑しいと笑うキャスターに何かに気付いたのか初めてアーチャーは敵意を向ける。

そんなアーチャーの考えを見抜きキャスターは話を続ける。

「そう、貴方の予感はずしいですよアーチャー。私のマスターは誰とも手を組んでないし。元よりアサシンにマスターなど存在しませんが...！」

「なに？」

キャスターの言い様に士朗が驚く。マスターが居ないとサーヴァントは存在できないからだ。

アーチャーはキャスターを見据え言う。

「キャスター。貴様、ルールを破ったな」

「まさか。ルールを破ってなどいませんわ。だってサーヴァントを呼び出すのは魔術師でしょ。魔術師である私が、サーヴァントを呼

び出して何の不都合があるのです！」

何と、アサシンを召喚したのはキャスターだった！！

「なるほど、ならばアサシンは架空の英雄か。本来呼ばれるべきモノ以外をアサシンにした訳か！だがそれは貴様の独断では無いか？キャスター」

アーチャーの発言にキャスターは驚きつつ、そう結論を出したアーチャーに理由を聞く。

「なに、ただの直観だよ。魔術師が自分より優れた魔術師を使い魔にした場合。ただの主従関係ではあるまい。私が貴様のマスターなら、魔女に自由など与えない。マスター本人ではなく、貴様だけの手足になるサーヴァントの召喚など許可するはずがない。」

アーチャーの結論は正解なのか。キャスターはくつくつと笑いだす。もはや両者にあるのは敵意だけだ。

「納得がいった。セイバーやランサー、ライダーには強力な対魔力があり、魔術が効きにくい。となれば策略に走るのは当然だ。この土地に居を構え、町の間から魂を収集する。そして自らは戦わず、外敵はアサシンに任せ、町中に張った使い魔で戦況を把握する。当然自分のマスターは拘束しているのだろうな？とつくに操り人形という訳だ。」

キャスターは笑みを浮かべる。物言わぬ笑い。

士朗はそんなキャスターを見て心底恐怖した。

「ええ、貴方は正しいわアーチャー。けれど私が貴方達にかなわな

い。というのは間違いよ。」

余裕の表情を浮かべて挑発する。

「ほう、逃げ回るだけが取り柄の魔女が、よく言った。」

「言ったわ。ここなら私は誰よりも強いもの。バーサーカーやセイバーならいざ知らず、貴方程度に遅れはとらないわ」

「面白い。では一撃だけ。それで無理なら、あとはセイバー達に任せよう。」

突風のようにキャスターに向かい走るアーチャー。その両手には対で作られた双剣が握られている。

キャスターの呪文の詠唱など許さない。アーチャーは間合いを詰め、双剣で、キャスターを両断する。

真つ二つにされたローブが舞い散る。アーチャーは苦もなく倒したキャスターの亡骸を納得いかに見つめる。拍子抜けだったのだから。アーチャーは双剣を握ったままだ立ち尽くしている。

士朗はアーチャーの双に見惚れている。

アーチャーの双剣には何の邪気も感じられない。

他者を倒すことを目的とする戦意。

後世に名を残そうとする我欲。

誰かが作り上げた武器を超えようとする競争心。

何か、絶対的な偉業を成そうとする信仰。

そついった名剣、魔剣にはなくてはならない想像理念が、あれにはない。

しいていうなら、ただ作りたから作った。対なる剣、鍛冶師としての自信の意義を問うかのように、

無心で作り上げた無骨の剣。その双剣の在り方に士朗は美しいと感

じてしまった。
キャスターの体が消えていく。それを見届けアーチャーは剣を納めようとした瞬間。

「残念ね、アーチャー・・・まさかその程度なんて」

キャスターの声が響いて、上空からアーチャーを貫こうと光弾が迫る。アーチャーはそれに気付き、それをかわす。

光弾が地面に直撃した瞬間。

地面が赤く焦げている。

もし直撃すればアーチャーの体の半分は持っていかれただろう。

そして、空を見てみるとアーチャーがローブをマントのように広げ空を飛んでいる。

「空間転移か固有時制御か。この境内ならば魔法の真似事さえ可能という事か。見直したよキャスター」

見直しているアーチャーとは対照的にキャスターは心底がっかりだと言い。

「貴方はここで消えなさい。アーチャー」

再びキャスターが攻撃を仕掛けて来る。

アーチャーは舌打ちしその場から離れかわし、境内から脱出しようとするが、アーチャーは未だに突っ立っている。士郎を見てルートを変える。

「貴様、いつまでそこに突っ立っている。」

アーチャーが血相を変えて突っ込んでくる。

「え？」

そこで士朗は気が付く。ここは、とうに安全ではない事に。

「クソ、何だつてこんな手間を」

アーチャーは士朗を抱え、キャスターの魔力弾をかわしながら走る。

「・・・！降ろせバカ、なに考えてんだおまえ！」

「知るものか！いいから黙っている、おまえに言われると自分の馬鹿さ加減に頭を痛めるわ、馬鹿が！」

「馬鹿！？おまえ、自分が馬鹿だって判ってるくせに人のこと馬鹿呼ばわりするのかよ、このバカ！」

「ええい、ガキが貴様は！馬鹿でガキとはもはや手が付けられん、せめてどちらかに決めておけたわけめ！」

アーチャーは士朗と口喧嘩をしつつ、キャスターの攻撃を走りながらよける。しかし、余裕が無いのか、言動が支離滅裂だ。

「いいから降ろせアーチャー」

士朗はアーチャーに助けてもらっているのが納得いかないのか。アーチャーに降ろせと要求し続ける。

「そつか。なら遠慮は要らん」

アーチャーは士朗を蹴飛ばす。

「がっ」

士朗は吹き飛ばが何かにキャッチされる。

「大丈夫ですか？シロウ」

「セイバー！どうしてここに？」

「シロウの異常を感じましたので」

どうやらアーチャーはセイバーが境内に入ったのを確認してセイバーの方に蹴飛ばしたようだ。

「そつえばセイバー、アサシンは？」

「敬介が相手をしてます。」

士朗はアサシンは敬介が戦っているのを聞くと安心する。風見さんと同じ仮面ライダーなら簡単に破れるわけがないと信頼しているようだ。

そこで士朗はアーチャーの方に視線を向けるとアーチャーは、ピタリと立ち止まっている。

いつのまにかキャスターの攻撃も止んでいる。

「あいつ」

それで、ようやく気が付く。アーチャーの周囲が凍結したように固まっている事に。

「気分はどうかしらアーチャー。いかに三騎士といえど、空間そのものを固定化されては動けないのではなくて？セイバーも来たようだしそろそろ止めを刺さして貰うわ」

勝ち誇ったキャスターの声。

キャスターはセイバーの姿を確認し、すぐにアーチャーに止めを刺そう即死の光弾を放とうとしている。

「セイバー。」

「分かりました。シロウ」

セイバーは土朗の言いたいことが分かりアーチャーを助けに行こうとするが、固まっている筈のアーチャーの口が少し動いているのが見えて動きを止める。キャスターも不審に思い聞く。

「何かしらアーチャー。」

「、といったのだ、キャスター」

アーチャーの苛立ちのこめた呟き。そして次の瞬間。硝子が砕けるような音が聞こえ

「たわけ、かわせと言ったのだキャスター！」

アーチャーはそう叫んで跳んだ。どうやら空間の固定は力づくで破つたらしい。

「な、何をバカな」

アーチャーの叫びに戸惑いながら言うキャスター・・・その時、左右からアーチャーの握っていた双剣が弧を描いてキャスター目掛けて飛んでくる。

キャスターは気付き瞬時にかわすがローブが破ける。

そう、アーチャーは士朗を蹴飛ばした瞬間すでに双剣を左右に投げていたのだ。

はなたれた剣は這うように地面を飛び、時間をおいて空中にいるキャスターへと襲い掛かる。それをすべてアーチャーは計算して行った。

「さすがアーチャーっていうところか。」

士朗は感心しアーチャーを探すが今度こそ絶句する。それはキャスターも同じだろう。

アーチャーは弓を構えチェックに入っていた。狙いはキャスター。そして矢にバーサーカーを狙撃した剣が使われている。

「I am the bone of my sword (我が骨子は捻じれ歪む)」

アーチャーの声が大気を揺らす。それを見てキャスターは防御の魔術を展開する。

「カラド・ボルグ」

アーチャーは、その矢から手を放す。

それはアーチャーの宝具なのか。放たれた矢は大気を根こそぎねじ曲げてキャスターの守りを容易く貫通する。

しかしそれほどの攻撃を受けてもキャスターはボロボロの状態にな

りながら生きていた。

キヤスターは魔力の全てを回復に回しているが、直撃したらその場で消滅していただろう。

「な・・なぜ外したのですか。アーチャー」

そうアーチャーの矢は当たっていない。アーチャーが外したのだ。キヤスターが不審そうに聞く。セイバーも不審そうにアーチャーを見ている。

「試すのは一撃だけと言った筈だ。その後はただのおまけだ。それともまさか、約束を違えて当ててほしかったかね？」

「そうですね。ならお言葉に甘えさせて貰いましょう。」

そう言い残しキヤスターは消えて行った。今まで様子を見ていたセイバーがアーチャーに怒りをぶつける。

「シロウを助けて貰ったことには感謝しますが。何を甘い事を言うのです。今こそキヤスターを討つ、絶好の機会だったと言うのに」

怒り狂うセイバーにアーチャーは訳を話す、

「何、我々だけではバーサーカーの打倒は難しい。だから、キヤスターにバーサーカーの打倒を任せようと思った訳だ。さいわいキヤスターは魔力は奪っているが殺すまでには至ってないからな。」

「何を！あなたに誇りというのはないのですか？」

理由を聞くとセイバーはアーチャーに猛反発する。どうやらアーチ

ヤーの手が気に入らないようだ。
その時、士朗が一人寺の中に入ろうとしている。

「貴様、何をしようとしている。」

「キャスターを止めに行くんだ。それに遠坂はそんな方針を取らない。」

士朗は熱くなる。だがそんな士朗とは対照的にアーチャーは冷静に言う。

「そうだな。だからこそキャスターには素早くバーサーカーを退治してもらいたい。お前も知っての通り凜はマスターとして手緩い。彼女がキャスターのようになってくれれば私も苦労はしないのだが」

アーチャーの言い様に士朗は切れて怒りをぶつけ。しばらくするともう言う事はないとばかりに一人行こうとする。

「待つて下さいシロウ」

「止めるな、セイバー、このままキャスターを野放しにしていると無関係な人が犠牲になるんだ。」

そんな士朗をセイバーは止めるが士朗は止まらない。それを見てアーチャーは士朗の足を斬りつけた。

「ぐっ」

士朗は苦悶の声を上げる。

「何を？アーチャー貴様！！」

セイバーがアーチャーに向かい攻撃を仕掛けようとするがアーチャーは止める。

「そう熱くなるなセイバー。致命傷は避けている。これ以上、このバカに引つ掻きまわされるのはごめんだからな。動けなくしてもらった。」

しかしセイバーは納得がいかないのか。まだアーチャーに殺意を向ける。

「やれやれセイバー、私を睨むのは構わないが、ここはキャスターの根城だ。いつまでもここに居たら、君は大丈夫かも知れないが、その小僧は危険だと思うがどうする？」

「……分かりました。ここは引きましょう」

アーチャーはそんなセイバーを何とか柳洞寺から離れるよう説得して、セイバーはアーチャーに殺意を向けたまま士郎を担ぎ柳洞寺の境内を後にすることにした。

柳洞寺外

今にもアサシンはXライダーに向け秘剣を放とうとしているが……その時士郎を抱えたセイバーとアーチャーが山門から出て来る。

「どうやら、救出に成功したようだ。」

それを確認してXライダーは再びアサシンに向かい構えるがアサシンは背を向け

「どっいつつもりだ？」

「去れ。興が失せた。今宵はここまでにしよう。Xライダー次に会った時が我等の決着をつける時だ。」

そう告げるとアサシンは消える。

その様子を見届けているXライダーの隣に士朗を抱えているセイバーが来て

「敬介、目的は果たしました。退却しましょう。」

「分かった。」

Xライダーは頷き柳洞寺を後にするのだった。

24話 キャスターの罫(2) (後書き)

明日から三日ほど家を空ける用事があるので、三日間この小説は休載します。
すいません。

25話 特訓開始

衛宮邸居間

「まったく手当てするのが馬鹿らしく思えるほどの回復能力ね。」

「悪い、遠坂」

凜はアーチャーに付けられた士朗の足を包帯で巻きながら文句を言う。

アーチャーに傷付けられた士朗の足はもうほとんど塞がっている。

「しかし、良く無事に帰って来てくれた。本来俺も行くべきだったが、すまない。敬介」

「礼なんていいですよ。風見さん。俺も貴方に色々助けてもらっていますから」

礼を言う風見に敬介は遠慮しながら答える。

「そつえばリン、アーチャーは？」

セイバーが聞くと凜は多少怒りぎみの様子で答える。

「アーチャーなら屋根の上で見張りをして貰ってるわ。少し頭を冷やせばいいのよ。」

どうやら凜はアーチャーがどんな理由があれ同盟相手の士朗に攻撃

を仕掛けたことにおかんむりのようだ。

「ごめんなさい。士朗、アーチャーには令呪で貴方に手を出さないように命令したからもう手は出さない筈よ。」

何でもなさそうに言う凜に士朗は聞く。

「!!遠坂・・・令呪を使ったのか?」

凜は頷く。どうやら本当に令呪を使用したらしい。

「すまない。遠坂」

「気にしないで、私は借りを作るのが嫌いなだけだから、これで貸し借りは無しね」

実に凜らしい言葉である。どうやら凜の中でこれは貸し借りらしい。だからそれを作りたくないようだ。

士朗は次に敬介の方を向き礼を言う。

「すいません。敬介さん。会ったばかりの俺の為に」

「気にしなくていいよ。俺は当然のことをしただけだし」

敬介の言葉に士朗は感動した。

風見や敬介の仮面ライダーたちの様な危険を顧みず人を助けるために命を懸ける、その姿に士朗は感動したのだ。

「俺も彼らのようになりたい」

士朗は尊敬した眼差しで二人を見ている。
その様子を見ていたセイバーが士朗に口を開いた。

「シロウ、今回のことで良く分かった筈だ。貴方のやり方では、この聖杯戦争を生き残るのは不可能です。貴方のこちらから戦わないという方針を今すぐにでも変え・・・こちらから討って出るべきだ。」

セイバーの言葉に士朗は反発する。

「違う。俺は戦うのを嫌っているんじゃない・・・その、女の子が傷つくのはダメだ。だから、おまえに戦わせるぐらいなら、俺が自分で戦う」

士朗の言葉にセイバーは絶句し、士朗に説教を始める。

「なっ、私が女の子だから戦わせないと・・・貴方は今回のことをまったく反省してないんですか？貴方は今回アーチャーがいなければキャスターに殺されていたんですよ。それに私たちサーヴァントはマスターを守るものです。」

そしてセイバーは風見と敬介を見ながら話を続ける。

「風見たち仮面ライダーという存在はサーヴァントと戦える力があります・・・彼等は例外です。本来ただの人間がサーヴァントに抗う力などありません。シロウの力などサーヴァントにしてみたら紙屑以下です。それと、先程の私を女扱いする言葉を訂正して下さい。私は女である前に騎士でありサーヴァントです。士朗の言葉は私に対しての侮辱です。」

士朗を睨みながら詰め寄ってくるセイバーの剣幕に士朗は押されそうになるが反論する。

「誰が訂正なんかするもんか？そりゃあセイバーは強いかもしれないけど、それでも女の子だろ！これからは俺が戦うからセイバーは戦うな。戦いは俺がする。それなら文句はないだろ、セイバーの望み通り戦うって言ってるんだから」

「な・・・無茶な事を言う人ですな貴方は・・・！キャスターやランサーとの戦いでシロウでは戦いにすらならないと実感しているでしょう！」

お互いが譲らないとはこのことだ。

風見や凜、敬介は呆れながら様子を見ている。

風見は呆れながら二人に言う。

「ちょっと落ち着け。二人とも」

風見の言葉に二人は言い争いを止めて風見に注目する。

「衛宮君、君は戦いたいんだな？」

「はい。」

「なっ」

セイバー絶句しながら風見の言葉に不信感を覚え聞こうとする前に風見はセイバーに視線を向け口を開く。

「なら、セイバー衛宮君に明日からでも剣の稽古をつけてやれ。少

しは戦いの厳しさが分かるだろ。」

「!・・・なるほど、それはいい提案です。」

風見の意図が分かりセイバーは同意するが凜は提案した風見に聞く。

「風見さん。それは心の贅肉よ。そんな気休めでサーヴァントに太刀打ち出来る訳ないじゃない」

「確かにその通りだが、少しは戦闘時の迷いは薄れる。後は本人の決意に賭けるのだが衛宮君の決意が本物なら少しでも戦闘中の死を回避できるだろう。」

風見の言葉に凜は納得した表情をし同意する。

「じゃあ私は魔術講座にしとく。セイバーが体を鍛えるなら、私は知識を育てるわね。明日から本格的に鍛え直してやりますか」

セイバーと凜が張り切るのを呆然と見る土朗・・・やはり納得がいかないのか二人に向け反論するが

「ちょっと待て。俺はいいなんて一言も」

しかし誰も土朗の話は聞いておらず、土朗を余所に盛り上がっている。

それを呆然と見るしかない土朗の背中にポンと誰かが手を置く。振り返ってみると敬介が軽く笑みを浮かべながら土朗に話した。

「まあ、諦めろって、それに悪いことばかりじゃないじゃないか。可愛い女の子二人から指導を受けられるんだ。男冥利に尽きるな衛

「宮君」

敬介の薄情な言い様に士朗は肩を落とし、すべてを諦めた様子になる。

「では、士朗・今日はもう休んでください。私も休みます。明日は朝から道場で汗を流してもらいますから」

セイバーは自分の部屋に行く。、それに続くように皆部屋に休みに行き。一人残される士朗。

ため息をして士朗も今日は魔術鍛錬をせずに休むことにした。

士朗は夢を見ている。

「できれば、誰も悲しませない方がいい。自分程度の力添えて周りが幸せなら、それはこの上なく住みやすい世界だと思うんだ。」

それがキリツグの口癖だった。

俺にとって正義の味方だった男は、そいつ自身の中では、なり損ねた落第者なのだと言っていた。説明されるまでもない。

幼かった自分の世界と大人だったキリツグの世界は違いすぎて、正義の味方っていう奴の合格点が違っていたのだ。子供の自分にとって、目に見えるものだけが全てだった。だからそれを全力で守ろうとしたのだが、キリツグは目に見えない部分まで何とかしたかったのかもしれない。

「若い頃は向こう見ずだね。世の非情を呪う事で、自らを育んでい

た。世界が非常ならば、それ以上に非常になる事を武器にして、理想を貫こうとしたんだよ。」

救われぬモノは必ずある。

全てを救うことなどできない。

千を得ようとして五百をこぼすのなら。

百を見捨てて、九百を生かしきろう。

それが最も優れた手段。

つまり理想だと、キリツグは一度だけぼやいた事がある。

士朗はもちろん怒った。そんなこと言われなくても判っていた。自分自身がそうやって助けられた奴だから。

それでも、それを踏まえた上でみんなを助けるのが正義の味方だと信じていた。理想論でも、それを叶えようとするのが正義の味方だと。

「そうだね士朗。結果は一番大事だ。けどそれとは別に、そうであるうとする心が・・・」

士朗はキリツグの言葉をそれ以上思い出せない。どうやらかなり深い眠りについているようだ。

「シロウ、起きてください。そろそろ朝食ではないですか？」

セイバーの声が聞こえ士朗は目を覚ます。

「なに？」

がばり、と布団から体を起こす。

「寝過した。すまん、すぐに起きる」

シロウは慌てて朝食の準備に行こうとするとセイバーが止め話を続ける。

「・・・私に謝る必要はないと思いますが、ゆっくりしている余裕がないのは事実です。先程桜と凧が揉めていた様子ですから」

「遠坂と桜が揉めていた!？」

訳が分からずセイバーに場所を聞き、居間に急ごうとする土朗だがセイバーに向き。

「おはようセイバー、起こしてくれて助かった」

朝の挨拶をして、今度こそ居間に向かう。

「遠坂!」

居間には桜の姿はなく、遠坂一人がのんびりと天気予報を眺めていた。

「おはよ。朝っぱらから人の名前を呼ぶなんて穏やかじゃないわね」

何かあった?なんて素振りでも振り向く凧。

揉めた風に見えない凧の様子に困惑しながら事情を聞くと、凧は聖杯戦争中は危険だから土朗の家に来るなど説得したらしい。それを聞いて土朗は凧に謝りながら礼を言う。

「悪い。朝から面倒を押しつけちゃった。気分を悪くしただろう、遠坂」

「気にしないで衛宮君。自分の安全第一でしたことだし」

「安全第一？」

「慎二がライダーのマスターでしょ。だから慎二との決着がつくまでは、桜はここに居させないほうがいいのよ」

士朗は納得して再び凜に礼を言うと朝食の準備に取り掛かった。その後風見と敬介も起きて居間に来た。大河も朝食をとりいつものように来た様子だ。

そして大河に桜は当分の間これない事を伝え、大河にも当分の間、家で大人しくするように言うが大河は士朗の面倒は私が見ると譲らず、これからも衛宮邸にご飯は食べにくると言い朝食を食べて学校に行こうとするが玄関で士朗が呼び止める。

「ちょっと、待ってくれ藤ねえ。俺はしばらく学校を休む。」

大河は数秒固まるがすぐに復活して士朗に理由を聞いてきた。

「士朗、どういうこと？学校を休むなんて、どこも悪くないでしょ？」

「頼むよ。藤ねえ・・・しなくちゃならないことがあるんだ。」

まっすぐ大河を見る士朗に大河はため息をつき

「はあくわかつたわよ。学校の方には私がうまく言っとくから後で

ちゃんと事情を話しなさいよ。」

「すまない。藤ねえ」

そのまま大河は納得して学校に行った。

そして、学校に行くために制服に着替えている凜の方に向き

「そういう訳だ。学校の方は遠坂に任せる。」

「はあくわかつたわ。学校の方は私に任せて・・・けど今度からは事前にそうだんしてね」

そう告げると遠坂も学校に向かっていった。

衛宮邸 道場

士朗は稽古の前に道場の掃除をしようと雑巾とバケツを片手に掃除を始める。

そこに風見と敬介が入ってきた。

「衛宮君、俺達も手伝おう。」

風見の申し出に士朗は断る。

「風見さん、俺一人でやりますから休んでいて下さい。キャスターにやられた傷はまだ治ってないんですよね？」

士朗はどうやら風見の怪我が心配で断ったのだが風見は笑みを浮かべ

「気にする事はない。確かにまだ戦闘はきついがほとんど傷は塞がり治りかけている。ちょっとしたりハビリだ。」

「そうそう、気にする事はないよ。俺も一宿一晚の恩義だし。それに一人でここの掃除はキツイだろう？」

「分かりました。お願いします。」

三人で雑巾がけをし思った以上に早く掃除が終わり・・・掃除が終わったと同時にセイバーも道場に来る。

そして士朗とセイバーは竹刀を持ち剣の稽古を始めようとするのだが何を始めるか分からず士朗はセイバーに聞く。

「・・・で、何をやればいいんだ、セイバー？体力作りとか素振り百回とかするのか？」

「いえ、シロウの運動能力は水準に達しています。それにこれ以上肉体を鍛えるのであれば、それは一日や二日で出来る事ではありません。私から教えられることは戦う事だけです。」

セイバーの言葉に士朗は？を浮かべ聞く。

「戦う事だけってどういう事だ。今の口振りからして、戦う方法を教えてくれる・・・って訳じゃなさそうだけど」

「当然です。一朝一夕で戦闘技術など身に付く訳がないでしょう。私が出る事は一回でも多く戦いを味わって貰う事だけです。そもそも私は人に物を教えるのは苦手ですから」

胸を張って言うセイバーに大丈夫かと思いつつセイバーを見るが次の瞬間すでにセイバーは構えており

「では、いきます。シロウ」

「えっ」

士朗は間拔けな声を上げ考えようとするがそんな余裕はなく・・・世界が暗転する。

どうやらセイバーの竹刀が士朗の脳天に直撃したようだ。

どうなる？士朗！

25話 特訓開始(後書き)

次回は士朗とイリヤと・・・微妙に新たなライダーが登場します。

26話 イリヤと士朗・動き始めたデスショット

衛宮邸 道場

「ぐう」

士朗の呻き声が道場内に響く。

その後、士朗はどれだけセイバーの攻撃で気絶しただろう。

「くう」まだまだ

士朗はセイバーに向かい竹刀を振るうが簡単にかわされ

「甘いです。シロウ」

セイバーの構える竹刀が士朗の脳天に再び直撃した。

「があ」

士朗は再び気絶をする。……しばらくして意識を取り戻し再びセイバーに挑もうとするが

「まあ待て衛宮君。そろそろ休憩したらどうだ。」

風見が休憩するように士朗に声をかける。セイバーも風見の意見に同意する。

「そうですね。確かにシロウも疲労してきているようですし休憩をいれるべきですね」

「待て俺はまだ大丈夫だぞ」

士朗はまだやれるというのが一緒に見ていた敬介も止める。

「まあまあ衛宮君。君は疲れで動きが鈍ってきている。そんな状態で鍛錬しても、せつかくの修練も無駄になるし」

「分かりました」

三人に休憩するように言われ士朗は休憩を入れる事にした。

そして風見が持って来ていたお茶を飲みながら士朗は風見と敬介に質問する。

「そういえば、風見さんと敬介さんはどんな訓練をしていたんですか？」

「私も気になります。貴方達の動きは洗練されていました。とてもいい師に恵まれたんですね」

士朗の質問に興味を示しセイバーも聞くと風見が答える。

「ああ、俺たちには特訓に付き合ってくれた人がいるからな」

風見は昔を懐かしむように語り始める。

「俺や敬介はある組織と戦っていたが敗北したこともある。」

「ええ！風見さんや敬介さんが敗北したことがあるんですか」

士朗は二人が負けたことがあるという事が信じられないようだ。セイバーも軽く驚いた表情になり聞く。

「貴方達が敗北！サーヴァントと互角に戦えるのに・・・余程の強敵と相対していたようですね？」

「ああ、どれも手ごわい敵だった。そんなとき特訓に付き合ってくれたのがおやつさんだ。」

「おやつさん？」

風見の言うおやつさんが誰なのか分からず士朗は？になるが風見の話は続く。

「ああ、名は立花藤兵衛、俺達仮面ライダーにとって父の様な人だった。」

「あっ」

風見のだったという言葉に士朗はもう風見の言う人物はいないという事に気が付く。

「気にしないでくれ。俺が話しているんだから」

風見は士朗の考えている事に気付く。セイバーは目を閉じ風見と敬介に向け言う。

「その人物とは一度お会いしたかった」

「ああ、ありがとうセイバー」

セイバーに礼を言い風見は話を終えた。

そして士朗は再び稽古をしようとしたが、昼前になっていて事に気が付き。稽古を中断して昼ご飯の材料を買いに外に出る事にした。敬介はついて行こうとしたが士朗は昼だから大丈夫だと断り上着を着て一人商店街にと向かった。

商店街

士朗は四人分の昼食の材料と、軽い和菓子。今日の夕食は凜の担当なので買わなかったが明日の朝食の材料を買い、一通り買い物済ませ自転車に乗り商店街を離れようとするが、くいくい、と後ろから服を引っ張られる感じがし振り向く。

「！？お前は」

振り向くと笑顔を浮かべる白い髪の少女イリヤが立っている。

士朗は後ずさり咄嗟に身構えるが、イリヤからは殺気というか、敵意がまったく感じられない。

「よかった。生きてたんだね、お兄ちゃん」

嬉しげな笑みを浮かべるイリヤ。士朗は身構えつつイリヤに聞く。

「どこで、やる気か」

「？おかしいことを言うんだね。お日さまが出ているうちに戦っ

やダメなんだから」

不満そうに言う。イリヤに戦う意思がないのを感じ土朗は警戒心を少し解く。

「お前は確か？」

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。長いからイリヤでいいよ。それでお兄ちゃんはなんて名前？」

「俺・・・？俺は衛宮士朗だけど」

「エミヤシロ？なんか言いにくい名前だね、それ」

士朗の名前の発音が難しいのかちゃんと言えないイリヤに土朗は

「いいよ、覚えにくかったら士朗でいい。そっちが名前だ」

「シロウ？なんだ思ったよりカンタンな名前なんだね。」

笑顔を向けて来るイリヤに土朗は完全に警戒心を解く。

「そうそう。今日はバーサーカーも置いてきたし、お兄ちゃんだつてセイバーを連れてないから。おあいこ。・・・ね、お話しよ。私ね、話したいコトいっぱいあったんだから」

無邪気に手を握ってくるイリヤに土朗は敵であることを忘れイリヤと共に話をするため公園に向かった。

商店街から離れた小さな公園

「・・・で何を話すんだ？」

士朗はイリヤと公園のベンチに座り聞くが

「シロウに任せるわ。レディをエスコートするのは男の責任でしょ？」

えへへ、とばかり笑って、イリヤは士朗に肩を寄せる。それは馴れ馴れしいというレベルではなく、寒いから身を寄せて来る小動物みたいな自然さだ。士朗はそれを見てある事に気付きイリヤに聞く。

「イリヤ。もしかして、寒いのか」

「え？うん、寒い。わたし、寒いのが苦手なの」

はあ〜と白い息をだすイリヤを見て士朗は上着を脱ぎイリヤに渡す。

「これを着てれば少しは寒さも和らぐだろ。」

「?!・・・えへへ、ありがとうシロウ」

イリヤは最初は困惑したがすぐに笑顔になり上着に抱きつき士朗に礼を言う。

「そつえばイリヤは今どこに住んでんだ。」

士朗は話題を変えイリヤに聞くとイリヤは笑顔で西の方向を指差し説明する。

「あつちにおつきな森があるよね。お爺さまのお爺さまが建てた洋館があるの。アインツベルンのマスターはね、聖杯戦争の時はそこに住むんだって」

笑顔で説明しているイリヤに士朗も笑顔になり風見たちと食べるために買ったどら焼きを取り出しイリヤに渡す。

「食べるか。安物だけど」

「・・・えっと。その、くれるの?」

「やる。一人で食っても旨くないから、二人で食おう」

はら、とどら焼きをイリヤに差し出す。イリヤは戸惑いながら、始めてみるであろう東洋の和菓子を手に取り

「えへ。うん、ありがとう!」

嬉しそうにどら焼きを食べ始めた。そしてしばらく話が続きイリヤは

「バーサーカーが起きちゃった帰らなきゃ。アマゾンも待ってるし」

「アマゾン?」

イリヤが言うアマゾンという言葉に士朗は?を浮かべる。

「私の最近出来た友達よ」

イリヤは笑顔で答え今度こそ帰る為に士朗と別れようとしたが……
!!! 変な男たちが周りを取り囲んでいる。

「お前たち、何者だ？」

士朗は取り囲んでいる男たちを睨むが男たちは士朗を見ずイリヤに視線を集中させている。

イリヤは士朗の後ろに回り抱きつく。その様子を見て男の一人が口を開く。

「イリヤスフィール……貴様にはあのお方の為に我々と同行してもらおう。それとサーヴァントや助けを呼ぼうとしても無駄だ。ここには誰も近寄れないようにしてある。貴様がサーヴァントを呼ぶ間に貴様を気絶させて無理やり連れて行く事も可能なんだからな。それに前みたいに余計な邪魔は入らないうちに貴様を捕らえたい。大人しく同行しろ。」

男の言い様に士朗は驚きつつイリヤを守るため前が出る。

「なんで、こいつらサーヴァントの事を……いやそれより今はイリヤを守らないと」

士朗は決意し男に向かい突撃するが

「ふっ」

ばき「ぐっ」男の拳一つで吹き飛ばす士朗……イリヤはそんな士朗に近寄り体を揺さぶりながら叫ぶ。

「お兄ちゃん！大丈夫？」

「俺は大丈夫だから。イリヤは逃げる。」

しかしイリヤは逃げず倒れている士朗に抱きつき逃げようとしな
い。男はイリヤに近付き手を伸ばして来る。それを見て士朗は起き上
がろうとするが男のパンチのダメージもあり起き上がれない。

士朗はもう駄目だ・・・と思った時ヒーローは現れた。

いきなりバイクで男に突っ込んでくる男、士朗にはその男に見覚え
があった。

男は士朗の前に立ち笑みを浮かべる。

「二日ぶりだな。衛宮君」

「一文字さん！」

そう一文字隼人がバイクで男に突っ込んだのである。イリヤは不審
そうに一文字を見ている。

「さあ〜て。こんな可愛い少女を狙うとはどういう用件だ。」

一文字は男たちに聞くが男たちは一文字の登場により動揺している。

「貴様は一文字隼人どうしてここに!!!」

「俺が知るかよ。」

不敵な笑みを浮かべ続ける一文字に男たちは服を脱ぐと黒タイツの
姿になる。

「お前ら、シヨツカの戦闘員」

「違う。我々はデスシヨツカーの戦闘員だ。貴様が来てても関係無い。我々は任務を果たす。」

男たちは一文字に向かって行くが

「へっ、なめるな。」

一文字は変身する必要はないのか。変身せずにパンチとキックだけで応戦する。戦闘員は一文字のキックとパンチだけでばったばったと倒れ液体のようになり消えていき最後の一人になった。

「くそおーこのままではあのお方に申し訳が立たない。」

「お前には聞きたいことがある。あのお方とは何者なんだ。」

「それを私が言うと思うか。各なるうえは」

男は注射器を取り出し自分に刺す。その瞬間筋肉は膨れ上がりがああと理性もなくし一文字に殴りかかってくる。一文字は後ろを見て倒れている。士朗と傍にいるイリヤを抱えジャンプしてその場から離れる。

「いい子だから。ここにいろよ」

一文字はイリヤを見て言う。

「貴方何者？」

不審そうに一文字を見るイリヤ、しかし一文字は

「衛宮君を頼んだぜ。」

告げると暴走した戦闘員に突っ込み蹴りを入れるがびくともしない。逆にパンチを受けて吹き飛んでしまった。

「へっ・・・やるな。なら・・・変身！！トオー」

一文字はポーズと変身の掛け声とともに姿をかえる。緑の仮面に赤マフラーと赤い手袋をしたバツタのような姿、仮面ライダー2号へと

「行くぜ。ライダーキック」

2号のジャンプ蹴りが当たり多少暴走した戦闘員は怯むがすぐさま掴み2号を投げる。しかし一文字は投げられながら回転して華麗に着地した。

「なるほど、風見の言うとおりパワーはあるみたいだな。しかし」

その言葉と共に2号は暴走した戦闘員の後ろに回り掴んでそのまま技へと入る。

「動きが直線的だ。ライダーきりもみシュート」

掴んだまま2号は回転する。2号の周りから風・・・いや竜巻が巻き起こり2号はそのまま上空に投げ付けてジャンプする。

「ライダーキック！」

上空で2号の蹴りが直撃してそのまま暴走した戦闘員は爆発した。

それを見届け2号は変身を解き、士朗達の元へと向かう。
イリヤは戦闘が終わりこちらに向かってきた一文字に向き言う。

「貴方もマスクドライバーなの？」

「まあな。それよりここは危ない。衛宮君と一緒に家まで送ろう。」

一文字の提案にイリヤは断りを入れる。

「大丈夫よ。すぐにこの場から離れて家に帰るから……ありがとう。マスクドライバー」

一文字に礼をいれイリヤは立ち去ろうとするが倒れている士朗を見て

「お兄ちゃんもありがとう。バイバイ」

別れを告げ今度こそ帰って行く。

一文字はやはり家まで送ろうとしたが士朗に視線を向けた少しの間にイリヤは消えていた。

それを見て一文字は士朗を抱えバイクにのせて衛宮邸へと向かう事にした。

アインツベルンの城

イリヤは男たちに襲われて一文字に助けられた後すぐに城に帰った。そして城に入ると何やら原始的というか。野性児のような格好をした男が心配そうにイリヤに近づく。

「イリヤ、帰るの。遅い、オレ心配」

かた言に喋る男にイリヤは笑顔を向け謝り抱きつく。

「ごめんなさい。アマゾン心配掛けて。」

イリヤと親しそうに話す。この男は何者であるのか？

26話 イリヤと士朗・動き始めたデスショッカー（後書き）

次回はサイドストーリーイリヤとアマゾンにご期待下さい

サイドストーリー イリヤとアマゾン(1) (前書き)

イリヤの心とアマゾンの優しさの話

後一ツ謝ることがあります。

微妙に前話の士朗とイリヤに被るシーンがあると思いますがご了承ください。

サイドストーリー　イリヤとアマゾン（1）

SIDE　イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

私は正直アインツベルンの悲願なんてどうでもいい。

私の目的は、私を裏切ったあの男に復讐するために冬木市で起きる聖杯戦争に参加している。

・・・だけど私を裏切ったあの男は死んでいた。だから私は彼の養子である衛宮士朗に復讐する事に決め、バーサーカーでお兄ちゃんたちに復讐に向かった。

だけど、噂のマスクドライダーには邪魔をされバーサーカーの命を一回奪われた。

そして、遠坂凜のアーチャーにも一回殺されたのだ。

しかもお兄ちゃんは自分のサーヴァントのセイバーを庇い重傷を負った。私は訳が分からず、バーサーカーと共に城に帰る事にした。

あの時のお兄ちゃんの行動が私には理解できないから。

SIDE　OUT

商店街近くの小さな公園

イリヤは一人公園のベンチで座っていた。

それは何の為にだろう、イリヤはただ待っているだけなのだ。

衛宮士朗を・・・約束を交わした訳でもないのにただ士朗を待ち続けていた。

イリヤはマスターという敵同士ではなく。

ただ士朗と話をする為だけに期待を込めて一人ベンチに座っている。

・・・しばらく時間が経ったであろう。イリヤは諦め城に帰ろうとすると、この寒い中、ジャングルに住んでいる人達が着るような服を着た男、まさに野蠻人みたいな男がイリヤを笑顔で見ている。

イリヤは不審に思いベンチを立ち移動するが、なぜか男は笑顔を浮かべイリヤの後ろに付いて歩く。

しばらくイリヤは無視を決め込み男から離れるように公園を歩きまわっていたが・・・それでも付いて来る男に腹が立ったのか男に向け怒りをぶつける。

「ちょっと、なんで付いて来るのよ？」

イリヤがお怒りの顔で男に聞くが、それでも男は笑顔を絶やさず口を開く。

「オレ、アマゾン」

笑顔で自己紹介してくる男にイリヤは怒りが収まらないのか再び男に付いて来る訳を聞く。

「だから私は名前を聞いているんじゃないくて、どうして付いて来るかを聞いているわけなの」

「オレ、お前心配。元気がなかったから」

「えっ」

笑顔を止め、真剣な表情で言う男の急な言葉にイリヤは毒気を抜かれ、少しの間固まったが・・・少し経つと冷静になり

「どうして私が心配なの？私とあなたはただの他人よ？」

イリヤは聞くと、

「関係無い。子供、一人悲しそうにしているの見てると、オレ悲しい」

アマゾンの言葉と彼の純粹そうな眼を見てイリヤは警戒心を解いて

「そう、私はイリヤ、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン・
・長いからイリヤでいいわ」

アマゾンに自分の名前を名乗った。イリヤの名前を聞くとアマゾンは再び笑顔になり

「イリヤ。いいナマエ」

イリヤの名前を褒める。

イリヤは再び公園のベンチに戻る。アマゾンもそれに付いて行き、いつの間にかアマゾンと楽しそうに喋り始めた。

「それにしても、アマゾンの名前って変ね。顔は日本人みただけ
ど。アマゾンってどこで住んでいたの？」

イリヤは東洋系の顔立ちをしているのにアマゾンという名前に疑問を感じ聞くと

「オレ、南米のアマゾンで住んでいた」

「ウソ、アマゾンってそんな遠くに住んでたの」

アマゾンの住んでいる場所が日本から遠い場所だと分かりイリヤは驚きながら納得する。

確かにアマゾンは日本人にしては変な格好をしており、何より日本語がすべてかた言だからだ。

しばらく話を続けていたがいつのまにか変な男たちがイリヤ達を取り囲んでいる。

イリヤは不審に思い男たちを見るが軍服を着た男が前に出てきて口を開く。

「貴様が、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンだな。私の名はゾル・ゾル大佐、デスシヨツカー最高幹部の一人だ。」

「デスシヨツカー？」

イリヤはゾルと名乗った男が言ったデスシヨツカーという組織が何なのか分からずゾルに聞いた。

「貴方達、何なの？」

「フッフ、貴様はそれ以上知る必要はない。あのお方が貴様を必要としているから、貴様を迎えに来ただけだ。」

ゾルは告げると周りの男にイリヤを捕らえよと命令する。

男達は服を脱ぐと黒タイツの様な格好になりイリヤを捕らえようと迫ってくる。

「ガウ」

アマゾンが叫ぶと向かって来る男に噛みつきイリヤを守る為にイリヤの前に立ち男たちを牽制する。

「アマゾン！」

「大丈夫、イリヤ、オレ守る。」

そんな二人の様子を見ていた。ゾルは怒り、後ろを向き声を上げる。

「ええい、約に立たん奴らめ。もういい戦闘員ども引っ込め、蜘蛛男、さそり男、あの男を殺してあの子供を捕らえよ。」

ゾルが後ろに向き叫ぶと、まさにゾルが呼んだような奴等が出て来た。蜘蛛と人間を足した様な怪人とさそりと人間を足した怪人が、イリヤは始めて見るであろう怪人に恐怖し震え始める。

「何なの、あれ！！！」

二人の怪人はイリヤに迫る、それもアマゾンはイリヤを守るため立ち向かうが先程の戦闘員とは違い、怪人たちは全然力が違い、アマゾンは噛みつくが怪人は効いた様子も無く、アマゾンは袋叩きの様な状態になり、ついには怪人の攻撃により吹き飛ばされてしまう。

「アマゾン！！！」

イリヤの悲痛の音が響くが、怪人たちは関係無いといわんばかりにイリヤに手を伸ばして来る。

「！！！」

イリヤは目を閉じ覚悟を決めたが・・・怪人に吹き飛ばされたアマゾンが血塗れになりながらも走って来てイリヤを掴み上空へと思い切り投げ飛ばす。

「へっ・・・きゃあああああ!!」

イリヤは意味が分からず間抜けな声を出すがすぐに事態に気付き大声を上げる。

アマゾンは投げ飛ばしたイリヤに向かいジャンプ・・・!!

「!!ええ、アマゾンなの?」

何とアマゾンの姿は緑色の怪人の様な姿になっているではないか?そのままアマゾンはイリヤを掴んだまま家の屋根、もしくはビルの上に飛び移り公園から離れて行った。それを見てゾルは

「くうくまさかあいつが仮面ライダーだったとは・・・ええい追え追え、絶対に逃がすな」

怪人と戦闘員に命令を出す。

ゾルの命令で怪人と戦闘員はアマゾンとイリヤを追いかけるのだった。

サイドストーリー イリヤとアマゾン(1) (後書き)

すみません。あと一回続きます。

後、あのお方の名前を募集中です。何かいい名前があれば教えてください。

サイドストーリー インヤマンマン(2) (前書き)

今回ちょっと短めです。

サイドストーリー イリヤとアマゾン(2)

廃工場

アマゾンはその後イリヤを連れて、ゾルの手から廃工場へと逃げ込んだ。

アマゾンは廃工場に着くと怪人から受けたダメージがあるのか元の姿に戻り倒れ込む。

イリヤは最初変身したアマゾンに驚いていたが・・・アマゾンが心配になり近づく。

「大丈夫？アマゾン」

イリヤが心配そうに聞くと、

「大丈夫。スグ治る」

「ちょっと。そんなに怪我をしているのに、治るわけじゃない。」

「ZZZZZZZZZZ」

「ちょっと！アマゾン？」

アマゾンは寝始める。

イリヤは呆れつつアマゾンを見ていると

「ウソ、もう治り始めてる！！」

アマゾンが怪人にやられた傷がもう治り始めてるではないか。魔術を使った形跡は何もなかった。

イリヤは驚きつつアマゾンを探るように見ているとあることに気が付く。アマゾンの腕の上の部分にある腕輪を……

「これって、宝具並の代物じゃあ!?!?」

アマゾンの腕に装却されている腕輪からはサーヴァント達が持つ宝具と同じ位の神秘を感じたからである。

……その後イリヤは廃工場にある綺麗な布を探してアマゾンの傷になっている部分に巻く。傷が治っていてもイリヤはアマゾンが心配の様子だ。

「何で?私、こんなにアマゾンの心配してるんだろ?」

イリヤ自身なぜ会って間もない他人をここまで心配するのか理由が分からなかった。

……しばらく経つとアマゾンは目を覚まし体を起こす。隣ではずっとアマゾンを見ていたのかイリヤがアマゾンに寄り添うように寝ている。外を見て見ると暗い。もう、夜のようだ。

アマゾンが起きて、少し経つとイリヤも目を覚ます。

「起きたんだ。アマゾン」

イリヤはアマゾンの元気な姿を見て笑顔になる。

「イリヤ」

アマゾンは名前を呼び、イリヤの前に両手をくっつけて奇妙な形を

取る。

「何・・・これ??」

イリヤは？になり、アマゾンの行動の意味を聞くと、アマゾンはいリヤが巻いてくれた布を少し見て笑みを浮かべ答える。

「これ「トモダチ」という意味、イリヤ、オレ、寝ている時、傷の手当してくれた。イリヤ、オレの大切な友達」

「?・・・ありがとう。・・・うん。えへ、私とアマゾンは大切な友達よ。」

イリヤは笑顔になる。この時イリヤは思った。こんな心臓の底から嬉しい気持ちになったのなんていつぐらいだろう。イリヤの脳裏に自分を裏切ったあの男と亡き母の姿が浮かび上がり・・・しばらくしていきなり泣き始める。

アマゾンはいきなり泣き始めたイリヤを見て慌てながら聞く。

「どうした！イリヤ、どっか痛むのか？」

「ううん。そんなんじゃないの。ちょっと昔を思い出して」

「何か。悩みあるならオレに話す。オレ、頭よくない。でも、イリヤが悲しむと、オレも悲しい。」

アマゾンの言葉にイリヤは暖かみを感じ、自分の事を話し始める。

「私ね。ある男に復讐するためにこの町に来たの。」

「!」

最初のイリヤの物騒な言葉に驚くが、黙ってイリヤの話を聞くことにする。

「その男は私の父親なの。あいつは私の所に帰ってくるっていったけど、結局帰ってこなかった。そしてお母様も死んで、私は一人ぼっち。」

イリヤは話しながら涙を流し続ける。

「でも、私を捨てた父親は既に死んでた。．．．でもね、養子をとっていることを知って、私を捨てた父親の代わりに復讐に行っただけど．．．私、良く分からなくなっただの。だからお兄ちゃんと話をする為に公園で待っていたんだけど、いいのかな？」

少しは泣き止み、アマゾンに聞くと笑顔で答える。

「イリヤ、話すべき、じゃないとイリヤきつと後悔する。」

「うん」

二人が話をしていると、

「ふん、茶番劇はその位にしておくんだな。」

ゾルがいつの間にか近くまで来ていた。アマゾンはそれを見てイリヤを守ろうと立ち上がり前に出ようとするが．．．イリヤがアマゾンを止め前が出る。

「私に何の用？」

「しれたこと、貴様には我々と無理矢理でも同行して貰う。やれ」

ゾルの号令の元戦闘員達がイリヤに迫るがイリヤは慌てずにじっとしている。そんなイリヤをアマゾンは守ろうと前に出ようとする。するとイリヤの前にかい剣を持った巨人が現れ止まる。

「バーサーカー、行きなさい。」

イリヤの言葉と同時にバーサーカーは迫ってくる戦闘員達を一人一人、蹂躪していく。

その様子アマゾンは驚きの表情で見ている。逆にゾルは落ち着いている。

「ほう、それがバーサーカーか。なるほど良い性能だ。真正面から戦うのは得策ではないな。」

ゾルは何やら目で合図を送ると

「えっ！何？」

何も無いのにイリヤの体が浮き上がる。

「イリヤ！！」

アマゾンがイリヤの元へ行こうとすると

「！！ぐ」

蜘蛛男とさそり男が現れアマゾンに拳と蹴りを入れアマゾンは吹き飛ばす。

「何なのこれ？・・・！！」

イリヤの後ろにカメレオンと人間を足した怪人がいきなり現れる。

「良くやった。カメレオン男。」

イリヤはじたばたするが振りほどけない。その様子を見て主の危機を感じ取ったのかバーサーカーは動きを止める。それを確認してゾルはイリヤの元へとゆっくりと歩いてきた。

「さてと、お譲さん。まずはあの物騒なデカぶつを引っ込めて貰おうか」

「いやよ。私を連れていくってことは、私を殺す気はないんでしょ。」

イリヤの強気な態度にゾルは笑いだす。

「そんな強気な態度をとっていてもいいのかな。やれ」

ゾルは目で蜘蛛男とさそり男をみて命令を出す。

二人の怪人はゾルの命令の意味を理解して倒れているアマゾンの前に行き袋叩きし始める。

「！！止めて」

先程の強気な態度と打って変わってイリヤは悲痛の声を上げる。

「ならば、早くあのデカぶつを引っ込めろ。」

「わかったわ。バーサーカー。先に帰っていて」

イリヤはバーサーカーに命令するが動かない。どうやらイリヤが危険だから離れる気はないようだ。

「お願い。バーサーカー」

G u u u u . . . イリヤは何と呪詛を使用してバーサーカーに帰るように命令を出す。バーサーカーは抗っているが . . . 呪詛の効果効き始めたのか。霊体化して一人帰って行く。それをイリヤは見届けてゾルを睨みながら言う。

「これで文句ないでしょ」

「まあ、いいだろ。止めろ」

ゾルの命令で怪人はアマゾンへの攻撃を止めた。

「さてと、我々と同行して貰おう。」

「いいわ。どこにでも付いて行ってあげるわ。」

それを聞くとゾルは手を上げる。それと同時にカメレオン男はイリヤの拘束を解き、廃工場の外へと出ようとする。アマゾンはそれを見て傷ついた体をよじる様にして顔を上げイリヤに叫ぶ。

「イリヤ」

「じゃあね。アマゾン」

「!」

別れを言う。イリヤの手には先程アマゾンがした奇妙な手の形とまったく同じ形である。

そして振り向かず、そのままゾルたちと廃工場を出ようとするイリヤの横顔から涙みたいなのが流れているのに気付く。それを見て無理にでも体を起こそうとするが……その時!!
廃工場が爆発し崩れ始めた。

「何なの!これアマゾン」

瓦礫の下敷きになろうとしているアマゾンを見てアマゾンの元へと行こうとするイリヤだがゾルに手を掴まれ止まってしまう。

「アマゾン」

イリヤは悲痛の声を上げるが無情にも廃工場は崩れアマゾンは下敷きになった。

イリヤは泣きながらゾルを睨み怒りをぶつける。

「ウソつき。何でアマゾンを殺したの!!」

泣きながら問うイリヤに、ゾルは笑いながら答える。

「フフフ、あの者は我等が宿敵仮面ライダーの一人だ。生かしてお

く道理はない。」

ゾルの非情な言葉にイリヤはアマゾンが仮面ライダーである事に驚くこともせずにゾルに飛びかかるうとするが

「あっ！」

戦闘員の一人に首の裏の部分に手刀を食らい意識を失う。

「よし、連れていけ。」

イリヤが気を失うのを確認しゾルは戦闘員に命令を出した。

廃工場跡地

崩れた瓦礫の一部分が浮き上がる。そこから先程瓦礫の下敷きになったアマゾンが出て来た。

「イリヤ、泣いてた……つらい……悲しい……でも……泣くな。俺がいる!!俺が行く!!」

アマゾンは立ち上がりイリヤを連れ去ったゾル達の後を追った。

頑張れアマゾン！イリヤを救出するために!!

サイドストーリー イリヤとアマゾン(2) (後書き)

すみません。この話で終わらせる事ができませんでした。後一回続きます。

それと、ゾルはこのまま倒した方がいいですかね。それとも生かしておいた方がどちらがいいでしょうか？

サイドストーリー イリヤとアマムン (3) (前書き)

イリヤとアマムンのサイドストーリーはこの回で完結

サイドストーリー イリヤとアマゾン(3)

とある森の中

イリヤを乗せた車は町はずれの森に入っていた。車が揺れ始めて、イリヤは車の揺れで目を覚ます。

「……ど……」

イリヤは車の外を見るが自分が住んでいる。アインツベルンの城がある森と違う場所でイリヤは不安を隠せずにいる。そんなイリヤの様子を見ている一人の男

「フフフ、ようやくお目覚めかね。」

ゾルは冷笑を浮かべつつイリヤを見ている。

「……貴方は……よくもアマゾンを」

イリヤは目の前の男ゾルを見て怒りがこみ上げて来る。自分の初めての友達であるアマゾンを殺した張本人だから。

しかしゾルはイリヤの殺気ともいえる怒りを正面から受けているにも関わらず鼻で笑い口を開く。

「それがどうした。あの男は我等の仇敵である。仮面ライダーの一人、アマゾンライダーだ。生かしておく道理はないと言った筈だ。」

残酷な表情で語るゾルにイリヤは恐怖を覚えると共に心の中で驚く。

「……！！アマゾンってマスクドライバーだったの！！」

アマゾンが自分のサーヴァントを一回殺したV3と同じ仮面ライダーである。事実には驚いたのだ。

イリヤは一瞬驚いたが、やはり驚きよりも怒りが上回り殺気を込めてゾルを睨む。

ゾルはイリヤの殺気など気にせず、イリヤを攫った。理由を話し始める。

「さて、ここからが本題だ。我々が貴様を攫った理由は一つ。」

「何よ？」

イリヤはゾルを睨みつつ聞くと、ゾルは答える。

「何、簡単な事だ。今、冬木市で起きている聖杯戦争……その戦いに勝てば手に入るといふ聖杯を、あのお方、……いや、アルヴァロン様は必要としている。」

ゾルの言葉にイリヤは鼻で笑い馬鹿にしたように答える。

「馬鹿じゃないの。聖杯はマスターとサーヴァントしか手に入れないんだよ。」

しかしゾルは知っていると云い。冷静に話を進めていく。

「もちろん、その位知っている。だが、それは表面的な話だ。我々の目的は君の中にある聖杯……つまり心臓が必要なのだよ」

「……！！」

イリヤは驚く。なぜ目の前の男は私が聖杯だという秘密を知っているのか。訳が分からなかった。

イリヤの驚きを余所にゾルの話は続く。

「しかし、今のままでは正常に機能しないことも知っている。だからまず君の命令で君のサーヴァント、バーサーカーには自害して貰おう。」

「!？」

今までも驚いていたが今度こそ本当に驚いた。ゾルは聖杯の仕組み・つまりシステムまで理解しているのだ。

「貴方、どうして・・・そこまで知っているの？」

「何、ちょっとした情報源だ。それよりも令呪で命令して貰おうか。」

「イヤ、絶対にイヤ」

イリヤは断固拒否するがゾルは冷笑を浮かべながら言う。

「まあいい。アジトに戻ったらお前を洗脳して無理やりでもやらせばいいのだからな」

残酷な笑みを浮かべ笑うゾル。イリヤは恐怖と自分の不甲斐無さから頬から涙が流れ始める。

イリヤは車の窓から外を見て願った。

「誰か助けて。」

イリヤの脳裏に浮かぶのはアインツベルンのメイドである。セラとリズ・・・次にバーサーカーと衛宮士朗・・・最後にアマゾンの姿が浮かび上がった。

「アマゾン・・・私の初めての友達。・・・助けてアマゾン」

イリヤは心の中でアマゾンに助けを求める。・・・！！
その時、外から音が聞こえ・・・どんだん音が近付いて来る。

「何だ。この音は？」

ゾルは不審に思い車の後ろを見て見ると、野性的というみtainな独特なバイクがゾルたちが乗っている車に近付いてくる。

イリヤも後ろを向きバイクを見て見ると乗っている人物が分かり笑顔になる。

「アマゾン！！・・・良かった。生きててくれて」

アマゾンが自分のバイク、ジャングラーに乗りゾル達の乗る車を追って来たのだ。

イリヤはアマゾンが生きててくれた。・・・その事実が嬉しくて先程の絶望の涙と違い、嬉しさと喜びで涙を流す。

アマゾンのバイクはゾルの乗る車に隣接し、車に蹴りを入れると車がバランスを崩し森の木にぶつかる。

「きゃあ」

「おのれ！！？奴はどこに行った。」

ゾルは車がぶつかり止まると同時に車の外に出て見るがアマゾンはいない。そして再び車に戻ると運転していた戦闘員が気絶しイリヤが消えていた。

「・・・！？しまった。」

慌てて外を見るとイリヤを抱えたアマゾンがいる。

「くうく、蜘蛛男、さそり男、カメレオン男、奴を殺して、あの女を取り戻せ。」

怪人たちが現れ、アマゾンに迫る。アマゾンは抱えているイリヤを降ろし前が出る。

「アマゾン」

イリヤは心配そうにアマゾンを見るが、アマゾンは振り向き

「大丈夫。オレに、任せる。」

イリヤに優しく言うとポーズを取り始める。

「オレ、大切な友達イジメル奴、許さない。アーマーゾーン」

手を交差し雄たけびを上げると最初は目が赤くなり、そのまま姿を変える。仮面ライダーアマゾン、アマゾンライダーへと、

「猪口才な、アマゾンライダーなど始末しろ。」

ゾルの命令で最初は蜘蛛男が糸を出しアマゾンに攻撃を仕掛けるが簡単にかわしアマゾンは蜘蛛男目指して走る。

「きーきー」

アマゾンは叫び蜘蛛男の横をすれ違う。

「があ」

次の瞬間蜘蛛男が真っ二つになった。アマゾンは一瞬間の間に腕にある爪で蜘蛛男を切り裂いたのだ。

そのまま、アマゾンは近くにいるさそり男に攻撃を仕掛けようとする。

しかし、さそり男も迎え討つため自身の爪をアマゾンに仕掛ける。

「ガウ」

すぐさま、アマゾンは横に回避。さそり男の爪は森の木に当たり、溶け始める。

さそり男はアマゾンの方に向き、爪を翳して言う。

「次は俺の爪で貴様を溶かす。」

さそり男はそのままアマゾンに攻撃するが、アマゾンは冷静に対処し、爪をかわし、さそり男に噛みつく。

「ガウ、ガウ」

「うがあああ」

さそり男の悲痛な叫びが響き、そのまま動かなくなった。

アマゾンにはさそり男を倒し、辺りを見渡すがカメレオン男はいない。

「ガウ」

アマゾンは後ろから衝撃が走る。

カメレオン男は能力で透明になり後ろからアマゾンに攻撃したのだ。カメレオン男はアマゾンが倒れるのを確認し、再び消えて攻撃しようとするがアマゾンに掴まれる。

「なぜ、俺の居場所に気付いた？」

カメレオン男は動揺している。

「オマエ、匂い覚えた。」

「何だと、馬鹿な」

アマゾンはカメレオン男の匂いを頼りに捕まえたのだ。カメレオン男は驚いているがアマゾンは爪で切り裂き止めを刺した。

イリヤは最初は心配だったがアマゾンの圧倒的な力を見て心底安心した。

「良かった。アマゾンが無事で」

ゾルは怪人たちの情けない姿に顔を歪ませアマゾンの前に立つ。

「不甲斐無い奴らめ。まあいい、貴様は私が始末する。私の真の姿を見せてやる。」

うおーん。ゾルは雄たけびを上げると姿を変え。黄金狼の姿へと

「行くぞ。アマゾンライダー」

ゾルが告げると姿が消える。

「!?!?・・・ぐう」

アマゾンは消えたゾルを捜していると何かの衝撃が来てその場で体が回転した。

アマゾンは立ち上がろうとすると目の前にゾルが現れる。

「フッフ、私の姿がまさか見えなかったのか。・・・私の体はアルヴァロン様の手により再改造され以前より遥かにパワーアップした。貴様など私の相手ではない。」

再びゾルの姿が消える。今度は後ろからアマゾンは倒れる。再び起き上がると何か嫌な音が聞こえアマゾンはジャンプしてその場を離れ木に隠れる。

「フッフ、無駄だ、無駄だ。」

ゾルは指先から弾丸を出してアマゾンに攻撃している。

「ガウ」

木に隠れているアマゾンは木の上に飛び移り

「ガウガウ」

ゾル目掛けて爪で切り裂こうとするが

「フフフ」

ゾルは消えてその場から居なくなりアマゾンの後ろに衝撃が走り、アマゾンには吹き飛ばす。

「アマゾンー」

今まで様子を見ていたイリヤは吹き飛んだアマゾンが心配でアマゾンの元へと走って行く。

「アマゾンー!!大丈夫」

「イリヤ、来たらダメ、ここ危険」

アマゾンはイリヤに逃げるように言うがイリヤはアマゾンの近くから離れない。

「きゃあー!!」

「イリヤー!!」

その時、ゾルが現れイリヤの腕を掴む。

「フ・フフ、ハハハハハ、馬鹿な小娘だ。大人しく逃げていれ
ばいい物を」

「イリヤを放せ」

アマゾンが叫ぶがゾルは笑い続けアマゾンに向け話し始める。

「フフフ、そんなに小娘が心配か？アマゾンライダー……この小娘は今起きている。聖杯戦争の為に作られた化け物だというのに」

「！？イヤ、止めて」

イリヤは必死な形相でゾルが話すのを止めさせようとするがゾルは話を続ける。

「この小娘は、ただ今回の聖杯戦争の為に生かされてきた。ただの道具だ。ただそれだけの為に存在しているのだからな。なぜなら小娘の心臓が聖杯だからな。だから、貴様を守るうとしてもこの女は近々死ぬことになるんだぞ」

「！！！！グス。」

イリヤはついに泣き始める。ゾルの言ったことは真実だから、自分は近々死ぬ運命にある。だからこんな私なんて守るはず何てないとアマゾンは自分を見捨てて逃げ出すと思ったからだ。

「関係無い。イリヤ、俺の友達。絶対にオレ、死なせない」

アマゾンの予想外の言葉に涙を流しつつアマゾンに助けを求めた。

「助けて、アマゾン」

イリヤの涙と助けを求める声にアマゾンは頷き。今付いている腕輪と似た腕輪を取り出した。

「ガガの腕輪よ・・・ギギの腕輪に・・・力をくれ!!」

腕輪と腕輪は一つになりアマゾンの腕の爪が伸びる。

ゾルはイリヤを放し迎え討とうとアマゾンに迫る。

「スーパー大切断」

アマゾンとゾルが擦れ違う。

「ガウ」

アマゾンが胸の部分から血を流しその場で膝を着くが

「がはあ」

ゾルの胸はアマゾン以上に切り裂かれ重傷だ。

ゾルは胸を押さえつつアマゾンを見て怒りの言葉を漏らす。

「おのれ、アマゾンライダー。この屈辱忘れんぞ。」

逃げ出した。イリヤは立ち上がり膝を着いているアマゾンの胸にとび付く。

「うっ、うっ、何で追って来たのよ。うっ、お別れまで言ったのに」

アマゾンの胸で心の底から泣き叫ぶイリヤ、アマゾンはそんなイリヤをそっと抱き締めポンポンと軽かたたく。

泣きながら文句を言うイリヤだったがアマゾンの胸から顔を出し笑顔で礼を言う。

「ありがとう。アマゾン助けてくれて」

「イリヤ、オレの友達。助けるの当然」

「うん。」

イリヤの笑顔が輝く。その時、アマゾンが倒れる。

「……！アマゾン」

イリヤは倒れたアマゾンを驚きつつ心配そうに名前を呼ぶと

「ZZZZZZZZZZ」

アマゾンは疲れたのか寝ている。

イリヤは最初は呆れていたが次第に笑顔になりくすくすと笑い始める。

イリヤは思った。

「あの時のお兄ちゃんの行動、今なら少しだけ理解できるよ」

あの時士朗がセイバーを守り重傷を負ったことである。

大切な人を守りたいという気持ち、イリヤは初めてその気持ちを理解したのだ。

アマゾンの友達を大切にするという。温かみのある気持はイリヤの中にある。氷と雪の様な白い気持ちを溶かし始めたのかもしれない。

キャラ紹介

アマゾン

本当の名前は山本大介という。生後まもなく飛行機事故によって南米アマゾンに両親と共に遭難した。

大自然と共に育ったため当初は言葉を話すことが出来なかった。仲間が傷つくことを極度に嫌い。仲間や友の為に戦う優しい青年である。アマゾンの腕にはギギの腕輪が長老バゴーによって移植されている。腕輪は神経からアマゾンと繋がっているため、外すとアマゾンの命がない。他のライダーと違い機械的な改造人間でなく、生態的な改造人間である。

サイドストーリー イリヤとアマゾン(3) (後書き)

すいません。ちょっと長引いてしまいました。後、ディゴッドさんの意見を使わせて貰いました。ありがとうございます。

後、ゾルは生かしておくことにしました。

27話 ライダーの提案（前書き）

本編再開です。

「後から取りに行くのでかまいません。」

士朗は買い物袋に気付き持って来てくれた一文字に感謝する。次に士朗は先程の男達について一文字に聞くことにした。

「一文字さん、さっきの奴等何者なんです？」

「え」と

一文字はこの件に関しては余り士朗たちには関わって貰いたくないため、言葉を濁すが、

「一文字さん、教えてください。さっきの奴等普通じゃなかった。サーヴァントの事についても知っていました。何者なんです。」

士朗の視線を見て一文字ははあゝとため息を吐き、

「わかった。降参だ、帰ったらちゃんと話すよ。」

一文字は士朗に説明することにした。

話している内に一文字のバイクは衛宮邸へと辿り着く。士朗は家に入る前に

「一文字さん。俺が白い髪の娘と話していたのは黙って下さい。」

「?・・・何かあるんだな。分かったよ。」

一文字は最初は理由を聞こうとしたが士朗の目を見て追及するのを止めて二人で家に入る。

衛宮邸 居間

「遅いです、シロウ!」

「悪い、遅くなった。」

お腹が空いているのかセイバーは少しばかりご機嫌斜めだ。

「あいかわらずだな。セイバーちゃんは」

一文字は笑みを浮かべ士朗の後ろから姿を現す。

「一文字先輩!」「一文字さん!」

風見と敬介は突然の一文字の来訪に驚きの声を上げる。

「よう、・・・何だ?敬介もいるのか」

一文字はイリヤの事だけうまく隠し、士朗となぜ一緒にいるのか経緯を三人に説明する。

「一文字先輩、デスシヨッカーと遭遇したんですか?」

「ああ、偶然な。」

風見は次に一文字の調べたデスシヨッカーの調査結果を聞くと

「一文字先輩、奴等の狙いはわかりましたか?」

「いや、良く分からないが……多分聖杯戦争に関係していると思う。」

一文字は風見と敬介に自分の考えを伝えたと二人は手を顎に当てて考え始める。

そこに、三人の会話を黙って聞いていた。士朗とセイバーが三人の会話に割り込み追及する。

「一文字さん、さつきも聞いたけど奴等何者なんですか？デスシヨッカーって？」

「そうです。聖杯戦争に関係あるのであれば聞き捨てなりません。」

二人の追及に敬介は

「まあまあ、落ち着いて」

二人を止めるが止まらない。さらに追及は激しくなり風見はため息をつき

「わかった。凜ちゃんが帰ってきたらちゃんと説明する。いいですね一文字さん、敬介」

「ああ。俺も説明するって衛宮君と約束したしな」

「俺もいいと思うよ。聖杯戦争が関係しているなら士朗君たちも無関係じゃないと思うし」

風見は二人を確認を取り、士朗たちには凜が戻ってから説明すると

約束して二人に納得してもらった。
五人は遅い昼食を食べて士朗は剣の鍛錬の続きをする為にセイバーと道場へ向かった。

夕方

凜が不機嫌な様子で帰宅してくる。

「よう、凜ちゃん」

「文字はそんな凜の様子を気にせず挨拶する。」

「えっ、文字さんがなんで士朗の家に居るの」

「さあ、何ででしょう」

「(怒)」

「文字の軽い態度に凜の不機嫌さは増していく。
そんな凜の様子に気付いてか」

「・・・そ・・・そういえば遠坂、何でそんなに機嫌が悪いんだ。」

士朗は凜の機嫌がさらに悪化する前に理由を聞くことにしたようだ。

「慎二の奴が私と同盟を結ぼうって、しつこく言い寄って来たのよ。」

「

凜は怒り口調で士朗に不機嫌な理由を話すと

「!!!・・・慎二の奴が」

士朗は驚き、どうしたのか凜に聞くと

「あんまり、しつこいんで一発ぶん殴ってやったわよ」

凜は拳を両手で握っている。まだ、怒りは収まらないようだ。

士朗は最初は凜の怒りを鎮めようと必死だったが慎二の行動について意味が分からず一人考え込んでいる。

・・・しばらくして凜も怒りが静まったのか。夕食の準備に取り掛かる事にしたようだ。

その後、大河も夕食を食べに家に来て七人という大人数で夕食食べて大河も帰り。

士朗は慎二の事も気になっていたが凜もいるので風見たちにデスシヨッカーについて聞くことにした。

「風見さん。デスシヨッカーについて聞きたいんですけど」

「ああ、約束だからな」

風見達三人はデスシヨッカーについて自分たちが知っている全てを士朗達に説明し始めた。

所変わって間桐家

慎二は一人イライラしながら自分の部屋で座っている。

「何で、正当な魔術師の家系である。僕じゃなくて衛宮なんかと遠坂は手を組んでいるんだ。」

昼間の凜との一件を思い出し怒りが収まらないようだ。

「おい、ライダー」

「何でしょう。慎二」

慎二がライダーを呼ぶと霊体化を解き姿を現せる。

「結界の発動はまだ出来ないのか」

「ええ、まだ完全ではないので」

「くそ、約に立たない奴だな」

慎二は怒りの矛先をライダーにぶつける事にした。
しかし、ライダーは

「結界の発動を早める事は可能です」

「!!! 本当か！ライダー」

「ええ、魔力を補充すれば可能です」

「!!! ……しかし僕には魔力は」

慎二は落胆しその場でへたれ込むがライダーは軽く笑みを浮かべ

「何も、マスターから魔力を補充するだけが手段ではありません」

慎二に違う手段を提案する。ライダーの提案を聞くと慎二は笑みを浮かべ

「何だ、そんな簡単な方法があるなら早く言ってくれよ。・・・最近美綴の奴、僕に偉そうな態度をとるんだ。」

慎二は立ち上がりライダーを連れて家を出る。
ライダーの提案したその方法とは？

27話 ライダーの提案（後書き）

次回、新たなライダー登場
ストロンガーにご期待下さい

28話 正義の戦士・・・その名は！！

数時間前

学校屋上

慎二と凜が二人屋上に立っている。

慎二が凜を屋上に呼び出したのだ。

「なあ遠坂、衛宮なんかより僕の方が数段約に立つぜ。僕と同盟を組もうじゃないか。」

慎二は自分と同盟を組むように凜に持ちかけるが、凜は無表情なまま慎二に返す。

「私は、貴方と手を組むつもりなんてないわ」

慎二との同盟の話は凜は拒否した。

「！！何でだよ？あんな奴より正当な魔術師の家系である僕の方が約に立つはずに決まってるのに、何で断るんだ。」

凜の行動に慎二は納得せず怒鳴りながら凜に言うつと、

「悪いけど私は貴方が信用できない。貴方なんかより衛宮君の方が何倍も信用できるわ」

凜は理由を説明するが慎二はそれでも納得せず凜に詰め寄るが

バキ「グフ」

凜は慎二に向けて拳を顔面に叩きこんだ。

「しつこいのは嫌いよ。・・・それと一つ忠告しとくけど、もしあんたが学校の結界を発動したら私は貴方をマスターとして殺すわ。それだけは覚えておきなさい」

凜は慎二に忠告してツカツカト歩き屋上を後にした。

一人屋上に取り残される慎二の顔は怒りに満ちている。

「何だよ、僕のこと馬鹿にしゃがって」

一人屋上で怒りの言葉を吐き続ける慎二。

放課後弓道場

慎二は憂さ晴らしのために部活動に参加する事にした。

慎二は弓で的に目掛けて射を放っている一年を見て

「おい一年！ささつとどけよ。このノロマ！僕を待たせるなんて何様のつもりだ。おまえらが的当てなんて十年早い。練習の邪魔だ帰れ！！」

今までの怒りと鬱憤を一年にぶつける。一年は泣きながらその場を離れていく。

慎二は考えながら自分の弓を持ち的に目掛けて射を放とうとする。

「みんな僕のこと馬鹿にしゃがって！僕は選ばれた人間なんだ。邪魔する奴は許さない」

怒りを込めて矢を放つ慎二だが狙いは的から大きく外れる。

「ちっ」

慎二は狙いが外れて不機嫌さが増し隣で矢を構えている一年の胸倉をいきなり掴んだ。

「さつきから、うるさいんだよオマエ！おかげで集中できないじゃないか！」

理不尽な怒りを一年にぶつける慎二だが

「よしな！慎二・・・射を外したのは自分が未熟なせいだろ。それを人のせいにするなんてみつともないよ」

美綴綾子によって止められる。

「なんだよお前には関係無いだろ」

慎二は綾子の登場により仕方なく一年を放す。放された一年は逃げるように綾子の後ろに隠れた。

「慎二、何に荒れてんのか知らないけど、これ以上問題を起こすなら部を止めて貰うよ。」

「はっ、何を馬鹿な。僕は副部長だぞ、お前なんか辞めさせられ

るわけないだろ」

慎二は綾子のセリフに全く動じず逆に笑い始めるが、綾子は真顔で慎二に忠告する。

「悪いけど、これは脅しじゃないからね。あんたの行動は職員会議でも問題になっててさ、本来なら即退部な所を部長の私が責任をおいて処遇を預かる事になったんだよ。」

「ぐっ」

そこで初めて慎二の顔が焦りだし始めた。

「あんたが態度を改めないなら本当に辞めて貰うからね」

綾子は慎二を睨みながら忠告する。

「何を、マジになってんだよ美綴……後輩に厳しく当たるのだから指導の一環だろ。なあ……みんな」

慎二は後輩たちに視線を向け言うが、後輩たちは無言のまま慎二を見ている。どうやら後輩たちは慎二には辞めて貰いたいらしい。

慎二はそれに気付きすぐさま頭を後輩たちに下げる。

「すまなかった。みんな許してくれ。」

慎二は頭を下げるが屈辱の余り唇を噛んでいる。そして何事もなかった様に部活動は再開された。

時間は戻り間桐家

慎二は顔を歪んだ笑みを浮かべつつライダーを引き連れて玄関まで歩いて行く。

「フッフ、僕のことを馬鹿にした。償いをさせてやるぞ・・・美綴
覚悟しろよ」

「フッフ・・・ハハハハハハ」

笑いが堪え切れないのか笑いながら慎二は家を出た。
それを家の片隅で桜が心配そうに慎二を見ていた。

「・・・兄さん」

桜の悲痛な叫びが家に響くのだった。

夜の街

一人の少女が怯えながら必死に逃げるよう走っている。

少女が後ろを振り向くと

「!!!」

鎖のような物が自分に目掛けて飛んでくる。

「!!!あぐ・・・!!!」

鎖は足に絡みつき少女は転んだ。

少女は恐怖で顔を歪めつつ後ろを見て睨む、誰か女性らしき人が立っている。

「な・・何者よ？あんだ！！」

黒い影に隠れていた女性が少女の叫びに寄り姿を見せる。その姿は両目に眼帯をした紫色の髪的女性・・つまりライダーが現れる。

「何とか言いなさいよ」

少女は叫ぶがライダーは無言のまま、少女に向け鎖を放ち腕を拘束する。

少女は拘束を解こうと腕を動かすが鎖は外せない。ライダーはそんな少女の様子を見て冷笑を浮かべ一歩一歩近付き・・少女の前に立つと少女が転んだ時怪我をした顔の頬の部分に手を当て血を取り舐めて初めて口を開く。

「血は命を宿す。魂の象徴・・私の為にその血を捧げていただきましょう」

ライダーは口を開け少女の首筋に噛みつきとうとどんどん少女に近付いて行く。

「ひ・・・・・！や・・やめ・・・！！！！」

少女は涙を流しつつ止めてくれるようライダーにお願いするが、その願いは当然聞き届けられることもなくライダーに首筋を噛みつかれてしまった。

「い……いや」

叫ぶがライダーは血を吸うのを止めない。少女はそのままショックで気を失ってしまふ。

……しばらくして血を吸い終えたのかライダーは少女の首筋から自身の歯を抜き口を拭う。

その様子を見てたのか影から一人の男が笑みを浮かべつつ、ライダーの前まで歩いて来る。

「首尾はどうだ？ライダー」

「上々です。シンジ」

どうやら男は慎二のようだ。慎二は気を失い倒れている女性に向かい足を踏みつけ口を開く。

「僕のことを馬鹿にするからこんな目に会っただよ。美綴」

どうやら少女は綾子のようだ。

「ハハハ、少しは自分の立場が分かったか」

慎二は笑いつつ、今だ綾子を踏み続ける。

「ハハハハハハ……んっ……何だこの音は？」

慎二は不審な音が聞こえ綾子を踏んだまま音が聞こえる方角に向く。

「この音バイクの音か……ライダーちゃんと周りに人がいないか

確認してるんだろ」

「はい、この辺一帯は人の気配がない・・逐一チェックしてしましたから、だから人が近付けばすぐに気付く筈なんですけど」

「まあいい、今近付いてきている奴の魂もついでに吸っておけライダー」

「分かりました。シンジ」

最初は人が近付いて焦っていた慎二だったがすぐに冷静になり狂気的な笑みを浮かべながらライダーにそいつも襲うように命令を出す。

慎二の命令により近付いて来る人間を待つライダー・・・・バイクの音がどんどん近付き、ついに慎二達がいる場所に辿り着く。

「おい、そいつを襲ったのはお前らの仕業か。」

バイクに乗っているのはSの文字があるシャツを着ている男性だ。

男はバイクを止めて降り、慎二達の所まで歩く。

ある程度近付くと歩くのを止めて慎二を睨み視線を慎二が綾子を踏んでいる方に移し口を再び開いた。

「おいガキ、その汚ねえ足を今すぐどけねえとぶつ殺すぞ」

「何？この僕に命令するわけ」

慎二は余裕の表情で男を見ている。

「聞こえなかつたか。最近のガキは耳まで遠い上に馬鹿らしいな」

「なっ」

慎二は男の罵倒が我慢できなかつたのか。先程の余裕の表情から怒りの表情に変わりライダーに命令を出す。

「もういい、生かしておいてやろうと思ったが止めだ。ライダーそいつを殺せ」

慎二が命令を出すとライダーは無言のまま男に迫る。

人間を超えたスピードで近付いて来るライダーを前に男は不敵な笑みを浮かべ、自分に付いている手袋を外す動作をし始める。ライダーは男の突然の行動を不審に思いつつも鎖付き短剣を取り出し男に攻撃をしようとうと男の前まで迫り腕を振り上げるが男はいきなりライダーの手が振り下ろされる前に手をライダーの体の一部に当てる。

「ぐっ」

ライダーの体に激痛が走る。

「へっ、問答無用ってかい」

「なっ・・・貴方その腕は!!」

ライダーはいきなりの激痛に耐え男を睨むと男の銀色な機械的な腕を見て驚きの声を上げる。

「そっいう、お前こそ噂のサーヴァントだろ。この町について早々お目に掛かるとは思わなかつたけどな」

「なっ、私を知っている。貴方一般人じゃありませんね。それに貴方から感じる、その薄い気配はあの男と同じ」

ライダーは最近戦った一文字のことを思い出す。

「へえ、あんたと戦ったライダーがいるのか」

男の発言に疑問を持ちライダーは男に話す。

「もしか、貴方はあの仮面ライダー2号と名乗った男と同じ……」

「何だ。お前一文字さんと戦ったのか。」

「やはり、貴方は……あの男と同じ存在ですか。」

ライダーは目の前の男を一文字と同じ存在だと確信し、男から距離を取り武器を真剣な表情で構える。

男もライダーの気配が変わったのを感じたのか表情を引き締めてライダーを見据え構える。

その二人の様子を見ていた慎二は命令を出す。

「ライダー、一般人に何を手間取っているんだ。早くそいつを殺せよ」

慎二の命令を聞いてライダーは四方八方に鎖付きの短剣を男に向け投げ付ける。

「仕方ないな。……」

男はライダーの攻撃を後ろに跳びかわすとポーズを取り始める。それを見てライダーは一文字が変身した記憶が甦り、攻撃を仕掛け変身を妨害しようとした。

「させません」

ライダーの攻撃が男の近くに刺さり地面の一部が砕け煙がでた。それを見て離れていた慎二が男を殺したと思いライダーに近づく。

「やったか。」

「いえ、分かりません。手応えはあつたと思いますが」

慎二とライダーは男がいる場所を見ている。男が死んでいるか確認するためだ。そして煙が晴れ見て見ると男が居ない。

「どついう事だ。ライダー奴はどこに行ったんだ」

慎二に言われるまでもなくライダーはすでに辺りを捜しているが男は見つからない。

「くそお。隠れてないで出て来いよ……！！口笛？」

慎二はその場で叫んでしばらく経つと口笛が聞こえて来た。

「よお、ガキ俺ならここに居るぜ」

民家の屋根から男は姿を現し、そのまま再びポーズを取り始める。

「！！しまった」

ライダーと男の距離は大分離れているため、ライダーは男の変身の邪魔をすることが出来ない。

「変身！！ストロングァー！！」

男は姿を変える。角を生やし緑の眼、ボディーの部分にはSの文字がある。

「天が呼ぶ・・・地が呼ぶ・・・人が呼ぶ・・・悪を倒せと俺を呼ぶ・・・聞け悪人ども・・・俺は正義の戦士仮面ライダーストロングァー」

男が慎二達に向け見栄を切るとその場からジャンプして慎二達の目の前に着地する。

慎二は目の前にいるストロングァーを震えながら見ている。

「何でだよ・・・何でみんな僕の邪魔をするんだ・・・何でこんな所に仮面ライダーがいるんだよ」

「シンジ、彼らを知っているんですか？」

ライダーは慎二が目の前の存在について知っているようなので聞くが、慎二はライダーの言葉が耳に届いてないのかストロングァを直視して動かない。

「・・・しばらくして慎二はようやく落ち着いたのか。ライダーを見て命令を出す。」

「ライダー、そいつを仮面ライダーを全力で殺すんだ」

慎二の命令を受けてライダーは目の眼帯を外してストロンガーを見る。

「ぐっ、何だこれは」

ストロンガーは体が重くなるのを感じ戸惑い驚く。

ライダーは無言のまま戸惑っているストロンガーに近付き蹴りを入れる。

「ぐっ」

「フッフ、どうです。私の魔眼の力は」

ライダーの言葉に蹴りを入れられ倒れているストロンガーはこの状況を打開する方法を閃く。

「なるほど、奴の目のせいで動きが鈍るのか。・・・それなら」

ストロンガーは立ち上がり再びライダーに視線を向ける、

「くっ」

やはり体がうまく動かない。

「フッフ、このまま優しく殺してあげます。」

動けないストロンガーにライダーはゆっくりと一歩一歩近付いて行く。

しかし、それはストロンガーの狙い通りだ。

くへへへ、もつと近付いてこい。こいつは俺の能力を知らない筈だ。そこに勝機がある。」

ストロンガーの思惑通りライダーはストロンガーの前に付き動きを止め武器を取り出し笑みを浮かべる。

「さて、これでお終いです。」

そのままストロンガーを串刺しにしようと腕を振り上げるが

「馬鹿な奴だ、不用意に近付き過ぎだ」

「負け惜しみを」

ライダーはストロンガーの言葉を気にせずそのまま腕を振り下ろしてストロンガー体の一部に武器が接触した瞬間

「うわああああ」

体全体に激痛と痺れが駆け巡る。

その瞬間ライダーの視線が逸れてストロンガーは体の自由を取り戻す。ライダーは未だに激痛が走るのかその場で立ち尽くしている。

それを好機とみたストロンガーはジャンプしてそのまま蹴りの体制に入る。

「食らえ、電キークー！」

「きゃあぁー」

ライダーの体に先程以上の痺れと衝撃が走りその場から十mくらい吹き飛んだ。

「ぐうー貴方の体は何なんです？」

重症ながらも蹴りを入れられた部分を押さえてライダーは立ち上がりストロンガーに疑問をぶつけると

「へっ、俺は電気エネルギーとカブトムシのパワーを重ね合わせた改造人間だ。つまり電気人間。だから、言っただろ。不用意に近付き過ぎだと」

「くう」

劣勢になっているライダーを見て慎二は

「ライダー何をやっているんだ。早くあいつを殺せよ。」

命令を出すライダーは重症で動けない。しかし、マスターの命令なので動かない体を無理やり動かし戦おうとするライダー。それを見てストロンガーの怒りが慎二に向いた。

「おいガキ、手前、命令ばかりしてないで自分で動いたらどうなんだ。ああ〜ん」

「ひい」

ストロンガーの怒りを受けて後ずさり、逃げようとする慎二だが腰が抜けた様子で動けないようだ。

そんな慎二の無様な姿を見てもストロンガーの怒りは収まらない。

「ガキ、俺が怖いか。・・・でもなお前もそこに倒れているガキに同じ思いを味あわせたんだ。俺はお前を一発ぶん殴らねえと気が収まらねえ」

拳と拳を合わせポキポキト鳴らしつつ慎二に迫るストロンガーだったが身の危険を感じて後ろに跳ぶ。

ストロンガーが飛び退くと一人の老人が現れ慎二の前に歩いて来た。

「やれやれ、情けない孫じゃの。」

「お爺さま!!」

この老人こそ慎二と桜の祖父間桐ゾウケンである。

「お前は人間じゃないな何者だ？」

改造人間であるストロンガーは目の前の老人が人間じゃないと確信する。目の前の老人からは色々な人間の血の匂いを感じたからである。

「フオフオフオ。そういうお前こそ人間では無いじゃろ。わしのことをとやかかくゆわれる筋合いはないわい。・・・それよりもほれ慎二よ、この爺が盾になってやるから早く逃げんか」

「くそ」

慎二はゾウケンの言われるままに立ち上がり逃げだした。

ストロンガーは慎二を追いかけようとしたが目の前の老人に背中を見せたら危険だと感じて追いかけずその場で身構えるが

「まあまあ、落ち着かんか。わしは戦いに来たわけじゃない。ただ孫を助けに来ただけじゃ。もし貴様がわしに手を出さんというならワシから貴様にどうこうする気はない。」

「わかった。俺もここは引かせて貰う。」

ストロンガーはゾウケンに危険な香りを感じて逃がしてもいいのかわかんないが気絶している綾子が気になりここは引くことにしたのだ。

「話の通じる御方で良かったわい。」

ゾウケンが告げると影に同化するように消えて行った。

それを見届けてストロンガーは変身を解き綾子を担いでバイクで病院に向かう事にしたのだ。

28話 正義の戦士・・・その名は!!!(後書き)

ストロンガー参上!!!

サイドストーリー　ライダー達の墓参り（前書き）

今回は何となく書きたったので書いたのだから短いです。

サイドストーリー　ライダー達の墓参り

数日前

一人の男が高速をバイクで突っ走っている。

男の名前は城茂・・またの名を仮面ライダーストロンガー。

茂は高速から降りてまず花屋に向かった。

花を買つと、そのままバイクを走らせ神社に着いた。

どうやら目的地は神社だったらしい。

茂は神社の境内に入り墓地のある方へ歩いて行く。

目的地に着くと先着が複数居た。

「茂か。お前もおやつさんに挨拶しに来たのか？」

「はい、本郷さん達もおやつさんに挨拶を？」

「ああ、この機会におやつさんに会いに来るところかと思つてな」

「そうそう、余り俺達日本にいないから、こんな機会じゃないとおやつさんに挨拶に来る機会なんてないし」

本郷猛、結城丈二、神敬介、三人が墓石の前に立っている。

墓石には立花籐兵衛ノ墓と書かれている。

三人とも茂と同じように立花籐兵衛、おやつさんの墓参りに来ていたのだ。

茂は三人と軽く挨拶すると花屋で買った花をおやつさんの墓の前に置いて目を閉じた。

他の三人も同様に目を閉じている。

「おやつさん、また戦いが始まるみたいだ。今度は生き残れないかもしれない。ずうずうしいかも知れないがおやつさんの力をまた俺達に貸してくれ」

茂はおやつさんに両手を合わせて会話をし、しばらくはその場に立っていたが茂はもう一人会いに行く人物がいるので、もう行こうと思いい人に挨拶することにした。

「それじゃあ、本郷さん、結城さん、敬介さん、俺はもう行きます」

「もう行くのか？」

「ええ、もう一人挨拶しに行かないといけない奴がいるんで」

「ああ、わかった。次に俺達が会うのは戦場だな。死ぬなよ茂」

「ええ」

茂はそのまま三人に別れを言い、もう一つの目的地に向かう事にした。

三人は茂を見送った後、

「じゃあ、本郷さん、結城さん、俺は一足先に冬木市に向かいます。」

「ああ、俺も結城も今の一件が終わったらすぐに向かう。」

「敬介、気をつけるよ。」

「ええ、大丈夫、俺は死にませんよ。」

敬介もおやつさんに別れを言い立ち去って行った。

「じゃあ、俺達も行くか。結城」

「ええ、本郷さん」

二人も墓場から去ろうとする、その時、

「頑張れよ、仮面ライダー」

何か声が聞こえて来る。

「今の声・・・まさか」

「おやつさん!!!」

本郷と結城は再びおやつさんの墓を見て笑みを浮かべて

「おやつさん。ありがとうございます。俺達は絶対に勝って、再び貴方に会いに来ます。それまで失礼します。」

本郷と結城は今度こそ立ち去って行く。

「負けるなよ、仮面ライダー」

幻聴なのか分からないがおやつさんの声が二人の耳に響いて来る。二人は笑みを浮かべたまま、その場を後にするのだった。

海の崖上

城茂はもう一人の人物に会いに来ていた。目の前には岬ユリ子乃墓と書かれた気が建てられている。

「・・・よお、今日はお前と同じ花を持って来たぜ。」

茂は笑みを浮かべたまま墓の前の土を掘り始めて持ってきた花を埋める。

「花言葉は・・・へ・・・そんなの俺が知るわけないか」

そのまま茂は立ち上がり墓を見たまま口を開く。

「お前の所に来る前におやつさんに会って来たぜ・・・ユリ子また戦いが始まるみたいだ。今度こそお前の所に行くかもしれないが・・・俺も悪運が強いからな。お前が残した平和を俺は必ず守っていく。・・・じゃあまた会いに来るぜ」

告げると茂は立ち去ろうとバイクの置いてある場所へ歩いて行く。バイクに乗ると茂は最後にもう一度墓を見て

「じゃあな」

一言告げるとバイクで冬木市に向かって行く。
新たな戦場へ

キャラ紹介

結城丈二

優秀な科学者でIQ201もある。悪の秘密組織デストロンの優秀な科学者であり将来大幹部の呼び声も高かったが自分の地位を脅かせることを恐れたヨロイ元帥により、裏切り者として硫酸のプールで処刑されそうになったが、助手達の手により助けられる。しかし、その時に右腕を失ってしまい、失った右腕の改造手術を受けて、ヘルメットを受取りライダーマンへの変身能力を得てヨロイ元帥に復讐するために戦う事を決意する。V3とは最初は衝突していたが後に和解して共に戦った。V3の最終話においては東京を救うためにブルトンロケットに乗り込んで自爆し、その功績から仮面ライダー4号の称号を得る。

城茂

城茂は、悪の組織ブラックサタンに親友沼田吾郎を殺され、復讐のために自らブラックサタンのアジトに乗り込んで改造手術を受けて電気人間となった。自己催眠装置によって脳改造は免れ、大首領への宣誓の場にて反旗を翻し、改造されていた岬ユリ子と共に秘密基地を脱走してユリ子と共にブラックサタンとデルザー軍団と闘いを繰り広げた。

29話 鮮血神殿発動!! (前書き)

ストーリーを進めたいので今回は微妙に適当な感じになっています。
御了承下さい。

29話 鮮血神殿発動！！

衛宮邸 洗面所

士朗は一人鏡の前に険しい表情を浮かべ立っている。

「まさか、そんな危険な組織が聖杯戦争に絡んでいたなんて」

士朗は先程風見達にデスショットカーについて聞いた。

デスショットカーについての説明を聞いてる最中、凜は最初は半信半疑な感じで聞いていたが、風見達の真剣な表情を見てウソではないと認識し、聞き終えると、額に汗を流し驚愕な表情を浮かべていた。セイバーも多少は驚いていたが聖杯を手に入れる邪魔をするなら排除するだけと、デスショットカーが邪魔をしてきたなら徹底抗戦を討つ様子だった。

士朗はこれからの戦いを考えると不安を隠せないでいた。

その時、洗面所にセイバーが来て、

「シロウ、ここにいたのいですか」

「どうやら士朗を捜していたようだ。」

「セ、セイバー・・・！？な、なんだよ、俺に何か用か」

「私ではなくシロウにあるかと。いいのですか？夜は凜に魔術を教わる、という約束だった筈ですが」

「あ、すっかり忘れてた。さんきゅ、今すぐ行ってくる！」

士朗はデスシヨッカーの事について考えていて凜との魔術講座の約束をすっかり忘れていた。士朗は別棟に駆け込んで二階に上がり、凜が占拠している客間のドアをノックすると

「士朗？いいわよ、ちょっと今手が離せないから、勝手に上がって」「？」

凜の余裕のない声を聞いてドアを開け部屋に入ると、凜は宝石らしきものを手の平に置いて、もう一方の手には注射器、口にはハンカチらしきものを咥えている。

「質問していいかな、遠坂」

何かやばい事をしていると思ひ士朗は凜に質問しようとする

「ひよっひまっへ。きよふののるまはこれへおはりだから」

ハンカチを咥えているのでまともに喋れない凜は注射器を自分の腕に刺し、カラの注射器に自分の血を吸い上げていく。そして摘出した血を今度は一滴一滴宝石に零して、血に濡れたそれを握りしめる。次の瞬間、宝石から光がでる。それが魔力の光だと言うことだけ、士朗はかろうじて理解できた。

「はあ、これだけやっても三割か。やっぱり手持ちの九つだけやっていかなくちやダメみたいね」

凜はがつくりと肩を落とし、宝石箱らしきものに石を戻す。残念がっている凜に

「遠坂。約束通り、教えをこいに来ただけど、」

士朗は今の行為が気になるのだが要件を言う事にした。

「ええ、待ってたわ。昼間はセイバーと体の方を鍛えていたんでしょ？なら夜は中身を鍛えないとね」

先程の態度と打って変わって教える気まんまんなのか、凜はなにやら嬉しそうだ。

「さて、それじゃあ何から行こうか。」

「いや、ちよといいか。遠坂さ、さっき何してたんだよ。注射器を自分に刺すなんて？」

「え、あれ？あれは魔弾を作ってただけよ。遠坂の魔術は力の流動の転換だからね。余裕がある時は、自分の魔力を余所に移しておくのよ」

「何だよ、魔弾って？」

士朗が聞くと、凜は専門的な事を士朗に言い始める。士朗は何とか凜の話を理解しようとするがもちろん訳が分からない。凜もそんな士朗の様子に気付き

「そんな事も分からないの。あんただって魔術刻印を受け継いだ魔術師でしょ。」

「魔術刻印・・・ああ、親が子供に譲るっていう秘伝の話だな。悪い遠坂、それ俺ないからどうもピンとこないんだよ。」

「!!!!」

凜は士朗の言葉に驚き息を呑むが、すぐに冷静になり一人納得する。

「なるほど、どつりで素人同然の訳だ。・・・確かにそれならしよ
うがないか・・・じゃあ今日は簡単な説明だけにしとくわね。」

凜は士朗に魔術師の基本的な知識だけ教えて今日の魔術講座を終わりにした。

士朗も今日はもう睡眠をとる事にした。

朝

衛宮邸居間

いつもどおり士朗は朝起きて朝食の準備をしていつものメンバーで朝御飯を食べていると大河が思い出したように士朗に話し始める。

「そついえば、昨日美綴さんが夜、誰かに襲われたらしいわ」

「!! 本当なのか。藤ねえ?」

「ええ、でも大丈夫みたいよ。男の人が倒れている美綴さんを発見して病院まで運んでくれたらしいから」

「ほっ、なら良かった。」

士朗は安心するが凜や風見たちは納得がいかないのか何やら考え込

んでいる。

朝食も終わり大河は学校に行くと、一文字と敬介も立ち上がり別れの挨拶を土郎達に言い始める。

「じゃあな、衛宮君世話になった。」

「え、いきなり一文字さん、敬介さんどうしたんですか？」

土郎は訳が分からず一文字と敬介に理由を聞くと、

「いや、俺と敬介はデスシヨッカーの動向を探る為に独自で動く昨日風見たちと話し合って決めただ。風見の怪我也回復したみたいだし俺達は別行動するよ。」

「まあ、そういう訳だから。じゃあ風見さん。衛宮君達のことお願いします。」

「わかった。こちらのことは俺に任せてくれ。」

告げると一文字と敬介は家の外に出て立ち去っていた。

土郎達もそれを見送り、凜も学校に行くのか外に出て来て出かける前に

「衛宮君。悪いけど今日は私学校を休むわ。」

「どういふことなんだ。遠坂？」

「少し気になる事があってね。」

「わかった。」

凜は告げると出かける前に風見を見て

「風見さん、衛宮君のことよろしくね」

「ああ、任しておけ」

凜は出かけて行った。

士朗は道場まで行き日課になった。剣の稽古をセイバーと始める。やはり力量に差があり過ぎるのかぼこぼこにやられてしまう士朗。

所変わって間桐邸

凜は慎二の家に来て慎二と何か話している。

「あんだね。綾子のことを襲ったのわ」

凜の言葉に冷や汗を流しつつ答える。

「何だよ。そんなの聖杯戦争じゃ常套手段なんだから!？」

凜は黙ったまま慎二を睨みながら聞いている。何を思ったか慎二はいきなり笑みを浮かべて

「そつだよ、マスターとして選ばれた僕には聖杯を手に入れるっていう。崇高な使命がある。そのためなら虫けらの魂を奪うくらい何の問題もない筈だ。おまえだって裏じゃ汚い手使ってるんだろ。遠坂」

ついに凜も限界がきたのか。慎二に向かい思い切り顔面に拳を叩きこむ。

バキ「おっ」

慎二は殴られて倒れる。

「シンジ」

様子を見ていたのかライダーが現れ慎二の所へ向かおうとするが

「ぐっ」

「これ以上、先には行かせん」

アーチャーが双剣をライダーに向けて指し、牽制する。ライダーもアーチャーの牽制で動きを止める。

凜は慎二を睨みながら

「不愉快だわ。あんたと一緒にしないでくれる。私は別に今すぐあんたを殺しても構わないけど遠坂と間桐の長い付き合いに免じて最後の警告に来たのよ」

「警告……!?!」

慎二は凜に殴られた頬を押さえつつ聞くと

「今すぐこの戦いから手を引きなさい。もし貴方が再び一般人を襲うようなことをしないと誓うならこれまでのことは見逃してあげる。」

さもなくばこの私が直接引導を渡してあげるわ。・・・せいぜい考えることね。答えは今夜聞かせて貰うわ。」

凜は慎二に背を向けて歩いて行く。それに続くようにライダーをけん制していたアーチャーも凜の後に続き間桐の家から立ち去って行った。慎二はそんな凜たちを睨むことしか出来なかった。

衛宮邸

士朗は1時間ほど稽古を続けて、休憩に入る事にして居間に行き三人分のお茶を入れようと準備をする士朗だが、いきなり家の電話が鳴り始めて士朗は電話のある所まで行き電話を取ると

「やあ、衛宮」

「慎二!!」

電話の相手は慎二のようだ。

「どうしたんだ。いきなり」

士朗は朝から電話を掛けて来た慎二に要件を聞くと、

「済まない衛宮。少しだけお前と一人で話したい。今すぐ一人で学校に来てくれるか？」

「どうしたんだ？慎二突然？」

「頼む。」

「わかった。」

慎二の深刻な声を電話越しから聞き土朗は学生服に着替え学校に行こうとするが

「どうしたんだ。いきなり学生服に着替えて」

「！！風見さん・・・実は」

土朗は風見に事情を説明すると

「なら俺がバイクで衛宮君を学校まで運ぼう。」

「それは、風見さん、ちょっと」

土朗は慎二が一人で来てくれと言ったので風見の申し出を断ろうとするが風見も譲らない。

「衛宮君には悪いが俺はその慎二という奴が信用できない。無理矢理でも君について行くぞ。」

風見の様子に断るのは無理だと土朗は悟り

「じゃあお願いします」

土朗は折れて風見の申し出を受けて外に出て風見のバイクの後ろに乗る。

「衛宮君。セイバーに伝えなくてもいいのか？」

風見はバイクを走らせる前に士郎に聞くと

「大丈夫です。話し合いに行くだけですから」

「……分かった」

士郎の言葉を聞き風見はバイクを学校に向け走らせた。

学校屋上

慎二は校庭をみて士郎と風見がバイクで学校に入ってくるのを確認しライダーを見て

「ライダー……やれ。」

ライダーに何か命令を出すか

「いいのですかシンジ。昨日の戦闘で手に入れた魔力も消費して完全な状態で発動する事が出来ませんが」

ライダーは慎二に最終確認すると慎二は凜に殴られた頬の部分を押しさえ

「構うもんか。僕のことをみんな馬鹿にしゃがって……みんな死んでしまえばいいんだ。」

「分かりました。」

慎二の意思をライダーは確認すると地面に手を当てる。その瞬間ライダーの周りから魔法陣見たいなのが赤く光始める。

「他者封印・・・鮮血神殿発動」

ライダーが両手をあげて唱えると空中で赤い目みたいな物が現れ学校全体が赤く染まった。

校庭

風見と士朗はいきなり赤く染まった学校で慌てながら状況を分析していた。

「これは、衛宮君。もしや凜ちゃんが言っていた。」

「・・・まさか慎二の奴が学校の結界を・・・!!」

士朗は信じられないといった様子で一人うろたえていたが倒れていく生徒を見て

「風見さん・・・この結界を早く何とかしないと」

「ああ、とりあえず学校の中に入るぞ。結界を操っているライダーのサーヴァントが多分居る筈だ。」

「ええ、急ぎましょう」

風見と士朗は二人学校の中に入って行く。
結界を無事止める事が出来るのだろうか？

29話 鮮血神殿発動!! (後書き)

すいません。ストーリーを進めるために結構短縮した部分があります。

ごめんなさい。

30話 結界を止める(1) (前書き)

V3対ライダー

ちょっと短いです。

30話 結界を止める(1)

学校校内

風見と土朗は床に倒れている生徒や教師などを見ながら上へ上へと階段を上って行く。
倒れている生徒は血の気を失い、死んだように倒れているがまだ死んでいない。

土朗にはそう確信できた。土朗は昔の地獄の様な火事で死体を嫌というほど見たせいで死体には見慣れているから死んでいるか死んでないか判断できるのだ。

しかし、それも時間の問題だ。いずれ生徒たちは生命力を全て奪われ力尽きて・・・地獄絵図が完成するだろう。

風見と土朗はそんな事をさせないために全力で走るが前を走っていた風見がいきなり動きを止める。

「どうしたんですか。風見さん？」

「どつやら、お客さんのようだ。」

風見が前方を睨んでるのを見て土朗は前を見ると

「やあ、衛宮」

慎二とライダーが立っている。

「慎二！！・・・何で結界を発動させたんだ。話があるって嘘か」

慎二を睨みながら聞くと、

「そうだと、おまえがやってきたのが判ったんでね、すぐに結界を発動させたんだ。タイミングには苦労したんだぜ？なにしろ早すぎると逃げられるし、遅すぎると顔を合わせるからさ。僕としちやあ衛宮が顔面蒼白になるのを見たかったんだけど、案外元気そうだな」

慎二が冷笑を浮かべながら士朗に言う。

「慎二、こんな馬鹿な事、すぐに止めるんだ。」

「なに？僕に命令するわけ、まあいよ。今は気分もいいし許してあげるよ。」

慎二は笑みを浮かべつつ言うと、風見が怒りの表情で慎二に言う。

「貴様は自分が何をしているのか分かっているのか？自分のクラスメートを殺そうとしているんだぞ」

「何お前？衛宮の知り合い。何で普通の一般人が結界の中を動けるんだ？まあいいか。」

慎二はどうでもいよう様子で士朗を再び見て笑顔で話し始める。

「そういえば、お前藤村と仲いいよな。」

「藤ねえがどうしたんだ？」

「あいつさ、他の連中がバタバタ倒れてるっていうのに、一人でよろしているんだぜ？でさ、倒れずにいた僕の所までやってきて、

救急車を呼んでとか言っただけだ。すごいよね、教育者の鏡つてやつ？けどそんな物呼ぶつもりはないのに、しぶとくしがみついてくるもんだから蹴り飛ばしてやったらぴくりとも動かねえでやんの！ハハハハハ、あの分じゃまっさきに死んだんじゃねえのアイツ！」

慎二は心底面白そうに笑い続ける。

士朗はそんな慎二を見て

「最後だ。結界を止める、慎二」

冷静に慎二に結界を止めるように言うが慎二は依然笑ったままで結界を止める様子もない、それを確認すると士朗は慎二に向かい飛びかかる。

「本当に馬鹿だね。オマエ」

その瞬間影らしき物が士朗に襲ってくる。

「くっ」

士朗は勢いが付いているので影がかわせない。

「えっ」

その時、後ろから体を引っ張られ影を回避する事が出来た。

「衛宮君、気持はわかるが、何も考えず前に出るのは得策ではない。」

「どうやら風見に助けられたようだ。」

「すみません。風見さん」

風見の指摘を受けて士朗は冷静になる。

「気にしなくていい。それよりも」シユ

風見はいきなり後ろに蹴りを放つ。

「くっ、良く気がつきましたね。」

何と、ライダーが後ろから攻撃を仕掛けようとしていたのだ。

「さてと、衛宮君。俺は奴の相手をする。君はあの男の相手を頼む。」

「分かりました。慎二は俺が絶対に止めて見せます。」

「ああ、頼む」

士朗は慎二の所に行こうとするとライダーが行かせまいと士朗に向け鎖付きの剣を投げつけるがガシ風見が鎖を掴む。それをみて慎二は逃げるようにこの場から離れるために走って行く。

「早く、奴を追え」

「すみません、風見さん、ここはお願いします。」

士朗はライダーを風見に任せ慎二を追いかけるために走って行った。その様子を武器を掴んだまま風見がライダーから視線を外して見て

いると腹部に衝撃が走る。

「グフ」

視線を外した隙についてライダーの蹴りが風見の腹部に直撃したのだ。

態勢を崩しライダーの武器を放してしまう風見、それを好機とみたライダーは風見の放した自身の武器を持ち振り上げて刺し殺そうとしたのだが、風見はすぐに態勢を立て直してライダーの攻撃を後ろに転がりかわす。

「なかなか、やりますね。貴方魔術師とは違うようですけど・・・何者ですか？」

「さあな」

余裕な感じで答える風見だが実際は余り余裕はなかった。

「このままではまずいな。奴のスピードは以前戦ったランサーに近いスピードだ。ならば」

風見はこのままだと勝てないと思い変身する事にするが、

「貴方から感じる気配・・・あの男達と同じ・・・もしや貴方も仮面ライダーという存在ですか？」

「なぜ、お前が仮面ライダーを知っている？」

風見は動揺しライダーに聞くと

「昨日と数日前に仮面ライダーと名乗った男と戦いました。……
貴方も彼らと同じなら変身する前に貴方を殺します。シンジの様子
も気になりますから」

ライダーの攻撃に激しさが増してきた。

「くっ」

風見は何とかギリギリでかわすが、徐々にかわしきれなくなり小さな傷が増えていく。

「これで終わりです。」

ライダーは風見に止めを刺そうと一気に距離を詰めて武器で攻撃を仕掛けるが

「今だ!!」

風見は攻撃を仕掛けようと近付いて来るライダーに自ら距離を詰める。

「何を？」

ライダーは不審に思いつつも短剣で風見に攻撃を仕掛ける。

「ぐっ……今だ」

風見は自分の腕を出して自らライダーの攻撃を腕で受け止める。

「しまった……うっ」

風見はそのままライダーに蹴りを入れて距離を開けた。まさに捨て身の戦法である。

風見は今がチャンスだと思いつぐに変身ポーズを取り始める。

「今だ。変身ブイスリャアー・・・トオ」

風見は姿を変える仮面ライダーV3へと

「くう、やはり貴方も仮面ライダーでしたか？」

「ああ、俺の名前は仮面ライダーV3だ。戦う前に忠告する。すぐにこんな馬鹿げた結界を解くんた。」

「何を馬鹿な事を言うのです。私はマスターの命令により行動している、結界を解きたければ私を倒すことです。最も貴方は私が殺しますが」

ライダーは三度目にもなる仮面ライダーとの戦いに気を引き締め油断なくV3を見据える。

「そつか。行くぞ」

V3はライダーに向かいパンチを仕掛けるがライダーは華麗な動きでV3の攻撃を避ける。

学校の結界を止めるために始まったV3とライダー、士朗と慎二の戦いはまだ始まったばかりである。

30話 結界を止める(1) (後書き)

今回はここまでです。

31話 結界を止める(2)

学校校内

V3とライダーの激戦は続いている。

「トオー」

V3掛け声とともにライダーに向かってパンチ、蹴りを入れるがライダーは素早く中々当たらない。

「早いな、どうしたものか？」

V3は状況を打開しようと考えるが、ライダーの鎖付きの剣が飛んできて思考するのを止めて攻撃をかわし、ライダーに向かい蹴りを入れるがライダーはジャンプして天井にぶら下がる。

「フッフ、パワーは貴方の方が上で、スピードも同等位かもしれないが、しかしこのような狭い場所では小回りの利く私の方が有利です。この場所では貴方に勝ち目はありません。」

「くっ」

確かにライダーの言う通りだ。V3とライダーのスピードはほぼ同等だが、地の利はライダーの方にありV3はライダーを捕らえきれないでいるのだ。

ライダーはぶら下がってる天井から離れ落ちながら鎖付きの剣をV3に四方八方投げ付けて来る。

V3はそれをジャンプしてかわしそのまま蹴りを放つ。

「V3キーク」

V3のジャンプ蹴りがライダーに迫るがライダーは笑みを浮かべて言う。

「甘いです。」シュッ

「ちっ」バシ

ライダーはV3のジャンプ蹴りを空中で体を捻りかわして自分の武器をV3に投げ付けるが、V3は腕でライダーの攻撃を弾いたのだ。V3とライダーは同時に着地してお互い相手を見て身構える。

「このままではらちが明かないな。ならば!!」

V3はライダーを見据えたまま、攻撃の手を考え付く。

V3は動きを止め直立不動、つまり無防備なままその場に立つ。

ライダーは不審に思いながら軽く怒りながらV3に言う。

「貴方、私を舐めているんですか?・・・まあいいでしょう。貴方に戦う積りがないならこのまま死んでもらいます。」

ライダーはV3に向かい鎖付きの剣を投げ付ける。

「よし、狙い通りだ。後は耐えられればいいだけだ。」

V3は自らライダーの攻撃を受け止める。

きん、キーン、V3にライダーの攻撃が当たった瞬間、金属音みたいなのが辺りに鳴り響く。

「……………!!」

ライダーは言葉を無くし、驚愕な表情でV3を見ている。何とV3はライダーの攻撃を体で弾いたのだ。

V3二十六の秘密の一つ 特殊強化筋肉

マシンガンの銃弾すら弾く特殊合成繊維の筋肉である。

「今だ!」

V3は弾いたライダーの武器を掴み、思い切り自分に向けて引つ張る。

「!」

ライダーもいきなりな事なので武器を放さず、武器と共にV3の所へ引き寄せられていく。

「食らえ、V3パンチ」

V3はベルトのダブルタイフーンをフル回転して力を溜めてライダーにパンチを仕掛ける。

「ウグ」

V3のパンチはライダーに直撃してライダーは吹き飛び煙が出て来る。

V3は今が好機といわんばかりにライダーに向け追撃しようとする

と、ライダーが吹き飛んだ方に行く

「よし、このまま止めた。」「!!居ない……しまった!!」
ライダーが消えている。V3はライダーが土朗達の方へ向かったと
思い、土朗の身の危険を感じ急いで土朗が慎二を追った方角へ向か
った。

Side 衛宮土朗

土朗は慎二を追っている。

慎二は懐から本を取り出し土朗に向ける。

「来るな。死ね衛宮」

慎二が持つ本が光ったと思うと三筋の黒い影が土朗を襲う。

「くっ」

土朗は体を引いてかろうじてかわすことに成功する。
それを見て慎二は笑みを浮かべて

「ハハハハハ、今度こそ死ねよ。衛宮!!」

再び黒い影が土朗を襲う。

「さすがに手ぶらじゃ不利か」

士朗は瞬時に辺りを見渡し、近くのロッカーを開けてモップを手にとる。

「トレース・オン」

士朗はモップに強化の魔術を掛けて迫ってくる黒い影をモップで叩き斬り、慎二に向かい走る。

「慎二!」

「ひい」

慎二は士朗の怒りの形相を見て完全に腰が引けている。そんな慎二の腹を士朗は思い切り殴り壁に押し付ける。

「く、この・・・!」

慎二は士朗の腕を振り解こうと暴れるが士朗は慎二の首を掴み力を入れる。

「ひいひい」

悲鳴を上げる慎二だが、士朗はさらに慎二の首を絞める腕に力を込めて

「悲鳴は後だ。いまずぐ結界を止める、慎二」

「誰がお前の言うことなんか。」

慎二は士朗の要求を受けず、士朗の腕を振り解こうとする。

「わかった。なら結界の前にお前の息の根を止めるだけだ慎二」

「は、お前にそんなことが出来るわけないだろ。それに僕はまだ誰も殺していない。ただみんなから少しだけ命をもらっただけ」

慎二の見苦しい態度に士朗は冷たい目を向けて

「わかった。じゃあな、慎二」

腕に力を込める。今の士朗に躊躇いはない、しかし士朗はわずかに慎二に同情があつた。

相手が同じ魔術師なら、殺す覚悟と殺される覚悟を持って、キリツグから士朗が魔術を教わる前に聞いた言葉だ。つまり慎二は、そんな魔術師の初歩さえ、教わっていないなかつたから士朗はわずかばかり慎二に同情したのだ。

慎二は士朗が本気なのだと分かると慌てながら

「わかった。僕の負けだ。結界は解くから早く手を放してくれ。」

「ライダーに結界を解くように命令するのが先だ。」

「わかった。」

士朗は慎二の様子を見てわずかばかり慎二の首を絞めている腕の力を弱める。

慎二は苦痛な表情を浮かべ声を出そうとしたが・・・いきなり狂気的な笑みを浮かべた。

士朗は不審に思い慎二に聞こうとしたが、いきなり背中に衝撃が走

った。

「遅いぞ、ライダー、もう少しで僕がこんな虫けらに殺される所だ
ったんだぞ」

「すみません、シンジ、少々手こずりまして撒くのに時間がかかり
ました。」

どうやら風見と戦っていたライダーが来たようだ。

「まあいい、早くそいつを殺せ。」

「分かりました。慎二」

ライダーは未だ倒れている土郎に向かい武器で刺すが、ギイーン、
土郎にライダーの武器が最後まで刺さらない。

「驚いた。私の剣では貫通しない!!」

ライダーが驚いている間に土郎が立ち上がる。

「あん、どうした!!」

慎二はそんなライダーに早くしろと急かすように言う。

「ご心配なく、シンジ、今始末します。彼もこちらに向かって来て
いますし」

ライダーはV3が近付いて来ているのを感じて逆立ちしてその場で
フル回転して土郎に蹴りを放つ。

「ぐっ」パリン

士朗は外へと放り出される。士朗から地面までの高さは四階位の距離があり落ちたら命が無い。

「くそお、このままじゃあ、みんなが、いやまだ打つ手はある」

士朗は落ちながら手の平の令呪を自分に近づけ、その場で念じ声を出す。

「来い、セイバー!!」

令呪が光ると虚空からセイバーが現れ落ちている士朗を掴む。

「シロウ!!」

士朗を掴んだままセイバーは地面に着地した。

セイバーは士朗の怪我を見て

「ひどい怪我だ。すぐに治療しないと」

セイバーは士朗の怪我の部分に手を伸ばすが。士朗はセイバーの手を払い

「セイバー、俺のことはいい。今は結界を止めることが先決だ。今は一分一秒を争う。力を貸してくれ。」

「分かりました。任して下さい。今こそ貴方の剣になりましょう。」

セイバーは不可視の剣を構えて、士朗と共に学校の中に入って行った。

V3二十六の秘密

特殊強化筋肉

マシンガンの銃弾すら弾く特殊合成繊維製の筋肉

31話 結界を止める(2) (後書き)

セイバー参戦。

32話 結界を止める(3)

慎二は士郎の落ちた窓を見て笑っている。

「ははは、馬鹿な奴だ。僕に楯突くからこつなるんだ。」

その時、V3が慎二達の所に来た。

「……………！」

V3は割れた窓ガラスをみて言葉を無くす。
そんなV3に向かいライダーは無表情に言う。

「遅かったですね。もうすでにセイバーのマスターは始末しました。」

「

「！！ライダー……………こいつは何者だ？」

冷静なライダーと違い、慎二はV3の異形な姿を見て驚きながら目の前の存在は何者なのか。ライダーに聞く。

「彼も仮面ライダーという存在らしいです。」

「！！！」

慎二はライダーの説明を聞いて驚きながらV3を見ている。

「……………分かった。もう俺も容赦しない」

V3は静かな怒りを声に籠めて慎二達にぶつける。V3の怒りを受けて慎二はようやく声を出した。

「何なんだよ。お前らは何で僕の邪魔をするんだよ。……もういい、僕は選ばれた人間なんだ。僕より下等な存在はみんな死ねばいいんだ。ライダー、奴を殺して早く学校にいる奴等の生命力をすべて奪うんだ！」

ライダーは無言でV3に迫り攻撃を仕掛けてくる。V3は迫ってきているライダーに無言で蹴りをお見舞いすると！ドカ「う」V3の蹴りが直撃する。さらにV3はひるんだライダーにパンチを出して追撃する。

V3の攻撃がHIT、先程の戦いが嘘のようにV3の攻撃がライダーに簡単に当たる。

「ぐっ」

「何、やっているんだよ。ライダー早くそいつを殺せよ。」

慎二の顔に焦りと恐怖が浮かんでくる。

「無理だな。ライダーは先程俺が入れたパンチのダメージがあるんだろう。動きが先程に比べて格段に落ちている。」

そうなのである。ライダーは先程のV3との戦いの時に受けたパンチのダメージがまだ残っていて本来のスピードを出すことが出来な
いでいるのだ。

「それにどうやらいらぬ心配だったようだ。」

V3は安心したような声を出し後ろを向く、V3の耳にはこちらに向けて走ってくる足跡を二つ捉えていた。慎二も何かと思いV3が見ている方を向くと

「！！何で衛宮が生きているんだよ。ライダーの攻撃で死んだ筈じゃ？」

士朗とセイバーが二人こちらに向けて走ってきている。

士朗と共にくっついてくるセイバーがいきなりスピードを上げてV3の攻撃により怯んでいるライダーとの距離を一気に詰めて不可視の剣で思い切り斬りかかる。

「ライダー、覚悟！！」ブン

「くっ」キン

ライダーはかるうじて自身の武器でセイバーの攻撃を防ぎ、慎二のいる所まで下がる。

「大丈夫ですか？風見さん」

セイバーより少し遅れて来た士朗がV3の安否を気遣う。

「俺は大丈夫だ。それより済まなかった。少し油断してライダーを君の所に行かせてしまった。」

V3は自分の失態を士朗に謝る。

「気にしないで下さい。それよりも今は！」

「そうだな。」

V3と士朗は同時に慎二達を睨みつけて、士朗が慎二に向けて言う。

「慎二、もうこんな馬鹿なことは終わりにしろ。」

「うるさい。お前の指図なんか受けるもんか。やれライダー」

慎二はライダーに向け命令を出す、ライダーはV3達に攻撃を仕掛けず慎二に詰め寄って行く。

「何しているんだよ。ライダー早くやれよ」

「すいませんが慎二。この場では勝ち目はありません。この場は捨てて脱出します。」

ライダーは慎二の命令を聞かず、慎二を掴んで逃げようとする。だがセイバーが逃げようとしているライダーに近付き不可視の剣を構えて言う。

「私が逃がすとも思っているのか。ライダー、今の状況では貴方は逃げることはできません。」

「そうだな。ここでお前らを逃がせば再び罪の無い人が犠牲になる。ここで倒させて貰う。」

セイバーとV3はライダーと慎二を逃がさせないようにいつの間にもライダーの前と後ろを囲んでいた。

ライダーはそんな二人の様子を見て逃げるのが難しいと判断すると慎二を離し奥の手の一つを使うことにした。

「まさか二日連続で使うとは思いませんでしたが、こうなっては仕方ありません。我が呪われた魔眼を」

ライダーは自分に付けている眼帯を外して目を開ける。

「これは！だめです。士朗、風見！！あの眼を見てはいけません。」

セイバーはライダーの目の危険性にいち早く気づき士朗とV3に警告するがもう遅い。二人はライダーの眼を直視していた。

「な、体が石に！！」

士朗は自身の体に起きている以上に冷や汗を流しながらその場から動けず、ただ立っている。

「これは体がうまく動かない。」

V3も士朗ほどではないが体に重みを感じてうまく動けないようだ。

「これは石化の魔眼ですか。対魔力の強い私ですら制限をつけるほどの！！」

「ええ、余りに強力さゆえに自ら封印を施した忌々しき魔眼」

「なるほど、しかしこの程度で私が屈すると思ったかライダー！！」

セイバーはライダーの魔眼で体に重さを感じるが、それを気にせずライダーに攻撃しようとしたが、

「ええ、サーヴァントに効かぬのは承知の上、ただわずかな時間貴殿等の足止めが出来れば」ザシュ

ライダーは言葉を言い終わると、自身の武器で首の部分を思い切り突き刺した。

「な、何を！！」

「彼女は一体何を！！」

セイバーとV3は目の前の光景にただ驚く。

しかし、ライダーの首から出た血が一つの形になって行く。

「これは血が魔法陣を描いて」

ライダーの血は魔法陣になりライダーと慎二を飲み込んでいき、次の瞬間、目みたいなものが出てきてセイバー達のいる方向に突っ込んでくる。

「危ないシロウ！」

「ちっ」

セイバーは士朗を掴み、V3は横に跳んで回避する。目玉が通り過ぎた後は地面が抉れている。

「途方もない威力だ！！」

V3は抉れている地面を見て、静かに声を漏らす。

「どうやら逃げられたようですね。」

セイバーはライダー達が逃げた方角を見ている。

士郎は一人決めた地面を見て冷や汗を流しつつ唾を飲んだ。

ライダーが学校から離れたおかげか、学校を覆っていたライダーの赤い結界は消えている。

「どうやら、結界を止めることには成功したようだ。」

いつの間にか変身を解いた風見が安心した様子で呟く。

士郎は安心したのかその場に座り込んだ。

「シロウー!!」

士郎がいきなり座り込んだのでセイバーが心配した様子で士郎を見ている。

「大丈夫だ。セイバー、ちょっと緊張の糸が解けただけだ。・・・
それよりも」

士郎はいきなり立ち上がり

「早く、救急車を呼ばないと」

電話を捜そうとするど、

「大丈夫よ、私がもう連絡しといたから」

女性に止められる。士朗は振り向いて見ると

「遠坂！！何でここにいるんだ？」

凜が立っている。

「ちょっとね。学校の方で嫌な魔力を感じて来たんだけど、慎二の奴・・・あれだけ脅しといたのに」

凜がその場で怒りの声を上げる。

「凜ちゃん、今日学校を休むといていたが。」

風見は何かに気付き凜に聞くと

「ええ、ちょっと、間桐の家に行って、慎二に忠告したんだけど逆効果になったようね。」

「遠坂って、慎二の家に行っていたのか」

「ええ、朝、藤村先生の言っていた綾子の件が気になって病院に行つて来たんだけど、綾子のやつ、魂をギリギリまで吸われていたわ」

凜の言葉を聞いて士朗は顔を歪めつつ凜に聞く。

「まさか、それも慎二の奴が？」

「ええ」

凜は朝の出来事を士朗に話して、凜は魔術師の顔になり士朗に言う。

「士朗、悪いけど、これ以上慎二の好きにさせる訳にはいかない。慎二の奴を殺すわ。」

「ちょっと、待ってくれ、遠坂」

士朗は凜に慎二を殺すのは止めてくれとお願いするが、凜は厳しく士朗に言う。

「衛宮君が動かないなら私一人で動くわ。」

凜は告げると士朗達の前から立ち去って行った。

「衛宮君、とりあえずここから離れよう。」

風見は救急車のサイレンの音を聞き士朗に離れるように提案する。

「分かりました。」

士朗は頷き風見の提案を受け入れ家に戻った。

衛宮邸道場

士朗は一人道場で座禅を組んでいる。

「遠坂の奴は本気だ。……遠坂が慎二を見つける前に俺が慎二を止めないと……慎二は遠坂に殺される。」

士朗は座禅を組むのを止めて道場をでて一人慎二を探しに行こうと

するとセイバーが現れ、士朗の前に立つ。

「貴方は、また私に相談せず、一人で行動しようとするのですか。・
・私は貴方のサーヴァントです。なぜ私に一言声を掛けてくれな
いんですか？」

セイバーは士朗に向けて真剣に言う。

士朗はセイバーの真剣な視線を受けて、今日の出来事を反省する。

「確かに俺は、一人じゃ何も出来ない。いつもみんなに助けて貰っ
てばかりだ」

士朗は下を向いて反省して、再びセイバーに視線を向ける

「セイバー、今日のことでもよく分かったよ。俺の力でサーヴァント
を倒すことは出来ないし、一人で動いてもセイバー達に迷惑を掛け
てしまうことを・・・俺は慎二の行いを殺さずに止めたい。だけ
ど俺一人の力じゃ無理だ。遠坂の言うとおり俺は甘いのもかもしれな
い。そんな俺に力を貸してくれセイバー」

士朗はセイバーに頭を下げて頼んだ。

「頭を下げないで下さい。私は貴方のサーヴァントなのでから、
シロウに力を貸すのは当然です。」

「済まないセイバー。よろしく頼むセイバー」

士朗はセイバーを召喚した夜と同じように再びセイバーに手を差し
出し握手を求める。。

しかし、あの時の握手とは違う。今度の握手は共に聖杯戦争を戦お

うという土朗の意思表示でもあった。

「はい、シロウ」

セイバーは土朗の気持ちを理解し、笑顔で土朗の握手に応じた。土朗も笑顔になる。

「さてと、話は終わったか」

風見が道場に入ってくる。風見は道場の前で入るタイミングを待っていたのだ。

土朗とセイバーは顔を真っ赤にして慌てて手を放す。

「人が悪いですよ。風見」

セイバーは軽く怒りを込めて風見に言うが、風見は気にせず土朗に言う。

「衛宮君。行動するなら早くした方がいい」

「!!分かりました。行こうセイバー」

「はい。シロウ」

土朗達は凜たちより早く慎二を探すために外に出て行った。

言峰は電話を持ち誰かと話をしている。

「そうかよく知らせてくれた。後は私に任せておけ。凜」

言峰は電話を切る。

「ようやく、聖杯戦争らしくなって来たか」

言峰は笑みを浮かべる。

「何がそんなに可笑しいの。言峰」

その場にいたのか。男から声が掛かる。

「君か。何、やっと聖杯戦争らしくなったと思ってね。君こそ、めずらしいな。こんな昼間から姿を現すなんて、アルヴァロン君」

「ええ」と、仮面ライダー達がこの町に集結しつつあるからね、ここらへんで何か手を打っておこうかと思っただね。クフフフフ」

アルヴァロンと呼ばれた男は笑いだす。この男は何者なのか？

32話 結界を止める(3) (後書き)

次回はライダーとの決着

炸裂 逆ダブルタイフーンにご期待下さい。

33話 炸裂・逆ダブルタイフーン

冬木市新都街

風見達三人は慎二の行方を捜している。

「しかしシロウ、何も考えずにここまで来ましたが、彼等の居場所に目星はついているんですか？」

「ああ、学校の結界が失敗に終わった今あいつは躍起になっている。このまま引きさがっている筈がない。必ず再起を凶ってくる。今よりもっと力をつけて」

セイバーの疑問に士朗は真剣な表情で答える。

話を聞いていた風見が士朗の言いたいことを理解したのか。士朗に続いて話す。

「なるほど、人を襲って力をつける訳か。それなら場所も限られてくる。この辺りでもっとも人が多く集まる場所、つまりこの一帯のどこかにライダー達は潜んでいるということか。」

「ええ、遠坂より早く慎二を見つけないと」

士朗は慌てた様子で辺りを見渡す。

「そつだな早く探し出そう。」

風見もセイバーも士朗に続くように辺りからライダー達の気配を探っている。

慎二はどこにいるのだろうか？

SIDE 間桐慎二

新都のビルの上慎二は一人その場で座っている。

慎二の脳裏には間桐の家で育った。過去の記憶が脳裏にうつりださ
れている。

回想

間桐の家には間桐の頭首だけが入ることを許された書斎がある。長
年収集されてきた。書物・魔術書などが収められている。

僕が初めてその部屋に入ったのはまだ何も知らない子供の頃の話だ。
そして僕は自分が間桐の家系であり、自分がその正当な後継者だと
その時初めて知った。

胸が躍った。だって僕は世界の神秘に触れることを許された選ばれ
た存在だったんだから、それからというもの僕は間桐の後継者に恥
じない人物になると務め、暇さえあれば書斎に入り浸って魔術書
を読み漁った。

だけど、いつまで経っても僕に魔術を伝授してくれなかった。

僕は独学で魔術をマスターしようと思いついて、魔術書をあさっていて、
父の日記を見つけた・・・しかしそこで僕は現実を知ったのだ。間
桐はもう魔術師の血が途絶えた家系であって僕にはもう魔術師を受
け継ぐ望みはないということだった。

僕は自分の運命を呪った・・・しかしそんな僕にチャンスが訪れ
た。

聖杯戦争である。僕は必ず聖杯を手に入れて魔術師になってやる。

その為に間桐秘伝の偽臣の書を使いライダーのマスターになる事に
成功した。

そうさ、僕は間桐の正当な後継者なんだ。衛宮なんかには負けるわけがない。

S I D E O U T

士朗達が慎二を探し始めて大分時間が経ち、辺りは暗くなり夜になった。

・・・その時、風見とセイバーが歩を止める。セイバーは武装化して鎧姿になる。

「どうしたんですか。風見さん、セイバー？」

士朗は二人に聞くが、二人は真剣な表情で辺りを見ている。

「シロウ・・・嫌な気配を感じます。決して油断しないで下さい」

「そうだな、殺気を感じる。」

二人に指摘され、士朗は気を引き締めて家から持ってきた竹刀を握りしめる。

「ああ・・・！！」

その時、士朗は竹刀を握っていた腕に痛みが走り目を瞑る。

「シロウ、腕の具合が悪いのですか？」

「ああ、まだ痺れがあるけど大丈夫だ。」

「ライダーの石化の魔眼は強力なモノです。戦闘中シロウは安全な

所へ隠れていて下さい。」

セイバーは士朗に言い、今度は風見に視線を向ける。

「風見、貴方の力は信用してはいますが、ライダーの石化の魔眼を受けても戦えますか？」

セイバーは風見に聞くと、

「大丈夫だ。確かに彼女の眼の力は厄介だが、あの重さには慣れた。多少動きに制限があるだろうが十分に戦える。」

「お願いします風見、彼女が逃亡時に見せたあの魔術、おそらく彼女の宝具、あれを受ければ私でもひとつたりもないでしょう。彼女に宝具を使わせる前に勝負を決めるのが鍵です。二対一で速やかに勝負を決めましょう。」

「分かった。」

セイバーの提案を風見は受け入れる。

「私も宝具を使えばいいのですが、おそらく使用すれば魔力切れになるでしょう」

セイバーは宝具を使用すれば自分が消えると士朗に説明する。

「！……そんなことはさせない。俺が先に慎二を見つけて止めてやる」

士朗はセイバーの発言に驚いたが、真剣な表情になり腕を見ながら

拳を握り締めた。

新都ビル屋上

「セイバーとそのマスター、そして仮面ライダーが姿を見せました。」

ライダーは後ろに控えている慎二に言うが、慎二は無言のままだ。

「……では行きます」

ライダーは慎二の目を見て、風見達目掛けてビルを飛び降りた。

下を歩いている士郎達

「ムっ」「はっ」

セイバーと風見はこちらに向けて落下してくるライダーに気付き

「危ない、衛宮君」

風見は士郎を掴み横に跳び、セイバーは不可視の剣を構えてライダーを迎え撃った。

ドオン、セイバーとライダーの衝突により、地面が割れて、地鳴りが鳴り響く。

セイバーとライダーはお互いの武器を構え鏝迫り合いをしている。

「ライダー!!!」ブン

セイバーはライダーに向けて不可視の剣を思い切り振るがライダーは後ろに跳び回避して地面に手を置く。

「!」

セイバーは驚く。地面からライダーの武器である。鎖の剣が出てきてセイバーを襲って来たのだ。

セイバーはジャンプして回避しようとするがライダーの鎖が足に絡まり投げられ、吹き飛んでしまう。

壁にぶつかりセイバーは止まるが、ライダーは近くにあるバイクを掴みセイバーに投げ付ける。

「甘いです、ライダー」

セイバーはバイクを一刀両断、真っ二つにして回避した。バイクが爆発して煙が出る。煙が出ている一瞬の間にライダーの姿が消える。

「どこだ、ライダー」

セイバーはライダーを探すが見つからない。

一瞬の間にセイバーとライダーは人智を超えた戦いを繰り広げた。まさに英雄の戦いである。

そんな二人の戦いを見ていた土朗はただ呆然としている。

風見は呆然としている土朗に向けて言う。

「衛宮君。突っ立てる暇はないぞ。ビルの上をみて見る。」

風見は指差し土朗に言う。土朗も風見の指差した方向を見て見ると慎二が一人下を見下ろしながら立っている。

「慎二!!」

「俺はセイバーに加勢する。彼のことは任せた。」

風見の言葉を受けて士朗は

「分かりました。セイバーのことはお願いします、風見さん。」

士朗は走りビルの中に入って行く。それを見届けて風見は変身のポーズを取り始める。

「変身ブイスリヤー!!」

風見は仮面ライダーV3になりセイバーに加勢しに行った。

セイバーは未だにライダーの姿を捜している。

「どこだ、ライダー」

セイバーが叫ぶと

「ここです。セイバー」

電柱に乗っているライダーの姿がある。

ライダーは飛び降りてセイバーに攻撃を仕掛けようとする。セイバーも身構えてライダーに攻撃を仕掛けようとする。

ザン「何！！また」

先程と同じように地面からライダーの武器がセイバーに襲ってくる。セイバーは不可視の剣で弾くが、その間にライダーはセイバーとの距離を詰めていた。

「覚悟！！セイバー」

ライダーは鎖の剣でセイバーを突き刺そうとする。セイバーも何とか防ごうと動くがライダーの鎖を弾いた時の態勢を戻そうとするが間に合わない。ライダーは笑みを浮かべるが横から衝撃が走り吹き飛ばす。

「ぐっ、・・・やってくれましたね」

ライダーはV3に向けて言う。V3がライダーの攻撃を妨害したのだ。

「大丈夫か？セイバー」

「ええ、助かりました風見」

セイバーは立ち上がりV3に礼を言うと不可視の剣を構えてライダーを見据える。

「風見、行きますよ。」

「ああ、一気にカタをつけるぞ」

V3とセイバーはライダーに攻撃を仕掛けようとするが、

「なるほど、どうやら本気で戦うしかないようですね」

ライダーは眼帯を外し二人に向けて目を開ける。

「くっ、魔眼か」

「ちっ、やはりきついな」

ライダーの魔眼の効果により二人の動きが少し鈍る。

「ふ、一つ聞きたいことがあります。なぜ最優と呼ばれるセイバーと仮面ライダー貴方ほどの方が、あのような未熟なマスターを庇っているのですか？理に合わない愚かな行為です」

ライダーの言葉を聞いてV3が返す。

「その言葉そのまま返すぞ。貴様こそ罪のない人を襲う、奴の命令になぜ従っている。」

「これは野暮なことを聞きましたね」

告げるともう話すことはないのかライダーはジャンプしてビルの上へどんどん上がっていく。

セイバーとV3もジャンプしてライダーを追いかける。

V3とセイバーはライダーに追いつき同時に攻撃を仕掛けるが

「ふっ」

ライダーはかわして二人に蹴りを入れる。

バキッく」「グフ」

二人はビルの窓ガラスに突っ込んでビルの中に入った。
ライダーも二人を追いビルの中に入る。

「フフフ、私の石化の魔眼で動きを制限されている。貴方達では空中で身軽な私には勝てません。」

再び上を目指し飛んでいくライダー、それを追うセイバーとV3、
戦いはまだ続く。

新都街

戦いがV3達の戦いが繰り広げられている、ビルから離れた所に一人の少女が立っている。

「兄さん……先輩」

間桐桜である。桜はビルの方向を悲しそうな表情で見て、ビルの方角に歩いて行った。

新都ビル屋上

「慎二！」

士朗は竹刀を片手に慎二と相對していた。

「遠坂は一緒じゃなかったのか？」

慎二は無表情で士朗を見ている。

「遠坂とは別行動している。あいつはお前を殺す気だ。俺にはもう止められない。だけど俺はそんなの嫌だ、俺はお前を助けたいんだ。」

士朗は慎二に少しずつ近づいて行く。

慎二は士朗の言葉を聞いて、無表情な顔から、顔を歪ませて

「だったら、まずお前が死んでくれ、それで僕は勝利に一步近付ける」

慎二は本を取り出し、士朗に向けて翳すと黒い影が士朗を襲ってくる。士朗は横に転がり何とか避ける。

「止める慎二、いいかげん目を覚ませ」

「うるさいぞ、これは僕の意味でやっていることだ。僕は必ず聖杯を手に入れる。そして本来僕のモノになる筈だった力を取り戻すんだ。」

再び慎二は本を翳しシロウに向けて黒い影を放つ。

士朗は心でトレース・オンと呪文を唱え、持ってきた竹刀に強化の魔術を施し

「慎二！！！」

黒い影を切り裂いた。

「弾かれた。学校の時も思ったが……そうか魔術か!!」

慎二は驚きの声を上げる。

「そつだ、俺が雄一使える魔術、強化だ。これでお前を止めてやる。」

士朗は木刀を構えて慎二に言うと、慎二の体が震え始める。

「フフフフフ……ふざけるな!!なんで僕が持っていないものをお前が持っているんだ。魔術の家系でもないお前なんかは何で魔術回路があるんだよ!!……絶対にお前は僕の手で殺してやる」

慎二は怒りから体が震え、士朗に怒りの言葉を吐き、本を翳して黒い影で攻撃するが

「大丈夫だ、見える。セイバーとの特訓が効いているんだ。慎二は魔術を使えない。あの本を奪えば無力化出来る。」

士朗は慎二の攻撃を捌きながら前に出る。慎二の前に近付き拳を振り上げて

「いい加減目を覚ませ。この馬鹿野郎」

殴りつける。

「ぐふ」

慎二は殴られ吹き飛び本を手放してしまう。

「俺の勝ちだ。慎二」くこれで、本を奪えば」

士朗は肩で息をしながら慎二に近づいて行くと

「！！」

ライダーが現れ士朗に向けて蹴りを入れて来た。

バキッグハ……ゴホゴホ」

せき込む士朗。

「そこまです。これ以上慎二に近付くことは許しません。」

士朗は倒れながらライダーの方へ向くともろにライダーの目を直視してしまい動き封じられる。

くまづい、く

士朗は咄嗟に魔力を体にめぐらせてライダーの魔眼の呪縛に抗う。

「まさか、私の石化の魔眼に抗うなんて私の武器が刺さらなかった
といい、やはり貴方は危険だ。ここで消えて貰います」

ライダーが士朗に向けて歩いて来る。

士朗はもう駄目だと思ったが

「V3チョップ」

V3がビルの下から現れライダーにむけてチョップを仕掛ける。
すっくっ、後もう少しのところで

ライダーはV3の攻撃をかわして、V3を見据え顔を歪ませる。

「これ以上、貴様の好きにはさせせん。」

V3に遅れてセイバーも辿り着く。

「大丈夫ですかシロウ？」

セイバーも登場し、ライダーは奥の手を使うことにした。自身の宝
具を

ライダーは無言で自身の首筋に剣を突き刺し、飛び散った血が魔法
陣になり学校の時と同じように何かが飛び出て来る。

「危ないシロウ」

「ちっ」

セイバーは士朗を掴み横に跳んでかわし、V3も横に跳び回避。
ライダーの魔法陣により飛び出た光は空中で回転して士朗達の前に
現れる。

「あれは!?!」

「白馬に翼」

「まさかペガサスとでもいうのか？」

V3達は目の前の存在に目を奪われる。

「紹介しましょう。この子はペガサス、天を自由に駆る神世の幻獣です!!」

ライダーの紹介にセイバーはライダーの正体に気付いたのかライダーに向けて神妙な表情で言う。

「石化の魔眼、そしてペガサス……ならば貴女の正体は!!」

「そうです。我が真名はメドゥーサ、ギリシャ神話の時代、数多の英雄を葬ってきた。反英雄です。」

反英雄とは人々に恐怖の象徴として伝説に残っている。英雄とはま逆な存在である。

「英霊にしては歪んでいると思っていましたが、やはり真つ当な英霊では無かった様ですね」

「お話はこのくらいにしときましょう。この屋上には障害物が一つもない。貴方達はこの子の格好の獲物というわけです!!」

ライダーの目が士朗を捉え士朗は動きを封じられてしまう。

「ぐっ」

セイバーは士朗を見て焦りの表情を浮かべる。

「まずい。満足に動けない。シロウではライダーの攻撃をかわせない」

しかしセイバーに考えている余裕はなくライダーの駆るペガサスが士朗目掛けて飛んでくる。

セイバーは武器を持ち体で受け止めようとするが

「どいてろ、セイバー」

「風見!!何か手が?」

「俺がライダーの攻撃を受け止める」

セイバーに告げV3が前に出る。次の瞬間V3の胸の部分が光りだす。

「V3レッドボーンパワー!!!」

V3二十六の秘密の一つ レッドボーンパワー

胸のレッドボーンにエネルギーを集中し強力なパワーを発揮する。

V3はライダーの攻撃を腕に力を込めて拳で受け止める。

ドガン「グッ」

V3はなんとか攻撃を凌ぐことに成功するが余の威力にかなりのダメージを受けてしまう。

くくつ、このままじゃ、まずい

V3二十六の秘密の一つを使い対抗しようとしたがライダーの攻撃力は予想より遙かに上回っている。

セイバーはV3の様子を見て一つの決断をする。

セイバーが不可視の剣を前に出し・・・次の瞬間セイバーから風が巻き起こり黄金の剣が姿を現した。

「セイバー何を」

士朗は不審に思いセイバーに聞くと

「宝具を使います。」

「止める！！セイバー」

士朗は驚きながらセイバーを止める。

「しかし、これしか手が」

ライダーは言い争っているそんな彼らに向けて口を開く。

「よしよし、何を言い争っているかは知りませんがそろそろ止めを刺させて貰います。」

ライダーは手綱を取りだす。

「何を」

セイバーはライダーに向けて疑問を問うと

「本来、心優しいこの子には戦いは向いていないのですよ。強制し
たくありませんでした。が仕方がありません。私の宝具見せてあげま
しょう。・・・ベルレフオーン」

「手綱が宝具か。シロウ一刻の猶予もありません。宝具の使用の許
可を」

セイバーは士朗に宝具の使用の許可を求めるが士朗は頷かない。
ライダーは流星になり空中で回転し士朗達に迫ってきている。

「分かりました。シロウ、私の判断で行動させて貰います。」

セイバーは黄金の剣を振り上げ今にも宝具の力を解放しようとして
いる。

「行きます。エクス「待て」・・・なぜ止めるのです風見」

V3はセイバーの宝具の解放を止めた。宝具の力を解放すればセイ
バーは魔力切れになり消える可能性があったからだ。

「俺が先に、切り札の一つを使う。それでも駄目だったら、セイバ
ーがその黄金の剣で仕留めてくれ」

「しかし」

V3の言葉を受けてもセイバーは引かない。

「頼む。俺を信じてくれ」

「分かりました。」

セイバーはV3を信じ士朗の居る所まで下がる。

「風見さん・・・何を？」

士朗は？を浮かべつつV3を見ている。ライダーはV3目掛けてどんどん近付いて来る。
もうほとんど距離はない。

「一か八かの一発勝負か・・・。いくぞライダー、消し飛べ、逆ダブルタイフーン!!」

V3はベルトのダブルタイフーンを逆回転し始める。すると、ベルトから風・・・いや暴風がカマイタチとなりてライダーに直撃する。ライダーの駆るペガサスとV3の必殺技の衝突により辺りに爆音が鳴り響く。

「風見さん!!」

士朗の叫びが木霊する。

V3とライダー勝ったのはどっちだ！

V3二十六の秘密

レッドボーンパワー

胸のレッドボーンにエネルギーを集中して強力なパワーを発揮！

逆ダブルタイフーン

ダブルタイフーンを逆回転させたエネルギーで敵を粉碎する。使用

後三時間变身不可能

33話 炸裂・逆ダブルタイフーン(後書き)

勝ったのはどっちだ!?

34話 暗躍するモノたち

凜とアーチャーは士朗達のいる新都のビルの屋上を見上げている。

「あれは・・・魔力を感じなかった?!もしかして風見さんが!
!」

「おそらくそうだろう。しかし魔力なしであれほどの威力のある攻撃をするとは、恐ろしい連中だな仮面ライダーという存在は」

「そうね、それに既に決着はついたようね。急ぎましょ、アーチャー」

凜とアーチャーは士朗達が居るビルに急ぎ向かう。

新都ビル屋上

ついに二十六の秘密の最強技の一つ逆ダブルタイフーンを使ったV3、ベルトから放たれる暴風はペガサスに乗り流星になりて突っ込んでくるライダーを包み込む。

「何!?しかしまだ」ザシュ、ブシュ

ライダーは体を切り裂かれながらもV3に向けて突っ込んでくる。

「ちっ、まだだ!」

V3はダブルタイフーンの回転を速めて威力を上げる。

「馬鹿な・・・この子が敗れるとはー」ザシユ、ザシユ、ザシユ
ライダーとペガサスの体を切り裂かれて空中で粉々になった。

「はあはあはあ、ふう、何とかなっただか」

V3は全エネルギーを放出したので変身が解け、風見の姿に戻った。
逆ダブルタイフーンを使用したことによりこれから三時間は変身不能である。

士朗とセイバーは逆ダブルタイフーンの凄まじい威力を目のあたり
にして言葉を無くして呆然とその場に立っている。

「・・・勝ったのか？俺達」

「・・・ええ、そのようですね」

士朗とセイバーはようやく口を開く。

「やった俺達の力でライダーを倒した。これで慎二も」

士朗は拳を握り締めて慎二が立っている方角に向く。慎二の持っていた本が燃えている。

「そんな・・・まさか僕のライダーが跡形もなく嘘だろ!!」

慎二は現実を認めたくないのか。虚ろな目をしてよろよろとライダーが粉々になった方を見上げ歩き始める。
そんな慎二を士朗は呼び止める。

「慎二もう終わりにしよう。．．．今度こそ終わったんだ。俺の手を取れ慎二！！」

士朗は慎二に向け手を差し伸べる。

慎二は虚ろな目から一変、唇を噛み怒りの表情を浮かべふると震えながら拳を握りしめている。

「ふざけるなよ衛宮！！僕は．．．！！！！！！」

慎二は士朗に向け何か言おうとするが、ガラガラとライダーとの戦いでガタが来ていたのか屋上の地面が崩れ始める。

「な．．．あつ」

慎二は崩れた地面と共に屋上から落下しようとして、士朗が慎二に向けて手を差し伸べた。

「慎二、掴まれ」

慎二は士朗に向け手を差し伸べるが届かず士朗は慎二の手を掴むことができず慎二は屋上から下へと落下していく。

「慎二！！」

士朗は叫び．．．しばらくして涙を流し始める。

「何だよ。どうして最後の最後まで慎二を助けられたのに、もっと早く手を差し伸べていればチクシヨウ」

涙を流しつつ自分を責める士朗に、セイバーは何か言おうとするが、風見により止められる。

「風見！！なぜ止めるのです」

「今は放っておけ。気の済むまで好きなだけ泣かしてやればいい。」

風見の突き放したような言い方にセイバーは咎めようとしたが風見の腕を見て言うのを止めた。

「風見、貴方は！！」

「行くぞ、セイバー……しばらくの間衛宮君を一人にしといてやるぞ」

ドアに向けて歩いて行く風見の手から血が流れ落ちていく。手に力を入れすぎて爪がくいこみ血が流れ落ちていくのだ。風見の顔は冷静だが士朗と同じように悔しいのだ。

セイバーも風見の気持ち分かり、風見と共にドアへ向けて歩いて行く。

屋上に一人残された士朗はその場で慎二を助けられなかった悔しさから泣き続ける。

SIDE 間桐慎二

「僕は死んだのか」

慎二は目を開けて見ると、

「！！ライダーおまえ！！」

今にも体が崩れそうなライダーにより抱えられている。

「ライダー、僕を助けてくれたのか？」

「勘違いしないでいただきたい。貴方との偽りの契約は絶たれた。私はただマスターの命に従っただけです。」

ライダーの言葉に慎二は驚く。

「まさか、それじゃ」

「そうです。兄さん、私がライダーに命令したんです。最後の令呪を使って」

間桐桜が姿を現す。

「馬鹿な、お前が僕を助ける筈がない。おまえは僕を憎んでいる筈だ。だって僕はずっとお前のことを！」

慎二は桜に助けられたのが信じられない様子である。それには理由があった。

過去回想・間桐慎二

最初はかわいそうな奴だと思った。魔術師の家に拾われてくるなんて、よっぽどひどい事情があったん

だろ。

だから僕はできるだけ妹になった桜の面倒を見てやろうと思った。最初はうまくいってると思ってた。

だけど、それは僕の勘違いだと、あの日知った。

僕は桜の誕生日にケーキを買い、祝おうと桜を捜している途中、使われていない筈の部屋に明かりが点いていて、不審に思い部屋を覗いてみると

「準備はいいか。桜」

「はい、お爺さま」

桜とお爺さまが何かをしていたのだ。僕には何をしているのかさっぱり分からなかったが二人の会話を聞いて全てを知った。僕はただの道化であったことに、

「お前は一日も早く当家の魔術を習得しなければならぬ。そしてゆくゆくは間桐の頭首になり次世代へ

とこの業を継承させていくのだ。そのためにお前はこの家に招かれたのだ。おまえは魔術の血の絶えた間桐の最後の希望なのだ。分かっているな桜？」

「はい」

「よろしい、では始めよう」

僕はその場から走って離れた。・・・僕はただ躍らされていただけなのだ。周りから間桐の次期当主だと言われて、その日から間桐の家で僕の居場所はなくなった。誰も僕の相手をしなくなったのだ。僕はその日から桜を用人のように手荒く扱った。殴ったりもした。

だけど桜は何も言い返さず、ただ謝った。ごめんなさいと、兄さんの居場所を奪ってごめんなさいと、憐みの目を向けて来る桜に僕はただ怒りを募らせていくだけだった。

だけど、そんな桜もすでに僕のことは見限っていたのだ。桜は衛宮に心を寄せていたのだ。うわべは従順な風でいて、名ばかりの魔術師には用が無いといわんばかりに、

そんなある日、僕は教会の神父に出会う。神父は僕の不満な気持ちを理解し、聖杯戦争に参加する方法を教えてください、僕は桜の召喚したライダーを本を使い従え参加したのだ。

結果として衛宮と戦い殺し合う立場になる事にしても、お前が僕に味方するはずがない。だってお前は衛宮の奴が好きなんだろ。なのはどうして？

S I D E O U T

「ごめんね、ライダー、私のわがままに付き合わせて」

桜は申し訳なさそうにライダーに謝るが、ライダーは体の半分が消えていきつつも笑みを浮かべて桜に言う。

「気にしないでください。サーヴァントはマスターの命令に従うものです。謝る必要はありません。」

「ありがとう、ライダー」

ライダーは光になってその場から消滅した。桜は笑顔でライダーを見送り慎二の方へ向く。

「桜・・・お前」

「兄さん、もう帰りましょう」

桜の言葉を受けて、慎二は今までの色々なことの呪縛から解放された気がした。

桜は慎二に手を差し伸べて来る。慎二は桜の手を取り、肩で桜に支えられ家に帰ろうと二人歩いて行く。・・・その時、

「フオフオフオ、聖杯戦争から脱落したようじゃな。桜」

「お爺さま!!!なぜここに!?!」

間桐ゾウケンが姿を現した。桜は怯えながらゾウケンを見ている。

「フッフ、桜よ、我が間桐家の悲願を果たすことに失敗したことは目を瞑ろう。まだお前にはやってもらうことがあるからの。わたしと共に着て貰おう。」

ゾウケンが桜に歩み寄ってくる。

「イヤ、」

桜は慎二を支えたまま怯えた様子で立ち尽くす。

「桜、逃げろ!!」

慎二は怯えている桜を突き飛ばしゾウケンの前に立ち、桜の所へ行かせないように庇う。

「なぜ僕は桜を守ろうとしているんだ？」

慎二自身、自分はずなせ桜を庇っているのか分からなかった。体が勝手に動いたのだ。

「愚かな孫じゃ、もうお前は用済みじゃ」

ゾウケンが呟き慎二を見た瞬間、

「があああ」

慎二の体からいきなり血が噴き出してきた。

「いやああああ、兄さん」

「ぐふ、桜逃げろ、衛宮なら桜を助けてくれる筈だ。」

慎二は最後の力を振り絞り桜に逃げようと言うが桜は涙を流し

「いや、兄さんも一緒に」

慎二も逃げるように言うが

「僕はもう駄目だ。桜今まで悪かった。不甲斐無い兄だったけど許してくれ」ガタ

慎二は倒れ込む、桜は慎二の近くまで走り慎二を掴み名を呼びながら体を揺さぶるが慎二は動かない。

「兄さん……ウソです。そんな……」

桜は慎二の口に手を当てて呼吸をしているか確認するが慎二は呼吸などしておらず、死んでいた。

「いやああああ、兄さん、兄さんしつかりして下さい。」

「無駄じゃ、桜、慎二の奴はもう死んでいる。愚かな孫じゃ、わしに反抗する態度を見せなければ長生きできたものを」

ゾウケンが桜に言うが、桜は悲しみのあまりゾウケンの声は聞こえてない。

ゾウケンは無言で桜に近づいて来て、桜に向けて手を伸ばし掴もうとした時、

バキ「誰じゃ、そこにいるのは」

ゾウケンの手に石が飛んで来た。ゾウケンは誰が邪魔をしたのかと思えば石が飛んできた方を見て見ると

「やれやれ、風見さんが戦っているのに気付いて来てみれば随分と面白いことをしているなくそ爺」

「お主は昨日のー!」

昨日綾子を病院まで送った男、城茂が現れゾウケンを見ながら見ている。

茂は桜を庇うようにゾウケンの前まで来てその場で油断なく身構える。

「事情はよく分からないが、テメエの好きにはさせないぜ」

「キーサーマー」

ゾウケン は 茂 に 向け 呪い の 言葉 を 吐 く。

茂 は 油断 なく ゾウケン に 向かい 構え たまま 後ろ で 泣いて いる 桜 の 様子 を 見て 驚く。

「あいつは、昨日のガキ」

昨日 茂 が 戦った ライダー を 従えた 男 が 死んで いる のに 気付 き 驚いた のだ。

後ろ では 依然 兄さん と 叫び 桜 は 泣いて いる。

「すまない、俺がもう少し早く来ていれば」

茂 は 構え たまま 桜 に 謝る。 茂 は 事情 こそ 知らない が 慎二 が 桜 を 守る 為 に 戦った という こと に 何となく 理解 し、 桜 に 謝った のだ。

「おいこそ爺、俺は機嫌が悪い。覚悟するんだな」

怒り の 言葉 を 吐き、 茂 は ゾウケン を 全力 で 仕留める ため に 変身 しようと 手袋 を 外す 動作 を しようと すると

「なるほど、この場は分が悪いみたいじゃの、ここは引かせて貰う。」

ゾウケン は 笑み を 浮かべ たまま 逃げ よう と する。

「俺が見逃すと思っているのか」

茂は手袋を外し変身動作に入るがゾウケンがいきなり目の前で消えた。

「消えた！どこに行ったんだ……逃げられたのか。チクシヨウ」

茂はゾウケンを逃がした悔しさによりその場で蹴りを入れる。

……しばらくして怒りも少しは和らいだのか。泣いている桜の元へと近付く。

「兄さん」

桜は泣き疲れたのか泣くのを止めて慎二を抱いたまま座り込んでいる。

茂は近付き慎二を見て

「まだ、顔色もいい、心臓は動いてないみたいだな。恐らく一気に血が流れたショックで心臓が止まったのだろう。俺の腕で電気ショックすればもしかしたら」

「まだ助かるかもしれないな」

「えっ、本当ですか。なら兄さんを助けて下さい。」

桜が茂に近付き、助けしてくれるようお願いする。

「ああ、出来る限りのことをやってみる」

茂は手袋を外した。桜は茂の腕を見て驚く。

茂は驚いている桜を気にせず慎二の心臓に手を近づけ当てる。

バチバチ茂が手を当てた瞬間慎二の体が浮き上がり、

「うっ、うっほほ」

慎二は血を吐き息をし始める。

「兄さん・・・兄さん！！！」

桜は慎二が息を吹き返したのが分かると嬉しさのあまり涙を流し慎二を抱きしめる。

「喜んでいゝ所悪いが、早く病院に連れて行つた方がいい。」

茂の言葉にはつと桜は気付き慌てた様子で救急車を呼ぼうとしたが
「俺のバイクが近くにある。それに乗せた方が早い。君はどうする。
病院までついて来るか？」

「はい。兄さんの事がきになりますから」

「ああわかつたぜ。三人乗りになるがまあいいだろ。行くぞ」

茂は慎二を抱えて桜と共に病院へ向かった。

その様子を凜とアーチャーは見ていた。

「いいのかね。凜」

「ええ、もう慎二はマスターじゃないし、何も出来ないから放置していてもいいわ。・・・それよりも問題わ。何で間桐ゾウケンが今頃になって動き出したのか。調べないといけないわね」

「ああ、っでござる」

「アーチャー今から間桐の家を調べに行くわよ。」

「了解した凛」

凛とアーチャーは間桐の家に向かうのだった。

所変わって柳洞寺

水晶玉の前でキャスターが一人険しい顔をして悩んでいた。

「まさか、ライダーを魔力のないものが打ち破るとは。仮面ライダーとは一体？」

キャスターは一人これからの戦いの事について悩んでいた。
ライダーを倒したV3を始めライダーと仮面ライダー達はサーヴ
アントに匹敵する力を持っているからだ。

「フフフ、お悩みのようなご婦人」

「何もの！」　　私に悟られず侵入してくるなんて」

キャスターは驚きつつ声のした方向を向き侵入者を捜すと

「これは驚かしたみたいだな。許せ、わしの名は地獄大使、貴殿と
契約を結びに来たのだ。」

「契約？」

キャスターはいきなり現れた地獄大使の契約の意味が分からず身構えたまま問うと

「何、簡単なことだ。貴様には仮面ライダーを始末する手伝いをし
て貰いたい。もし協力してくれるなら我がデスシヨッカーの戦力を
貴殿に貸し与えよう。」

地獄大使はキャスターに接触した。

色々動き出し始めた悪の陰謀仮面ライダー達はとう立ち向かうの
か。

34話 暗躍するモノたち（後書き）

動き始めた悪の使者、頑張れ負けるな仮面ライダーV3

35話 桜の秘密(前書き)

今回はライダー達は目立ちません。

35話 桜の秘密

士朗は夢を見ている。

岩に突き刺さった一振りの剣、セイバーがそれを手に取り引き抜こうとしている。

「待て、それを手にするまえにもう一度考えた方がよい。それを抜けばお前は人ではなくなる。普通の女としての生涯を全うできなくなるのだぞ。アルトリアよ」

剣を引き抜こうとするセイバーを老人が呼び止める。

「マーリン、覚悟はできている！王とはいわば国家の従僕、たとえそれで私がこれまでの私でいられなくなるとしても、この国を救うためならば私は喜んでこの身を捧げましょう」

剣を引き抜き剣を天に翳すセイバー、周りから歓声が聞こえて来る。士朗はそこで目を覚ました。

「うっ、何だったんだ。今の夢は？」

士朗は今見た奇妙な夢について考える。

「今のセイバーが夢に出ていた。いったい何なんだ？」

士朗は夢のことを考えながら台所に歩いて行く。

「シロウ、おはようございます。」

「セイバー、おはよう。朝飯の準備をすぐするから待っていてくれ
いつもどおりの士朗を見てセイバーは下を向いて心配そうに士朗に
言う。

「シロウ、無理をしていませんか？昨日あんなことがあったばかり
なのに」

「ああ、正直慎二のことはまだ整理がついていないんだ。今は自分
がやれることを考える。悔やむのはすべてが終わってからだ。さあ、
とにかく飯にしよう。」

士朗は朝食をテーブルにおき、風見がまだ居間に来ていない事に気
づく。

「そついえば、風見さんはまだかな？」

「私が呼んできましたよか」

「いいよ、セイバー俺が風見さんと呼んでくる」

士朗は風見が使っている客間に歩いて行く。

コンコン「風見さん、起きてますか？」

「ああ、すまない衛宮君、今、居間に行こうと思っていた所だ。」

士朗は客間から出てきて

「衛宮君、食事が終わったら病院へ一緒に行って貰いたいんだがい

いか？」

士郎にお願いをする風見

「いいですけど、藤ねえや一成のことも気になりますので」

「そうか。なら良かった。君が来てくれないと少々困るのでな」

「??？」

風見の何かありげな言い様に士郎は？になり聞こうとするが風見は居間へむかいもう歩いているので士郎は聞けず仕舞いになり、風見に続くように朝食を食べに居間へと向かった。

士郎は朝食を食べて、食器の片付けをして家を出ようと風見と共に玄關に歩いて行く士郎。

セイバーはお留守番だ。

「遠坂の奴、帰ってこなかったな」

「ああ、だが凜ちゃんなら大丈夫だろう」

「ハハハ、そうですね、あいつなら大丈夫だと思います。あいつを襲う奴がいたら、逆にあいつを襲った奴の心配をしないといけませんね。」

士郎は笑いながら言う。

「へえ、衛宮君、私のことそんな風に見てたんだ。」

後ろから女性の声が聞こえ士郎はまさか！！と思ひ振り向くと

「!!!……遠坂さん、いつお帰りに」

士郎は冷や汗を流しつつ後ろにいる凜に丁寧な言葉で問うと、

「今、帰ったばかりよ。それよりも衛宮君とは一度きっちりとお話しといたほうがいいみたいね」

素敵な笑顔で士郎に詰め寄って行く凜。

「すまなかった。遠坂許してくれ」

土下座する士郎。

「まあいいわ、今の発言は許してあげる……それよりもあなた達、どこにいくつもり」

凜が外出しようとしている二人に問う。

「ああ、風見さんが病院について来てくれって言っから。病院に今から行く所だ。俺も藤ねえ達の様子も気になるし」

「ふうーん。OK、私も付いて行くわ。少し気になる事もあるし、多分風見さんの用事と一緒に筈だから」

視線を向けて風見に言っつと、

「成程、すべてお見通しということか？しかし」

風見は凜に向け何か言おうとすると

「大丈夫よ。風見さん、もう私からあいつにどづどづするつもりはないわ。」

「なら、安心だ。」

士朗は二人の会話の意味が全く理解できず、疑問を風見に問う。

「風見さん、何で俺に病院について来てくれて頼んだんですか？」

「まあ、それはついてからな」

はぐらかす風見。士朗は納得がいかなかったが追及するのを止めておとなしく病院に行く事にした。

病院内

三人は病院に着き、風見の先導のもと、歩いて行くと途中柳洞一成と鉢合わせになった。

「衛宮じゃないか。どうしたんだ、こんな時間に？」

「一成、もう体を動かして大丈夫なのか？」

「ああ、明日にでも退院できるそうだ。」

「よかった。お前が無事で」

士朗は元気な一成を見て心から安心した。

「ああ、心配掛けて悪かった。．．．それよりもそちらの方は、それと何でこの魔女と一緒に歩いているんだ。もしかして衛宮何か遠坂に弱みを握られているのか？」

一成は凜の顔を見ながら失礼なことを言う。

「随分と失礼なこと言うのね。柳洞君は、せつかく少しは心配してあげたのに」

「遠坂が心配！！止めてくれ、身震いがしてくる。」

さらに、失礼なことを言う。

士朗はこのままでは話が進まないと思い二人を止める。

「まあ待て二人とも、一成、こちらの人は風見さん」

「よろしく、今は衛宮君の家で、少しの間世話になっている。」

「これはご丁寧に衛宮とは親戚か何かで？」

「昔、衛宮君の父親に世話になったから、挨拶に来たんだが．．．」

「あつ、すいません。」

「気にしなくていい。衛宮君には俺がしばらくこの町に滞在すると話したらしばらく家にも構わないといつので、その好意に甘えさせて貰っている。」

風見は嘘の事情を一成に話す、一成は話を聞き納得する。
士朗は風見の自己紹介が終わると一成にキャストの情報を得られないか聞いてみた。

「そういえば、一成、最近お前の家で何か変わったことはないか。最近、一成の家に住み着いた奴とか？」

「……そういえば葛木先生が結婚して、その奥さんが最近家に住み着いているが」

「……葛木先生ってお前の家に住んでいるのか？」

「ああ、三、四年前にぶらりとあらわれて、それから家に住んでいる。」

葛木とは士朗の学校の先生である。士朗は一成からの意外な情報に驚きを隠せない。
後ろにいる凜も何か考えている。

「そうか分かった。ありがとう一成」

「……何にしてお礼を言われたか分からないが、約に立たなら良かった。」

士朗達はしばらく一成と雑談して別れ、再び風見が先導して進み、目的地の病室に着く。

「……」

士朗は病室前の横に書かれた表札を見て驚く。表札には間桐慎二と書かれていたからだ。

士朗はドアを開けて病室に入ると

「桜・・・慎二!!」

病室の中には体中に包帯を巻いてベッドで寝ている慎二と椅子に座る桜と壁にもたれ掛かり立っている男が居た。

「衛宮か。」

慎二は士朗が来たのを確認すると上体を起こしベッドに座りこむ。

「慎二、生きていてくれたのか？」

「ああ、本当ならお前に顔向けなんて出来ないんだが、どうしても衛宮に頼みたいことがあって茂さんに連絡して貰ったんだ。」

慎二は申し訳なさそうな顔をした後、壁にもたれ掛った男を見る。

「よお、風見さん、遅かったな。」

「すまない茂、これでも早くきたつもりなんだがな」

男が親しげに風見と話すのを見て士朗は誰なのか聞いてみると

「ああ、紹介しよう。彼の名前は城茂。またの名を」

風見が紹介しようとする、茂が風見に続くように言う。

「仮面ライダーストロンガーってな。へ、」

笑みを浮かべる茂、新たなライダーの登場に士朗と凜は驚きながら茂を見ている。

士朗達は茂と軽く自己紹介をして、慎二は本題に入った。

「衛宮、お前にあれだけのことをしたくせに頼みごとをするのはおかしいと思うが、頼む、桜を助けてやってくれ。」

「桜を？ どういうことなんだ慎二？」

慎二は自分が屋上から落ちた後の出来事を話した。慎二の話聞き、士朗は桜が本来のライダーのマスターであることを知る。

「そんな！！桜がライダーのマスターだったなんて」

「すみません。先輩今まで黙ってた」

桜は下を向き悲しそうな顔で士朗に謝る。桜は士朗には自分が魔術師である事を知られたくなかったのだ。

「成程。やっぱり桜がマスターだったのね。薄々は感じていたけど」

「遠坂、知っていたのか！！」

「まあね。今の間桐にサーヴァントを召喚できる魔術師はいない。出来るとしたら桜しかないもの」

士朗は凜が桜がマスターであることに気付いていたことに驚きの声を上げて凜に疑問を問う。

「遠坂、間桐の家は魔術師の血が途絶えた家系なんだろう。なんで桜がマスターって事が分かったんだ。」

「それは……」

士朗の問いに凜は言葉が詰まる。その疑問を慎二が答えた。

「桜と遠坂は実の姉妹だからな。」

「えっ！！……慎二、遠坂と桜が姉妹って!？」

慎二は桜が遠坂の家から間桐のいえに養子として来た子供だと説明し、次に慎二は桜が祖父間桐ゾウケンに狙われていることを説明する。

「桜、どういうことだ。なんで桜が自分の爺さんに狙われなきゃいけないんだ。」

桜に詰め寄る士朗だが、桜は答えたくないのか下を向き何も喋らない。凜は何も喋らない桜に、桜にとってもっとも聞いてほしくないことを言う。

「桜、昨日私は間桐の家に行って、間桐の工房を見て来たわ。貴方……もしかして、体に何かさ」

「それ以上言わないで下さい。遠坂先輩に・・・姉さんに私の気持ちなんて分かりません。私があそこでどれだけ酷い目にあっただか。姉さんなんかには分かりません。」

桜は涙を流しつつ凜を睨みつける。

「桜・・・私は」

凜は桜に近付き手を伸ばすが、桜に手を弾かれる。

「触らないで下さい。どうせ、私はお爺さまの呪縛からは逃れられませんし、姉さんなんかに頼るつもりもありません」

桜は涙を流しつつ部屋を出ていく。

「桜・・・」

凜は悲しそうな表情をして桜の出た行ったドアを見ている。

「遠坂、桜の体が・・・どういことなんだ。」

士朗は今の凜には聞きづらいのだが桜が心配なのだ凜に聞くと

「・・・ええ、多分あの子、体をかなり弄られてるわ。それに桜がゾウケンから逃れられないといったのは恐らく、桜の体の中にゾウケン自身の虫が潜んでいるの原因だと思うわ。」

「えっ!!!」

凜はゾウケンの正体を説明した。間桐の初代当主で五百年生きてる。

魔術師であることを

「凜ちゃん魔術師は、そんな長い時を生きる術があるのか？」

話を黙って聞いていた風見が疑問に思い凜に聞くと

「ええ、昨日間桐の家に行き、間桐の魔術書を漁って調べたから、間桐ゾウケンの体はほとんど蟲で形成されているわ。多分人間としての部分は少ないと思うわ。」

凜の説明を聞き、茂は拳を握り締めて言う。

「へえ、あのくそ爺、やっぱり人間じゃないのか。なら遠慮なしでぶつ殺せるな」

茂の物騒な言い様に士朗は少しビビるが話を続ける。

「なら、桜の体には間桐ゾウケンの虫の一部が入り込んでいるってどういうことなんだ」

凜は間桐の魔術と魔術書から得た知識を士朗に説明する。間桐での悲惨な魔術の鍛錬方法を説明すると士朗は怒りか、桜のことを気付いてやれなかった自分の不甲斐無さとかの色々な感情が混じり合い唇を噛み締める。

「桜を助ける方法はないのか、遠坂！！」

「私の力じゃあ、桜を助けられない。」

凜は悔しさのあまり唇を噛み締めて下を向く。

その時、茂が何か思いついたのか。風見を見て

「風見さん、あいつの力なら桜ちゃんを救えるんじゃない」

風見も茂の言うあいつが誰だか分かったのか顎に手を当てて

「そうだな、あいつの力なら可能かもしれない。あいつはもう冬木に付いているのか？」

「多分、来ているんじゃない」

「なら、連絡してみるか。」

士朗達を余所に二人でどんどん話が進んでいく。

「風見さん。桜のことを助けられるんですか？」

「まあ、あいつの力なら多分な」

「あいつって？」

「俺達、仮面ライダーの後輩だ。」

士朗は風見の言葉に希望を見出し、

「お願いします。桜のことを助けてやってください。」

頭を下げて風見に頼む士朗。

「私からもお願い。桜のことを助けてやって」

「ああ、今からでもあいつに連絡する。」

風見は二人に告げると、携帯を持ち部屋を出ていく。話を終わると茂は慎二の方に行き

「おい、ガキ。体はもう大丈夫なのか」

「??ああ、だいぶ良くなったけど」

茂が慎二の体を気遣うので、慎二は意外そうに答えると

「そうか、なら遠慮は必要ないな」

「えっ」

「歯を食いしばれ、クソガキ」バキ

思い切り慎二の顔面を殴りつける茂、

「茂さん、何を」

士朗は茂を止めようと近付くが、意外な事に慎二が士朗を止める。

「いいんだ衛宮。」

「おいガキ、俺が何で殴ったか理由は分かるな」

「ああ、良く理解している。僕は聖杯を手に入れるために関係のない人間を襲った、最低な人間だ。」

慎二は下を向き反省する。

「よく分かっているじゃねえか。お前のした罪は裁かれることはない。言ったとしても誰も信じないからな。お前は自分の出来る範囲で罪を償っていけ。」

茂の厳しい言葉に、慎二は自嘲するように口を開いた。

「ああ、僕はどうかしてた。……でも今回のことでよく分かった僕はただ魔術師に憧れていただけだったという事に、ようやく気付いた。僕はもう魔術師に憧れるのは止める事にするよ。衛宮、今回のことは本当にすまなかった。謝って済む問題じゃないけど、僕は自分の出来る範囲で今回の自分の罪を償っていくつもりだ。」

慎二は士朗に頭を下げて謝る。士朗は笑みを浮かべ

「いいんだ。慎二、俺はお前が生きていてくれただけで嬉しい」

「衛宮……ありがとう」

いつぐらいだろうか。慎二は何年振りか位に人に心の底から礼を言ったのは、慎二の心の中は今、魔術師になりたいという願望は全くなかった。

本当の意味で間桐の家の重荷から解放されたのだ。

「衛宮、桜のことを頼む。」

「分かった。任してくれ」

士朗は慎二との熱い友情を感じるのだった。

35話 桜の秘密（後書き）

次回はついに黒い太陽来る。

次回奇跡の石キングストーンにご期待下さい

36話 黒い太陽！！（前書き）

今回はRXの登場です。

36話 黒い太陽！！

あれから士朗達は慎二と別れ、風見と茂の二人が言うアイツが来るのを家で待つことにして桜を連れて家へ向かい帰っている。風見と茂はアイツを迎えに行き今はいない。

「……………」

「……………」

凜と桜は隣を歩いているのだがお互い何も喋らず、辺りに重苦しい空気が流れる。

士朗はこの状況をどうにかしようと

「なあ桜、慎二の奴感じ変わったよな。刺々しさが無くなった。」

「……………ええ、何だか昔の兄さんに戻ったみたいです。間桐の家で私のことを気にかけてくれたのは兄さんだけでしたから」

桜が呟くと、凜は気まずそうに顔を逸らす。

「……………」

士朗は話すことを間違えたと思い凜に向け話題を変える。

「そういえば、遠坂アーチャーは？」

「……………アーチャーなら学校に向かわせているわ。さっきの柳洞君の話で葛木先生が怪しいと思ったか」

ら調べさせているわ。多分今回の処理で学校にいる筈だから」

「そうか。」

凜は士朗の質問に答えると黙り込む。話題が続かない。それでも士朗は

「そういえばさ、藤ねえの奴思った以上に元気だったよ。逆に病院食の量が足りないっておかわりを要求してたくらいなんだ。ハハハ、困ったもんだよな。」

士朗は笑いながら話す。凜と桜は依然黙り込んだままで重苦しい空気は流れ続けている。

一人周りの空気を少しでも和ませようと頑張った士朗だが無理だと悟り黙り込む。

士朗はこの重苦しい空気のプレッシャーに耐えながら家へと帰るのだった。

所変わって冬木新都街

風見と茂はバイクであいつとの待ち合わせの場所まで来ている。

「それにしてもあいつ遅いな。」

待ち合わせの時間になってもなかなか来ない風見は時計を見つつ呟く。

「あの野郎、先輩を待たすなんてどういう積りだ（怒）」

茂はイライラしながら拳を握り締めている。

「まあ、落ち着け。何か事情があるんだろ」

風見に窘められて少し落ち着く茂。

・・・しかしなかなか来ない。待ち合わせ時間からもうすでに30分経っている。

茂はイライラしながら辺りを見てみると！！思わぬ光景が目にとまり驚き指差しながら風見に言う。

「風見さん！！あれってもしかして」

「どうした茂、向こうに何かあるのか。・・・！！何やっているんだアイツ」

風見は呆れながら茂の指差した方向を見ている。

風見達が見ている所では

「君、何を考えてバイクの運転をしていたんだね。あんなにスピードだして」

「すみません。急いでいたもんで・・・つい」

警察と、警察に怒られて謝っている一人の男が居る。

「まあ、説教はこの位でいいか。君、免許証出して」

「はい」

警察に免許証を渡す男

「なになに、南光太郎か。はい4点減点ね。今度からあんな運転はしないように気を付けてくださいね。それじゃ」

警察はパトカーに乗りその場を去っていく。

「あゝあ、ついてないよな。こっちは正義の為に行動しているのにさ。はあゝ」

スピード違反で捕まった男、南光太郎は一人愚痴を零しつつ立っている

「……何、やっているんだ。光太郎」

どこか疲れたような男の声が聞こえ光太郎は後ろを振り向くと

「!!……風見さん、城さん。……お、お久しぶりです。い、いつからここに」

かなり慌てながら光太郎は二人に聞くが、二人は呆れながら

「光太郎、待ち合わせ時間になっても来ないから心配してたって言うのにお前ってやつは」

風見は頭を押さえつつ疲れたような声を出し光太郎に言う。

「光太郎、最低限の交通ルールは守ろうな。」

茂も先程までの怒りはなく呆れた感じで光太郎に言う。

「は・・・はははは、二人ともどうしたんですか？そんな疲れたような声を出して、そんなんじゃあ幸せも逃げていきますよ。」

光太郎はごまかそうと必死だ。

はあくど二人はため息をつくど光太郎に背を向け自分が置いてあるバイクの所まで歩いて行く。

「ちよつと！待つて下さいよ。先輩」

二人はバイクを走らせ光太郎を置いて行く。光太郎はバイクに乗り風見と茂を追いかけて行った。

所変わつて土朗達はまだ家へ向かつていた。

「桜。」

土朗はいきなり桜に呼びかける。

「どうしたんですか。先輩。いきなり？」

「いや、桜が今まで苦しい思いをしていたのに気付いてやれなくてゴメンな。でも風見さん達が桜のことを何とかしてくれる筈だから」

土朗は桜に謝る。

「・・・いいんですよ先輩。どうせ私はお爺さまからは逃げられませんし、先輩の気持ちだけで私は嬉しいです。」

桜は諦めたような感じで言うが

「大丈夫だ桜、風見さん達は正義の味方だから。絶対に桜を助けてくれる。俺だって桜の為だったら、何でも力を貸してやる」

士朗の発言に桜は涙を流しながら

「あ、ありがとうございます。先輩」

礼を言う。その時、

「フッフ、随分と面白い事を言っているようじゃの」

間桐ゾウケンが姿を現した。

「お爺さま!!」

桜は驚き、そして脅え始める。

「桜よ、お前はワシからは逃れられん。大人しくわしについていた方が身のためじゃぞ」

ゾウケンは桜を見据え言うが、

「お前が間桐ゾウケンか!!お前なんかには桜は渡せない。」

士朗は桜を守ろうとゾウケンの前に立つ。

「お主が、衛宮の小僧か。威勢だけはいいようじゃの。しかし邪魔

をするなら死んでもらうぞ。」

士朗に迫ってくるゾウケン。だが、凜がゾウケンの前に立ち、

「待ちなさい。」

「遠坂の小娘か。間桐と遠坂はお互いに手を出さないと協定を結んでいる筈じゃが。お主も邪魔をするつもりか？」

「ええ、悪いけど、私は貴方を許せない。私の妹にした仕打ち絶対に許さないわ。覚悟しなさい！」

「姉さん」

凜は宝石を懐から出し、ゾウケンに向け宝石魔術を使おうとする。

「なるほど、これは分が悪いみたいじゃの。ならこれならどうじゃ。出て来いライダー」

ゾウケンが叫ぶと昨日倒した筈のライダーが姿を現す。

「！！何でライダーが昨日風見さんが倒したはずなのに！」

士朗は驚きながらライダーを見ている。ライダーの姿は体に黒い紋様みたいなのがある。桜も悲痛な表情で自分のサーヴァントであったライダーを見ている。

「ライダー、どうして！」

「フフフ、こやつに呼びかけても無駄じゃ。このライダーに魂はも

う宿っておらぬからの。ただの操り人形というわけじゃ。さあ、やれライダー。邪魔する奴は殺しても構わん」

ゾウケンがライダーに命令するとライダーは士朗達に迫ってくる。

「くっ、」

凧はライダーに向け宝石魔術を使い牽制する。

ドガン、・・・しかしライダーに効果はないのか。ライダーは凧の攻撃を気にせずそのまま凧を刺し殺そうとする。

「まずい・・・!!えっ」

シュ、いきなり男が現れ凧を掴みライダーの攻撃を回避。

「大丈夫？怪我はなかった。」

「あ、ありがとう。それよりも貴方早く逃げなさい。」

凧は助けしてくれた男に逃げるように言うが、男はライダーの前に立ち手を怒りの表情を浮かべてゾウケンとライダーを睨みつける。

「なんじゃお主、まあいい邪魔するなら死んでもらうだけじゃ。」

いきなり現れた男にゾウケンは言うが、男は依然ゾウケンを睨みながら

「黙れ、こんな子供たちを襲おうなんて・・・許さん!!変身!!」

男は腕を天に上げ、そのままポーズを取り始める。そして、黒いバ

ツタ人間へと姿を変える。

「俺は太陽の子、仮面ライダーBLACK RX」

RXはその場で名乗る。

「あの人も仮面ライダーだったのか。」

士朗は新たなライダー仮面ライダーBLACK RXを驚きながら
見ている。

「行くぞ。トオー」

RXは地面に手を置いてそのまま飛び上りライダーに迫る。
RXと間桐ゾウケンの戦いが始まった。

36話 黒い太陽！！（後書き）

すいません。今回はここまで。
次回こそ桜の呪いを解きます。

37話 奇跡の石 キングストーン（前書き）

前回までのあらすじ

士郎達の前に間桐ゾウケンの魔の手が伸び、凜は殺されそうになるが、間一髪南光太郎に命を救われる。

南光太郎は仮面ライダーBLACK RXになりゾウケンの手により甦った。

魂の無いライダーと相對するのだった。

37話 奇跡の石 キングストーン

「行くぞ、トオー」

RXは飛び上りキックの体制に入りライダーに攻撃を仕掛けようとする。

ライダーも魂が無いので自我はないが、体が目の前の敵は危険だと本能で悟り、士朗達は無視してRXに神経を集中させる。

「RXキーク」

RXの足が灼熱に輝き始める。

RXはライダーにいきなり大技を仕掛け、一気に勝負を決めようとするが、

すっ、ライダーは難なくかわしてRXに自身の武器である。鎖剣を投げ付ける。シュ

「甘い!!」ガシ

RXはライダーの武器を掴み、自分の方へとライダーを引っ張り込む。

ズズズズ、ライダーは足を引き摺りながらRXの方へと引っ張り込まれる。

「RXパーンチ」

ドガン、RXの拳は灼熱に輝きライダーの腹に直撃する。

ライダーは吹き飛び倒れ込むが、すぐによろよると立ち上がる。

士朗はRXとライダーの戦いを見て違和感を覚えていた。

「ライダーはあんなに弱かったか？」

昨日までのライダーはV3とセイバー、二人係でも一步も引かず互角の戦いを演じていたが、今のライダーはRXに圧倒的にやられている。

ライダーが弱い訳ではないが士朗は疑問に思いながら静かに戦いを見ていた。

士朗の後ろで桜は悲しそうにライダーに視線を向けている。

「ライダー・・・スイマセン」

それは懺悔か。桜は涙を流しつつライダーに謝る。

間桐ゾウケンの顔にも焦りが浮き始めた。

「おのれ、どこまでもわしの邪魔をすれば気が済むんじや。しかしライダーの力は魂が無いとはいえ能力は同じな筈・・・恐ろしい連中じやの。仮面ライダーという存在は」

ゾウケンは目の前の存在も含め仮面ライダー達に畏怖の念を抱きながら見ている。

それぞれが色々な思惑を向けながら戦いを見ていたが、戦いは終わりを迎えようとしていた。

RXの蹴りがライダーの足に直撃してライダーは怯む。

それを好機と見てRXはライダーに止めを刺すべくベルト、サンライザの部分に手を当てる。

くよしこれで止めた。く

剣の柄が現れRXがそれを引き抜くと光輝く剣が姿を現す。

「リボルケインー!!」

RXは飛び上りライダーの横っ腹にリボルケインを突き刺す。

ガス、リボルケインに貫かれられ、ライダーの腹から血と火花が飛び散り、RXがリボルケインを引き抜くとライダーは光になり消えて行った。RXは必殺技リボルクラッシャーでライダーの止めを刺したのだ。

今まで黙って戦いを見ていた凜はRXの武器リボルケインを見て驚きの声を上げる。

「ちょっと、何よあれ!!!あの武器宝具並の神秘を感じるわ。何なのいったい!?!」

凜は他の仮面ライダーと違い、RXからサーヴァントに匹敵する圧倒的な神秘を感じてただ驚いている。

ライダーを倒しRXはゾウケンに視線を向ける。

「後はお前だけだ。」

RXは威圧を込めてゾウケンに言う

「くっ、仕方ない。ここは逃げさして貰う。」

ゾウケンが逃げようとするが

「へっ、どこに行くつもりだ。クソ爺ここは通行止めだぜ。」

「お主は!?!」

ゾウケンの後ろにストロンガーが現れゾウケンの逃げ道を塞ぐ。

「テムエは絶対に逃がさねえ。食らえ、エレクトロファイヤー!?!」
バチバチ

ストロンガーが地面に手を当てると地面を通して間桐ゾウケンにストロンガーの電気が体中に駆け巡る。

「ぎゃあああああ」バチバチバチ

ゾウケンは叫び狂うが

「へっ、往生しやがれ、くそ爺。超電ドリルキーク!?!」バチバチ

ストロンガーは足に電気を帯びてドリルのように回転しながらゾウケンに蹴りを放つ。

ドガン、バチバチ「ぎゃあああああああ」

ゾウケンはおびたらしい叫び声を上げると粉々になり消滅した。それを見届けるとストロンガーは変身を解き、

「うまくいったな光太郎」

「ええ、先輩」

RXが士朗達を助けに来る数分前、
風見達がバイクを止めて

「この声は衛宮君か？」

「「！！」」

改造人間である風見達の耳には士朗達のピンチな叫びが耳に届いていたのである。

「風見さん、どうします。」

茂が風見に聞くと

「ちょっと待て、状況が分からない。少し調べて見る。V3ホッパ
ー」

V3二十六の秘密 V3ホッパ
ー
500メートル上空から十キロ四方を偵察する事が出来る。

風見はそれを使い辺りを調べて見ると

「あれは！！ライダーなぜ生きている。俺が昨日倒したはず！！・・・あの老人、なるほどあれが間桐ゾウケンか」

風見は士朗達の状況を把握してその場で作戦を立てる事にした。

「茂、光太郎、状況は分かった。」

風見は今士朗達が陥っている危機を茂と光太郎に伝えたと、

「じゃあ、どうします。風見さん？」

茂が風見に判断を煽ると

「まずは光太郎に先に行って貰う。」

「俺ですか」

風見はまず光太郎に先に士朗達の救出に行つて貰うことにして

「ああ、恐らく茂の話だと間桐ゾウケンという人間は自分が危機に陥ればすぐに逃げようとする筈だ。だから逃げようとしている所を茂、お前がケリをつけてくれ。」

「分かったぜ、風見さん。あのくそ爺には借りがあるからな。」

茂は笑みを浮かべ拳と拳を重ね握り込む。

「俺はどんな状況になつてもすぐに対処できるように後ろに控えておく。頼んだぞ二人とも」

風見は作戦を伝え終わるとすぐに行動に出た。

時間は戻り

風見が後ろから士郎達の前に走ってくる。

「大丈夫か。衛宮君？」

風見は心配そうに士郎達の前に現れ怪我をしてないか聞く。

「大丈夫です。それより風見さん。あの人が桜を助けてくれるんですか？」

士郎はRXに視線を向け聞くと、

「ああ、あいつの力なら可能な筈だ。光太郎」

「はい、風見さん」

「さっそくで悪いが彼女がそうだ。よろしく頼む」

風見は桜に視線を向け頼むと

「分かりました。任して下さい。あんな可愛い子に悲しい顔は似合いませんし」

RXは桜に近付いて行く。

「あつー!!」

桜はRXの異形な姿と先程の人間を遙かに超えた戦いぶりを見てるので近づいて来るRXに恐怖を覚えているのだ。

「ちょっと、桜に何する気!」

凜は桜の前に立ち桜を庇うが

「凜ちゃん、大丈夫だ。彼に任せておけば桜ちゃんを助けられる。」

「でも、風見さん」

凜は風見の言葉を聞いても不安を拭えないのか桜の前からどこうとしない。

「俺を信じて」

RXは優しさのある声を出し言うと、凜の後ろにいた桜が前に出て来る。

「桜!」

凜は桜の行動に驚きつつ声を出すと

「大丈夫です。姉さん。私この人のことを信じて見ます。どうせ、無理だとしても私に失うものなんてありませんから」

桜は決心してRXの前に立ったのだ。RXも桜の覚悟が分かり

「大丈夫。俺が絶対に君を助ける。」

告げRXはベルトに手を当てると、ベルトが輝きだす。

「何、魔力とは違うようだけどすごい力を感じる」

凜はRXのベルトの部分から凄まじい力を感じて冷や汗を流している。

RXは腹の中にあるキングストーンのをベルト・サンライザにため込む。

「キングストーンよ。彼女を助けるために力を貸してくれ」

RXは心で念じ、力を桜に向け解放する。

「キングストーンフラッシュ!!!」

RXのキングストーンフラッシュは桜を包み込む。

その時、桜の胸の部分からぎゃあああと叫び声が聞こえ、キングストーンフラッシュの光が消えて、桜はある事に気付く。

「これは!!!.....私の中のお爺さまを感じません。先輩.....私」

桜は走り土朗の胸に飛びつき涙を流し始める。

本来キングストーンフラッシュは本来体内にあるキングストーンのエネルギーを放出させ幻術や妖術、または敵を倒すRXの強力な攻撃の一つのだがRX、南光太郎はゴルゴム、クライシスといった強敵との激戦を潜り抜けて、キングストーンの力を使いこなしており、だからこそ桜に巣食った間桐ゾウケンの虫の身を仕留める事に

成功したのだ。

「桜、良かった！！本当に良かった。」

士朗も桜に伝えそつと抱き締めた。凜は、いつの間にか変身を解いた光太郎の前に行き礼を言う。

「ありがとう。妹を助けてくれて」

凜は頭を下げて光太郎に礼を言うが

「気にしなくていいよ。君の妹を助ける事が出来て本当に良かった。」

光太郎は笑みを浮かべて凜に言う。

「光太郎、済まないな。」

風見も光太郎に礼を言う。

「もう、止めてくださいよ。風見さん。俺だって風見さんに色々と助けて貰っていますし」

遠慮がちで光太郎は風見に言い、茂が近付いてきて

「風見さん、とりあえず移動しないか。いつまでもこんな所にいる訳にもいかないし」

茂の提案に頷き一行は衛宮邸へと一先ず戻る事にしたのだった。

キヤラ紹介

南光太郎

南光太郎は親友秋月信彦と同じ日食の日の同時刻に生まれた。三歳の時に両親と死に別れ、信彦の父総一郎の養子になる。

19歳の誕生日パーティーの最中に起こった不可思議な現象に疑問を抱き、主催した総一郎の真意を確かめるべく家に向かう道中三神官の手により、信彦共々誘拐され改造手術をされ世紀王ブラックサンとされたが脳改造の前に総一郎の手引きで脱出、その後仮面ライダーBLACKと名乗りゴルゴムの陰謀に立ち向かう。ゴルゴムと戦う最中、同じく世紀王へと改造された親友信彦、シャドームーンと戦うことになる。

ゴルゴムとの戦いも終わり束の間、平和を堪能していた光太郎であったが新たな侵略者クライシス帝国の襲撃により仮面ライダーBLACKへの変身機構を破壊されてしまうが、地球の影に会った太陽の光を浴びて仮面ライダーBLACK RXへと変身する能力を得て新たな敵クライシス帝国と戦いを繰り広げた。

V3二十六の秘密

V3ホッパー

五百メートル上空から十キロ四方の偵察が可能。

37話 奇跡の石 キングストーン（後書き）

次回は 士朗とアーチャーの会話

38話 姉妹の絆とアーチャーの言葉

士朗達は家に帰り、家で留守番していたセイバーに茂と光太郎、桜のことを説明した。しばらくの間桜がここで暮らすことを伝えると

「そうですか、桜がライダーの真のマスターだったという訳ですか。・・・桜に敵意はないみたいですし私は構いません。」

セイバーは納得し桜のこと認める。

「じゃあ、衛宮君、私部屋に戻っているから」
凜は先程から桜に視線を向けようとせず説明が終わると逃げるように部屋に向かって行く。

桜はそんな凜の後姿を悲しそうに見つめている。
士朗も桜の視線に気付き凜を呼び止めようとしたが風見に止められた。

「風見さん!？」

「衛宮君、ここは俺に任してくれ。」

「・・・分かりました。お願いします。」

士朗は風見に凜のことを任せることにした。風見なら凜と桜のことを何とかしてくれるという信頼の表れである。

私が小さな時に桜は間桐の家に養子に出された。

父が言うには遠坂と間桐の盟約において桜を養子に出したらしい。

私は桜が家から居なくなるということに非常に悲しんだが、父は魔術師として桜を間桐に養子に出したのだ。

だから私は笑顔で桜を送り出した。

そんな父も第四次聖杯戦争で家を開け、父は聖杯戦争で帰らぬ人となった。私は幼くして遠坂の家を継ぎ冬木の管理者になったのだ。それからというもの幼くして遠坂の家を継いだ重荷と魔術の鍛錬、冬木の管理者という立場に多忙を極め桜のことを気にかける余裕なんて全くなかった。桜が間桐の家で酷い仕打ちを受けているのに、我ながら薄情な姉だと思う。

だけど、桜には慎二が居るから大丈夫だろう。今の慎二なら桜のことを任せられる。

今さら私に桜の姉の資格なんてないから……

S I D E O U T

凜が部屋に戻ろうとする途中風見に呼び止められる。

「何？風見さん」

凜はいきなり呼び止めて来た風見にその理由を問うと

「凜ちゃん、なぜ君は逃げる？」

「え……どういこと風見さん、私が逃げるって？」

風見はいきなり本題に入ることにした。

「桜ちゃんのことだ。なぜ君は彼女と向き合わない。姉妹なんだろ」

風見の言葉を受けて凜は言葉に詰まりながら答える。

「……今さら私、あの子の姉の資格なんてないから」

凜は桜を間桐の家に養子に出した経緯を話し始める。風見も黙って凜の話を聞いている。

凜の話す口調はいつもの強気な彼女とは違い、かなり弱々しい。話が終えると風見が凜に向け口を開く。

「……贅沢だな。その程度のことと彼女と向き合わないとは」

「何ですって！」

凜は風見の突き放した言い方に怒り、風見に鋭い視線を向ける。

「悪いが俺は今の発言を訂正する気はない。」

凜は怒りの視線を向け、怒りを言葉に込めて風見にぶつけ様としたが

「……俺にも妹が居た」

「……えっ」

風見のいきなりの言葉に凜は怒りを削がれる。そんな凜に風見は語り始める。

「自分で言うのもなんだが、俺達兄妹は本当に仲が良くてな。本当に大切な妹だった」

「・・・だった!?!」

風見のこと簿を聞いて、凜は前に風見が語った仮面ライダーになった経緯を思い出し、黙り込む。

「だが俺の妹はもういない。・・・なぜ君は近くに妹が居るのになぜ向き合おうとしない。今ここで逃げたら後で絶対に後悔する事になるぞ」

凜は黙り込んでいたが、・・・しばらくして悲しそうな表情をし口を開く。

「・・・私怖い。あの子に拒絶されるんじゃないかって・・・
・それに桜には慎二もいるんだし、今さら・・・桜に何ていえばいいか」

凜は悲しそうに語るが、風見はフツと笑みを浮かべ

「君はそう言うが彼女はそうは思っていないみたいだな。」

凜はまさか!?!と思いき後ろを振り向いて見ると

「姉さん・・・」

「桜!?!」

桜が凜の後ろに立っている。どうやら話を聞いていたようだ。

「桜・・・私」

凜は下を向き桜に何ていえばいいか分からず言葉が詰まる。

「姉さん、私ずっと姉さんを恨んでいました。間桐の家で私がこんなに酷い目にあわなければいけないんだろ。でもきつといつか姉さんが助けに来てくれる。ずっとそう思っていました。が姉さんは助けに来てくれず、ずっと理不尽な怒りを姉さんに向けていました。」

凜は黙って桜の話の聞いている。

「だけど、今姉さんの話を聞いて、私思いました。私はただ甘えていただけって事に、姉さんと向き合いもしないで・・・だから私も姉さんから逃げません。だから姉さんも私からもう逃げないで下さい。」

桜は涙を流しつつ凜に抱きついて行く。

凜もそれに応え凜に抱きつく。

「桜!!」

「姉さん」

その光景を風見は見て笑みを浮かべて二人きりにさせてやろうと思いい、その場から離れていくが、途中動きを止め障子に話しかけた。

「衛宮君、もう大丈夫だ。」

「もしかして、気付いてました?」

「ああ」

士朗も凜と桜のことが心配で様子を見に来ていたのだ。

「ありがとうございます。風見さん」

「ふっ、俺は何もしていない。ただきつかけを与えただけだ。」

そして風見は未だ抱き合っている。姉妹の光景を見て

「……やはり姉妹とはいいものだな。」

姉妹の絆を見て風見は亡き妹のことを思い出す。

「俺達はここから離れよう」

「はい」

風見は昔のことを思い出しつつ笑みを浮かべ士朗と共に離れ居間に向かった。

……しばらくして凜と桜が居間へとやってきて今晚の夕食は自分たち二人で作ると言ってきたので士朗は任せることにした。

桜と凜は楽しそうにお喋りしながら夕食の準備をしている。

その光景は微笑ましく士朗達は笑みを浮かべ見ていた。

凜と桜の作った夕食は豪勢な中華料理だ。

風見達は凜達の作った料理を口に運び

「うまいな・・・これ」

風見はうまいと素直な感想を述べる。周りもうまいうまいと連呼しながら食事を食べている。

「あ・・・城さん、それ俺の春巻き」

「うるせー、自分の奴を守れなかったお前が悪い」

茂は光太郎の皿から春巻きを奪う。

「・・・酷い、後輩の分を奪うなんてあんまりだ。城さんは後輩が可愛くないんですか？」

「まったく、たかが春巻き一個で大袈裟なんだよ。それに後輩なら先輩の顔くらい立てるよ。」

不毛な喧嘩を始める茂と光太郎

「まだ沢山ありますから、喧嘩は止めてください」

「お前らはしたないぞ」

風見と桜に止められる。桜に喧嘩の仲裁をされる二人、これではどちらが大人か分からない。

セイバーは周りを気にせず一人黙々と箸を進めている。

士朗はその光景を微笑ましく見ていた。数日前まで大河と桜が家まで朝食と夕飯の時間になれば家まで来てくれていたが、基本士朗は一人で食事を取ることが多かった。

だから士朗は今の賑やかで盛り上がった、今の状況が非常に嬉しい

のだ。

風見達は今が聖杯戦争という、戦争の真っ最中ということも忘れ大いに盛り上がり今の時間を楽しんだ。

食事も終わり今日は桜のこともあるので凜の魔術講座をパスして一人土蔵へ魔術の鍛錬をしようと向かっていたのだが、途中嫌な奴と鉢合わせになり顔を歪め歩みを止める。

「まさか、貴様とここで会うとは、私も運が付いてないな」

「それはこっちのセリフだ」

アーチャーである。士朗は理由は分からないがアーチャーのことが気に入らない。理屈では無い。ただがアーチャーのことを認めることができないのだ。アーチャーもそれは同じなのであろう。

二人は嫌悪し合っている。また二人ともその態度を隠そうとしない。

「おい、アーチャー、お前葛木先生のこと調査していたんだよな。」

士朗はアーチャーのことは気に食わないがキャスターのことが気になったので問うと

「ああ、さっきまでな。何もおかしな素振りは見せなかった。現状では奴がキャスターのマスターかどうか判断できない。」

アーチャーの言葉を聞き士朗は安心する。士朗は葛木がキャスターのマスターである事を認めたくないなので安心できないが一先ず安心する。

「衛宮士朗、今回のことどう思う？」

「???何だよいきなり」

士朗は嫌悪を隠さぬままアーチャーに聞くと

「間桐慎二のことだ。今回はうまくいったかもしれないが、もし間桐慎二があのままマスターとして魂喰いを続けていたら貴様はどうした？」

士朗はアーチャーの言葉に軽く怒りを込めて

「お前・・・いまさら何でそんなこと聞くんだ。」

「何、私は可能性の話をしているだけだ。もしあの場で間桐慎二が逃げ延びてマスターとして行動した時の可能性をな。その時貴様はどうする？」

アーチャーの問いに士朗は

「俺はそれでも慎二を止めて助ける。」

「ほう、ならば貴様は関係のない人を見捨てるというのだな」

「そんな事はない。俺は両方助ける。」

士朗の激化のかかった言葉を聞き、アーチャーはその場で笑い始める。

「クっ・・・フッフ・・・ハハハハハハ・・・貴様は馬鹿か。いいかよく覚えておけ。誰かを救うということは一方で誰かを切り捨てなければならぬということだ。」

士朗はアーチャーの言葉に怒り

「お前、何言っているんだ。お前それでも英雄なのか。俺はお前を英雄なんて認めない。」

士朗は今の発言は許せないといった感じでアーチャーに鋭い視線を向けるが

「事実だ。お前の言う両方を救うなど、理想論に過ぎない。」

「何だと!！」

「ふっ、もし貴様がそれでもあがくというなら理想を抱いて溺死しろ」

アーチャーは告げると霊体化し消えた。

「おい待て、話はまだ」

士朗は声を高くして叫ぶがアーチャーは姿を現わせない。

「何だよ。理想を抱いて溺死しろだ」と

士朗の耳にはアーチャーの最後に言った言葉が強く残っているのだ。つた。

夜 公園

一人の女性が何かから逃げている。

「きゃあ」私の体どうなったの？」

女性は体の中で何かが起こっているのを感じている。
くちやくちやと耳障りな音、しばらくして女性は現状に気付く

「そうか私食べられてるんだ」

「いやあああああ」

女性は現状に気付き叫び狂うが次第に血の気も失せ言葉を発さずに倒れ込み、女性から何かが姿を現す。

「おのれ」仮面ライダー・・・桜の中に喰わせていた虫までも
始末しておるとは・・・おのれ」

仮面ライダーの存在が許せないといって狂気的な顔を浮かばせる老人、間桐ゾウケンである。

彼は死んでいなかった。ストロンガーにやられた体を女性の体を食らい修復したのだ。

「しかし、どうすれば奴等は異常じゃ」

心の中では怒り狂っているがゾウケンも魔術師なので冷静に現状を判断していた。

その時

「ほお、ストロンガーの攻撃を受けてもまだ生きているとは」

「何ものじゃ？」

ゾウケン は 声のした方 を 向く

「わしか？わしの名はブラック。お前の味方だ。・・・返答次第で
は敵になるがな。」

ゾウケンに接触してきた男彼は何者なのか？

39話 アーチャーの記憶

SIDE 遠坂凜

遠坂凜は夢を見ている。

それはある一人の赤い騎士の物語。

そいつは頑張った。一人戦場を駆け巡り争いを止めて、戦いに巻き込まれた人々を無償で助け出す。

その行為は確かに英雄の行動なのであろう。

しかし、誰にも理解されず、助けだした人達からは畏怖の目を向けられる。

それでもそいつは構わなかった。ただ自分の力で多くの人を助けたい。

それが彼の行動理念だったから……

ある日、そいつはある一つの地獄に立っていた。

おそらく何かの事故現場、もはや自らの力ではただ一人も救えぬ惨状を前にしてそいつはあっさりソレを手放した。

「……契約しよう。我が死後を預ける。その報酬をここに貰いたい。」

ああ……そうか。

ようするにこれがアイツが「英霊」になった事件なんだ。

死すべき「運命」からの命の救出、それは人の身に余る「奇跡」だ！！

だからその代償として彼は自らの魂を手放し、死後 英霊として「世界」に受け渡すことを誓った。

この「世界」には自らを守るうとする意志がある。

そのために「世界」は時としてこうした取引を行うことによって靈格の優れた魂を手に入れ「英霊」として使役するのだ。

英霊とは人類を守護するモノ。

彼等は「人の世に破滅に導く現象」が発生すると「世界」によって召喚されそれを排除する。

しかし英霊達に自由意思はなく、ただ「滅びに抗する力」として利用されるだけ……

彼等はあらゆる時代に呼び出されてはその要因を殲滅しその後その時代から抹消される。

言ってしまうえば体のいい便利屋だ。

結局あいつはどうかしていたんだ。

自分の力が誰かの救いになると願って自らの死後を英霊の任にゆだねてまで他人の命を救った。

だっていうのに最後までそいつの願いは理解されなかった。

そいつは常に疑われ 怪しまれ 拳句の果てには自分が救った誰かの手により致命傷を負わされた。

剣、剣、剣、無数の剣があいつの体を突き刺している。

そんな彼が最後に辿り着いた場所は無数の剣が地面に突き刺されている、丘……である。

彼は死ぬ間際になっても誰も恨むことはなく笑みを浮かべたまま死んでいった。

英霊となつてからはもっと沢山の命を救えると信じて……

S I D E O U T

ガバ

遠坂凜は目を覚まし、顔を押さえバツが悪そうに呟く。

「あっちゃあ……やっぱりこれアイツの記憶かぁ。サーヴァント

とマスターは靈的に繋がっているからこんなこともあるんだろっけど……」

凜は起き上がりパジャマから私服に着替えながらアーチャーのことを考える。

「それにしてもアイツは馬鹿だ。力っていうのは自分自身の望みを叶えるためのもの、他人の為だけに使っていたらすぐに疲弊してしまふ。だからこそ人は自らの利することのない行為に疑問を抱く。多くの人々を救っておきながら何の戻りも要求しない。アイツのことを皆は不気味に思ったに違いない。繰り返されるそれは恐怖ですらあつただらう」

凜はアーチャーのことを考えながら再びため息をし

「はあくまいったな。これじゃあいつと顔を合わせ辛いわ」

眩き、居間へと向かった。

居間

居間に着くと朝食の準備が既に出来ていた。

「お早うございます。姉さん」

「お早う、桜」

桜が朝の挨拶を笑顔でしてきたので、凜も笑みを浮かべ桜に返す。

「お早う遠坂、どうしたんだ？遠坂がこんなに早く起きるなんて珍しいな」

士朗は思ったことを素直に凜に言う

「何！なんか文句あるわけ！！」

凜は睨みながら士朗を見る。

「……ええっと、すまん遠坂」

謝る士朗。その様子を風見は見ていて

「朝から喧嘩か。仲がいいな」

「ちょっと……風見さん。何言ってるの」

凜は風見の何気ない一言に顔を赤くして誤魔化すが

「何だ、お前ら付き合っているのか。」

「ちょっと何言ってるのよ」

「ご愁傷様、得宮君も大変だな。凜ちゃん気が強いみたいだし、絶対尻に敷かれると思うよ。」

茂と光太郎も凜をからかう。凜の顔は湯でダコのように真っ赤なり言葉を無くす。

「もういいでしょ、飯にしましょう」

その状況を見かねたのか士朗も顔を少し赤くしながら飯にしようとして皆に促し、皆テーブルの前に座り朝飯を食べる。朝食の最中凜がある提案を出してきた。

「何だ、遠坂？」

士朗は凜に聞くと

「今、アーチャーに葛木先生の身边を調べさせていたでしょ」

「ああ」

「だけど何もおかしな所はなかった。だから……」

凜は今晚葛木が学校から帰る時を狙って襲撃し葛木がキャスターのマスターであるかないか調べると提案してきた。士朗は反対したが……セイバーは

「そうですね。凜、私は貴方に賛成です。」

セイバーは凜の提案に賛成し、

「……仕方ないな。これ以上キャスターの好きにさせる訳にもいかんしな。多少強引な手も止む負えんか」

風見も渋々賛成した。風見もキャスターの件は早めに決着をつけたいのだ。キャスターを放置していれば無関係な人間の被害が増える一方だからである。

茂と光太郎も風見が賛成するならと二人賛成し、士朗も仕方なく賛

成した。

朝食も終わり土朗は日課である、セイバーとの剣の稽古のため道場へ向かう。

衛宮邸 道場

土朗とセイバーは竹刀を持ち対峙している。

茂と光太郎も基本暇なので様子を見に道場まで来ている。

「行くぞ・・・セイバー！！」ブン

土朗はセイバーに向かい上段で思い切り斬りかかるが

スツ「甘いです、シロウ！！」ベシ

セイバーは横にかわし思い切り土朗の腹に斬りかかる。

「グエ」

土朗は体が九の字になりその場に倒れ込む。

それからというもののいつもどおりセイバーにギタギタにヤラレル土朗、一時間くらい続け休憩に入る。

土朗は道場の隅で座り込んでいる。

「大丈夫か」

茂は土朗に聞くと

「大丈夫です。」

「そうか、まあ筋は悪くないと思っぜ」

「本当ですか!!!」

「ああ、まあ一般的な話だな。」

士朗は最初は喜んだが、茂の最後の言葉にがくりと肩を落とす。その様子を見ていたセイバーは

「茂・・・暇なら私と一つ手合わせしませんか」

挑戦的な目を向け茂に言う

「オモしれえ。いいぜ相手になつてやる。」

茂もセイバーの誘いに乗り笑みを浮かべセイバーの前に行き対峙する。

「ちよつと、城さん・・・いいんですか」

光太郎は止めようとするが

「ああ、体を動かさないと体が鈍るからな。それにあなたの実力個人的に興味がある。」

挑発的な笑みを浮かべセイバーに言う

「ふつ、それは私も同じです。風見の実力はよく知っていますが、貴方達の実力は知りません。風見と同じ仮面ライダーどのくらいの実力か興味があります。」

「へっ、随分と買い被つてくれてるみたいだな。オもしれえ」

茂は竹刀を持たず無手で構える。

「竹刀を持たなくていいのですか？」

「いいんだよ。これが俺の戦闘スタイルだからな。それと悪いけど変身はなしで行くぜ。この道場を破壊してしまうかも知れないからな。」

「構いません。私も武装化せず、竹刀だけで戦います。」

二人は笑みを浮かべ同時に前に出てお互いの距離を詰める。

「行くぞ」ブン

茂は先手必勝とばかりセイバーに蹴りを放つ。そのスピードは並の人間のスピードを遥かに超えていた。

すっくっ、・・・そこ」

セイバーはいきなり仕掛けられた茂の攻撃の予想外の早さに驚きながらかわし、竹刀で茂の足目掛けて斬りかかる。

トン、茂はその場で軽くジャンプしセイバーの攻撃をよけセイバーの顔めがけて殴りかかる。

セイバーは顔を逸らし茂の攻撃をかわして

「覚悟!!」

上段から斬りかかる。

「クソ」

茂は体を捻りセイバーの攻撃を回避。

二人は同時に距離を開ける。

二人の頬には切り傷みたいなのが出来ている。

お互いの最後の攻防の時、攻撃がかすかにかすっていたのだ。

「へへへへ、なるほどやるな。セイバー」

「ええ、貴方こそ、ここまで出来るとは思いませんでした!!」

二人は楽しそうに笑みを浮かべている。

士朗は今日の前で起きた二人の一瞬の攻防を見て言葉を無くす。

「何なんだ。今の動き……」

士朗には二人の動きが最後まで見れなかったのだ。

「衛宮君。二人の動き追えた」

光太郎が近付いて来て士朗に問う。

「いえ、早すぎて、よく見えませんでした。」

士朗が答えると

「ああ、あれが俺達の戦いだ。ハッキリ言っただけで君が今起きている聖杯戦争・・・その戦いに参加するのは自殺行為に等しい。」

「うっ」

光太郎の厳しい指摘に士朗は黙り込む。

「俺は君にはあまり戦いに参加して欲しくない。それでも君が俺達の戦場に参加するっていうなら、その中で自分が出て来ることをするしかない」

光太郎の話を士朗は真剣に聞いている。

「俺から言うことはここまでだけど。まあ二人の戦いを見て自分の出来ることよく考えてね」

光太郎は話を終え、セイバーと茂の戦いを見る。

光太郎の言葉を士朗は真剣に考えていた。

「確かに俺は光太郎さんの言うとおり足手纏いだ。」

これからの戦い強化の魔術だけで戦えるほど甘くないと士朗自身、認識している。

だからこそ士朗はこれからの戦い聖杯戦争中の期間で強くなる方法を真剣に考えている。

その時士朗の脳裏に一人の男が浮かび上がる。

「何であいつのことを考えているんだ？」

アーチャーである。士朗の脳裏にはなぜかアーチャーの姿が浮かび

上がった。

なぜアーチャーの姿が浮かび上がったのか士朗には分からなかった
のである。

39話 アーチャーの記憶（後書き）

次回はイリヤとの会話と

葛木と接触。彼はキャスターのマスターなのか？

・・・風見達に危機が迫る。

その時、あの男が救援に来る。

次回五つの腕を持つ、金の心を持つ男にご期待下さい。

40話 五つの腕を持つ 金の心を持つ男（前書き）

今回はついに彼の登場！！

タイトルはオープニングの部分から頂きました。

それと今回ストーリーを進めたいので結構いい加減な所があると思います
ますが御了承下さい。

今回は結構長く書きました。

40話 五つの腕を持つ 金の心を持つ男

茂とセイバーの戦いは十分程続いたが結局勝負はつかず、引き分けという形で終わりを迎えた。

「ふう〜、なかなか楽しかったぜ。セイバー」

「ええ、実に充実した時間でした。」

二人はお互いを称え合い士朗と光太郎が休んでいる所まで来て茂は座り込み。セイバーは正座する。

「いやあ、凄かったな。女のことは思えない動きだったよ。」

光太郎がセイバーに向け驚きながら言うと

「この身はサーヴァントこの位出来て当然です。それに茂の方は本気でしたが全力ではありませんでした。私にとっては貴方達の方が驚きの存在です。」

「へっ、それはお互い様だろ。お前も本気で戦っていなかったじゃねえか」

「いえ、あの場では本気でした。それに私がこの場で全力を出せば、道場が崩れますので」

お互い笑みを浮かべつつ話し合う。茂とセイバーは今の模擬戦でお互いの実力を認めあったのだ。

士朗は茂とセイバーの戦いを見て火が点いたのか。

「セイバー、俺は十分休憩した。剣の稽古の続きを頼む」

「は・・・はい!」

士朗はやる気満々で竹刀を持ち道場の真ん中に歩いて行く。
セイバーも士朗に続き、士朗の前に行き対峙する。

「行くぞ」

士朗は思い切り斬りかかるが

ス「ソコ」

簡単にかわされ、脳天に竹刀を叩きつけられ気絶する。

二時間後

「ハーくっ、」

竹刀を持つ手が痺れている。

士朗はこうなったら力押しだ、といわんばかりに全力で踏み込むが
逆にカウンターを貰ってしまい、竹刀を落し尻もちを着く。

「くそ。今のはうまくいくと思ったんだけどな」

士朗は悔しそうに呟くが

「シロウはその判断が甘い。いいですか、シロウが捨て身になった
ところでサーヴァントは倒せません。勝気なのはいいですが、それ

も相手を見てください。」

セイバーの指摘に土朗はムツとなり

「そうは言うけど、受けに回っていたらいつかはやられるだろう。それに、セイバー、さっき少しだけよそ見をしただろ。そこをチャンスだと思って踏み込んだんだが」

土朗がセイバーに言うと、見学していた、茂から指摘される。

「今のはセイバーがワザと作った隙だ。今のは踏み込むべきじゃなかったぜ。」

「えっ……そうなのか、セイバー」

土朗が聞くと、セイバーは無言で頷く。
がくりと肩を落とす土朗。

「もう、ここら辺で止めときましよう。シロウ、貴方の体力も落ちてきているようですし、」

「ああ、分かった。」

セイバーに言われて、頷き。今日の訓練を終わりにした。

道場から出て、土朗は夕飯の買い出しの為買い物に出掛けることにする。

前のこともあるので茂も一緒について来て貰うことにし、茂のバイクに乗り商店街へ向かう。

士朗はスーパーの中に入り、夕飯に必要な材料だけ選び買い物かごの中に入れる。

茂は外でたばこを吸いながら士朗を待っている。士朗は買い物を終えてスーパーから出てきて茂に礼を言う。

「すみません。買い物に付き合わせてしまつて」

「気にすんなつて。一宿一晚の恩義もあるし、それに今一人で外出なんてしたら危険だからな。・・・まあいい。早く帰ろつぜ。」

茂は士朗に帰ろつ言つが、

「茂さん、ちょっとすみません、少し寄つて貰いたい所があるんですけど」

士朗は遠慮がちに茂に頼む。

「ああ、いいぜ。どこに行けばいいんだ。」

「ええつと・・・」

商店街近くの小さな公園

茂に頼んで士朗は公園に向かつて貰つた。

「どこか?」

「ああ、ここがいいです。」

士朗は約束した訳ではないがここに来れば彼女に会えると思い公園に来たのだ。公園に入り辺りを見渡すと

「あ……シロウ、また会ったね」

公園のベンチに座っていた白い髪の女の子が士朗に近付いて来る。

「何だ……逢い引きか？」

「違います。」

「ああ、そんなこと分かってるよ。彼女は？」

茂が士朗に聞くと、白い髪の女の子が自己紹介する。

「私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン……長いからイリヤでいいわ。貴方はだれ？」

「俺か、俺は城茂。茂でいいぜ。」

お互いに自己紹介する。イリヤと茂

「ふう〜ん。まあいいわ。シロウ、お話ししましょう。私話したい」とまだ沢山あるんだから。」

「ちょっと……イリヤ」

イリヤに引つ張られベンチにまで移動させられる士朗。

茂はやれやれと両手を広げ自動販売機まで行き、三人分の飲み物を

購入する。

茂は士朗達に近付き

「ほら、」

士朗とイリヤに飲み物を軽く投げる。

「あつ、すみません」

「ちょっと渡すならもつと丁寧に渡しなさいよ」

イリヤは茂の乱暴な渡し方に激怒するが

「ヘイヘイ、悪かったな。」

全然気にしていない茂の様子に、イリヤはほっぺを膨らませ

「フンだ。私、貴方のこと嫌い。」

子供のように茂から顔を背ける。

「まあまあ、イリヤ、茂さんも大人げないですよ。」

士朗は二人の間に割って入り喧嘩を仲裁する。

それから、士朗とイリヤは楽しそうにお喋りを始める。・・・イリヤは茂には顔を合わせようとしなが第一印象が悪かったらしい。話している最中イリヤは士朗に衝撃的な事を聞いてきた。

「ねえ、シロウ、私のこと好き？」

「ぶっーーーー!!」

士朗はその場で唾を吐く。

「ハハハハハ、ガキ、まだお前がそんな事言つのは十年早ええよ。」

茂は笑いながらイリヤに言つと

「うるさい、貴方には聞いてないんだから。」

イリヤは頬を膨らませつつ茂に文句を言つ。

士朗は呆れながらため息をつきイリヤに言つ。

「・・・俺はイリヤのこと好きだぞ。」

「えっ、本当!!」

士朗の言葉にイリヤは顔を輝かせ笑みを浮かべる。

「・・・衛宮君。まさかそんな趣味があつたのか?」

「違います。そういうんじゃない。イリヤといると、妹みたいで楽しいんです。・・・イリヤとはマスターという立場を抜きにして付き合つていきたい。信じてくれるかイリヤ」

「うん!シロウがそう言うんなら信じてあげる・・・!」

イリヤはタツクルの如く士朗の腕に抱きつく。

「まったく」

シロウは「ういづのも悪くないとを感じるのだった。」

それからイリヤとの話は一時間くらい続いたと思う。

なんの意味もない話、ありきたりの出来事を、イリヤは喜んで聞いている。途中茂がイリヤをからかう時は頬を膨らませていたが、イリヤは無邪気に笑いながら話を聞いている。

そんなイリヤに士朗はかねてからの疑問を問う。

「なあイリヤ」

「ん、なに？」

「衛宮キリツグって名前に、聞き覚えはないか。」

イリヤと最初に対峙した時、イリヤは士朗を殺すことが目的だといっていたので、聞いてみたのだが、この質問だけは口にしないければよかったと士朗は思った。

時間が止まる。今までの時間が消え去ってしまったと思うほどイリヤは無感情な沈黙をする。

「・・・知らない。そんなヤツ、わたし知らない」

イリヤの銀の髪が揺れ、ベンチを立ちあがり、くるりと士朗達の方を向き

「そろそろ夕暮れだね。夜になったらバーサーカーが起きちゃうし、アマゾンも近くで待っているから私行くね。」

イリヤは無邪気な少女のまま、バイバイと別れを告げるが

「ちょっと待て、お前アマゾンと一緒にいるのか。」

茂がイリヤに聞くと

「なに？貴方アマゾンを知っているの？」

「ああ・・・まさか、お前と一緒にいると思わなかったけどな。アマゾンの奴は元気か？」

「ええ、元気よ。」

「そうか、アマゾンのことよろしく頼むぜ。あいつまだ日本には慣れてないと思うしな」

「えっ」

イリヤは茂の意外な言葉に言葉が詰まる。

「何だ。もしかして俺がアマゾンを連れていくと思ったのか。フっ、何だよ生意気なクソガキだと思ったが可愛いところあるじゃねえか。アイツが自分の意思でお前の所にいるんだろ。俺がどうこう言う気はねえよ。」

「そう・・・ありがとう」

イリヤは茂に礼を言い、立ち去ろうとしたが、士朗の方へ振り返り

「さっきのはウソだよ。本当は知ってる人だった。」

「イリヤ？」

「・・・そう、わたしが生まれた理由は聖杯戦争に勝つことだけど、わたしの目的は、キリツグとシロウを殺すことなんだから・・・じやあね」

イリヤは今度こそ去って行った。

「さて、俺達も帰るか。」

「ええ」

茂はイリヤのことを士朗に何も聞かず帰ろうと促した。士朗もそんな茂の心遣いに感謝し、茂のバイクの方へと歩いて行く。

家に帰り士朗は夕飯の支度をして食事を済ませ、士朗達はある場所に来ていた。

学校から柳洞寺までの道のりで必ず通らなければならない交差点。そこで網を張り葛木が現れるのを待ち構える作戦だ。桜はお留守番だ。もし家に攻め込まれたらいけないのでアーチャーと光太郎は家で待機して貰っている。

午後七時

「さて、準備はいいわね。」

「ああ」

士朗は考える。

「もし、葛木先生がマスターだったら、その時は戦うしかない。キヤスターは用心深いサーヴァントだ。自らの主が襲われたと知れば、二度と奇襲の機会など与えてくれまい。」

士朗は息を呑み持ってきた木刀を持ち葛木を待っている。士朗の強化の成功率も上がってきているので立派な武器になる。士朗は木刀を見て

「欲をいえば、あいつの、剣みたいにく」

士朗は頭の中でアーチャーの双剣をイメージする。

「白と黒の夫婦剣、あのぐらいの長さだったら俺でも扱えるし、何より・・・あの刀なら、俺でも一人前に戦える。皆の足を引っ張らずに身を守れて、セイバーのマスターとして少しは胸を張れるだろう。無いものねだりをして仕方がないんだけどな」

網を張り続けて一時間

「凜ちゃん、気になるんだが、俺達が行動して周りに気付かれないか？」

風見が凜に聞くと

「大丈夫よ。風見さん、周りに簡単だけど結界も張ってるし、外から見られたらアウトだけど、防音だけは完璧よ。ここ一帯、ミサイルが落ちても周りには気付かれないわ」

準備満タンと凜は言い、風見は安心する。

「誰か・・・来たな。」

茂の一言で皆顔を引き締め壁際に隠れる。

葛木が現れ無防備なまま背を向け歩いて行く。

「なあ、凜ちゃん、奴は一般人じゃ」

風見は疑問に思い聞くと、凜は葛木に向かい人差し指を向け

「やってみればはつきりするわ」

ガントを葛木に向け放とうとする。

「ちよつと待て、遠坂」

「大丈夫よ。直撃しても死にはしないわ。三日三晩寝込むだけよ。」
ガントを放つ。

凜のガントは葛木の後頭部目掛け飛んでいくが、突如として現れた布切れにより霧散され消え去った。

「!!!!!!」

「ほっ」

ガントの直撃を受ける筈だった男は、そう漏らして士朗達の方へ振

り向く。

何者かが物陰に隠れている事など、始めから知っていたと言っかのように。

士朗は咄嗟に持ってきた木刀に強化の魔術を掛ける。

風見達もすでに臨戦態勢に入って影から様子を伺っている。

凜のガントを防いだ布切れは人の形になり、キャスターが姿を現す。

「忠告した筈ですよ宗一郎。このような事になるから、貴方は柳洞寺に留まるべきだと」

キャスターは士朗たちなど眼中にないのか。己の主、葛木に話しかける。

「そうでもない。実際に獲物が釣れた。」

「そうね。あまり大きな魚ではなさそうだけど、大漁である事は間違いないさそうね。さあ、そこから出てきなさい。馬鹿な魔術師さん。それとセイバーに仮面ライダー」

士朗達は姿を現す。

「随分余裕ね。そっちにはアサシンが居ないのに」

凜が挑発気味に言うが、キャスターは余裕な態度を一向に崩さない。

「遠坂と衛宮か。間桐だけではなくおまえたちまでマスターとはな。魔術師とはいえ、因果な人生だ。」

葛木は腕を組んだまま士朗と凜を見る。

そんな葛木を見て士朗は口を開く。

「葛木、あんたに聞きたいことがある。」

「何だ、話があるなら聞くが」

士朗はキャスターが守る葛木宗一郎という人物の正体を見極めようとしたのだ。

「どうした衛宮。話があるのではないのか」

いつもと変わらぬ態度で言ってくる。

葛木からは魔術師としての気配を感じない。そればかりか、聖杯戦争を戦い抜こう、という意味さえも感じない。アーチャーの言うとおり葛木は操られているのかもしれない。そう思い士朗は葛木に聞いてみると、

「葛木。あんた、キャスターに操られているのか」

士朗が聞くと、キャスターが殺気に向けて来る。

「うるさい坊や。殺してしまおうかしら」

脅しでは無い言葉

「待て。その質問の出所はなんだ、衛宮」

教壇と変わらぬ声で葛木がキャスターを止める。

「疑問には理由がある筈だ。言ってみるがいい。」

士朗に向けキャスターから殺気を送られる。士朗はそれを堪えて

「アンタはマトモな人間だろ。ならキャストがやっていることを見逃している筈がない。」

士朗はキャストを睨みながら口にする。

「キャストがやっている事だと？」

「・・・ああ。そいつは柳洞寺に巢を張って、町中の人間から魔力を集めている。ここ最近連続している昏睡事件は全部そいつの仕業だ。キャストが魔力を吸い上げ続けるかぎり、いずれ死んでしまう人間だって出てくるだろう。取り返しのつかない事になるのは、そう先の事じゃない」

士朗の言葉に葛木は考えるような仕草をして、

「なるほど、確かに善良な人間なら見過ごせないだろう。だが衛宮。キャストの行いは、そう悪いものなのか」

平然と葛木は士朗に向け言う。

「なん、だって・・・？」

士朗は困惑し葛木を見ている。

「他人が何人死のうが私には関係無い。加えてキャスト命まで奪ってない。随分と半端な事をしているのだなキャスト。そこまでするなら、一息で根こそぎ奪った方がよいだろうに」

葛木はいつもと変わらず、平然と、嘘偽りない意見を述べる。

「無関係の人間を巻き込むつもりか……!!」

士朗は鋭い視線を向け葛木に言うが、

「ああ、何人死のうが関係無い。私は魔術師などでは無い。ただの、そこいらにいる朽ち果てた殺人鬼だよ。」

葛木はキャスターの背後まで下がり士朗達を見る。

「キャスターの傀儡というのは当たっているがな。私は聖杯戦争など知らん。お前達が殺し合うのを傍観するだけだ。もっとも私も自分の命が一番可愛い。私の命を狙いに来るものがいれば殺すだけだ。では好きにしろキャスター。生かすも殺すもお前の自由だ。」

勝ち誇った笑みを浮かべ士朗達の前に立つ。キャスター。

「ああもう、とんだ狸同士じゃない、あいつら……!!」

凜は舌打ちするが動かない。

「ちっ、胸糞悪りい。連中だな。」

風見は今でもキャスターたちに跳びかかるうとするほど怒りの表情を浮かべ葛木とキャスターを見ている。

「落ち着け、茂。むやみに動けば向こうの思いつばだ。」

「分かってるぜ、風見さん」

茂は風見に言われ落ち付き。動きを止める。

動きたいのだが動けないのだ。キャスターの魔術は一撃一撃が致命傷に到る必殺の一撃だ。キャスターの魔術の威力は風見自身、我が身で体験している。だから動けないのだ。しかし、ここで動ける人物が一人いた。

「そうか、では、ここで死んでも構わんのだな、キャスターのマスターよ」

士朗達の背後からセイバーが葛木目掛けて疾走する。

キャスターは魔術でセイバーの妨害をしようとするが効果が無い。セイバーは葛木の前まで行き不可視の剣をためらいもなく振り下ろす。

「宗一郎さま」

キャスターは慌てた表情で叫び、視線を向ける。

・・・何と、セイバーは剣を振るった姿勢のまま止まっている。

セイバーの余りの速攻に、場にいたすべての者が、勝敗を決したと思っていた、ただ一人冷然と佇む葛木宗一郎以外の者は。

「な!!!」

セイバーは当惑で息が漏れる。セイバーは剣を振るったまま呆然と目の前の敵を見ている。

「ば、かな」

セイバーでさえ事態が掴めていない。横一線になぎ払った必殺の一撃が止まっている。

「足と腕」

そんな奇跡起こり得るのか。葛木は肘と膝でセイバーの剣を挟み止めたのだ。

セイバーはそんな神業を目の前で見て困惑している。

「侮ったな、セイバー」

葛木は地の底から響いてくるような声を出す。

セイバーは挟まれている剣を思い切り引き抜き距離を取るが

「がっ!？」

セイバーの後頭部に衝撃が炸裂する。

「なっ」

セイバーはまだ混乱から抜け出せず、訳が分からないまま正体の掴めぬ攻撃を回避するが、

「あっ!？」

葛木はセイバーの鳩尾を貫く。考える間もなく葛木の攻撃がセイバーの急所目掛けてとんでくる。

「くっ」

セイバーは何とかその攻撃を直観だけで回避する。

「よくかわす。未だ混乱しているというのに」

葛木はセイバーにさらなる追撃をしようとしたが途中動きを止める。

「なるほど、眼がいいのではなく、勘がいいということか」

「大丈夫、もうあの動きには慣れました。」

セイバーは次に葛木から繰り出されるであろう。攻撃を回避し、止めを刺そうとしたのだが、すつ、

ドガ、「う」

セイバーは葛木の攻撃を回避できなかった。

葛木の攻撃は先程とは違い円から線へと動いを変えたのだ。

セイバーはその攻撃も何とか回避し始めるが、蛇の牙がセイバーの咽喉に突き刺さる。

「ああああああ」

葛木はセイバーの咽喉に指を食い込ませ投手のようなオーバースイングでセイバーを思い切り投げ飛ばす。シュ・・・ドカ

「そんな、ばかな」

士朗は知らず声が漏れる。風見達も驚愕な表情で葛木を見ている。ただの人間が格闘戦でサーヴァントを圧倒するなど誰が思おう。キヤスターでさえ呆然と自分のマスターを見ている。

「マスターの役割が後方支援ばかりと思わぬ事だ。何事も例外が存在する。私のように前に出るしか能がないマスターもいるということだ。」

葛木の言葉で納得する。つまり彼等はマスターとサーヴァントの役割が逆なのだ。

次に葛木は凜に視線を向ける。葛木にとって脅威なのはセイバーでなく。遠距離攻撃を可能とする凜なのだ。しかし、風見が葛木の前に出る。

「悪いが、お前の相手は俺がする。」

風見が葛木に迫ろうとしたが

バシッグッ、何だこれは」

「フッフ、貴方は少々厄介ですからね。空間の固定で動きを封じさせて貰ったわ。貴方の力は強力だけど対魔力は極端に低いから」

キャスターは風見の動きを封じ込める。

「へっ、もう一人忘れてねえか。変身！！ストロンガー！！！」

バチバチバチ茂はストロンガへと姿を変える。

「天が呼ぶ・・・地が呼ぶ・・・人が呼ぶ・・・悪を倒せと俺を呼ぶ・・・俺は正義の戦士仮面ライダーストロンガー、手前等の好きにはさせないぜ。行くぜ」

ストロンガーが名乗り葛木に攻撃を仕掛けようとしたが

ドゴッぐつ、お前らは!!! ショッカーライダー・・・なんでお前らが居やがる」

いきなりショッカーライダーが現れストロンガーの妨害をする。その数は六人いる。

「あれは、一文字さん・・・違う」

士朗はショッカーライダーを見て一文字と間違えるが腕と足をすぐに違うと分かる。彼等の足と手は一文字と違い黄色だからだ。

「フッフ、やりなさい。」

キヤスターの命令でショッカーライダー達は一斉にストロンガーに襲い掛かる。

「くそ」

ストロンガーは一人で六人のショッカーライダーと戦うことになり、葛木はそれを見てどんどん凜に近付いて来る。

「くそ」

士朗は強化した木刀で葛木に斬りかかるがドガン葛木の拳により破壊されてしまう。

「何か。あいつを止めないと遠坂が殺される。何か強力な武器があれば、あいつの持っている剣のような」

士朗の脳裏に浮かぶのはアーチャーの持っている双剣、士朗はその場で魔術回路に魔力を流し、

「トレース・オン」

士朗の手には二つ剣が握られている。

「ウソ、あれってアーチャーの」

凜は士朗の持っている剣を驚愕な表情で見ている。士朗の手にはアーチャーと同じ、双剣が握られていたからだ。

「うっ」

無理に魔力を使い過ぎたのか士朗は手足の感覚を無くしていく。あるのは目が見えるくらいだ。

陽剣干将、陰剣莫耶。投影魔術・・・でデタラメに複製された剣は、それでも持ち主に、自らの存在を提示する。

「うおおおお」

士朗は葛木目掛け斬りかかる。葛木は士朗の持つ双剣は予想外だったのか。初めて距離を取る。

しかし、士朗は無理な魔術を使ったせいで力尽き倒れ込む。

「ぐう」ドカ

葛木はそれを見て無表情で距離を詰めていく。凜はガントを放ち妨害するが

ス「邪魔はダメよ。お譲さん」

キャスターにより妨害される。葛木は士朗の頭に拳を叩きつけようと
とする。

「くそ……体が動けば」

風見はそれを見て体を動かそうとするがキャスターの魔術のせい
で動けない。

ストロンガーはショツカライダーと戦っていてそれどころでない。

「しろっー」

凜は今から起こるであろう惨状から目を閉じる。

バシ「ム」

その時、いきなり何者かが現れ葛木の攻撃を止める。

「あれは、一也か」

風見は現れた男を見て驚きつつも安心する。

「お久しぶりです。風見さん」

男は葛木の拳を受け止めたまま葛木に向かいパンチを出す
が葛木は後ろに下がり男の攻撃をかわす。

葛木は無表情で男を見ている。

「風見さん、あの人は」

凜は風見に士朗を助けた男は誰か聞くと

「あいつは、俺の仲間だ。」

風見は誇らしげに呟く。

「こんな少年を殺そうとするとは、許さんぞ。キサマの相手は赤心
小林拳、沖一也が相手だ。」

士朗を助けた男、沖一也は葛木と対峙する。

葛木も目の前の男は油断できないと見て静かに構える。

「この構え中国拳法の種類か」

一也は目の前の男の構えを見て冷静に判断する。

一也と葛木、二人の戦いの行方はどうなるのであろうか！！？

40話 五つの腕を持つ 金の心を持つ男（後書き）

次回は沖一也が変身します。

41話 赤心小林拳 梅花の型！！（前書き）

葛木の拳が士朗に迫る。

その時沖一也が葛木の攻撃を受け止める。

沖一也と葛木が対峙する。

勝負の行方は如何に？

今回は短いです。

41話 赤心小林拳 梅花の型！！

沖一也と葛木はお互いに対峙したまま動かない。

一也と葛木は二人とも実力は達人クラスである。

だからこそ二人ともなかなか攻撃に入れないのだ。

「この敵、出来る」

一也は拳を交えていなくとも葛木の実力を肌で感じていた。

葛木から強者のみが発するオーラを感じているからである。

いつまでも続くと思われた睨みあいにはキヤスターにより終わりを告げる。

「誰かは知りませんが死になさい！」

キヤスターの手から一也に向け魔力弾が放たれる。

「っ！！」

一也は体を捻りキヤスターの攻撃をかわすが、その時葛木から視線を外してしまい僅かな隙を作ってしまう。

普通なら見逃してしまうほどの僅かな隙、しかし葛木は普通ではない、その隙を見逃さず隙をついて一也に攻撃を仕掛ける。

「くそ、間合いが」

葛木は一気に一也との間合いを詰めて拳の連打を仕掛けてくる。

一也は葛木の攻撃を何とか腕で防いでいる。

くくそ、このままじゃ防戦一方だ

葛木に先手をつかれ、攻撃のタイミングがなかなか掴めず一也は防戦一方な状況が続いている。

その時、葛木の拳が一也の防御をすり抜ける。

くこれは、かわせない

そう判断すると一也はこれから来る激痛に耐えるため歯を食い縛る。

バキくっ

一也は態勢を崩す。その隙について葛木は更なる追撃で一也の鳩尾に拳を突き刺す。

「グボ」

一也は前屈みに体が倒れ、葛木は一也の顔面を掛けて一回転して回し蹴りを入れる。

ドゴ、バン。葛木の凄まじい蹴りの威力に一也は吹き飛び、壁に激突する。

キャスターはそれを見て笑みを浮かべて気絶している土朗とその土朗の介抱をしていた凜の元へと近付いて行く。

「フッフ、どうやら貴方達はこれで終わりのようですね。」

キャスターは一步一步土朗達に止めを刺そうと近付いて行くが、

「待て、キャスター」

葛木に止められる。

「マスター、なぜ止めるのです？」

キャスターは困惑して葛木に問うと、・・・その時ビューン物凄いスピードでキャスターの目の前を野球ボール位の石が横切って行く。キャスターは驚きながら石の飛んできた方に視線を向ける。

「今のは？・・・貴方は！！」

一也が石を投げた姿勢のままキャスターを見ている。一也は姿勢を正し、キャスターの方へと近付いて行く。

「あの攻撃を受けて無事な筈は！！」

葛木の強力な蹴りは普通の人間なら死んでもおかしくないほどの威力だった。それなのに一也は平然としている。

キャスターの疑問に葛木が答える。

「蹴りが当たる瞬間・・・後ろに下がり衝撃を逃がしていた。見た目ほどダメージはない筈だ。下がっているキャスター」

「くう」

葛木の後ろへと下がるキャスター。

凜は一也と葛木のハイレベルな戦いを驚きながら見ている。

「凄い。なんて攻防!!」

凜も武術の心得が少しはあるので二人の凄まじさがよく分かるのだ。

「う〜」

その時、気絶していた士朗が目を覚ます。

「気がついたシロウ」

「遠坂……葛木は……どうなったんだ!!」

士朗は慌てて体を起こそうとするが凜が止める。

「大丈夫だから横になってなさい。今風見さんの知り合いが葛木と戦っているわ。」

「風見さんの……その人も仮面ライダーなのか？」

「分からないわ。でも凄く強いわ。葛木と互角に戦っているもの」

「葛木と互角だって!!」士朗は心で驚く。

士朗と凜は一也と葛木に視線を向ける。

一也は葛木の前まで来て再び対峙する。

「想像以上出来る。ならば」

一也は手と手を近づけ花を包み込むように感覚を開けた状態で構える。

「赤心小林拳・梅花の型」

赤心小林拳 梅花の型

かつて沖一也がドグマの格闘家に敗れた時、師・玄海老師により伝授された防御の型であり赤心小林拳の極意の一つである。

「むっ」

葛木は一也の構える型の正体が掴めず何か嫌な予感がしたが、衝撃を逃がしたとはいえ蹴りのダメージが少しはあるだろうと思いい也に攻撃を仕掛ける。

無造作に放たれた葛木の拳を一也は流れるように動き払いのける。

「今だ!!」

ドゴッぐう「ベキ

）あばらが何本か、いかれたか。）」

一也の拳が葛木の横腹に直撃、葛木は横腹を押さえたまま一也から距離を開ける。

「宗一郎さま、くっ、お前たち」

キャスターは葛木が横腹を殴られ劣勢になったのを見て、悲鳴じみた声を上げ、ストロンガーと戦っているショットカーライダーに向け

声を上げる。

シヨツカーライダーはストロンガーから離れて守る様にキャストー達の前に立つ。

「大丈夫ですか。宗一郎さま」

キャストーは心配そうに葛木に聞く。

「ああ」

葛木は大丈夫と答えるが呼吸は荒く顔から冷や汗を流し見るからに大丈夫では無かった。

「おのれ、あいつを殺しなさい」

シヨツカーライダー達が一也に攻撃を仕掛けようとした時、バリーン、ガラスの割れるような音が辺りに響く。音の方へと視線を向けて見るとキャストーの魔術で拘束されていた筈の風見が自由に体を動かしている。

「まさか、力だけで私の魔術を破ったとでもいうの!!!」

キャストーは驚きながら風見を見ている。

「風見さん!!!」

「ああ、一也大丈夫だ。」

風見が戦線に復帰。

「変身するぞ」

「はい！！」

風見は変身するように一也に言い、変身のポーズを取り始める。

「変身！！ブイスリヤアー！！トオー」

風見は仮面ライダーV3へと姿を変える。

「はあ〜」

一也も変身するために、変身の呼吸をする為、発頸にも似たポーズを取り始め手と手を合わせ前に出し回転。

「変身！！」

一也は銀の体に赤い目のスズメバチに似た姿になる。

「仮面ライダースーパー1！！」

仮面ライダースーパー1の姿へと。

「へへ、さっきはよくもいい様に袋叩きにしてくれたな。百倍にして返してやるぜ。」

ストロンガーもV3とスーパー1の横へと並び立つ。

数の上ではキャスター達の方が有利だが勢いでは完全にライダー達の方が有利になった。

三人ライダー対キャスター&ショッカーライダー勝負の行方は！？

41話 赤心小林拳 梅花の型！！（後書き）

今回は三人ライダー対キャスター&ショッカーライダーとの戦いで
す。

後、別行動中の一文字達の出番もあります。

42話 三人ライダー対キャスター&ショッカーライダー（前書き）

V3、ストロンガー、スーパー1。ついに三人ライダー達が並び立つ。

迎え討つはキャスター、ショッカーライダー六人。
果たして戦いの行方は如何に？

42話 三人ライダー対キャスター&ショッカーライダー

「やりなさい、お前たち」

キャスターの命令でショッカーライダー達がV3達に迫ってくる。

「ふふふ、我々はおの方により再改造され以前より遙かにパワーアップした。仮面ライダー一号、二号はもとより貴様らを上回る力を、もはや貴様ら旧型など俺達の敵ではない。」

ショッカーライダー達は余裕な態度でV3達を見ている。

「へっ、随分と面白い事言ってくれるじゃねえか」

ストロンガーは軽く笑いながらショッカーライダー達を見ている。

「ああ、お前達が本郷さんと一文字さんより強いだと思いがりもここまでくると笑えないな」

スーパーがストロンガーに続いてショッカーライダー達に向け言う。
「うと、」

「何だと、貴様今の言葉後悔させてやる。」

ショッカーライダーの一人がスーパーに憎悪にも似た視線を向ける。今の発言は許容しがたい事だったのである。

「大層な御託を並べる前にさっさとかかって来い。それとも貴様らは口が達者なだけか。」

「いいだろう。血祭りに上げてやる。行くぞ」

V3の挑発を受けてショッカーライダー達は一斉にV3達に襲い掛かる。

「おらぁ、行くぞ」

ストロンガーは先手必勝とばかりに、上空へと飛びあがりショッカーライダーの一人に蹴りを放つ。

「ストロンガー電キイク!!!」

ドガ、バチバチストロンガーの電キツクは見事にショッカーライダーに直撃する。

「ふふ、これが電キツクか。かすだな」

ショッカーライダーはストロンガーの電キツクを真正面から片手で受け止めている。

「何!!!」

「ふふふ、くたばれストロンガー!!!」

ショッカーライダーはストロンガーの足を両手で掴み思い切り投げ飛ばし、カポ、口からミサイルを吐きだす。

「くう……!!!電ショーク」バチバチ

ストロンガーは自分に迫ってくるミサイルに気付き投げ飛ばされながら体から電気を放ちミサイルを迎撃する。

「大丈夫か？ストロンガー」

V3はストロンガーの様子を心配そうに見るが

「馬鹿め。俺を前にして人の心配とは随分と余裕だな。」

ショットカーライダー二人がV3に向け拳を連打してくる。

「くっ」

V3は何とかショットカーライダーの攻撃を防ぐが徐々に捌ききれなくなりショットカーライダーの攻撃が直撃してしまう。

「ぐっ」

スーパー1も赤心小林拳でショットカーライダー達と応戦しているが二対一という状況に苦戦している。

士朗達はその様子を心配そうに見ていた。

「風見さん！！くそ俺にもっと力があれば」

士朗は何も出来ない自分に腹が立ち唇を噛み締める。

「状況は不利ね。キャスターに隙はないしどうすれば？」

凜もこの状況をどうにかしようと思案を考えている。

キヤスターはV3達がやられているのを愉快そうに笑みを浮かべ見ている。

「フフフフ」くシヨッカーライダー中々使えるじゃない。フフフ、デスシヨッカーだったかしら。彼等には私が聖杯戦争に勝つため、せいぜい利用させて貰うわ」

「なに、にやついているんだ。おばさん」

キヤスターは愉快そうにライダー達が見られているのを見ていたがシヨッカーライダーと戦っているストロンガーの一言により眉間にしわを寄せ、怒りから体が震え始める。

「おばさん……私がおばさんですって。フフフフ、シヨッカーライダーまずはそいつから殺しなさい。」

三人のシヨッカーライダーがストロンガーに一齐に攻撃を仕掛けて来るが

「!」

バチバチ、ストロンガーから凄まじい程の電流が迸りシヨッカーライダーは動きを止める。

「俺は事実を言ったただけだぜ。おばさん。それよりもお前ら随分といたぶってくれたな。悪いがここからは本気の本気。全力で手前らをスクラップにしてやるぜ。チャーシアップ!!」

ストロンガーの角が金色に輝き、胸のSの部分がフル回転し始める。

この姿は、かつて最強魔人集団「デルザー軍団」によって重傷を負った城茂が、デルザー軍団に対抗するため元ブラックサタン科学者である正木洋一郎博士によって超電子エネルギーを発生させる「超電子ダイナモ」を体に埋め込むことにより得た力である。その力は通常のストロンガーの力を遙かに凌ぎ電気人間の百倍の力を発揮する事が出来る。しかし弱点もある。超電子の使用には一分間という時間制限がありそれを超えると粉々に自爆する可能性があるのだ。

「フフ、少し姿が変わったからといって何だっけ言うの。そんなハツタリに怖気づくと思ってる」

「ハツタリかどうか見て見るんだな。おばさん、時間を余りかけれないからな一気に行くぞ」

ストロンガーは大きくジャンプして下にいるショッカーライダー目掛けて

「超電急降下パンチ!!」

急降下しパンチを三連発、ショッカーライダーの胸にお見舞いする。

バチバチバチ、バキメキ「ぐああああ」

ショッカーライダーは断末魔を上げる。ストロンガーのパンチにより粉々になり、その威力は凄まじく地面にクレーターが出来る。

「……何て威力!!」

その凄まじい威力を目の辺りにしてキャスターは呆然と驚愕な表情をストロンガーへ向けている。

「どうだババア、これが超電子の力だ!!」

余裕な赴きでキャスターを見据えているストロンガーだが、そのせいで隙が出来てしまい、シヨッカーライダーに接近を許してしまう。

「死ね、ストロンガー」

シヨッカーライダーはストロンガーに向け蹴りを入れようとするがガシV3に足を掴まれ攻撃を阻まれる。

「油断するな、ストロンガー」

V3はストロンガーに喝を入れる。

「すまねえ」

ストロンガーはV3の喝を受けて戦いに集中する。

V3はシヨッカーライダーの足を両手で掴み上空へと思い切り投げ飛ばし自分もシヨッカーライダーを追いかけるようにジャンプし空中で関節技を決め始める。

「V3空中四の字固め!!」

V3は空中でシヨッカーライダーに四の字固めを決めてそのまま脳天から地面に叩きつける。

「ぐあー」

ショットカーライダーの頭は粉々になり戦闘不能。

スーパーも一対二という不利な状況であったが動きに慣れて逆に相手を押し始める。

「赤心小林拳・梅花」

赤心小林拳・梅花の型を使いショットカーライダーの攻撃を弾き二人にパンチを放ち吹き飛ばす。

「今だ、チエーンジ・エレキハンド!!」

スーパーの銀色の腕が青く変化する。

スーパーは元々惑星開発用の改造人間であり、惑星開発の装備としてファイブハンドと呼ばれる。その名の通り五種類の腕を換装し武器として使用する事が可能なのだ。

エレキハンドは三億ボルトのエレキ光線を発射する青い腕である。

「エレキ光線発射!!」

スーパーのエレキ光線がショットカーライダーに直撃し動きが怯む。それを好機と見てスーパーは飛び上がり空中で型を取り始める。

「スーパーライダー閃光キーク!!」

ショッカーライダーにスーパー1の高速のジャンプ蹴りが放たれる。直撃しショッカーライダーの体を貫き破壊。ショッカーライダーはライダー達に押されて慌て始める。

「くそ、なぜ再改造されパワーアップした俺達がかつても簡単にやられてるんだ!!」

今の状況を信じたくないのか狂ったように叫びだす。ショッカーライダーの疑問をV3が答える。

「お前達は確かに性能的には俺たちより上だろう。だがお前達の攻撃には魂が宿っていない。その程度の攻撃じゃあ俺達は倒せない」

V3の答えを聞いても納得がいかないのか。

「そんな理由で俺達が負ける筈ないだろう。……くうくせめてあいつらだけでも始末してやる」

ショッカーライダーは視線を士朗達に向け、自身のボディーの部分を開きそこからミサイルの雨を士朗達に放つ。

「しまった!!」

ライダー達は急ぎ士朗達の所へ向かうが間に合わない。

「ははは、死ねえ」

士朗達にミサイルが迫ってくる。

「ちっ」

凜は舌打ちしミサイルにガントを放ち迎撃して何個か撃ち落とすが
全て落とせずミサイルが迫ってくる。

「くそ」

士朗達にミサイルが直撃し煙が出てくる。
煙が晴れて見ると何と無事な士朗達が出て来る。

「士朗達には指一本触れさせません。」

いつの間にか復活したのか。セイバーが士朗達の盾になりミサイル
から守ったのだ。

今まで一也にヤラレタ傷を押さえながら黙って戦いを見ていた葛木
がキャスターに向け

「潮時だな。ここは引くぞ、キャスター」

逃げるようにと提案する。

「ええ、分かっていますわ。宗一郎さま。覚えてらっしゃいな。仮
面ライダー！！」

逃げようとしているキャスターにV3は質問する。

「待て、なぜお前らがショッカーライダーと行動しているんだ？」

「貴方達が必要はないわ。次こそ必ず貴方達を殺してあげるわ。
覚悟しておきなさい」

キャスターは忌々しげに呟き空間転移で葛木と無事なショッカー
イダー三体を引き連れ闇に同化するように消えて行った。

「逃げられたか」

V3は呟き、悔しそうにキャスターの消えた方をじっと見ているの
だった。

キャラ紹介

沖一也

アメリカ国際宇宙開発研究所に勤務していた科学者。早くに両親を
失い。研究所の所長ヘンリー博士により育てられた。
惑星開発用の改造人間に自ら志願して、その第一号スーパー1のコ
ードネームが与えられる。

ドグマ襲撃で研究所が壊滅したため、本来外部のコンピューターか
らの変身コマンドでのみ変身が可能だった一也は変身する術を失っ
てしまう。

しかし、秘拳・赤心小林拳の修行を積み、赤心小林拳から得た呼吸
法を用い自らの意思で変身可能になった。

42話 三人ライダー対キャスター&ショッカーライダー（後書き）

すみません。一文字を今回は出せませんでした。
次回こそ別行動している。一文字達の話です。

43話 ついに出現！！デスシヨッカー首領 アルヴァロン（前書き）

今回は一文字と敬介のターン
今回はかなり短いです。

43話 ついに出現！！デスショットカー首領 アルヴァロン

冬木 新都街

風見達がキャスターと戦っている時、風見達と別行動をとっていた一文字隼人と神敬介は険しい顔を浮かべ目の前のビルを見ていた。

「一文字さん、ここですね」

敬介は目の前のビルを睨んだまま一文字に聞く。

「ああ、アイツからの情報だ。このビルの地下にデスショットカーのアジトがあるらしい」

「そうですね。しかし大丈夫ですかね。彼は？今アジトに潜入しているんですよね」

一文字の言葉を聞き、敬介はあいつの様子が気になるのか軽く心配した様子で言う。

「あいつなら、大丈夫だろう。それよりもビルの中に入るぞ。後れるなよ敬介」

「ええ、先輩こそ」

一文字と敬介はビルの中に入って行き、コンピューター室まで歩いて行く。

コンピューター室

一文字と敬介はコンピューター室の中に入り部屋の隅まで迷わず歩いて行く。

「ここだな。」

一文字は部屋の隅で立ち止まり何やら地面を触り始める。

カチ、一文字は何かボタンの様なものを見つけ、それを押す。

どごおおお、しばらくして部屋の真ん中部分が浮き上がりエレベーターが出てくる。

「よし、行くぞ。」

「ええ」

二人はエレベーターに乗り地下深くまで下りて行く。

地下室に着くと同時に二人は鼻を塞ぎ、神妙な顔つきになる。

「うっ、この匂いは!?!」

「ええ、もの凄い血の匂いを感じますね。」

地下室から異常なほどの血の匂いが充満している。

ましてや、一文字も敬介も改造人間、普通の人間より遙かに嗅覚は優れている。

二人は血の匂いが強い方角に歩いて行く。

奥へどんどん進んでいくとでかいドアがある。

「敬介油断するなよ」

「分かっていますよ。一文字さんこそ余り張り切らないで下さいね」
がたん、ドアを開け、一文字と敬介は同時にドアの中へと入る。
二人が部屋に入ると、部屋の中の光景を見て絶句する。

「!!!!!!……これは」

「酷い!!」

何かの実験場だろうか。

そこには人であったものがゴミの様に積まれていた。
手足が？がれたものや、眼がないもの、体の上半身と下半身が別れ
ている人。

まさにこの世の地獄絵図の様な光景である。
うあ~~~~~

「これは、まさか!!」

「彼等はまだ生きているのか。」

一文字と敬介は同時に驚く。もはや人としての原型を留めていない
彼等から声が聞こえてくる。

しかも、ごそごそとかすかに体を動かしている。

……その時!!声が聞こえて来た。

「ククククク、一文字隼人。まさか私を追ってくるとわな。神敬介
も一緒か」

二人は声の聞こえる方に視線を向ける。

「死神！！キサマがこんな酷いことを」

一文字は鋭い視線を死神博士に向ける。

「クク、一文字隼人、人間の魂が一番輝く時は何時だと思っ。」

死神博士は笑みを浮かべながら一文字に質問する。

「何言ってやがる。テメエ」

一文字は怒りから齒軋りを立てながら死神博士に言っつと、

「くく、分からないかね。それは生への渴望だ。」

「助けて……死にたくない」

「この声は！！」

助けを求める声が部屋に響き続ける。

「そう彼等はあるような姿になっても生きたいと願っている。クク、だが簡単には殺さん。彼らには更なる絶望を感じて貰う。地獄の絶望を与えるため肉体を少しづつ破壊していく。そして絶望に満ち溢れた時、彼らを殺す。そして彼等の魂は聖杯へと注がれるであらう。」

聖杯という言葉聞き敬介が死神博士に問う。

「どういうことだ。死神、聖杯戦争と何か関係あるのか？」

「くく、それを私が答えると思っているのか？」

死神が笑みを浮かべながら敬介の質問をはぐらかしている時、

「いいじゃない、死神博士。教えてあげようよ。フッフッフ」

黒髪のさわやかそうなまだ二十歳にもなってなさそうな青年が姿を現す。

死神はその青年を見て慌てた様子で

「なぜ、貴方様がここに？」

恐縮した感じで話しかけている。

「いいよ。そんなに恐縮しないで。初めまして、仮面ライダー2号、
一文字隼人、Xライダー、神敬介。会えて光栄だよ」

青年は嬉しそうに一文字と敬介を見ている。

「お前は？」

一文字は不審そういきなり現れた男を見て問う。

「ああ、僕の名はデスショットカー首領アルヴァロン、よろしく。」

男は敵意のない表情で一文字達に驚きの自己紹介をする。

「お前がデスショットカー首領だと!!!」

「こんな子供が!!!」

一文字と敬介は驚きながら青年アルヴァロンを見ている。
一文字達の驚きを余所にアルヴァロンが話しかけてくる。

「さっきの聖杯戦争と関係があるのかって聞いていたよね。もちろ
ん関係あるさ。サーヴァントの魂、そして絶望に満ちた人々の魂を
沢山、聖杯に捧げて最強の肉体を完成させる。神の器が出来上がる。」

アルヴァロンは邪気のない笑みを浮かべ笑い始める。

「神の器!?!」

一文字は?になりつつ呟く。

「そう、神の器さ。Zx、世紀王を超えた最強の器がね。」

「神の器どういうことだ。」

神敬介がアルヴァロンに聞くが

「これ以上は自分で考えてね。死神」

アルヴァロンは死神博士に視線を向ける。死神もアルヴァロンの視
線の意味が分かり

「はい、分かりました。くく、一文字隼人、神敬介、お前たちには
ここで死んでもらう。」

死神が手を上に上げると戦闘員と蜂女、ガニコウモル、サボテグロ

ンと怪人戦闘員集団が姿を現す。

戦闘員達は注射器みたいなのを握っている。ナノマシン・ベルセルクである。

戦闘員は一斉に注射器を首筋に突き刺した。

があああああ。戦闘員達は一斉に雄たけびを上げる。

「こりゃ、まずいな。」

「そうですね」

一文字と敬介は今の状況を冷静に判断する。

「さあ、奴等を殺せ」

死神博士の命令で一文字と敬介に怪人・戦闘員集団が襲いかかる。

一文字隼人・神敬介、絶対絶命の危機、彼等は無事この危機を乗り越えることが出来るのだろうか。

オリジナルキャラ紹介

デスショットカー首領 アルヴァロン

スーパードロット大戦OGに出てくる。インスペクターのボス、ウエンドロの髪を黒くした姿をイメージしています。性格はウエンドロと同じかなり残虐です。

43話 ついに出現！！デスショックカー首領 アルヴァロン（後書き）

次回は新たなライダーが一文字達の救援に来る。
次回 最後の者にご期待下さい

44話 最後の者 その名はZX（前書き）

ついに姿を現したデスシヨッカー首領アルヴァロン。

一文字隼人と神敬介に危機が迫る。

彼等は無事に乗り切ることが出来るのであろうか？

44話 最後の者 その名はZX

デスシヨッカー地下アジト

怪人・戦闘員集団が一字隼人・神敬介に迫る。

一字と敬介はお互いの背中を合わせて冷や汗を流しながら周りを見ている。

「ちっ、敬介変身するぞ」

「はい。」

二人はポーズをとり変身しようとするが

「そうはさせるか。死ねーサボテン爆弾」

サボテグロンにサボテンの形をした爆弾を投げられ変身の妨害をされてしまう。

「!!!・・・ちっ」

「クソ!!!」

一字と敬介は舌打ちし変身ポーズを止めて攻撃を回避。一字と敬介はお互い近くにいたのだがサボテン爆弾を回避した時二人とも違う場所に回避してしまい離れて孤立しまう。

お互いの距離は余り離れていないのだが今の狭い部屋で多対二とい

う状況では非常に致命的であつた。

「今だ、殺せ・・・殺すのだ!!」

死神博士は今がチャンスと見て怪人たちに命令する。命令を受けて怪人・戦闘員集団は一斉に一文字と敬介に襲い掛かる。

「死ねー！ー！。一文字隼人、貴様に敗れた屈辱、今ここで晴らしてやる」

サボテグロンは過去一文字隼人・仮面ライダー2号に敗れている。その時の恨みを忘れておらず憎悪をこめて一文字隼人に攻撃を仕掛けて来た。

「へっ、なめるな!!」 シュ、バキ

一文字は迫ってくるサボテグロンの顔に拳を叩きこむ。

「ぐっ、おのれ」

サボテグロンは一文字の予想外の反撃に驚き距離を取った。

「なめんなよ。俺は柔道六段、空手五段、変身しなくてもテメエ何かにやられるかよ」

一文字は構える。サボテグロンに少し遅れ戦闘員達も、うがああああと雄たけびを上げて一文字達に襲い掛かる。

シュシュシュ、戦闘員達の拳のラッシュが襲ってくる。

「ちっ、変身できねえ」

一文字は戦闘員達の攻撃を焦りながらギリギリで避けている。いつもの戦闘員なら一文字の敵ではないのだが彼等はナノマシンの力でパワーアップしており一人一人が怪人並の力を所有していて、さすがの一文字の顔にも焦りが出始める。敬介も一文字と似たような状況であった。

「クソ、このままじゃじり貧だ。」

蜂女がレイピアを構えて敬介の前に立つ。

「フオフオフオ、死になさい。」

蜂女はレイピアを敬介に向かい振るう、敬介は何とか回避するが徐々にかわしきれない部分が出てきて小さなすり傷が付き始める。

「ちっ、……!!」

「俺がいるのも忘れて貰っては困るな」シュ、ドカ

ガニコウモルが後ろから敬介の後頭部を叩きつける。

「ガッ……」

ガニコウモルの攻撃で敬介は一文字のいる所まで吹き飛ばされてしまう。

「大丈夫か？敬介……チ、くそ」

一文字は敬介に無事かどうか声をかけ助けようとしたが、戦闘員達

の猛攻で敬介のことを気にする余裕がなかった。

敬介は痛みには耐えながら頭を押さえつつ、顔を上げ目の前を見てみると、蜂女がレイピアを自分に向け突き刺そうとしているのを見てすぐに体を起き上がらせる。

「！！」ガシ

「何を！？」

敬介は蜂女の体を掴み一本背負いで投げ飛ばす。

「ガハ」

蜂女は背中から鉄の地面に思い切り衝突して息が詰まる。

敬介は蜂女を投げ飛ばし、近くの一文字の背中に背中を当て構える。

「一文字さん。このままじゃ、まずいですよ」

「ああ、分かってる。とりあえず変身しないとまずいな」

一文字と敬介は、変身できない状況でありながら奮戦するがやはり多勢に無勢どうしても押されてしまう。どうにか変身しようとするが敵がしぶとく変身する隙が出来ない。

SIDE アルヴァロン・死神博士

アルヴァロンと死神博士は笑みを浮かべながら一文字達の戦いを見ていた。

「ククク、アルヴァロン様。これで邪魔な仮面ライダーの二人は始

「末できますな」

「フッフ、それは分からないよ。死神、何事も終わってみたいと、イレギュラーな事態がいつ起きるか分からないからね。」

「そうですか？」

死神博士はアルヴアロンの言葉を聞いても不審そうに一文字達の戦いを見ている。今の状況で負けることはないだろうと思いつながら・・・その時、ビシャーという音と共にいきなり室内に煙が充満していく。

「何だ！これは！？」

死神博士はいきなりの状況に驚きながら辺りを見渡す。その一方でアルヴアロンは無邪気な笑顔を浮かべたまま笑いだす。

「ほら、イレギュラーな事態が起きたでしょ。フッフッフ、どうやら鼠が一匹アジトに入り込んでたみたいだね」

煙が晴れて見ると変身したのか仮面ライダー2号・Xライダーが煙から姿を現した。彼等の近くには怪人・戦闘員の残骸がちらついている。煙が出ている一瞬で怪人たちを倒したようだ。さらに煙が晴れるともう一人違う戦士が姿を現した。赤い仮面に緑の眼、V3とは違うすらりとした肉体はどこか忍者の姿を連想してしまう。アルヴアロンはその姿を目で捉えると狂ったように笑いだした。

「クク・・・フッフ・・・ハハハハハハ。まさかこの場で神の器になり損ねた出来そこないの失敗作に会うとは思ひもなかったよ。

ZX!!!」

S I D E O U T

「ハアハア、クソオーこのままじゃまずいな。」

一文字の体力が落ち始めている。敬介も同じだ。このまま変身せずに戦えばいずれ力尽きるのも時間の問題だ。
・・・その時、一文字と敬介に向け手榴弾が飛んでくる。

「何だ!!」

「あれは、手榴弾!!」

二人は驚きながら自分達に飛んできている手榴弾を見ている。
手榴弾はそのまま一文字と敬介の足元辺りに落ちると、爆発せずに煙が出てきて、すぐに部屋中に充満する。

「これは?」

二人はいきなりの展開に困惑しながら呆然としてその場で突っ立っている。

「今だ!!変身しろ。先輩」

男の声が一文字達の耳に響く。

「今の声は!!」

「ええ。あいつですね。」

二人は男の声を聞いて誰だか分かったのか安堵し、変身ポーズを取り始める。

「変身！！」「大変身！！」

一文字と敬介は仮面ライダー2号、仮面ライダーXになる。

「行くぞ！！敬介」

「ええ」

2号とXは同時に怪人たちに攻撃を仕掛ける。

「ライダーパワー！！」

二号はベルトの横のボタンを押す。

ライダーパワー

仮面ライダー1号、2号の技で。これを使用する事により本来の二倍の力を発揮する事が出来る。

ただし長時間使用すると体に負荷が激しく掛かる為余り使用出来ない。

だから2号は勝負を素早く決めようと一気に攻勢に出る。

「行くぞ、ライダーパアアンチ！！」

ドカ「ぐわわー」バキバキ

サボテグロンは2号のパンチを受けて体を砕かれて戦闘不能になつてしまう。

2号はそのまま周りにいる戦闘員にもパンチと蹴りで攻撃し、どんな敵を倒していく。

Xライダーはライドルを引き抜き蜂女に攻撃を仕掛ける。

「食らえ、ライドルスティック」ガス

「ぐっ」

未だ混乱しているのだろう。蜂女は状況が掴めずXの攻撃をそのままもろに受けてしまう。

「今だ。Xキイイーク」

Xライダーはその場でジャンプして空中でライドルを掴み大車輪してXの文字になりエネルギーを高め蜂女に蹴りを入れる。蜂女はXキックに耐えられず力尽きる。

「貴様ーーーー」

ガニコウモルはXライダーが蜂女を倒す所を見ていたのか怒りの形相を浮かべ後ろからXに迫るがグサ

「がっ」ドサ

いきなり倒れる。背中には手裏剣の様な物が突き刺さっている。

「大丈夫か？先輩」

赤い仮面に緑の眼と白と赤の混ざったボディーの姿をした者が姿を現しXを心配そうにみている。

「ああ、大丈夫だ。Z X」

仮面ライダーZ Xである。

「Z X、一気に勝負をつけるぞ」

「ああ、先輩」

Z XとXは周りにいる戦闘員を一気に蹴散らしていき、煙が晴れる頃にはすべて撃破していた。

煙が晴れるとデスショットの首領アルヴァロンが先程までの邪気のなさそうな笑みから一変、狂気的な笑みを浮かべZ Xを見て狂ったように笑いだし始めた。

「いや〜Z X会いたかったよ。神に祝福され器に選ばれた存在！！」

「！！何を言っている？」

いきなりのアルヴァロンの言葉にZ Xは？になるが、アルヴァロンは気にせず話を続ける。

「でも君は拒絶した。神に選ばれたのに、僕は君を許さない。神に選ばれた器でありながら拒絶した君を」

アルヴァロンは怒りの形相でZ Xの前に歩いて行くこととしているのだが死神がアルヴァロンの体を掴み動きを止めた。

「お待ちください、アルヴァロン様。」

「何だい？死神、僕の邪魔をするつもり！？」

邪魔をするなら許さないとアルヴァロンは死神博士に鋭い視線を送るが死神博士は掴んだ手を放さずアルヴァロンに向けて

「冷静に判断して下さい。ここは一旦引くべきです。今、貴方を失えばデスシヨッカーという組織は崩壊してしまう」

アルヴァロンは死神博士の必死な視線を見て、怒りの表情から邪気のない顔に戻る。

「そうだね。ごめんごめん。少し熱くなってたよ。」

死神博士の言うとおりアルヴァロンは逃げることにして2号立達を見て

「じゃあね、仮面ライダー達、ここは逃げさして貰うよ。・・・それとZX君、君は僕が殺すから覚えていてね。それじゃあね。行くか死神」

「待て！！」

逃げようとしているアルヴァロン達を2号達は止めようとするが、アルヴァロン達が背中を見せたと思うとすぐに消えていなくなった。

「くそ、逃げられたか」くそれにしても神の器とは一体、聖杯戦争とどのような関係が？」

「一文字達は変身を解く。一文字は変身を解いた村雨良を見て

「助かったぜ、良。ナイスタイミングだった。」

「ええ、一文字さん達も無事でよかった。」

実をいうと、良がデスシヨッカーのアジトに潜入していたのである。一文字と敬介は良とお互いの情報を確認し、敬介がこれからの行動の判断を一文字に聞く。

「一文字さん、これからどうします?」

「とりあえず、敬介。お前は風見と合流して、凜ちゃんから聖杯戦争の情報をもう一度聞いてくれ。やっぱり、今回のデスシヨッカーの一件は聖杯戦争が深く関与していると俺は思う。良は俺と来てくれ。本郷達と合流する。」

一文字がこれからの行動について説明すると二人は頷く。そして、一文字達はデスシヨッカーにやられて、手足を?がれたり、眼が無いもの、上体と下半身が真っ二つになっているゴミのように積み重ねられた人間だった者を見て悔しさと悲しみが混ざった表情をし、

「すまない。」

一文字は懺悔の言葉を吐く。

助けて〜死にたくない。彼らから助けを求める声が部屋中に響く。

「一文字さん!」

「ああ、可哀そうだがもう助けられない。彼らを葬って行こう。すまない、恨むなら助けることが出来なかった。俺達を恨んでくれ」

一文字と敬介・良の顔は悔しさから今にも泣きだしそうだ。

一文字達は彼等の所に火をつけて燃やし始める。ぎゃああああ、悲痛な叫びが部屋中に響き渡る。

「くそー」

一文字達は自分達の無力さに腹が立ち、拳を握りしめ壁にたたき込む。

「デスシヨツカー絶対に許さん」

一文字達はデスシヨツカーと戦い倒すことを改めて誓うのだった。

姿を現したデスシヨツカー首領アルヴァロンには逃げられた。

アルヴァロンから告げられた言葉、神の器、聖杯戦争。謎は増えるばかりである。

デスシヨツカーはどのような恐ろしい計画を企てているのだろうか？
頑張れ仮面ライダー

キャラ紹介

村雨 良

ブラジルの大学に通っていた日本人の青年だったが、バダンに拉致られてコマンドーとして改造手術されてしまう。

しかし、彼は城茂・仮面ライダー・ストロンガーに一度破壊されてしまい、その残骸を回収されてZ-Xへと改造されてしまう。
今までのライダー達とは違い脳改造まで施された完璧なサイボーグである。

44話 最後の者 その名はZX(後書き)

ZXの出番ちょっと少なかったです。すみません。

45話 理想を抱いて溺死しろ

衛宮邸 居間

風見達はキャスターが逃げた後、沖一也と共にその場から離れて士朗の家に戻った。

「・・・やられた。いくらなんでもこうなったら葛木は柳洞寺から降りてこない」

凜は悔しげに歯を噛み締めている。

「ああ、柳洞寺に攻め込むとしても厄介だ。理由は分からないがキャスターはショッカーライダーと行動していた。」

風見はこめかみに手を当てながら考え込むように言う。

「そういえば、風見さん、キャスターと一緒にいたあいつら何なんですか？一文字さんに似ていましたか？」

士朗が風見に聞くと、

「ああ、奴等の名前はショッカーライダー、かつてショッカーという組織が仮面ライダー2号である一文字さんともう一人仮面ライダー1号である本郷さんの戦闘データを元に作り出された殺人マシンだ。単純な戦闘力でいえば一文字さんと同等の力を持っている。」

風見の説明に凜、土朗は驚きの表情を浮かべる。

「一文字さんと同等の力ですって!!」

凜はその場で叫び声を上げる。凜は一文字・仮面ライダー2号の戦い一度見ている。

サーヴァントと互角に戦える存在がキャスターの味方をしている。その事実には驚きを隠せないでいるのだ。土朗と凜が驚いているとセイバーが凜に向かい口を開く。

「リン、一つ忠告しますが、あの寺はサーヴァントにとって鬼門です。さらにキャスターはショッカーライダーという存在を陣営に加えています。アーチャーと風見達の力を借りても、力押しでは勝機が薄い。」

セイバーが凜に向かい警告すると茂がセイバーに向け口を挟む。

「おい、セイバー、なら諦めるってのか。あいつらを野放しにしなければ何の関係のない人たちが犠牲になって行くんだぞ」

茂は声を高くしてセイバーに言う。

「落ち着け、茂。皆気持は一緒だ。」

「ええ、分かっていますよ。風見さん、ちょっと気が立っていたみたいですよ」

風見に言われて少し落ち着く茂。

「で、これからどうする凜ちゃん、このままキャスターをほおって

おく気はないのだろう」

風見は凜にこれからのことを聞くと、

「ええ、当然よ。やられっぱなしは性に合わないし、とりあえず明日にでも柳洞寺の周りを偵察して作戦を立てて早いうちに柳洞寺へ攻め込むわ。」

凜は作戦を立て次第討つて出ると皆に伝える。

皆も凜の意見に賛同した。

その時、桜と光太郎がおぼんに茶を入れた茶碗を乗せて人数分持つてくる。

「どうぞ、皆さん。お茶を入れたので飲んでください。」

桜は笑顔でお茶を皆に配る。皆礼をいいお茶を受け取る。

「そうそう、難しい話はその位にして、沖さんお久しぶりですね」

光太郎は笑顔で一也に視線を向け挨拶をする。

「ああ、光太郎も元気だったか？」

「ええ、俺はいつも元気ですよ」

光太郎は笑顔で一也に返す。

「ああ、そういえば一也なぜあの場所に居たんだ？あそこは凜ちゃん
の魔術で音が全く聞こえなかった筈だが？」

風見が一也に聞くと、

「ええ、あそこが無音だったからですよ。普通は何か音が聞こえるものでしょ。それが全く聞こえなかったので近づいてみれば風見さん達が居て、あんな状況だったんでビックリしましたよ」

一也の説明を聞き風見・茂は納得するが、士朗、凜は驚きの表情で一也を見ている。

そんな小さなことに気付いた事に二人は驚いたのだ。

普通の人間なら見逃すような事を見逃さない一也の洞察力に、

「はあく仮面ライダーって、本当に普通じゃないわね」

その時、ガシャン、士朗が掴んだ瞬間

「つつ」

士朗は痛みを感じて湯呑を離してしまい湯のみからお茶が零れてしまっ
まう。

「大丈夫ですか!!先輩」

桜が士朗に近付き心配そうに声をかける。

「大丈夫だ。桜」

「すぐ拭くもの持ってきますね。」

桜は布きんを取りに行くため立ち上がりキッチンへ向かう。

「何だ。いきなり体が痺れて!!」

士朗は顔には出さないが内心驚いている。湯呑を掴んだ手がいきなり痺れてきて感覚がなくなり離してしまったのだ。

その様子を見ていた凜が思い出したように士朗に質問してきた。

「それよりも衛宮君、貴方にさっきから聞いたかったんだけど、葛木から私を守る時使ったのは何？貴方の魔術って強化だけじゃなかったの？」

凜は敵を見据えるような真剣さで、士朗にそんな事を聞いてきた。

「黙ってないで答えなさいよ」

士朗は睨みつけて来る凜に驚きながら説明し始めた。

「いや、そうだけど。初めに出来たのが投影で、そっちは効率が悪いから強化にしろって教えられたんだ。・・・あれ、こんなの言わなかったか、俺？」

「言っていない。頭にくるぐらい聞いてない」

ぎろりと士朗を睨みつける凜。凜はどうしてなのか本気で怒っているようだ。

「じゃあ、訊くけど。貴方、投影魔術は今回が初めてじゃないのね？」

「ああ、最初に出来たのが投影なんだ。でも外見は似せられるけど中身は空っぽなんだ。それじゃオヤジは何の役にも立たないから目

先を変えて強化しろって、だからさっきのことは自分でも驚いている。イメージした物は本物には及ばないんだけど、さっきのは真に迫ってたからな」

士朗の話を聞いて凜は考えるような仕草をして士朗に言う。

「そうね。わたしでもきつとそうさせたわ。・・・でもおかしな話よね。アーチャーの剣をあれだけ長時間複製できるクセに、普通の物は投影出来ない。・・・属性が限られているのかな。凡庸性はないけど、ある事柄に関してのみ優れた魔術師つてのもいるし・・・」
なにやら思索しだし、皆に向け

「とりあえず、今日はもう休みましょう。キャスター達のこととは明日から考えましょう。」

凜は告げると考えながら立ち上がり部屋へと向かっていく。

士朗は凜が部屋へ向かった後、一也に視線を向け

「一也さんはこれからどうするんですか？」

士朗が一也にこれからの行動について聞いてみると

「予定は決めてないけど」

「なら、家に停まってくください。部屋ならまだ沢山余っているんで

士朗が一也に提案すると、一也が申し訳なさそうな表情をし断るが

「気にする必要ないぜ一也。衛宮君がそう言っただし好意に甘え

させて貰えよ。俺達も実際世話になっている訳だし。」

「そうそう」

茂と光太郎が一也に向け言うと

「ならばらく世話になるよ。衛宮君」

一也は士朗に言うと、士朗は空いている部屋へと一也を案内しようと立ち上がるが

「あっ」

士朗は間抜けな声を出し、立ち上がると同時に倒れ込む。

「大丈夫か。衛宮君」

風見に続き、皆心配そうに士朗に近付くが、士朗は何事もなかった様に立ち上がり

「大丈夫ですよ。」

大丈夫だと言い、一也を部屋へと案内しようと、一也を引き連れて部屋を出て行く。

「むっ」

風見は部屋へ出て行く時、士朗が左足を引き摺っていくのを見逃が

さず不審そうに表情を浮かべる。
皆、士朗、凜に続くように休むため部屋へと行った。

士朗の部屋

士朗は一也を部屋へと案内した後、自分の部屋へと戻り、体の調子がおかしいので布団を敷いてすぐに横になり眠ろうとしたのだが

「あーっーっぐ」

いきなり急激な痛みが体に走り布団を掻きむしる。

無理な魔術を使ったのが原因なのか、

巨大な万力で体ごと押し潰されているような圧迫感。

熱く焼けた鉄がこみあげてくるような嘔吐感。

士朗は布団の上を這い蹲って、正体不明の激痛を何とか耐える。

一、二時間痛みに耐えただろうか少し痛みが和らぎ、士朗は部屋から出て土蔵へと歩いて行く。

「ふう、何とか痛みは引いてきたか」

士朗は土蔵の中で座り込む。

その時、土倉へ向け足跡が聞こえ、

「シロウ？眠れないのですか？」

静かにセイバーがやってきた。

「ああ、ちょっと」

セイバーは士朗を見据え

「シロウ、体は大丈夫ですか？」

「えっ？」

士朗はセイバーの言葉を聞き間抜けな声を出す。

「貴方の半身どうなっているのです」

セイバーはまっすぐ士朗をみて問う。

「・・・なんだ。セイバー、気付いていたのか」

「ええ、私だけでなく、風見も気付いているようでした。それで、
どうなのです。見たところ異常があるのは半身だけのようですが」

「いや、異常ってほどの事じゃない。ただ麻痺しているだけだから」

士朗は家に帰った後、いきなり体がしびれ左半身が麻痺したことを
セイバーに説明した。

たぶん、キャスター戦で使用した投影魔術による反動であるという
ことを、

セイバーは不安げな目で士朗を見る。

士朗は大丈夫だとセイバーに声を掛けようとした時、

「体の大部分が麻痺したか。当然と言えば当然だな」

声が聞こえた方へ視線を向けると、土蔵の扉の前に赤い騎士が立つ

ていた。

「アーチャー……！」

セイバーは士郎を守る様に士郎の前に立つ。セイバーからしてみればアーチャーはどんな理由があれ士郎を剣で切りつけた敵なのである。

士郎に見てもアーチャーは敵だ。

「理想を抱いて溺死しろ」

昨日アーチャーが士郎に向け告げた言葉が、今でも頭にこびりついて離れない。

「何用だアーチャー。我等は互いに不可侵の協定を結んでいる筈。己が主の命を守るなら、早々に立ち去るが良い」

セイバーの敵意を込められた言葉を受けても、アーチャーは答えぬまま、さらに踏み入ってくる。

「止まるがいい！それ以上進むならば、相応の覚悟をして貰おう。」

セイバーの敵意は殺気が変わりつつある。

「……いや。待つんだセイバー。あいつにその気はない。それにここで戦う訳にはいかないだろう」

「む……それはそうですが、シロウ」

「いいから。で、用件はなんだよアーチャー。お前のことだ、挨拶

に来た訳でもないんだろ。」

士朗はセイバーを押しつけてアーチャーと対峙する。

「やっぱりこいつは気に食わない。生理的に受け付けない。きつと天敵とか仇敵とか、そういうカテゴリーに属する野郎だ」

士朗は心で思い、いつまでたっても口を開かない。アーチャーに腹が立ち。

「おい。用件がないなら出ていけ。」

嫌悪を隠さないままアーチャーに向け怒り口調で言う。
そこでようやくアーチャーが口を開いた。

「……ふん。投影をしたと凜から聞いたが、やはりそうか。半身の感覚がなく、動作が中より七センチほどずれているだろう？」

士朗は息を呑んだ。

アーチャーの指摘は恐ろしいくらい正確だったからだ。

「体を見せてみる。力になれるかもしれん」

アーチャーは士朗に向け手を伸ばす。

「っ……っ！」

それを見てセイバーは身構えるが士朗が止めた。

「いい、よすんだセイバー。体を見せればいいんだな。アーチャー」

士朗は上着を脱いで、アーチャーに背中を向ける。アーチャーは無言で背中に手を当てる。

「ぐっ」

感覚が無かった士朗の左半身に僅かな痛みが走った。

「運のいい男だ。壊死していると思ったが、閉じていたものが開いただけか。これならば数日もすれば回復しよう」

「閉じてたものが開いた？」

士朗はアーチャーの言っている意味が分からずポツリと口に出す。

「そうだ。おまえは勘違いしているようだが、魔術回路とは作るものでなくあらわすものだ。一度作ってしまったえば、後は表面に出すか出さないかの物でしかない。・・・そのような勘違いをしているから、本来使われる筈の回路が放棄され、眠っていたのだ。お前の麻痺は一時的なものだ。今まで在ったのに使われてなかった回路に全開で魔力を通した結果、回路そのものが驚いている状態だろう。だが、なにせよ放棄されていた回路はこれで現役に戻ったという訳だ」

「つつ」

士朗の体にもう一度痛みが走る。感覚の無かった左半身からかすかに感覚が戻ってきた。

「こんな所か。体が動く頃には以前よりましな魔術師になっている

だろう。何にせよ、俺の刀を作るなど初めにしては欲張り過ぎだ。」

アーチャーは士朗の背中から手を離す。

「では、シロウの体に異常はないと?」

「ああ、しかし明日一日は魔術を使わぬ事だ。治りかけの神経が焼きついたら麻痺ではすまん」

「詳しいのですねアーチャー」

セイバーはアーチャーに向け何か探る様に聞くと、

「似たような経験があつてな。私も初めは片腕をもっていかれた。新しい魔術を身につけるとはそういう事だ。」

アーチャーは背を向け立ち去ろうとするが士朗が呼び止めた。

「待てよ」

「なんだ。私はもうお前に用事などないが」

アーチャーは背を向けたまま士朗に言う

「ただ訊きたいだけだ。お前が言った理想を抱いて溺死しろの意味をな」

「言葉通りの意味だ。付け加えるものはない」

断言に迷いはなく、アーチャーは本気で、一片の迷いもなく返答し

た。

士朗はアーチャーの言いようが我慢できなかったのか。怒りの口調でアーチャーに言う。

「じゃあ、お前は何なんだアーチャー！お前は何のために戦っている。」

「知れたこと。私の戦う意義は己の為のみだ。つまり、大義、理想。そんな不確かな意義など偽物だ。ただ己の欲望の成就のため。それ以外に理由はない。」

「自分の・・・自分の為だけだと」

士朗は鋭い視線を向けアーチャーを睨みつける。

「そうだ、お前の欲望が誰かを救いたいというのが理想なら好きにするがいい。ただし、それが本当に、おまえの欲望ならばな」

「なっ」

士朗はアーチャーの言葉を聞き思考が止まる。

そんな士朗を気にせずアーチャーは話を続ける。

「自分の意思で戦うならば、その罪も罰も全て自分が生み出したもの、背負うことすら思想の内だ。だがそれが借りものの意思であるなら、おまえの唱える理想は空想に堕ちるだろう。戦いには理由がある。だがそれは理想であってはならない。理想の為に戦うのなら、救えるのは理想だけだ。そこに人を助ける道はない。」

士朗は声が出ない。反論が浮かばない。アーチャーの言葉は、それ

こそ矢のように胸を刺して来る。
それは士郎だけでなくセイバーも同じであった。

「戦う意義とは、何かを救いたいという願望だ。少なくともお前にとってはそうだろう、衛宮士郎」

「!」

「だが他者による救いなど救いではない。人を叶えるには本人の意思と結果だけだ。他人による救いなど、そんなものは金貨と同じだよ。使えば、他人の手に回ってしまう」

士郎はそれは違うと言葉に出したいのだが声が出ない。

「だから無意味なんだよ。お前の理想は、確かに誰かを救うなどというお前の望みは達成できるだろう。しかし、以前貴様に風見志郎が言っていた筈だ。自分を大切に出来ないものに本当の意味で人を救う事は出来ないよ、だがお前には自信を救うという望みがない。だからこそ平気で自分を傷つけても、お前は、お前のものではない理想を抱いて、恐らく死ぬまで繰り返す。」

士郎は反論も浮かばないまま下を向いたままただただアーチャーの話聞くしかなかった。

「私が言いたかったのはそれだけだ。人助けの果てには何も無い。結局、他人も自分も救えない、偽りの様な人生だ。」

アーチャーは今度こそ土蔵を出て行った。

「.....」

「……………」

士朗とセイバーは互いを見ることもできず、居もしない奴の背中を見つめていた。

アーチャーが土蔵を出て見ると風見が外で立っている。

「風見志郎、お前も衛宮士朗が心配出来たのか。ふっ、物好きな事だ。」

アーチャーは笑みを浮かべながら風見に言う

「それはお前もだろう。なぜお前は衛宮君にあのような忠告をしたんだ？」

風見は意外そうな感じでアーチャーに問う

「なーに、私はあのような理想だけを追いかける愚者に現実というものを教えてやったただけだ。」

「……………アーチャー、お前は何者だ。お前から衛宮君に向けられる殺気、ただ単に敵同士というだけで送られる殺気とは違う。お前はなぜ衛宮君にあのような憎悪を向けるんだ？」

風見の言葉を聞いて、アーチャーは笑みの表情から一変、物凄い形相で風見を睨みつける。

「貴様には関係のない事だ。私は私の目的を果たす。それを邪魔するといふなら貴様を殺す。」

告げると、アーチャーは霊体化し消えて行った。

アーチャーの目的とは一体何なのであるうか？

46話 王女 メディア（前書き）

キャスターと葛木の出会い

46話 王女 メディア

夜 柳洞寺

キヤスターは一人イライラしながら寺の一室の中で座り込んでいる。

「くぅおのれ、よくも私の邪魔をどれだけ目障りなの。仮面ライダー」

キヤスターは忌々しげに仮面ライダーの名前をただただ言い続ける。ガラガラガラふすまが空き葛木宗一郎が部屋へと入ってきた。

「！！宗一郎様、もう体を動かしても大丈夫なのですか？」

「ああ、多少動きに制限があるが、支障ない」

キヤスターはそれでも葛木を心配そうな様子で見ていると、その時がらがらとふすまが空き招かれざる客がやってくる。

「貴方は・・・何しに来たの？」

キヤスターはいきなりの訪問者地獄大使を見て驚きの表情をしながら地獄大使を見ている。

「ふ、何しに来たのとは御挨拶だな。キヤスターよ、そなた我が偉大なるデスシヨッカーの戦力を貸し与えたというのにライダー達に敗北したようだな。」

「・・・それがどうしたの。貴方達が戦力として貸してくれたシ

ヨッカーライダーだったかしら。彼等が弱すぎたのよ。あの程度の戦力じゃあ、セイバーや仮面ライダー達には通用しないわ」

キヤスターは慌てながら地獄大使に言うと、

「ふっ、そうか。対魔力のないライダー達にはお前の魔術が有効だと思いき期待していたんだが、その程度だったとは、もはや貴様との協力関係に意味はないな。貴様との付き合いもこれまでだ。後は好きにするがいい」

地獄大使はキヤスターとの同盟を破棄して立ち去ろうとしたのだがキヤスターは慌てて地獄大使を引きとめる。

「待つて！！仮面ライダー達を倒す秘策ならちゃんとあるわ」

地獄大使は動きを止め、キヤスターの言葉を興味深そうに聞いてきた。

「ほう、面白い事を言うのだな。キヤスター、いいだろう。お前にもう一度だけチャンスを与えてやる。だが、もう次はないと思え、死に物狂いで貴様の秘策とやらを試してみるがいい。我々デスショットカーの協力を無くしたら貴様が聖杯戦争で勝ち残るなど不可能だからな。フッフフ、ハハハハハハ」

地獄大使は笑いながら柳洞寺を去って行った。

「くう〜」おのれ〜しかし今彼らとの協力を失えば私が聖杯戦争に勝ち抜くのが難しくなるのも事実、彼らには私の駒になって貰わないといけませんから・・・そう、私は絶対に勝たなければなら

ない。)

キャスターは今まで地獄大使とキャスターのやり取りを黙って見ていた葛木に視線を移す。

「宗一郎様・・・宗一郎様は命の恩人、貴方と共にいられるなら私は・・・」

回想　キャスター

私を召喚した魔術師は矮小な輩だった。奴の従僕の身分でいることなど耐えられない。私は即刻、私を召喚したマスターを殺し彼の元から逃げ出した。手にしたわずかな自由と引き換えに私は魔力の供給源を失い、あとはただ消滅を待つのみの上だった。

「ハ・・・ハア、」

私は木々に倒れ込みながら歩き続けた。

泥に汚れ、呼吸を乱し、助けを求めるように手を伸ばし続けた。

「ハ・・・アハ、アハハハ・・・」

乾いた笑い、私は自分の身が保たない事もおかしければ、下卑たマスターの寝首をかいた事もおかしかった。

ついでに言うのなら、マスターとの繋がりを甘く見ていた自分の甘さもおかしくて仕方がない。

私は実に上手くやった。

私のマスターは正規の魔術師だった。年の頃は三十代で、中肉中背で、あまり特徴のない男だった。戦う気もないくせに勝利だけを夢見ている。他のマスターの自滅を影で待っているだけの男だった。男は私を信用しなかった。

魔術師で優れた私を妬み、他のサーヴァントに劣る私を罵倒し続けた。

数日で見切りをつけた。

私は従順なサーヴァントを振る舞い続け、男の自尊心を満たし続けた。

結果として簡単な、どうでもいい事に令呪を消費させたのだ。

令呪などなくていいと。

令呪の縛りなどなくとも私はマスターに忠誠を誓っていると信じ込ませた。

結論として、信用したマスターが悪い。

男はどうでもいい事に三つ目の令呪を使い、その瞬間、私は男を殺したのだ。

「く、あ」

だが私は失敗した。

サーヴァントはマスターからの魔力供給で存在できる。

それは何も魔力だけの話ではない。

サーヴァントはこの時代の人間と繋がる事により、この時代での存在を許されるのだ。

つまり、自らの依り代、現世へのパスポートであるマスターを失うという事は、外側へと強制送還されるという事だ。

・・・しかし、それでもここまで消耗しない。

これは男が私に残した最後の呪いだっただ。

男は、自分より優れた魔術師である私を認めなかった。

故に私の魔力を、常に自分以下の量に制限していた。

人間程度の魔力量で英霊を留めておける筈がない。

本来の私なら、マスターを失っても二日は活動できるのだが、今は違う。

魔力は存在するだけで刻一刻と激減していき、ついに底が見え始めた。

・・・おそらくは、あと数分。

このまま次のマスターを見つけないければ私は消えてしまっただろう。何も為さず、ただ哀れなサーヴァントとして戦う前に消えるのだ。

「ア・・・ハア」

悔しかった。

でもどうしようもなかった。だっていつもそうだ。

私はいつだって不当に扱われてきた。

いつだって誰かの道具だったし、誰にも理解されることなどなかった。

私の人生は、他人に支配され続けるだけの物だった。

神という選定者によって選ばれた英雄を助ける為だけに、まだ幼かった私の心は壊された。

美の女神とやらは、自らが気に入った英雄の為だけに、知りもしない男を愛するように呪いをかけ。

私は虚ろの心のまま父を裏切り、自分の国さえ裏切らされた。そこからは記憶がない。

全てが終わった後、王女であった私は見知らぬ異国にいた。男の為だけに王である父を裏切った私。

祖国から逃げるために弟を八つ裂きにし、無残にも海に捨てた私。周りからは魔女と呼ばれ、そしてそれを望んだ男は、王の座を得るために、魔女など妻に出来ぬと私を捨てた。

縛られたまま見知らぬ異国に連れ去られ、魔女の烙印を押され、唯一頼りになる相手に捨てられた。

私に咎はなく、周りの者たちもそれを承知してたにもかかわらず人々は私に魔女の役割を与え続けた。

私は人々の生贄とされたのだ。

全ての咎は私のせいだと皆憎悪の視線を向けてくる毎日、誰も弁護するものなどいなかった。

「は・・・はは、あ、は」

だから、私は受け入れてやった。

どうせ魔女としてしか生きられぬなら、魔女として生きてやろうとおまえたちがおまえたちの咎を知らないなら、それでいい。

それを知らぬ無垢の心のまま、自らの罪によって冥府に落ちて、永遠に苦しむがいい。

彼等は冥府から出られやしない。

だって罪の所在が解らないのだから、一生罪人のままで苦しむしかない。

それが私、かつて王女メディアと呼ばれた、裏切りの魔女である、自分に科する存在意義なのだから。

「あ・・・あ」

だが、そんなこと。

本当は誰も望んだ訳ではない。

それは私も同じ。

私は自分の望まない復讐を続けるだけ……あの人に会うまでは。

がさりという音が聞こえて来た。私は倒れそうな意識のまま前方を睨んだ。

時刻は深夜。

こんな山林に寄りつく人間がいようとは。

「そこで何をしている。」

重い声だった。

私は相手を確認する余裕さえなかった。

ただ終わったと思っただけ。魔術を行使する力もない。腰の下からは返り血で真っ赤だ。

血に濡れた女が隠れている。

それだけで、この人間が何をするか明白だった。

まずは逃げる。その後、通報するか。見なかったことにするのか。どちらかであろう。

どちらにせよ、もう満足に動けない私には関係のない事だが。

私はこのまま、独りきりのまま冷たい最期を迎える。きっとそうだと思っていた。

！！気が付くと、その場所にいた。

目前にはあの人間、林で出会った男が座っている。

「起きたか。事情は話せるか」

それが初めの言葉。私は呆然と男を見つめていると

「迷惑だったのなら帰るがいい。忘れろと言つたら忘れよう」

変わらぬ口調で、男は私にそう告げてくる。

それが私のマスター葛木宗一郎との出会いだ。

葛木はとても不思議な男だった。

幽霊とでも言うのだろうか。

生きている理由もないが、死ぬ理由もない。

ただ凡庸とそこに在り、在るからには与えられた事を成す。

私はこの男なら傀儡にするのも容易と思つた。

それが間違いであつたことに、少しづつ理解した。

葛木宗一郎には過去が無い。

自己が無いのは過去が無いからであり、葛木自身空っぽという訳ではなかつた。

事実、葛木は誠実な男だった。

マスターになつてほしいと言つた時も、自分の正体を明かした時も、あっさりと受け入れてくれた。

「このような話を信じるのですか？」

私が問えば

「今のは嘘なのか？」

と返して来る。

もちろん真実だと答えれば、ならばそれでいいと受け入れた。私は新しいマスターを得ることで現世に留まり、魔女としての役割に復帰した。

・・・今でも奇跡だと思っている。連れ込まれたのが柳洞寺でなければ、私は目覚める前に消えていただろう。

柳洞寺はサーヴァントにとって鬼門だが、中に入ってしまえば最高の召喚場所だ。

結界に囲まれた柳洞寺は、人間でないものを存続させるに適した場所になっているからだ。

その結果、私は最高の霊脈を押さえ、鉄壁の守りを手に入れ、聖杯のクラクリさえ読み取り、アサシンの召喚にも成功した。しかし、そんな物は些細なことではない。

本当に大切な事は一つだけ。

他人から見れば小さく、重要性のない事柄。

葛木宗一郎に出会えたことが、私にとって何よりも勝る奇跡だったのだ。

回想終了

く今の幸せはどんな手を使ってでも守り抜く。く

キャスターは宗一郎を見て固く決意する。

くフフ、それにすでに種をまいてますから

キャスターの策とは一体!?

47話 嵐の前の静けさ(前書き)

ちよつと、ストーリーを進めたいので結構適当な感じになっている
と思いますが・・・ご容赦ください。
後、かなり今回は短いです。

47話 嵐の前の静けさ

SIDE 衛宮 士朗

「また、この夢か」

幼き日、全てを失った火事、

何の為に、何を求めたのか。

助けられなかった人達がいて、助けられなかった自分がいた。きっと、それが理由の筈だ。

それから何があつて、何に成ろうと思つたのか。

……灰色の空を覚えてる。

泣き出す一歩手前の暗い空。

そこで生きようともがいていた意思も消えかけた。

意思がなくなれば死ぬだけだ。

多くの人たちを見捨てて歩いて、ほんの数分だけみんなより長生きした。

その過程で、色々なものが死んだんだ。

だからほとんど空っぽだった。

生きていたい、という願いさえ折れれば、それで無になる。

何も無いのなら、あとは死ぬしか残っていない。

そうして死んだ。

考えるのも難しくなって、目を閉じて……完全に真っ暗になる一歩手前で、空に伸ばしていた手をキリッグに掴まれた。

それが全てだ。

何にもなくなつた。

何もなかったから、それしかなかった。

自分には出来なかったから、痛烈に憧れた。

・・・そう。

助けられなかった人達の代わりに、これから、多くの人たちの為になろうと思つたのだ。

なのに・・・。

それが偽りだと、あいつは言った。

借り物の理想。

巡る金貨のような救い。

報われる事などないという、その末路。

何の為に、何に成ろうとしたのか。

「正義の味方になりたかつた」

そう言い残したのは俺ではなく、たしか・・・

SIDE OUT

「つう」

士朗は目を覚ます。

日差しは強く、今日が晴天だと告げている。

「くそ、だっていうのに頭痛がする。」

昨夜のアーチャーの言葉が原因なのか、士朗はこめかみを押さえながら起き上がる。
その顔には寝起きなのに疲れが見え、とても寝覚めは良さそうではなかった。

「はあくとりあえず顔を洗いに行こう。」

時刻は六時半、士朗は部屋を出て洗面所まで歩いて行く。

士朗は脱衣所で顔を洗って歯を磨くと、眠気は完全になくなり、朝食の準備をする為居間に向かう。

「おはようございます。先輩」

「ああ、桜、おはよう。」

居間に来てみると一人桜がもう朝食の準備を始めている。

「悪いな桜、俺もすぐ手伝うよ。」

士朗は手伝おうとすると、

「いいですよ。先輩、もう少しで準備は終わりますから、少し休んでいて下さい。まだ昨日の疲れが先輩まだ落ちてないんじゃない」

桜は士朗を止める。

「ああ、分かった。じゃあ、ちょっと道場のほうで時間でも潰しくよ。」

士朗は道場の方へ向け歩いて行くと、道場前でシュシュと風切り音みたいなのが聞こえてくる。

「なんだこの音は？」

士朗は？になり道場へ入って見ると

「スウウウウ・・・ハアアアアアア」

沖一也が道着を着て道場で中国拳法の呼吸法をして、

「せい、やあ」

次に、赤心小林拳の型を取り始める。

士朗は一也の華麗な動きにただただ見惚れていた。

セイバーやランサー、アーチャーの様な戦場で鍛えられた究極の一とは違う。

己を極限まで鍛えぬいた芸術の一、その赤心小林拳の動きはとても美しかった。

まさに、一也の動きは演武の舞である。

「ん・・・何だ衛宮君か。すまない勝手に道場を使わせて貰っているよ。」

一也は赤心小林拳の型を取るのを止めて笑顔で士朗に断りを入れる。

「いえ、それは構いません・・・それにしても一也さんの動き、凄いですね。今、何をしてたんですか？」

「ああ、赤心小林拳の基本の型を取っていたんだよ。」

「赤心小林拳？」

「ああ、俺が使う流派だ。・・・そうだ衛宮君、暇なら赤心小林拳の基本の動きを教えてあげようか？」

一也は士朗にそう言うと、

「本当ですか」

士朗は目を輝かせて一也を見る。

「ああ、まあ基本だけだね。」

「よろしくお願いします。」

士朗は一也の指導のもと、朝食の時間まで赤心小林拳の基本的な動きを教えて貰った。

士朗と一也は、居間へと行き、皆と朝食を済ませる。

学校はライダーの一件でまだ混乱していてしばらくの間は休校だ。

それで桜は慎二の様子が気になると言い、朝食を終えると病院へとむかった。

一人で外に出たら、危険かもしれないということで茂と光太郎が桜について行く事にした。

「さてと、片付けでもするか。」

士朗は食器の片付けをしようとする。

「おはよ〜士朗」

がらがらいきなりふすまが空き、藤村大河が部屋へと入ってきた。

「藤ねえ・・・もう体は大丈夫なのか？」

士朗が驚きつつ大河に聞くと、

「ええ、もう大丈夫よ。久ぶりセイバーちゃん、遠坂さん。風見さんも私がない時、士朗の面倒見てくれてありがとう」

大河は元気一杯で風見達に挨拶する。

「ああ、藤村さんも元気そう良かった。」

風見が安心したように大河に言う。

「すみません。心配掛けて、・・・それはそうとそちらの方どちらさん？」

大河は一也を見て士朗に聞く。

「え〜と、」

士朗はどう説明しようか。悩んでいると凜が助け船を出す。

「藤村先生。一也さんは私の親戚なんです。」

「遠坂さんの親戚？」

凜は一也のことをうまくごまかし大河に説明する。

「そうなの。遠坂さんに用事があったてここまで、沖さんよろしく。

私藤村大河。士朗の保護者よ。」

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

お互いに自己紹介し、大河は士朗を見て

「し〜ろ〜う・・・私お腹すいた。病院食ばかりだったから。士朗のご飯が恋しくなちゃった。何か作って」

大河は居間の机にへたり込み士朗に食事を要求する。

「はあ〜。まったく藤ねえはわかったすぐ作るよ。」

「だから好きよ士朗」

大河は笑顔になり士朗を見る。

士朗は大河の為、ご飯の準備に取り掛かる。

しかし、大河の来訪により士朗達は危険におかされるのだが、今の士朗達を知る由はなかった。

47話 嵐の前の静けさ（後書き）

次回 何とセイバーが・・・キャスターの手に。
士朗達に危機が迫る。

次回は裏切りの短剣 ルールブレイカーにご期待下さい。

48話 裏切りの短剣 ルールブレイカー（前書き）

すみません。パソコンの調子が悪かったので更新が遅れました。

48話 裏切りの短剣 ルールブレイカー

衛宮邸 居間

風見、士朗、凜、一也は目の前で繰り広げられている光景を啞然とした様子で見ている。

がつつがつ「うまいうまい。これよこれ、やっぱり士朗の料理は最高ね！！お姉ちゃん嬉しくて涙が出てきそうだわ。」

藤村大河は大げさな事を言っているのだが物凄い勢いで士朗の作った料理をタガが外れたように平らげていく。すでに五人前位は平らげているであろうか。それでもペースが乱れることはない。

「……いい食いつぶりだな。」

「……ええ、見てて気持ちいいですね。」

啞然とした様子で見ている。風見と一也がようやく口を開き素直な感想を言う。

ただ、セイバーただ一人が大河が食べている料理を羨ましそうに見ている。

それに士朗が気付き、

「なんだ。セイバーも欲しいのか？」

「……いえ、私は騎士です。そのようなはしたない事など……」

あー!!」ぐうッ

セイバーの腹の虫が居間に鳴り響く。

「お腹は正直な様ね」

「うっ」

凜の一言によりセイバーは顔を真っ赤にして、恥ずかしさのあまりプルプル震え始める。凜も余計な事を言ってしまったと思いい口を塞ぐがもう遅い。

大河を除いて辺りに重苦しい空気が流れる。

「士郎、おかわり。」

大河はそんな事も気にせず士郎におかわりを要求しさらに食べる。いったい、いくらご飯を食べれば気が済むのか。

「もうやめとけ。藤ねえ。いったい何人前食べるつもりだ？」

さすがに身内同然である大河の女性とは思えない食いつぶりが士郎は恥ずかしいのか大河を止める。

それを聞いて、大河は食べるのを止めて考えるような仕草をし、

「・・・そうね。腹八分ってよくいうし。」

「藤ねえ。腹八分なんて、とつくに超えてるだろ」

呆れた様子で士郎は大河を見ている。

「もう士朗ったら、最近私に対してちょっと厳しくなったんじゃない。そう思うわよね、風見さん」

「あ、ああ、そうですね」

いきなり話を振られて風見は慌てる。

「そうなのよ、最近の士朗ったら」

大河は風見に士朗の事に関しての愚痴を言い始める。

「ちよつと、待て藤ねえ……!!」

士朗は大河を止めようとしたがいきなり激しい違和感に襲われた。何一つ欠けていないのに、何一つとして満足できない消失感。

セイバーと凜の顔が強ばる。それは士朗とて同じだ。

今まで通りなのに、何か大きなモノを剥がされた建物。

屋敷からいきなり失われたもの、それは

く結果がなくなってる」

衛宮キリツグが張った結果。

敵意あるモノの侵入を報せる結果が、強引に外から断ち切られた。

風見と一也も士朗達の様子に気付き、辺りを警戒する。

「なに、みんなどうしたの？」

士朗達がいきなり顔を強ばらせて立ち上がったので、大河はキョトンとして訳も分からず士朗達に聞く。

「藤ねえ。説明している暇はないんだ。早く、逃げてくれ。」

士朗は怒鳴るような声で大河に言うが、

「士朗、どういふこと、もっと分かりやすく説明して、」

大河は士朗に聞こうとしたのだが、・・・！！

いきなりふすまが破られて剣を持った骸骨たちが家へと入ってくる。

「まさか、真昼間から仕掛けてくるとは思わなかったわ。」とどんどん

凜は指先からガントを出して骸骨たちに放つ。

「シロウ、タイガを連れて離れていて下さい。ここは私が凌ぎます。」

「分かった。無理するなよ。セイバー」

「はい、シロウ」

セイバーは不可視の剣を構え骸骨たちを切り倒す。

「これは！..」

「油断するな一也。骸骨たちはキャスターの使い魔だ。キャスターは今どこかに潜んでいるかも知れん。」

「はい。風見さん」

風見と一也も素手と足で骸骨たちを粉碎していく。

「何なの！？……これ何なの……シロウ！？！？」

大河はいきなり訪れた初めて見る非日常を目の辺りにし、ただ呆然とその場に立ち尽くしている。

「！！いや」

骸骨たちの一人が風見達をすり抜けて士朗と大河に襲い掛かってきた。

「くそ」

士朗は咄嗟に部屋に在る、木刀を掴み骸骨を叩き潰す。

「大丈夫か。藤ねえ」

士朗は後ろを振り返り大河の安否を確認しようとした時……！！

ザシュ「えっ」

どこにしまっていたのか大河が包丁を取り出して、士朗は大河に背中を刺されてしまう。

「つつ」

士朗は大河から距離を取る。

しかし、士朗は痛み之余り大河から少し離れた所で膝をついた。

「シロウ……！！」

「衛宮君！！」

風見とセイバーは近くにいた骸骨を蹴散らして士郎に近寄る。

「フッフ」

いきなり虚空から声が聞こえてきた。
よく知っている声だ。

そして大河の後ろからキャスターが出現した。

大河はキャスターに抱えられるようにその場で意識を失った。

「・・・キャスター、お前」

士郎は痛む体を無理やり立ち上がらせキャスターを睨む。

「フッフ、どうかしら、近しい人間に命を狙われる気分はどう？」

「キサマ、藤ねえを放せ！！」

「おっと動かないで貰いましょうか。すこしでもおかしな真似をすればどうなるか。分かるでしょ！！」

キャスターは大河の首筋に手を当てる。

士郎達が少しでもおかしな行動をとれば迷わず大河を殺すだろう。

「騙されてはいけません。シロウ！！言いなりになっても大河が無事で済む筈がない。ここは私に任して下さい。」

セイバーは不可視の剣を構えキャスターに斬りかかろうとするが、

「待て、セイバーここは動くな」

風見がセイバーを止める。

「！！風見」

「必ずチャンスは来る。それまで我慢してくれ」

「くうくう分かりました」

セイバーは動きを止める。

くー一也、俺がキャスターの間隙を作る。その間に彼女を救出してくれ」

風見は念話で一也に自分の作戦を伝える。

く分かりました。風見さん」

一也も念話で答え、いつでもキャスターへと詰め寄れるよう足に若干力を入れる。

だが、キャスターは

「あゝあ、そうそう、あなたとあなたの動きをしばらく封じさせて貰うわ。」

手をかざし高速で呪文を唱える。

「くく」

「体が!」

風見と一也の動きが封じられた。

「フッフ、貴方達仮面ライダー達にはいつも邪魔されていますからね。しばらくじっとしてもらおうわ。」

そして、キャスターは士郎を見てくすくすと笑い、士郎に向け口を開く。

「用心よ坊や。魔術師であるなら、結界にはもっと力を入れないと」

キャスターを見て身構えていた凜が口を開く。

「殊勝な心がけねキャスター。自分からこっちの陣営にやってくるなんて、降伏宣言のつもり?」

「ええ、似たような用件よ。もっとも、許しを請うのは貴方達の方でしょうけど」

「そう、で。人質をとって何をするっていうのよ、アンタ」

声だけで火花が散る。

しかし、凜はキャスターを睨みつけたまま何もしない。動けば大河の命が無いからだ。

しかし、凜には秘策があった。

「アーチャー、うまく狙ってね。」

く分かっている凜。く

凜はアーチャーに念話で命令するが

「あーあ、そういえば行ってなかったわ。外から私を狙撃しようとしているのアーチャーかしら。」

「!!--」

「フッフ、下手な事をすれば彼女の命はないわよ。お譲さん」

「くう〜」

凜は悔しそうに唇を噛む。

キャスターは改めて士郎の方へと視線を向け。

「さてと、坊や。私と手を組まない。」

「!!--お前何言ってるんだ。」

いきなりのキャスターの話に士郎は怒りが膨れ上がる。

「貴方は面白いわ坊や。聖杯戦争は今回で五回目。そのいずれも貴方の様なケースはなかったでしょう。殺してしまうのは簡単。けれど折角の貴重なサンプルなもの、できれば殺さずに手に入れたい。わかって?こんな無粋な真似をするのも、貴方を生きたまま仲間にしたいからよ」

キャスターの言いようは断れば殺すという事だ。

「なに勝手なことやってんのよ・・・！」

凜が怒気を込めてキャスターを睨む。

「あら嫉妬？でも残念、悪いけど貴方に興味はないわ。私が欲しいのは完成した万能でなく、不完全な特異能力だけ。だから、その坊やは理想的ってわけ。」

キャスターは冷笑を浮かべ、大河の首筋に手を当てて土郎に返答を迫ってくる。

土郎はただ息を呑みキャスターを睨みつけるだけ、

「困った子ね。悩む事などないでしょうに。聖杯を手に入れるのは私以外にない。この町はとくに私の物だもの。いくら貴方のセイバーが優れていようと、無尽蔵の魔力を持つ私を倒すことはできないわ。その仮面ライダーという存在の力を借りてもね」

自信満々に語るキャスター。

セイバーの気配が動く。

キャスターに隙が出来れば即座に突進しているだろう。

「ふん。だから無駄なのよセイバー。いいこと、ここでこうしている私でさえ影にすぎない。私の力の供給源は町に住む全ての人間、千人単位でマスターを持っているようなものよ。それがどういふことか、わかって？」

「貴様、まさか」

セイバーは驚きと怒りを込めてキャスターを睨みつける。

「そう、魔力のない人間でも魂そのものは別でしょう？ 私達はもともとソウルイーターだもの。マスターから命という魔力を奪えば、いくらでも魔力は引き出せる。・・・貴方の怪物じみた宝具も、今の私なら何度だって扱えるわ。」

ほぼ無尽蔵の供給源。

町中の人間から吸い出す魔力。

・・・それがあるから勝つというのか。
あの時と同じ。

誰かの犠牲の上で、なおも笑い続けると、士朗は脳裏に昔の火事の光景が映し出される。

「さあ、答えを聞かせて衛宮士朗。貴方に勝ち目はないわ。聖杯を手に入れるためセイバーと共に私に従ってくれるかしら。」

答えを迫るキャスター。

「うるさい、俺は聖杯なんていらぬ。おまえとは手を組まない。」

「ふふふはははははは」

キャスターは士朗の答えが心底面白いといった感じで笑いだす。

「おまえ」

「あら、気に障った。けど貴方も悪いのよ。心にもない事をくちにするから。貴方は聖杯の犠牲者ですもの。そう言葉にする時点で、貴方は聖杯を憎んでいるのでなくて？」

「！！！！！！」

瞬間、士朗の心はギチリと凍りついた。

「知ってるわよ、衛宮士朗。前回の聖杯戦争は十年前だったんですって？その時に、全てを失った。炎の中に一人取り残されて、死を待っただけだった貴方は衛宮キリツグに拾われた。だから、本当はこの家の子供じゃない。にも関わらず、なりたくもない魔術師させられて、今まで苦しんできたんでしょう？」

キャスターは優しくそんな声で士朗に悪魔の囁きをするが、びちびち、ばりーん。

「あー、もう私の魔術を破ったのかしら」

「くうー、日に二度も同じことをされれば嫌でもなれるさ」

風見がキャスターの魔術を力づくで破った。

「一也はまだキャスターの魔術に拘束されている。」

「フッフ、貴方にも言えることよ。風見志郎。貴方もデストロンという組織に家族を殺されたんでしょう。そして改造人間にされてデストロンと戦った。辛かったでしょ。苦しかったでしょう。私と手を組まない。聖杯を手に入れば、貴方も元の体に戻れて家族も帰ってくる。幸せだった、あの頃に戻れるのよ。さあ、風見志郎どうします。」

キャスターは風見にも仲間になれと言っが

「断る。」

風見は即答で答えた。

「……なぜ、貴方は自分の運命を変えたくないの」

「お前の言うとおり、確かに辛い事も、苦しい事もあった。だが俺は過去を変えたいとは思わない。それは共に生きてきた。仲間や家族、俺に関わった沢山の人間に対する最大の侮辱だからだ。それに今はこの体が俺の誇りだ。」

真っ直ぐ答える。

「風見さん」

士朗は風見の覚悟を聞いて尊敬するような眼差しで風見を見る。

「風見、貴方は……私にはそのような……」

逆にセイバーは下を向き苦しそうな表情をする。

「そう、なら得宮士朗貴方はどう?」

次にキャスターは士朗に問う。

「俺も風見さんと同じだ、お前の話には乗らない。それに、俺は無理やり魔術師になったんじゃない。自分から進んでオヤジの後を継いだんだ。それをおまえにとやかく言われる筋合いはない」

目を逸らさず、キャスターに言い放つ。

「そう、なら貴方は要らないわ。ここで消えなさい。」

キャスターが手を士郎に向け振り上げる。

「キャスター」

セイバーはついに我慢できなくなったのか不可視の剣を振りかぶりキャスターに突撃していった。

「ふっ、ならこのお嬢さんは要らないってことね。」

キャスターは大河を殺そうと首筋に手を当てる。

「だめだ、止めてくれ、セイバー」

士郎は最後の令呪を使用する。

「な、、、シロウ、令呪を」

セイバーの動きが止まる。

令呪という絶対命令権によって行動を封じられてしまう。

「本当に馬鹿ね。坊や」

キャスター奇怪な形をした刃物を取り出し、

セイバーの胸の部分をトスと突き刺す。

「な」

時間が止まったような錯覚。

セイバーは呆然と自らの胸を見下ろしている。

「キャスター、貴様」

「そう、これが私の宝具よセイバー。なんの殺生能力もない、儀礼用の鍵にすぎない。けれど・・・これはね、あらゆる契約を覆す裏切りの刃。貴女もこれで私と同じ。主を裏切り、その剣を私に預けなさい。」

セイバーの胸の部分から赤い光が漏れる。

禍々しい魔力の奔流。

それはセイバーの全身に行き渡り、彼女を律していたあらゆるルールを破壊しつくす。

士朗とセイバーの繋がりは完全に断たれ、キャスターの腕には三つの刻印が浮かんでいる。

セイバーのマスターの証である令呪がキャスターの腕に宿っていた。

「驚いたかしら。これが私の宝具、ルールブレイカー。この世界にかけられたあらゆる魔術を無効化する、裏切りと否定の剣」

「あーーく」

床に倒れてセイバーは喘いでいる。

まるで、体内に侵入した毒と戦うように、

「アンタ、サーヴァントのくせにサーヴァントを」

「ええ、使い魔にしたのよ。お嬢さん。これで私は最高のカードを手に入れた。この娘さえ手に入れれば、バーサーカーや風見志郎、貴方みたいな仮面ライダーなんて関係無い。私の勝利は揺るがないものになっただわ。」

キャスターは高らかに笑い、抱えている大河を放す。
キャスターが放した瞬間、大河は宙を舞い、

「ほら、返してあげるわお馬鹿さん、大事な人なんでしょう?」

そのまま士朗の元まで行く、

咄嗟に士朗は大河を受け止める。

「藤ねえ……!大丈夫か藤ねえ……!」

呼びかけても返事がない。

だが、抱いた腕が温かかった。意識こそないものの、きちんと息を
していて、傷一つないままだ。

ふう〜と士朗は安堵で吐息が漏れる。

「満足したかしら。その娘は助けてあげる。それに……そうね。
貴方も見逃してあげましょう。けれど」

キャスターは凜と風見に視線を向ける。

「……そう。ま、そういう流れになるわよね、普通」

「ええ、戯れはここまでよお譲さん。さあ、セイバー、アーチャー
のマスターと風見志郎を仕留めなさい。」

風見は凜の前に出て

「凜ちゃん、下がっている」

「風見さん。」

「セイバーに魔術は通用しない。ここは俺が相手をする。」

セイバーに向かい構える風見だが、

「フッフ、貴方も結構馬鹿ね。」

キャスターは再び拘束の魔術を風見に唱える。

「ぐう、しまった」

「はははは、さあこれで終わりよ。やりなさいセイバー」

「だれが貴様の命令など」

「あーら、そう。なら」

キャスターは令呪を使用してセイバーに命令する。

セイバーの意思とは関係なく、セイバーは風見に迫る。

「ぐうー、」

どンドン近寄って行くセイバーの前に風見の盾になるよう士朗がセイバーの前に立つ。

「シロウ」

「馬鹿、あんた何やってんの」

セイバーは困惑な表情で土朗を見て、凜は土朗の後ろから怒りの表情で土朗に言う。

「衛宮君どくんだ。」

風見がどくように土朗に言うが

「どきません。おれはセイバーが風見さんに斬りかかる姿なんて見たくない。」

土朗は両手を広げ風見の盾になる。

「面白いわね。いいわ、セイバー、令呪に従いなさい。そのまま切り落とせば二人減るわ。」

残酷な命令。

セイバーはキャスターの命令を聞いて剣を振り下ろそうとした時、きいんと音が鳴り響く。

「ぐう〜」

ライドルでセイバーの剣を受け止めるXライダーの姿がある。

「貴方は！！ええ〜い」

キャスターはXライダーを忌々しげに見ると

「ここは引きます。セイバーも手に入ったことですし、」

キャスターの周りに黒いなにかが出現しセイバーと共に消えて行っ

た。

キャスターが消えたことにより、風見と一也が体の自由を取り戻す。

「大丈夫ですか。風見さん、一也」

「敬介、助かった。それよりどうしてお前がここに」

「話は後で、その前に」

Xは変身を解いて、倒れている大河と背中から血を流している土朗を見る。

「ああ」

セイバーはキャスターの手に落ちた。

風見達はどうするのだろうか？

48話 裏切りの短剣 ルールブレイカー（後書き）

次回はセイバーを失い、士朗は呆然自失になる。
士朗はどうするのか？

49話 嵐が去って

衛宮邸 居間

「くそ、俺が出掛けたせいで」

「城さん、俺も同じです。」

茂と光太郎は悔しそうに自分を罵る。

「すみません。私が兄さんのお見舞いに行きたいなんて言ったばかりに……」

桜は罪悪感で表情が曇る。

あの後、連絡を受けた桜と茂と光太郎が大急ぎで衛宮邸に戻ってきた。

「桜ちゃんのせいじゃない。俺がもう少し早く来ていれば……こんなことには」

敬介が自分のせいだと桜に言い、励ます。

「いや、誰のせいでもない。俺達も正直油断していた。まさかキヤスターが……こんな強引な手を討ってくるなんてな。」

風見は皆にそう言うが、表情は晴れない。

風見も自分が許せないのだ。簡単にキヤスターの魔術を受けてしまった自分自身が。

そんな中、士朗は一人黙り込み座り込んでいる。

その時、大河を布団へ寝かしに行った凧と一也が居間に戻ってきた。

「凧ちゃん、一也、藤村さんの様子は？」

風見が皆を代表して聞くと、

「大丈夫ですよ、風見さん。外傷もないし、健康そのものです。」

「それは良かった。」

風見達は安堵するが、凧が険しい表情を浮かべる。

「でも、キャスターの眠りの魔術を受けているわ。一応処置はしたけど。キャスターの魔術は呪いといってもいいわ。早くキャスターを倒さないと取り返しのならない事になるかもしれない。」

凧は大河の現状を風見達に伝える。

「そうか、でっとうする。」

風見が凧にこれからの行動について指示を求める。

「セイバーはキャスターに奪われたし、このままキャスターを長く放置しておくのは危険よ。もう一刻の猶予もない。今日の深夜キャスター打倒のため柳洞寺に乗り込むわ。」

「そうか、わかった。キャスターと一緒にいた。シヨツカーライダーの事についても気になる。俺達も一緒に柳洞寺に行こう。」

風見達も凧と共に柳洞寺に攻め込むことに決める。

次に凜は今まで座り込み黙り込んでいた士朗に視線を向け口を開く。

「さてと、衛宮君。」

凜は士朗と呼ばず他人行儀に士朗に話しかける。

「なんだ。遠坂」

「衛宮君。貴方はセイバーを失った。これ以上戦う理由はないわ。キレイに保護して貰いなさい。」

凜は聖杯戦争からもう降りると士朗にいう。

「ふざけるな。俺はセイバーのマスターだ。俺はセイバーを助ける。」

士朗は凜に反発。

「そう、なら後腐れのないように今ここで私があんたを殺すわ。」

凜は士朗に指先を向けガントを放つ構えをする。

「何の真似だ。遠坂!？」

「分からないの。令呪を失った時点であんたはもうマスターじゃない。ちよつと魔術をかじっただけの一般人よ。貴方が一緒に柳洞寺に来た所で死ぬのが目に見えてるわ。」

凜は魔術師の顔で士朗に言う。

「おい、今そんなこといわなくても・・・」

茂が凜を止めようとするが

「待て、茂。」

「風見さん！！何で止めるんですか。」

風見が茂を止める。

「これは俺達が口を挟むような問題じゃない。ここは茂黙っていてくれ」

「くう」

先輩である風見に言われて、茂は仕方なく口を紡いだ。
そんな中、士朗と凜のやり取りも続く。

「でも俺は」

士朗は凜に圧倒されながらも、譲らない。

「分からないの。ハッキリ言うわ。邪魔なのよ。貴方が来た所で何の役にも立たないわ。逆に風見さん達の戦いの邪魔をするだけよ。現実を直視しなさい。もう貴方に出来る事は何も無いわ。」

凜は鋭い視線を向けハッキリと邪魔だから戦うなと士朗に言う。

「く〜ちくしょー」

士朗は家を出て行った。

「先輩!!」

桜が士朗を追いかけてしようとしたが、

「追いかけていいわ。桜」

凜が桜を呼び止める。

桜は凜を睨みつけ強くいう。

「姉さん。どうして先輩にあんなひどい事言っんですか!!姉さんは悪魔です。」

凜は背を向け部屋へと戻って行く。だが桜の罵倒は続く。

ガシ「よすんだ。桜ちゃん。」

光太郎が桜を止める。

「光太郎さん」

「一番つらいのは凜ちゃんなんだ。」

「そつだ、桜ちゃん」

風見が光太郎の言葉に賛同した。

「どついうことなんだ。風見さん?」

茂が？になり風見に聞く。

「ハッキリ言つて衛宮君が今夜柳洞寺に行けば間違いなく死ぬだろう。」

風見は核心を込めて皆に言う。

「どういうことです」

「俺は衛宮君が正直怖い。」

「?????」

風見の言葉にその場にいるほとんどが？になる。

「彼は自分という存在を軽く見過ぎている。それこそ自分の命を捨ててでも人を助けるために」

「……！！もしかして風見さん、あの時の」

「一也が先程のことを思い出し風見に聞く。」

「ああ、衛宮君は俺がセイバーにやられそうになった時、迷わず俺を助けるために俺を庇った。普通の人間ならまず躊躇い迷う。自分の命が可愛いからな。その点彼は何かあったか分からないが人として大事な部分が欠落している。」

「フフフ、良く衛宮士朗と言う人間を理解しているな風見志郎。」

アーチャーが霊体化を解きいきなり姿を現す。

「アーチャー!!!」

いきなりのアーチャーの登場に皆驚くが、気にせずアーチャーは話し始める。

「お前の言うとおり、衛宮士朗という男は人として歪んでいる。私としては奴がマスターでなくなったのは非常にありがたい。本来凜の能力を持ってすればあんな理想だけを語る未熟者と同盟を結ぶことなど、はなから必要なかった」

「そうか」

「ああ、清々している。」

「確かに彼は危つく未熟だ。だが俺は衛宮士朗という人間は嫌いじゃない。」

「・・・それがどうした」

「それだけだ。」

「下らんな。風見志郎・・・貴様もいずれ知る時が来るだろう。衛宮士朗が如何に危険か。」

風見に言つと、アーチャーは霊体化し消えた。

キャスターとの決戦が迫る。

セイバーを失った士朗はどうするのか？

次回に続く。

49話 嵐が去って（後書き）

次回、衛宮邸を出た士朗・・・士朗はふらふらと呆然と街を歩く、
そして以外にもあの男の場所に行く。
士朗はどうするのか？次回に続く。

50話 士朗の迷い

SIDE 衛宮士朗

幼き日、衛宮キリツグが息を引き取った日、俺はキリツグに誓った。

「爺さんの夢は俺が引き継ぐ、俺が正義の味方になる」

かわした誓い。

それが俺の全てだった。

俺が小さい頃キリツグは余り家にいなかった。

聞けば知り合いを訪ねて世界中を飛び回っていたのだという。

だが、ある日を境にキリツグは家に居つくようになり、

ほとんど外を出歩くこともなくなってしまった。

今にして思えばキリツグは自分の死期を予感していたのだろう。

「おい、どうした。学校はしばらく休校だぞ。聞いていないのか？
まったくこんな事故は前代未聞だよ。授業が再開するまで生徒は家
で大人しくしている。いいな」

教師に怒られる。

いつの間にか学校に来ていたらしい。

士朗は一部崩壊している学校を見つめる。

そうか？そうだよな。

俺達がライダーと戦ったのは数日前の事だ。

だけど今の俺には遠い昔のように感じる。

「セイバー」

令呪を失った手の甲を見つめる。

よせ、今さら悔やんで何になる。

俺はもうマスターじゃないんだ。

士朗は学校から立ち去る。

冬木橋

次に士朗は冬木橋まで足を延ばしていた。別にどこに行くか目的がある訳でもない。ただ何となく足を伸ばしただけだ。

「ねえ。ママ、あれオフね。」

母と娘の親子が士朗とすれ違う。

「あの船はね。昔大きな事故があったのよ。誰も片付けられないからずっとそのままになっているんだって。」

「お船。壊れちゃったの。」

士朗は何となく、親子が言う。船に視線を向ける。

でかい船が見事に半壊して沈没している。

士朗はそれをぼーと見つめセイバーを召喚した日のことを思い出す。

ここは初めてセイバーと出会った日に歩いた道だ。
人目が付かないように雨合羽を着せられて・・・あいつは随分嫌が
ってたな

士朗は苦笑する。

思えばセイバーとは衝突してばかりだった。
それでも俺達は協力してライダーを退けた。
それで俺達は本当のパートナーになれたと思ってた。
・・・なのに・・・俺は

「やめろ、セイバー」

藤ねえが危ないと思った瞬間セイバーを止めてしまった。
最後の令呪を使って・・・

「くそ・・・」

あれで本当に正しかったのか。
俺はセイバーを裏切っただけなんじゃ・・・。

でも俺は藤ねえを助けたかった。
その気持ちに絶対間違いなんかじゃない。
だけどその結果セイバーは囚われの身となった。

なあ、爺さん、俺はどうしたらいい。
遠坂の言つとおり、俺に出来る事は何も無いのか。

士朗は心で問うが、答えてくれる人は誰もいない。

士朗はその後も目的もなくただ冬木の街を歩き続ける。
一時間ほど歩き、士朗は途中知っている場所に付き歩みを止める。

「この道は」

セイバーを召喚した日、訪れた言峰教会へと向かう坂道だ。

士朗は呆然と坂を上って行く。

言峰教会のドアの前まで歩き教会を見つめる。

ここから、俺の聖杯戦争が始まったんだ。

士朗はドアに手を当て、迷わず教会のドアを開ける。
ドアを開けると言峰が背を向けて立っている。

「人は時として、何か偉大な存在の前にその身を投げ出し許しを請
いたいという思いに駆られる時が来る。」

言峰はいきなり語り始める。

士朗は呆然と言峰の話聞く。

「己が歩むべき道を見失ったときなどは特にそうだな。それは根源
的な欲求なのだ。そんなときは教会の門を叩くのも悪くない。」

言峰は振り返り士朗に視線を向ける。

「ようこそ、衛宮士朗、我が言峰教会に何の用かな？」

言峰は士朗に問う。

士朗は険しい顔を浮かべ今日の朝起きた出来事をありのまま言峰に話す。

「そうか、キャスターにセイバーを奪われたか」

コツコツと言峰は士朗に歩み寄って行く。

「家族同然の者を卑劣極まりない。辛い思いをしたな 少年よ」

言峰は士朗の肩にそっと手を当てる。

「だが気に病む必要はない。お前の判断は正しかった。彼女の安全の為にはそれが最善の選択だったのだ。」

士朗は目を見開く。

「待ってくれ」ばっ

士朗は立ち上がり言峰の腕を振り払う。

「なんでさ……なんであれが正しかったなんて言えるんだよ、お前は……納得いかないんだ。こんな終わり方じゃ。何か打つ手

はないのか・・・俺はセイバーを助けたいんだ・・・！」

士朗は拳を握りしめ、自分の感情を言峰に吐く。

言峰は士朗の言葉が許せないのか怒りをこめ鋭い視線を士朗に向ける。

「助けるだど・・・おかしなことを言う。キャスターに人質を取られたお前は二人の存在を天秤にかけ、セイバーを身代りに差し出すことによつて、家族の命を救う事を選んだんだ。そのお前が今さらセイバーを救いたいなどおこがましいにもほどがある・・・！」

言峰の威圧を込めた言葉に士朗は圧倒される。
しかし、士朗は威圧に堪え、何とか口を開く。

「違う！俺はそんなつもりじゃあ！！」

反論するが、言峰の視線は冷たいままだ。

「何が違うものか。そもそもお前はマスターとしての立場を受け入れていなかった。お前は聖杯の為に皆が殺し合うという、この戦いを忌み嫌い蔑んでいた。あげく勝利の為に最善を尽くすというマスターの義務すら放棄した！これはおまえを主と認め忠誠を誓った。セイバーに対する明らかな裏切りだ。その口で二度と彼女を助けるなどとはざくな」

士朗は息を呑む。

言峰の言葉は真実だったから・・・

「違う・・・おれはただ」

士朗はふらつく。言峰の的を射た話は士朗に精神的なダメージを与えるには十分だった。

士朗はふらつきながら教会の外へと歩いて行く。

「認めたくないか。まあいい負けを認める気になったら訪ねてくるといい。身の安全くらい保障してやるう。」

「くっ」

士朗は顔を歪ませ外へと歩いて行くが、次の言峰の言葉で歩みを止める。

「それにしても、期待はずれだったな。あの衛宮キリツグの後継者がこの程度だったとは」

士朗は驚き振り返る。

「おまえ、キリツグを知っているのか。」

「知っているとも、なにせ・・・奴と私は共に十年前の聖杯戦争におけるマスターであり、命をかけて聖杯を奪い合う。敵同士だったからな。」

衝撃だった。

まさかキリツグが聖杯戦争に参加しているなんて、士朗は酷く混乱した。

「奴は強かったよ。実際 あと一步の所で戦いを制するまでいった。かくいう私もあの男に挑み敗れたのだ。だが聖杯の入手までには至らなかった。前回の聖杯は所有者が決定する前に消滅してしまった

「からな。」

言峰は語るが、士郎には半分も聞こえていなかった。

あの優しいキリツグが何でこんな人の命を奪い合うような戦いに参加していたという事実には驚き冷静では無かった。

士郎は逃げるように教会を飛び出し、ただひたすら走る。

「分からないよ、爺さん、なんであんたがこんな野蛮な戦いに参加していたんだ。」

士郎は衝撃的な情報により頭の整理が追い付かない。しばらく走り、士郎はベンチへと腰をかける。

「頭の中がぐちゃぐちゃだ。気分まで悪くなってきた。」

はっ、そこで士郎は気付く、今自分がいる場所に、

「ここは十年前の災害跡地。」

士郎が十年前に全てを失った場所、

士郎は気分が悪くなりついには吐き出してしまうそうになる。

その時、

「大丈夫か。君」

自分を気遣う優しい声が聞こえる。

士郎は顔を上げて声がかかった方へと視線を向ける。

真っ黒い革服のライダースーツを着込んだ二十代半ばの男が自分を

心配そうに見ている。

「気分が優れないなら余り無理をしない方がいい。そのベンチで横になってなさい。水でも買ってこるから」

「いえ、大丈夫です。」

「嘘は良くない。そんなに顔から汗を出して何が大丈夫なんだ、少年。人の善意は素直に受け取った方がいい。そこで横になってなさい。」

男に言われ横になる士郎。

士郎は背を向け自動販売機まで歩く男を呼び止める。

「待って下さい。貴方の名前は？」

士郎は名前を聞く。

ここまで自分の為に動いてくれる、親切なこの人の名前が知りたかったのだ。

「俺の名前は本郷猛。」

「本郷さん」

士郎は目の前の男から名前を聞いた。

偶然の出会い、しかし士郎は本郷の名前をこれ以降忘れる事はなかった。

士郎と本郷が偶然邂逅した。

この出会いは果たして凶とでるか、吉とでるか、次回に続く。

51話 迷い晴れて(前書き)

遅くなってスイマセン。

今、仕事が忙しいので当分の間、

更新が遅くなったりすると思いますが御了承下さい。

51話 迷い晴れて

「くくくく……、どうも助かりました」

士朗は本郷に買って来て貰った水を飲み礼を言う。

「気にしないでいい。大分顔色も良くなって来たな。」

本郷は士朗の状態が最初に比べて良好になり安心する。

「でももう少し体調が良くなるまでそこで横になってなさい。」

「はい。気を使わせてすいません。」

士朗は本郷に言われベンチに横になる。

そして、十年前自分が全てを失った災害跡地を見る。

「俺は何をやっているんだ。見ず知らずの人にまで心配掛けて、俺はここで全てを失って、疑獄から爺さんに助けられて、俺は爺さんの様に皆を助ける正義の味方になると誓った。だけど俺は人を助ける所か大切な人すら守れなかった。本当に俺はあれから何一つ成長していない」

士朗は自分の不甲斐無さから唇を噛む。

そして先程の言峰の言葉を思い出す。

「なあ、爺さん。何で聖杯戦争なんかに参加していたんだ。俺にはもう分からないよ。どうすればいいか。教えてくれ爺さん」

士朗は今は亡き義父に問うが答えてくれない。
そんな様子の士朗を見て本郷が口を開く。

「君は何を悩み苦しんでいるんだ？」

「えー！」

士朗は驚く。

「今の君の表情を見ていれば誰でも気付く。」

そんなに自分は酷い顔をしているのかと初めて気付く士朗。

「君の悩み誰かに話せば楽になる事もあるかも知れない。俺で良ければ話してくれないか。」

本郷が士朗を心配そうに言う。

「……」

しかし士朗は口を紡ぐ。

朝の出来事、聖杯戦争、サーヴァントの魔術関連のことなど、普通の一般人には喋れない。

もとより、士朗は例え話せたとしても話す気はなかった。

これ以上自分の弱さを人に見せたくなかったから。

本郷も士朗の様子に気付き、聞くのを止めて違う事を話し始める。

「そうか……なら一つ言っておく。君が何に対して悩み苦しんでいるか分からないが、君自身答えはでているんじゃないか。」

「俺の・・・答え？」

士朗は？になりながら訳が分からず本郷に聞く。

「ああ、君が今悩んでいる時点で、もう君の中ではどうしたいか答えは出ている筈だ。」

「！！！！」

その通りだ。

本郷の言う通りだ。

士朗の中で答えなんてもうとっくに出てる。

「俺はセイバーを助けたい・・・でも」

今の自分に何が出来るのだろうかと自分自身に問う。

セイバーを助けたいが自分の力じゃみんなの足を引っ張るだけだ。

俺がいた所で何も出来ない。

「本郷さんの言うとおり・・・答えなんてとっくにできています。でも・・・俺には」

答えは出ている。しかし、士朗はそれでもどうしたらいいかわからない。

そんな士朗に本郷が言う。

「なら、悩む前に自分の思うままに行動したまえ。このまま行動せずに後悔するより、同じ後悔するなら結果がどうあれ、自分で行動して後悔した方がいい。それとも君自身、気持ちを偽ってまですつとこのまま悩み苦しむつもりか。」

本郷に言われ士朗は目が覚めたそんな表情になる。

「そつだよな。自分に何が出来らんじゃない。・・・俺はただセイバーを助けたいんだ。」

士朗はベンチに寝転がっていたが勢いよく体を起こし立ち上がる。

「本郷さん。ありがとうございました。」

士朗は礼を言う。

今の士朗の眼は先程の死んだような眼と違い輝きを取り戻している。

「失礼します。」

士朗は走りその場から去って行った。

その士朗の後ろ姿を見て本郷は笑みを浮かべる。

「さて、俺も行くか。隼人と合流しないと。」

本郷も災害跡地の公園を去って行った。

士朗は言峰教会に再び向かった。

「そつだ何を悩む必要があったのだらう。キリツグ聖杯を求めた理由が何であれ、絶対不可能な状況の中から俺を助けだしてくれたことに変わりない。あの日・・・あの瞬間こそ俺の真実だ。俺はただその道標信じて歩めばいい。」

士朗は言峰教会に着きドアを開ける。

「随分と早かったな少年。どうだ決心はついたかかね？」

「どうやら言峰は再び士郎が来ると思い、待っていたようだ。」

「ああ、おかげで気がついたよ。今負けを認めたら俺は俺でなくなってしまうってね。俺はあきらめない。これまで歩んできた十年間に懸けても自分を曲げない……!!」

士郎は自分の決意、信念をはっきりと言峰に伝える。

それを聞き、言峰は嬉しそうに士郎に言う。

「ふ……目の色が変わったな。いいだろう。それでこそ私が認めた男である衛宮キリツグの息子だ。」

士郎は言峰に自分の言いたいことを告げると教会を出て自分の家へと走る。

「正義の味方は決して誰かを裏切ったり見捨てたりしない。俺が今十年前のキリツグと同じマスターという立場にいること……これはきつと偶然じゃない。だから見ていてくれ爺さん。俺は必ずセイバーを取り戻してみせる……!!」

言峰教会

「中立を守るべき監督役が一人のマスターに固執しているのか。言峰？」

後ろの影から誰かが言峰に話しかける。

「構わんさ。奴は衛宮キリツグの後継者。ここでリタイヤして貰っては面白くない。奴にはせいぜい気骨があるところを見せて貰おうではないか。」

後ろの男はニツと笑みを浮かべる。

「それより、言峰。あのような雑種共をいつまでのさばらせておくつもりだ。」

「ふむ。確かに我々の預かりを知らぬ所で、キャスターや間桐の翁と手を結んでいるようだからな。これ以上奴等の好きにはさせん。凛達のキャスター打倒にはあの男を向かわせる。やはりゲームは盛り上げないと面白くないからな。フッフ」

「フフ、フッフハハハハ」

士朗は迷いを振り切った。

言峰の言うあの男とは一体？

52話 ランサー襲来

衛宮邸 遠坂凜の部屋

キャスター襲来から日が落ち、朝から見えもしなかった日が没し、もとより陰鬱とした空はさらに闇を増していた。

「でっとうするのだ？凜。確かに風見志郎達、仮面ライダーは大きな戦力だろう。しかし柳洞寺はサーヴァントにとって鬼門だ。加えてセイバーもキャスターの手に落ちた。さらにシヨツカーライダーという。不透明な戦力、キャスターの宝具が分かったのは僥倖だが・・・今のままでは勝算は極めて低い。」

赤い騎士は主、遠坂凜に状況を説明する。

「分かってるわよ。でもね・・・これ以上冬木のセカンドオーナーである遠坂としてキャスターを放置出来ない。今夜キャスターに引導を渡してやるわ。」

凜は強気な態度で自身のサーヴァント、アーチャーに告げる。それを聞き、アーチャーは皮肉げな笑みを浮かべる。

「ククク」

「何よ、アーチャー？」

「なに！君らしいと思ってね。やれやれマスターの無茶な行動を支えるのもサーヴァントの仕事か。」

やはりアーチャーは皮肉げに凜に言う。

「ふん・・・なんだ。ようやく調子出て来たわね、アンタ」

凜は嬉しげに微笑んだ。

アーチャーはこうでなくては嘘だと、

弱気な発言をするアーチャーなど、凜の信頼するパートナーではない。

彼女の相棒は常に余裕めいていて、誰であろうと皮肉を口にしていなければならぬ。

それがこの騎士の優しさだと凜は気付いている。

皮肉を言うのは、そう、ようするにそこを直せと遠まわしに忠告しているようなものなのだ。

そして、凜は唐突に、

「で、そろそろ思い出した？自分がどこの英雄か。」

凜は聞く。

「いや、霧がかかったままだ。まあ、いずれ思い出ささ。」

アーチャーは皮肉げに言う。

「そう。まあいいわ。今夜勝つわよ。アーチャー」

「ふつ、当然だ。マスター・・・・・・・・で、あの小僧との契約もここまでだな」

「え？」

アーチャーがいきなり切り出した士朗の件に、凜は戸惑う。

「え、ではない。衛宮士朗はマスターではないのである。ならば、戦力にならんし、わざわざ守ってやる必要はない。君が使った二つ目の令呪は、これで解約という事だ。」

「.....」

凜は無言のままだ。

「どうした。まさか、ともに戦ったよしみで面倒を見る、などと言うのではなかるうな」

「まさか。そこまでお人好しじゃないわ。けど、まだ終わってない。あいつが自分から降りるって言うまで、約束は破らない。・・・わたしはつつぱるけど、あいつがまいったって言うまでは終わらせちゃいけないんだから」

迷いながらも凜はそう断言する。

それに、いったいどんな反旗が翻せるというのか。

「それが私の方針よ。文句ある、アーチャー」

それを聞き、アーチャーはしぶしぶといった感じで、

「仕方あるまい。君がそういう人間だという事は、痛いほど解かっている。」

答える声は皮肉げだったが、あることに気付き凜に言う。

「どうやら、奴の答え、今すぐにも聞けそうぞ。」

「えっ？」

アーチャーのいきなりの言葉に凜は？になるが、アーチャーは言葉の意味を凜に伝える。

「衛宮士朗が帰ってきたようだ。」

「えっ、そう分かったわ。」

凜は息を呑み居間へと向かった。

衛宮邸 居間

「はあはあ」

士朗は息を大きく吸い、家へと入り居間へと向かう。

どうやら言峰教会からノンストップで走り家まで帰って来たらしい。

「先輩！！どこに行っていたんですか、心配したんですよ。」

心配そうに桜が士朗に詰め寄る。

「すまない。桜、心配掛けて」

士朗は桜に大丈夫だと言う。

居間では、風見、敬介、一也が帰って来た士朗に視線を向ける。

茂と光太郎は今夜の戦いに備えて柳洞寺前に偵察に行っている。

「衛宮君……でっ君はどうするんだ？」

風見が皆を代表するように士朗を見据え聞く。

「風見さん。俺はあきらめません。今ここで逃げだしたら俺が俺じゃなくなってしまう。」

士朗は真剣に風見を見据え自分の決意を伝える。

「そう、それがアンタの答え。」

いつの間にか来た凜が士朗に冷たい視線を向ける。

「ああ、俺はこれまで歩んできた十年間にかけても自分を曲げない。」

「まだ分からないの。貴方に出来る事なんてもう何も無いの。戦う必要なんてないのよ。」

凜は冷たい視線を向け士朗に言うが、

「分かっている。俺はもうマスターじゃない。でも俺はセイバーを助けるために戦う。正義の味方は誰かを見捨てたりなんてしない。」

士朗も譲らない。

凜は怒りを顕わにして士朗を見て何か言おうとしたが風見が止め、士朗を見据え口を開く。

「衛宮君。1つ聞きたい。失礼だがはつきり言っただけで君の考え方は異常だ。なぜ君は誰かを助けるために命を平気で投げだせる。君を動かしているのは何だ。それが知りたい。」

風見は真剣に士朗に聞く。

士朗も風見の真剣な瞳を見て語り始める。

自分の始まりを……

「俺は十年前の大火災で、全てを失った。何もかも燃えて無くなってしまったし、当然俺も助からなかった。だけど俺は生き延びた。俺の育ての親であるキリツグが俺を助けてくれたんだ。その時のキリツグの顔を今でも忘れられない。「君を助けられて本当に良かった」って何度も何度も……。それで俺思ったんだ。俺は死ぬべき命をオヤジに救われた。だったら俺と同じような目にあってる他の誰かの為に使おう。そして……。その誰かを絶対絶命のピンチから救い出せた時、あの時のオヤジみたいに笑えたら、それはどんなに良いことだろうって……」

士朗の脳裏に浮かび上がるのは自分を助けた時のキリツグの表情。泣きそうな表情で自分を助けさせた事に凄く喜んでいた。俺も彼の様になりたい……。それが衛宮士朗の始まりだ。

「……そうか。なら俺から言える事はない。キャスターとの戦い参加するなら好きにするといい」

風見は士朗が戦う事を静かに認める。

「ちよつと……風見さん」

凜が風見を咎めるように視線を向ける。

だが風見は凜の視線を気にせず話を続ける。

「だが、戦いに参加するという事は自分の身は自分で守って貰わなければならぬ。今夜の戦い敵の戦力は未知数だ。俺達は他を気にかける余裕はない。それでも来るか」

風見は試すように士朗に質問する。

「はい。覚悟の上です。」

風見と士朗は互いに視線を向け合う。

「……いいだろう。一也、衛宮君をギリギリまで鍛えてやれ。」

「分かりました。風見さん」

風見はいきなり士朗に訓練をつけてくれと一也に頼む。

一也も風見の意図が分かり頷く。

「風見さん。どうということ？」

凜は怒りをあらわにして鋭い視線を風見に向け質問する。

「衛宮君の実力じゃあ。まずセイバーやキャスター、ショッカーライダーと戦っても話にならない。多少形になるのは……キャスターのマスター葛木と戦う時くらいだろう。しかし、今のままでは時間稼ぎすら出来ないだろう。幸い一也は葛木と戦っている。奴の動き、行動について理解しているだろう。今からでは付け焼刃だが何もしないよりましだろう。そう言う訳だ。少しの時間だが死に物狂いで稽古してくれ衛宮君」

「分かりました。お願いします。一也さん」

士朗は一也に頭を下げてください。

凜はどこか不服そうだ。

そんな凜に風見が小声で話しかける。

「凜ちゃん。衛宮君に戦いから降りるように言っても、彼は聖杯戦争から下りない。そういう目をしてた。なら死なないようにするしかないだろう」

「・・・分かったわ。でも私は今回の戦い衛宮君を助けない。」

凜は魔術師の顔で風見に言う。

風見は頷き。

敬介と一也に視線を向ける。

「さてと、さつきからそこにいるのは誰だ。殺気を感じないから放置していたがいい加減姿を見せたらどうだ。」

風見は何もない所に話しかける。

一也、敬介も桜と士朗を何かから守るように身構える。

アーチャーも凜の前に実体化する。

「風見さん・・・どういうこと？」

凜が訳が分からず風見に聞くが

「何だ気付いてやがったのか。ったく話が長えんだよ。 teme 工等、待ちくたびれて寝ちまう所だったじゃねえか。」

何も無い所から青い服を着た男が姿を現す。

「ランサー!!!」

そうランサーである。

彼の出現を士朗、凜、桜は驚愕な表情で見る。

「何の用だ。ランサー」

アーチャーが短剣を出し、ランサーを威嚇する。

敬介が風見に近付き小声で訊く。

「風見さん。彼もサーヴァントですか？」

「ああ、ランサーのサーヴァントだ。」

風見は敬介の質問に答え、いつでも対処できるよう体に入力する。

「くっ、こんな時に」

凜は唇を噛みランサーを見据え懐から宝石を取り出す。

凜の間にいるアーチャーはランサーに敵意を向けいつでも飛びかかりそうだ。

そんな皆の様子を見てランサーは笑みを浮かべ予想外の言葉を吐く。

「まあ待て、風見志郎やアーチャーと決着をつけたいが、殺り合いに来たわけじゃねえよ。俺はおめー達に協力するために来てやったんだからな。」

「なんだって!?!」

士朗と凜は驚きランサーを見る。

風見は冷静にランサーにどういうことか質問する。

「どういう事だ。ランサー?」

「そのまんまの意味だ。つまりだ、三人ものサーヴァントがひとごとと固まってる。しかも訳の判らねえ連中までキャスターに手を貸してやがる。今の状況どう考えてもうまくねえ。だからうちのマスターはお前たちと協力してキャスターを倒せたとよ。」

ランサーは事情を凜達に説明する。

風見はどうするかと凜に視線を送る。

凜は考えるような仕草を少しするが、すぐにランサーに視線を向け

「いいわ。協力しましょう。ランサー」

「本気が。遠坂」

士朗が困惑な表情で凜に聞く。

「ええ、本気よ。今は少しでも戦力が欲しいわ。それと衛宮君、私は貴方が戦うことまだ認めたくないから。それだけは覚えていて」

凜は敵意を込めて士朗を睨みつける。
それを意外な事にランサーが止める。

「何やっているんだ。キャスターと戦う前に味方割れしてちやあ。キャスターに勝てねえぞ。」

「……分かったわ。とりあえず、私は茂さん達が戻ってくるまで部屋にいるわ。衛宮君もし戦うならせいぜい足手まといになるような真似はやめてね」

凜はアーチャーを引き連れて部屋へと戻った。

「先輩」

桜が心配そうに士郎を見ている。

「大丈夫だ。桜」

士郎は桜に言い、一也に視線を向け

「一也さん、時間が惜しい。すぐに鍛錬をつけてください」

「ああ」

士郎と一也は道場へといった。

「やれやれ忙しいこった。」

ランサーは楽しそうにその様子を見ている。
そんなランサーに風見は問う。

「で、ランサー。マスターの命令とはいえ、よく俺達に協力しようと思ったな。俺達が裏切るとは思わなかったのか。」

風見がどこか試すようにランサーに言つと、

「ハン、よく言うぜ。テメエはそんな事するタマじゃねえよ。それにお前も俺が裏切るとは思っちゃんねえ・・・違つか？」

「ふつ、違いない。頼りにさせて貰う。ランサー」

「ハハ、話が分かるじゃねえか。やっぱりテメエは最高だぜ」

ランサーは嬉しそうに笑みを浮かべる。

二人の様子は何も事情を知らないものが見れば親友の間柄にも見えるだろう。

しかし、彼等はいつ敵になるか分からない間柄、そのことを気にせず風見とランサーは楽しそうに語り合う。

「おっと、そっちの兄ちゃん是谁だい。風見と同じような気配を感じるが」

ランサーは敬介に視線を向け問う。

「俺は神敬介。今夜限りだがお互い背中を預け合う関係だよろしく頼む。」

敬介はランサーに向け手お差し出し握手を求める。

「はは、あんたもかなりお人好しだな。得体の知れない俺に握手求めるなんてな。」

ランサーは笑みを浮かべ敬介の握手に応じ

「あんだ、かなり強いな。戦ったら面白そうだ。」

敬介の強さを瞬時に見抜き獣のような笑みを浮かべる。

キャスターとの決戦も近い。

次回からキャスター戦です。

52話 ランサー襲来(後書き)

次回からキャスター戦スタートです。

53話 決戦柳洞寺

柳洞寺の周りを偵察しに出ていた。

茂と光太郎が帰ってきて深夜11時程に桜の作った軽い夕食を食べ
て、

一行は柳洞寺に向かった。

外は雲に閉ざされ月が見えない。

これから起きる戦いに皆顔が自然と強張る。

柳洞寺に向かう途中、光太郎が心配そうに口を開いた。

「桜ちゃんを一人家に残して行つて良かったのかな」

「まあ、確かに心配だが彼女が言ったことだ。」

風見が光太郎に言う。

桜を一人家に残すのは危険ということだ誰か残そうとしたのだが桜
の意思で皆柳洞寺に向かう事にした。

「けつ、それにしてもこいつ信用出来るのか」

茂の後ろで槍を携え鼻歌を歌いながら呑気に歩くランサーを睨みつ
けながら口を開く。

「フン、手前に、信用されようなんて思ってねえよ。せいぜい俺の
足を引つ張る真似はすんじゃねえぞ」

ランサーは挑発気味に茂に返す。

その言葉に元々沸点の低い茂は額に青筋が浮かび

「随分とオモしれえ事言ってくれるじゃねえか。何ならお前から倒してやるうか」

手を合わせボキボキと鳴らしながらランサーを睨む。
いつ飛びかかってもおかしくない。

「へっ、オモしれえじゃねか。いいぜ相手になってやる。」

ランサーも槍を構え茂を向かい討とうとするが

「止める。二人とも。無駄な争いをして体力を減らすのは止める。」

風見が仲裁に入る。

「でも風見さん。こいつの言い方がナマイキなもんだから。」

さすがの茂も先輩である風見に言われ強く出れない。

「へ、そりゃーお前だろ」

ランサーは茂に向かい言う。

「んだと、てめー」

ランサーの一言により再び険悪なムードになる。

「いい加減にしる。茂、ランサー。相手を間違えるな。俺達の相手はキャスターだ。」

風見の怒りの含んだ一言により

「分かりましたよ。風見さん」

「ちっ、仕方ねえな。」

茂とランサーは一先ず争いを止めてお互い距離を取る。

お互い似た者同士なのか、どうにも仲が非常に悪い。

風見達は戦う前から非常に疲れた様子になるが、二人のおかげで多少の緊張が取れた。

それから一行は歩き、もう少しで柳洞寺に着く距離まで来た。

「待つてるよ。セイバー・・・俺が必ず助けだしてやる」

士郎の手に自然と力が入る。

それに気付き敬介は士郎に声をかける。

「まあ、衛宮君、落ち着いて。」

「あ、敬介さん。スイマセン。」

「いいっていいって。それよりどんな特訓を一也としたんだ。そんなに痣だらけになるまで」

士郎の体はどのような訓練をしたか分からないが体中痣だらけである。

「ええ、ちょっと少し体捌きと葛木との戦いの対処法を少し教えて貰いました。」

「そうか。でもあまり無理はしないように。君の役目は・・・」

「分かっています。俺の役目はせいぜい時間稼ぎ」

「分かっているなら良い。セイバーアサシン、キャスター、シヨックライダーの相手は俺達が引き受ける」

敬介は力強く士朗に言う。

「分かっています。でもセイバーは・・・」

士朗は言葉に詰まりながら敬介に何か言おうとする。

「助けるんだろ。分かっているさ。基本戦いは俺達がする。君は彼女を助けるために自分しか出来ない事をやればいい」

敬介の優しさを含んだ言葉に士朗は胸に熱いものを感じ無言で頷く。

そうこうしている内に一行は柳洞寺前の階段に着いた。

「さて、皆準備はいいかしら。」

凜は足を止めて皆に最終確認を取る。
もちろん皆力強く頷いた。

そして一行は階段に足を当てて少しづつ上がっていくと山門の目の前にアサシンが姿を見せる。

「ようやく来たか。首を長くして待っていたぞ。」

アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎。
涼しげな笑みを貼り付け悠然と一行を見下ろしている。

「しかし、これは随分と大盤振る舞いだ。これでこそ私の望み、最高の果たし合いが出来るというもの。」

アサシンは手にした長刀をだらりと垂れ下げる。

しかし、この状態こそアサシンの構えだという事は依然アサシンと戦った敬介は十分熟知している。

今にもアサシンが攻撃を仕掛けてくると思い、皆身構えるが、アサシンはフツと笑い

「まあ待て、皆と果たし合いたいところだが、私一人でそなたたち全員相手に戦えるなどと私はそこまで思いあがってなどいない。」

「どういっつもり？貴女門番でしょ。なのに私達を素通りさせるつもり」

凜は不審そうにアサシンに問う。

「フッフ、通りたければ通るがいい。ただし一人を除いてな」

アサシンは懐から小刀を取り出し、神敬介の足元に投げ付ける。

「！……！」

敬介はいきなりの事に驚きアサシンを見る。

「フッフ、神敬介、私はそなたと仕合いたい。」

アサシンの身に纏っていた気が変わった。

敬介一人にアサシンの剣気と呼ばれるものが向けられている。

敬介は一度目を瞑り、しばらくして目を見開き

「いいだろう。その挑戦受けて立つ。」

敬介はアサシンに応え自身もアサシン同様気をぶつける。

アサシンは涼しげな笑みであるが、先程と違いその笑みからは狂喜にも似た感情が溢れ出している。

「ふふ、それでこそ、私もそなたを選んだ甲斐があるというもの。今宵こそ、以前の勝負の続きをつけようではないか。」

アサシンは長刀を敬介に刺し嬉しそうに言う。

「敬介」

風見は敬介を心配そうに声をかけるが

「大丈夫ですよ。風見さん。アサシンを倒したら俺も行くんで、先に行つて下さい。」

敬介から強い意志を感じ風見は

「わかった。俺達は先に向かう。行くぞ皆」

風見の言葉に皆、敬介を残し山門を潜り柳洞寺へと入っていく。士朗一人山門の前で立ち止まり心配そうに敬介に視線を向ける。

「ふつ、大丈夫だ。衛宮君。俺は負けない。だから君も安心して彼

女を取り戻してこい。大切な人を助けだすのは正義の味方の仕事だ。だから行くんだ。士朗」

ここで初めて敬介は士朗の名を呼んだ。

敬介は士朗を一人前の男と認め名を呼び、セイバー救出を任じたのだ。

「……………ハイ!!」

士朗は大きく叫び、山門を潜り中へと入っていく。

その後姿にはキャスター襲来の際にセイバーを失ってからの迷いは一片もない。

「それでいい。死ぬなよ。衛宮君」

心でエールを送りアサシンに視線を向ける。

「待たせて悪かった。アサシン」

「よい。さて、最早我らの中で能書きはいるまい。行くぞ、神敬介」

アサシンはいつもの守りの戦法とは違い自分から敬介に攻撃を仕掛けた。

敬介も構えそれに向かい討つ。

アサシンと敬介の戦いが始まった。

柳洞寺 境内

一方柳洞寺の中に入った。

士朗達一行は困惑しながら辺りを見渡している。

多くの敵が待ち構えていると思ひ覚悟を決めていた一行。
しかし、予想していたことと違い敵は一人もおらず、辺りは妙に静
まり返っていた。

「どづいう事だ。」

風見達は不審に思ひ辺りを見渡すがやはり誰もいない。

……その時!!!!

「!!あれは……????」

柳洞寺の坊主と思われる人が多数風見達に向け歩いて来ている。

一行は不審に思ひ様子を見ていたが、寺の坊主たちが持っているの
をみて顔を引き締める。

坊主たちの手には、木の棒、包丁、金属バットなど凶器を持って一
向に迫って来ているのだ。

「……あの眼、正気を失っているのか。皆油断するな。」

風見は一行に注意の声をかける。

しかし、坊主たちは一斉に風見達に跳びかかる。

くくそ、人間相手では変身できない

風見は心で舌打ちし、

「皆、相手を気絶させるんだ。」

一行は頷き、坊主たちを迎え撃った。

キャスターとの戦いが始まった瞬間だ。

53話 決戦柳洞寺（後書き）

次回は敬介対アサシンです。

54話 Xライダー対アサシン

柳洞寺 山門

シユシユ アサシンの剣は長刀とは思えぬ速さで敬介に向かい斬りつけていく。

「くそ」

敬介は大きく下がりにアサシンの攻撃を回避する。

「どうした。逃げてばかりでは私には届かんぞ」

アサシンは尚も長刀で敬介を襲う。

その表情はすごく楽しそうだ。

「ちっ、くそ」やはりあと一歩が踏み込めない。

敬介はアサシンへと間合いを詰めようとするが踏み込めない。

アサシンの切り返しの速さは最早神業と呼んでも良かった。

しかもアサシンの一撃一撃は敬介の首を狙う必殺の一撃。

もし、一歩踏み込んだら敬介の首は胴体と別れているだろう。

このままだと、まずいと思い大きく飛んで後ろに下がりに距離を取った。

「フッフ、これよ。この胸の高鳴りが欲しかったのだ。もっと私を楽しませろ。」

アサシンは自身が望んだ闘争に対する欲求は、大きく身を結んでい

ると実感する。

神敬介は自分の剣をかわし続けている。

さらに奴には、あれがある。

アサシンはこれから起こるであろう。

戦いに胸の高鳴りを抑えることが出来なかった。

「さて、どうしたものか。」

敬介は思案する。

アサシンの攻撃をうまく対処しないと自分に勝ちはない。

そこで敬介は一つの手を思いつく。

「試してみるか。」

敬介はアサシンとの距離をジワリジワリと詰めていく。

アサシンも敬介の表情を見て何か仕掛けてくると思い笑みを浮かべて長刀をだらりと垂れ下げ自然体で敬介の攻撃を待った。

「さて、くるがよい。」

アサシンは敬介の攻撃を不動で待ち続ける。

つと、敬介がいきなり走りアサシンとの距離を一気に詰める。

アサシンとの距離をある一定詰めると敬介はただ拳を振り上げる。

「……まさか無策で私に突っ込んできたのか。神敬介。」

アサシンは先程の楽しそうな表情から一変、ひどくつまらないものを見る目で敬介の首目掛けて斬りかかる。

敬介は首を下げアサシンの攻撃を回避。

しかし、アサシンにはすぐ切り返し再び攻撃を仕掛けようと長刀で

斬りかかろうとする僅かな時間。

敬介は拳に力を入れてアサシンの乗る階段の部分を思い切り殴りつけた。

改造人間である敬介のパンチ力は普通の人間のパンチ力を遙かに凌駕し、威力は？トン位の威力はある。

もちろんその部分は粉碎され足場が崩れアサシンはバランスを崩す。

「何!!!」

アサシンもいきなりの事態に取り乱し、かすかに隙が出来る。

敬介は今がチャンスだと思いアサシン目掛けて蹴りを放つ。

ドガ、鈍い音が辺りに響く。

見事敬介の蹴りがアサシンに直撃した筈だった。

しかし、

「ぐっ」ドガ、ゴロゴロ

苦悶の表情を浮かべるのは敬介だ。

敬介は倒れそのまま転がりながら階段の下へと落ちて行った。

・・・敬介はよろよろと立ち上がり困惑気味にアサシンを睨みつける。

「何だ今のは、」

敬介がアサシンに蹴りを放った瞬間、足に衝撃が走り、痛みの余り倒れ下へと落ちたのだ。

その疑問をアサシンが答えた。

「危ない所だったわ。よもや、あのような奇策を仕掛けてくるとは

思わなんだ。しかし、」

アサシンは長刀の柄の部分で敬介に見せる。

「まさか!？」

敬介はアサシンがした事に気付き驚く。

「フッフ、咄嗟にそなたの蹴りに合わせ柄で凌いだ。そなたは自信の蹴りの威力をそのまま受けたという事だ。」

つまりこういう事だ。

アサシンは敬介の蹴りが当たる寸前柄の部分で敬介の足の急所の部分をカウンター気味に当てて敬介は自分の蹴りの威力をそのまま自分で受けたのだ。

まさに、神業。あのような状況でそのような事、すぐに実行できるであろうか。

答えは、否。

普通の人間ではあのような事出来ない。剣の英霊であるセイバーでも難しいであろう。

セイバーの方が一撃一撃の剣の威力、破壊力は上だが、剣士としての技量はアサシンの方がセイバーより上である。

敬介は今のままの姿ではこの男を倒すことは不可能と悟った。

「神敬介。もうよい頃あいであろう。変身しろ!！」

アサシンも敬介の心を知ってか知らずか変身するように急かす。

敬介は意を決して両手を垂直に上げ変身ポーズをとる。

「大変身!！」

敬介は姿を変える。仮面ライダーXへと、アサシンはそれを見て狂氣的に笑いだす。

「フフフ・・・ハハハハハハ。待っていたぞ。そなたがその姿に変わるのを、さあもつと楽しもうぞ。神敬介・・・いやXライダー」

アサシンは待ちきれないといった感じでXライダーに向け長刀を構える。

Xライダーもベルトに手を当てライドルを引き抜き

「ライドルホイップ！！行くぞアサシン」

剣の状態のアサシンに迫る。

Xライダーのライドルには4つの形態がある。

ライドルホイップはライドルスティックのような打撃用の武器と違い、相手を切り裂く剣の形態だ。

Xライダーはアサシン目掛けて一気に間合いを詰めてライドルを振るう。

キンキン、剣と剣が当たり、辺りに金属音が鳴り響く。

二人の剣は正に、捨て身の剣、お互い剣が体にかすり二人が立っている地面は二人の血で赤く染まり始める。

本来、Xに変身した状態では、アサルトライフルのゼロ距離フルオート射撃を連射されても無効化するほどの防御力を発揮し、刀位の攻撃では傷一つつかないのだが、アサシンの技量はそのような常識を容易く打ち破ったのだ。

もし今の戦いが長引けばそれでもXライダーの方が有利である。

仮面ライダー達は普通の人間以上の優れた回復能力を備えており、

多少の傷ではすぐに塞がるのだ。

それに比べ、アサシンは英霊であるが、魔力は普通の人間と変わらず、魔力で傷を塞ぐという方法もなくかすり傷が広がるばかり、もしアサシンがXライダーを倒すのであれば強力な一撃を与えるしかない。

だからこそ、アサシンは行動に出た。

アサシンは長刀での防御を止めてXへと距離を一気に詰めることにした。

「なに!!!」ザシュ

Xライダーは焦る。

アサシンは体を捻りXの攻撃を皮一枚でかわすことに成功した。

「ふっ、油断したな。」

アサシンは下段からXへ斬りかかる。

Xは咄嗟に体を下げてアサシンの長刀を回避しようとするが

ザシュ「ぐっ」

回避出来ずXのボディーの部分が切り裂かれる。

Xは倒れ込みながら一気に後ろへと後退するが咄嗟にライドルのLの部分を押しして

「ライドルロングポール!!!」

ライドルをロングポールへと変えて、その長さでアサシンにライド

ルを叩きつける。

ゴキ「グハ」

鈍い音が聞こえアサシンは吹き飛ぶ。ライドルは見事アサシンの横腹に直撃し、あばらの骨が何本か折れる。

・・・しばらくしてXライダーとアサシンはよろよろと同時にお互い気力で立ちあがる。

その瞬間、

「げほ、ゴホゴホ」

「ゴフ」

先程の攻防で受けたダメージにより、同時に吐血する。

アサシンは吐血した血を手で拭い狂気的な笑みを浮かべ

「フフ、たまらぬよな。Xライダー。この先何が見えるか。楽しみだ。さあ、今宵は力尽きるまでとことん私に付き合って貰うぞ。」

今のアサシンの表情は歓喜と吐血でまさに凄絶なものになっている。

「はあはあ。悪いが俺は負けられない。お前を倒して、俺は皆の所へ行く。」

Xライダーはライドルを握りしめ力強くいう。

「それは私も同じこと。私はそなたに勝つ。」

お互い傷だらけで、いつ倒れてもおかしくない状態。しかし、二人はただ負けられないという気持ちで倒れかける体を気力で起こしているのだ。

「しかし、このままでは埒があかぬか」

そう言うと、アサシンは唯一の構えをとった。

Xライダーは仮面の中で表情をぐっと引き締める。

今まさにアサシンが使おうとしている技は依然アサシンが使った必殺技、秘剣燕返し。

もし、直撃すればXライダーの命はないだろう。

それほどアサシンの秘剣は凄まじいのだ。

Xは以前アサシンの秘剣を一度体験している。

絶対に使わせてはならない技だという事を理解していたのだが、もうアサシンは構え必殺の一撃を止める手段はない。しかし、Xは意を決してアサシンに近づく。

「フッフ、あの夜貴様言っていたよな。私の秘剣を破ると、あの日の夜の言葉実現出来るものならばやって見るがいい。だが私の秘剣が決まれば貴様の負けだ。」

「あの夜の言葉に訂正はない。俺はお前の秘剣を破る。」

「面白い。ならばここらでそろそろケリをつけるとするか。Xライダー」

笑みを浮かべアサシンは秘剣を放つため刀を握る手に力を入れる。

しかしXライダーは気にせずアサシンとの距離を詰めていく。

何か秘策はあるのか？

次回に続く。

54話 Xライダー対アサシン(後書き)

次回X対アサシン決着。

55話 マーキュリー発動 真空地獄車(前書き)

X対アサシン決着

55話 マーキュリー発動 真空地獄車

柳洞寺 山門

アサシンはXから受けたダメージで体中から血が流れ、血の気が失せ、あばらの骨は折られ、もはや限界に近い。

だが血の気が失せた顔でにやりと笑い気力で自身の唯一の構えを取っている。

Xライダーも同じだ。

アサシンから受けた攻撃によりもはや限界に近い。

「さて、これで最後だ。Xライダー」

アサシンは構えたまま徐々にXへとジワリジワリと近づく。

「.....」

Xライダーは無言で以前受けた燕返し記憶を何度も思い出しながら近づくのを止め、ジワリジワリと近づく。アサシンをじっと待つ。

アサシンは燕返し放てる距離まで近付くと動きを止める。

「そなたとの勝負面白かったぞ。礼を言う。だがこれで最後だ。」

「来る。奴の秘剣が」

Xは全神経を集中させライドルを握りしめる。

「ゆくぞ、秘剣・・・燕返し!!!」

アサシンは自信の秘剣をXライダーに解き放つ。

上方、左右から放たれる必殺の一撃。受ければ輪切りにされ命はない。

三つの剣閃はXを襲う。

このような一撃……果たして、如何なる修練の果てに辿り着くのだろうか。

まさに修羅の業。

「ク」シユ、キン

Xはまず、上方、左右から繰り出される2つの剣閃を一つはかわし一つはライドルで受け止めた。

しかし、まだ横の一撃がある。

ザシユ、「グ」最後の一撃をかわせず直撃してしまう。

「終わったな。」

最後の一撃が決まり、アサシンはにやりと笑みを浮かべ勝利の余韻に浸っている。

しかし、

「なに……!」

自身の長刀・物干し竿がXの体に突き刺さったまま止まっている。

「ぐう、今だ」

Xは痛みに耐え、自身に食い込んでいる物干し竿の横腹をおもいきり殴りつける。

どじ、かきん

「むっ、物干し竿が！！！」

Xライダーは物干し竿を破壊するとアサシンとの距離を取った。

「……これが狙いだっただか」

アサシンはXライダーに破壊された物干し竿を無言な表情で見る。
二メートル以上はあった刀身はXに破壊されたことにより、その長さは元の長さの半分ほどだ。

「グウ……ああ、お前の燕返し……すべてをかわすのは不可能だ。お前が秘剣を使っている時、剣が三つ存在している。全てが本物で見分けが付かない。だが、お前の秘剣は最後の横の一撃で終わる。」

それが本物だ。……だからこそ俺は受けるのを最後の横の一撃に絞った……はああ……これで燕返しの威力は半減だ。」

つまり、Xライダーは自身の改造人間カイゾークとしての耐久力に全てを賭けたのだ。

いかにXライダーでもアサシンの秘剣・燕返しをまともに受ければ命はない。

だからこそ、最後の横の一撃を受けることし、全身の強化筋肉を横の一撃を受けるであろう。横腹に力を入れて防御力を高め受けたのだ。そして物干し竿の武器破壊に成功した。

アサシンの武器は他のサーヴァントと違い神秘が何も含まれてない普通の刀であり、Xの力を持ってすれば破壊は簡単だった。

しかし、その代償も大きかった。

アサシンの攻撃を受け止める事に成功したとはいえ、かなり深くまで切り裂かれ、もはやXライダーは立っていることすらままならない。
行動できたとしても、後数分で限界だろう。

アサシンはXライダーに砕かれた自身の武器を無言でじつと見つめていたが、にやりと笑みを浮かべてXに視線を向け、一言。

「見事」

とXの捨て身の戦法に称賛を贈った。

「だが、刀が砕かれようとも燕返しは放てる。完全ではないが今のそなたの状態ならば十分倒せる威力だ。」

アサシンは燕返しを放つ構えをとり、ジワリジワリと近付いて来る。

Xは痛む体を気力で奮い立たせ全神経を集中させる。

「これで決める。行くぞ」

Xは自信の体が限界が近付いているのを悟り最後の攻撃に出た。

XはS部分を押しライドルをライドルスティックに変えて……

ブン「なに!!!」

アサシンは驚く。

何とXライダーは自信の武器である。

ライドルスティックをアサシンに投げ付けたのだ。

アサシンは構えを解き驚きながらライドルを払いのける。

ライドルは宙を舞う。

「行くぞ。トオ」

Xは大きくジャンプしてアサシンに迫る。

「宙を舞うか。愚かなその選択は誤りであったな。Xライダー貴様がそこから何をしようと、私には通用せん。貴様が落ちて来た時が貴様の最後だ」

アサシンは折れた長刀を持ちかまえて燕返しを放つ構えを取る。

Xは徐々にアサシンに向け落下していく。

「これで終わりよ。秘剣!!」

アサシンの秘剣は今放たれようとしている。

Xは徐々に落下してもうアサシンとの距離はあまりない。

「燕返し!!」

アサシンはXの落下速度を計算して燕返しを放った。

このまま落下すればXはアサシンの燕返しの餌食であろう。だが、Xは何と燕返しの範囲ギリギリで

ガシ、先程アサシンに投げつけ宙を舞った、ライダーを空中で掴み、その場で大車輪した。

「何!!!!!!」

アサシンに驚愕な表情が浮かぶ。

Xは大車輪の反動でその場から再び宙を舞い燕返しをかわし、アサ

シンの背後で着地した。
もし、物干し竿が砕かれず完全な状態なら、その長さでXライダーに届いていただろう。

ガシ「これで終わりだ。アサシン。もし、お前がさっきの攻撃で俺の体内にあるマーキュリー回路を切り裂いていたらお前の勝ちだったかもしれない。」

Xライダーは背後からアサシンの体をガシリと掴む。

Xライダーの赤いボディーが光始める。

「見せてやる。これが俺の切り札だ。」

「何をするつもりだ。」

アサシンは困惑な表情を浮かべるが、Xの必殺技が炸裂する。

「真空・・・地獄車あ!!!」

その場からアサシンを掴んだままジャンプし空中でバク転しアサシンの頭から地面に突っ込んだ。

「ぐあ」「ドン

ドンドンドン、Xとアサシンの居た場所は階段の上の方だったが、空中で回転しながらどんどん下へと落ちていく。

何度も何度もアサシンは頭を打ちつけられ、意識は朦朧としている。Xライダーは柳洞寺の階段の下まで降りるとアサシンを放し、上空まで投げつけ、

「今だ」タン

地面を蹴りアサシンを追うようにジャンプ。
そして、

「Xキイイイーーク！！！！」

アサシンの背後から渾身の力を込めた強力なXキックが炸裂！！！

バキ、メキメキ「ぐああああ」

アサシンは強力なジャンプ蹴りを背中に受け再び柳洞寺の山門前へと吹き飛ばされた。

シユシユドガ、アサシンは地面に激突すると余りの勢いにより地面に軽いクレーターが出来た。

「はあはあ」

Xは荒い息を吐き、余りのダメージにより変身が解ける。

敬介は軋む体を奮い立たせ息を整えアサシンが吹き飛んだ。山門へと足を進ませた。

よろよろとよろめきながらアサシンの所へ辿り着くと、

Xライダーの蹴りを受けた部分が抉りこんでおり、肉が裂け、体内の骨が砕け散った。

しかし、アサシンの顔は弱々しい吐息を吐きながらも、その表情は安らかで満足そうだった。

「ぐほ・・・フフ、礼を言う。Xライダー。敗れはしたが満足のいく戦いが出来た。本当に楽しかった」

安らかな表情で敬介に礼を言った。

「ああ、流石は噂に名高い佐々木小次郎。俺が負けていてもおかしくなかった」

敬介がアサシンに賞賛の言葉を送るが佐々木小次郎の名を聞いた時、アサシンは何が可笑しいのか笑い始める。

「??何が可笑しいんだ」

「フフ、それがそもそも間違いだ。私は本物の佐々木小次郎ではない。」

「なんだって!!」

敬介は驚く。

アサシン・佐々木小次郎は自ら自分の存在を否定する言葉を吐いたのだ。

「・・・私はただ佐々木小次郎と同じ、燕返しが使えるという理由で呼び出された、仮初の英霊。私自身は、ただ一度も鍛え上げた我が剣を振るえず朽ち果てた名も無き浪人だ。だからこそ、生前叶わなかった果たし合いが最高の形で叶った。もう私に悔いはない。」

アサシンの口から語られる事実に敬介は顔を曇らせ、勝利の余韻も感じず沈痛な表情を浮かべる。

「そのような・・・顔をするな。そなたは私に勝つたのだ。そなたを阻むものは何もない。早く仲間達を助けに行け!!グフ」

アサシンは吐血する。

もはや血の多くを失い、焦点さえ定まらぬ眼で敬介を見据え言う。

「分かった。お前の事は忘れない。例え佐々木小次郎が本当の名でなくても俺は絶対に忘れない。」

敬介はアサシンに最大の敬意を払い、背を向け無言で去っていく。

「心遣い感謝する、さらばだ。神敬介・・・Xライダー・・・我が強敵よ」

敬介は山門をくぐり走り去った。

「・・・私もお主の名は忘れん・・・」

くフフ、目が霞んできたわ。・・・美しい月だ・・・

雲に隠れ見えなかった月が、今は見えている。

アサシンは満足そうに静かに眠る様に力尽きた。

アサシンが力尽きた後、黒い影が姿を現す。

「フオフオフオ、仮面ライダーか。初めてわしの約に立ってくれたの。これで聖杯戦争の流れを正常に戻せるといふもの」

間桐ゾウケンである。

間桐ゾウケンは力尽き、今にも消えそうなアサシンに近付き何かやるうとしている。

ゾウケンは何を企んでいるのだろうか。

マーキユリー回路

風見志郎により、体内に埋め込まれた回路で身体能力もジャンプ力、耐久力と全能力が3倍にもアップしている。この回路をセツトするため風見は自身と敬介との血液交換、施術を同時に行った。

真空地獄車

マーキユリー回路から供給されるパワーで車輪状に大地を高速回転して、相手の頭部を何度も地面に叩きつけて、戦闘力を失わせXキックで止めを刺す。Xライダーの必殺技である。

55話 マーキュリー発動 真空地獄車（後書き）

間桐ゾウケンが現れた。

彼は何をしようとしてしようとしているのか。

今回は柳洞寺の境内にいる風見達の話

56話 決戦キャスター（前書き）

更新遅くなってすみません。

56話 決戦キヤスター

柳洞寺境内

敬介とアサシンが死闘を繰り広げている時、柳洞寺境内にいる風見達一行は迫りくる寺の坊主たちを相手にしていた。

「ヒヤハハハハ・・・シネ・・・シネ」

坊主達は狂ったように凶器を持ち風見達に襲い掛かる。

「ちっ・・・やりにくいったらありやしねえ」

ランサーはつまらなそうな表情をし素手で坊主たちの首の裏に手刀を当て気絶させていく。

「ランサー、分かっていると思うが・・・」

そんなランサーに風見が坊主たちに当て身を当てながら何か言おうとする。

ランサーも風見の言いたいことが分かり

「分かっているよ。手を抜いて攻撃しろって言うんだろ。」

「分かっているなら良い。頼むぞ、ランサー」

「へいへい、人使いが荒いな。ったく」

ランサーはぼやきながら坊主たちに当て身を与え気絶させていく。

「凜ちゃん……彼等は？」

光太郎は坊主たちを対処しながら凜に彼等の状態を聞く。

「……多分、キャスターの魔術ね。彼らからキャスターの魔術の痕跡を感じるわ」

凜の説明を聞き、光太郎の胸の中は怒りでいっぱいになる。

「くそ、キャスターめ。罪のない人を利用して!!!」

今の光太郎は怒りで周りの状況判断が鈍り、後ろから凶器のナイフで光太郎を刺そうとしている坊主の存在に気付かないでいた。

ドガ「!?!」

光太郎の後ろからその坊主が倒れてくる。

「ぼさつとすんじゃねえ。気持は分かるが、今は目の前の事に集中しろ」

茂が光太郎を狙っていた坊主を気絶させ光太郎に激を飛ばす。

「!!!すいません」

光太郎は茂の激により、怒りで熱く燃えてた頭も冷水に冷やされたようになり、冷静さを取り戻す。

士朗も襲い来る坊主たちに戸惑いながらも家から持ってきた強化を施した木刀で何とか対処していた。

そんな中、士朗は一人の人物に目が止まり、動きを止めてしまう。

「一成!!!」

士朗の親友、柳洞一成が刃物を持ち、虚ろな目で士朗に向かいゆりゆらりと近付いて来る。

「衛宮……助けてくれ」

一成が虚ろな目から一変涙を流しながら士朗に助けを求める。

「一成……お前……意識が」

一成の助けの声を聞き、士朗は不用意に一成に近付いてしまう。

「……衛宮……シネ!!!」

「!!!」

一成は瞳に狂気を宿らせ刃物で士朗を突き刺そうとした。

ガシ、だが士朗に刃物が突き刺さる寸前、誰かが一成の腕を掴み、それを阻む。

「……一也さん」

「油断するな。」

一也は一成の腹にドガ、当て身を当て気絶させる。

「一成」

倒れる一成の体を掴む土朗。

「立つんだ衛宮君。じっとしてるのは危険だ。」

「くう」
「すまん。一成、」

一也の言葉に、土朗は一成を地面に寝かせ、木刀を持つ手に力を入れ戦いに集中する。

しばらくして、風見達は全員の坊主達を気絶させた。

風見はキャスターの魔術で操られていた坊主達を見ながら魔術師の凜に問う。

「凜ちゃん。彼等の処置どうしたらいい」

「……そうね。まず……」

凜が彼等の処置をどうすればいいか。説明しようとした矢先、

「フフフフ……どう、楽しめて頂けたかしら？」

虚空からキャスターの声が響いて来る。

「その声は……キャスター……!!」

キャスターの声が聞こえ皆表情を引き締め、周りを警戒する。

「フフ、それにしてもよくここに来ましたね。」

キャスターは余裕な声で皆に言うが、

「ええ来たわよキャスター。色々考えたんだけど、やっぱり貴女には消えて貰う事にしたわ。目障りだし煩わしいし、なによりその格好が気に入くないのよね。いまだき紫のローブなんて、どこの田舎ものよって感じでさ」

余裕なキャスターに負けじと憎まれ口を叩く凜。

だが、口ではそう言いつつも、いつキャスターが何を仕掛けてくるか分からぬ状況に凜は余裕な態度を崩さぬまま周りを警戒する。

「ふん、随分と馬鹿なこと言うのね。いまだきの魔術師は皆こう猪頭なのかしら。」

凜の罵倒が利いたのか、キャスターは疎ましげに虚空から葛木と一緒に姿を現わせ凜を睨む。

「ええ、いい加減、貴方との小競り合いも飽きてきたのよね。いいかげん、ここでカタをつけてあげる。」

「あら、随分と大きく出たわね。いくら仮面ライダーたちやアーチャー、後足の速いだけの単細胞のランサーがいた所で、貴方達に今の私を倒すことはできないわ。」

キャスターは相も変わらず余裕げに言うが、今の発言、気に入らなかったのか。

「よく言った。逃げ回るしかない魔術师风情が、なら足の速いだけの我が槍、受けてみるかキャスター」

ランサーは視線だけで人を殺せる程の殺気をキャスターにぶつける。

「あらあら、だから単細胞だって言うのよ。少しはその仮面ライダー達を見習いなさい。貴方よりずっと冷静よ。それとただ恐怖に足が竦んでいるだけかしら。」

風見達を挑発するキャスター。

「……上等だ。くそババア」

「あらあら、ここにも単細胞なお馬鹿さんがいたようですね」

キャスターの挑発に茂は額に青筋を立て、キャスターに迫ろうとしたが、

「落ち着け茂。これがキャスターの手だ。」

風見が茂を止め、キャスターに鋭い視線を向け。

「……キャスター能書きはそこまでだ。お前はここで倒す。お前を逃せば罪の無い人々を何人も犠牲になる。決着を付けるぞ。キャスター」

「フン、減らず口を。」

キャスターは何か合図するように手を上へと上げる。

……キャスターの合図に答えるように、後ろからシヨツカーライダー三人とシヨツカーの怪人、デストロンの怪人たちが姿を現す。その数は多く、30近くはいる。

「！！・・・貴様、その怪人たちは」

「フフ、どう素晴らしいでしょ。デスシヨッカーだったかしら。この怪人たちは彼らに提供して貰ったわ。」

「！！・・・なるほど、これでお前がシヨッカーライダーと行動していた訳が分かった。やはり奴らが絡んでいたか。」

仮面ライダー達である。風見達は最初は驚くがすぐに冷静になり、臨戦態勢をとる。

「フフ、それに、彼らが私に戦力を提供してくれる代わりに、風見志郎、貴方達仮面ライダーを消せと言われたわ。貴方達仮面ライダーには今日ここで死んで貰います。やりなさい。お前たち」

キャストの命令で一斉に怪人たちが風見達一行へと襲い掛かってくる。

「衛宮君、凜ちゃん、その人達を安全な所へ」

風見は気絶している坊主達を見て士朗と凜に言う。

「ええ、分かってるわ。」

「分かりました」

凜と士朗は風見に言われすぐに行動を開始した。

凜は移動する前に自身のサーヴァントであるアーチャーに

「任したわよ。アーチャー」

一言告げて、坊主達を一人一人担ぎ安全な場所へと運び始める。

「やれやれ、仕方ない。マスターの期待に応えらるるか。」

アーチャーは両手に干将を出し、怪人たちを迎え討つ。

「皆、変身だ。」

風見に言われ、皆変身ポーズをとる。

「変身ブイスリヤー!!!」「変身ストロンガー!!!」「変身!!!」

「・・・変身!!!」

風見・茂・一也・光太郎は変身し、V3、ストロンガー、スーパー1、RXになり怪人たちを迎え討つ。

ランサーも楽しそうに怪人たちを迎え討つ。

「へへ、オモしれえ」

ランサーは槍を携え、怪人たちに高速のスピードで突きを入れる。

ランサーはこの聖杯戦争の戦いですつと苛立ちを覚えていた。

ランサーの現マスターにランサーにとっては呪いともとれる枷を令呪で命令されている。

「お前は全員と戦え。だが倒すな。一度目の相手からは必ず生還しろ」

敵マスターの戦力を知る為、彼のマスターはランサーにこう告げた。自身に課せられたただ一つの命令。

そんな馬鹿げた命令に従った彼に、ようやく訪れた何の縛りもない戦いがこれである。

サーヴァントとは違うとはいえ、怪人たちの能力は遥かに人間の力を超越している。

だからこそ、ランサーはこの戦いを楽しむことにした。

仮面ライダー達とランサー、アーチャー対マスター&怪人集団の戦いはきって落とされた。

マスターはその戦いの様子を冷笑を受かべ余裕な様子で見据えている。

仮面ライダー達はマスターを倒すことが出来るのであろうか？
マスターに囚われているセイバーは次回に続く。

56話 決戦キヤスター（後書き）

今回は士朗が危険な目に……しかもセイバーが……
そんなとき空から救いの手が
次回「空飛ぶライダー」にご期待下さい

57話 空飛ぶライダー

V3達一行は柳洞寺境内にてキャスター&怪人達と相對する。

V3達一行はキャスター相手に見事勝利を収めることが出来るのであるだろうか？

「V3キイク」

V3のジャンプ蹴りがデストロン怪人のマシンガンスネークに直撃するが

ドガ、バシ V3の蹴りは怪人に弾かれる。

「何・・馬鹿な!!!」

V3は焦る、自身のV3キイクが直撃したにも関わらずマシンガンスネークにはダメージを負った様子は見られない。

「フフ、馬鹿め。この程度の蹴りなど痛くも痒くもないわ。死ねえ、V3」

マシンガンスネークは腕に装着されたマシンガンで銃弾をV3に向け連射する。

ドドドド「グッ」何て強度だ。いくら再改造されパワーアップされているとはいえ、これは

マシンガンスネークの銃弾を走り回避する。

他もV3と似たような状況であった。

「クソ、何だ。こいつら!？」

ランサーは苛立ちながら怪人たちに槍を振るう。

シユシユシユ、ズバズバズバ、ランサーの槍は怪人たちに直撃し、中には致命的な部分もある。しかし、

「ゲハゲハゲハ、聞くが、そんなモノ」

怪人たちは突き刺さったダメージも気にせずランサーに攻撃を仕掛ける。

ランサーは怪人たちの攻撃を回避しながら槍を振るっていたが、一向に倒れる様子を見せない怪人たちとの戦いは、ランサーの集中力を切らせるには十分だった。

とはいえ、ランサーは人間を遥かに超越したサーヴァント、隙といつても僅かなモノだった。

その僅かな隙を突き怪人のパンチがランサーに放たれる。

「死ね」

「ちっ」

ランサーは咄嗟に自身の槍で攻撃を防ぐが、

ドガ「ゲハ・・・くそが」

怪人の攻撃の威力にガードしたまま地面に叩きつけられる。

そのまま、怪人たちはランサーに止めを刺そうと追い打ちを掛けようとする……が、

「電パンチ!!」

ドガバチ「く……おのれ」

ストロンガーがランサーに止めを刺そうとしている怪人に電パンチを与え妨害する。

ストロンガーは倒れ込んでいるランサーに向け

「へっ、いつまで倒れ込んでんだ。あれだけ大口を叩いてた割にデメエも大した事ねえな」

憎まれ口を叩くが、ランサーは無表情で倒れ込んでいる状態でストロンガーに向け突きを入れる。

ブン「デメエ!!……何しやがる」

槍はストロンガーを横切る。

ストロンガーは怒りながらランサーに向け切れそうになるが

ズボ「ゲ……」

後ろから槍の突き刺さる音が聞こえ、振り返ると怪人がランサーの槍を食らい倒れ込んでいる。

ストロンガーは驚き、視線を倒れ込んでいる怪人からランサーに戻すと、ランサーはにやついた表情で

「借りは返したぜ。」

と一言。

もちろんストロンガーは面白くない。

「けっ、よく言っぜ。たまたまだろ。」

「んだと、テメエこそ、隙だらけじゃねえか。」

「うるせえ、テメエなんか助けられなくても、俺は一人で対処できたんだ。」

「それはこっちのセリフだ。」

ストロンガーとランサーはだんだん子供じみた言い争いを始める。しかし、言い争いしつつも二人は

「だいたいテメエは会ったときから気に入らなかつたんだ。……エレクトロファイヤー!!!!」

バチバチ、地面から伝わり、怪人たちに電気が走る。

「ハン、俺はテメエなんか。眼中にねえんだよ。」

シユシユシユ、ズバズバズバ。ランサーから振るわれる槍は怪人を蜂の巣にした。

お互いがお互いをフォローする形で協力しながら戦っている。そして、いつの間にかお互いの背が当たり、ランサーが

「テメエテメエ、うるせえんだよ。俺はランサーのサーヴァント・

クーパーリンだ。覚えとけ」

何とランサーはストロンガーに自身の真名を告げる。

いくら正体がばれてるとはいえ、普通サーヴァントは自身の真名を告げるような真似はしない、

つまり自身の真名を告げたという事は、ランサーはストロンガーを認めたという事だ。

ランサーの真名を聞いたストロンガーはフツと笑い

「ランサー・・・お前も覚えておけ。俺は城茂、またの名を仮面ライダーストロンガーだ。」

ストロンガーもランサーに名乗り返す。

「フッフフ・・・ハハハハハハ」

お互いは背中を合わせながら同時に笑いだす。

「背中は任したぜ。ランサー」

「ああ、テメエこそ遅れるなよ。ストロンガー」

お互いが笑みを浮かべ背中を預け合う。

ランサーとストロンガーは口では文句を言いあっているが、すでに二人ともお互い認め合っているのだ。

くへ、やっぱり現世は面白れえ。悪くねえな

ランサーは自身の気持が昂ぶっているのを感じていた。

スーパー1とRXは他と同様、怪人たちに苦戦していた。

「くそ、このままじゃ……先輩、俺が奴等の動きを封じるんで止めをお願いします」

RXはこのままじゃまずいと思い攻撃に出ることにした。
スーパー1は無言で頷き、RXの後ろに回る。
そして、いきなりRXの体が光る。

キーン「俺は怒りの王子・アールエックス・バイオリライダー」

RXは青と銀、そして赤を基調とした、ボディーカラーのバイオリライダーにフォームチェンジし、怪人たちに向かい

「バイオアタック!!!」

バイオリライダーの特殊能力で体を液体分子構造を持っている事で、液化する事が可能で、ジャンプし空中で体を液化し怪人達に突撃しバイオアタックで一か所に固める。

「今です。先輩!!!」

「ああ、チェンジ・冷熱ハンド!!!」

RXが攻撃に一か所に固められた怪人たちに止めを刺すためスーパー1は自身のファイブハンドを冷熱ハンドに変化させる。

「くられ、冷凍ガス、超高温火炎!!!」

右腕から超高火炎、左腕から冷凍ガスが同寺発射される。

「グウ」

怪人たちが怯む。

そこで、止めを刺そうとRXとスーパー1は同時に必殺技を放つ。

スーパー1は空中に高く飛び上がり、飛び回り型を取って怪人の一人に蹴りを放つ。

「スーパーライダー月面キーク!!!」

ドゴ「グウ」

「何!!!」

怪人はスーパー1の必殺キックに耐えるが、

「グハ・・・」ドガン

やはりダメージが大きいのか、倒れ爆発した。

バイオリダーも左腰付近で光を結晶化させ剣を出現させる。

「バイオブレード!!!行くぞトオ!!!」

怪人をバイオブレードで切り裂こうとするが

ザシユ「グウ」

「！！！」何て硬さだ」

バイオブレードが途中で止まる。

バイオライダーは力を入れ直し、思い切りバイオブレードを振り切る。

ザシユ「ぐはああああ」

怪人を切り裂き何とか倒すことに成功する。

アーチャーも怪人に向け自身の双剣・干将を怪人に投げ付けるが、キンキン、簡単に弾かれる。

「ム」

アーチャーは眉をピクリと動かせ、この状況をどう打開するか思案する。

V3達は何体かの怪人は何とか仕留めたが、相手の方が数が圧倒的に多い上に怪人たちは異常なほどに耐久力が高く。皆苦戦していた。

その様子を笑みを浮かべながらキャスターは見ている。

そしてキャスターはV3達に向け口を開いた。

「フッフ、どうかしら。彼らには私の魔術で限界まで強化しましたから、さらに霊薬で痛覚も感じなくしていますから、貴方達に勝ち目などありませんよ」さらに私にはもしもの時の切り札がある」

キャスターはクスリと笑う。

「くう、そう言う訳か。」

V3はキャスターの言葉を聞き、怪人たちの異常なまでの耐久力に納得する。

「それなら、一撃で粉砕できる強力な攻撃を奴らに与えれば」

V3は覚悟を決め、V3二十六の秘密技の一つを使う事にした。

「V3レッドランプパワー!!!!」

V3二十六の秘密 レッドランプパワー

ダブルタイフーンのレッドランプが点滅するとエネルギー倍増。熱線を跳ね返す機構もある。

V3のレッドランプは赤く点滅し、エネルギーが倍増する。

そして、V3は怪人たちに突っ込み大きくジャンプして上空を旋回した。

「V3遠心キック」

V3二十六の秘密 ライダー遠心キック

上空を大きく旋回した遠心力で、敵を複数敵にキックする技である。

ドゴドゴゴ「ぐあああ」

怪人二人はV3の蹴りを受け爆散する。

V3は二人の怪人を蹴散らすも怪人はまだ沢山いて、不利な状況は変わらぬままだった。

そんな時、士朗と凜が寺の坊主達を安全な場所へと移動させたのか。V3達が戦っている場所へと来た。

「フフ、わざわざ死に戻ってきたようね。」

キャスターは士朗達に視線を向ける。

それを見て怪人たちと戦っていたアーチャーが行動に出た。

アーチャーは持っている双剣を投げ地面に突きつける。

「ブロークン・ファンタズム!!!」

ドガン、双剣は爆発を起こし、境内に煙が舞う。

「ゴホゴホ、おのれアーチャー!!!」

キャスターは煙で前がうまく見えない。

しかし、アーチャーはその鋭い眼光を光らせ、すでにチェックに入っていた。

「終わりだ。キャスター!!!」

アーチャーは弓を腕に出して、矢をキャスターに向け放つ。

キャスターは境内の煙で矢の存在には気付かないでいたが、キャス

ターの隣にいる葛木が矢の存在に気付き、

ガシ「宗一郎様？」

キャスターを掴み横に転がるようにして、アーチャーの矢を回避した。

しばらくして、煙が晴れてきて、キャスターは周りの視界を見て言葉無くす。

「グウ」

葛木が横の腕から血を流している。

「ちっ、はずしたか」

アーチャーはあまり気にした様子もなく目の前の結果を見て呟いた。

「宗一郎様！！！！おのれアーチャー！！」

キャスターのフードから見える表情は凄く怒り狂い眉間に皺をよしている。

「もう、お遊びはここまでです。」

キャスターは凜と士朗のいる方向に手を翳す。

ブオン「なに・・・これ？」

地面に黒い何かが出現し、凜は困惑するが、

「危ない遠坂」

士朗が咄嗟に凜を弾き飛ばす。

「士朗！！」

黒いなにかはブラックホールの如く士朗を呑みこんだ。

「うわあああ」

士朗は吸い込まれ目を瞑る……しばらくして吸い込まれる感覚はなくなった。しかし、

「何だ……どうなったんだ」

士朗は何か自分が落下しているような感覚を感じ、恐る恐る目を開ける。

「何だ！！！！うわああああ」

士朗は柳洞寺の遙か上空から落下している。

「士朗！！！！」

凜は士朗の状態に気付き、周りに士朗を助けるように声を掛けようとしたが、自身のサーヴァント・アーチャーやランサー・仮面ライダー達は怪人たちと戦っていてそれどころではなかった。そんな、凜の焦りをキャストは嘲笑いながら、

「あらあら、狙いがはずれてしまいましたね。まあいいでしょ、私のマスターに手を出したのですから、それ相応の報いは受けて貰います。坊や死ぬのをそこで御覧なさい。その後、貴方の番です。」

「くう」

凜は唇を噛み締める。

V3達も土朗の状態に気付き助けに行こうとするが

「キイキイ」

「クソ」

怪人たちに阻まれ助けに行かれない。

落下する土朗は死を覚悟し目を瞑る……だが

「なんなの？あれは」

キャスターは先程の嘲笑いから一変し困惑な表情を浮かべあるモノを見ている。

遠くから高速で柳洞寺に向かい上空から何かが飛んできている。それがどんどん近づく。

「もしかして……あれは……！！」

凜も困惑しながらその物体を見るが、次第に視認できる所まで来て目に止まり安心する。

なぜなら、あれは、風見達が変身した時の姿にそっくりであったからだ。

ガシ「……………!?俺は」

士朗は困惑する。

自身は空中から地面に向け落下していた筈だ。だが空中で何かに掴まれ動きが止まった。

士朗は困惑しながら後ろを振り向いて見ると

「……………!貴方は」

風見達、仮面ライダーが変身した時とそっくりの存在が自分を掴んでいるではないか。

その人物は士朗を掴んだままゆっくりと凧の傍に着地した。

凧は困惑しながら目の前に降りてきた存在を見る。

「彼も……………仮面ライダーなの」

不審な表情で目の前の存在を見るが

「大丈夫かい。」

心配そうに士朗に声をかける。

「……………はい……………スイマセン」

士朗はいきなり話しかけられ驚きながら言うが、後ろからドン、ドン
キャストの魔力弾が飛んでくる。

「危ない」

士朗と凜を掴みキャストの攻撃を回避。

「くうく貴女も仮面ライダー？」

キャストは困惑しがちで目の前の乱入者に聞くと

「俺は空を飛べる仮面ライダー・・・スカイライダーだ。」

スカイライダーは名乗りキャストを睨む。

「ええい、何だって、いつも私の邪魔を・・・いいわ。なら切り
札を使うまでよ」

キャストは士朗から奪った令呪を出し、令呪を使用する。

「来なさい。セイバー・・・令呪に従い、私の敵を打ち倒しなさい」

柳洞寺からセイバーが飛び出してくる。

「セイバー!!!」

士朗は自身のサーヴァントだったセイバーの出現に焦りにも似た感情が襲う。

「セイバー……あいつを殺しなさい」

キャスターはセイバーに命令する。

セイバーは無言でスカイライダーに迫るのだった。

57話 空飛ぶライダー（後書き）

スカイライダーの参戦により士朗達は有利に傾いた。

しかし、キャスターの手に落ちたセイバーが

次回キャスター戦、決着！！「必殺 V3マツハキック」にご期待
下さい

58話 ついに決着 必殺 V3マツハキック (前篇) (前書き)

すいません。パソコンの調子が悪く更新が遅くなりました。遅れを取り戻すよう、なるべく早く次の話も更新できるよう頑張ります。

後、タイトルはこれですがまだ、必殺技は使いません。

58話 ついに決着 必殺 V3マツハキック (前篇)

柳洞寺 境内

「あれは、スカイライダー……来てくれたか洋」

V3は仲間であるスカイライダーの登場によりホット溜息を吐き、士朗達をスカイライダーに任せ目の前の敵を倒すことに集中した。

セイバーは無言で黄金の剣を構えている。

「あれは、セイバー……どうやらセイバーは完全にキャスターの支配下におかれているようね。」

凜は冷や汗を流し、セイバーを見据える。

「フッフ、さあ、最優と言われる、その力存分に振るいなさい、セイバー」

バチバチ「グツ」

不可思議な力を受けセイバーは苦痛を受けている。

そしてキャスターの命令通りスカイライダーに向け突進してくる。

そんなセイバーを見て、士朗は悲痛な表情を浮かべ、

「止める、セイバー」

士朗は叫ぶが、セイバーは止まらず突進してくる。

「君たちは下がっている」

スカイライダーは士朗達の前に立ち突進してくるセイバーを迎え討つ。

「おおおおお!!」ぶんぶん

セイバーは黄金の剣をスカイライダーに向け振り下ろす。

「くっ」〜早い!!何て剣圧なんだ。〜

スカイライダーはセイバーの剣撃を何とかかわす。

ドゴ、ドガン

セイバーの振り回した剣はそのまま地面に当たり、地面が碎ける。

「くっ」

スカイライダーは舌打ちし、パンチを繰り出す。

シュ、ドゴ、パンチは見事にヒットするが

「おおおおお!!!!」

セイバーはまったく怯まず、剣激の嵐をスカイライダーに放つ。

「くそ」

スカイライダーは何とかセイバーの攻撃をかわし続けるが、セイバーの攻撃は早く、その上、一撃一撃が重い、もし、一撃でも直撃すればスカイライダーとて致命傷は免れないだろう。

その二人の戦いを見ていた士朗と凜は

「あれが、セイバーの……力。まずいわね。あの仮面ライダー、スカイライダーだったかしら。あのままセイバーと戦えば倒されるのも時間の問題よ。」

二人の戦いを見ながら凜は唾を呑む。

「くそ」ゝ何か手はないのかゝ

士朗はこの状況を打開する方法を考えるが、そんな余裕はなかった。なぜなら……キヤスターが冷笑を浮かべ士朗達の前に来ているからだ。

「さて、仮面ライダーの相手をセイバーがしている内に貴方達には死んで貰いましょうか」

キヤスターの手に魔力が凝縮されていく。

それを見て、凜は

「……!!!士朗、早く私の後ろに」

慌てた様子で士朗に言う。

「遠坂何を？」

「いいから、早く」

士朗は凜の様子を見て、凜の言うとおりに後ろに回った。

キャストはそんな二人を見て冷笑を浮かべながら

「あら、今さら何をしようと無駄よ。貴方達はこれで終わり。死になさい。」

キャストの手から魔力弾が放たれる。

「ちっ」

凜は懐から宝石を取り出す。

ドン「くっ」

キャストの魔弾は凜達に直撃し煙が舞う。

キャストはにやりと笑みを浮かべるが、煙が晴れて少し驚く。

「……」

キャストの魔弾が直撃したにも拘らず凜は宝石を指に挟み立っているからだ。

キャストは驚いていたがすぐに笑みを浮かべ

「なるほど考えたわね。自力では私に対抗できないと見て宝石に備蓄した魔力を使うとは、いかにも格下らしい姑息な手とはいえ、この神代の魔術を防ぎきるの大したもの。褒めてあげるはお譲さん。

「
余裕な表情で凜を見据える。

「あいにくだけどね。キャスター、あなたの戯言に付き合うつもりはもう無いの。その胡散臭いロープもそろそろ見飽きたことだし、年寄りには年寄りらしく、さっさと舞台裏に引っ込んでくれないかしら……ねえ、おばさん!!!!」

「なっ、フフ……フ……いいでしょう。その増長、厳しく躰けてあげるから覚悟しなさい!!!!」

キャスターはロープを広げ杖を持ち凜に迫り魔弾を放つ。

「だから、そう言うセリフが年寄り臭いのよ。」

凜はそのキャスターの攻撃を先程と同じように懐から宝石を取り出し防ぐ。

凜とキャスターの魔力のぶつかり合いの余波は凄まじく凄まじい風が辺りを襲つ。

「うわっ……!!!!」

士郎はその風に耐えながら固唾を呑み、その二人の戦いを見る。

「凄まじい……!!!!人の身でありながらキャスターに対抗できってしまう遠坂も凄まじいけどあいつの秘蔵の宝石を使ってようやく相殺できるといふキャスターの魔力はまさに桁違いだ。」

士朗は二人の攻防を息をのんで見る。

まさに二人の攻防は頂上決戦……!!!
今行われている魔術戦は間違いなくこの聖杯戦争最大のものである。
う。

「圧倒的な不利な状況には違いない、だけど遠坂も負けていない。
きつと勝機はある」

士朗は木刀を握りしめ凜の勝利を信じた。

その時、タタタタと何か足音が聞こえ、足音が聞こえる方へと視線を向けると、葛木が凜目掛け、走り迫って来ている。

凜も驚き葛木へとちらりと視線を向けるが

「葛木!!!」

士朗が葛木に向け木刀を振り下ろしそれを妨害した。

「……」ガキ

士朗の攻撃を無言のまま拳で防ぐ。

「遠坂の所へは行かせない。お前の相手は俺だ!!!」

「衛宮か!!!」

初めて葛木は士朗に視線を向け対峙する。

その姿からは先程受けたアーチャーの攻撃のダメージを少しも感じさせない。

「お前の目的はなんだ葛木・・・どうしてこんなことをする。」

ここで士朗は葛木に質問した。

葛木は昨日士朗達と対峙した時、聖杯には興味がないといった。それなのに、なぜ彼は命を賭けた殺し合いに参加しているのだろうか。

どうして、彼はキャスターの非道な行いを許せるのだろうか、そこが気になったからだ。

「目的・・・か」

葛木は静かに口を開いた。

「昨日も答えた通りだ。私に目的などありはしない。強いて言うならキャスターが聖杯を欲したそれだけだ。ゆえにマスターとしてのその手助けをしている。」

「なんだと、本当にそれだけか。葛木！どれだけの人がキャスターのせいで苦しんでいると思っっているんだ」

士朗は怒り葛木に言うが、葛木はただ無表情で

「関係のない事だ。どれだけ犠牲が出ようと意に介さぬ。私はただ、私だけを尊重する。」

「くっ」

士朗は怒り葛木を睨みつけるが、今の葛木の言葉で同時に理解した。

・・・葛木はキャスターに操られてなどいない。

自分の意思でキャスターのマスターになっている。

だが、それでもこの消極性からいって、葛木は傀儡に近い。

魔術による後方支援を得意とするサーヴァントと、格闘による白兵戦を得意とするマスター。

本来の関係が逆転している葛木とキャスターは、その在り方も逆の様な気がする。

聖杯を執拗に求めるキャスターと、自分の意思などなくキャスターを守るマスター。

「・・・・・・・・」

それで士朗は意味もなく思ってしまった。

もし、キャスターがマスターで、葛木が彼女を守るだけのサーヴァントであったのなら、あの二人はここまで外れた道を取らなかったのではないかと。

凜は士朗に無言で視線を送る。

そっちは任せたと。

士朗も凜の意図が分かり葛木と対峙する。

葛木と士朗、キャスターと凜、スカイライダーとセイバーの三人がここで対峙した。

スカイライダーとセイバーの戦いは、スカイライダーがセイバーに押されていた。

「これがサーヴァントの力、強さは大幹部より上かも知れない」

セイバーと対峙していたスカイライダーだが、いきなり後ろから衝撃が走る。

ドガ「グウ」

地面に倒れるスカイライダー。

その隙にセイバーが剣を振り上げ止めを刺そうとする。

「うおおおお」

「クッ」

スカイライダーは後ろに跳びセイバーの攻撃を何とか回避するがセイバーの黄金の剣から暴風が吹き、吹き飛ばされてしまう。

ブン、ドゴ「グア、」

スカイライダーはこの時のダメージで変身が解け、筑波洋の姿、人間体へと戻ってしまう。

「ハアハア、今のは？」

洋はいきなりの後ろからの攻撃は誰なのかと思い正面を見ると、シヨッカーライダーがこちらを見据え笑っていた。

「フッフ、良い様だな。筑波洋、セイバー、一気に畳みかけるぞ。」

セイバーとシヨッカーライダーが洋に迫る。

「くそ」

洋は立ち上がり身構えるが、セイバー達はすぐ近くまで迫っており

まずい状況だ。

「体が!!」

洋はセイバーの攻撃のダメージにより体がうまく動かない。
このままではヤラレルと思った、その時

シュシュ「ぐっ」「くっ」

誰かがセイバー達に攻撃を仕掛け、それを妨害。

「大丈夫か。洋」

V3が洋に声をかける。

「ぐっ、すいません。風見さん。助かりました。」

「礼はいい。話は後だ。」

「ええ」

洋は変身のポーズを取り始める。

「スカイ・・・変身!!」

スカイライダーへと変身する。

「行くぞ。スカイライダー」

「ええ、先輩」

その二人をセイバーとシヨツカーライダーが迎え討つ。

「くそ、返り討ちにしてやる。」

シヨツカーライダーは指先から弾丸を二人に向け撃つが、簡単にかわされ、まずはV3から

「V3パンチ!!」

「グハ」

V3パンチを受け怯む。

「今だ。」

「ええ、行くぞ。トオー」

上空へジャンプし、シヨツカーライダーに向け

「スカイキック」

ドゴ「ぐああああ」ドガン

スカイライダーのスカイキックを受けシヨツカーライダーは爆散した。

シヨツカーライダーを仕留める事に成功した二人だが安心はできなかった。

なぜならセイバーが黄金の剣を振りかぶり迫って来ているからだ。

ブンブン、セイバーの攻撃をかわす二人だが、その一撃が放たれるたびに剣から暴風が吹き荒れる。

くく、やはり手加減出来る相手ではないか。く

V3は舌打ちし、応戦する。

スカイライダーもセイバーの背後に回り同時に攻撃を仕掛ける。だが、

「おおおお」「ドゥ」

黄金の剣から先程とは比べ物にならない風が二人を襲う。

「ぐつ」「くう」

二対一という状況にも関わらずセイバーは一步も引かない戦いをしていた。

その頃、士朗と凜は

「つつ」

士朗は葛木から繰り出される拳を必死に捌いている。

葛木の拳は生きた蛇だ。紙一重で避けた所で、かわした瞬間に軌道を変えて食らいつく。

セイバーもそれで深手を負った。

なまじ紙一重でかわせるだけの反射神経を持っていたが故に、セイバーは葛木の蛇に食らいつかれた。

元より、士朗はそんな反射神経など持ち合わせていない。

それでも土朗が葛木の拳をギリギリで致命傷を避けられるのは、ひとえに一也の特訓のおかげだった。

土朗は一也との特訓で一つだけ一也に叩きこまれた。

それは、土朗が葛木の攻撃をギリギリ回避できる間合いである。それを、見極めさせるために一也は葛木と同じ構えを取り、ギリギリまで土朗にそれを体に叩き込んだのだ。

それでも、一也がした葛木の真似は見よう見真似、本物には及ばず、スピードが全く違った。

もって、一分が限界だろう。

だからこそ、土朗は凜を信じ、葛木を足止めする事に力を注ぐ。

シューっくっ

その時、葛木の拳が土朗の頬を捉える。

く堪えるく

土朗は痛みに耐え、葛木の追撃をギリギリで受け止める。

葛木は一旦、土朗との距離を開け、

「未熟だな。だがなかなかどうして、持ち堪えるものだ。」

葛木は無表情で土朗に言う。

く踏ん張れ、ここが正念場だ。葛木は絶対にここで食いとめる。だ

から頼むぞ。遠坂く

士朗は木刀を握る手に力を入れ直し葛木を見据える。

凜がキャスターを倒すことを信じて……

凜はキャスターの魔弾をひたすら宝石で相殺している。

その頑張りを嘲笑うかのようにキャスターは、

「フフ……よく頑張るわね。お嬢さん。正直ここまで出来るとは私も思っていなかったわ。だけどそれも長く続かない。たとえ、どれだけ強力でも宝石に頼る以上その数は有限、それに比べ私は、今まで町で貯め込んだ魔力のおかげで無限に近い魔術を行使する事が可能。さて、残りの宝石はいくつかしら、十、二十、それとも次で最後かしら。」

キャスターの言うとおり、二人の力量の差は歴然としていた。ほぼ無限に魔術を行使できるキャスターと、宝石という増幅器で対抗する凜。

このまま防戦一方なら凜が破れるのも時間の問題だ。

「確かに、まずい。残りの宝石は後六個。残りの六個が底をつく前に決着をつけないと負けは必定。長期戦はうまくない。いやそれというなら、これは端から戦いだっただ。数段格上のキャスターに対して魔術戦で挑むのは無謀もいいところ、狂気の沙汰。アーチャーに頼るうにも」

凜はちらりと怪人と対峙しているアーチャーへと視線を向けるが多数の怪人とアーチャーは対峙しており、凜を助ける余裕はなさそう

だ。

絶対不可能な状況、だからこそ、そこに凧は勝機を呼び込もうとした。

「フフフ……さあどうしたの。逃げてばかりでは負けてしまうわよ？」

キャストは嘲笑いながら凧に言う。
それを聞き、凧は覚悟を決めた。

「オーケー見せてあげるわ。格下の戦い方ってやつをね！」

凧は残りの宝石、4つ指に挟み、

「五番・六番・三番・一斉解放！」

「なに！！！」

凧の行動にキャストは多少動じた。
それでも凧の呪文は続く。

「加えて四番・相乗！！！」

キャストに向け解き放つ。

解放した宝石を三つ。

加えて虎の子の四番を用いて、禁呪である相乗さえ重ねた。
それは凧の限界を超えた魔術。

「術者の許容量を上回る魔術は、決して使ってはならない」

それは、全ての魔術師に言える事、それは術者の身を滅ぼす諸刃の剣であるからだ。

それでも、凜はその禁を破りキャスターに自分の限界を超えた魔術を解き放つ。

もし、キャスターが受け止めなければ後ろの柳洞寺を崩壊させてしまふであろう一撃をキャスターはにやりと笑みを浮かべ、

「フフ」

凜の切り札と呼べる魔術を全てローブの衣の中に防ぐどころか吸収した。

「そんな・・・!!」

凜はその結果を呆然と立ち尽くし見詰める。

「フフ、私も甘く見られたものね。大口を叩いておいて、まさかこの程度なんて、呆れてものも言えないわ。もういいわ貴方はここできえなさー」

キャスターはゆっくりと死を呟き腕を上げる。

キャスターは魔術戦で凜に勝利したことに油断している。

その油断こそ、凜がずっと待っていた、キャスターの隙だ。

「二番・強化」

凜は静かに呪文を解放。

そして凜は俯いたまま、口元に笑みを浮かべて呟いた。

「え？」

キヤスターが凜の行動に？を浮かべるが、もう遅い。
凜は行動に出ていた。

シユ、ゴキ、グウハア！！」

凜はキヤスターのみぞ目掛けてひじ打ちをくらわした。

「なんなの。これは！？魔術師が肉弾戦！？しかもこの小娘体に強化まで」

キヤスターは息を詰まらせ戸惑いながら凜を見る。

「かかったわね。キヤスター。知り合いの神父にちよつとした使い手がいたせいだね。私つてば体術全般にはそれなりに覚えがあるわけ。いまどきの魔術師は護身術も必修科目よ。」

凜はそのままキヤスターのみぞに食らわしている肘を押すようにして体を圧迫する。

「お・・・！！」呼吸が・・・痛覚を遮断」

キヤスターが魔術を使おうとするが

「甘い」

凜がさらにキヤスターの顔目掛けて蹴りを放ち妨害する。

それに、キヤスターは驚きのあまり的確な判断が出来ずにいた。

魔術戦に敗れた魔術師がまさか肉弾戦を仕掛けてくるとは思わない

だろう。

卓越した魔術師であるキャスターにとっては冒瀆に等しいだろう。しかし、キャスターは凜の攻撃で息がつまり魔術を唱えられない。凜の攻撃は中国拳法でいう所の寸頸だ。

「これは・・・まずい」

キャスターは慌て凜から離れようとするが

「はあああああ!!」

凜はキャスターの胸に掌打を与え、キャスターはその衝撃で柳洞寺の壁まで吹き飛ばす。

その様子を見ていた葛木が初めて慌てた。

「キャスター!!」

葛木は急ぎキャスターを助けに向かおうとするが、

「そうはさせるか!!」

士朗は木刀でそれを妨害。見事葛木の眼鏡を捉える。

「言った筈だ。遠坂の所へは行かせない。お前の相手は俺だ!!」

その時葛木の空気が変わった葛木は割れた眼鏡を外し、士朗に向け突進。

士朗に向け拳を繰り出す。

士朗は木刀で捌こうとしたが、

シュ、ドゴ、ぐっ」

拳は士朗の守りをすり抜け喉に直撃。

そのまま流れるようなコンビネーションで士朗を殴りつけた。

そのままキヤスターを助けに行こうとするが、

ガシ「いつも冷静なあんならしくなかったな。葛木。詰めが甘いぜ
！！」

士朗が掴み妨害する。

「貴様！！」

葛木は焦る。

その間にも凜は流れるような攻撃でキヤスターを殴り続けている。
そのまま、凜はキヤスターに止めを刺そうとした。

「これで終わり、はああああ！！」

凜の拳がキヤスターに届く、その時、

ガシ「なに！！！！」

凜の拳が何者かに掴まれる。

そのまま何者かに凜は投げ飛ばされた。

「ぐっ、かは」

凜は数メートル吹き飛び地面に叩きつけられる。

「遠坂！！」

士朗は葛木との戦いを止め凜の元へと走る。

葛木もキャスターの元へと向かった。

「ぐっ」

「大丈夫か。キャスター」

「はい、宗一郎様。それより貴方は」

キャスターは自分を助けた謎の人物を見る。

黒いフードで体全体が覆われており何者が判断できない。

「無様だな。キャスター。我等デスショットカーの力を貸していると
いうのに、仮面ライダーやサーヴァントではなく、たかが一介の魔
術師にやられそうになるとは、しょせん貴様はその程度か」

「くっ、貴方、地獄大使と同じ、デスショットカーの！！」

「ああ、私は奴と同じデスショットカーの一員だ。しかし、地獄大使
の言う通りかも知れん。これ以上貴様に力を貸し続けても無駄なの
かも知れんな。」

「待ちなさい。私はまだ負けていないわ。」

「そうか、ならば奴ら全員血祭りに上げて見せろ。それが出来なけ

れば貴様に力を貸すのもこれまでだ。いいか、これがラストチャンスだと思え」

「分かったわ。ここで奴らを仕留めてあげる。」

「ならば私は貴様の戦い遠くから見させて貰おう」

そうキャスターに告げると黒フードの男は消えて言った。

そのやり取りを遠くから見ていた、V3達一行は

「奴はいつたい」

わずかに姿を見せたただだったが、奴から放たれた威圧感は凄まじかった。

「くうならば」セイバー 宝具を使いなさい」

キャスターはセイバーに命令する。

その命令にセイバーはV3とスカイライダーとの戦いを止めてキャスターの横に立つ。

他の仮面ライダーやランサーと戦っていた怪人も戦いを止め、キャスターの後ろに移動。

V3達一行はいきなりの行動に困惑するが

「貴方達、これで終わりよ。」

そんな一行の様子も気にせずキャスターは笑みを浮かべる。

その時、セイバーは黄金の剣を振りかざす。

「エクス……」

セイバーの持つ黄金の剣から凄まじいエネルギーにより剣からバチバチと電流が走る。

「これは、まずい。かわせ」

V3は慌てた様子で皆に言う。

「もう遅いわ」

キャスターが笑みを浮かべその様子を見る。

「カリバー!!!」

その間についにセイバーの宝具が解放された。
セイバーの剣から黄金の光がV3達を襲う。

ついにセイバーは自身の宝具を解放した。

彼等はV3達は無事この危機を脱する事が出来るのだろうか。次回に続く。

58話 ついに決着 必殺 V3マツハキック (前篇) (後書き)

すいません。

長引いたキャスター戦も次回で本当に決着です。

59話 ついに決着 必殺 V3マツハキック(中編)(前書き)

スイマセン。

まだ続きそうです。

59話 ついに決着 必殺 V3マツハキック(中編)

柳洞寺境内

「エクスカリバー!!!」

セイバーの黄金の剣から放たれた光の閃光はV3達を呑みこもうと迫って来ている。

「くっ、まずい。」

V3達は慌て、回避しようとしているが、光はもう目の前だ。

光はV3達を呑みこみ地面を抉り柳洞寺の塀を破壊した。そしてゆっくりと消えていった。

「……!!」まさかこれ程とは

キャスターはセイバーの宝具の凄まじい威力に言葉を無くしていたが……しばらくして狂氣的に笑い始めた。

「フフ……ハハハハハ。凄いわ。セイバー想像以上よ。もうバーサーカーなど目じゃないわ。」それに仮面ライダーは完全に消滅したようね。フフ、さすがにセイバーの宝具の威力には耐えられなかったようね」

キャスターは勝利の余韻を感じながら光の放たれた軌跡を見つめる。そこにはV3を始め、士朗、凜達の存在はなかった。

「さて、宗一郎様。ご無事ですか?」

「ああ」

キャスター葛木を気遣う。・・・その時!!

「・・・・・・・・」

先程の黒いフードを着た男がいきなり目の前に無言で姿を現す。そのいきなりの登場にもキャスターは驚かず、

「どうかしら。目障りな仮面ライダー達を含めて二人のマスターにサーヴァントを一気に仕留めたわ。」

「・・・・・・・・」

余裕な表情でフードの男に言うが、やはり無言で何も答えない。

「あら、つれないわね。まあいいわ。これで私の力分かって貰えたかしら」

「・・・・・・・・」

それでも何も答えないフード男にキャスターは苛立ち始める。

「なんなのコイツ。まあいいわ。彼らには私が聖杯を手に入れるための捨て石になって貰いますから、せいぜいこれからも利用させて貰うわ。」

そのような思惑を浮かべる。

キャスターはデスシヨッカーの事を微塵も信用などしていなかった。

なぜなら彼等は私に隠れて柳洞寺について何かを調べている事を知っていたからだ。

自身の工房である。キャスター自身も彼等の狙いは理解していた。柳洞寺は不思議な力がある霊脈に優れた土地の霊山だ。

さらにキャスターが今抱いている可能性では柳洞寺は今回の聖杯戦争のキーポイントつと。

「フフ、貴方達に聖杯は渡しません。いずれ消えて頂きます。」

フード男を見据えるキャスターだが、

「……フフフ……ハハハハハハハハハハ」

フード男が何が可笑しいのが高らかに笑い始める。いきなりの奇行にキャスターは呆然としていたが、

「何がそんなに可笑しいのかしら？」

少しして苛立ちながらフード男に聞く。

「ハハハハハ。やはり貴様は無能だったな。」

「どづいつこと？」

「フ、あそこをよく見てみるんだな」

フード男は先程セイバーの宝具が炸裂し、抉れている地面を指差す。キャスターは不思議そうに指差された方向を見つめるが何も無い。

「あそこがどうしたの。何も無い……!!!!」

そこでキャスターは気付いた。地面に穴が開いている事に気付き驚愕な表情を浮かべる。

「そう言う事だ。奴等はまだ生きている」

「そんな、まさか!!!そんな筈は」

辺りを見渡すキャスター。

「俺達はここだ。」

「この声は!!!」

いきなり空から声が聞こえ、上を見ていると仮面ライダー達を始め、士朗、凜、ランサー、アーチャーがずらりと柳洞寺の屋根の上に並んでいるではないか。

「トオー」

ライダー達をはじめ全員がジャンプし地面に着地する。皆油断なくキャスター達を見据える。

「それにしても今のは危なかった。凄まじい威力だ。」

V3がセイバーを見据え宝具の威力に驚きつつ口を開く。

「ああ、まさか、エクスカリバーがセイバーの宝具とは。くそ生意気な若造だと思っていたが、まさかこんな小娘がアーサー王だったとはな。」

ランサーは口では驚いた風だが、顔は狂気的な笑みを浮かべ、どこか嬉しそうにセイバーを見据える。

その時、ライダー達は怪人たちのおかしな行動に気付いた。

「あれは？奴らどういつつもりだ。」

「まさか逃げるつもりじゃあ」

ストロンガーとスーパー1はお互い疑問を浮かべる。

「くっ、おのれ」

キャスターは怒りを込めて一同を睨む。

その時……！！

ガサガサと後ろの怪人たちが柳洞寺から去って行っている。

「えっどういうこと？」

キャスターは困惑しながら黒フードの男に視線で疑問をぶつける。

「もうお前は用済みだ。」

キャスターに背を向けながら答える。

「待ちなさい。まだ私は負けていないわ。」

「負けている。貴様では仮面ライダーを倒すことは出来ん。所詮下らん策ばかり弄する魔術師風情には無理な話だったな。」

キャスターをけなし立ち去ろうとする黒フードの男に、キャスターは
「そう、なら消えなさい。」

キャスターは高速で呪文を唱え黒フードの男に魔弾を放つ。

ドガンと魔弾は黒フードの男に直撃した。

その様子を一部始終見ていた士朗達は

「!!あいつら仲間割れか」

士朗は驚きキャスター達を見ている。

「どうやら向こうも色々あるみたいね。」でもこれはチャンスね」

凜はアーチャーに視線を向ける。

アーチャーも凜の思惑が分かり、霊体化し姿を消す。

魔弾を放ったキャスターは冷笑を浮かべ、魔弾が直撃し煙が出ている前方を見ている。

「フッフ、用済みなのは貴方達の方よ。」

「キャスター」

笑みを浮かべるキャスターとは対照的に葛木は静かにキャスターに問う様に話しかける。

「大丈夫です。宗一郎様。セイバーがいる以上、彼等の力などもう必要などありません。」

「所詮はクズか」

その時ありえない方向から声が聞こえる。

「!!!」

「下らんその程度か」

煙が晴れ、黒フードの男が姿を現す。

黒フードの男はキャスターの魔弾が直撃したにも関わらず傷一つついていなかった。

「くっ!!!」

キャスターは驚愕しながらも今度は黒フードの男目掛け魔弾の連射を放つ。

ドドドド、魔弾の連射は黒フードの男に直撃しているのだが、

「また無駄な事を」

何と男は片手でキャスターの攻撃を全て防ぐ。

凜は驚愕な表情でその様子を窺がっていた。

「何なの、あいつ。魔力も何も感じない。セイバーみたいな対魔力でもない。なのにどうしてキャスターの攻撃を平然と受け止めているの。」

「ああ、あいつは何者なんだ？」

RXも驚愕しながら黒フードの男を見つめる。

驚くべきことに黒フードの男は何の魔術も使用せずにただの腕一本でキャスターの攻撃を防いでいるのだ。

その異常な事態を何より対峙しているキャスター自身感じている。

「何なの。あなた一体何なの!!」

キャスターは恐怖する。

自分の知らない異常な存在が目の前にいる。

その事実キャスターはただ恐怖する。

「くっ、セイバー」

ついにはキャスターは自分の魔弾では倒せないと判断し、セイバーに命令を出す。

「おおおおお」

セイバーは狂ったように叫び、黒フードの男目掛け突進してくる。

「下らん。」

黒フードの男は突進してくる。セイバー目掛けすつと手を広げ、何かを押すように前に出す。

ブン「！！ぐわあああ」

セイバーはいきなりの衝撃波に黒フードの男に到着する前に吹き飛び気絶した。

「馬鹿が。敵の力量すら見極められんとは。まあいい、飽きた、消えるがいい。キャスター」

男の指先に小さな黒いエネルギーが収束されていく。

「あ……ああ……あああ」

キャスターは目の前の男に恐怖し後ずさる。

「死ぬ。」

黒フードの男から黒いエネルギーがキャスターの心臓目掛け解き放たれ、キャスターは死を覚悟し、目を瞑る。

だが、ドン、いきなり自分の体を誰かが突き飛ばしてきた。

キャスターは困惑しながら恐る恐る目を開けてみると……

「……そんな、宗一郎様。」

「ぐっ……無事か。キャスター」

キャスターを庇い、受けたのか。

葛木の腹の部分から大量の血が流れてきている。

「宗一郎様……しっかりして下さい。」

「うう〜キャスター。ブハ……」

葛木は口から大量の血を噴き出す。

「あ〜あああ」

キャスターは悲しそうな表情で葛木を見る。

「……下らんな。興が冷めた。」

一言言い残し、黒フードの男が去ろうとしている。

「待て」

それを今まで様子を見ていたV3が呼び止める。

「何だ。私に何か用か。」

「お前は何者だ。」

V3は黒フードの男に問う。

「私の名はデス。デスシヨッカー最高幹部の一人だ。しかし、我々の計画を潰してきた仮面ライダー。どれほどの強者か。期待していたのだが……とんだ期待はずれだ。この程度なら私が手を下す必要もないだろう。」

黒フードの男デスと名乗った男はつまらなそうにV3達に視線を向ける。

そのまま背を向け去ろうとする。

「テメー待ちやがれ」

ストロンガーがデスを追おうとするがV3が止める。

「追うな。ストロンガー」

「V3、どういう事だ。あいつを逃がしてもいいのか」

「ああ、奴の力は未知数だ。俺達は怪人たちの戦いで消耗している。今奴と戦うのは得策じゃない。」

「くそー」

ストロンガーは追うのを止める。

SIDE 葛木 宗一郎

「宗一郎様・・・宗一郎様・・・おお・・・おお・・・このようなことが」

「キャスター・・・私よりお前が生き延びた方が勝率が高い・・・この場は引け・・・勝機を待て・・・そして聖杯を手に入れ・・・望みを叶えるがいい」

「そんな・・・貴方と共にいられることだけが私の望みでしたのに・・・！」

私はもう駄目だ。

血の大半を失い、もう助からないだろう。

それに私は何の目的も無いただの死人・・・なのになぜ彼女は悲しそうな顔を浮かべるのだろうか。

ずっと疑問に思っていた。

某県山中 人里離れた奥地にある。その施設で私は育った。

いつどのようにして自分がそのような場所に収まったのか覚えていない。

ただ その組織が自分達を暗殺者に育成するための集団ということだけは理解していた。

依頼者は政府や財界の要人たち

ゆえに彼等の地位を脅かすことのないよう、我々には一つの掟が課せられていた。

〈任務達成後は速やかに自害すべし〉

凶器も用いず、戸籍も持たず、事後 死をもって完全に口を紡ぐ殺人兵器。

要するに我々は権力者たちにとって都合の良い ただの道具であり、完成を待って出荷される商品でしかなかった。ならば――

〈よいか。お前達は死人だ。死人に意思は要らぬ。感情もいらぬ。役目を果たすことだけを考える。その為にお前達はあるのだ。〉

ならばこの私とはなんだ？

私はずっと求めていた。

私という「個」がこの世に生を受け存在した意味を。

一個の殺人兵器としてではなくひとりに人間として、

はたして自分は「殺し」を受け入れ満足して逝けるのか。

それともこれは絶望に塗れた哀れな人生だったのか。

どちらでも構わない。この疑問に答えを得られるのであれば、
そしてそれはおそらく、この日々の辿り着く果てに……

「出番だ。宗一郎」

そしてあの日が訪れた。

殺人兵器としての私の最初で最後の仕事だ。

結論からいえば殺しは簡単に終わった。

……他愛ない。

……これで終わりか。この程度のものか。

ただこれだけのものか。鍛え上げた拳も修行に明け暮れた日々も……

喜びも無い。嫌悪も絶望すらも無い。

結局、私には最初から何もなかった。

既に死人である私がここで死んで何の意味がある。

私が果てぬとみるとすぐに刺客が来た。

刺客は私達を暗殺者へと育て上げた男だ。

「なぜ、自害して果てぬ？」

「すでに死人だ。それに何の意味がある。」

「貴様……！」

そつだ……最初から意味などなかったのだ。

「不覚……」

私は死ななかつた。

刺客達を返り討ちにして、どうやらここは私の死に場所ではなかつたようだ。

そこで私は一つ気になり、自分を暗殺者へと育てた男に問うた。

「答える。おまえは何の為に生きている。」

「うつ、ぐ」

男は何も答えず、自身の舌を噛み切り自害した。

その後私は各地を転々とし、組織の目を逃れた。生きる目的を、失った私は同時に死ぬ事にも意味を見いだせなくなっていた。

ゆえにただ流れるままに日々を過ごした。

水面に揺れる……笹船のように……

時に人に求められ答える事もあったが……心に何かを感じる事はなかつた。

私はまさに生ける死人であり、朽ち果てただの殺人鬼だ。

ただそれだけの生涯だ。

それでも構わないと思っていた。

なのに……

「宗一郎様」

不思議だ。彼女の顔を見てると……なぜか満たされている。今は満ちたりている。

SIDE OUT

葛木はキャストの腕の中でそつと息絶えた。

「ああああああ、いやぁー……宗一郎様」

キャストは葛木を抱きしめ涙を流し続ける。

「くっ」

士朗はキャストの様子を見て憐憫に近い眼差しを向ける。

確かにキャストのせいで色々な人が苦しい思いをした。

だが葛木を慕う、キャストの想いは本物だ。

だからこそ、士朗はキャストを恨めずにいた。

仮面ライダー達もキャストに迫らず、立ち尽くし様子を見ていた。

しばらく泣き続けていたキャストだったが

「クク……フフ……ハハハハハ」

いきなり狂氣的に笑い始める。

「何だ？」

士朗は呆然とキャスターの様子を見ていたが、キャスターが振り向き、こちらを見据えた時の目を見て体が硬直してしまふ。

その瞳はまさに無。

何もなただだ呆然とした瞳がこちらに向けられている。

「油断するな。」

V3の言葉に皆、油断なくキャスターを見据える。

今のキャスターは例えるなら爆弾だ。

いつ爆発してもおかしくない。

「クク・・・フッフ、宗一郎様。こんなに冷たくなって・・・さぞや寒いでしょう。少々我慢なさって下さい。私が必ず元の暖かな体に戻して差し上げますので」

キャスターは無の表情で涙を流し、息絶えている葛木に語りかけて、ジワリジワリと士朗達へと歩み寄って来る。

その時歩み寄って来る、キャスターの体が青く光り始める。

「あれは？・・・遠坂！！」

士朗はキャスターの今の姿を見て疑問を抱いたが、すぐに気がついた。

「ええ、あのおばさん。柳洞寺に貯め込んだ魔力を全て自分に取り込んでいるわ。」

冷や汗を流しつつ凜は答える。

キャスターは冬木に住む、何千、何万の人間から奪い取った魔力を自身に取り込んでいる。

その魔力は凄まじく、キャスターの周りから青白い電流がバチバチと光る。

そしてキャスターはフワリとフードを羽のように広げ空中へと飛翔する。

「フッフ、私は貴方達を殺して聖杯を手に入れる。その為に何千、何万という人間を犠牲にしても私は必ず聖杯を手に入れる。聖杯で宗一郎様を生き返らせる為に」

無の表情から、狂気的な表情へと変わるキャスター。

その姿を見て士朗は悲しくなりキャスターに問うた。

「もう戦うのは止める、キャスター。大切な人を失ったお前も分かった筈だ。お前がしようとしている事は関係のない人にお前と同じ悲しみを与えようとしているんだぞ」

士朗が必死に語りかけるが、

「フン、それがどうしたの。宗一郎様さえいれば、他の人間が何人死のうが私が知ったこっちゃないわ。」

「・・・さあいつまで寝ているのセイバーいい加減起きて敵を倒しなさい。フフ・・・ハハハハハ」

キャスターの命令に気絶していたセイバーが起き上がる。

最早誰の言葉も彼女には届かないだろう。

「くう」

ガシ「衛宮君。もう無駄だ。彼女を止めるには……もう倒すしかない。」

「風見さん」

「君は下がっている。俺達は全力で彼女の息の根を止める。君は見ない方がいい」

V3は士朗に逃げるように言うが、

「風見さん。俺はセイバーをまだ助けてない。それにどんな結末が待っているよと俺は逃げません。」

「そうか。」

V3は士朗の固い決意にそれ以上の追及は止める。そして、V3はランサー、ストロンガーに

「ランサー、ストロンガー、悪いが二人でセイバーの足止めを頼む。」

「へ、何だよ。いきなりまあいいぜ。相手がアーサー王なら二対一でも悪かねえーか」

ランサーは嬉しそうに槍を構えセイバーを見据える。

「分かった。風見さん達は？」

ストロングァーがV3に問う。

「ああ、俺達で一気にキャスターと決着を着ける。俺達のエネルギーも残り少ない。それにキャスターの腕にある令呪さえ奪えばセイバーは無効化出来る筈だ。」

V3は皆に作戦を伝え行動しようとした時凜が、

「待つて風見さん。令呪に関しては私に考えがあるわ。」

「？何か手はあるのか。凜ちゃん」

「ええ、風見さん達はうまい具合にキャスターの隙を作って」

「分かった。皆行くぞ」

風見の言葉で皆行動を開始した。

キャスターは葛木を失い、聖杯を手に入れるため止まる事はない。その葛木を手にした謎の大幹部デス……奴の正体はいつたい何者なのか。

セイバーを無事助ける事は出来るのか。

次回に続く。

59話 ついに決着 必殺 V3マツハキック(中編) (後書き)

次回こそキャスター戦の終わりです。
本当に長くしてすいませんでした。

60話 ついに決着 必殺 V3マツハキック (後編) (前書き)

すいません。久々の更新です
これで一応キヤスター編は解決です。

60話 ついに決着 必殺 V3マツハキック (後編)

柳洞寺 境内

柳洞寺上空でキャスターは冷笑を浮かべV3達を見据えている。

「ふ」

キャスターがいつの間にか手にした杖をすーと挙げると周りに魔力で出来た小さな塊が無数にでてくる。

「消えなさい」

キャスターの言葉と共に一斉に魔力の塊はレーザー砲の如くV3達に向け降り注ぐ。

「ぐっ、まずい!!!RX、そっちは任せた。」

「はい」

ガシ「風見さん!!!」

「凜ちゃん、ごめん」

「えっ!!!」

急ぎV3は士朗をRXは凜を掴み、その攻撃を回避する。

スーパードライダー、スカイライダー、ストロンガー、ランサーもそれを回避する。

「ううー」

V3達は全力でキャスターの攻撃を回避。

V3に掴まれていた士朗はキャスターの攻撃の爆音と煙の余り目を瞑る。

そしてキャスターの攻撃が終わり、士朗は恐る恐る目を開けてみると

「……………!!」

目の前の余りの光景に言葉を無くす、今のキャスターの攻撃で地面は抉れ、所々多数クレーターが出来ており、キャスターの攻撃の凄さを物語っていた。

何千、何万人から奪い取った生命力を取り込んだ、キャスターの攻撃の威力は今までの比ではない。

一撃一撃が必殺の一撃。

「何て威力だ!!」

「風見さん……これは」

スーパー1は真剣な趣でV3に向け口を開く。

「ああ、今の一撃でもまともに受ければ、如何に俺達でもひとたまりも無いぞ」

元より今の攻撃を目の辺りしたV3達、仮面ライダーは理解している。

もし一撃でも受ければ命はないと、

対魔力が低いと云えど、機械の体で高い防御力を誇る仮面ライダー

達ですら命が無いと、

つと、V3達が畏怖を込めてキャスターを見据えていると、

ドドド、と音が聞こえる。

「おおおおおー!!」

セイバーがV3達目掛けて突進してくる。

ガシ「ぐっ、セイバー、お前は俺が相手してやるぜ」

そのセイバーの突進をストロンガーが体で受け止める。

「ストロンガー」

「V3、予定通りセイバーは任してくれ。」

「ああ、頼む」

「へっ」

ガシ、ストロンガーはセイバーの腕を掴み、柳洞寺の奥の方へと思い切り投げ飛ばす。

ビューン「ああああ」ドガ

ストロンガーは投げ飛ばしたセイバーを追いかけるが、その隣にランサーが並走しながら笑みを浮かべ

「おいおい、抜け駆けとはヒデエじゃねえか」

ランサーはストロンガーに向け憎まれ口を叩く。

「うるせえ、テメエが遅えんだよ。」

ストロンガーも言い返し、二人は文句を言いながらセイバーを投げ飛ばした方向へと追いかけていった。

「セイバー」

士朗はセイバーが投げ飛ばされた方角を心配そうな様子で見ている。その様子に気づきV3は

「衛宮君、気持は分かるが今は」

「……ええ、分かっています」

「ならいい。」

そしてV3はRXに抱えられている凜に視線を向け

「凜ちゃん。秘策があるといっていたが俺達はどうすればいい?」

先程のことについて問う。その問いに対して凜は

「少しの間、キャスターの注意を引いて、準備が整ったら、合図として私が魔術で扉を破壊するから、うまくいけばセイバーの令呪を奪えるわ。そしてキャスターが怯んだ間に止めをお願い」

凜は自分の作戦をV3達に伝える。

「そうか、分かった。衛宮君、少し隠れていてくれ」

V3は士朗を放し、仮面ライダーの能力のテレパシーで厳しい視線をキャスターに向けたまま今の作戦を皆に伝える。

「あら、相談は終わりかしら」

今のやり取りを黙って静観していたキャスターが軽く笑みを浮かべ口を開く。

「フフ、いくら相談しても無駄。私を倒す事なんて出来ないわ。貴方達には色々世話になりましたね」

優しい口調で話すキャスター。だが

「……でもね……貴方達のせいで私の大切なものは失われたわ。ただでは殺さない。魂がずたばろになるまで地獄の苦しみを与えて殺してあげるわ」

再びキャスターの周りに無数の魔力の塊が出現する。

「来るぞ」

V3達はそれを迎え討とうと身構えた。戦いは最終局面を迎えるのだった。

SIDE 仮面ライダーストロンガー&ランサー

「おおおおお！」「ブンブン

「おわ！」「くっ、凄い威力だ」

ストロンガーはセイバーの剣をギリギリのところまで回避する。

「くそ、踏み込めない」

しかし、セイバーの剣激の嵐は激しく強く一行に攻める事が出来ない。

ブン、防ぎきれなくなり、セイバーの剣がストロンガーの胸を襲う。

「しまった。」

キーン、「へっ、油断しすぎじゃねえのか」

ランサーが自身の槍でストロンガーの危機を助けたのだ。

「うるせえ、こっからが本番なんだよ」

「へっ、よくいうぜ」

ランサー突きつきつきをセイバーに連打して牽制する。

「くっ」

セイバーはたまらず後ずさる。

「へ、そういえばセイバー、テメエと戦うのは二度目だな。何の制約もねえ、全力の力が振えるぜ。まあキャスターに縛られたあんたと戦うのは残念なんだけどな」

ランサーは真剣な表情で突きの連打をセイバーに連射する。
流石のセイバーもこの状態は不利だと悟ったのか。
大きくジャンプして後退し、黄金の剣を振り上げる。

「やばい」

ランサーは焦る。

今の構えはセイバーの宝具を解放する構えだからだ。
急ぎセイバーを止めようとするが

「うお」

セイバーから強力な風が吹き荒れ近づけない。

「くそ」

「ランサー、お前は下がってる。」

「……ストロンガーどうするつもりだ」

「俺の奥の手を見せてやる。チャージ・アープ……！」

ストロンガーのボディーにあるS文字がフル回転し、角が金色に輝

く。

「いくぜ、超電ドリルキーク!!」

ドリル状に回転しながらセイバーに迫る。

「!!」

セイバーも危険を感じ剣に魔力を溜めるのを止め、黄金の剣に風を纏い、全力でストロンガーの攻撃を防御した。

「おおおおお!!」

「ぐうー」

ドゴン、両者のぶつかりあいにより、爆発音が響き二人とも吹き飛んだ。

「ぐうー」

「ううー」

ストロンガー、セイバーは同時に立ちあがる。

「大丈夫か。ストロンガー」

ランサーは気遣う様にストロンガーに聞く。

「ああ、大丈夫だ。」だが、超電子の技も耐えるか!!それに時間が後三十秒しかない……」

ストロンガーのチャージアップには時間制限がある一分間という時間制限が。
それを過ぎれば自身が自爆してしまうかもしれない危険な力なのである。

セイバーはゆらりと剣を構え、鋭い視線をストロンガーランサーに向ける。

「……いいぜ。とことん相手になってやる。かかってきな。行くぞランサー」

「ああ」

ストロンガー、ランサーは同時にセイバーへと突進した。
セイバーとの戦いはまだ終わらない。

S I D E O U T

キャスターの攻撃は今だ雨のように降り続けている。
一分、二分立ったであろうか。
しかし、いつまで立っても攻撃が終わる様子はない。

V3達は全力でキャスターの攻撃を回避していた。

「くそ、チェンジ・エレキハンド、エレキ光線発射!!」

スーパードーは腕をエレキハンドに変え魔弾を回避しながらエレキ光

線をキャスターに向け放つ。

ドゴン「くう」

キャスターは唸る。

「今だ。俺は悲しみの王子ロボライダー。ボルティックシューター
！！」

ドン、黄色い光線銃をキャスターに向け放つ。
ドガン、直撃し爆発音が鳴り響き煙が舞う。

「やったか」

煙が晴れてみると

「！！そんな効いてない」

何とキャスターには、傷一つさえ負っていないかった。

「無駄よ。絶望しなさい。今の私にはどんな攻撃手段も通用しない
わ。」

「くっ」

「ハハハハハ」

キャスターは高らかに笑いだす。

「油断したな」

「え!!」

背後から声が聞こえ振り向いて見るとV3が後ろから蹴りの態勢を取っていた。

「V3キーク!!」

「クウ」

すぐさまキャスターは手を翳し、V3のキックを防ぐ、蹴りがキャスターに直撃する・・・直前

キーン「ぐう」

不可視の壁に阻まれV3は吹き飛んだ。

「しつこい虫、消えなさい。」

キャスターの杖の先端から魔力を圧縮した塊が瞬時に作り出される。

「させるか」

「!!」

それをスカイライダーが自身の能力である飛行能力を使い妨害する。

「くう、次から次へと目障りよ」

ドドドド、キャスターは魔弾をスカイライダーに放つが、スカイライダーの素早い動きに翻弄され当てる事が出来ない。

「ええい」

キャスターは忌々しげにスカイライダーに魔弾の連射を続ける。

だが、当てる事が出来ない。

そして、ついにはキャスターはスカイライダーの空中での動きを目で追えなくなった。

「よし、今だ」

スカイライダーは素早いスピードでキャスターの背後に回り、

「スカイキークー！」

背後から強力なスカイキックをキャスターに放つが

ギシ「ぐう」

いきなり何かに体を掴まれた感じになり、その場で身動きが取れなくなってしまうた。

「フフ、かかりましたね」

狂気的な笑みを浮かべながらキャスターが振り向く。

「！！」

スカイライダーは驚いている。

なぜ、自分の体の自由を奪われたか理解できないからだ。

「フフ、よく分かっていないようね。貴方のスピードには付いていけそうになかったので、網を張らせていただいたわ。私の魔力で作った網をね。いくら貴方達が強くても対魔力が無いに等しい貴方達にとっては有効な手段ですから」

つまり、キャスターはスカイライダーのスピードに付いていけないと悟り、自身の魔力を糸状にして、自分の周囲に張り巡らせて罫を張っていたのだ。

その様子を下から見ている。

スーパー1、RXの二人は

「まずい!!RX」

「分かっています。先輩」

スーパー1、RXは下から、ボルトティックシューター、エレキハン
ドでキャスターに攻撃を仕掛ける。

ドンドン、キャスターに直撃するが

「くっ・・・駄目か」

二人から強力な攻撃を受けたにも関わらず、やはりキャスターにダメージはなかった。

「フフフ、いくらやっても無駄よ。今の私には通用しないわ」

キヤスターの魔力は凄まじく、障壁を砕くことが出来ない。

「さあ、まずは貴方から死んで貰うわ」

キヤスターの死の指先から今にもスカイライダーの命を奪おうと魔弾が放たれようとしている。

「ぐうっ」

スカイライダーは必死に体を動かそうとするが、やはり体が何かに縛られているようで動けない。

「終わりよ」

キヤスターから魔弾が放たれ直撃する瞬間、

「トオ」

V3が飛来し、

ガシ、スカイライダーを掴み回避するが

チツ「ぐう」

体に少しキヤスターの魔弾を掠らせてしまう。

そのまま二人は地面に自由落下してしまう。

ドガ「ぐう」「があ」

二人は地面に直撃するが、すぐに立ち上がる。

「大丈夫か。」

V3はスカイライダーに聞くと

「大丈夫です。でも、今の敵の攻撃で重力低減装置が故障しました、しばらくの間、空を飛ぶことが出来ません」

「くっ、このままじゃまずいな」

V3は焦る。

先の怪人たちの戦いで多くのエネルギーを失った。

もうエネルギーも残り少ない。

それに比べ、キャスターの魔力は柳洞寺に貯め込んだ魔力を全て取り込み、無尽蔵に近い。

このまま戦えば如何に仮面ライダー達が力を合わせようとも負けてしまう。

それゆえに仮面ライダー達は焦っていた。

その戦いの様子を少し離れた所で見ている士朗と凜

「このままじゃあ、風見さん達が……」

士朗は心配した様子で戦いを見ている。

「そうね。このままじゃあ」くまだなのアーチャー」

凜は焦り念話で自身のパートナーに呼びかけた。

その時、

「えっ、準備が整った。それならもっと早くいいなさいよ。」

「どうした。遠坂」

いきなりひとりで喋りだす凜を不審な表情で見る士朗。

「フッフ、士朗。準備が整ったわ。逆転のチャンスがね。」

凜は扉へとガントを放つ態勢を取りながら士朗に言った。

SIDE 赤い騎士

柳洞寺から3キロ離れた地点

そこには一人の赤い騎士が鋭い目で弓を構えある場所へと狙いを定めている。

「I am the bone my sword（我が骨子は捻じれ歪む）」

赤い騎士の腕に捻じれ曲った剣が出現した。

「偽・螺旋剣」
カラド・ボルク

赤い騎士は弓を引き全神経を集中して狙い目掛けて矢を射た。

「ふっ、私の役目はこれで終わりだ。後は仮面ライダー、貴様たちが決める」

赤い騎士は厳しい表情のまま矢を射った。
場所を一人見ている。

SIDE OUT

ドガン、何かが壊れる音が聞こえ皆、その方角へと視線を向ける。

「あれは、凜ちゃん。そうか準備が整ったか」

V3達は凜の示した合図を確認していつでも行動できるよう身構える。

「なんなの、今の音は!？」

いきなりの音にキャスターは動じる。

その時……!!

ザシユ「えっ!？」

それは一瞬の出来事だった。

キャスター自身、何が起きたのか、しばらくの間理解できなかった。

一振りの剣の矢がセイバーの令呪があるキャスターの手首を切り裂いたのだ。

「あ……あああああ」

事態を理解するとキャスターが狂ったように叫びだした。

それと同時にキャスターの切断された腕から大量の血が噴き出した。

「うまくいったようね」

一連の出来事を見ていた凜が真剣な顔で呟く。

その隣で士朗は地面に突き刺さった一振りの剣を見据えていた。

「……あの剣はアーチャーの……遠坂、これがお前の言っていた作戦か？」

士朗は凜に問う。

「ええ、柳洞寺で狙撃すればキャスターには感づかれるわ。仮にもここはキャスターの工房だしね。だからアーチャーにはキャスターに感づかれることのないように柳洞寺から離れた地点で狙撃して貰ったて訳。ここまでうまくいくとは思わなかったけどね。」

凜は士朗の問いに答えた。

「……はっ。セイバーは」

士朗は切り落とされたキャスターの腕を見つめる。

「大丈夫よ。これでセイバーはキャスターの支配から逃れた。後は風見さん達に任せましょう」

士朗と凜は話を止め、再び視線をキャスターへと移す。

キャスターが腕を斬り落とされうろたえている今が好機と見て仮面ライダー達は最後の攻撃に出た。

「行くぞ」

仮面ライダー達はキャスター目掛けて一斉にジャンプする。

「スーパーライダー月面キーク!!!」

「RXキーク!!!」

まずスーパー1、RXが同時にキャスター目掛けてジャンプ蹴りを放つ。

「グウ……はっ、おのれ、まだよ」ばっ

キャスターは片腕を前に出し、スーパー1・RXのキックを防ぐ。

ドゴ、ドガン「ぐううう」

ドガン「グハ」「グウ」

キャスターは障壁でスーパー1・RXの蹴りを受け止め弾き飛ばす。

「まだまだ、大回転スカイキーク!!!」

ストロンガーとの特訓により身につけたスカイライダーの必殺キック。

通常よりも空中前方宙返り行い、強化した。強化版スカイキックで

ある。

「V3スクリューキイクー！」

同時にV3もV3二十六の秘密技スクリューキイクをキャスターに放つ。

キャスターは安心するのも束の間、再び迫りくる、二人のライダーの攻撃を障壁で受け止める。

ドゴン「ぐううううう」メキ、ミシ

二人のライダーの必殺キックにより徐々にキャスターの障壁が崩れていく。

「グウー……まだよ。」

「ぐは……」

「ぐう……」

キャスターは腕に力を入れ、二人のライダーの必殺キックを防いだ。

二人のライダーは地面に落下していく。

「おのれ、よくも私の腕をアーチャーの仕業ね。よくも小娘」

キャスターは物陰に隠れている土朗、凜に狙いを定めて魔力弾を放った。

「しまった!!」

落下しながらV3は士朗達のピンチに叫ぶ。

「まずい。宝石に手持ちが!!」

「遠坂!!」

宝石で防ごうにも手持ちの宝石がもうなくキャスターの魔弾を防ぐ手段がない凜。

そんな凜を庇おうと身を挺する士朗・・・絶対絶命のピンチ。

「ライドルロングポール!!」

「敬介さん」

その時、一人の仮面の男、が士朗達を庇うように前に出る。

「伏せる、士朗、凜ちゃん」

男の言葉に従う様に身を低くする士朗と凜。

「ライドルバリア!!」

仮面の男は手に持った棒を前に振り回す。

ドガン「ゲウ・・・おおおおお」

男は棒で見事キャスターの魔弾を防ぐことに成功した。

「無事か。二人とも」

「敬介さん。勝ったんですね」

「ああ、心配掛けてすまない。」

「オノレ・・・あの男は！！アサシンめ。あの役立たずが」

それを忌々しげに見るキャスター。

「あれはXライダー。そうか勝ったのか。」

V3は士朗、凜、そして仮面ライダーX。敬介が無事だったことに安心し、落下しながら最後の攻撃に出た。

「エネルギーももう限界か。キャスターこれが最後の勝負だ」

V3は落下しながらも態勢を整え。

「ハリケーーン！！」

V3が叫ぶとどこからともなく愛車ハリケーンがV3目掛けてジャンプしてきた。

V3は自分に突っ込んで来た、ハリケーンの前車輪に着地して、タイヤの回転を利用して再び宙を舞う。

「勝負だ。キャスター」

「!?!」

キャスターはV3が自分に目掛けて再び突っ込んで来ているのに気付き、慌てて移動しそれを回避した。

シュ「くう、おのれ」く身動きとれない空中で止めをさすわ

キャスターは振り返りV3が飛んで行った方向に視線を向けると驚愕の表情を浮かべた。

「えっ!?! 旋回した」

なんと空中でV3が旋回し回転しながら自分目掛けて再び突っ込んで来ているではないか。

「V3 つ!?!」

「くう!?! おのれ」

キャスターは腕を出しV3の攻撃を阻むため障壁を張る。

「マツハキ!?!」

ドゴン「ゲウ」

V3の蹴りとキャスターの障壁は拮抗し、空中でなにやら奇音が聞こえるではないか。

だがそんな拮抗も徐々に破れ始める。

ビキビキビキ「そんな……この私が」

「おおおおおー!!」

パリーン、どご「があ、ぎゃああああ」メキ、ゴキ、バキ

V3の蹴りは見事キャスターの腹部に直撃した。

そのままV3は綺麗に地面に着地した。

キャスターは勢いよく自由落下し地面に激突。

「終わったのか!？」

「ええ、そうみたいね」

士朗、凜は、呆然と呟いた。

「ぐう」

その時、士朗達を庇うように前に立っていたXライダーが腕を押さえて膝をついた。

「敬介さん」

同時に変身が解け傷だらけの敬介の姿が現れる。

「酷い怪我!!」

「俺は大丈夫だ。それよりもセイバーは」

敬介は自分の身よりもセイバーの身を案じる。

その時、

「セイバーなら大丈夫だぜ。」

「茂さん」

士朗は声が聞こえた方に視線を向けるとセイバーを抱えた茂と槍を携えたランサーがこちらに歩いて来ている。

「茂さん!!セイバーは?」

士朗が茂に問うと、

「大丈夫。気を失ってるだけだ」

セイバーが無事で士朗は安堵する。

ランサーが凜に

「それより、そっちも終わったみたいだな」

「ええ」

凜は答え、キャスターが落下した方へと視線を向けた。

「風見さん。終わったみたいですね」

変身を解いた光太郎が声をかけてきた。

「ああ、手応えはあった。これで終わりの筈だ」

答え、風見はキャストの方へと視線を向けてみるとそもそも何かが動く音が聞こえてきた。

風見はまさか！！と思い視線を向けてみると

「ぐう、宗一郎様」

キャストが片腕だけで葛木目掛けて這いずっている。

あれだけの強力な蹴りを受け生きているキャストに風見達は驚いたが、キャストにはもうどうする力もないのでただじっとキャストに視線を向けた。

「宗一郎様」

ついにキャストは葛木の元へと辿り着き

「宗一郎様。申し訳ありません。負けてしまいました。ですがあなただけでも」

キャストは葛木の心臓に手をそつと当て、自分の魔力の全てを注ぎ始める。

キャストの体は少しづつだが消滅していく。

「がは、ごほごほ」

何と死んでいた筈の葛木が口から大量の血を吐きだした。

キャスターは涙を流し

「宗一郎様……どうか生きて生きて下さい」

そう呟いて消滅した。

長いキャスターとの戦いの夜はこうして終わりを告げた。

キャラ紹介

筑波 洋

城北大学の学生でハングラライダー部の部員だったが、練習中にネオシヨッカーから志度啓太郎博士を救ったことにより事件に巻き込まれ、部の仲間は皆殺しにされ自身も瀕死の重傷を負ったが、ネオシヨッカーに投稿するふりをした。志度博士によって改造手術を施され、改造人間として復活した。また明るく勇敢な青年で改造人間になった事を嘆くことも無かった。洋を改造人間としてしまったことに対して罪悪感に襲われていた志度博士に悪と戦う力をくれたことに感謝し、また殺された部の人間に対して涙を流すなどとても優しい青年である。

また、ネオシヨッカーとの戦いの途中、七人ライダーからのエネルギーにより強化版スカイライダーに生まれ変わりネオシヨッカーと戦いを繰り広げた。

オリジナルキャラ

デス

デスシヨツカー最高幹部の一人。

高い戦闘能力を持ち、セイバー、キャスターさえ圧倒して見せた。体中黒いマントで覆い、その姿はデスシヨツカー首領アルヴァロン以外知る人物がいない。謎の多い人物である。

V3必殺キック

V3マツハキック

「ツバメ軍団」死人コウモリ対策に編み出された必殺技。体を身直させ横回転のブーメラン状で体当たりする技。

60話 ついに決着 必殺 V3マツハキック (後編) (後書き)

次回は暗躍するモノ(2)です。

デスシヨツカー首領アルヴァロンの動向。

そして物語は新たな局面へ。

次回にご期待下さい。

61話 暗躍する者たち(2) (前書き)

今回は敵サイド

61話 暗躍する者たち(2)

SIDE ????

とあるビルの一室、一人の若い男が椅子に座りテーブルにあるワインのコルクを抜き、コップに注ぎ飲んでいる。

ゴクゴク「うーん、やっぱり仕事中のワインは最高だな」

男はワインの匂いと味を楽しみながら一人呟いていると

コンコン、ドアを叩く音が聞こえてきた。

「誰かな。まあいいや。いいよ入ってきて」

男がそう言うと、何か変わった被り物をした男が入室してきた。

その訪問者を見て男は少し機嫌が悪くなった。

「地獄大使、何の用かな。僕が表の仕事している時は来るなって強く言ったよね。」

男の顔は笑顔なのだが、男から感じる不気味なプレッシャーに地獄大使は慌てた様子で懐から封筒を取り出し身を低くして

「申し訳ありません、アルヴァロン様。柳洞寺の調査が終了しましたので、急ぎ報告に来た所存です。」

アルヴァロンに封筒を手渡した。

「ふうん。まあいいか。今度から気を付けてね。僕にも表の社会の立場があるんだから」

「はっ。」

地獄大使は頭を下げアルヴァロンに謝罪した。

それを見届けアルヴァロンは地獄大使の調査結果を拝見するため書類から紙を取り出す。

「どれどれ……なるほど。やっぱり柳洞寺から大きな魔力の変動が起こっているようだね。キャスターの影響もあるかも知れないけど……これは十中八九当たりかな。」

アルヴァロンはご満悦な様子で調査結果に目を通している。

「どうでしょうか？」

「うん。文句のない調査結果だよ。さすが大幹部地獄大使だね。」

「光栄でございます。しからは、キャスターはもう用済みですな。ワシ自らの手で始末して来ましょうか？」

「ああ、それはいいよ。彼にもう命令したから」

「彼とは？」

「ああ、まだ知らせてなかったね。キャスターの始末はデスに命令したから問題ないよ。」

「な!?!」

デスの名を聞いた途端、地獄大使がプルプルと体が震え始める。

「なぜ、アルヴァロン様は、あのような得体の知れない人間を重要なさるのだ？」

それは怒りからか地獄大使の体は怒りで震えているのだ。

それを知ってか知らずか、以前アルヴァロンは笑顔のまま、

「それじゃあ、地獄大使、君には任務を終えたばかりで悪いけど、今からブラック將軍が今行っている作戦に就いて貰いたい」

「ブラックの作戦……人間を秘密裏に誘拐する作戦ですか？」

「うん、その作戦……大分仮面ライダー達に怪人を破壊されたしね。ブラック將軍には怪人の補給をして貰おうと思っているからね。」

「なるほど、わかりました。」

「よろしく頼むよ。何か戦闘員の情報じゃあ。本郷猛もこの冬木に来ちゃったみたいだから、ばれないように頼むね。」

本郷の名を聞いた途端、地獄大使に動揺が走った。

「本郷猛が……」

地獄大使に憤怒の表情が浮かぶ。

「うん、そうだよ。彼、色々と鋭いから気をつけてね。」

「……わかりました。失礼します。」

地獄大使は怒りの表情のまま部屋を退室しようとした……その時

ドン、誰かとぶつかる。

地獄大使は誰かと思い、相手を見てみると、

デスシヨツカ大幹部デスが目の前に立っている。

「貴様はデス。」この男がここにいるという事はキャスターの始末が終わったとういうことか。」

「すまない。地獄大使。少々不注意だったみたいだ。」

「ふん。貴様なんぞに詫びを入れられる筋合いはないわい。」相も変わらず得体のしれん男よ。」

地獄大使は嫌悪を隠さぬまま部屋を退室した。

その様子を見ていたアルヴァロンは笑顔のまま、

「ハハハハハ、随分嫌われてるね。」

心底面白いといった感じでアルヴァロンが笑い始める。

「そのようだな。私自身は奴の事は余り嫌いではないのだが……どうして中々旨いかんものだ。」

フードで表情は見えないがどこか苦笑いを浮かべた様子だ。

「フフフ、いつその事、そのフードを脱げばいいんじゃない。」

「馬鹿な事を抜かすな。このフードの意味、お前自身が一番理解しているだろ。アルヴァロン」

「ごめんごめん」

二人は首領と手下という関係ではなく、どこか友達のような感じで話し合っている。

しばらく二人は雑談していたが、雑談を止め本題に入ることにした。

「でっ、どうだった。僕達の敵、仮面ライダーに会った感想は？」

アルヴァロンの質問にデスは下らなそうな様子で

「話にならん。あの程度なら私の敵ではない。なぜ、我々の前組織シヨッカーを始めとする数々の組織が奴らに敗れたのか理解できない」

「まあ、君からしたらそうかもしれないね。君の力はちょっと異常だし」

「心にも思っていない事をよくいう。」

アルヴァロンの膨張した言い様にあきれた様子で言い返すデス。

「でっ、キャスターは？」

「奴か。奴は私が手を下す必要の無い位クズだった。あの程度の奴なら仮面ライダーが始末してくれるだろう」

「ふうん。ならこれでサーヴァント三人の魂が聖杯に注がれた訳だね。」

「……そのことで一つ伝える事がある。」

「なんだい？」

「間桐ゾウケンの事だ」

デスはアルヴァロンに説明した。

柳洞寺で間桐ゾウケンがした出来事を。

「どうする。奴を始末するなら私が動くが」

「うん。別にいいよ。間桐ゾウケンの知識は色々と貴重だしね。しばらくの間、泳がせておくよ。それはそうと、仮面ライダー達の方にランサーのサーヴァントが付いていたんだよね。」

「ああ」

「そう、なら聖杯の器の確保は彼にお願いしようかな。」

アルヴァロンはこれからの動向を考える。

「私はどう動けばいい。なんなら仮面ライダーの始末でもしてやるうか？」

デスは自分はどう動けばいいかアルヴァロンに尋ねると

「ああ、デスはしばらくの間、言峰の様子でも見ておいて、仮面ラ

イダーの始末なら最近完成した新型の改造人間にして貰おうかと思
っているんだ。」

「ほお。そのような者、いつの間に」

「つい最近ね。TYPE・SV3-1号がね。力だけならRXにも
匹敵するよ。テストも兼ねて彼を仮面ライダーにぶつけてみるよ」

アルヴァロンは子供が玩具を使うような純粋な表情で話をする。

「成程分かった。では失礼する。」

「うん、またね。」

アルヴァロンは笑顔でデスを見送った。

アルヴァロンの開発した新型の改造人間とはなにか？
その恐るべき改造人間が仮面ライダー達を襲いに来る。
そして、聖杯戦争を通してのアルヴァロンの目的とは？
聖杯戦争は新たな局面を迎えようとしていた。

62話 王の記憶

SIDE 衛宮 士朗

「ハアツ！」

一人の若い騎士が森の中で急ぎ馬を走らせている。その先にはでかい城が見える。

「これは、夢か」

士朗は自分が夢を見ているのだと理解する。

そして場面が変わる。

男は騎士は城の中に入り、急ぎ目的の部屋に向かう。

そこには若い騎士の帰りを待っていたのか無数の騎士がその場に立っていた。

「申し上げます。南方の海岸より敵の大群が来襲！我が軍は完全に背後を突かれる形になりました！」

年配の騎士が地図を見て、

「ふむ……敵の進路上にあるこの集落は？」

「数十人の民が暮らす農村です」

「それはいかん！王よ、すぐに援軍を」

年配の騎士は王と呼ばれる騎士に援軍を送るよう切り出すが……
王は

「いや……兵は全て引き上げさせる。手前の丘に部隊を集結し敵を挟撃させる」

「！しかし、それではこの村は！！」

年配の騎士に動揺が走る。

村を見捨てるのかと？

王に抗議しようとするが、しかし王は冷たい視線のまま

「村には火をかける。そうすれば敵は我等が恐れをなし逃げ出したものと思ひ込むだろう。その油断を突いて全力で叩く。この軍勢を退けねば我が国は傾く、手段は選べぬ……よいな」

残酷な命令を騎士たちに言い渡し、部屋を後にした。

部屋を出ると、騎士たちの陰口が聞こえてくる。

『王には血も涙も無いのかと』

部屋の外から騎士たちの声は王の耳に届いている……
それでも王は無表情のまま城の中をカツカツ歩く。

「やれやれあの連中は理解しておらぬようだな。王が決断した、あの瞬間に幾万の民の命が救われたということに」

「一人にしてくれないか。マーリン」

王はフードを被った老人マーリンを言い立ち去ろうとするが、

「気に病むことはないぞ、アルトリアよ。そなたの使命はこの国を救うことに在る、王とは時に非情であらねばならぬのだ。そなたの判断は間違いではない」

マーリンは言葉は王の耳に痛々しい響きだった。

場面が変わり

戦いが終わり王は自分の命令で火を放ち焼け野原となった、村の跡地に赴いていた。

王は地面に自分の剣を刺し、自分の命令で犠牲になった村の住民の死骸をじっと見詰めている。

「陛下！陛下！」

若い騎士が馬を走らせこちらに向かってくる。

「陛下！このような所にいらっしやっただのですか！」

若い騎士は王を見つけると馬を下り、王の元まで歩いていく。

「ヴェーデイヴィエルか。見る。私の力が及ばぬばかりに一つの村が犠牲になった。私は王失格だ」

それは罪の意識からなのか王は村の跡地を見据えながら懺悔の言葉を吐く。

「そのようなことはありません！王の作戦で敵は殲滅できました。この戦いは我々の勝利です。」

若い騎士は王の言葉を否定した。

「さあ、お戻りください。皆が心配しておりますよ」

「ああ」

若い騎士に促され王は地面に突き刺していた剣を取ろうとすると、キ、親指に痛みを感じ指を見てみると親指がざっくり切れていた。

「剣よ。お前も私を責めるのか」

王は馬に乗りその場を後にする。

「これは・・・またおれはセイバーの夢を見ているのか・・・」

士朗は自分がセイバーの夢を見ている事に気付く。そんな中、士朗はひと振りの剣に目を奪われた。

「ああ・・・それにしても何て美しい剣なんだ」

王が腰に刺している剣は、見る者全てを魅了するほど美しい黄金の輝きを光らせている。

「伝説によればアーサー王は王者の印たる自らの剣を一度失ってい

る。その後 彼は泉の精霊より新たな聖剣を授かった。セイバーの持つエクスカリバーがそれだろう。だとすればあのセイバーが手にした剣は全ての始まり・・・鉄床より抜き放たれた選別の剣

そこで士朗の目に光が差し込んだ・・・

S I D E O U T

衛宮邸 士朗の部屋

「俺の家・・・そうか帰って来たんだな。そうだセイバー」

周りを見渡すと隣でセイバーが布団の中で眠りにっている。

士朗は安堵し、自分の手の甲を見つめる。

そこには輝きを失ったセイバーの令呪が浮かんでいた。

士朗はここで昨日の出来事を思い出す。

回想

「宗一郎様・・・生きて生きて下さい」

キヤスターはデスショット大幹部デスにやられ死んでいる葛木に言い残し消滅した。

キヤスターが消滅した後、信じられない事態が起きた・・・！！

「がは、ごほ」

死んだ筈の葛木が口から大量の血を吐きだしたのだ。

「これは！！まさか、凜ちゃん」

風見は驚き凜に問う。

「ええ、まさかね。あのおばさん、死んだ人間を甦らせるなんてね。もう魔法の領域よ。まさに愛の執念かしら」

凜も驚愕な様子で葛木を見ている。

「遠坂、葛木は大丈夫なのか？」

「ちょっと待って。」

凜は葛木に近付き体の様子を見ている。

「これはまずいわね。急いで治療しないと」

凜が調べた所によると、キャスターの手により復活した葛木だが依然危険な状態のようだ。

その時、どさつと、誰か倒れる音が聞こえた。

「おい神さん。大丈夫か？」

倒れたのは敬介のようだ。

茂が心配そうに倒れた敬介に近づく。

「凜ちゃん。とりあえずここを離れよう。怪我人も多いしな。」

「そうね。宝石ももうないし、とりあえず士朗の家に戻って葛木の治療をしないと、この状態で病院に送ったら間違いなく助からないわ」

「そうか。なら急ぐ」

風見は葛木を抱え急ぎ衛宮邸へと戻ることにした。

その旨を皆に伝える。

そして戻る前に凜は士朗に向け

「士朗、あなたは戻ったら、すぐにセイバーと再契約なさい。このままじゃあ、セイバーは消滅しちゃうわ」

「！ああ、わかった」

凜は柳洞寺の後始末を聖杯戦争の監督役言峰に連絡をいれ任せる事にし

士朗達は急ぎ衛宮邸に戻る為柳洞寺を後にしようとする。

「さてっと、俺の役目はここまでだな」

「ランサー」

風見達に背を向けるランサーを風見は呼び止める。

「何だ、まだなんか用があるのか？俺達はキャスター打倒までの共闘だった筈だぜ。」

「いや、ただ礼が言いたくてな。世話になった」

風見が皆を代表する様にランサーに礼を言つと

「ハハ、あんたも律儀だな。これからはまた敵同士になるっつのに」

「ああ、それでもだ。」

「はは、まあいいか。俺も楽しかったしな。じゃあな。次会つたら全力で行くからな覚悟しとけよ」

「おい」

その時、今まで黙っていた茂がランサーに話しかける。

「何だ。茂」

「テムエが敵として現れたら、まず俺が相手してやるよ。だから俺と戦うまで死ぬんじゃないぞ。ランサー」

「オもしれえ。楽しみにしてるぜ。仮面ライダーストロンガー」

ランサーが茂との会話を終わると今度こそ霊体化しその場から離れていった。

ランサーが立ち去つたのを見届け衛宮邸に帰ることにした一行。

衛宮邸に戻ると、心配だったのか、&した様子で玄関へと走りくる桜。

だが桜は玄関まで来てみると傷だらけの風見達を見て言葉を無くす。

「桜、悪いけど急いで包帯と布団を用意して」

「はい、姉さん」

桜は急ぎ救急箱を持って来て傷だらけの神敬介の体に包帯を巻き布団に寝かせた。

士朗は、その間に凜の指示に従いセイバーとの再契約を行った。

凜は部屋から宝石を幾つか取り出して葛木の治療を行った。

治療を終えた葛木は衛宮邸へと置くことにした。

なぜデスショッカーと行動していたのか。意識を取り戻した時に事情を聞くために。

そうして、波乱の一日は終わりを告げたのだった。

回想終了

士朗は布団で寝ているセイバーを見て思った。

「爺さん。俺はまだまだだ。結局、また助けられた。俺一人の力じゃあ。セイバーを助けるなんて出来なかったよ。でもいつかは風見さんたちみたいにく」

63話 アーチャーの剣

衛宮邸 昼刻

「あ……ぐう」

士朗は左腕を押さえつつ布団をはぐり上体を起こした。

あれから、再び昼まで眠りについ tara しい。

「ようやくお目覚め。相変わらず化け物じみた回復力ね。」

部屋の通路側から女性の声が聞こえ、眠気眼で視線を向けてみると凜がサンドイッチを入れた皿にティーカップを横に置きこちらを見ている。

「ああ……そついうおまえは大丈夫なのか？遠坂？」

士朗は立ち上がり凜の方へと歩みよりながら問う。

「大丈夫なわけないでしょ。全身ガタガタよ」

腰を押さえながら士朗の問いに疲れた様子で答える。

「あ……先輩！！起きたんですか？」

桜が心配そうな表情で士朗に歩み寄って来る。

「あ……桜心配掛けてすまない。」

「いいんですよ。先輩が無事なら」

桜が涙を流しながら士朗にいう。

「ちょっと桜。俺は大丈夫だから」

士朗は慌てた様子で桜をなだめる。

その様子を遠坂が意地悪そうな笑みを浮かべ士朗に向け小声で

「あんたも、罪な男ね」

「うう〜」

士朗は凜の一言により顔が赤くなりたじたじた。

「あ……ああ、そういえば風見さん達は!？」

士朗は顔を赤くしたまま凜に質問する。

「風見さん達なら、なんでも調べたいことがあると行って朝の十時程に出ていったわ。夜には戻ってくるというてね。後、敬介さんは傷も酷かったし客間で休んでいるわ。」

「そうか。まあ、みんな無事で良かった。桜も心配掛けてすまない」

「いえ、でも本当に先輩や姉さん、皆さんが無事に帰ってきて安心しました。」

「ええ、そうね。それより士朗、令呪の様子はどつ?」

凜に聞かれ、士朗は左腕に在る令呪を見る。

三回の絶対命令権を全て使用したことにより輝きは失われていたが確かに士朗の左腕にはセイバーとの繋がりである令呪が存在していた。

「ああ、遠坂の言われた手順どおりにして、再契約したからな。」

「そう、なら良かったわ。貴方達の契約にはイレギュラーな事が多かったから心配していたけど・・・なんとかラインは繋がったようね。これで今すぐにセイバーがどうにかなるって事はないでしょう」

「そっか。ありがとう遠坂」

士朗は凜に礼を言う。

「でも、セイバーさん大丈夫でしょうか?まだ目を覚ましませんか?」
桜がセイバーへと心配した様子で視線を向け凜に聞く。

「セイバーだつて疲れてるんじゃない?邪魔したら悪いわ。しばらくの間そつとしておいてやりましょう。」

「そうですね」

今にして思えば凜の予想は大きく外れていた。

士朗達は思ってたなかった。それからセイバーは目を覚ますことなく眠り続けることになるとは。

士朗、桜、凜は皿に載せたサンドイッチを頬張りながら他愛のない話を続けた。

そして食事を終え食器などを片付ける前に凜は少し厳しい表情をして士朗に言う。

「士朗、とりあえず今の状況を整理するわ。キャスター、アサシンにライダーも合わせてこれまでに脱落した陣営は3つ。……。あの時、間桐ゾウケンが引き連れてきたライダーの存在は気になるけどゾウケンは茂さんに倒されたし、それは省くわ。後、風見さん達が敵対しているデスシヨッカーの存在……。戦いは佳境に入ったって言うてもいいわ。とりあえず難しい話は夜にしましょう。それくらいになると葛木も目を覚ますと思うわ。風見さん達を交えて話をしましょう。」

話を終わりにして、

士朗達は食器を片づけて凜は自室に、桜は居間の掃除をしている。

士朗は土蔵で葛木との戦いの余韻を思い出しながら魔術の鍛錬をしていた。

「くそお、こんなんじゃ、あいつの剣には届かない。」

思い浮かべるは、赤い騎士が使用している黒と白の短剣。

だが、士朗の周りには投影に失敗した出来ない短剣が乱雑に置かれている。

葛木との戦いでは確かな手応えを感じた。短時間とはいえ、俺の

剣があの異能の殺人者に通用したんだ。今後研鑽を積みめばこの力は
いずれ役に立つ。」

士朗は葛木との戦いで確かな手応えを感じていた。
それでも表情は晴れない。

「だけど人智を超えたサーヴァントには通用しない。もっと強く
なりたい。アイツのように」

思い浮かべるは赤い騎士、自分が一番気に食わない男。
しかしそれでも確信があった。

「俺の戦い方はあいつの剣術を真似たもの。もし、あいつの双剣を
複製する事ができたら……」

認めるしかない。

どんなに気に食わない相手の剣術だろうと自分に一番馴染む戦い方。
悔しいがアーチャーの剣を真似れば自分は強くなれる。

それは確信だ。

そして、アーチャーの剣を複製できれば……士朗は投影を試み
るが

「だめだ。どうしてもうまくいかない。」

形はボロボロでアーチャーはもとよりあの晩に複製した双剣にも遠
く及ばない。

その時、

「ふっ、何をしていると思えば随分と酷い出来だな。衛宮士朗」

「アーチャー!!!」

いつの間にか自分の後ろに今一番会いたくない人物が立っていた。

「おい、お前いきなり何の用だ」

士朗は怒り口調でアーチャーに話しかける。

だが、アーチャーは気にせず士朗の投影した剣をじっと見据たままだ。

「これは・・・私の剣か？」

剣を見据えたまま士朗に問う。

「ああ・・・確かにお前の剣を真似たがうまくいかなかった」

「成程、私の剣から基本骨子を読み取ったか。だが酷い出来だ。このような幻想では・・・」

アーチャーは手に白の短剣を出現させ、士朗が投影した剣を切りつけた。

バリーン「存在の重さに耐えられん」

アーチャーの一撃によりそれは始めから存在していなかったように粉々に碎け散り消え去った。

士朗はアーチャーの短剣を間近で見ても息を呑む。

「圧倒的な存在感。俺にあのような力があれば」

「そう思い、士朗はアーチャーに」

「……アーチャー……それを俺に教えてくれないか」

「何だと……？」

「教えを請うがアーチャーの視線は冷たい視線のまま士朗を睨みつける。」

「俺が使う、強化の魔術の上位に投影があることは知っている。「今ここにない物体を一時的に存在させるための魔術だ。「強化」は物質の構造だけで魔力が消費するけど「投影」はその構造そのものを魔力で編んで作りだす。お前の同じ武器を何度も作り出しているのは投影なんじゃないか？もし、そうなら二つの魔術は同じ系統に属していて共通点も多い。俺にもお前の剣を自在に投影出来るようになるかもしれない……だから」

「士朗はアーチャーの冷たい視線を気にせず切に教えを請うが」

「……、それを知って、この力を手に入れてどうする？」

「アーチャーは冷たい視線のまま士朗に力をどう使うのかと問う。」

「救いを求める人たちを助ける。お前はこの思いが借り物だと言った……だけど、俺は親父の理想を継いだんだ。そのことに後悔はない。だけど今の俺には理想を実現させる為だけの力が無い。その為には俺は戦えるようにならなくちゃならない。」

士朗は真っ直ぐな瞳で自分の理想をアーチャーに告げるが

「フツ・・・ククク」

鼻で笑った。

「何が可笑的い」

勿論士朗は怒りアーチャーを睨みつけるがアーチャーは背を向け土蔵を出ようとしている。

「相も変わらず青臭い理想だな。そんな願いに応えるものがあるとでも？一つ忠告してやろう。戦いになればおまえなど何の役にも立たない。いくら私を真似ようと現実世界でお前が勝てる相手などいない。お前に出来る事などせいぜい想像の中で敵に勝つ事くらいだ」

「何だと!?!」

「事実だ。現実世界において衛宮士朗が勝てる相手などいない。ならばせめて夢の中で敵に勝つ己の姿を幻視しろ」

「.....」

士朗はアーチャーの背中を見つめたまま何も言い返せなかった。

アーチャーの背中には自分とは違い大きな物をいくつも背負ってきた男の背中だった。

士朗はそんな背中を見てどこか悔しく何も言えなかった。

「もっとも、目の前のことにすら目を向けていない。貴様に話した

所で意味はないがな。」

「?どういうことだ」

士朗はアーチャーの最後の発言に意味が分からず聞き返すが・・・もはや何も話す事はないのか。そのままアーチャーは土蔵を後にした。

一人残された士朗はアーチャが出ていた土蔵の出口部分を見つめ

「何だよ?あいつ・・・訳の分からないことばかり言いやがって。結局は俺の事馬鹿にしただけじゃないか。くそう・・・」

士朗はぼやきながら魔術の鍛錬を再開する。

これから数時間・・・士朗は今起きている新たな問題を知ることになるとは知らず・・・

柳洞寺

今、風見達は昨日の夜キャスターとの死闘を演じた柳洞寺に足を運ばせていた。

「これじゃあ、まるで空き巣だな」

「それは言わないで下さいよ。優鬱になるじゃないですか」

一也と光太郎は話しながら寺の中を詮索している。

「そつちは、何か見つかったか？」

外から風見が二人に声をかける。

「いえ、こちらには何も」

「そうか」

一也の返答を聞き、少し落胆のかかった声で答える。

外では茂と洋が柳洞寺の周りを探っている。

普通ならば泥棒と思われる行動で警察に連絡されると思うが、その心配はなかった。

今、ここの住人は皆キャスターの魔術の後遺症で病院に入院している。

しかし、なぜ、彼等が柳洞寺を詮索しているかということデスシヨッカーがキャスターと手を組んでいたということだ。

確かにキャスターの力は強力で自分達仮面ライダーを追い詰め、デスシヨッカーが手を組む理由には十分なのだが・・・風見はどこか腑に落ちなかった。

何か違和感の様なものに襲われたのだ。

理由は分からないがカンみたいなものだ。

もしかしたら、柳洞寺にデスシヨッカーもしくは聖杯戦争のことで重要な秘密が隠されているのではないかと思ひ負傷している敬介を置いて調べに来たのだが何も見つからない。

「風見さん、何も無いみたいですから、一度戻って状況を整理しましょう。」

何も見つからず途方に暮れ、一也が風見に提案する。

「そうだな、一度戻ろうか。そろそろ、敬介も動けるほどには回復しただろう。葛木にも話が聞きたいからな。」

風見達は搜索を諦めてその場を後にしようとして山門前の階段を降りようとしている時、下から金髪の男性が階段を上がってきている。

金髪の男と風見達が擦れ違う途中、

「そのこの雑種、お前、死相が見えるな。」

「!?!? どういうことだ」

風見は金髪の男の言葉の意味が分からず聞き返すが、金髪の男は笑みを浮かべたまま柳洞寺に歩いて行く。

男が見えなくなった後でも、なぜか風見の耳には男の言葉が耳に残るのだった。

64話 セイバーの危機と聖杯の謎を探れ

それは前触れもなく唐突に訪れた。

「セイバー………何で？」

「はあ………はあ………シ………ロ………ウ」

「これは………まずいわね」

士朗自身、理解が足りなかったのかもしれない。

自分とセイバーの間にはちゃんとしたラインが繋がっておらず魔力供給が行われていないということ………

あの後、風見達は柳洞寺の調査を切り上げ一旦情報整理の為、衛宮邸に帰ることにした。

バイクを走らせ衛宮邸に帰って見ると

「セイバー………セイバー」

家の中から士朗の叫びが聞こえてくる。

「何だ？」

風見達は士朗のただ事ではない叫びに急ぎ声が聞こえる士朗の部屋に向かつて見ると
息苦しそうに息継ぎするセイバーとそのセイバーの手をがっしり握り名を呼び続ける士朗の姿があった。

「衛宮君、どうしたんだ」

「風見さん……」

風見は状況を知る為に士朗に話しかけるが士朗の顔は暗い。

その時、後ろからドタドタとこちらに迫って来る音が聞こえる。

「ちょっと、そこをどいて」

凜が部屋に走って来ているのを見て通路の端による風見達。

凜はそのまま部屋に入り、懐から宝石をとりだす。

「遠坂？」

いきなりの凜の行動に不審がりながら士朗は凜に問うが

「少し、黙ってて」

凜は少し強い口調で士朗を黙らせ取り出した宝石をセイバーの口元に放り込んだ。

「ぐう……すう」

セイバーが寝ながら宝石を呑みこむと先程の荒い息に比べて、少し呼吸が整っていた。

「遠坂、今のは？」

「私の魔力を込めた宝石よ。これで少しはセイバも楽になる筈よ。でも一時凌ぎだけだ」

士朗はその様子を見て少し落ち着いた。

それを見て風見達は改めて状況を問いただした。

「凜ちゃん、どういうことだ？」

「風見さん……実は」

凜は風見達に説明した。

今、セイバーは宝具の解放とキャスターに使役された時に使い続けた魔力により、自分の存在を維持するだけの魔力が足りずいつ消滅してもおかしくないと、更に士朗とセイバーの間にはちゃんとしたラインが繋がっておらず士朗の魔力で補給を望めないということも。

風見達は士朗とセイバーを残し一旦居間で話をすることにした。

「でっ、凜ちゃん。セイバーに関して何か手はあるのか」

風見が凜に問う。

「ええ、あるにはあるけど」

「なら、簡単じゃねえか。早速その方法を試そうぜ。そうすりゃセイバーは助かるんだろ」

茂が方法があると知って取りかかる様に言うが、

「でも、城さん。凜ちゃんの言い方からして何か問題でもあるんじゃないですか」

冷静に洋が茂に言い、

「でっ、凜ちゃん。どうなの？」

「ええ、問題ならあるわ。こればかりは衛宮君の今後に関わることだから・・・いわば最終手段ね」

凜の剣幕に問うのは止めて一旦セイバーの話は切り上げて今後のことについて話をすることにした。

「でっ、凜ちゃん。こんな時になんだが、これからのことについて話がしたい。」

「そうね。」

「始めにキャスターのことにに関してだが」

「それなら直接本人に聞いた方が早いわ。ちょっと待ってて」

凜は立ち上がり一旦居間を出ていく。

しばらくすると、凜が居間へと戻ってきた。

何と、葛木と敬介を引き連れて、敬介は桜に支えられるような形で歩いているが

「これは、敬介……もう大丈夫なのか？」

「ええ、風見さん。この通り桜ちゃんの看病のおかげで大分良くなりました」

敬介は笑みを浮かべて桜に視線を向ける。

「そんな、私は何もしていません。」

桜は赤面する。

「フン。お前ももう動けるみたいだな。」

そして茂はその隣にいる葛木に鋭い視線を向ける。

「ちょっと城さん。いくらなんでも」

「そうですね。相手は怪我人ですよ。」

一也と光太郎が葛木に厳しい口調を言う茂を止めようとする。

確かに二人の言うとおり今葛木の顔は立っているのが不思議なほど青かった。

だが茂は止まらない。

「うるせえ。分かっているのか。こいつはな……何も罪のねえ人達をキャスターと共に酷い目にあわせたんだぞ。お前らも分かっているだろう」

「うっ、それは」

一也と光太郎は言葉に詰まる、確かに葛木はキャスターの行動を容認していた。

例え、関与するつもりはなくとも彼女を止められる立場にありながら彼女の行動を放置するどころか手さえ貸していた。茂の言つとおり決して許されることではないだろう。

しかし、葛木は平然とした態度で

「かまわない。彼の言っている事は正しいからな。私は最早戦いに敗れた存在だ。もし罪を償えと言うのであれば償おう。」

何も無いように三人に言う。

「上等だ（努）」

その態度に茂は青筋を立てて葛木に詰め寄ろうとするが

「落ち着いて下さい茂さん。葛木先生は怪我をしているんです。乱暴な事はやめて……」

何と、桜が身を挺して葛木を庇う。

「間桐、いい。彼の私に関する感情は正しいものだからな。私はただそれを受け入れるだけだ」

「ぐう……くそ。桜ちゃんに免じて今回は勘弁してやる。」

さすがの茂も身を挺して葛木を庇う姿を見て、殴りかかるほど短気ではなかった。

「もういいだろう茂。それよりも今は彼から情報を聞くことが先決だ」

風見は頃あいを見て茂に言い、他の面々も居間へと座り本題に入ることにした。

「さて葛木、お前に聞きたいことがある。なぜお前とキャスターはデスシヨッカーと行動を共にしていたんだ？一体誰がお前達に接触してきた」

風見の問いに葛木は静かに語り始めた。

「地獄大使という男だ。」

「地獄大使だと！！」

凜と桜を除き風見達面々に驚きの表情が浮かぶ。

「ちょっと風見さん。そのフザケタ名前の地獄大使って何者？」

凜は訳が分からず風見に問うと

「地獄大使、それは元シヨッカーという組織の大幹部だ」

「大幹部？」

「ああ、その実力は並の怪人より上で。おそらくサーヴァントに匹

敵する力がある。」

「サーヴァントに匹敵する力!!!!・・・風見さんが言うなら間違いないさそうね」

凜は風見の言葉に息を呑んだ。

普通なら人を遙かに超越した存在と匹敵する力を持つと言われても鼻で笑うだろう。

だが、サーヴァントと互角に戦える風見達の厳しい表情を見ては納得するしかなかった。

それに短い付き合いではあるが風見がこんなことで冗談をいう男ではないということはよく知っている。

「しかし、地獄大使が・・・死神博士が甦っているなら奴がいても不思議ではないか」

「風見さん、実は俺も風見さん達に話したいことがあってここに来たんです。キャスターの件でうやむやになりましたが」

「なんだ？ 敬介」

敬介に風見が聞くと

「実は、その死神博士なんですけど、ここに来る前に一文字さんと接触しているんです」

「何だと!!」

「さらにデスシヨッカーの首領アルヴァロンにも逢いました」

「！！」

敬介の言葉に風見達一同は驚く。

そして、敬介の話は続いた。

アルヴァロンと死神博士のことと、そのアジトで行われてた悲惨な出来事を……

「そんな事が……だがこれで聖杯の仕組みについて少し分かった。」

「本当ですか。風見さん」

風見の発言に光太郎は驚いた口調で訊くと

「ああ、もつとも凜ちゃん自身も理解しているんじゃないのか」

「どついつこと風見さん？」

「まず、教会で言峰の話した聖杯が持つに相応しいものを選ぶといつのは恐らく嘘だろう」

「……どついつことですか」

「なに、簡単だ。恐らく聖杯とは最後まで生き残った者が手に出来ると言うことだ。最初からずっと疑問に思っていた。なぜ聖杯が意思を持つに相応しいものを選別するのか。それに元々何でも願いを叶えてくれる願望機。虫のいい話だと疑うのが普通だろう」

風見の言い方に他の面々は疑問そうな表情をする。
代表して凜が風見に聞く。

「でも、風見さんの言い方だと聖杯は存在していないように聞こえるんだけど、どういうこと？」

「その通りだ。聖杯など最初から存在していない。」

「でも風見さん。聖杯が存在していないなら魔術師たちはなんでサーヴァントという強力な存在を引き連れて戦いあっているんですか？」

洋が風見に問うと

「それがこの戦いのミソだな。恐らく聖杯は存在していないが・・・これから作り出されるだろう。」

「作り出される？」

「ああ、敬介。奴等は魂がどうか言っただんな」

「ええ、アルヴァロンと死神は魂が聖杯にどうか・・・あっ！」

ここで敬介も何かに気付く。

「そういうことだ。何でも願いを叶える事が出来ると言うことはそれだけ強力な力が必要になる。それはどこから・・・恐らくサーヴァントの魂・・・サーヴァントの魂が全て注がれた時聖杯は誕生するんだろう。どうだ凛ちゃん？」

「・・・そうね。恐らく風見さんの考えで間違いないと思うわ。」

でも、それだとサーヴァントを受け入れるだけの器が必要になってくる。」

「それが聖杯ということか。なにか心当たりはないか？」

「私は分からないけど……間桐……もしくはアインツベルンなら」

「????その二つの家は聖杯に何か関係あるのか？」

「ええ、間桐、遠坂、アインツベルン、3家によって聖杯は作り出されたの。この二つを当たれば何か分かる筈。桜何か心当たりはない？」

「いえ、まったく。私はお爺さまに戦えと言われただけでしたから」

「そう。」

「しかし、アインツベルン……なあ凜ちゃん。それってイリヤなんたらと何か関係あるのか？」

「えー!どうして茂さんがアインツベルンのマスターの名前を知ってるの」

「あのガキがマスターだったのか。」

「茂、知っているのか」

「はい」

茂は話した。

公園での出来事をそしてイリヤの傍には恐らくアマゾンがいるであろうことを

「そうか」

「あの馬鹿、なんでそんな大事な事を黙っていたの」

風見は何か考えるように頷く。

凜は何か怒ったような様子でブツブツとつぶやき始めた。

「そうか、凜ちゃん。これからの方針を決めたいんだが」

「えっ、ああどうするの」

「一度、間桐とアインツベルンに向かった方がいいと思うんだが」

「・・・そうね。確かに今回の聖杯戦争は今までの戦いとは何か違うわ。明らかに裏がある。一度しっかり調べるのも手ね。明日の朝にでも調べましょう。桜、一度間桐の家に戻って調べて貰ってもいい」

「ええ、私は構いません。姉さん達のお役に立てるのですしたら」

「ありがとう。茂さんと光太郎さんには桜の護衛をお願いしてもいいかしら」

「ああ」

「任しておいて」

茂と光太郎は快く頷いた。

「私と風見さんはアインツベルンの城に行きましょう。」

「俺と凜ちゃんだけで大丈夫か」

「ええ、大丈夫よ。アーチャーもいるし、あんまり大人数で行くと逆に警戒心を持たれるわ。それにアインツベルンには風見さんの仲間もいるでしょう」

「ああ、分かった。それでいこう」

話は纏まり風見は次に再度凜に士朗達のことに関して聞く。

「でっ、凜ちゃん。話を最初に戻すが衛宮君とセイバーの事はどうする」

「しばらくは大丈夫な筈よ。あの宝石で二日は持つはずよ。それまではどうするか。衛宮君に聞いておくわ。」

「分かった。そのことに関しては凜ちゃんに任せる。」

話は終わり、風見達は葛木へと視線を集中する。

「さて、葛木お前は どうする？」

「私か……一つ聞きたい。彼女……キャスターの最後はどうだった」

葛木は虚ろな瞳を風見に向け聞く。

「……キャスターは最後……お前に生きていてくれと叫んでいた。」

「そうか」

葛木は目を閉じ……しばらくして立ち上がる。

「世話になった」

葛木はそのまま部屋を出て行くこととする。

「どこに行くつもりだ？」

葛木が部屋を出る前に風見が呼び止めて問う。

「私か。今からこの町を出ていく。彼女は私の生を望んだのである。う。なら私は例え血を吐いてもどれだけ惨めな思いをしようと思いの分まで生き残る義務がある。もう二度とお前達に会うことはないだろう。さらばだ」

葛木は説明すると部屋を出ていった。

そしてこの日より冬木の街で葛木の姿を二度と見る事はなかった。

65話 ショッカーV3(前書き)

お久しぶりです。

今回は本郷と一文字のターンです。

65話 ショッカーV3

暗い闇

燃え盛る紅蓮の炎

欠落した自分

……さあ、全ての魔術師に復讐を始めよう。

全ては……あいつの為に

夜の新都街

排気音を鳴らし二つのバイクは夜の街を疾走している。

「お前と肩を並べてバイクを走らせるのも久しぶりだな。」

「そうだな。一文字」

「しかし、久しぶりだったのに相変わらずそのしかめっ面は治っていないみたいで安心したぜ。本郷」

「余計なお世話だ」

バイクを走らせながら無駄口を叩く本郷と一文字だが、二人の表情は笑顔であった。

本来、本郷や一文字達、仮面ライダーは世界各地を飛び回っており、会うこと事態滅多にないのだ。

仮面ライダー達が集結するのは決まって戦いが起きた時だけだ。

だからこそ二人は滅多に会えない親友との再会に笑みを浮かべるのは仕方のないことだろう。

例え、これから向かう場所が戦場だとしても……

しばらく、バイクを走らせていた二人だったが、ある廃工場に辿り着きバイクを止める。

「ここが、そうだな」

廃工場を見つめ一文字が本郷に聞く。

「ああ。ここから発信不明な電波が依然送られている。」

「じりゃ、罠だな。」

「ここに来る前から分かっていた筈だ。行くぞ一文字」

「ヘイヘイ、分かったよ。」

本郷と一文字は昨日合流を果たした。

それと同時に、本郷と一文字に念話が送られてきた。

「こちらは冬木の街の人間を百人ほど誘拐している。明日、お前達に分かるよう電波を流す。助けたければ、二人でこちらが指定する

場所に来い。もちろん、他の仲間を引き連れてきたらどうなるか分かってるな。その時は、即座に処刑を執行する。まあ、断れまい。お前達は正義の味方だからな。』

そして、次の日の夜、念話を送って来た人物の言つとおりには本郷と一文字に向けて電波が送られてきたということだ。

二人は廃工場に入ると工場内に埃が舞う。長い間使われていなかったのだろう。

「ゴホゴホ、煙が凄いな。」

「ああ、長い間使われていなかったんだろっ」

本郷は冷静に工場状況を分析する。

「成程な。それなら、人通りも少ないし、待ち合わせの場所には持つて来いだな。おい、いるんだろ。約束通り来てやったぞ。いい加減姿を現したらどうだ。」

一文字が工場内で叫ぶと、

「キイー、キイー」

全身黒タイツの戦闘員がワラワラト姿を現す。

「へっ、おいでなすったか。」

「やはり畏だったか。……だが好都合だ。一文字奴らから一人捉えて情報を聞き出すぞ。」

「ああ、分かってるよ。」

「行くぞ。一文字」

「おお、本郷」

襲い来る戦闘員達を本郷と一文字は迎え討つ。

「おらおら、得意のナノマシンはどうした。」

一文字は得意の空手と柔道で余裕な態度で戦闘員達を一網打尽に。

「一文字油断するな。」

余裕な感じで戦う一文字を注意しつつ、相手の急所を的確に狙い、拳を叩きこんでいく。

そして、ついに戦闘員は一人という形となり、本郷と一文字は二人係で戦闘員の首を絞めて情報を吐きださせようとする。

「言え、貴様たちは何を企んでいる。」

「苦しい……言う……だから力を緩めてくれ」

その言葉を聞き、本郷と一文字は首を絞める力を緩めるが……その時、

ザシユ「ぐうああああ」

ナイフが飛んできて戦闘員の背にナイフが突きつけられる。

「所詮は前座にもならなかったか。」

工業内の奥から男の声が聞こえてくる。

「お前か。俺達を呼んだのは。思ったとおり下種な声をしているぜ。」

「俺達は約束通りここへ来た。いい加減姿を見せたらどうだ。」

「フフフ、そうだな。」

工業内の奥の方から声の主が本郷達の前に姿を現す。

現した男の姿は黒い服を着て、なぜか顔には包帯をグルグル巻きしていて正体が掴めなかった。

本郷はいきなり本題に入る。

「一つ聞きたい。人質には手を出していないだろうな。」

「ああ、そのことか。彼らなら既に生贄になって貰った。血は抜き取られミイラになっているだろうな。」

顔に包帯を巻いた男は何でもないように本郷の問いに答える。

「テメエ、約束を破りやがったな。よくも罪のない人達を。」

「罪のない……フフ……罪のないか。」

一文字の言葉に何か思う所があったのか男はその場で軽く笑い始め

る。

「何が可笑的い」

男の笑いに怒りを覚える一文字。

「いや、中々面白い事を言ってくれたからな。罪のないか。人間は罪だらけな生き物だよ。一文字隼人」

「何だと」

「お前も感じている筈だ。人は他人の不幸を見て見ぬ振りをする。人が死のうが、誰が死のうが、関係無い。自分さえ無事なら関係無いからな。」

「それがどうした。確かにお前の言うことは一理あるがな。人を殺す理由にはならない。」

「落ち着け。一文字」

「本郷」

怒りを感じ、今にも爆発しそうな一文字を止める本郷。

「おや、お前は冷静だな。本郷猛、それともただ臆病なだけか」

男の挑発ともとれる言葉を聞いても、本郷は動じずただ冷たい視線を向けたまま男に問う。

「お前に一つ問う。人質になっている人達は今頃血を抜きとられミ

イラになっているとお前は言った。それは怪人を甦らせるためか。」

「ぬ？」

本郷の言葉に顔に包帯を巻いた男は初めて動揺する。

「どついうことだ。本郷」

本郷の言葉の意味が分からず一文字が問う。

「なに、簡単だ。死神が復活しているなら。恐らく他の大幹部も甦っていると思っただが。奴の反応を見る限り辺りのようだ。」

「というと、まさかブラックの奴が」

「おそらくな。血を必要とする大幹部は恐らくブラック。他の大幹部も甦っていると考えた方がいいだろう。そうだろう」

本郷が男を強く睨みつけると、男は笑みを止め、

「成程な。アイツが危険視するのも頷ける。貴様たちは俺の性能テストも兼ねてここで処分する。変身するがいい。」

男は片腕を上げながら二人に言う。

「一文字。ここは奴の言うとおり変身するぞ。」

「そうだな。こいつは本気でいかないとまずいかもな。」

男から不思議な黒いオーラを感じ取り二人は最大限に警戒する。

そんな二人の様子に感心したように男は口を開く。

「ほお、成程。さすがだ。戦わずして俺の脅威を感じ取ったか。さすが伝説の一号、二号と呼ばれるだけはある。」

「減らず口もそこまでだ。行くぞ隼人」

「おお、本郷」

「ライダー」変・身・・・トオ」「

本郷と一文字は同時に変身し姿を変える。

仮面ライダー1号、2号へと。

「悪いが遠慮せず、一気に行かせて貰う。」

「覚悟するんだな。」

「フッフ、良いだろう。俺も貴様たちを相手にするのに相応しい姿になるうではないか。」

男は1号と2号が変身したのを見て、男も何かポーズを取り始める。

そのポーズは1号、2号にとって馴染みが深いものであった。

「まさか!!!」

「ウソだろ!!!」

「貴様たちに見せてやる。デスショットの科学力で作り出された

力と技を……変身V3」

男は姿を変える仮面ライダーV3の姿へと。
ダブルライダーの動揺を気にせず男は名乗る。

「俺の名はショッカーV3。貴様たち仮面ライダーを倒すために作り上げられた。最新の改造人間だ。行くぞ、ダブルライダー」さあ、これから始まる。俺の復讐劇が仮面ライダーをそして魔術師たちを殺す。全ては俺の復讐とアイツの為に」

ショッカーV3が殺気を感じ動揺を解き、ダブルライダーは身構える。

ついに出現したショッカーV3、その強さは……ダブルライダーはショッカーV3と戦い勝利する事が出来るのだろうか。

次回に続く。

65話 ショッカーV3(後書き)

次回はダブルライダー対ショッカーV3です。

66話 驚異の力!! ショッカーV3

「さて、始めようか。戦いを」

ショッカーV3は体を中腰まで低くし、100メートル走で使うスタートダッシュをする動作を行っている。

「……来るぞ」

「ああ」

1号、2号は動きを見て、いつでも対処できるよう油断なく戦闘態勢を取る。しかし……

「……行くぞ」

ショッカーV3の一言により、赤い閃光が走った。

「!!早い」

「このスピードは!!!!」

想像以上のスピードでショッカーV3はダブルライダーに迫り拳を叩きつける。

「グフ」「ゴホ」

バキ、ボキと廃工場一帯に鈍い音が響き渡る。

1号、2号はショッカーV3の想像以上のスピードと余りの拳の重

さに吹き飛ばされる。

「どうした。まだ終わりじゃないぞ」

シヨッカーV3は、吹き飛ばした1号、二号に更なる追撃を与えるべく突進する。

「クッ」

1号、2号はすぐに立ち上がり、その場をジャンプして追撃を避けるが……

「遅い……遅いぞ……それが貴様たちの全力のスピードか。」

シヨッカーV3もそれを追い、物凄いスピードでジャンプして1号、二号を超えて、廃工場の上空でダブルライダーを叩き伏せる。

「グウ」「ガハ」

1号、2号は殴られ勢いよく地面に落下する。

シヨッカーV3は吹き飛ばしたダブルライダーを見ながら「クフフ」と笑みをながら着地する。

「クフフフ、どうした。戦いはまだ始まったばかりだぞ。そんな様では俺の十分な性能テストが行えないではないか。それとも、俺が強すぎるのか……どちらにしても伝説の1号、2号といつても大したことはないな。所詮は型遅れの旧型か。ハハハハハ」

シヨッカーV3は自身の能力に酔いながら、自分が思っていたより歯ごたえのないダブルライダーに勝利を確信し罵倒しながら嘲笑い

を続ける。

ガラガラ「ん……なに!!」

地面に埋もれている1号・2号の方からガラガラという音が聴こえ視線を向けてシヨッカーV3は驚く。

「手強いな」

「だが倒せない相手じゃないぜ」

何事もなかった様に1号・2号が体についた埃を叩きながら起き上がっている。

「馬鹿な!!……いや成程な。1つ聞きたい。なぜ俺の猛攻を受けてそんなに余裕でいられる。俺の拳は確かに直撃していたが」

動揺していたがシヨッカーV3はすぐに冷静になりダブルライダーに聞く。

「確かにな。お前は強いぜ。パワーやスピードは俺たちより格段に上だしな。だがな」

「お前は性能に頼り過ぎている。まして、風見のようなプライドや誇りのない貴様は断じて本物のV3ではない。そんなお前の拳は俺達には効かない。偽物のお前に負ける気はしない」

2号・1号は言う。お前はV3ではないとだからこそ俺達は負けな
いと……

「面白い。ならば、貴様らの言葉通り俺を倒してみろ」

「行くぞライダーパーアアンチ!!!」

2号はシヨツカーV3に突進し渾身の力を込めたライダーパンチを放つ。

「この程度俺の特殊強化筋肉で弾いてやる。回れダブルタイフーン!!!」

シヨツカーV3はダブルタイフーンを回転させ防御力を高める。

2号の拳はシヨツカーV3の体に直撃する。

「ぐっ、キン」

だが、シヨツカーV3の防御力に攻撃を仕掛けた2号が吹き飛ばされる。

「フン、他愛ないな。この程度……何!? 馬鹿な」

完全に防御した筈のシヨツカーV3は膝をつく。

「まだまだ、行くぞ。トオー、ライダーアークイーク!!!」

絶妙なタイミングで1号がライダーキックを仕掛ける。

「ぐっ、クソ」

シヨツカーV3は両腕をクロスさせてライダーキックを防ぐが、ライダーキックの威力と切れ味により吹き飛ばされる。

「ぐうー舐めるな。」

シヨツカーV3は空中で回転し着地すると同時に1号、2号に突進する。

「V3パアアンチ!!!」

シヨツカーV3はV3パンチを1号に放つが今度は簡単に避けられる。

「なんだと!!!」

「無駄だ。そんな無駄な動きの多い攻撃など俺には通用せん。行くぞ、これが本当のライダーパンチだ。」

ベルトを回転し力を腕に集中させシヨツカーV3の腹に拳を叩きこむ。

バキ「ゴフウ」

1号のライダーパンチはシヨツカーV3の急所に直撃し大きく吹き飛ばす。

シヨツカーV3は痛む腹を押さえながらよろよろと起き上がる。

シヨツカーV3は困惑している。二対一という状況だが自分の性能を大きく下回る相手になぜここまで押されているのかと……

理由は簡単だった。

シヨツカーV3の性能は1号・2号を大きく上回っていると短いやり取りで1号・2号は理解している。スピードは軽く300kはでていた。

1号のスピードを50キロ以上は上回っておりパンチ力も1号・2号・・・オリジナルのV3の性能を上回っている。

それでも、1号。2号は負ける気はしなかった。

それは、戦闘経験の差である。

1号・2号はシヨツカーからクライシスまで数多の組織と戦い続けてきた。

そんなダブルライダーとシヨツカーV3には戦闘の組み立て、ライダーエネルギーの使い方と天と地ほどの差がある。

いくら性能がダブルライダーを遥かに上でも、その程度で勝てるほど1号・2号は甘くなかった。

「フフフフフ」

1号、2号に押されていたシヨツカーV3がいきなり狂氣的に笑い始める。

「何が可笑しい」

「何、どうやら俺の認識が甘かったみたいだ。1号・2号お前達は俺の予想を大きく上回る力を持っているらしい。」

困惑していたシヨツカーV3だったが、自分がダブルライダーに圧倒されている事実を認める。

「それがどうした。まさか今から手加減しろとも言つつもりか。」

1号は厳しい口調で睨むつける。

「まさか。俺はお前達の敵だ。遠慮せず攻めて来るがいい」

シヨツカーV3は押されているにも関わらず余裕な態度を崩さず1号、2号を挑発する。

「何だ。こいつの余裕は」

シヨツカーV3の余裕な態度に1号は何か底知れぬ不安に駆られる。

「上等だ。覚悟しやがれ」

「待て。一文字つかつに飛び込むな」

不安に駆られ1号は2号を止める。

「どうした本郷。今が奴を倒すチャンスじゃねえか。」

「ムウ」

確かにシヨツカーV3は少なからず1号、2号の攻撃でダメージを負っている。

攻撃するならば今が絶好のチャンスだろう。

「ほら、行くぞ」

「……ああ」

1号は不安に駆られながら2号と共にショッカーV3に突進する。

「さあ、来い。学習させて貰う。」

1号の不安は的を得ていた。

この攻撃がショッカーV3に力を与えることになるとは知る由もなかった。

1号、2号の絶妙なコンビネーションでショッカーV3を攻撃する。

「ライダーチョップ!!!」

強力な手刀打ちを1号はショッカーV3に仕掛ける。

「グウー」

ショッカーV3は腕をクロスさせて常時防御の姿勢を取り攻撃を仕掛けようとしない。

「ライダーキーク!!!」

「ガハ!!!」

2号の強力なライダーキックが直撃し吹き飛ばすが、よろよると立ち上がりまた防御の体制に入る。

1号、2号は不気味に思いながら更なる追撃を仕掛けるがショッカーV3は防御したまま動かない。

フフフと攻撃を受けながら不気味な笑い声を上げるだけだ。

しばらく攻撃を受け続けたシヨツカーV3はジャンプしてダブルライダーの攻撃を回避し距離を取った。

「フフフ・・・ハハハハハ。礼を言おう。仮面ライダー」

「なに！！」

「どういうことだ」

シヨツカーV3のいきなりの発言に困惑する1号、2号。

「なに、お前達のおかげで俺は強くなれた。十分学習させて貰った。さて、今度はこちらから仕掛けさせて貰う」

シヨツカーV3は1号に突進する。

「V3 パアアンチ」

1号はシヨツカーV3のパンチを先程と同様回避しようとしたが

バキ「ガハ」

回避出来なかった。

シヨツカーV3のパンチを受け1号は大きく吹き飛ばす。

「本郷！！くそ」

2号がシヨツカーV3にパンチをするが今度は簡単に回避される。

「遅いな。行くぞ。V3電熱チヨップ！！」

右手にエネルギーを集中させ放つ。
強力なチョップに2号は体を切り裂かれボディーから鮮血が宙を舞う。

「グハーー」

シヨッカーV3は更なる追撃で拳を振り上げ止めを刺そうとする。

「一文字！！」

拳が振り下ろされる瞬間1号が2号を掴み回避。

1号は2号を抱えシヨッカーV3から距離を取る。

「大丈夫か。一文字」

1号は体を切り裂かれた2号を心配する。

「これぐらい屁でもねえよ。」

2号は痛みを感じさせない足取りで立ち上がる。

しかし、立ち上がった瞬間足もとがよろつく。

やはりダメージは大きいようだ。

「まずい。このままだと・・・やられる」

1号は思考する。

シヨッカーV3の動きは先程と段違いに良くなっている。

無駄な動きが少なくなっている。

「奴は学習したといった。まさか俺達の動きをこの短時間で読んだというのか。そうだとしたら恐ろしい敵だ」

もし、ここで逃せば奴は今日以上に強くなる。

いまなら奴を倒せる。

それに、風見達や関係のない人達まで被害が及ぶ。

1号は刺し違えてでも倒す覚悟を固めるが、

「うっ。成程・・・どうやら俺もかなり負傷しているみたいだ。これ以上戦えば今後の予定に支障がくるな。フフ、喜べ1号、2号、今日はこれで終わりだ。次に会う時は必ず殺す。それまで首を洗って待っているんだな。」

「待て、逃げるつもりか。」

「ああ、そうさせて貰う。もっとも貴様たちにとっては喜ばしい事ではないのか。クフフフ。さらばだ」

シヨツカーV3は高笑いしながら闇に溶け込むみたいに廃工場から消えた。

「く・・・くそ」

2号は悔しそうに呻く。

1号には2号の気持ち的理解できた。

このまま戦えば恐らく敗北、よくて相討ちだった。

「風見・・・気をつけるよ」

1号は後輩の身を案じ2号と共に廃工場を後にする。

ここからの起る、激戦を予感しながら・・・

67話 間桐の地下室

早朝 朝 7時

二月という冬空にようやく朝日が差し込んだ時間帯に茂、光太郎、桜は目的の場所古い洋館まで来ていた。

間桐邸に。

二百年前にこの町に移り住んできた。古い魔術師の家系の工房。凜の家系、遠坂により協力者としてこの土地を譲り受けたもの。お互い決して交友を持たなかった異分子たる同期。

「へえ、ここが間桐の家か。中々立派な作りじゃねえか。」

「そうですね」

茂と光太郎は目の前の洋館を見て素直な感想を言う。間桐邸を見ていた光太郎だったが、ある事に気付く。

「桜ちゃん・・・大丈夫。調子が悪いなら無理しなくてもいいんだよ。ここは俺と城さんで調べておくから」

光太郎が心配そうに桜に言う。

「大丈夫です。光太郎さん。心配掛けてすいません」

「それならいいけど、具合が悪いなら遠慮なく俺達に言ってね。」

「はい。ありあとございます」

桜は大丈夫だと笑顔を浮かべ光太郎に言うが、少し顔は青く若干怯えた様子でもあった。

茂と光太郎は凜に間桐と桜の関係についてある程度聞いている。

実際、彼女がこの家でどのような仕打ちを受けてきたかは分からないが桜の怯えた表情を見る限りそれは酷く辛いことである事は想像できた。

「すまないな。桜ちゃん。君に嫌な手伝いをさせて。」

茂もすまなさそうに桜に言うが、桜は笑顔で

「いいんですよ。私はずっとこの間桐の家で苦しみ続けてきました。もう永遠にこの苦しみから抜け出せないとも思っていました。それを救ってくれたのが先輩や姉さん。それに光太郎さんや茂さんです。だから少しでも姉さん達のお役に立ちたいんです。」

「そうか、ならよろしく頼む」

桜の気持ちを聞いて、茂と光太郎は深くは言わず案内を頼むことにした。

桜を先頭に間桐の家に入る三人。

入った瞬間、茂と光太郎の表情が一変した。

普通の表情から苦虫を踏みつぶした表情になる。

「なんだ……この家は!!」

「……ここが本当に人が住む場所なのか」

二人に在るのは嫌悪感だけだ。

普通の人間ならば気付かなかっただろう。

だが、茂も光太郎も普通じゃない改造人間だ。変身しなくとも人の何倍は五感が優れている。

だからこそ理解してしまった。

この家の異質さに・・・人の何倍も優れた彼らの嗅覚はある匂いを捉えていた。

それは血の匂いと生臭い虫の匂いだ。

「茂さん、光太郎さん、大丈夫ですか？」

嫌悪感を露わにする二人を心配そうに桜が声を駆ける。

「ああ、すまない。桜ちゃん。気にしないでくれ、案内を頼むよ。」

茂は桜にこれ以上心配掛けまいと平静を保つが、内心穏やかではなかった。

玄関でこれである一体、この家の中にはどのような秘密が隠されているのだろうかと二人は不安を拭えない。

気を取り直し、まず三人は間桐の魔導書が置いてある部屋へと足を延ばす。

茂と光太郎は部屋に入り書物へと手を伸ばし内容を確認するが、

「なんだ、これ？」

「??????」

二人にはまったく理解が出来なかった。

もつとも今は詳しく一つ一つ調べていても仕方ないので、三人は聖杯戦争に関係あるであろう資料を1・2時間さがすが聖杯戦争の核心に迫るだろう情報は得られなかった。

ここでの搜索は断念し他の部屋を探すことにする。

次に桜に案内され向かったのは二階だ。

そして、二階のある場所に辿り着き桜は動きを止める。

「桜ちゃん、どうしたんだ」

急に動きを止めた桜にどうしたのかと思い光太郎が声をかける。

その声を聞いて桜は悲しそうな表情をしながら光太郎と茂に視線を向ける。

「今から、ある場所に茂さんと光太郎さんを案内します。ですけどここで見た事は先輩には黙っていて下さい。」

桜は真剣な表情で二人に言う。

「ああ」

茂・光太郎には理解できた。

桜の真剣な表情からしてこれから向かう場所は彼女にとって決して他人に知られたくないのだらうとそれでも彼女は勇気を出して自分を案内してくれようとしているので二人は何も言わず静かに頷く。

桜も意を決した表情をし案内をし直した。

桜に案内され二階のとある場所に隠し通路があった。

「これは、隠し通路か」

「はい、この階段を下りれば地下室があります。間桐の魔術師は魔術の鍛錬をここで行います。」

説明し、桜は地下へと続く階段を降りる。

二人も桜に続くように階段を降りるにつれ、この家に来た時からの違和感がだんだん強くなっていく。

地下室へ降りてみると周囲は緑色の闇だった。

緑色の壁があり、そこには無数の穴が開いている。

恐らく無数に開いた穴は死者を埋葬する為の物だろう。

石の棺に納められた遺体は腐り、風化し、穴はがらんとそのまま、次なる亡骸を求めている。

その在り方は地上の埋葬と酷似している。

そして、茂と光太郎は間桐邸についてからの違和感も理解した。

地下室の地面には無数の蟲が腐った水気と死臭と共に有象無象轟いている。

恐らく、ここでは遺体を分解する役割は土ではなく、無数に轟く蟲たちに与えられているのだろう。

「これが・・・こんなのが魔術の修練所だと・・・」

茂は呟いて、目眩がする。

最早、それは嫌悪や悪寒からではない。

それは、ただ純粹な怒りだった。

茂に魔術の知識なんてものはこれっぽちも無い。

だがこんな目眩を起こすような場所でのような魔術の鍛錬を行うというのだ。

想像が出来ない。

桜が自分達に土朗に言わないでくれと言ったのは恐らくだがここで鍛錬とは言わない拷問に近い行為を受け続けてきた事を土朗に知られたくないのだと理解した。

光太郎も茂同様、目の前の状況を見て明確な怒りだけが浮き出していた。

そんな中、桜が二人に語り始める。

「私はここでお爺さまに魔術の鍛錬と称された拷問を受け続けてきました。間桐の魔術を伝承するために蟲に犯されました。・・・

・私は・・・」

桜は語りながら次第に涙を流し始める。

そんな桜を光太郎はそつと抱き締めた。

パス「もういいんだ。桜ちゃん。君を縛る、間桐ゾウケンはもういない。君がここで受けた仕打ちを忘れるとは言わない。でも君はもう自由なんだ。これからは君がしたいことをして前を向いて生きていけばいいんだよ。」

「こ・・・光太郎さん」

桜も涙を流し光太郎に抱きつく。

しばらくして、桜は落ち着き。

茂と光太郎は改めて地下室を見渡した。

だがやはり、重要になる手がかりは何もない。

三人は間桐邸ではもう何も得られないと断念する。

地下室を離れる前、茂が

「胸糞悪い場所だな。光太郎ここを潰していくぞ」

茂の言葉に光太郎は力強く頷く。

このような場所は存在してはいけない。

茂と光太郎は地下室を後にする前にこの部屋の処分をすることにし変身しようとしたその時・・・！！

ビューンと風を切るような音が桜に迫っているのに茂と光太郎は気付く。

茂は慌て桜に詰め寄り桜に飛んでくる何かを掴んだ。

「茂さん。どうしたんですか？」

いきなり詰め寄って来た茂に戸惑う桜であったが

茂と光太郎にはその疑問を答える余裕などなかった。

「ぐう、これはナイフか！！」

桜に向かい飛んできたのは短剣であった。

誰かは分からないが明らかに桜を殺すつもりだったのだろう。

「光太郎。桜ちゃんを頼む」

茂に言われるまま光太郎は桜を守る様に前に立つ。

桜も茂の掴んだ短剣と二人の緊迫した様子に事態を理解し邪魔にならないよう光太郎の後ろに控えた。

「敵はどこにいる」

茂は鋭い視線で辺りを見渡すが誰もいない。
元より気配がない。

改造人間である茂は少しの動き空気の揺れですら感知するのだがそれ一切感じられない。

相手は余程穩術に優れているのだろう。

何時仕掛けてくるか分からない。

茂は何時でも対処できるよう全身に力を入れている。

しかし、この緊迫した空気も一人の声により終わりを告げた。

「やれやれ、まさか愚か者の孫が、仮面ライダー達と共に再び間桐に戻ってくるとわ思わなんだ。」

「この声は!?!」

「まさか!?!」

聞き覚えのある声、特に桜にとってはもっとも忘れられない声の一つである。

「お爺さま!?!」

「最後に会ったのは最近じゃが随分と久しい気がするの」

「お前は死んだ筈じゃ!?!」

死んだ筈の間桐ゾウケンが悠然と階段を下りてきている。

「さて、客人よ。間桐になんのような」

死んだ筈の間桐ゾウケンが桜達の前に現れた。
深まる謎・・・彼の登場は何を意味するのか・・・
次回に続く。

68話 闇に轟くもの(前書き)

いや、説明文にするのはやっぱり苦手だな。

今回文章がかなり変になっていると思います。

追々修正していこうと思いますのでご了承ください

68話 闇に轟くもの

間桐邸 地下室

「さて、客人よ。間桐になんのようなかな」

死んだ筈の間桐ゾウケンが悠然と茂達を見下ろしている。

「なぜ、お前は生きている。俺の攻撃で死んだ筈だ」

茂は信じられない物を見るような目で老人・間桐ゾウケンを見据える。

それは、無理もなかった。

間桐ゾウケンは茂自身が超電ドリルキックで仕留めたからだ。蹴りを入れた時の手応えは覚えているなのに何故。

茂には目の前の存在が信じられなかった。

それは光太郎、桜も同じだ。

二人とも間桐ゾウケンが消滅した現場にいたので目の前の存在が信じられない。

「やれやれ、まるで幽霊でも見るような顔じゃの。まあ無理はないか。わし自信も死を覚悟したからの」

ゾウケンはコツコツと階段を降りてくる。

「……そんな……お爺さまが……い……いやあ」

「桜ちゃん、しっかり・・・俺が絶対に守るから落ち着いて」

桜は間桐ゾウケンの登場により軽い恐慌状態に入っている。

そんな桜を落ち着かせようと光太郎はゾウケンを見据えたまま優しく声をかける。

「す・・・すみません。」

「いいんだよ。絶対に俺の傍を離れないで」

「分かりました」

光太郎の声に桜は少し落ち着きを取り戻したのに安心し辺りを警戒する。

恐らく相手は間桐ゾウケン一人ではないだろう。

あの短剣を投げたのは他にいる筈と思い光太郎はゾウケンを見据えたまま最大限で警戒した。

「さて、妖怪爺もう一度聞くぜ。なんで手前が生きているんだ。」

茂は鋭い視線をゾウケンに向け再度聞く。

その問いに何を思ったのか目の前の老魔術師はクックククと静かに笑い始めた。

「何が可笑的い。」

「ほっほ、何お主が言った通りじゃ。ワシは最早人間を捨てておる。今ワシに在るのは蟲で形成されてこの体のみよ。ならば体を形成する肉体を失えば補えばいいだけの話じゃ」

「……どういうことだ」

ゾウケン は 茂 の 問 い に 答 え る が 茂 に は 目 の 前 の 存 在 が 何 を 言 っ て い る の か 理 解 で き な っ た 。

い や 理 解 し た く な っ た だ け な の か も し れ な い 。

「……ほう？ここまで説明しても分からんか。簡単な話じゃ。新しい肉体を得るために女性の肉を喰らうただけだ」

「テムエ……自分が生きる為だけに罪のない人を襲ったのか。」

茂 は ゾウケン に 鋭 い 視 線 を 向 け る 。

最 早 ゾウケン に 向 け る 眼 差 し は 殺 気 と 怒 り だ け だ 。

茂 の 殺 気 を 受 け て も ゾウケン は 阿 々 と 笑 う 。

「ならば、再びわしを殺すか。好きにするがいい。再び肉体を補えばいいだけの話じゃ」

「くう……」

茂 は ゾウケン に 手 を 出 す こ と が 出 来 な い 。

も し こ こ で ゾウケン を 倒 せ ば ま た 罪 の な い 人 が 犠 牲 に 成 る 。

自 分 が 軽 率 な 行 動 を し た こ と に よ り 犠 牲 に な っ た 人 を 思 い 、 ゾウケン の 怒 り は 当 然 、 自 分 自 身 が 許 せ な っ た 。

「ほお、どうやらこの爺を殺すつもりはないようじゃの。さて客人よ。もう一度聞く。何用でこのマキリの地へ訪ねてきた」

ゾウケン は 茂 達 に 間 桐 邸 に 訪 ね て き た 理 由 を 再 び 問 う 。

「お……お爺さま。私達は聖杯戦争の事を知りたくて間桐の家を調べに来ました。」

ゾウケンの問いに答えたのは意外な事に桜であった。

桜はゾウケンの恐怖に耐えて間桐を訪ねてきた理由を説明し始める。

「ほー、聖杯戦争の事についての。今さらなぜそのような事を知りたがる」

「はい……実は……」

桜は間桐ゾウケンに説明した。

聖杯戦争に關与しているデスシヨッカーの存在。

明らかに今までの聖杯戦争とは違い魔術師だけでなく別の意思が關与している事をそれで聖杯戦争の真実を知りたいということに。

「成程の。しかし桜よ。仮にわしが聖杯戦争に関する重要な秘密を知っているとしよう……だが、マキリを裏切ったお前に説明する義理がわしにあるのか」

「そ……それは」

確かにいくら桜がゾウケンの手により酷い目にあつたといえ、ゾウケンから見れば桜は間桐を裏切つたのは事実だ。

ゾウケンの言い分は客觀的に見れば正しいとも言えるだろう。

「じゃが、そちらの仮面ライダー達がワシの工房に手を出さんとゆうなら少しは教えてやらんでもない。これ以上荒らされては堪らんからの」

ゾウケン
は地下の工房に手を出さんなら少しは説明してもいいと譲
歩する。

「分かった。お前の条件をのむ」

「光太郎」

「城さん、ここは少しでも情報が欲しい。ここは素直に相手の言う
通りにしましょう」

「わかったぜ。おい爺。ならこんな胸糞悪い場所じゃない所で話を
しようぜ。」

「いいじやろう。上のロビーで話をするか」

ゾウケン
は地下室を後にし階段を上って行く。

それを見届け茂は桜と光太郎のいる方へと歩いていき

「油断するなよ、光太郎。奴以外にも誰がいる。」

「分かっていますよ。しかし全然気配を感じません。油断できませ
んね。」

「ああ、桜ちゃん。絶対に俺達の傍を離れるなよ」

「はい。」

「じゃあ急ごうか。いつまでもここにじっとしていたらあいつが何
するか分かったもんじゃないからな」

茂達も間桐の地下室を後にした。

間桐邸 ロビー

ロビーに行くと、すでにゾウケンがソファに座りお茶を飲んでいました。

まるでこちらを警戒していないような仕草であるがこの老人の前で油断してはいけないということは三人は重々理解している。

油断なく鋭い視線を向けたまま三人はゾウケンの前のソファに座る。

「さてお主たちは聖杯戦争について知りたいのだろう。どこまで聖杯戦争について知っておる？」

ゾウケンは茂達に問う。

その問いに茂が答える。

「さあな、推測だが端から聖杯なんか存在していない。だから聖杯戦争はサーヴァントの魂を糧にして聖杯を作る魔術儀式じゃないのかと推測している。」

風見が昨晚予想した事をゾウケンに話す。

それを聞き、ゾウケンは感心したように口を開いた。

「ほお、そこまで理解しておるのか。ならば話が早い。聖杯戦争とは元々第三魔法の再現の為の儀式だ」

「第三魔法？」

いきなり第三魔法といわれ茂と光太郎は困惑する。

桜だけは一応魔術の知識を学んでいたのか少し驚いた表情になる。

「そう、第三魔法、魂の物質化、天の杯である聖杯を再現するため
に用いられた。魔術儀式じゃ。もっともこれ以上話せば専門的な話
になるからの。聖杯を作り出すものだど認知しておればよい。ここ
まではよいな」

間桐ゾウケンは一と言葉を切り、茂達が理解しているか確認する。
茂達は頷く。それを確認して間桐ゾウケンは話を続けた。

「今回はイレギュラーだが、元々聖杯戦争は六十年という期間を置
いて行われている。」

「なぜ六十年という時間が必要なんだ？」

光太郎はゾウケンに質問する。

「冬木の地は霊脈に適した場所での。その霊脈が枯渇しないように
儀式に必要な魔力を溜めるのに六十年かかるとういう訳じゃ。そし
て七騎のサーヴァントと七人のマスターが揃いしとき聖杯戦争が行
われるという訳じゃ。」

「成程な。聖杯戦争については分かったが肝心のその聖杯はどこに
あるんだ。」

「フフ、ワシから話せるのはこれ以上なにも無い。もし、聖杯につ
いて知りたいならインツベルンを尋ねるが好かるう。」

「アインツベルン……あのガキか」

アインツベルンには今風見と凜が向かっている。

なら、後は風見に任せる事にし目の前の老人からはこれ以上情報を引き出せないならこんな胸糞悪い場所に長居するつもりはない。

「帰るぞ、光太郎、桜ちゃん」

「城さん、聖杯について聞かなくてもいいんですか」

「ああ、これ以上聞いてもこの爺は話さないだろうからな。だってこんな胸糞悪い場所に長居する必要はねえよ。あとは風見さん達に任せればいい」

「分かりました。そうですね俺もこれ以上ここには居たくありません」
「それこいつは桜ちゃんを……」

目の前の老人はどのような理由にしろ桜を殺そうとした。

冷静にゾウケンの説明を聞いていたように見えた光太郎だったが内心は怒りで一杯だった。

「じゃあな爺。ああ……一つだけ聞いておきたいことがある。なぜお前は俺達に聖杯戦争の事について教えた。善意じゃないだろう。何を企んでいる。」

茂は部屋を出る前にドアを手にする前に振り返りゾウケンに視線を向ける。

「な〜に、マキリを裏切ったとはいえ可愛い孫の頼みじゃ。少しは教えても構わんだろう」

阿々と笑うゾウケンであるが、茂には目の前の老人の言葉は全て嘘だと分かっている。

恐らくゾウケンには自分達に情報を教えれば自分にメリットがあるから教えたに過ぎないとそしてゾウケンとは近いうちに再び相見えることになる事は予想できた。

だが今は戦う時ではない。

桜もいる。そして何より桜に短剣を投げ付けた人物も姿を現していない。

もし次に戦う時は命を賭けてでも老人を止めると覚悟し部屋を後にした。

S I D E 間桐ゾウケン

茂達が去った後、ゾウケンは一人ソファに佇んでいた。

「魔術師殿、宜しかったのであのまま帰らせて」

道化のような笑みを浮かべた面を被った体中黒い男がどこからとなく姿を現した。

「構わん。奴等はせいぜい聖杯戦争を掻き乱してくれればいい。」

「・・・そうか。確かに奴らの戦闘力は素晴らしい。魔術師殿はデスシヨッカーと奴らを戦わせ疲弊させるつもりか」

「まあ・・・しかしわずか二日で饒舌になっただではないかアサシ

ン。その様では己が望みを思い出したか？」

黒い男は、二日前神敬介に敗れたアサシンを触媒に召喚した真アサシンであった。

アサシンの真名は「ハサン・サツバーハ」。山の翁アサシンという語源になった人物で、ただハサン・サツバーハとは特定の人物ではなく、その名を継いだ歴代の山の王であり、その数は19人いる。本来はその19人の内の誰かからアサシンは選ばれる。キヤスターの召喚した佐々木小次郎は本来ありえないアサシンであった。

「無論、私は同じ望みを持つ召喚者のみ呼び出される。魔術師殿の不死への渴望がこの身を招いたのだ。故に私の望みは永遠のみ。だが………」

黒い影が揺らぐ。

表情などない髑髏の面が、ゾウケンを凝視する。

「いささか疑問が生じた。蟲で形成された肉体をもつ魔術師殿は既に不死。その年月は五百を超えよう。ならば、望みはとうに叶っているのではないか」

「ほ」

ゾウケンは肩を震わせ声を上げた。

それが笑い、悦びではなく、憤怒によるものだど誰が知ろう。

確かに間桐ゾウケンは不死に近い。

蟲の肉体がある限り、彼の魂がつぶされない限り生き続ける事が出来るだろう。

しかし、それにはもちろん欠陥があった。

間桐ゾウケンは好んで老人の姿をとっているのではない。自らを人でないものに変貌させ、人の擬態をする。

その魔術には限界があった。

機械と同じだ。理論上は永久に動くとしても、理論を実践する部品は年月とともに錆びていく。

部品はさびる。歯車はずれていく。プログラムは進化し続ける時代に追いつけなくなっていく。

「いやいや、ワシは不死ではないぞアサシン。ワシの体は腐る。何度新しい肉体を得ようと腐る。何をしようと腐っていくのだ。この肉体とて既に腐敗が始まっている。生きたまま自身が腐っていく不快と屈辱・・・自らが蟲なのだを受け入れる絶望、といえば解って貰えるかな」

「何故腐る。蟲どもではまっとうな肉体を作れないのか」

疑問であった。

なぜ蟲で形成された肉体は腐るのか。

「そのようなことないぞ。蟲どもは活きが良いからな。肉体面でも問題ない。ワシは永遠に生き続ける方法、人間として留まれる方式として、この延命法を選んだつもりじゃ」

「・・・ますます判らぬな。完全な肉体維持を選んでおいてその始末なのか。そもそもなぜ、外見が老人に模す。肉が蟲なら如何様にも姿を変えられよう」

「うむ。良き質問じゃ。では問うが、元の肉体を完全に失ったモノ

が、自らの力でかつての肉体に戻すのはなんだと思う。」

「肉体は己を記憶している。肉体そのものに遺伝子があるからだ」

「遺伝子に記憶された設計図だな。だがワシは自信の遺伝子が記された肉体を失っておる。肉体を以て肉体を復元することは出来ん。その場合、元通りの形にするものはなんだと思う」

「.....」

答えるまでもない。

それは魂だ。

肉体が所属する物質界の法則ではなく、その上に在るんもの。

星幽界という概念に所属する記録、世界そのものの記憶体。

・・・魂が健在ならば肉体を失っても、かつての自分を復元できるだろう。

では、つまりゾウケンは

「なるほど自身の魂だけ生かし、肉体は生きている者たちから撰取する。故に他の姿にはなれない。魔術師殿を存命させているのは肉体ではなく魂だから。」

「当然だろう。ワシとて好き好んで老人の体をしている訳でもないわ。ワシはこの姿しか作れん。それも定期的に替えねば腐り落ちる出来ないものよ。かつては一度の取り換えで五十余年活動したワシが、今では数か月に一度取り替えねば存命出来ぬ。・・・その矮小さ、腐敗する苦しみ誰が理解できようか。今代のアサシンよ。そのようなもの、二度と不死と称するでない。」

ゾウケンの声には苛立ちが込められている。

召喚より三日目。

ようやく真アサシンは、己が召喚者の正体を目の辺りにした。

「・・・納得がいった。つまり腐っているのは肉体ではなく」

「・・・そう、魂が腐っている。故にワシの肉体は腐る。構成図である魂が腐っているのは、肉体が腐り落ちるのは当然であろう」

「ふむ。故に聖杯を望むか。なまじ永久を知らぬものより辛かろう」

「そうだと・・・ワシの肉体は腐る。腐るのだ。その苦しみ、骨の髄まで冒す毒から解放せねばならん・・・！その為の聖杯、その為の死なぬ体よ。・・・そうだワシは死にたくない。まだ生きていた。この世から消えるなど考えるだけで恐ろしい・・・！ワシは生きるために何千の肉を食らい続けた。解るか山の主よ。ワシは蟲と化した自身が恨めしい。ワシだけ腐ることが恨めしい。人として当然のように、正しい肉体をもつ人間共が恨めしいのだ」

「・・・」

真アサシンは、じくじく腐る老人を静かに見下ろす。

・・・安穩と生きる人間が恨めしい、とはよく言ったモノだ。その安穩から逃れるために用いた術が、自身を苦しめているだけの話。

この魔術師の苦しみ、肉体の腐敗は、ただ自業自得なだけ。

だが、その苦しみは誰が悪いなどと済まされる次元の話ではない。善悪の所在など、もうどうでもよいのだろう。

何しろ、間桐ゾウケンはどうに常軌を逸している。

自身の体が腐るなど、常人ならば一時間も耐えられまい。

屈強な精神を持っていようと耐えるのは無理だろう。

何しろ死ぬ。

一時間も腐れば死ぬ。

それを二百年。

絶えず腐らせてきた人間の精神がどれほど腐っているかなどゾウケン以外理解できよう筈がない。

「数百年の妄念か。私には理解出来ぬが」

だが、ゾウケンの言いたい事は理解できる。

死にたくない。

ただ、それだけの、誰もが持ちえる妄念が明確になっているのだ。その単純な愚かな希望に縋り、多くを犠牲にしてきた。

「理解出来ぬが・・・魔術師殿は、この私のマスターに相応しいよかろう。人として扱われなかった者同士、共に永遠を望むとしよう。」

真アサシンはゾウケンに頭をたれた。

ここに本当の意味で歪んだ主従関係が誕生したのだ。

「待っておれ、聖杯。いずれワシが頂く。仮面ライダーよ。せいぜいワシの為に動いてくれ」

歪んだ笑いがロビー一帯に響き渡った。

S I D E O U T

バイクで衛宮邸に戻る茂・光太郎・桜であったが光太郎は嫌な予感がし途中バイクを止めた。

「どうしたんです。光太郎さん」

バイクの後ろに乗っている桜が光太郎に聞いて来る。

「いや何でもないんだ。きつときのせいだよ」

「・・・光太郎さん」

一人真剣な表情でブツブツ呟く光太郎を心配な視線で見る桜。

「あ・・・ごめんごめん。急にポーとしちゃってさあ帰ろうか」

桜が自分を心配しているのだと気付き謝りバイクを走らせる光太郎だったが言い知れぬ不安に駆られていた。

「きつと気のせいだ。今感じた気配は気のせいだ。あいつは死んだんだ」

何かを自分に言い聞かせバイクを走らせる光太郎を遠いビルから見つめる存在がいた。

その物が歩くたびにガシャン、ガシャンと機械的な音が聞こえる。

68話 闇に轟くもの(後書き)

次回は風見ターン

69話 アインツベルンの城／金色のイレギュラー

早朝 7時

アインツベルンの森 入口前

茂、光太郎、桜が間桐邸に向かっている頃。

風見と凜は衛宮邸からバイクで移動する事一時間。

延々と続く国道を走り、幾つかの山を越えて森の入口に辿り着いた。森の前に着くと風見と凜はバイクから降りる。

「ここからは歩いて行った方がいいだろう」

「そうね。ここから先はアインツベルンの敷地、どんな罠があるかわからないわ。警戒して進みましょう」

今から、風見と凜が入ろうとしている森はアインツベルンの森、そこを抜ければ目的地のアインツベルンの城がある。

だが、恐らく一筋縄ではいかないだろう。

凜からはある程度話を聞いていたが、実際目の前になると違う。

森は日が出ている時間帯でも暗い。

空を覆うほど茂った枝は日差しを遮り、森はその終わりはおろか、十数メートル先も定かではなかった。

「いるんでしょう。アーチャー」

凜はその場で自身のサーヴァントを呼んだ。

「ふむ。何かね。凜」

「先に森に入って私達を先導して、森の様子を念話で逐一私に連絡して」

「了解した凜。」

凜の命令に従い森に先に入ろうとするアーチャーは背を向けたまま

「風見志郎、凜を頼む。」

「ああ、任せろ」

風見の返答を聞いてアーチャーはフツと笑い霊体化し森の中に入った。

アーチャーが森に入る瞬間電流が流れる。

それを見た凜は眉をピクリと動かし口を開く。

「へえ〜識別だけだろうけど、森全体に管理が行き届いているよね」

「どういふことだ、凜ちゃん」

「ようは、森全体にインツベルンによって結界が敷かれてるわ。」

「ならば、既に俺達がここに来た事は相手には筒抜けということか」

「そういうこと。まあわたしたちは奇襲に来たわけじゃないもの。」

話し合いに来たんだから、むしろ今からアピールしておいた方が得でしょ。風見さん」

「ふっそうだな。」

確かに凧の言う通りだ。

俺達は戦いに来たんじゃない。

それに、アーチャーが森に入ったことにより俺達の存在は向こうに筒抜けだ。

ならばこそこそするより堂々としておいた方がいいだろう。

「俺が先導する凧ちゃんは後ろから道案内を頼む」

風見は森に足を踏み入れる。

足を踏み入れた瞬間ビリッと電流が流れた。

電流と大して強くなく静電気程度だ。

「成程、これが結界か。凧ちゃん。少し痺れる気をつけた方がいい」

風見は凧に注意を呼び掛けるが、

「わかってるって、風見さんの様子じゃあ。大した事ないんですよ」

ひらひらと手を振って、堂々と森に踏み入る凧。

トタンと足を踏み入れた瞬間

「うきゃー！ー！ー！」

なんて、愉快的な奇声を上げて凧は飛び退いた。

「……どうやら、個人差がある警報みたいだな。俺には挨拶程度だったか」

風見は冷静に判断する。

どうやら魔力の高さにより結界の警告レベルが違うのだろう。

現に風見には静電気程度だったが、凧は風見と違い手荒い歓迎を受けたようだ。

現に、凧の足元に積もった落ち葉が微妙に焼け焦げていた。

「く……くく、くくく」

だが凧には風見の声は届いていなかった。

くくくと不気味な笑い声を上げている。

しばらく不気味な笑い声を上げた後、凧は爆発し

「やってくれるじゃないあのガキ……！いま笑ったの、確かに聞こえたんだから……！」

があー、と誰もいない虚空に怒鳴りつけている。

さっきの台詞はどこにいったのか、話し合いというより殺し合いに行きかねない剣幕だ。

もし、何も知らない人が今の凧を見れば痛い人だと思われるだろう。

風見はそんな凧らしい姿に苦笑しながら凧が落ち着くのを待ち先に進むことにした。

・・・森に行く。

この無限とも言える木々の先を進む。

2月という今の時期にはさすがに獣の息遣いも無く、冬の草木は屍のように生気がない。

進めば進むほど広がっていく木々の海は、果てがない地平線を思わせる。

森に入って既に4時間。

早朝に入った時間から、既に昼が近付いていた。

森に進んでいた凜が途中足を止める。

「そう・・・分かったわ。私達が行くまでそこで待機して」

その場で独り言を言い始める。

どうやらアーチャーと念話しているようだ。

念話が終わり凜は風見に念話の内容を言う。

「風見さん。もうすぐ目的地に着くわ」

「そうか」

それから歩くこと数分。

「見つけた。・・・って、聞いていたけど呆れたわ。本気でこんな所にあんなもの建てるなんて」

風見は凜の視線を追う。

「・・・でかいな。確かに城だ」

視線の先にはひどく場違いな物が存在した。

その場にはあれほどあった森がスプーンで切り取られたように消失していた。

巨大な円型の空間。

それは広場というより、地中深くに陥没した王国のようだ。

遠くからかなり首を上げないと全容を確認できない。

それが、聖杯戦争が始まれば代々アインツベルンが利用する住処だった。

森の中にぼつりと建てられた古い城。

とてもあの少女が一人で暮らすには寂しすぎる。

来訪者など来る筈のない森の孤城であった。

城の付近に辿り着くとアーチャーが厳しい表情を浮かべ城を見ていた。

凜も城につくと何も言わずただならぬ表情で城を見上げている。

風見にも理解できた。

今、城周辺にはただならぬ気配に満ち溢れている。

「これは・・・」

それは戦場の空気

城の中で何かが今起きている。

「城の中に誰がいるな。」

風見はポツリと呟く。

「ええ、アーチャー。私達以外に森に入った人はいなかった」

「いや、私が城に着くまでの道のりでそれらしい気配はなかった。恐らく私たちより先に森に入ったのだらう」

「分かった。急ごう。この城の様子は明らかにおかしい。あの窓から城に入るう」

「ええ、分かったわ。行きましょう。風見さん。アーチャー」

「ああ。」

風見達は壁際の大木まで走り、大木に上り二階の窓から城の中に入る。

城に入り部屋から廊下に出ると、やはり城の中では異常事態が起きていた。

響く音は、戦いの音。

剣と剣が打ち合う音である。

だが、それでも異常であった。
剣が打ち合う音にしては異常過ぎる。

剣戟の音はまるで嵐。
止まることなく剣戟の音が異常な速度で響く。

「うがあああ」

その時、風見の耳に知っている叫び声が聞こえてきた。

「アマゾン！！」

風見は大切な仲間を聞き凜達を置いて剣戟が聞こえる場所に急ぎ向かった。

大通りのロビーテラスに着き二階から下を見下ろしてみると

一方的な殺戮が行われていた。

バーサーカの体には全体に無数の剣が突き刺さっていた。

それでもGURRRと鬼気迫る咆哮を上げて斧剣を必死に振りまわしている。

だが、その行為を嘲笑うかのように底無し剣がバーサーカーの体を蹂躪していく。

その巨人の背後には、メイド服を着た女性二人の死体と殺し合いでも無邪気な笑みを浮かべていた少女が今は肩を震わせ、泣き叫ぶ一歩手前の顔で誰か助けると、震える唇で訴えながらバーサーカーと

同じく体中に剣を突き刺され倒れている緑色の異形を抱きしめていた。

「あれは……アマゾン」

風見は女性二人の死体と大切な仲間であるアマゾンが傷だらけなのを確認すると怒り対峙している相手を確認する。

「あの男は!!」

昨日柳洞寺で風見に死相が見えると言った黒い服を着た金髪の男だった。

金髪の男の背後からは長剣、短剣、刀、槍、中華剣と古今東西の武器が何も無い空間から出現しその度にバーサーカーを貫いていく。五体、顔、喉、口などの急所が貫かれても再生しその度に他の剣で貫かれるという行為が延々と続いていた。

ついにバーサーカーは耐えきれなくなったのかその場で膝をついた。

「フ。所詮はバーサーカー。戦うだけのモノであつたか。同じ半神と期待していたが、よもやそこまでアホとはな!」

宝具を奔る。

金髪の男は、バーサーカーを嘲笑いながら宝具に指令を出した。

「では、そろそろ引導を渡してやろう。これ以上近付かれては暑苦しい」

金髪の男の号令で無数の宝具がバーサーカーを襲う。

バーサーカーは膝を着いたまま最後の力を振り絞り大半の宝具を叩き落とすが、同時に残りの大部分の宝具により命を奪われ、ゆらり

と倒れ込んだ。

「ようやく死に絶えたか。下朗」

男は冷たい視線をイリヤに向ける。

「さて、人形よ。早く開ける。それが貴様の役目であろう」

カツカツとイリヤに一步一步近付いていく。

「やだ……やだよう。バーサーカー」

イリヤはバーサーカーが死んだ悲しみと迫りくる金髪の男の恐怖からアマゾンを抱いたまま涙を流す。

金髪の男はそんなイリヤの前に立ち顎を掴み自身の方へと顔を向けると、冷たい表情のまま剣を構え少女の瞳を切りつけようとす。

カキ「なに!!」

男の剣戟をトゲの突いた緑の腕が防いだ。

「きいー」

緑の手は男を切り裂こうと振りかぶるが男は下がりそれを回避する。だが……

「これは血……高貴な私の血があのような野蛮人に雑種ただで殺さんぞ」

金髪の男の頬からかすかに血が流れていた。

金髪の男は憤怒の表情を浮かべ倒れていた緑の異形に視線を移す。

「……アマゾン」

イリヤは見つめながら呟く。

傷だらけになりながらも立ち上がり自分を守ろうとしてくれる仮面の戦士を。

「オマエ、許さない。俺の大切な友達を奪った。イリヤ、傷つけようとした。オレ、オマエ倒す」

「よく言った。野蛮人。ならば貴様を倒し、その人形に更なる絶望を与えてやる」

アマゾンは駆ける金髪の男の前まで、そして腕を振り上げた。

「大・切・断！！」

アマゾン必殺の大切断で金髪の男を切り裂こうとしたが

「フ、愚かな」

金髪の男は慌てず腕をすつと振ると無数の剣がアマゾンを突き刺した。

「があ」

アマゾンは剣の勢いと苦痛の余り倒れる。

「フン、野蛮人め。これで終わりだ。」

金髪の男が虫の息であるアマゾンに止めを刺そうとする。

「いや……いやああ。アマゾン逃げて」

少女の声も空しくアマゾンは飛来する剣に胸を突き刺されていただろつ。

その場の介入者がいなければ

「トオ」

赤い仮面の男がその場に割って入りアマゾンに剣が突き刺さる前に剣を腕で弾き飛ばす。

「マスクドライダー。アマゾン……アマゾン」

少女は赤い仮面の男、V3の登場に驚くのと同時にアマゾンが助かった事に安堵しアマゾンに近寄り抱きついた。

「貴様、王の断罪を妨害するとは死にたいらしいな」

金髪の男は乱入者、V3に向け殺気を込めた視線を送る。

「黙れ、女性二人とそして俺の大切な仲間アマゾンをよくも絶対に許さん」

V3は怒りを込めて金髪の男を睨みつける。

V3は謎の金髪の男と対峙する。

しかし、V3は気付いていなかった。

今、この城に入り込んでいる外敵は彼だけではない事に

V3の運命は如何に・・・

69話 アインツベルンの城／金色のイレギュラー（後書き）

何と次回V3が

次回は敗北のV3にご期待下さい

70話 敗北のV3 (前篇)

SIDE イリヤスフィール・アインツベルン

数時間前

その日、私はいつも通り城で過ごしていた。

いつも通り、セラの小言を聞きながら用意してくれた食事を食べて私の部屋でリズと最近出来た友達アマゾンと楽しくお喋りしていた。

冬木についてからの私の生活習慣だった。

正午になればお兄ちゃんの所に行こう予定を立てていた。

今、お兄ちゃんのサーヴァント・セイバーは魔力不足で消滅しようとしている。

なら、お兄ちゃんの家に行って、戦う意思を聞き、戦う意思がないならお兄ちゃんをアインツベルンに連れて帰ろう。

だって、お兄ちゃんはその男の息子、血が繋がっていなくても私の兄妹だから。

そう思い、出かける支度をして城を出ようとした時、その日常は崩れ去った。

覚悟していた。

今は聖杯戦争という戦争の真っ只中だ。

それは前触れもなく唐突に　　。

衝撃と爆音を伴って巨大な玄関のドアを打ち破った。

爆音の音に私は急ぎ玄関に向かった。

そこで見たものは、

「・・・お譲様・・・来てはいけません」

体を剣で切り裂かれ息絶えそうなセラの姿だった。

「・・・セラ」

私は大声で叫んだ。

そして、セラもとへ行こうとしたが、

ガシ「ぐう」

イレギュラーの訪問者がセラの頭を踏みつけた。

「私の問いに答えぬからだ。たわけ」

金髪の男は手に持っている剣をそのままセラに振り下ろした。

「がああああ」

剣はセラの腹部に突き刺さりセラはそのままぴくりとも動かなくな
った。

「フン、従者の躰がなつてないぞ。雑種」

セラを殺した男は冷たい赤い瞳で私を睨みつけてくる。

私はセラを殺された怒りよりも、男の瞳に睨まれた瞬間、意図せず体が震えていた。

私は目の前の男に恐怖している。

「あなた・・・なんなの」

思わず、私は呟いていた。

あいつは、本能で分かった。

あの男は、でもそれは認められない。

だって、私は・・・

「見て分からぬか。たわけ この身はおまえが知る英霊の一人である」

「ウソ！私はあなたなんて知らない！私が知らないサーヴァントなんて存在しちやいけないんだから」

私は思わずそう叫び、私の最大の魔力を込めた魔弾を男に放つていった。

優秀な魔術師でもこれを受ければひとたまりもないだろう。

だが、男は私を見据え笑ったまま動かない。

魔弾が男に直撃する瞬間、魔弾の威力が倍になって跳ね返った。

「！！」

私は死を覚悟し目を瞑る。

だが、いつまでたつても衝撃が来ない。
恐る恐る私は目を開けてみると

「リズ・・・なんで!!」

私の従者の一人、リーズレットが血だらけで前に立っていた。

「イリヤ、無事・・・良かった。」

リズはそのまま倒れ息を引き取る。

「愚かな雑種よ。まあ器を傷付けずに済んだ。それだけは褒めてつかわそう。」

男はリズの死を目の辺りにしても尊大な態度のまま私を見据えたまままだ。

「しかし、今回はまた変わり種のような。前回の轍を踏まぬように少しは工夫したということか」

男の赤い瞳に睨まれ私は動けなかった。

セラ、リズを失ったことの悲しみとその原因を作った目の前の男に対する怒りもある。

だが、それ以上に私は目の前の男に恐怖した。

それは、生きる者全てが持つ本能・・・本能があいつを恐れている。

「イリヤ」

その時、アマゾンも駆けつけてきた。

「セラ……リズ」

アマゾンはセラ・リズの死体を目の辺りにして呆然としている。しばらく、呆然としていたアマゾンだったが次第に怒りが膨れ上がり金髪の男を睨む。

「オマエ……許さない。アーマーゾーン!!」

アマゾンはアマゾンライダーに姿を変えた。

「イリヤ……ニゲテ」

アマゾンはイリヤに逃げるように言い目の前の男と対峙する。

「ハハハ、魔獣の類か。面白い見せ物だぞ。野蛮人」

アマゾンの変身を目の辺りにしても恐怖するどころか、面白いといった感じで笑いだす。

「バーサーカー!!」

私をもっとも信頼する従者が私の危機に駆けつけた。GRUUUと鋭い眼光で金髪の男を睨みつけている。

「バーサーカー、あいつを倒して」

私はバーサーカーに命令を出した。
私が恐怖するあいつを倒すように、
アマゾンもバーサーカーと共に飛び出した。
バーサーカーとアマゾン、もし相手が並のサーヴァントなら一瞬で
肉片に変えていただろう。
だが、あいつは普通じゃなかった。

そこで行われたのは一方的な蹂躪であった。

バーサーカー、アマゾンを相手にしても金髪の男は動じない。
何かに命令するようにすつと手を前に出すだけだ。
その命令に従う様に虚空から無数の剣、槍、刀と古今東西の武器が
飛来する。

バーサーカー、アマゾンは飛来してくる剣を斧剣と爪で弾いている
が、
それも時間の問題だ。
こっちは、防戦一方。それに対し向こうは涼しい態度で剣を飛ばす
だけ
ついには防げなくなり、バーサーカーもアマゾンも倒れた。

私は「誰か助けて」と声にならない声を上げるだけだった。

男はアマゾンに止めを刺そうと剣を飛来させた。

その時、以前戦ったマスクドライダーが姿を現す。

でも、私はマスクドライダーの出現にも希望を持てなかった。

目の前の男には絶対に勝てない。

それは最早直感。

いくら対人戦が優れようとも戦争には勝てない。

あの男の戦術は正に戦争。

だがここで引く訳にはいかない。

V3と金髪の男の戦いは始まった。

「我を許さんだと余程死にたいらしいな。雑種よ」

パチンと男が指を鳴らすと無数の武具が飛んでくる。

「くっ」

V3は回避しようとするが回避出来なかった。

後ろにはアマゾンとイリヤがいる。

もし自分が避ければ無数の武具はイリヤとアマゾンを襲うだろう。

「ぐっ」

V3は飛来してくる無数の武具を全て腕で弾く。

「ほう、これを防ぐか。なら倍だ。これも防いでもっと我を楽しま

せる」

武具の勢いが増した。

先程までは十程の武具が一定時間を置いて飛来して来ていたが、今はその倍の100の武具が一斉にV3襲う。

だが、それもV3は防いだ。

普通の人間では視認できない速度で……だが

ザシュ……ザシュ、ザシュ「グウ……ゲホ、ゲホ」

防ぎきれず、防げなかった三本の剣に体を突き刺される。

なんとか致命傷は避けたがそれでもダメージは少なくなかった。

「つまらん。少しは楽しめると思ったがこれで終わりか。」

金髪の男は嘲笑うかのように冷たい瞳でV3を見つめる。

「ぐう……まだだ」

V3は気力で立ち上がり突き刺さっている三本の剣を引き抜いた。

「そうだ、それでよい。あっけなく終わっては面白みに欠けるからな」

金髪の男は冷たく笑う。

「強い……こいつもサーヴァントなのか。だが次元が違い過ぎる」

V3は冷たく笑う金髪の男を見る。

理解する。

・・・こいつは、悪魔だ。

例えばバーサーカーは全てを圧倒する破壊と凶暴性を持っている。だがこいつは違う。

秩序を持たない。

ただ殺すことが目的の戦いを、こいつは望んでいる。

くだが、負ける訳にはいかない。少しでも奴の隙を作れたら

V3は考える。

目の前の男を倒す方法を。

「クク」

金髪の男は律義に何もせずただじっと立っている。

男は分かっているV3が自分を倒すために何か作戦を立てている事に、それをあえて男は待っている。

このまま終わっては面白くないという理由だけで、それは傲慢だ。だが男には傲慢な態度を取れるだけの力があつた。

「よし、行くぞ」

V3は意を決し男に向かい疾走した。

「我が貴重な時間を与えた間に考えついた作戦がただ突っ込むだけか、つまらん。もう貴様は死ね」

金髪の男が無数の武器にV3を襲わせようとした瞬間V3は高くジャンプした。

「逃げてても無駄だ。」

金髪の男は逃げたV3に宝具の群れを襲わせる。

その宝具をV3は壁を蹴り反転、そしてまた壁を蹴り反転を繰り返して回避し続ける。

「ちっ　　よくかわす。虫風情が」

男は容赦なく宝具を襲わせるが未だに捉えれず苛立ちを覚え始める。

（頃合いだ）

だが、それも全てはV3の作戦だった。
今、男の視線は空中にいるV3だけに注がれている。

だから気付かなかった。
迫りくる青い車の存在に……

ブーンと音を立ててそれはドアを打ち破った。

「なに！！！」

余裕な態度を崩さなかった男が初めて驚愕する。
襲い来る青い車『ハリケーン』を横に跳んで回避した。

「オノレ……なんだと！！！」

そこで生まれたわずかな隙。

だがその隙を突きV3はチェックに入っている。

「行くぞ、V3フルキイイイック」

捻りも加えない単純な空中ドロップキック

だが、数多の怪人たちを倒してきたV3の必殺キック。シンプルだがその破壊力は必殺の威力を秘めている。

「グウ」

金髪の男は宝具を飛来させるだけの時間がないと判断すると切羽詰まった表情で虚空から一本の剣を取り出しそれで防御の体制に入った。

「グオオオオオ」

金髪の男は真正面からV3の蹴りを受け止める。

「ぐあー!!」

だが、さすがにV3の蹴りの衝撃を全て受け止めきれなかったのか吹き飛び壁に激突する。

「ハアハア……決まったか」

V3は立つなと切に願う。

緻密な作戦を立てて相手の隙を突き与えたジャンプ蹴り。相手に人を舐めた傲慢さがある故出来た奇策だ。

もう一度、同じ事をしたとしてももう通用しないだろう。

だからこれで終わってくれと願ったが……

「おのれ……雑種。我に一瞬とはいえ恐怖を与えるとは……もう許さん。ただでは殺さんぞ。」

額から血を流しつつも憤怒の表情を浮かべ赤い瞳は射抜くだけで人を殺せそうな殺気を含みV3を射抜いている。

「くっ」

V3は目の前の男を倒すため新たな作戦を考えようとしたが、今度は待ってくれなかった。

「雑種、貴様はそこにいる野蛮人を庇っていたな。まずその野蛮人から殺し貴様に絶望を与えてやる」

それは一瞬だった。

金髪の男は宝具をアマゾンに襲わせる。

宝具はアマゾンとそのアマゾンの近くににいるイリヤに直撃しそうになる。

その時、ビューと音が聞こえると同時に

「えっ、きゃあああ」

イリヤとアマゾンは凄まじい強風に見舞われその場から少し吹き飛んだ。

「キサマー王の邪魔をするつもりか」

金髪の男は目線を風の吹いた方角に向け何かを睨みつける。その視線の方角から顔中に包帯を巻いた姿を現した。

「フン、お前こそ分かっているのか。その小娘に今死なれては困る。少しは頭を冷やせ」

顔に包帯を巻いた男は罵りを込めて金髪の男に言う。

「我に頭を冷やせだと貴様何様のつもりだ」

「俺は俺の任務がある。お前とは協力関係にある筈だ。なら、俺の仕事の邪魔をするな」

「なんだと」

金髪の男と顔に包帯を巻いた男が口論するなか、V3はイリヤがいる場所までそっと移動した。

「大丈夫か」

V3はイリヤに怪我がないかを確認する。

「私は大丈夫……でもアマゾンが……それにリズ、セラ……バーサーカー……」

大切な人たちを失ったイリヤの瞳に悲しみが溢れ出る。

「アマゾンは大丈夫だ。戦いがある限り仮面ライダーは死なん。彼女達は済まなかった。」

V3は少女に謝った。

彼女たちを救うことが出来なくて済まないと。

「フン、偽善だな。V3」

その時、金髪の男と口論を続けていた包帯を巻いた男がV3に言う。その言葉に対しV3は包帯を巻いた男を見据え口を開く。

「ああ、俺は偽善だ。それでも俺はこの偽善を貫くため戦うと誓った。例え誰かに罵られようとも構わない。ただ誰かを悲しませる貴様たちを逃すわけにはいかない。お前達はここで倒す」

「勘違いするなよ。雑種、お前を殺すのは我だからな。こ奴は私の獲者だ。貴様は手を出すな。」

「それは結構だ。だがV3一人が相手とは限らんぞ」

包帯を巻いた男は金髪の男に意味ありげな言葉を吐く。

「我に口答えするか。それはどういう……」

金髪の男が全てを話す前に包帯を巻いた男が言う様に事は起きた。

「ぐう……がああああ」

アマゾンが傷ついた体を気力で耐え立ち上がる。

「アマゾン……」

イリヤは心配そうな眼差しをアマゾンに向けるが

「大丈夫。俺、負けない。」

「大丈夫か。アマゾン」

「カザミサン、大丈夫。オレ、あいつを倒す」

アマゾンは赤い複眼で金髪の男を睨みつける。

「こりぬな野蛮人め。余程死にたいらしい」

アマゾンは金髪の男に駆ける。

「また、馬鹿正直に真正面から突っ込むだけか。失せろ、貴様に用はない。我はその虫に審判を下さねばならないからな」

金髪の男の罵りを込めてアマゾンに言うが、アマゾンは引かない。

「死ね」

金髪の男はアマゾンに宝具を仕掛けるが

「キィキィー」

アマゾンの持ち味である巧みな動きとスピードでそれを避け、金髪の男に蹴りを入れる。

「クウ」

金髪の男は回避し、宝具を襲わせようとするがもつアマゾンは目の

前に居ない。

既にアマゾンには金髪の男と距離を取っている。
最初の戦いで正面から戦っても勝ち目がないと判断しアマゾンは戦法を変えたのである。

「くうー」。調子に乗るなよ。野蛮人」

金髪の男とアマゾンの戦いは続く。

その一方V3は包帯を巻いた男と対峙していた。

「アマゾンがあいつと戦ってくれたのは僥倖だ。お前は俺自身の手で破壊したいと思っていたからな」

「お前は何者だ？」

V3は謎の多い目の前の人物に問う。

「俺はデスシヨッカー最新の改造人間」

「デスシヨッカーの!!!」

「そう、見せてやる。俺の真の姿を」

包帯を巻いた男は何かのポーズを取る。

それはV3にとってもっとも馴染みの深いポーズであった。

「まさか!!!」

「そのまさかだ。目に焼き付ける。変身V3」

包帯を巻いた男は姿を変えるショッカーV3の姿にと。

「俺はお前のデータを元に最新の技術で作られたショッカーV3だ。オリジナルであるお前を倒し俺が本物になる。」

最初は驚いていたV3だったが冷静になり

「フン、それが出来るならな。本物の強さを見せてやる」

V3とショッカーV3の両者は激突する。

V3の称号を賭けた戦いはここに幕を開けた。

71話 敗北のV3 (中編)

アインツベルンの城 一階 大通り

SIDE 遠坂凜

「何なのこの状況は？」

大通りの二階テラス側で身を隠しながら凜は真剣な表情で今起きて
いる戦いの様子を窺っていた。

大通り一回では金色の男と緑色の化け物が対峙している。

「あれがアマゾンね。……で、あいつは……あり得ないわー！」

マスターである自分が見間違っ筈がない。

あいつは間違いなくサーヴァントだ。

「でも……そんな。八番目のサーヴァント!？」

今回の聖杯戦争、もう全てのクラスが召喚されている。

もう、あの男を召喚するだけの席は残っていない。

なら、あいつは何者!？」

凜は金髪の男に驚く最中、もう一つ驚きの光景に目を向ける。

「それにしても、あの金ピカだけでも驚きなのにあいつは風見さんの偽物……一体どういう状況なの!？」

金髪の男とアマゾンが戦っている隣では風見さん・仮面ライダーV3とそれに良く似た偽V3が対峙している。

「どうする。アーチャー？」

「しばらく様子を伺った方がいい。今の状況で下手に介入するのは得策ではない。」

「そうね」

アーチャーが鋭い目でV3達の戦いの様子を伺いながら凜に提案し、凜もそれに賛同ししばらく様子を見る事にした。

凜は身を隠し戦いの様子を見る。

そこでは激しい戦いが繰り広げられていた。

S I D E O U T

「V3キーク!!」

空中でお互いのV3キックが同時に激突した。

ドゴンと凄まじい爆音を響かせ

「ぐっ」「ぐっ」

威力は同じなのか同時に吹き飛んだ。

「くっく、楽しいなV3。憎しみ、怒り、恨み、負の感情で人を殺

す戦いというのは心が晴れないと思わないか」

シヨッカーV3は立ち上がりながら楽しそうにV3に言う。

「お前は何を言っている？」

V3は困惑しながら思った。

「こいつの拳は重い。だが、どこか悲しい。」

一撃を交わしあっただけだがV3は思う。

こいつはかつての自分だ。

拳から憎しみしか感じない。

「まだまだ行くぞ」

シヨッカーV3はV3が考える間もなく拳をV3に叩きつけてくる。

「くっ、この動きは！！」

V3はシヨッカーV3の拳を腕と体を駆使し回避するが更に困惑した。

「どつした。動揺が見えるぞ。」

考える間もなくシヨッカーV3の攻撃の激しさは増していく。

「動きが同じなら・・・」

V3は防御に徹しシヨッカーV3の動きを注視する。

「くっ、しぶとい。」

中々攻撃が当たらずシヨツカーV3は苛立ちを覚え始め、動きが少し大振りに隙が出来た。

「今だ。V3ペアアアンチ!!」

ドガ「グウ」

V3パンチをカウンター気味に受けシヨツカーV3は勢いよく地面に叩きつけられる。

「グウ、貴様」

シヨツカーV3は憎悪を向けた表情でふらふらと立ち上がる。
そんなシヨツカーV3にV3は口を開く。

「無駄だ。お前に勝ち目はない。お前の行動パターンは1号、2号と同じだ。いくらあの人たちの動きを真似ようと本物に勝る道理はない。」

V3は淡々と語る。

V3は見抜いていた。

僅かな攻防でシヨツカーV3は1号と2号の動きをコピーしているに過ぎないと見抜いたのだ。

「フフ、どうかな。」

だが劣勢に立っているにも関わらずシヨツカーV3は不敵な笑みを

浮かべる。

「確かに俺のオリジナルだけあって強いな。性能は俺の方が上の筈だが経験でカバーしてくる。だがお前では俺には勝てない。群れている限りな。」

シヨッカーV3はV3から目線を外し、ある方へと目線を向ける。そして、どこに隠し持っていたのかナイフを取り出して

「フツ、質問だ。こういう場合貴様ならどうする」

視線の方へとナイフを投げた。

V3も視線を向けて見ると

「あれは・・・まずい!!」

V3は急ぐ。

視線の先にはイリヤが立ったままアマゾンと金髪の男を心配そうに見つめてたからだ。

イリヤはナイフの存在に気付いていない。

V3はイリヤにナイフが到達する前にナイフを掴むが、シヨッカーV3から目線を外してしまい隙が出来る。

「だから甘い。貴様等のその弱い精神が俺は憎くて堪らない。」

シヨッカーV3は容赦なくV3に攻撃する。

「V3チヨープ」

「ぐっ」

ショッカーV3のチョップを頭部に受け怯むV3に対しショッカーV3は更なる追撃を与える。
怯んだV3を掴みショッカーV3はジャンプした。

「V3投げ!!」

ショッカーV3は空中からV3を背面から地面へと投げられV3は地面に叩きつけられた。

「ゴホ」

その威力は地面に軽いクレータが出来るほどだ。

「カザミサン」

金髪の男と戦っていたアマゾンはV3がやられているのを見て心配そうに視線を向ける。

だが、金髪の男から視線を背けている間にも容赦なく金髪の男の攻撃である無数の宝具がアマゾンを襲う。

「ガウ」

アマゾンはぎりぎりで横にジャンプしそれを回避するがかすかに剣の一本がアマゾンの右足に掠る。

「キイ!!」

かすかな傷だがスピードを生かし戦うアマゾンにとってそれは致命的であった。

「フ、他人に気を取られ傷を負うなど愚かだな」

冷たい視線をアマゾンに向ける。

その周りには無数の宝具がアマゾンに逃がさないよう取り囲んでいる。

「アマゾン!!」

傷を負い絶対絶命のピンチのアマゾンにイリヤは体を震わせながら叫んだ。

「うう、ジャングレー!!」

アマゾンは自分のマシンを呼ぶ。

「ん、この音は」

金髪の男は聞き覚えのある音が聞こえ、音が聞こえる方に視線を向ける。

アマゾンのバイク・ジャングレーが走って来ていた。

「フツ、愚かな。今さらそのような玩具を呼び出して何になるとい
うのだ」

アマゾンを嘲笑いながら視線を向ける。

アマゾンにはジャングレーから何かが射出される。

ガシ、アマゾンはジャングレーから射出された何か、ガガの腕輪を受け止めギギの腕輪に装着させ一つにする。。

「もういい、お前との遊びにも飽きた。死ね」

感情の籠らない声で金髪の男は言い、無数の宝具を一斉にアマゾンに襲われた。

「アマゾン、逃げて」

イリヤが叫ぶがアマゾンは逃げない。

「がああああ!!」

アマゾンが叫ぶとアマゾンの体が光始めた。そして、迫る宝具の雨を体で全て弾いた。

「この光は!!」

金髪の男はアマゾンの光を見て驚愕する。

だが、すぐに驚きの表情から一変。

獲物を目の前にした獰猛な目をアマゾンに向ける。

「フッフ、その腕輪は・・・」

金髪の男は笑いが抑えられないのかフッフと笑いを零し続ける。

そんな金髪の男の奇行を不審に思いながらもアマゾンには攻撃に出た。

「スーパー大切断!!」

アマゾンはギギとガガの腕輪の力により古代インカの超パワーを引き出すことが出来るのだ。

アマゾンは金髪の男に最強の技をぶつけようとするが

「天の鎖よ!!」

いきなりアマゾンの周りに無数の鎖が出現し、鎖に捕われ動きを封じられた。

「ガウ!!」

それはいかなる宝具か。

突如空中より現れた鎖は、空間そのものを束縛するようにアマゾンを封じていた。

「ウウウウ」

アマゾンは鎖を振り解こうと力を入れるが、鎖の締め上げる力ほどんどん上がっていき振り解けず、アマゾンの両腕を締め上げあらゆる方向へとねじ曲がっていく。

「やだ、やだよう。アマゾン」

イリヤの悲痛な叫びが大通り一帯に響く。

「無駄だ人形。いくら叫ぼうとその野蛮人の力で鎖を解くことなど

出来ん。この鎖に繋がれた物は、たとえ神であろうと逃れる事など出来ん。否、神性が高ければ高いほど餌食となる。元より神を律する為だけに作られたもの。いくら野蛮人が力を入れようと一生掛つても抜け出せるものか」

金髪の男を証明するかのようアマゾンを縛る鎖の力が際限なく上がっていく。

「何で、アマゾンは現代人よ。神性なんかあるわけない。なのにどうして」

アマゾンは現代人。多少変わった力があると言っても神性なんかあるわけがない。

なのにどうして鎖の絞める力が上がっていくのかイリヤは愕然とその様子を見ている。

「分からぬか。人形。その腕輪よ。その腕輪こそ古代インカに伝わる。至宝の宝。その腕輪の力がれば神の力を振るえるという代物だ。我の蔵にもない宝だ。野蛮人などが持っていていい代物ではない。この世の財は全て我のものだからな。貴様の腕を切り取りその二つの腕輪は我に献上して貰おう。その腕輪は我の蔵にあってこそ真の価値を發揮できるからな」

金髪の男は一つ剣を取りアマゾンにゆっくりと近づいていく。

「V3、哀れだな。」

シヨツカーV3は地面に投げられ地面に埋もれたV3の頭を踏みながら冷たく見下ろす。

「グウ」

V3は苦しそうに呻く。

「他人を気にした結果がこれだ。貴様の偽善は見ていて虫唾が走る。人に必要な物は我のみよ。他人の為に動くなど馬鹿がすることよ。自分さえあればそれでいい。それが世の摂理だ。」

シヨツカーV3はV3の頭を踏みつける足を更に力を入れる。

「グウ、悲しい奴だな。貴様は」

V3はシヨツカーV3の踏みつける足を掴み投げ飛ばした。

「グ、まだそんな力が残っていたか」

V3は立ち上がりシヨツカーV3に視線を向け問う。

「お前は脳改造を受けていないな」

「ああ、そうだが何故分かった？」

V3の問いにシヨツカーV3は簡単に答えた。

「お前の拳からは悲しみしか感じなかった。かつての俺のように・・・だから分かった。」

「悲しみか……」

「お前に一つ聞きたい。脳改造を受けていないならお前は人間だ。何故デスショットカーに与している。デスショットカーは悪い組織だ。目を覚ませ」

「黙れ。俺は自分の意思でデスショットカーにいる。アイツの為に・・・それに貴様のような偽善者に俺の悲しみ・憎しみ・怒りなどが分かってたまるか」

ショットカーV3はV3に突撃する。

だが、先程の狂気的な攻撃とは違う。どこか感情的になっていた。

「こいつは、かつての俺だ」

V3はショットカーV3の攻撃を受け止めながら思った。

ショットカーV3の拳からはかつて家族を失った時の自分と同じ憎しみ、悲しみなどを載せた拳を叩きこんでいる。

だからこそ、同じV3の称号を持つ目の前の敵を他人だと思えなかった。

出来る事なら助けたいと思っていたが事態は急変した。目に入ってしまったアマゾンが金髪の男に切り裂かれようとしているのを

V3はショットカーV3の攻撃を弾き走った。

アマゾンの方へと。

「死ぬがいい。野蛮人」

金髪の男はアマゾンの腕目掛けて剣を振り下ろす。

「ガウ」

アマゾンを狙う、死の剣は腕を切り裂こうとするが腕が切り裂かれる事はなかった。

ザシュ「……無事か……アマゾン」

「カ・・ザ・・ミ・・サン!!」

アマゾンの目の前では身を呈しV3が金髪の男の剣の盾になっていた。
V3の体は切り裂かれ鮮血がまい、ずるずると崩れ落ちる。

「カザミサン……ガアアアアアア」

大通り一帯にアマゾンの叫びが木霊した。

72話 敗北のV3 (後編)

「カザミサン……がああああ」

アマゾンには自分を庇い目の前で血飛沫を宙に舞いながら崩れ落ちるV3を見て、怒りか、それとも自分のせいで致命傷を負わせたことからの不甲斐無さか。色々な感情が渦巻きその場で絶叫した。

「グウ、ガああ」

アマゾンは力任せに鎖を断ち切ろうとするが、思いとは裏腹に締め付ける力はどんどん上がっていく。

「吠えるな雑種、無駄だというのが分かるのか。」

金髪の男はアマゾンの行為を鼻で笑い、足元で倒れているV3を冷たく見下ろし頭を踏みつけた。

「つまらぬ。せめてもの情けだ。我の手で介錯してやろう」

金髪の男は頭を踏みつけている足をどかしV3の首目掛けて剣を振り下ろそうとしている。

「があああああ!!」ビキビキ、バキ

アマゾンは大切な友であり仲間のピンチに雄たけびを上げ、絶対外せないアマゾン縛る鎖を力で引き千切った。

「馬鹿な……天の雄牛すら束縛した鎖を力で外すとは……おの

れ〜よくも我が友を・・・貴様万死に値するぞ」

金髪の男から凄まじい殺気が迸る。

だが、アマゾンはずでにチエックに入っていた。

「ガアアア、ガガの腕輪よ、ギギの腕輪に力をくれ。スーパー大切断!!!」

アマゾンの体は光、今度こそスーパー大切断は金髪の男を切り裂いたのだが

「ぐう・・・おのれ、よもや野蛮人如きに鎧を使わねばならんとは・・・屈辱だ。」

なんと金髪の男はアマゾン必殺のスーパー大切断を耐えていた。黒いラフな服から一変、黄金の鎧を纏いアマゾンの攻撃を体で受け止めたのだ。

それに伴い威圧感も先程と比べ遥かに増した。

「ガウ」

アマゾンは危険を感じ金髪の男から距離を取った。

「野蛮人、最早貴様には死すら生温い。」

金髪の男は何もない空間から鎌を取り出しその場で軽く振るった。

ザシユ「ガア!!!」

何と!!!距離を開けているアマゾンを空間転移し首の頸動脈を切り

裂いた。

アマゾンに変身が解け首から血を流しながらその場に倒れる。

「そんな……アマゾン」

イリヤはアマゾンのもとへ駆け寄ろうとしたがガシと誰かに掴まれる。

「小娘、どこに行く気だ。フフ、もう貴様を守るものはいなくなつた。大人しくして貰おう」

シヨツカーV3がイリヤの手を掴む。

「キヤア……いや……貴方は」

「俺か……俺は悪魔さ。」

イリヤは自分を掴んだシヨツカーV3に金髪の男と違った恐怖を感じた。

「貴様がああな男の娘か。フフ、本来なら俺の手でお前をズタズタに殺したい。だがお前には利用価値がある。俺達と一緒に来て貰おう」

シヨツカーV3はイリヤになぜか深い憎悪をぶつけた。

その憎悪にイリヤは恐怖し頬から涙を流し始める。

「やだ……助けて……キリツグ……お母様……バーサーカー……アマゾン……」

少女は叫んだ。

ただ助けてと涙を流しながら

「誰も助けに来ない。小娘お前は地獄行きだ」

シヨツカーV3はイリヤを嘲笑う。

「いつまで人形と遊ぶつもりだ雑種。まあいい、まだ雑種共は死にきれていないようだ。我自らの手で止めを刺される事を幸福と思いながら死ぬがいい」

金髪の男はアマゾンとV3に止めを刺そうと狙いを定める。

「アマゾン……イヤ……シロウ」

シユシユシユ

「ん、何!?!」

その時、無数の剣群がシヨツカーV3と金髪の男に狙いを定め飛んできた。

「グ、くそ」

シヨツカーV3は思わず掴んでいる手を離してしまう。

「クツ、オノレ……何者だ」

金髪の男の殺気の籠った鋭い赤い眼は剣群を仕掛けた人物を探す。その時、タンとイリヤを守る様に前に赤い騎士が二階テラス側から降り立った。

「ふう、やれやれ。既に捨て去ったモノとばかり思っていたが・・・フフ、どうやらまだ私にも人並の感情はあったらしい。どう思う。風見志郎の偽物とギルガメツシュよ」

赤い騎士アーチャーは自分を自嘲するかのように笑いながらシヨックカーV3と金髪の男ギルガメツシュを睨みつけている。

S I D E 遠坂凜

大通り一階で風見志郎とアマゾンが金ピカに殺されようとしている。

「風見さんが・・・あのままじゃ」

凜は焦る。

このまま放っておけば風見とアマゾンは間違いなく金ピカに殺されてしまうだろう。

どうしようとして頭で策を練るがいい手が思い浮かばない。

もう迷っている時間はない。

凜は下で起きている戦場に向かう覚悟を固めアーチャーに声を掛けようとしたがアーチャーの表情を見て声をかけられなかった。

「どうしたの？アーチャー」

アーチャーの表情は明らかに何かに震えている。

今まで涼しい態度を崩さなかったアーチャーが震えている。。

「アーチャー？」

契約のラインを通して微かにアーチャーの心境を感じる。それは動揺。焦りにも似た感情が凜に流れてくる。

何事に対しても冷静に判断をする、赤い従者には珍しい感情の発露だった。

「くっ、アーチャー行くわよ」

だが、今は自身の従者の様子を気にする暇などない。

金ピカは今にも風見達に止めを刺そうとしているからだ。

凜は覚悟を決め、無駄だと思いつながら手持ちの宝石をとりだし立ち上がった。

その時、『……シロウ』とイリヤが呟いた瞬間！！

「クッ」

赤い騎士は舌打ちして立ち上がり戦場へと飛び降りた。

S I D E O U T

「貴様か。王である我に不意打ちをした雑種は……よくも雑種の分際で死ぬ」

金髪の子・ギルガメッシュは無数の宝具に命令を出しアーチャーを仕留めようとするが

トレス・オン
「投影開始」

アーチャーはギルガメッシュと同じだけの剣を出現させそれを相殺した。

「アーチャー……貴方!!」

遅れ降りてきた凜はアーチャーを見て驚愕する。

「それは士朗の!!」

そう、今アーチャーが唱えた呪文は衛宮士朗が魔術を使う時と全く同じだったからである。

「貴様……何をした」

ギルガメッシュはアーチャーを凄まじい形相で睨みつける。

「なに、君がやったことと同じ事をしたまでだよ。ギルガメッシュよ。」

「フン、たわけ。私の目をごまかせると思うか。貴様贗作者だな。^{フェイカー}」
王の真似事とは、我を愚弄するつもりか

ギルガメッシュは宝具の群れを再びアーチャーに襲わせる。
だが先程と同じようにギルガメッシュの宝具と同じだけの宝具をアーチャーは展開し相殺する。

「ぐうおのれ」

不快を通り越し憎悪すら滲みだす声を出し、ギルガメッシュはアーチャーを睨みつける。

それは単純な引き算だった。

1と1を引けばゼロになる。

10と10を引けばゼロになる。

アーチャーがギルガメッシュに仕掛けているのはそれと同じ。

ギルガメッシュが無数の宝具をアーチャーに襲わせればアーチャーは同じだけの宝具を展開すればいい。

ギルガメッシュの無敵の能力である宝具の群れに対応できる能力をアーチャーは持っていた。

まさかの天敵ギルガメッシュの表情は憎悪と憎しみをアーチャーに向ける。

「シロウ？」

イリヤはアーチャーの背後から弱弱しく口を開く。

士朗とは全く似ても似つかわない。

だがなぜかイリヤにはアーチャーの後姿が士朗とダブって見えていた。

「さあな。」

だが、アーチャーはイリヤの質問をどこかごまかした感じで苦笑しながら答えた。

「凜。ここは私に任せて風見志郎達を連れて早く行け。」

次にアーチャーは自分が足止めを務めると凜に言う。

「アーチャー……貴方……少しの間、足止めをお願い」

凜は唇を噛み締めた。

凜には分かっている。

いくらアーチャーでもギルガメッシュとシヨツカーV3の足止めを一人で出来るわけないと、ここでアーチャー一人残すことは死刑宣告しているような物だと凜には分かっている。

「だが、凜よ。足止めするのは構わないが、倒してしまっても構わないんだろ。」

そんな、凜の気持ちを知ってか、アーチャーは笑みを浮かべ涼しい態度で凜に言う。

「勿論よ。分かっているわね。絶対に生きて帰ってきて貴女には聞きたい事が沢山あるんだからね。絶対に勝ちなさい」

凜はいつもの強気な態度でアーチャーに最後の令呪を使用した。

「すまない。凜、早く行け」

アーチャーは令呪のバックアップにより力が湧いてくるのを感じギルガメッシュと対峙した。

凜もアーチャーの言葉に頷きイリヤを掴み逃げようとする。

「さあ、イリヤスフィール逃げるわよ」

「待つて、アマゾンが」

「分かってるわ」

凜はイリヤを掴みアマゾンの傍まで走った。

「貴方しっかりして」

「アマゾン」

凜とイリヤの必死の呼びかけに

「ゲウ……イリヤ」

アマゾンはよろよると血を流しつつも立ち上がる。

「アマゾン」

イリヤはアマゾンが生きていたことに喜びを表す。

「貴方説明している暇はないわ。早く逃げるわよ。急いで」

だが、今は喜んでいる暇はない。ここは戦場だ。

凜はアマゾンとイリヤに逃げるよういい、次にV3のもとまで走った。

「風見さん。しっかりして」

「ぐう……凜ちゃん」

「良かった。まだ生きはあるようね。」

V3はアマゾンと同じようふらふらと起き上がった。切り裂かれた肩部からはおびただしい量の血を流しており生きているのが不思議なくらいであった。

凜は風見を起こしイリヤ達と逃げようとした、その時!!

「俺を無視してどこに行くつもりだ」

凜の後ろにショットカーV3が立っている。

「まずい!..!」

遠目で見ていたアーチャーは焦るがギルガメッシュと対峙している状態で凜を助けに行く余裕などない。

「遠坂凜・・・それが貴様の名前だな。」

凜の後ろではショットカーV3が冷たく視線を向けたまま凜に問う。

「そうよ。それがどうかしたの」

凜は恐怖を感じながらも強気な態度で答える。

「そうか……遠坂……憎むべき名だ。」

シヨツカーV3は拳を振り上げる。

「死ね」

静かに言い、シヨツカーV3は拳を振り下ろした。
このままでは直撃する凜も死を覚悟した。

「グツ。大丈夫か」

寸前、V3が痛む体を気力で奮い立たせシヨツカーV3の攻撃を防いだ。

「風見さん!!」

凜は自分を助けたV3を見る。
尋常じゃないほどの血がだらだら流れとても痛々しい。
みるからに戦える状態じゃない。

「凜ちゃん、早く行け。こいつの相手は俺がする」

V3はシヨツカーV3の両拳を掴んだまま凜に言う。

「無理よ。風見さん……そんな体で戦ったら死んでしまっわ。」

「大丈夫だ。V3は不死身だ。早く行け」

V3の剣幕に押され、凜はV3を心配しつつもイリヤと一緒に正面
ドアを行き外に出た。

「フン。V3あの小娘たちを逃がしたと思っ
ているがいいのか。外には俺の部下が
いる。この森からは絶対に逃げ出せん。」

V3と力比べをしているショットカーV3は嘲笑いながら言う。

「グウ、そうかな。凜ちゃんを甘く見ないことだ。それにアマゾンもいる。」

「フン、生意気な。まあいい。貴様を殺して小娘たちを俺が追えばいい話だ。さて、その体でいつまでもつ。」

「ぐう」

ショットカーV3は腕に入れていた力を上げる。

V3は徐々に膝を落としていく。

純粋な性能の力ではショットカーV3が上で、さらにV3は重傷を負っている。

「まだ粘るか。食らえフリーザー・ショット!!」

ショットカーV3は両腕を掴みあったまま触覚から冷凍光線がだした。V3二十六の秘密

フリーザー・ショット

V3は触覚から冷凍光線を出すことが出来るのだ。

「グウ」

ショットカーV3が出した冷凍光線を受け、V3の体はどんどん凍っ

ていく。

「どうだ。苦しいか」

「足りんな。」

「何だと!?!」

「冷え足りんといっているんだ」

V3は限界が超え今にも倒れそうだが精一杯の強がりをしてショッカーV3に言った。

「ぐっ、強がり」

その言葉に、ショッカーV3は激昂し力を更に入れる。

「ぐう・・・あああ」

V3が気力で立たせている膝も徐々に下がっていきついに膝をついてしまった。

「もう、限界か。」

ショッカーV3は膝をついたV3の顔に蹴りを入れた。

「ゴホ」

V3はマスクから血を吐きだし倒れ込む。

「V3分かるか。この敗北は貴様の甘さが原因だ。あの世でせいぜい悔やむがいい」

シヨッカーV3は足を振り上げてV3の命のベルト・ダブルタイフーンを踏みつけた。

「うはあ」

V3は口から尋常じゃないほどの血を吐きだし変身が解ける。ダブルタイフーンは見るも無残に破壊されている。

「フフフフフ・・・ハハハハハハ。愛とか正義とかほざくからこうなるんだ。まあいい、今日から俺が、俺だけがV3だ」

そこにはシヨッカーV3が勝利の余韻を感じながら高笑う声が響くだけだった。

979

「くっ・・・風見志郎敗れたのか」

苦い表情を浮かべながらその惨状を横目でアーチャーが見ていた。

「フン、あの男も死んだか。脆いものよ。」

ギルガメッシュはつまらなそうに僅かにV3に視線を向けた。

「さあ、雑種お前もそろそろ消える。」

「さて、どうかな。悪いがただで敗れるつもりはない。そうだな君の命位は貰って行く」

「ほざいたな。雑種」

ギルガメツシユはアーチャーの言葉に怒り狂う。

「それが出来るかな。アーチャー」

勝利の余韻を感じ高笑いをしていたシヨツカーV3も殺気を向けながらアーチャーの前に来た。

アーチャーはシヨツカーV3の殺気を受け油汗を流す。

V3は敗れた。

だが、戦いは激しさを増していく。

V3は命ともいえるダブルタイフーンを破壊された。

次回は撤退にご期待下さい。

72話 敗北のV3 (後編) (後書き)

次回は四番目の男が登場!!

73話 機械の右腕を持つ男(前書き)

今回は4番目の男参上!!

73話 機械の右腕を持つ男

アインツベルンの森 午後3時

正午を過ぎ、夕方に近づく時間帯に

凜達はアインツベルンの森をバイクで疾走していた。

「ちょっと、何なのよ。このバイク桁違いじゃない!!」

今、凜はV3のバイク・ハリケーンに乗っていた。

ただし、凜は運転しておらず、ハリケーンは自動操縦で走っている。それでも改造人間専用マシン、ハリケーンの凄まじいパワーと出力に凜は振り落とされないように必死にしがみついていた。

凜はハリケーンにしがみついたまま恐る恐るスピードメーカを見る。

「ちょっと、冗談でしょ。これ!!」

スピードメーカは軽く300kは超えていた。

凜は迫りくる風の暴力を受け続け目眩を覚え軽く頭がくらくらしてくる。

「大丈夫か?」

隣でジャングラを走らすアマゾンには心配そうに凜に話しかけた。

「大丈夫よ……上等じゃない。この遠坂凜を舐めんじやないわよ」

凜はがーと叫び、体調を気力で持ち直した。

「泣き言なんて言ったられないわ」

今、アインツベルンの城では私達を逃がすために風見とアーチャーが命懸けで足止めしてくれている。

それなのに、泣きごと何か言ったら風見達に申し訳なかった。

今、自分達は風見とアーチャーの為に全力で撤退しなくちゃいけないと思ひ凜は気力を振り絞りしがみつくと腕に力を入れ直す。

アマゾンは今この凜の状態なら大丈夫だと思ひ、後ろに座りアマゾンにしがみ付いているイリヤに話しかける。

「イリヤ・・・もうすぐ森、終わる。ガンバレ」

「あ・・・り・・・がとう。アマゾン」

答えるイリヤの声には元気がなかった。

いくらアマゾンの後ろにいるとはいえ300Kのスピードで走っているのは未発達なイリヤの体では苦しいものがあった。

勿論、それだけでなく大切な人を失った悲しみもありイリヤは泣きたい気持ちを必死に耐えているのだ。

「イリヤ」

アマゾンにもイリヤの気持ち分かる。

短い間とはいえ、寝食を共にした仲だ。

そんな彼らを失った悲しみと怒りがを彼も心で感じている。

「ガウ・・・」

それにアマゾンも完全な状態じゃない。
ギルガメッシュにやられた傷が完全に塞がっておらず倒れてもおかしくないほどの重症だ。
だが、それを気力で奮い立たせイリヤと凜を先導している。

アインツベルンの森入り口付近にもうすぐ到達する距離まで三人は来ていた。
何もなければもうすぐ森を抜けられる。
だが、そう簡単にはいかなかった。

「え、なに？」

森の入口付近五キロ前位で凜の乗っているハリケーンが失速し動きを止めてしまった。

「どういうこと……急に動きをとめるなんて？」

凜が困惑している最中、いつの間にか凜のとなりでバイクを止めたアマゾンが悲しそうな表情をしてアインツベルンの城がある方に視線を向けている。

「カザミサン」

そんなアマゾンを見て凜は全てを理解する。

「そんな……風見さんが」

風見志郎・仮面ライダーV3が敗れたということ
ならばバイクが止まるのも納得できる。

ハリケーンはV3が念話を送ることで自動操縦できるのだから

「アマゾン」

友達であるアマゾンの悲しそうな表情にイリヤも悲しくなった。

「安心しろ。お前達もすぐにV3の後を追うことになる。」

悲しみにくれる余裕もなく謎の人物が凜達に話しかけてきた。

「貴方は・・・そんなショッカーライダー!!」

凜は声が聞こえてきた方に視線を向け愕然とした。

目の前には力だけなら一文字と同等のショッカーライダーがいる。

隣ではがると息を荒くしショッカーライダーに敵意を向けるアマゾンがいるが傷だらけで戦える状態でなく期待できない。

「ハハハ、ショッカーV3の命令でここに待機していたが俺は運がいい。瀕死状態のアマゾンが目の前にいるのだからな。俺の手でお前を殺し、その小娘を捕らえれば俺は大幹部だ。その魔術師大人しくしている。何もしなければ見逃してやる。」

狂気的な笑みを浮かべズシリズシリと一歩一歩近付いて来る。

アマゾンは気力で体を奮い立たせ戦おうとするが今の状態では無理だ。

「・・・アマゾンはやらせない。」

イリヤは体を震わせながら腕を出しいつでも魔弾を放てる構えを取りアマゾンを守るように立った。

「イリヤ・・・ダメ。危ない」

アマゾンはイリヤの無謀な行動を止めようとするが戦いのダメージが抜けないのか体が痛みうまく動けない。

「オマエが俺と戦うつもりか。獲者風情が」

イリヤの行動をショットカーライダーは嘲笑う。

「フン、アマゾンは私の友達。私が絶対を守る。」

イリヤは震える手をもつ片方の手で押さえ魔弾を放った。

「無様だな。まあいい。無傷で捕獲しろとは言わなかったからな。腕一本くらい貰うとするか」

ショットカーライダーは魔弾を簡単に避け、イリヤに急接近し手刀を構え振り上げる。

「あ・・・ああ」

イリヤは恐怖から声にならない声を上げる。無情にも手刀を振り下ろそうとするが

バキ「く」

「かったあゝ。何て硬いのよ。」

凜が体に強化を施しショッカーライダーの顔面を拳で殴りそれを防いだ。
だが、それでもショッカーライダーのマスクは固く手をプルプル振るわせる。

「貴様・・・魔術師。何の真似だ。大人しくしていれば見逃してやるうと思っていたが」

ショッカーライダーは殺気を凜にぶつけた。

「悪いけど、動くなといわれて大人しくしてられるほど私は人間出来てないわ。」

「ほお、それは死んでもか」

「いいえ、死ぬつもりは全くない。悪いけど死ぬのは貴方一人よ」

凜は宝石を取り出し構える。

「受けなさい」

凜は宝石を投げショッカーライダーの前で爆発し直撃する。

「これならどう。」く倒せないまでもダメージはある筈」

凜は思い爆発で煙が舞っている目の前を見据えている。
だが、そんな思いはすぐに崩れ去った。

「そんな・・・」

「少しは効いた。どうやらお前を侮っていたようだ」

少しは緑色のボディに傷が付いていたがそれほど酷くはなくシヨックライダーはピンピンしていた。

「魔術師・・・もう気が済んだか。死ね」

シヨックライダーは凜の前まで来て拳を振り上げる。

凜も死を覚悟する・・・だが

「ロープ・アーム」

「ぐ、何だ。」

謎の声と共にフックのついたロープがシヨックライダーの腕を絡め取る。

「ヤー」

木の上から何者かがジャンプしてくる。

その人物は青いヘルメットから黄色いマフラーを付けた男であった。

「貴方、仮面ライダー!!」

凜とイリヤは仮面ライダーのような謎の男の登場に困惑する。

他の仮面ライダーと違いマスクはフルフェイスではなく口が露出させていて彼が仮面ライダーかどうか判断できなかったからである。

「ユウキサン!!」

だが、アマゾンには嬉しそくに謎の男の登場を喜んだ。

「私の名前はライダーマン。アマゾン、彼女たちを連れて早く逃げてくれ。」

アマゾンを知っている。

どうやらライダーマンと名乗った男は仮面ライダーのようで凜とイリヤは安心した。

凜達はライダーマンの言うとおり逃げようとするが逃げる前に凜はライダーマンに伝える。

「ライダーマン。森の奥の城に風見さんが敵を足止めしているわ」

「大丈夫だ。すでに先輩達が向かった。君は安心して早く逃げろ」

「わかったわ。貴方達には関係無いかも知れないけど・・・できたら白髪の男もいる筈だから助けてあげて」

凜は今度こそ走りアマゾン達と共に森を後にした。

「貴様、よくも・・・もう少しで大幹部になれた所を、くそ貴様を倒してすぐに奴らを追わねば」

ロープに腕を絡められながらショックカーライダーはライダーマンを睨んだ。

「悪いがここから先は通行止めだ。お前は俺が倒す」

ライダーマンとショッカーライダーの戦いは始まった。

凜達の絶対絶命の危機にライダーマンが現れた。

城の中にいる風見達は………

ライダーマンの言う先輩とは次回に続く。

74話 撤退

アインツベルンの森 午後3時

ライダーマンとショッカーライダーの戦いが始まる、少し前、1号、2号は愛機サイクロンに跨りアインツベルンの城へ向けて疾走していた。

「……風見」

「風見の馬鹿野郎」

1号、2号はバイクを走らせながら悲しそうに呻いた。
今、仮面ライダー1号、2号が持つ、特殊能力の一つ対怪人用の脳波探知機Oシグナルから完全に仮面ライダーV3・風見志郎の反応が消えた。

「くっ、風見無事でいるよ。」

1号、2号は風見の無事を信じ、アインツベルンの森を突っ走っていく。

SIDE アーチャー アインツベルンの城 一階大通り

「ええ〜い。フェイカー風情がよく粘る。」

金髪の男ギルガメツシユは苛立ちを感じていた。

「アーチャーめ。しぶとい。」

シヨツカーV3も苛立っている。

ギルガメツシユは宝具の群れは雨のようにアーチャーへと降り注ぐ。

「I am the born of my sword (体は剣で出来ている)」

アーチャーは呪文を詠唱し、ギルガメツシユと同じだけの宝具を投影してそれを相殺。

そして、その宝具の雨を掻い潜り攻撃してくるシヨツカーV3には投影し手に持っている干将・莫耶で防いでいる。

アーチャーは二対一の状況で互角の戦いをしていた。

まず、ギルガメツシユもシヨツカーV3も単純な能力でいえば、アーチャーの能力を遥かに上回っている。

普通ならば、すぐにアーチャーが敗退してもおかしくない。だが、

「ええ〜い。雑種そこをどけ邪魔だ。」

ギルガメツシユはシヨツカーV3がいることも構わず宝具の雨を仕掛ける。

「貴様〜。貴様こそ俺の邪魔をするな」

シヨッカーV3は宝具の雨をかわすため、アーチャーから距離を開ける。

二人の攻撃には連携が全くない。

まったくギルガメツシュとシヨッカーV3、二人には全くの仲間意識が無く、チームワークというものが存在しない。

己々が淡々と倒すべき標的に攻撃を仕掛けている状況だ。

一方が遠距離攻撃でもう一方が近距離攻撃の場合、連携は必須なのだが、互いに意思疎通すら行わない波状攻撃は、後ろからギルガメツシュの攻撃と前からアーチャーの攻撃が挟み打ちという形になりシヨッカーV3は強く攻勢に出れない。

二人の強大な力が足を引つ張るといふ最悪な形になっていた。

そのおかげでアーチャーは互角の戦いを繰り広げている訳だが・・・それは酷く均衡の上で成り立っていた。

どんなに、アーチャーが有利な状況で戦えたとしても絶望的な事には変わらない。

まずアーチャーとギルガメツシュとでは魔力量から違う。

今は令呪の力で持っているがこんなに宝具を投影し続けていれればいずれ魔力切れになってしまう。

それにシヨッカーV3の攻撃を防ぎ続けているといっても

「死ね」

「くっく」何て威力だ。完全に避けてこれか」

完全にアーチャーはショッカーV3の攻撃を避けているのだが、ショッカーV3の攻撃の切れ味が鋭く、避けても軽いカマイタチとなつてアーチャーの体を少しづつ切り裂いていた。

まともに直撃すれば一撃で致命傷になるだろう。

いや、普通のサーヴァントならばとつくに消滅している筈だ。

アーチャーにはセイバー、ランサー、アサシンのように武技に対する才能は一切ない。

だからこそ、アーチャーは生前死に物狂いで諦めず努力して身に付けた防御に特化した剣技。

ゆえにアーチャーの剣技は無骨なれど美しい。

更に、何度も戦場を渡り歩き身に付けた心眼のスキル、その二つを兼ね備えているからこそショッカーV3の攻撃とギルガメッシュの攻撃を凌げているのだ。

だが、それも限界を迎える事になる。

「埒が明かぬな。」

ギルガメッシュの苛立ちは頂点に達しようとしていた。

「成程。そろそろこの茶番も終わりにするか」

そんなギルガメッシュを尻目にショッカーV3はこの状況を終わらせる手を思いついたのかほくそ笑んだ。

「ギルガメッシュ、次にお前達の攻防が終わったら俺があいつを仕

留める。だからその場で一旦攻撃を止める」

「貴様、我に命令するつもりか……まあいいだろう。貴様の言う通りにしてやる。だが、もし貴様の策が通じなければ貴様もろとも奴を殺す。精一杯やるんだな雑種」

ギルガメッシュもいい加減この状況にうんざりしているのかショットカーV3の命令に素直に従う。

だが、その目からは殺気が滲みでている。その手が失敗すれば言葉通りショットカーV3諸共アーチャーを殺すつもりだろう。

「ふん、まあ見ている」

ショットカーV3はギルガメッシュの殺気を受けても平然とした態度で軽く答えた。

ショットカーV3は発言通り、宝具同士が衝突し相殺されたらアーチャー目掛けて突っ込んでいく。

「なに！……突っ込むつもりか」

アーチャーは驚愕と困惑の眼をショットカーV3に向けた。

ギルガメッシュも宝具の展開を止めているどういつつもりだ。

数多の戦場で培った戦術眼でもショットカーV3の行動が読めない。

「ちい、投影開始。……工程完了。全投影……待機」

だが、考えている暇はない。

アーチャーは周辺に12の剣を投影する。

「停止解凍、全投影連続掃射」

アーチャーは12の剣をショッカーV3に仕掛ける・・・だが

「フン、狙い通りだ。覚悟するがいい」

ショッカーV3はアーチャー目掛けてジャンプした。

「行くぞ・・・V3ドリルアタック!!」

V3二十六の秘密

V3ドリルアタック

ドリル状に回転し、その回転力と勢い貫通力で体当たりし敵を倒す
必殺技だ。

「なに!!」

アーチャーは驚きの余り目を見開いた。

何と、12の剣を回転しながら全て弾いたのだ。

「くっ」

アーチャーは舌打ちしそれを避けようとするが

ザシュー「ゲウ」

完全には避けきれず体を切り裂かれてしまふ。

重症とまではいかないがかなり切り裂かれ血がポタポタ流しながらアーチャーは膝をついた。

「……………ここまでか」

「小賢しい、時間稼ぎもここまでのようだな。雑種よ」

アーチャーに止めを刺そうと宝具の剣群を展開する。

「どうやら、これまでか。すまない……凜……いや遠坂。約束は守れそうにない」

アーチャーは死を覚悟する。

それと同時にギルガメッシュは宝具の剣群を射出。

だが、「GYAAAAAA」

「何だと!!」

息絶えた筈のバーサーカーが立ち上がり斧剣で宝具を叩き落とした。

「馬鹿な!!まだ生きがあるのか」

ギルガメッシュは驚愕する。

バーサーカーは咆哮を上げ次にショッカーV3に斬りかかった。

「くっ、しぶとい奴だ。」

ショッカーV3も堪らず後退する。

「バーサーカー・・・何故？」

アーチャーは困惑する。

バーサーカーはアーチャーをその身で守る様に立っているからだ。

《お前とその男には・・・我が主を救って貰った恩がある》

狂化し喋ることが出来ないバーサーカーが口を開いた。

「バーサーカー・・・君は」

《往け・・・ここは私が食い止める。その男を連れて早く往け》

「済まない・・・恩にきる」

言葉は少ないがアーチャーは目の前の巨人に感謝し血を流し倒れている風見を抱え外に出ようと窓へと走った。

「逃がすか」

それを逃がさまいとショットカーV3は止めようとするがバーサーカーが妨害する。

「死に損ないが・・・いいだろう完全に殺してやる」

ギルガメッシュとショットカーV3の攻撃をバーサーカーは身を挺して防いだ。

もう、バーサーカーが現界出来る時間は僅かしかない。

バーサーカというクラスは消滅する間際、僅かな時間だけ狂える運命から解放される。
喋れるということはバーサーカーは理性を取り戻した。つまりもう時間がないということだ。

最後の力を振り絞り大英雄は最後の戦いをするのだった。

S I D E O U T

風見志郎の反応が消え、30分位経った頃、1号、2号は風見の反応が消えた5K地点前まで来ていた。

「一文字、ここからは慎重に進もう。」

1号は状況を冷静に判断し2号に言う。

「ああ、風見の事は早く助けたいが、ここで俺達が焦って少しでも判断を間違えたら助ける所じゃなくなるからな」

2号も1号の判断に頷きサイクロンのスピードを落とす。

1号、2号も歴戦の戦士、自分達が入っている森の異常な空気には気が付いている

今、森を漂っている・・・この空気は戦場の空気。

神経を集中させ先に進むダブルライダーであったが、ある音が聞こえバイクを止める。

「この音は？」

「こっちに来るぞ」

少し離れたところから、誰かが荒い息をしながらこっちに走って来ている。

ダブルライダーは神経を赤い複眼へ集中させ走って来る人物を見て驚いた。

「あれは……確か凜ちゃんのサーヴァントでアーチャー……！！おい待てよ。アーチャーの抱えてる奴はもしかして」

2号はアーチャーの登場とそしてアーチャーが抱えている人物を見て驚きの余り硬直する。

「ああ、間違いない。あいつは……風見」

アーチャーに抱えられ体全身から血をポタポタと流す風見の姿があった。

「ム……貴様は……ショッカーライダーではない。……一文字隼人か。もう一人は……」

「大丈夫だ。こいつは敵じゃない。それよりもアーチャーどういうことだ。風見は……どうしたんだ」

2号は1号が敵ではないことをアーチャーに言い、風見の状態について聞いた。

「風見志郎は敗れた。この男の偽物に」

「偽物だと!!」

アーチャーの言葉に1号は驚く。

「まさか・・・ショッカーV3、奴にやられたのか。」

ダブルライダーが驚く最中、アーチャーは抱えている風見を2号に向かい投げ飛ばした。

ガシ「とつとつ、なんのつもりだ」

いきなりの行動に2号はアーチャーに問う。

「お前達は風見志郎を連れて早く逃げろ」

「お前は どうするつもりだ」

アーチャーは1号達に背を向ける。

アーチャーの行動を不審に思い1号が問うが

「悪いが・・・私にはやるべきことが出来た。もし凜に会うなら今は戻れないと伝えてくれ」

「おい・・・アーチャー。それはどういう・・・」

アーチャーは自分の用件を伝えると2号の制止も聞かぬまま飛び去って行った。

2号がアーチャーの行動について考えるがそんな余裕はない。

「奴の言うとおり早くこの森を抜け出した方がいい。風見をこのままにしておく・・・死んでしまう」

1号は風見の状態をみて全てとはいかないがある程度把握する。

命ともいえるダブルタイフーンが破壊され、更に体中の至る所から血を流し、とても改造人間の自己再生能力でどうにかなるレベルではない。

早くどうにかしないと風見は死んでしまう。

「そうだな」

2号も頷き、1号、2号はバイクを逆転させ森の出口に向き急ぎ疾走した。

アインツベルンの森 入口付近

「どうした。最初の威勢はどこにいった」

シヨッカーライダーが高笑いしながら目の前の存在・ライダーマンを殴りつけている。

「グウ」

堪らずライダーマンは後退。

「フン、お前のことは知っている。仮面ライダー4号・ライダーマ

ン。他の仮面ライダーとは違い、全身改造を行っておらず、右腕だけが機械の中途半端な存在。力においては他のライダーと比べる事なく弱い。お前の様な脆弱な存在に俺がやられるか」

ショッカーライダーはライダーマンを嘲笑う。

「それがどうした。確かに俺は他のライダーに比べ戦闘能力は低い。だが、マシンガン・アーム」

ライダーマンは機械の右腕をカセットアームと呼ばれ、アタッチメントを変えることで様々な攻撃が可能になる。

ライダーマンは右腕をマシンガンアームへと変え銃を連射する。

「フン、そんな鉛玉などで俺を捉えられると思うな」

銃弾の連射をするが、ショッカーライダーのスピードは速く捕らえきれない。

「くっ、弾切れか」

ついにはマシンガンアームの銃弾は底をついてしまいライダーマンは絶対絶命のピンチの陥る。

「フン、終わりか。ならば死ぬ。ライダーキーク」

ショッカーライダーのオリジナルである1号、2号の必殺技ライダーキックをライダーマンに仕掛けるためジャンプする。

直撃すれば致命傷だ。

だが……「狙い通りだ」ライダーマンはにやりと笑みを浮かべ弾切れの筈のマシンガンアームから銃弾を発射した。

「くっ、猪口才な。だがその程度くらい……何!!」

ショッカーライダーは銃弾だと思い、攻撃を耐えようとベルトのタイフーンをフル回転するが……それは銃弾などではなかった。

「なんだ……これは身動きが取れない」

ネバネバしたようなものが体に纏わりつき身動きが取れない。

「どうだ、硬化ムースの味は……確かにお前の言うとおり俺は弱い。俺の攻撃力で貴様を破壊する事は無理だろう。だが破壊が無理ならば動きを封じればいい話だ。これで終わりだ。ドリル・アーム!!」

ライダーマンはアタッチメントを変え、マシンガンアームからドリルアームへと装備を変える。
右腕のドリルが回転する。

「やめる……やめてくれ」

ショッカーライダーは先程のライダーマンを見下した態度から一変、目の前のライダーマンに恐怖を覚える。そして命乞いを始めた。

「悪いが……容赦はしない。ヤアアアアアア!!」

ドリルアームが装着されている右腕を左腕で押さえながら突撃する。

「あああああああ」バキ、ボキ、ベキ

ドリルアームの威力はコンクリートの分厚い壁にも簡単に穴を開ける事が出来る。

ドリルはショットカーライダーの体を簡単に貫通し爆散した。

勝利の余裕に浸る間もなく1号、2号から念話が届いてきた。

《結城……風見が危ない。すぐに治療しないと死んでしまう》

「風見が!!」

親友の命が危ないと知り、ライダーマンは動揺した。

《すぐに戻り治療する。場所は……》

「分かりました。すぐに向かいます」

ライダーマンは自分のバイク・ライダーマシンに跨り念話で送られてきた場所に向かった。

その頃、アインツベルンの城では

「ようやく、死に絶えたか。雑種」

「フン、図体がでかいだけの雑魚が」

ギルガメツシユとシヨツカーV3の目の前には体が消滅していく。
バーサーカーの姿がある。

「くそ……大分時間を取られた……ちい……逃げられ
たようだ」

苛立ちながらシヨツカーV3は舌打ちした。

「フン、我自ら動いて逃げられるとは貴様のせいだぞ。無能が」

ギルガメツシユは見下しながらシヨツカーV3に言う。

「黙れ……貴様が邪魔さえしなければ早くケリはついていたん
だ」

「雑種風情がよく吠えるな。どうやら死にたいらしい」

周りは今にも戦いが起きそうな空気である。

「と、言いたいところだが喜ぶがいい。言峰から貴様には手を出す
など強くいわれている。今回は見逃してやる。早く我の前から消え
失せろ」

ギルガメツシユは殺気をシヨツカーV3に向けながら言い放つ。

「ああ、俺もお前と同じ空気を何時までも吸いたくない。言われな
くても消えてやる。」いずれ、貴様も俺の手で殺してやる」

シヨツカーV3はその場から消え去った。

「フン、道化め」

シヨッカーV3が消え去った方向をギルガメツシュは苛立ちながら見つめる。

「まあいい、最早ここに用はない。十年振りに我の花嫁に会いに行くとするか」

ギルガメツシュは獯猛な赤い瞳をしたまま城を後にした。

誰も居なくなつた城に残るのは異常な静けさだけだった……

予告編（前書き）

物語も終盤に入ったのでこれからのストーリーの予告を途切れ途切れにしたいと思います。

予告編スタート

予告編

予告篇

聖杯戦争、デスシヨッカー……全ては十年前、運命のあの日から全ては始まった。

「何でだよ……なんで僕達がこんな悲しみに耐えないといけないんだよ。」

『少年……力を望むか』

「誰!?!……誰なの」

『私は君の協力者だ……私を受け入れれば貴様に力を与えてやる。』

少年と謎の男の声の出会い。

その日から運命の輪は回り始めた。

そして、

「衛宮士朗……俺達の仲間になる気はないか」

「お前・・・何言ってるんだ。なんでお前達のような人を人とは思わないような奴らの仲間にならなくちゃならないんだ」

「まあそういうな。俺達とお前は同じなんだよ。十年前お前も感じた筈だ。あの大火災の夜に・・・」

「お前は」

「そう・・・俺もあの日の生き残りだ」

ショッカーV3に隠された悲しき真実。

さらに、

「風見、必ずお前を助けてやるからな」

「絶対に死ぬんじゃない」

ダブルライダー、ライダーマン決死の再手術

その頃、瞑想世界

『お兄ちゃん』

「雪子……ここは一体。」

目覚めた場所はかつて住んでいた家

「そうか……ここは夢か」

『お兄ちゃん……行っちゃうの』

「悪いな……俺はまだそちらに行けそうにない」

再び戦いに戻る赤い仮面の戦士

「そうよ……私が聖杯よ」

白い少女に明かされる驚愕な真実

そして

「本郷猛……一文字隼人……ここが貴様の墓場だ」

「お前達は……！」

甦ったかつての大幹部たち

「衛宮士朗、貴様さえ、貴様さえ存在しなければ」

「お前は後悔しているのか・・・」

信念を賭けて相対するは同じ存在

「フフフ、わしの望み、永遠がもうすぐ現実のものとなる」

暗躍する蟲の主

「さて、生まれ出る物に祝福を送るだけだ」

神父の目的は

「兄さん・・・もうすぐだね。もうすぐだ」

「ああ。もうすぐあの方が甦る」

運命に翻弄された二人の兄弟

そして……闇が降臨する。

「ついに、私は最高の肉体を手に入れた。さあ……仮面ライダー。最後の戦いを始めよう」

立ち向かうは

「みんな、これが最後の戦いだ。行くぞ」

歴戦の11人のライダー達

その時、士朗、凜、桜、セイバーは……

「じゃあな。衛宮君」

「そんな……風見さああああん」

全ての運命は終わりを告げる

75話 魔術回路の移植 / 風見の再生手術

衛宮邸

今、この家には三人しかいない。
まだ傷が癒えず部屋で寝ている敬介と士朗とセイバーだけだ。

「うううう」

「セイバー」

士朗は苦しそうに呻く布団で眠りついているセイバーの手をそつと握りしめている。

「・・・シロウ・・・シロウ」

「セイバー、目が覚めたのか。」

セイバーは目を覚ます。

「シロウ、なぜなのです。貴方には聖杯戦争による被害から人々を守るという大義がある筈、なのになぜ私を心配するのです？敵に操られているとはいえ私は貴方に剣を向けたのですよ。我々サーヴァントが与えられた命はかりそめのものです。たとえこの世界で死を迎えたとしてもそれは元いた場所に戻るだけ。私そのものが消えていなくなる訳ではありません」

セイバーは士朗に問うた。

「いや、セイバー。裏切ったのは俺の方だ。それに俺はそんなふう
に簡単には割り切れないよ。俺にとっては今ここでこうして話して
いるお前は確かに生きてそこにいる存在だし、それにお前は女の子
で共に戦う大切な仲間なんだ」

「この人なら私を理解してくれる。だが私には・・・」
「シロウ・・・ですが私にはもう・・・ぐう」

「セイバー」

セイバーが再び苦しみだした。

「大丈夫だ。絶対に俺がお前を助けてやる。」

士朗は握る手に力を入れる。

自分が情けなかった。

「俺がまっとうなマスターなら」

俺がちゃんとしたマスターでセイバーとの間にラインがしっかり繋
がっていればセイバーはこんなに苦しむことはない筈だ。

自分の不甲斐無さに唇を噛み締める。

それから、しばらくして外からブーンとバイクの音が聞こえてきた。

「遠坂、風見さん帰って来たのか」

士朗は風見達が帰って来たのだと思い玄関に向かった。もう、一刻も猶予がない。

士朗は凜が出かける前にセイバーを助ける方法があると言って出ていった。

それをして貰おうと玄関に行ってみると

「イリヤ・・・何でイリヤが？遠坂、その人は」

士朗が状況を凜に尋ねようとした時、

「アマゾン！！どうしたんだ。その傷は！？」

凜の肩に支えられ体中から血を流しボロボロなアマゾンの姿があった。

「敬介さん。話は後よ。早く治療しないと」

「ああ、分かった。」

敬介は凜からアマゾンを受け取り治療するために奥へと運んで行った。

「アマゾン」

イリヤはその様子を心配そうに見ている。

「どうしたんだ。遠坂・・・イリヤ何があったんだ。」

「士朗……アマゾンが……バーサーカーが」

イリヤは緊張の糸が切れたのか涙を流し士朗に抱きついた。

「イリヤ……大丈夫だ。大丈夫だから落ち着いて」

士朗はイリヤを宥め、落ち着いて話をする為に居間へと向かった。

衛宮邸 居間

居間には士朗、凜、イリヤ、敬介の4人が居てアインツベルンの城で起きた話を凜から聞いていた。

アマゾンは包帯を巻かれ布団で休んでいる。

「そんな……風見さんが」

敬介は驚きと悲しみの表情をする。

「遠坂、嘘だろ。風見さんがやられる訳なんかない。だって風見さんは正義の味方だから」

「落ち着いて士朗。たぶん大丈夫。まだアーチャーの令呪は消えてないし、それに私達を助けたライダーマンって人が先輩達が今向かっている所っていつたから大丈夫の筈よ」

「結城さん。先輩……」風見先輩をお願いします。先輩」

敬介は心で結城達先輩に風見を任せ、凜にこれからの事を聞いた。

「それで、凜ちゃん。これからはどうする。」

「そうね。まずは士朗。今は少しでも戦力が欲しい。令呪はあるけどアーチャーから連絡が全くないわ。だから士朗覚悟はいい」

凜は士朗を見据え、士朗にどうするかを問う。

「ああ、遠坂。俺はセイバーを助きたい。頼む」

「OK、なら膳は急げよ。早くセイバーの所へ向かいましょう。」

士朗は凜と共にセイバーの部屋へと向かう前

「イリヤ、自分の家だと思って好きだけここにいてくれ。それ位しか出来なくてゴメンな」

「お兄ちゃん・・・いいの」

「ああ、イリヤは何も遠慮しないでいいんだぞ。」

「うん、ありがとう。お兄ちゃん」

イリヤは衛宮邸に来てからまったく笑うことはなかったが、ようやく笑ってくれた。

「敬介さん。少しの間イリヤの事お願いします。」

「ああ、任せてくれ。君は君にしか出来ない事をやって来い。」

敬介にイリヤを任せ士朗と凜はセイバーが眠る部屋へと向かう。

部屋に着き

「リン、シロウ。どうしたのですか」

セイバーは気が付いていて凜と士朗のただならぬ気配に気づき理由を聞く。

「ちようど良かったわ。セイバー聞いて。衛宮君には事前に話したかもしれないけどもう一度説明するわ。一言でいえばセイバーの魔力不足は衛宮君との間の魔力供給線が不完全なのが原因よ。だからこれから新しく経路を作って衛宮君からセイバーへの供給線を別に作って確保するわ。衛宮君、サーヴァントを動かす動力源って何だと思う。」

「それは・・・魔力じゃないのか。」

「そうね。でもマスターが供給する魔力が直接サーヴァントを動かすわけじゃない。彼等も私達と同じで魔術回路を持っている。そしてそこから活動に必要な魔力を得ている。ただサーヴァントの場合にはこの動力炉を動かせない部分がある。マスターが供給する魔力はそれを動かすためよ。これが動かなければ動力炉そのものが働かず魔力を得られない。今のセイバーがまさにこれね。だけど歯車事態は小さなものだからちよっとの魔力で動かせるわ。衛宮君程度の魔力でもね。」

「なるほど！！・・・だからこそ俺の魔術回路が必要なんだ・・・
遠坂」

士朗は真剣な表情で凜に聞く。

「ええ、貴方の魔力回路の一部をセイバーに移植すればセイバーは
甦る」

その言葉にセイバーが驚く。

「リン・・・ちょっと待って下さい。魔術回路を失えば士朗は魔術
師として大成出来なくなる。いいえ、下手を魔術を使うことが出来
なくなる可能性もあります。そのような方法をとらなくて」

セイバーが凜に他の方法を聞こうとするが士朗が止めた。

「いいんだ。セイバー覚悟は出来てる。確かに魔術は夢を叶える為
に大切なものだ。だけど魔術師じゃなくなるとしても全てを失う訳
じゃない。その経験は俺の中で生きるだろう。この道が途切れたら
新たな道をいくさ。それに俺はセイバーを助きたい。それだけの理
由じゃ駄目か」

「シロウ・・・感謝します」

士朗の心を聞き、セイバーは素直に感謝した。

「さあ、始めてくれ。遠坂」

膳は急げと士朗は凜に頼んだ。

「決意は固いようね。いいわ。さっそく始めましょう。」

凜はさっそく準備に取り掛かった。

少し経ち……

「リン……その本当にこのような姿にならなければいけないのですか？」

セイバーは恥ずかしいのか凜に問う。

それも無理はない。

今のセイバーの姿は上半身裸だからだ。

いくら英霊といっても恥ずかしいのは仕方ないだろう。

「ええ、心と身体は密接な関係にあるからね。二人の精神の同調が高まるほど移植の成功率は高まるもの。そら、衛宮君も恥ずかしがらないで早くして」

凜は士朗にせかし、二人を抱きつかせた。

「胸が当たって」

「……遠坂、マジでやるのか」

セイバーの胸の感触が直接伝わり、士朗の様な純情な青年には少しどころかかなり辛かった。

「何言ってるの。上半身裸でもう抱きついてるくせに覚悟を決めなさい。後、セイバー魔術回路の移植をしたからって魔術師じゃなくなることはないわ。少なければ少ないほどリスクが少なくてすむ。」

「分かっています。最小限の回路で済むよう細心の注意を払います。」

凜の注意にセイバーは真剣な眼差しで答えた。

「なら、儀式を始めるわ。まずは呼吸を整えて・・・心を・・・深く・・・静かに」

凜の言われたとおりにセイバーと土朗は意識を鎮めていく。意識の静まりを確認し凜は呪文を唱え始めた。

「変換準備・・・第三要素は第一要素に肉体は星の一部に接続開始」

凜は呪文を唱えて少し経ち異変は訪れた。

「があああああ」

いきなり土朗が苦しみ始めた。

「どづいづいと」

凜は慌てた様子で土朗の状態を確認する。

そこには上半身が所々に黒い斑点が出来ていた。

とあるホテルの一室

一方、凜が土朗とセイバーに魔術回路を移植している時、本郷、結

城の2人は風見を手術台の様な台に寝かせ治療の準備をしていた。

「ベルトの破損が激しいな」

「ええ、おまけに血も多く流している。採血も必要ですね。」

本郷と結城は冷静に風見の状態を確認していた。

その時、

「本郷、言われたとおり必要な道具を持って来たぞ」

「これでいいですか」

でかい機械を持った一文字と村雨涼が部屋へと入って来た。

「ああ、十分だ。今から風見の再生手術を行う。一文字、村雨も協力してくれ。風見は血を多く失っている。手術を行うのに俺達の血も必要だ。」

改造人間の血は普通の人間の血は適合しない特殊な血液だ。

特殊な生成方法を行わなければ作れない。

だが、今は特殊な血液を生成している暇はない。

事態は一刻を争うのだ。

「それ位ならおやすい御用だ。俺達の血で風見が助かるなら」

「いくらでも構いませんよ。先輩」

一文字と良は快く了承した。

「なら、早速始めるぞ。いいか」

「ああ」

本郷達は風見の再生手術に取り掛かったのであった。

今回はそれぞれの精神世界の戦いです。

衛宮士朗と風見志郎は一体

次回に続く。

76話 精神世界(前書き)

すいません。

今回はかなり短いです

76話 精神世界

とあるホテルの一室

そこでは4人のライダー達が台の前に立ちそこで寝ている風見の再生手術を行っていた。

「オペレーション・アーム」

ライダーマンは改造人間修理用の万能修理メカであるアタッチメントを装備し風見のベルトの修復を行っているが難航している。

「想像以上にベルトの損傷が激しい。」

予想以上にベルトが破壊されていてさすがのライダーマンにも焦りの表情が浮かんだ。

「くっ、これは想像以上だ。」手術の成功は五分といったところか

1号も手を動かしながら冷静に風見の状態を見て判断する。

だが、風見を助けるために4人は淡々と作業を続けた。

「はあ〜」大丈夫だ。風見必ず助けてやる〜

〜死ぬんじゃないぞ・・・風見〜

〜風見さん〜

1号、2号、Z Xにだんだん疲れが見始めてきた。三人は風見の足りない血液を補うため、自分達の血液を採血しながら治療を行っているのだ。

それでも三人は疲れを感じさせない動きで風見の治療を続けていく。そして、ベルトの修復と体内で所々ショートしている部分の治療を終えた。

「一文字・・・最後の仕上げだ。」

「ああ、分かってる。」

1号と2号は風見の腕を握りしめ

「ライダーパワー!!!」

風見を改造した時と同じように自分達のエネルギーを風見に送る。1号、2号は変身が解けるまで風見にライダーエネルギーを送る。

「はぁ・・・後は風見の生命力に賭けるだけだ」

「ああ・・・そうだな。死んだら一生呪ってやるからな。死ぬなよ・・・風見」

治療は終わった。

だが、それでも風見が目覚める確率は5割ほどであった。後は風見の生命力を信じるしかない。

「風見・・・必ず甦れ。待っているからな」

4人は風見を信じ、風見を一人残して部屋を後にした。

SIDE 風見 志郎

「お兄ちゃん……お兄ちゃん。早く起きてよ」

誰だ……俺を呼ぶのは……だがこの声、なぜかかなり懐かしい……

「お兄ちゃん」

「う……ここは」

ここは一体どこだ。

俺は森の城で自分の偽物シヨッカーV3と戦っていた筈だ。

だが……ここは……まさかこの部屋は

それは見間違える筈がない。

ここはかつて住んでいた自分部屋だ。

「もう……お兄ちゃん。いつまで寝ぼけているつもりなの」

「……お前は雪子……雪子なのか」

見間違う筈がない。目の前にはハサミジャガーに殺された自分の妹がいる。

一体どういふことなんだ。

「お兄ちゃん。まだ寝ぼけているの。今日は大学でしょ。早く支度しないと遅刻しちゃうよ」

雪子が急かすように俺の腕をひっぱて行く
一体どういうことなんだ。
まったく訳が分からない。

訳が分からぬまま雪子に腕を引かれリビングまで連れてこられた。

「ここは・・・」

リビングも昔の記憶と変わらない状態でそこにあった。
本当に訳が分からない。

「お兄ちゃん。どうしたの。本当に今日変だよ・・・体調でも悪いの。」

「大丈夫だ。雪子・・・すまないな」

風見はこれ以上雪子に心配掛けまいと今は考える事を止めた。

テーブルにあるコーヒーを飲もうと手に持とうとするが

がちゃん「なに・・・」

コーヒーカップを落としてしまう。

「ちよつと・・・お兄ちゃん。大丈夫」

雪子が心配そうに風見によって来るが・・・風見の心境はそれ所で

はなかった。

力が……まさか!!

風見は自分の体を確かめるためテーブルに在る他のコップを握り力を入れる。

だが、ヒビ一つは要らない。

間違いない……俺は人間に戻っているのか。

改造人間である風見は普段から意図的に力を押さえて物を掴んだりしている。

思い切り握りしめてしまえば、機械の手の握力は簡単に物を壊してしまうからだ。

だが、今はどんなに力を込めようと物は壊れない。

それは、つまり改造人間ではなく人間に戻っている事を意味した。

割れたコーヒークップを片付けた雪子は心配そうに

「お兄ちゃん。体調が悪いなら大学休んだ方がいいんじゃない」

風見を気遣ってくる。

「大丈夫だ。雪子……朝から悪いな。大学にいつてくるよ」

風見はすぐに家を出た。

「今は少しでも情報が欲しい。ここは一体どこなのか。恐らく大学に行けば本郷先輩がいる筈だ」

それはただの直観だったが今の状況では他に頼る所はない。
風見はかつて通っていた大学、城南大学へとバイクに跨り向かった。

大学へ進む過程、全てが驚きの連続だった。

「まさか・・・全て昔のままだ」

それは約30年前の景色と全く変わっていない。

今、現在は工事が進み高層マンションがずらしと並んでいる筈だ。
だが、それが無い。

「まさか」

風見はまさかと思い大学へ着くと同時に大学へと入る同じ大学生に

「すまない。今西暦何年だ」

今現在の年数を聞いてみた。

そこで驚きの答えが返ってきた。

「・・・今は西暦1973年ですけど・・・それがどうかしましたか」

「いや・・・いいんだ。すまない」

信じたくなかったが想像通りの答えが返ってきた。

とりあえず今は本郷先輩がいる研究室に向かうのが先決だな

風見は急ぎ本郷のいる生化学研究室へと向かった。
研究室へ着くと

「どうした。風見・・・そんなに慌てて」

いつもと変わらない本郷猛の姿がそこにあつた。

「すみません。本郷先輩。少し二人で話したいのですがいいですか」

「む・・・どうした。風見・・・ああ分かった。場所を変えようか」

風見の深刻そうな態度に本郷は何も言わず二人で喋れる場所まで移動した。

だが・・・風見は気付いていなかった。

ずっと風見を見据える赤い仮面の戦士の視線を・・・

SIDE 衛宮 士朗

「ぐぐ・・・こいつは・・・一体」

今、士朗は巨大なドラゴンに体を食い付かれていた

「あ……」

ドラゴンは士朗を口から放し壁へと打ちつける。

「ゴホ……」　「なんでこんな所にこんな奴が……ここはセイバ
ーの精神世界じゃなかったのか」

士朗の意識が朦朧とする中、容赦なくドラゴンは士朗を襲ってくる。

「ひっ」

士朗は本能で恐怖を感じ逃げようとするが、背後からドラゴンは容
赦なく士朗を鋭い牙で噛みついて来る。

「あ……ああ」

だがドラゴンは士朗を一瞬では殺さない。

ジワリジワリと士朗の存在を奪っていくかのように少しずつ肉を食
らっていく。

それは余りにも明確な恐怖だった。

「これは余りにも苦痛だ。せめて死が慈悲深く刈り取ってくれば
いい物を」

思いとは裏腹にドラゴンは殺さず生かさず、士朗の意識を奪ってい
く。

このままではドラゴンに自分の全てを奪われてしまう。

「ああ……視界が赤く染まる。ようやく終わるのか」

体から今まで感じた痛みが消え、感覚がなくなり意識が少しづつ遠のいていく。

士朗は死を覚悟したが

「……！なんだあれは」

それは剣が所々に突き刺された丘に一人誰か立っている。

「あれは……セイバー？いやアルトリアか」

士朗は丘に立つセイバー・アルトリアを見て意識を取り戻した。遠くから見るアルトリアの表情はどこか悲しそうだった。

77話 虚像の世界(前書き)

全ては謎。

この世界はいつたい何なのか。

この世界の謎が解き放たれる。

77話 虚像の世界

SIDE 風見 志郎

全ては謎に包まれている。

何故、俺は過去にいるのか。

この世界はいつたい何なんだ。

訳も分からないまま・・・俺は本郷猛と邂逅した。

今、大学の外のベンチで二人で話をしていた。

「本郷さん・・・貴方は仮面ライダー1号ですね」

風見は基本的回りくどいのは嫌いだ。

だから直球で本郷に聞いてみた。

「仮面・・・ライダー？風見、何だそれは？」

「!!」〜どついつことだ〜

風見は内心驚きを隠せないまま、表面では冷静な態度を取りながら話を続ける。

「なら、シヨッカーという言葉に聞き覚えは」

「いや・・・すまないが。俺には何のことだかさっぱり分からない」

やはり、本郷は何も知らない様子だった。

今の時期は本郷さんと一文字さんがシヨッカーを壊滅した時期の筈・

・・・どういうことなんだ。
まさか・・・

風見の脳裏に一つの可能性が浮かんできた。

「風見・・・本当にどうしたんだ。今日のお前どこがおかしいぞ。
何かあったのか」

いつもと違う風見の様子に本郷は何かあったのではないかと心配そうに聞いてきた。

「いえ・・・大丈夫ですよ。すみません。わざわざ貴重な時間を削ってこんな所まで来て貰って」

「いや、いいんだ。・・・風見。悩みがあるならいつでも相談に
来いよ」

風見は本郷と別れ脳裏に浮かんだ可能性があっているかどうか確かめるために他の場所へと移動した。

大学を出てしばらくバイクで走り次に訪ねたのは

「スナック・アミーゴ・・・立花オートコーナーじゃないのか」

おやっさんの所である。

だが目の前の店を見て違和感を覚えた。

俺の記憶が正しければ今おやっさんが開いている店はバイク関係の
営業店でレーシングクラブを立ち上げていた筈だ。

・・・一体、どうなってる。

風見は立ち止まっただけでも仕方ないと思いきスナック・アミーゴへと入る。

カラン、カラン

「おや、お客さん」

そこには風見の昔の記憶のままの姿でおやっさんこと立花藤衛兵の姿がそこにあつた。

おやっさん

風見は思わず感傷に浸りそうになるが、この時期はまだおやっさんとは知りあつてもいない。

つまり初対面である。

風見はなるべく平静を保ちおやっさんの前の椅子に腰をかけた。

「なににします。」

「コーヒーを一つお願いします。」

「はい、少しお待ちください」

おやっさんが風見の前でコーヒーを入れている。

懐かしい。

本当に懐かしい。

おやつさんのこのコーヒーを入れる仕草を見るのはいつたい何十年振りだろうか。

「はい、どうぞ」

風見はテーブルに置かれたコーヒーを持ち口に運ぶ。

・・・ああ、懐かしいな。この味を忘れた事はなかった。

おやつさんの入れたコーヒーを飲んで懐かしい味に思わず風見は涙を流しそうになってしまった。

コーヒーの味を楽しんでいるとおやつさんが唐突に話掛けてきた。

「お客さん。学生さんかい。」

「・・・ええ」

立花が唐突に話しかけてきたので風見は少し返事が遅れてしまい、それを立花は勘違いしたのか

「いや、すみませんね。深い意味はないんですが・・・余りに美味そうに俺が入れたコーヒーを飲むからつい嬉しくてな」

立花が笑みを浮かべるのを見て風見も思わず頬を緩ませていく。

それから、数十分程風見は立花と他愛もない話を続けた。数十分という時間だったが二人は一気に意気投合していった。

「それじゃ、失礼します。」

「ああ、もう帰るのか。また来いよ。志郎」

「……」

思わず風見は立花の志郎という発言に惚けてしまう。

「なんだ……この呼び方は嫌か」

立花が残念そうに言う。

「いえ、そんなことはないですよ。また来ます……おやっさん」

「！ああ、また来いよ。なんなら今度バイクのコーチをしてやるかな」

「ええ、その時はお願いします」

風見は立花と約束をしてアミーゴから出る。

アミーゴから出て風見は一人思いに耽る。

「どつやら……俺の予想は当たってるらしい」

おやっさんとの会話でさりげなく風見はシヨッカーのことや仮面ライダーの事を聞いてみた。

だが、立花の反応は驚きも驚愕も無く、本郷同様本当に何も知らない様子だった。

つまりこの世界は

「並行世界……シヨツカーが存在しない世界か。俺は何かの理由でこの世界に跳ばされたのか」

しかし、それは余りに現実味ではない。

もう一つの可能性を上げれば今までの事が全て夢であったと考えるば説明がつくが

だが、それにしても長すぎる夢である。

あれは夢なんかじゃない。

それは説明できる。

なら、この世界が夢なのか。

バキ「……グウ。」

風見は思い切り拳で自分の頬を殴りつけた。

頬には明確な痛みがあった。

つまりこの世界は夢じゃないのか。

ならば、この世界は本当に並行世界なのか。

考えれば考えるほど分からなくなる。

風見は一旦家に帰ることにしてバイクに乗ろうとした時、

「あの……大丈夫ですか。今凄い音が聞こえましたけど」

誰かが風見に話しかけてくる。

「……貴女は!!」まさか純子さん

目の前には自分に好意を寄せてくれていた女性・珠純子の姿があっ

た。

「よろしければ、これ使ってください」

純子が風見にハンカチを渡してきた。

どうやら先程の奇行で唇を切っているらしい。

唇から血がどくどくと流れている。

「すみません」

風見は好意に甘えハンカチを受け取り口を拭う。

純子は風見の奇行を見ていた筈だ・・・だが彼女はそれを気にも留めず心配そうにハンカチを渡して来る。

昔の記憶に在る彼女の優しさを思い出す。

その時、ぼたり、ぼたりと雨が降って来た。

「あ・・・洗濯物干したばかりなのに」

純子はいきなり降り始めた雨に思わず呟く。

「そつだ。お礼に家まで送らせて下さい」

風見は純子に提案する。

「え・・・そんな悪いです。今知り合っただばかりなのに」

「気にしないで下さい。バイクで家まで送りますよ」

「そつ、ならお願いします」

純子は風見の提案を受け入れ、風見の後ろに座る。

「しっかり掴まっけていてください」

「はい」

風見は純子を家まで送った。

「ありがとうございます」

家まで着き純子が風見に礼を言う。

「そつだ・・・今度何か礼をさせて下さい」

純子が思いついたように電話の番号を書いた紙を風見に渡し、その上次に会う日の約束までしてきた。

風見もそれを了承しその場を離れた。

「いったい・・・」

風見は違和感に襲われた。

うまく行き過ぎている。

何かは分からないがそう感じた。

その時

「誰だ・・・誰もいないのか」

何かの視線を感じ辺りを見渡すが誰もいない。

風見は訳も分からないまま雨が降る中バイクで家まで帰っていく。

「・・・・・・・・」

その風見を見据えるように赤い戦士はずっと風見に視線を送り続けていた。

風見家 7時

風見は家に帰り、あれから一人ですっと考えていたが結局何も分からぬまま夕食の時間になり家族と夕食を食べていた。

「志郎、どうしたんだ。元気がないがなにかあったのか」

父、風見達治が風見の様子を心配そうに聞いてきた。

「そうなのよ。お父さん、お兄ちゃんったら朝からおかしいんだから・・・・・・・・もしかして彼女でも出来たお兄ちゃん」

「そうなの、志郎。どんな娘さんなの。」

妹、雪子のいきなりの話題に母、風見綾も乗って来る。

「ああ・・・・・・・・懐かしいな」

本当に懐かしい。

他愛のない家族の会話・・・・・・・・本当に懐かしい。

失ってしまった物がこの世界には沢山ある。

くこの世界も悪くないかもな

思わず風見は思ってしまった。

その時……

『本当にお前はそう思っているのか』

く誰だ

突然謎の声が聞こえてきた。

勿論ここには過去に失った大切な家族しかいない。

それなのにこの声はいつたい

風見は声の主を探すが誰もいない。

気のせいだと思い食事にするが再び声が聞こえてきた。

『目を覚ませ……現実から逃げるな……戦うんだ』

くお前は一体誰なんだ

ガバ、風見は思わず立ち上がる。

「志郎」

「お兄ちゃん、どうしたの」

家族が風見のいきなりの行動を不審に思っているがそれどころではない。

その時……!!

どがん「シーザース」

「お前は!!」くなぜ奴がここにいる??

デストロン怪人、ハサミジャガーがいきなり壁を壊し現れた。

「えっ、いやあ」

「なんだ……あいつは」

父、母、妹はパニックになる。

ハサミジャガーの視線は父、母、妹を獲物を目の前にしたような眼で捉えていた。

「止める」

風見はハサミジャガーに立ち向かうが

「シザース」

バキ「ぐう」

簡単に片腕で払いのけられる。

ハサミジャガーは風見には興味無いか風見を払いのけた後、再び家族へと足を進ませていく。

「止める」もまた俺は守れないのか」

立ち上がるうとするがハサミジャガーの一撃で体がうまく動かない。風見はまた家族を守れないという悔しさと、自分に何も出来ない不甲斐無さから唇をかみしめた。

ハサミジャガーは父、母、妹も前に立ち、もう駄目かと思った・・・その時

バキ「シザース」

白い拳がハサミジャガーを殴りつけた。

「・・・お前は」

風見の家族を救ったのは見間違っただけがない自分が変身した姿仮面ライダーV3だった。

「風見志郎・・・目を覚ませ。この世界はお前が作り出した虚像の世界。全て偽りだ。お前が心の奥で望んでいた世界・・・それがこの世界だ。現実に戻れ」

仮面ライダーV3は風見を見据え、この世界について説明し始めた。

「そうか・・・夢か。」

本当は分かっていた。

ただ認めたくなかっただけなのかもしれない。

俺の心の奥ではここに居続けたいという願望があったのかもしれない。

「どうやら・・・俺はまだ戦わないといけない運命らしい。」

風見は全てを受け入れV3を見据える。

風見の覚悟を感じ取ったのかV3はフツと笑い光になって風見に吸い込まれていった。

「シザース!!」

その時、倒れていた筈のハサミジャガーが再び立ち上がりこちらに襲ってくる。

「まだ生きていたか。今度はお前に殺させはしない。絶対に守ってみせる。変身ブイスリヤアア」

風見はポーズを取りV3に変身する。

「行くぞ、V3パアアアアンチ!!」

バキ「シザース」

渾身の力を込めたV3パンチを受けハサミジャガーは爆発した。

そして、ハサミジャガーを倒したと同時に目の前に白い霧が現れた。

『おい、ここを通れば元の世界に帰れるぜ。早くしな、正義の味方さんよ。早くしないとあんだの存在を喰われちまうぞ』

どこからともなく男の声が響いてきた。

「お前は誰だ」

V3は不審に思い謎の男に問う。

『俺なんてどうでもいいだろう。どうでもいいけどあんた早くしないと本当にあの世行きになるぜ。まあそれはそれで俺は困らないけどな』

男の言葉が真実かどうか分からないが今は男を信用するしかない。
V3は白い霧へと足を進ませようとしたが

「待って、お兄ちゃん」

「雪子」

後ろから妹の声が聞こえ振り返る。

「どこにいくの。もうお兄ちゃんは戦わなくてもいいんだよ」

「そつよ、志郎。ここですっと私達と一緒に暮しましょう」

「お前はもう十分戦った。もう戦わなくてもいいんだ志郎」

父、母、妹がV3を必死に止めてくる。

三人の誘いはV3にとって甘い誘惑だった。
だが

「すまない。父さん、母さん、雪子・・・俺はまだそちらに行けそうにない。俺を待っていてくれる人が向こうで待っている。俺はその人たちの為にも向こうへ戻らないと行けない」

V3はその誘いを断った。

それにどれだけの思いが込められているのかは誰も分からない。

「父さん、母さん、貴方達が与えてくれた体を俺は失った、俺は親不幸者です。ですがこの体は沢山の人を守る為に使います、それでお許しください。」

「志郎」

父、母の表情に悲しみがうつる。

風見の覚悟が固く止めるのは無理と感じたのだ。

それゆえに再び命を賭けた戦いに向かおうとする息子に声をかける事が出来なかった。

「雪子、悪いな。だけどまたお前に会えて本当に良かった」

「お兄ちゃん。ウン。私もお兄ちゃんに会えて良かった。お兄ちゃん絶対に負けないでね」

「う……じゃあな」

不覚にもV3は涙を流しそうになるがぐっと堪え振り向くことも無く白い霧へと入って行った。

「本当にさようなら。会えて本当に良かった」

脳裏に浮かぶには家族、おやつさん、珠純子、大切な存在、二度と会えない人たちに何の運命の悪戯か再び会えた……それでもこの世界は夢……風見は現実に戻る、戦いの舞台へと大切な人達の

残した世界を守る為に

V3は白い霧へと入った瞬間そこで意識を失った。

S I D E O U T

S I D E ????

ここは何もかも黒い世界。

そこで、黒い世界に蠢く影が見える。

「やだね。やだねえ。どうして正義の味方ってこう熱苦しいのかね。なあ、あんたはどう思う」

影はうんざりしたように愚痴を吐き、誰かに話しかけた。

『なぜ、私の邪魔をした。うまくいけば風見志郎の魂を聖林に取り込めたものを』

虚空から謎の音が響く。

「はは、それが人のホームに勝手に住み着いてるやつ言葉かい。あんた礼儀も知らないみたいだね」

子馬鹿にしたように影が虚空に言う。

『黙れ、私の質問に答えろ』

それを挑発と思ったのか謎の声に怒りが滲み出ている。

「まあね。あまりここに不純物を入れたくないわけ。それに俺の知らない所で勝手に事が起こっているのも気に入らない。」

影はおちゃらけな態度から一変怒りを顕わにする。

『まあいいだろう。奴の魂を取り込めなくとも計画は順調に進んでいる。「この世の全ての悪」よ覚悟しておくがいい。いずれ貴様は私に全てを捧げる事になる。その時をここで楽しみに待っているがいい』

その言葉を最後に謎の声の気配が完全に消え去った。

「ああ、怖い怖い……まあいいか。俺は時が来るまでここで静観でもしとくとするか」

影も闇に溶け込むように消えていく。
後に残るのは黒い闇の世界だけであった。

78話 復活のセイバー／八番目のサーヴァント

衛宮邸 居間 午後 7時

居間では間桐へと情報を調べに行っていた光太郎、茂、桜も戻って来ている。

だが、その表情は晴れない。

三人とも敬介に事情を全て聞いたからだ。

ちなみに洋と一也の姿はない。

彼等もあることを調べに外に出ている。

「でっ、どこのどいつだ。風見さんやアマゾンに酷い目に合わせた野郎は」

沈黙を破るかのように第一声に茂が口を開いた。

「それは、分からない。詳しい話は凜ちゃんとイリヤちゃんから聞くしかないだろう」

「あのガキか……」

イリヤは今重傷を負って部屋で寝ているアマゾンの傍にいて此処にはいない。

その時、ガラガラと障子が開く音が聞こえ凜が居間へと入って来る。

「姉さん。先輩はもう大丈夫なんですか？」

桜が凜に聞くが、凜には桜の言葉は届いていない。
暗い表情で何か考え事をしていた。

「あれが、セイバーの魔術回路」

脳裏に浮かぶは士郎に触れたとき浮かんだ大きな竜のヴィジョン

「あれは衛宮君程度の魔術師……いや一流の魔術師でもどうにか出来るレベルじゃない。あのままだと衛宮君は魔術回路だけじゃなく魂まで……」

凜の脳裏に嫌な予感がどんどん浮んでくる。

「姉さん」

「あつ……桜、ごめんなさい。考え事してて」

凜は桜の声で我に返る。

「姉さん、それよりも先輩は大丈夫なんですか？」

再度桜は凜に聞いた。

「……ええ、大丈夫。後はセイバーと士郎が目覚めますのを待つだけよ」

凜は何とか平静を保ち桜に大丈夫だという。

「そうですね……良かった。」

桜は心底安心したように言う。

風見の事を聞き、この場は通夜のような空気が流れていたが凜の一言で風見の事は心配だが少し場が明るくなった。

「心が痛いわね」

もちろん、それは凜とてどうなるか分からない。

だがもう自分出来る事はない。

後は、セイバーと士朗を信じて凜は本題に入る為居間の机の下へ座った。

「そっちはどうだった？」

凜は茂、光太郎、桜に視線を送り成果を聞いた。

「あの妖怪爺が生きていたぜ」

「妖怪爺……まさか!？」

凜は驚く、なぜならその妖怪爺が倒れる瞬間に立ち会っていたからだ。

間違いなくあの妖怪は何も残さず消滅した筈だ。

「ああ、あの爺は生きていたぜ。どういう理屈か分からないが消滅した肉体を違うところから補ったと言っていた。」

茂は心底腹が立つといった様子で話す。

魔術師として優秀な凜も茂の言葉を即座に理解する。

「そう……あの爺。やっぱり一筋縄じゃないようね」

凜は嫌悪を隠さないまま話を続ける。
次に光太郎が凜に質問した。

「そこで凜ちゃん。1つ気になることがあるんだけど、聖杯戦争って本当に七人のサーヴァントしか召喚出来ないの？」

「ええ、過去に四度、聖杯戦争は行われたけど、七騎以上召喚された事は過去一度もないわ」

凜は光太郎の問いに答えるが、光太郎はどこか引つ掛かりを覚える。

「だけど、凜ちゃん。俺が最初に戦ったライダーはどう説明する？俺が戦った日の前日にライダーは風見さんが倒したと聞いているけど」

「・・・う。それは」

光太郎に言われるまでもなく凜も今回の聖杯戦争がおかしい事などとづくに理解している。

確かに光太郎が倒した黒い紋様があるライダーは間桐ゾウケンが言うには魂の無いただの器と言っていたがどのような手を使ったかは知らないがあのライダーは桜が召喚したライダーと同等のステータスを所持していた。

凜が考えている最中、今度は茂が問うた。

「後、もう一つ気になることがある。間桐の屋敷で桜ちゃんが何者かに命を狙われた。」

「えっ！！ほんと桜」

「はい……茂さんに助けて貰いましたけど」

「あのくそ爺」

凜の表情に間桐ゾウケンに対し怒りを覚える。

「これが、その時桜ちゃんに投げ付けられたナイフだ。」

茂は懐からナイフを取り出しテーブルの上に置いた。

何の変哲もない黒く塗られたナイフから感じる魔力の残りカスに凜は驚く。

「これは、間桐ゾウケンの魔力じゃない。それどころか純粋な魔術師のものでもない」

また、聖堂教会の使う黒鍵などではない。

人を殺す為だけに特化した短剣、黒く塗られた短剣は暗い闇の中で認識されず暗殺する為だけの道具……まさに暗殺者が用いる武器ではないか。

「残念だが、そいつを投げた奴は俺と光太郎でも感知する事が出来なかった。かなり穩術に優れた奴だろう。暗殺者のように」

「待つて……茂さん。もしかして」

凜は茂が何を言いたいか理解した。

「ああ、もしかしたらあの妖怪爺、サーヴァントを所持しているん

じゃないか。キャスターが召喚したアサシンとは違う……暗殺者のサーヴァントを」

「待つて。茂さん……それはあり得ないわ。サーヴァントの席はすでに埋まっていた。それを更に召喚するなんて……もしかしたら!!」

凜は何か思いついたのか敬介に視線を向け口を開いた。

「敬介さん。アサシンと戦いをしている時、何か変な気配を感じなかった？」

「いや、感じてないが。どうかしたのか」

「ええ、もしかしたら。あの爺。敬介さんとアサシンの戦いを気付かれないように見ていた可能性があるわ。」

「まさか」

あの時のアサシンの戦いの最中はXライダーへと変身しており普通の人間より優れた五感が更に増していた。

いくら、戦いに集中していたとはいえ第三者の存在に気付かない筈がない。

魔術師である凜は冷静に判断をする。

「あの爺は、あれで魔術師よ。気配遮断の方法なんていくらでもあるわ。恐らく間桐ゾウケンは自分のサーヴァントを召喚する為に敬介さんが倒したアサシンを触媒にしたんだと思うわ。」

「触媒? どういうことだ、凜ちゃん。」

凜の発言に敬介は困惑し凜に問う。

「そのままの意味よ。柳洞寺の山門を守っていたアサシンはキャスターが召喚した本来呼びだされる筈がない暗殺者のサーヴァント。本来アサシンのサーヴァントとして呼び出されるのは19人いる山の翁「ハサン・サツバーハ」だけよ」

「なら、アサシンは・・・くう」

敬介はやりようのない怒りを覚える。

アサシン・佐々木小次郎は自分を苦しめた難敵だった。

だが、彼は一人の戦士として正々堂々と戦い破れたのだ。

いくら偽りのサーヴァントといつても敬介と正々堂々と戦ったアサシンのいや友の誇りと魂を汚す行為に敬介は許せずやりようのない怒りを覚えたのだ。

敬介は怒りを覚えるが平静を保ちながら凜に在ることを質問した。

「そうか・・・だが凜ちゃん。いくらアサシンが偽りのサーヴァントといえどそう簡単にサーヴァントの召喚が出来るのか？もしかしたら一つ気になることがある。」

「何、敬介さん」

「もしかしたら、聖杯戦争というのは出来レースじゃないのか」

「・・・どういふこと」

敬介の質問に凜は静かに問い返した。

「まず、聖杯とはサーヴァントの魂を捧げ完成すんだったな。その為七人のマスターとサーヴァントを揃える必要があると」

「ああ、あの爺もそれは認めませ」

茂はゾウケンの言葉を思い出し背定する。

「でも、それだと聖杯を作り出したという。遠坂、間桐、アイントベルン、御三家が損をする。」

「損、確かにそうね。でも私は正々堂々聖杯戦争に臨んでるわ。」

「それは分かっている。凛ちゃんが卑怯な手を使わないということくらい・・・だけど、他の家はどうか。例えば間桐、確か本来桜ちゃんライダーのマスターだったが兄の慎二が仮とはいえマスターになれたんだろ」

敬介は桜に視線を向け問う。

「はい。令呪を一つ、偽臣の書に移すことでマスター権を移すことは可能です。」

「成程な。」

「そうか。」

茂と光太郎も理解した。

それを見て敬介は話を続ける。

「ああ、恐らく御三家には他の一般参加者とは違いルールを改変する手段を持っている。そう考えれば光太郎と戦ったライダーの存在も説明できる。もしかしたら、御三家以外に聖杯戦争に勝利しても聖杯は手に入らないのかもしれない」

「……確かに、そうかも知れないわね。魔術師は利益を一番に考える。ありえないわ」

凜も敬介の考えもあながち間違えじゃないかも知れないと考えている、その時

「へえ〜。マスクライダーって強いだけじゃなくて頭も回るんだね」

障子が開き白い少女イリヤが姿を現した。その姿を確認して茂がイリヤに話しかけた。

「おい、餓鬼。」

「何よ……あなたあの時の嫌な奴。どうしてここにいるのよ」

「悪かったな。俺も仮面ライダーだからな。」

「ウソ。あんたみたいな野蛮な人間がマスクライダーなの」

「本当だぜ。それにしても口の減らないガキだな。」

「フンだ。前に言った筈よ。私はあなたのこと嫌いだって」

「そうか、そうか。悪かったな。クソガキ」

いつの間にか始まった幼稚な言い争いは際限なく続く。

「ちょっと城さん。小さい子ですよ。止めて下さい」

「そうですよ。城さん」

呆れながら光太郎と桜が茂を止めた。

「分かったよ。つたく。……イリヤ無事で良かったな。あまり無理するなよ」

「えっ……。……フンだ。余計なお世話よ……。……まあ、ありがとう。一応御礼だけは言っておくわ。」

イリヤは子供らしい反応を見せ、そっぽ向く。

素直じゃない二人に周りは微笑し本題に入る為代表して凜がイリヤに話を聞いた。

「イリヤスフィール、貴方なら分かっているんじゃない。聖杯戦争の真相について」

「さあ、どうかしら。でもそのお兄ちゃんが話した事で大体合ってるよ。聖杯戦争は遠坂、間桐、アインツベルンが有利になる様に作られたゲームよ。例えば私は聖杯戦争が始まる何ヶ月も前からバースーカーを召喚していたわ」

「やはりな。なら聖杯とは一体何だ。どういう物なんだ」

敬介は一気に核心についてイリヤに聞くが

「別に貴方達が知らなくていいわ。どうせ聖杯はアインツベルンの物だし」

「????それはどういう」

再度聞こうとしたその時、居間へと何か飛んでくるような音を改造人間である敬介、茂、光太郎は捉えた。

「この音は、危ない」

危険を察知し三人は凜、イリヤ、桜を掴み迫りくる音を回避する。それと、同時に凄まじい音が居間全体に響き渡り無数の剣が突き刺さっている。

「この攻撃は!?!」

敬介に抱えられ難を逃れた凜は無数の剣を確認し驚愕する。それは、昼アインツベルンの城で体験した出来事とまったく同じであつたからだ。

「ええ、あいつが来たようね。」

イリヤも凜に同意するかのよう言葉が続けた。

「イリヤ、無事!?!」

音を聴きつけ重症のアマゾンが居間へとやって来た。

「アマゾン!?!まだ駄目よ。無理しちゃ」

その様子にイリヤはアマゾンに心配しながら言っ

「大丈夫。それにこの匂い、あいつ」

アマゾンは敵意を向けたまま外へと視線を送る。

その時

「ハハハハハ、さあ、セイバーよ。我自ら赴いてやったのだ。その姿を我に見せよ」

高圧的な高らかな声が響いてきた。

「間違いない。あいつよ……あいつが城に襲撃してきた一人よ」

「そうか……向こうからわざわざ来てくれるとは探す手間が省けたな。風見さんとアマゾンの借り一気に変えさせて貰うぜ。」

茂は怒りを顕わにしながら外に出た。それに続くように他五人も外に出る。

「何だ、雑種。我はセイバーを呼んだ。貴様ら雑種には用がないが」

塀の上から金色の鎧を来た男は凜達を見下ろしている。

「黙れ、手前だろ。風見さんとアマゾンによくも」

「ほおー。人形に野蛮人ここにいたのか。探す手間が省けたぞ。野蛮人よ、大人しくその腕輪を我に渡せ。」

金ピカはアマゾンに向け空間から無数の宝具を出現させアマゾンに射出した。

「がう」

だが、アマゾンは昼間の戦いのダメージが大きく体を動かせない。

「アマゾン」

敬介は急ぎアマゾンを掴み回避しようとするが宝具のスピードと量が多く回避出来ない。

その時、

「変身！神さん、アマゾン先輩ここは俺に任せて下さい。」

光太郎が素早く変身しRXになりベルトのサンライザにエネルギーを貯め込む

「行くぞ、キングストーン・フラッシュ」

サンライザから放たれた光は宝具を全て覆い消滅させる。

「まさか……貴様！！」

金髪の男は驚愕するが……少し経つと獰猛な瞳になり口元をにやりと歪ませる。

「ククク、我は運がいい。貴様のその力、キングストーンの力だな」

「なぜ、キングストーンを知っている。」

「我は王だぞ。我が知らぬものなど何も無い。貴様のその石大人しく我に献上するがいい。それは貴様などが持つていい代物ではない。我の蔵にあつてこそ最上の価値を發揮できる代物だ。」

「黙れ、キングストーンの力は全てを大切な人を守る力だ。お前みたいなのは渡せない」

「そうか。なら力づくで奪うまで」

今にも一発発射の空気。

今にも戦いが始まりそうな・・・その時

「はああああ！！」

青い弾丸が金髪の男目掛け突撃した。

「くう」

さすがの金髪の男のまさかの不意打ちに金色の鎧で青い弾丸を防ぐ。その弾丸は後退し凜達の傍に降り立った。

「セイバー！！もう大丈夫なの」

「はい。これも凜と士朗のおかげです」

そこには武装状態のセイバーの姿があつた。

そこには寝込んでいた時の様な弱弱しさは無く体から魔力の蒸気が浮き出て最優のサーヴァントに相応しい魔力が力強く流れていた。

「大丈夫か。」

それと同時に士朗も姿を現す。

「士朗、大丈夫なの。」

「ああ、もう大丈夫だ。」

士朗は笑みを浮かべ凛達に言う。

だが、セイバーは金髪の男をあり得ないものを見るような目で見ていた。

「貴方は……アーチャー！！なぜ現界しているのです!？」

「久しぶりだな。セイバー、我が下した決定を覚えているか」

二人はどうやら顔見知りのようだ。

〈アーチャー〉

アーチャーは赤い騎士の筈だ。

なら目の前の存在は何者なのか!？

次回に続く。

78話 復活のセイバー／八番目のサーヴァント（後書き）

今、微妙にスランプ中です

79話 影の王子 シヤドームーン(前書き)

今回微妙に短く取って付けたような展開になりました。

79話 影の王子 シャドームーン

とある一室

薄暗い部屋にぽつりと光が差し込まれている。

そこには、機械のある台に寝転ぶ顔に包帯を巻いた男、その台の周りで白衣に白いマスクを被った複数の集団が道具を持って覆面の男の治療を行っていた。

「うーん。大分負傷したみたいだね。やっぱり仮面ライダー達はー
筋縄じゃいかないようだね。」

黒髪の爽やかそうな青年が笑顔で台に寝転ぶ男を見ている。

「そうですね。だがまああの戦果だ。仮面ライダーV3を始末したのだからな。しかしアルヴァロン様・・・なぜこやつには脳改造を行わないのです。何時、こやつが本郷猛達のように我々と敵対する可能性があります。今のうち脳改造を施し我々に服従させるべきです。」

白髪で赤いマントを着けた老人が黒髪の青年・アルヴァロンに進言する。

「そんなもの必要ないよ。彼が僕を裏切るなんて絶対にあり得ないから。」

「しかし」

「くどいよ、死神博士。僕の命令に逆らうつもりかい」

「いいえ、そのような」

死神博士はアルヴァロンの言葉を受けて口籠る。

「それに、そんなに心配する事ないよ。彼と僕は親友だから・・・十年前のあの日から、クククク」

アルヴァロンの笑いが部屋一帯に鳴り響く。

しかし、笑っているのにその瞳は狂気に満ちている・・・死神博士はその光景をただ冷や汗を流し畏怖の念を込めて見つめるだけだった。

その時・・・、

「アルヴァロン・・・喜べ奴が復活していたぞ。」

いきなり闇からデスシヨッカー大幹部デスが姿を現した。

「本当、予定通りだね」

アルヴァロンは驚くことも無く笑みを浮かべたままだ。

「だが、奴は油断できんな。少し監視しただけだが俺の存在にも気付いていた。」

「そう、さすが影の王子だね。まあいいさ、でっ今彼はどこに？」

「奴は今・・・」

デスの説明を聞いた途端、アルヴァロンは笑顔のまま

「そう、運命の再開をするのかい。なら邪魔しちゃ悪いね。当分の間、彼はある程度監視して放置しておいて」

「ああ、分かった」

デスは影に溶け込むように姿を消した。

「クフフ、アルヴァロン様。そろそろですな」

死神が嬉しそうにアルヴァロンに話しかける。

「うん、そうだね。もうすぐだよ・・・もうすぐ真の闇が誕生する。」

室内に彼の狂気に満ちた笑い声が響くだけだった。

その頃、衛宮邸では

「アーチャー、なぜ現界しているのですか」

「久しいなセイバー。覚えているか、我が下した決定を」

親しげに男は言うが、セイバーは答えず男を睨みつける。

その気迫は、今までの比ではなかった。

「なんだその顔は。未だ覚悟が出来ていないと言うのか？あれから十年だぞ。既に心を決めてよい頃だが・・・ああ、もつともそれは我だけの話なのか。おまえにとってはつい先日の話であったな。・・・まったく、男を待たせるとはたわけた女だ。」

どうやらセイバーと金髪の男が顔見知りなものには間違いないようだ。

「なんだ・・・あいつは」

士朗は胸が軋んだ。

あんなふざけた目でセイバーを見下ろすアイツに嫌悪を通り越して吐き気すらした。

「我がセイバーの空間にまだ雑種が残っていたか。」

男は不愉快げに言い、下を見下ろす。

視線はイリヤへと向けられていた。

「イリヤ」

アマゾンはいリヤを守る様に前に立ち金髪の男を睨みつけた。

「フン野蛮人め、今は貴様に用はない。人形よいいから早く開け。もうすぐ五人目も貴様に送られる」

淡々とした男の声。

それにどんな効果があったのか。

「あ や、んっ」

「イリヤー!!」

イリヤは大きく震えた後、がくりと頭を垂れて意識を失った。それをイリヤが倒れる前アマゾンが体を支えた。

それで終わり。

これ以上、起きる事など何も無い。

士朗、凜、桜は、男を見上げる事しか出来ない。二人とも判っている。

金髪の男は士朗達を見ていない。その視線はセイバーのみ向けられている。

ここで、声を上げれば容赦なく男は士朗達を殺すだろう。しかし、ここで声を上げる存在がいた。

「おい、いい加減しろよ。その上から目線の態度めちゃくちゃムカつくぜ」

茂が声を上げて罵倒を男に浴びせた。

「ほお。面白いことをほざくな。雑種」

赤い瞳は茂を射抜かんと殺意が込められている。

「ああ、事実だぜ。テメエには借りがあり過ぎる。まとめて代えさ

せて貰うぜ。変身・・・ストロンガ!!」

茂はストロンガーに変身し臨戦態勢を取る。

その様子を確認しながら敬介が土朗、凜、桜の傍まで近付き小声で話しかけた。

「土朗、凜ちゃん、桜ちゃん。アマゾンとイリヤちゃんを連れて家の中で避難していてくれ。もし奴が何か仕掛けてきても俺が対処する」

「敬介さんは」

的確な指示を伝える敬介に土朗は敬介達はどうかするか聞くと

「奴を倒す。・・・あいつは危険だ。ここで倒しておかないと大変なことになる。」

敬介から発せられる気迫を感じ土朗達は敬介の指示の通り家の中へと向かうが

「フン」パチン

金髪の男が指をパチンと鳴らした瞬間宝具が土朗達に襲い掛かる。

「あ!!!!」

危険を感じ土朗達は振り返ろうとしたが

だが

「そのまま行け。大変身！！ライダーホイップ！！」

敬介は瞬時にXライダーに変身しライダーをライダーホイップに変形させ

「X斬り！！」

得意のX斬りで宝具を弾く。

その隙に士朗達は家の中へと避難した。

それを見届けXライダーはライドルを構え油断なく男を睨む。

RXとセイバーも神経を研ぎ澄ませ男を見据える。

一発触発の空気。

何時戦いが始まってても可笑しくない。

だが、そんな空気では男は何が可笑しいのか笑い始めた。

「ククク、我と戦うつもりか。面白いと言いたいところだがどうやら我のほかに客が来ているようだ。」

男は踵を返しセイバー達に背を向けた。

「おい、これだけやって逃げるつもりか。」

ストロンガーが男を呼び止めるが

「興が削がれた。セイバーとの再会を祝すにしては、此処はみすぼらしすぎるからな。雑種よ、あの野蛮人に伝えておけ。いずれ貴様

の持つギギとガガの腕輪を頂く覚悟しておけと。それと貴様の持つキングストーンもな。」

「貴様には渡さない。もし、貴様が俺の持つキングストーンを狙うなら俺が命を賭けて貴様を倒す」

「そうか。せいぜい頑張るがいい」

男はRXの言葉など歯牙にもかけぬと堂々と背中を見せて。

「いずれ会うぞセイバー。あの時から俺の決定は変わらぬ。次に出向くまでに心を決めておくがいい。」

男の姿が消え、張り詰めていた空気は解け、庭は静寂を取り戻した。

だが……!!

「キングストーンを手中に収めるなどと、分を弁えぬ愚かな存在だ。そう思わぬかRX……いやブラックサン」

静寂が一気に解け、新たに現れた存在により再び空気が重苦しくなった。

黒い闇でその姿の全容は分からないが凄まじい金髪の男並の凄まじい威圧感を感じる。

「お前は……!!まさか」

RXは驚愕からか体が震え始めた。

「あいつは……」

「まさか!?!」

XライダーとストロンガーもRX同様驚愕の余り体が震えている。ただ一人目の前の存在が誰なのか分からないセイバーはRX達に問う。

「何者ですか？」

セイバーは冷や汗を流しつつRX達に聞くが誰も答えない。

「……シャドームーン……なぜお前は」

しばらく経ち、ようやくRXが掠れた声を上げた。

「フフ、私は甦った。地獄の底からな。RX貴様と決着をつけるために」

シャドームーンと呼ばれる存在が不気味な声をRXに上げた途端、暗い闇で隠れていた全容が確認できた。

銀色のボディに緑の複眼。

セイバーはその姿から風見達同様仮面ライダーを連想できるがすぐにその考えを捨てた。

「何なのです。この者は……本当に人なのですか」

根本的な何かが風見達とは違った。

直感でセイバーはそう感じシャドームーンから暗い不気味な力を感じ

じた。

魔力でもないとしてもない力を先程の金髪の男より目の前の存在は危険だ。

唾を呑みセイバーは不可視の剣を握る腕に力を入れるが

「フツ、RX今日は貴様に挨拶をしに来た。私の望みは貴様との決着をつけること、だが今のままでは私達だけの戦いにはならない。今は戦う時ではない。私と貴様の戦いは創世王を決める神聖な戦い何者も邪魔があってはならない。いずれまた会おう」

シャドームーンの周りに緑の電光が走ったと同時にシャドームーンは姿を消した。

シャドームーンも消え、今度こそ静寂を取り戻した庭だが、誰も一言もしゃべらずそこには重苦しい沈黙が流れるだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0396o/>

仮面の英雄と聖杯の英雄

2011年9月8日19時46分発行